



PL            Shin gunsho ruiju  
755  
  .35  
S5  
v.9

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

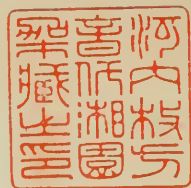




Digitized by the Internet Archive  
in 2009 with funding from  
University of Toronto

新  
群  
書  
類  
從

第  
九





PL  
755  
.35  
S5  
v.9



一此卷收むるところは、古淨琉璃中所謂金平淨琉璃を主として採り、之に附するに同一系統を以て目するも不可無かる可き製作を以てしたり。

一世の所謂金平本なる名稱の包含する意義は、甚だ曖昧模糊として定かならず。坂田公時の子公平の上に就きて作り設けたる淨琉璃をも云ひ、又同じ公時の子にして公吉と稱するものゝ上に就きて作れる淨琉璃をも云ひ、(公吉即ち公平なるや否やは的證を見ざるを以て未だ明らかならず)公平の父公時ならびに其の同輩即ち源賴光幕下の四天王一人武者等の上を作れるものをも云ひ、猶廣く武勇剛猛の事を旨として作れる淨琉璃をも云ひ、一轉しては其の性質に於ては全く異なるも其の體裁に於ては酷似せる普通六段物と稱する古淨琉璃等をもわいだめ無く金

平本と稱する人あり、愈々轉じては小夜嵐の如き勇武の事を主として作れる小説をも金平本と稱する人あり。日本文庫協會の主催にかゝる圖書展覽會に際して、金平本の名稱の下に包含され出陳されたる書目を一瞥して、所謂金平本なる名稱が如何に讀書の人々に解釋され居るかを推知すべし。然りと雖も金平本といへる名稱は、之を狹義に解しては金平を主人公とせる淨琉璃、之を廣義に解しては金平と系統相連なり、若くは性質相近き人物を主人公として武勇を旨と作れる淨琉璃と云はんを正しとすべきなり。此の卷收むるところ必ずしも皆公平が上に就いて作れる淨琉璃のみならずといへども、之を金平本と稱するに於ては因襲の慣例上蓋し異論無きものを取れり。

一金平本の作者は必らずしも岡清兵衛のみならずとおもはる。岡清兵衛の署名ある冊子の今に存するものは甚だ稀有にして、江

戸名所咄の記事有るにあらざれば、金平本の作者の岡氏なる事を認めんも亦殆んど難きほどなり。時代久遠今詳しく知るを得ずと雖も、金平本悉く皆岡清兵衛の手に成るとせば、矮人觀場の陋に近かるべし。

一金平本、文法一貫せず、急遽の事を叙するに至つては、文章體のもの忽然として變じて口語體となる事、猶舞曲の如し。用語もまた甚しく蕪雜にして、横訛りの發音を其儘寫せるあり。假名遣に至つては、波行を和行に誤るあるのみならず、和行を波行に誤れる如き甚しき非違あり。然れども今皆改めずして其の舊を存す。覽者之を諒せよ。

明治丁未夏

幸田露伴識



# 新群書類從第九目次

## 歌 曲

清原右大將……………	一
四天王若さかり……………	二五
四天王女大力手捕軍……………	四〇
京今宮本地……………	五七
日本兩武將始……………	七五
源平武將論……………	九七
敵討のいこん……………	一一三
四天王筑紫責……………	一三四
末武印問答……………	一五二

きさきあらそひ……………一七〇

天狗羽打……………一八七

<sup>四天</sup>王むしや執行……………二〇六

綱金時最後……………二二〇

頼光蜘蛛切……………二四〇

<sup>子四</sup>天王北國合戦……………二五六

四天王最後……………二七五

公平誕生記……………二九四

漣根悪太郎……………三一

公平花だんやぶり……………三三五

公平化生論……………三五

公平關やぶり……………三七〇

公平末春いくさろん……………三八九

公平天句問答	四〇九
八幡太郎誕生記	四一八
渡邊智畧討	四三二
やはき合戦	四五三
勇金平	四七五
渡邊三田合戦	四八三
菅原親王	五〇一
公平つるきのりつくわ	五二五
公平武者執行	五四二
公平入道山めぐり	五六一
いかつち論	五七七
殿上 聞討 女袖鑑	五九七
よりまさ	六一五

頼朝三嶋詣……………六三八

ごぼん忠信……………六五九

義經地獄破……………六六八

あさいなしまわたり……………六七六

目

次終

五  
空  
行

五んむじや

五んむじや

五んむじや

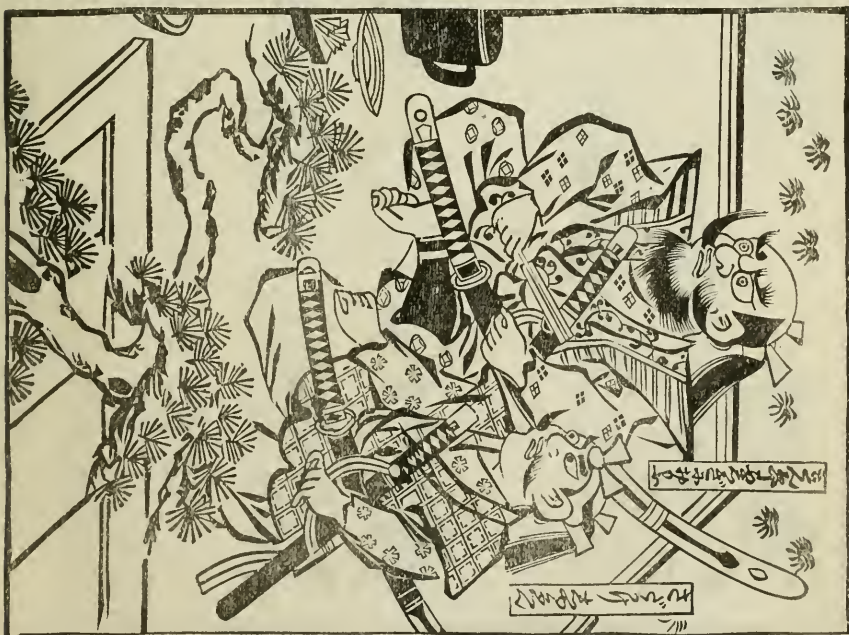
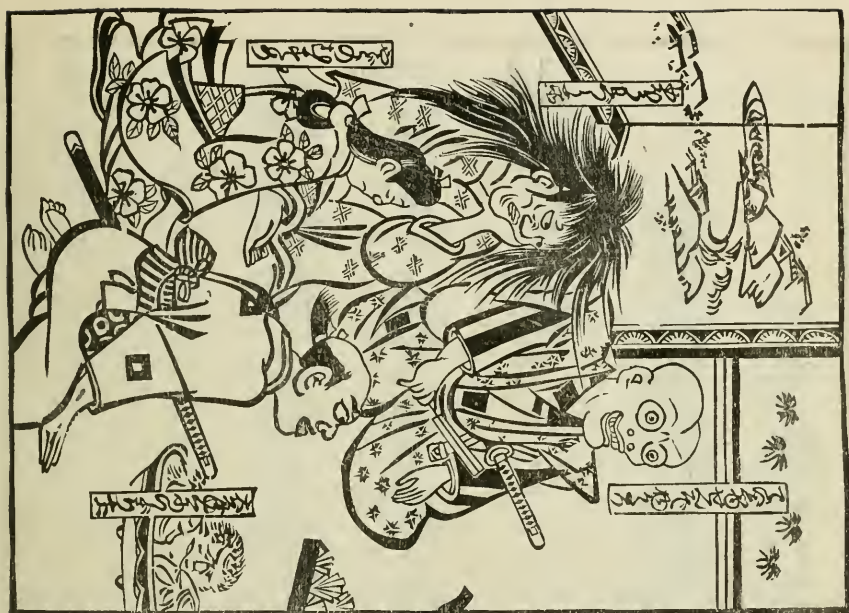
大傳馬

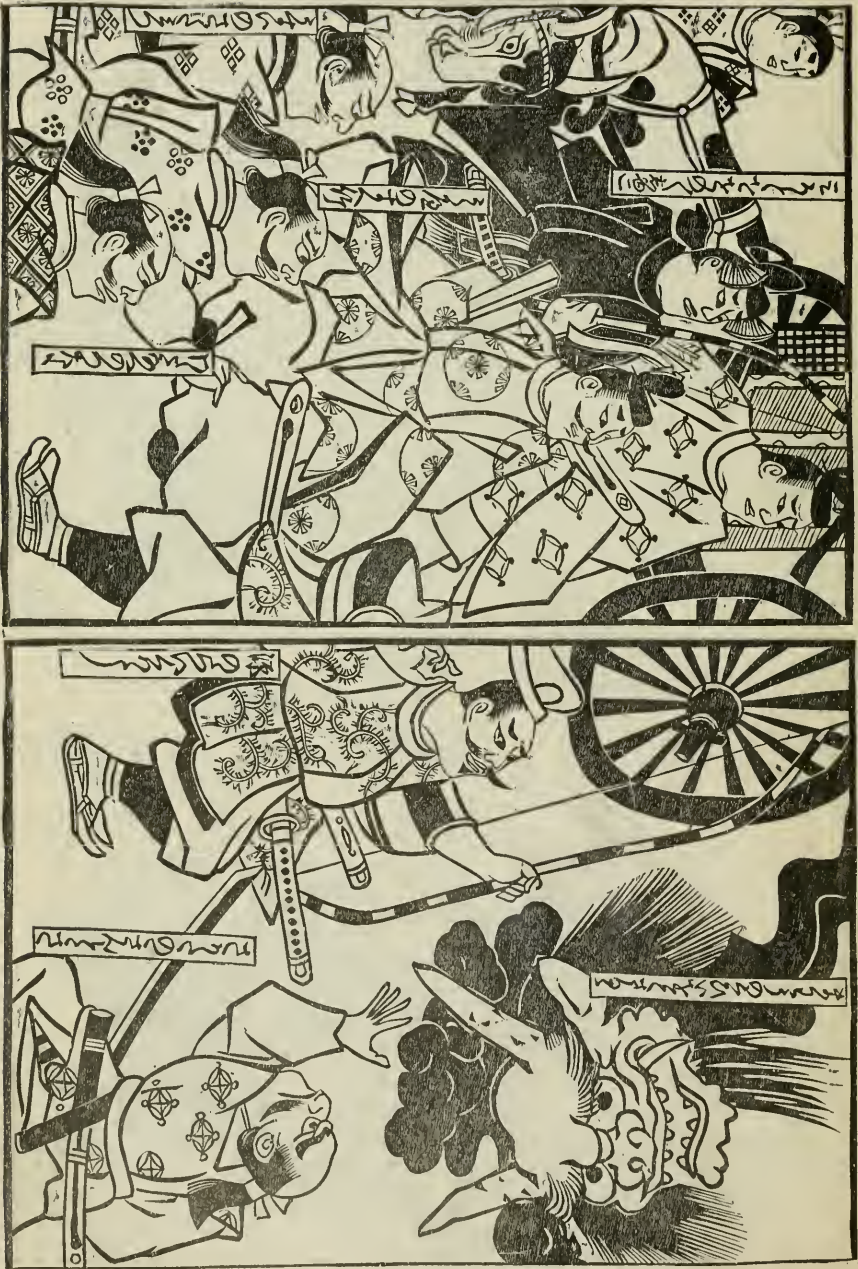


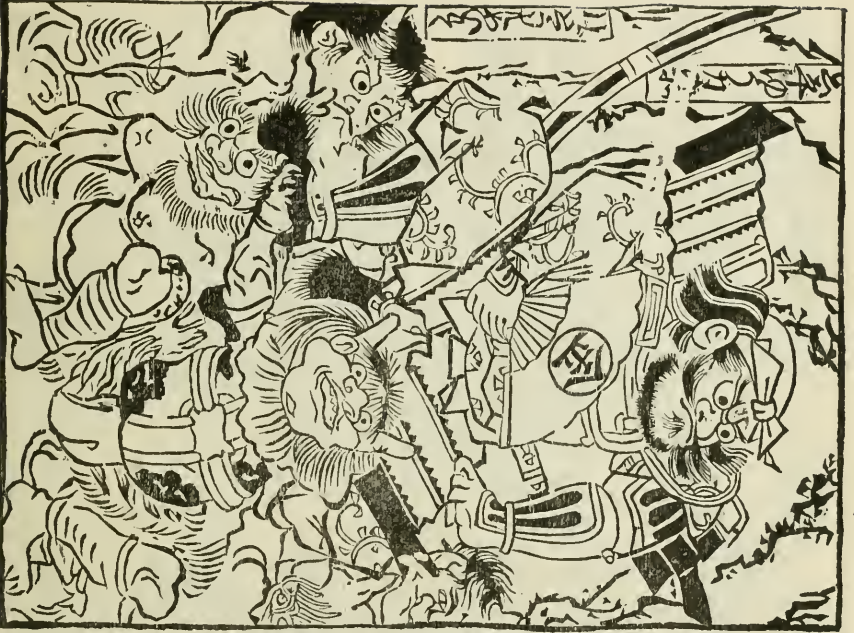
三曾

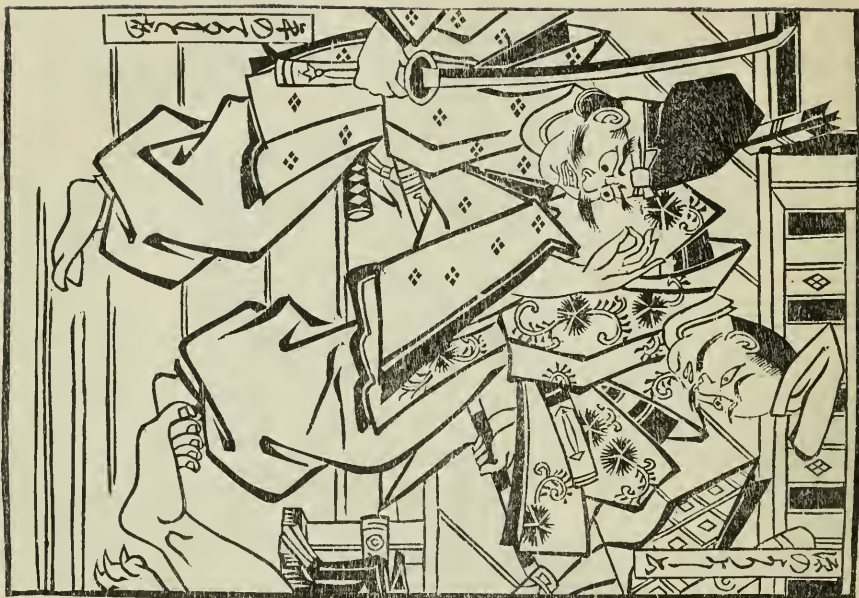














# 新群書類從第九

## 歌曲

### 清原右大將

#### 第一

さてもそのうちつら／＼おもんみるにせんは人をめ  
ぐみ身をたすくあくはたみをくるしめおのれをせむ  
よりてつゝしむべきはせんあく二つのさかいなりこ  
こにせいわのかうゐん六そん王のちやくなんとしま  
のさへもんまんちうとてゐたいのめい將ありふが  
うのはまれよにたかくいづするかの内にてすか所た  
まはりすんしうふちうにきよぢう有六そんのわうの  
はんゑいひをかさね御子兄弟持たまふちやくなんを

左兵衛のせう頼光とて十八歳やうぎたいはい人にこ  
ゑたくひなきゆうしなり次はちよわか丸とて十二歳  
にそ成たまふ扱したかふ所のらうどうには山なたは  
やしたかた石川そのべむらいしひゝにしゆつしはひ  
まもなしこゝに又わたなべの源五つなとて生年十七  
歳のわかもの有ければむさしの國のちうにんにてあ  
りけるかちゝしゝてのち母かたのおばやういくしつ  
の國のわたなべにてそだてしをまんぢうこいうけた  
まひ十一歳よりめしつかはれ御まへさらぬかうのも  
のちから人にすくれよふほうゆふいの大の男日本め  
いよのつわもの也あるときのこと成にまんぢうみだ  
い所にちか付我なか／＼ざいこくしゑいりよのほど  
もこほつかなしそき上らくいたすなりいかに頼光  
ざいきやうの其あとよろしく國をまもるべし源五を  
は是にのこすべけれどもさぞふるさとわたなへこい  
しかるべしいざもろともにと御かと出めでたく取お  
こない渡邊を御ともにて都をさしてご三重のほらる  
るていとなれば二條の御やかたにうつらせたまひ  
みかとをしゆごし三重たまひける是は扱置其比又清  
原のう大將あきたゝとてかうけ一人おはしますとう

ぎん一の後せうていくわうくうの御あにとしてくはんいろくしやう共にふそくなくゑいくわをきはめたまひける然にすきつる比ひゑいさん御こんりうのぎに付まんちうを御にくみふかくいかにもしてうしなはんと心をくだきたまへ共きこふるゆうしにてしんていにたつせず年月しんいをこがしたまひしが此たひのとらくをよきさいわいと御身ちかき人／＼五條の中將さくら町のさいしやうあやのこうちの少將をひそかにまねきよせ此こといかゞ有べきとひたすら頼たまひけるもとより三きやう時のけんにおそれへつらふ心いとふかくそれこそやすき御望來るしも月廿三日とよのあかりのせちゑのよかのまんちうもちのしやうでんゆるされしゆつし仕ると承るかれいかに弓やの家にてもせちゑのさへ太刀をはよこたへ申ましまして家のこ郎等をつるゝこともかなはず只一人あからん所を待うけ打たんことなんのしさい候べきことやす／＼とぞたくみける大將ゑつきかぎりなく方／＼はせんろくの家なれ共ちりやくはふしにもまさりたりたのもし／＼かまいて人にもらすなと悦ひいさんて其日をおそしと三重待たまふつゝむと

すれとあくし千りをかくるとかやまんちううつたへ聞たまひ渡邊のつなを召れかやう／＼のしさい有我ふゆふの家にせうをうけ今此はぢにあはんこと家のなをりたるへしさ有とてもせちゑのぎへ太刀をよこたへ上るならばかさねて御とかめ有へしせんする所身をまつたうして君につかゆるはちうしんの法なりちりやくをもつて此なんをのかれん其むねほつすべし源五承り誠にてん上へは御とも召つれられんこともかなはず敵はくぎやう大じん一つなり是のんどにせむる大事しかしながらそれがし斗は人とかむる共もちゐすほうをやふつてのりこへ／＼うつをはしらのもとまであひつめ申べし此渡邊一人をば千ぎ萬ぎの兵よりたのもしく思召たとひきまん國のき王らせん國のら王がへんし來る共何程の事か候べきましてことにもあはぬなま公家ばら有のたけ共存せずらうせきに及ば／＼一々にくびねち切てすて申さんに何事か有へきさらはしたく仕じんと御前を罷立はやよいをそ三重したりけるせちゑのよにも成しかはおのおの御前に上らるゝはなやかなりけるぎしきなりまんちうはかねてよりの事なればよいの大太刀よこ

たへ御前をさして上らるゝあんのことく大將さんきやうをはしめとして其外以下のでん上人六人のしん迄あいかたらひおそしとこそは相待けるまんちう御らんしこしの太刀をするりとぬき此太刀は家のてうほうひげ切是てうてきをばつせんため必かやうの折からはせんしやくまとてわさはいおこること有あはれふしきをこるなら太刀はなにあふつるきなりうでの力はおぼへたりあまさし物をとのゝしり二ふり三ふりふりまはし又さやにおさめおほくの中をおしわけゝゝさあらぬていにてとをりたまふあい待たりしかいもなく此いきをいにおそれをなし中をあけてぞとをしけるあさましかりし次第なりされ共歸りにはせひにをいてあまさしとてくすみして待所へ渡邊のつなぐろかはおとしのよろいをき四尺八寸の大太刀こはきにかいこみせいする物をゆんてめてへはねたをしてん上ちかくしこうする大ぬみたまひうつほはしらより内へほいの物きたるはらうせきの至りなりあれおい出せ畏て候と我もゝと立より汝ほいのふんとしてすいさんの至なりいかにゝゝとのゝしれ共源五きかぬかをにておせ共引共物共せず只そらうそ

ふいてぞいたりける人ゝいよく腹を立おのれ何物なれば人の物いふにも返事せずかくらうせきをふるまふそ其なをなのれとせめにける源五聞てらうせきこは心へす扱はさき程より方ゝそれかしをおしつひいつしたまひしは罷出よといふ事か我はいなかふしのことなれば物のしやべつもわきまへずきん中のならいにて五せつのよは人をかやうにしたまふとのみ心へ物をもいはず有つるが今よく承れば罷出よとのことか尤仰にしたかい度は候へ共しうにて候まんぢうをこよひてん上にてやみ打にすべきくはたて有よし聞さもあらばしやつばらを五十も百もねぢくびにいたししうのなんをすくはんため参りたり其せんとをみさらんかざりは天ちがさかさまにかへる共まつたくもつて出ましきと四方へばつとつきたをしはつたとにらみし有様は只身のけもよだつ斗なり人人大きにどうてんしやあこんやのやみ打は夢ゝもつてかなふましせんなしゝとふるひわなゝきみなゝかんちよに入にけるすでにせちゑはてければまんちう出させたまひける源五みて何と御入候と申せはいやしさいなしとて立出たまひしかいかと思は

れけんこしの太刀をとのもづかさにあづけをき御せんの出させたまへは渡邊いごの爲も有とつ立上りすいさん成やつばらかなたふのうへにぎをくみうたをよみしをつくるは家のなふむやうのことをたくみしもたてぬぶけのわざ只ひとへにはねなき鳥が千里をかけうをの木にのほらんとするにことならすあさましのふせいやと八めんにいかりをなす公家大臣いよ／＼きもをけしとうざいひつそとしておともせず源五今は是迄と君のせんごをしゆごしやかたをさしてかへりけるかのまんちうのちりやくわたなへがゆふりききせん上下おしなへかんせぬものこそなかりけれ

## 第二

其後よもあけ行はう大將いそぎ御前にあがりそれゆふけんのたいしてくゑんにれつしひやうくの物をめしつれきん中へ上る事きやくしきのれいこゝんのいましめ是なり然にまんちう郎等にはらまきさせ其身も太刀よこたへせちゑのさへつら成こときたいの

らうせきざいくわかろきにあらすゑいりよいかにとそうもん有みかとげきりんかぎりなく其ぎならばいそぎまんちう召せ承り候とやかてちよくし立にけるまんちうちよくしと打つれさんだい有みかとゑいらんまし／＼て右のりやうでうくはしく御尋ね有ければまんちうそれがし存すたいしせちゑのよそれかしに人／＼はぢをあらためすいさん仕て候らはん次に刀のことはとのもづかさにあづけ置候召出され太刀のちつふによつていかやうにも仰付られ候へとおそれ入てそうもん有みかどゑいぶんあつてそれ／＼とてかの太刀を召れゑいらん有に上をばさやまきのくろうぬつたりけるが中には木太刀にきんのもつてはくをおしたりけるみかとおとろかせたまひけにもひつでう其たんは重てせんぎ有べし誠にゆうしの心かなとうざのはぢをのがれん爲刀をたいするといへ共後日のとかめをあひはかり木太刀をよういいいたすこゝと弓や取みのはかりこともつてかうこそ有へけれ又郎等かすいさんのことふしのならいしうのなんをすくはん爲其身をすてゝあかるだんゆふしのむねとする所なりまんちうがとかにあうずしんべう／＼罷歸

れゑいかんはなはだかぎりなく御前を立たまふま  
ぢうのふるまひほめぬ物こそなかりければにや  
たい將は思ひの外にしそんしほう／＼やかたに立歸  
りかさねてないだん有べきと後三きやうをつかいを  
もつてよひたまへ共まんどちのちりやく郎等の渡邊  
がゆうりきにきもをけし／＼よろうとかうし一せんさ  
(ふカ)  
んくわいなかりけりあきた／＼せんほうつきはて此う  
へは弓やをもつて本いをたつすへしきは有ながら我  
はしいかの家なればふけいのわざは叶ふまじげに誠  
みなせのくらんどゆきはるこそおはり三川とう／＼  
み三か國の大將にてせきより東の大名なりさいはい  
我としたしければよひよせて頼んとつかいをこそ立  
らるゝゆきはる何事やらんとつかいとつれて來りけ  
る大將きゑつほとんどあさからずさんかいのちんく  
わをとゝのへさま／＼にもてなしすへんに及んで後  
いかにゆきはる一ごのふちん身の大事を申合度事有  
たのまれたまへかたるべしと右のあらまし打とけて  
申けるさればにやおちこちのたつきもしらぬ物にた  
になるゝはさけのなさけなりいはんや日比のよしみ  
といひ又はかういゝの其人にひたすらにもてなされた

るふしはいと竹の後のわざわいかへりみず其きにを  
いてはことやすしいさ／＼らはそれがしがふん國へ御  
けかうましませまんどちう本國へ歸る所を待うけやす  
やすと打取て參らせんと事もなげに申せはあきたい  
ゑつきかぎりなく尤此ぎ然べしへんしもはやくいそ  
かんとしのひ／＼に都を出三重とう國さしてぞ下り  
ける是は扱置まんどちうは渡邊を近付今ははやたいは  
んあきぬれば本國に下らん其よういたすべし源五  
御でう畏候とはやろしのけいゑ花やかにて本國さし  
てぞ三重下らるゝ急がせたまへば程もなくとう／＼  
みの國はま松に付給ふ待かけたりしかたきのせい此  
よしをみるよりもすはやそとなんほくにつら成時  
のこゑをぞ 三重上にける時のこゑもしづまればゆき  
はる一ぢんにすゝみ出いかにまんどちう是にひかへさ  
せ給ふは忝もたうきん第一の御后しやうていくはう  
くうのこせうたうたいしやうあきた／＼きやうなり日  
比のうつふんさだめて心へたるらんかく申はみなせ  
のくらんどゆきはるけふのいくさ大將かうむりたり  
一人もあますまじか／＼れ／＼と下ぢすれば我おとら  
じと打てかゝるまんどちうの御馬の侍共心へたりとわ

りあひ爰をせんとたゝかいけるもとよりすはだのこ  
となればくつきやうの侍十一人まくらをならべ打れ  
ける源五みていひかなき物共やそれかしふせかん其  
ひまに物のぐせよやかたゝゝ大手をひろげてかけ  
合はせより物をかいつかみゆんでへなげめてへなげ  
てさきまかせの人つぶてあへて近付ものもなし其ひ  
まにみかたのせい物のぐひつしとさしかため兩らん  
にむらかつておつつまくつつひはなをちらして三重  
たゝかいけるもとよりよせてはたせいなりみかたは  
わつか二百よきかなふきにはあらね共日本ふさう  
の渡邊うての力は覺たり太刀はきこふるつるぎなり  
八方を切つてまはりけるよせてたせいといへ共只一  
人に切立られはやまけ色にぞ成にける爰にゆきはる  
がかうけんみ山の兵とうたけとも同ゆはもと大藏も  
ろみつとて大かうのゆうし有み山は生年廿一おもて  
にくまの如くにひげをい其たけ六尺三寸六十五人か  
力ゆはもとはつらあかくほねふとくせいは六尺二寸  
是もおとらぬ大方二人打つれ切て出渡邊にてあれば  
とて何程のことの有べきと大太刀をふりかたけきつ  
さきをならべきつてかゝる源五みてさき程よりそれ

かしが太刀さきにまはる物一人もあんをんにて歸ら  
ぬをみながらすゝんでよるはさだめておほへ有へし  
けにこつから人にすぐれたりなを聞までもなしいで  
いで一太刀とらせんと太刀ひつさげわたりあひしは  
しか程こそ三重きりむすぶしはしせうぶはみへざり  
しがいわもと何とかしたりけん渡邊が太刀をうけは  
づしから竹わりになりにけるみ山是をみてにげんと  
するをばつつめすかさすくびを打おとす大將はかな  
はしと跡をもみすして三重にげにける渡邊なをも打  
とめんと跡をもとめほつかけゝれ共へたゝり行ば力  
なくおくれはせのやつはらをばらりゝと切てすて  
み方のちんへひつかへすつものとしは十七歳行衛さ  
こそ有へしたぐいなきつわものやときせん上下をし  
なへみなかんせぬものこそなかりけれ

### 第三

扱もそのゝちあきたゝやゆきはるはあやうき命にげ  
のび大いきついでいたりしが大將申けるやうはいか  
にゆきはる此うへは我しやうがいに及共まんぢうを

ほろほさずはかなうましげに誠我ふだいの侍そのた  
の藤太のりひでこそあんじや第一のもの成ゆへ兩な  
いしはいの爲あふみの國しがのさとなかくくた  
し置たりかれにないだんたつせんといそき藤太をめ  
しませくたんのあらましのへにける藤太承り誠にま  
んぢうはふんふ二道のゆふしなれば弓やをもつては  
中々かない申まし只ざんげんにしくはなし去ながら  
右のしたいあしければ大かたにてはみかどゑいりよ  
をうつさせたまふまし年比の御おんにそれがしが一  
命を君に奉らん其ちうせつにはそれがしが一子國み  
つをひとへに頼奉る其手立といつはそれがしが六ゐ  
のしんに出立君の御とも仕りたいに上くろとのわ  
さに立かくれあやまつたるふせいにてわさとあらわ  
れにげされは人く是はとあやしめしさいをとふ共  
申ましゝからばがうもんせんはひつでうなり其時  
是はまんぢうか家のこにて候がしゆくんまんぢうかや  
うくのたくみにてそれがしにはごてんにひをかけ  
よとの仰にて候とはくてう申さん折ふしゆきはる殿  
はまんぢうが方よりのむほんをめぐらしふみなりと  
にせふみをかきしたゝめさんだい有へしと手に取や

うにぞたくみけるあきたゞ悦ぶことかぎりなく此た  
びのことなればせひ一めいを我爲にうしなふへしへ  
んれいには國みつにいぶきかたゝしがのさと残らず  
あておこなふへしとじひつに下しふみをかき國みつ  
にとらせつゝちこくうつしてかなはじと其やうい  
をぞしたりける是は扱置まんぢうはあきたゝがらうせ  
きいくさの次第をうつたへんとゝふたうみよりひつ  
かへし都をさしてのほらるゝいそがせたまへは程も  
なく壬三月十五日入あひ比にていとに付たまひける  
こよいは日くれぬ明日さんだい有べしとあくるを待  
てそ三重おはしますあきたゞ此よし聞よりも藤太を  
六ゐのごとくつくり立みめいより上りくろとのわき  
にかくし置折ふしせつしやうくはんばくさんたい有  
ぎよくぎに近付かんとしたまふ所にくろとの内に人  
かげのみへければこはいかにくろどの内に人の有い  
かにくとのたまへは藤太おどろきたるふせいにて  
すゝのまさしてにけゆくを人々ほつゝめ取ておさへ  
是はみなれぬ物なりととへ共く申さすさらばかう  
もんせよやとおび切ほどけはひ打つけたけ出にける  
いよくふしぎの物なりとかうもんひまなくせめに

ける藤太はもはや是迄といかに人々今はつゝます申べし是まんちうふだいの侍みつばの五郎と申しのひのものにて候扱もしうにて候まんちうぎやくしんの存立それかしにはしのび入て御てんにひをかけよ其時おしよすべしとのあひづにてしのび入て候へ共うんめいつきあらはれて候と誠しやかに申ける人々おとろきよしをかくとそうもん有然所へかねてあいづのことなればゆきはるあはたいしくはせ來りまんちうてうてき心がけみかどをうらみ奉るとてかくのだんに頼て來り候ゆふさりやはんに必おしよせ申べし御ようい候へと大いきついで打たへけるみかどおどろかせたまひまんちうはだいばんあきぬるうへはいまた都に有けるか時にたいしやうすゝみ出さればこそとよ過しよそれかし北のへさんけい仕り候へてまんちうは下向と思しくてとりいの本にてあひ候今存合ばかやうのことをたくみぬるしゆくぐはんの爲にてぞ候らんとかむりをかたむけそうもんすみかどゑいふんましゝて扱はうたがふ所なしまつみつはをはせつかいしまんちうをめし取つの國すまのうらになかすへしとせんし有承り候と御前を罷立とうばん

の侍共今やゝと待ゐたりかくとしらでまんちうは右のだんを打たへんとさんだい有所をしゆごのぶし共立出せんしなりととこふのさたに及ばずうかりし舟に打のせすまのうらへと三重なかしけるあきたゝはまんちうをは思ひのまゝにざんげんし郎等のつながゆくへをたつぬるにはやさき立ておち行候と申けるゆきはる聞て其源五か母つの國渡邊に候なりかれがもとへおち行てぞ候らん打手を御つかい候へあきたゞげにもと思ひ郎等共に申付渡邊さしていそぎけるしゆく所になればとうざいよりみだれ入たづぬれ其源五はさらにいざりける扱はかくして有つらんと母を取ておさへおこと源五か行へしらぬことよもらじ申せゝとせめにける母聞てあゝはかなや人々たとへ存てあればとてをいたる母か命をおしみつついまださかりの子の行へをは申しましてしらざる事なれは何ととせせたまふともいふべきことの侍らずいかやうにもせめたまへと涙をなかし申さるゝ物のふ聞て腹を立かうしやう成女かな今こそさやうにちんずる共すいくわのせめにあふ時はよも申さでは有べきと取てひつ立こしにのせ 三重都をさしてそ

いそぎけりさればにや源五はまんちうのしざいるさいをたしかに聞さだめんとらく中にはいくわいしていたりしがはい所にうつらせたまふと聞からに此うへは本國に歸り頼光へかくと申上せひのあんひをきはめんと本國さして歸りしが道にて母のしさいをつたへきゝ扱は只今山の下を人おほくこしを取まき行たるか母うへにてぞおはすらん我しつしの母にてもなしやうせうよりやしなはれ其ほうをんをはおくらすしてけつく我ゆへ母上をうきめに合せ申さんことじんりんの道ならず又我々かたきの手に渡りしやうがいに及び君のせんとをみるとけすふちうのしんと成ぬべしとやせんかくやあらましとあんじわづらひいたりしかいやとよ頼光のふゆうばんふのわざにあらされはよもや打れたまふまじ母はかたきの手にわたらばたちまちせめこみさるべしさればおやよりもたつときは君なれ共子ゆへににする母をよそにみてあらんことふかうのつみ第一なりなむ三ぼうとくはん念し跡をしいて三重おつかくる程をへだてぬことなれば道にてほつつめやあ方ゝ其母をつれ行は我行衛をきかんだめそれかし参るうへは母をはかへ

せさなくはおのれらがくびねぢ切てすつべし又かへすにおいては我なわかゝらんとこしのなかえに取付ひたおしにおしもとす物のふみてあふごへん出たまふうへは母上かへし申さんといそぎこしよりおろしける源五よろこびおやのためにしせんする命つゆちり程もおしからしと太刀刀をなげすて我となわをぞ三重かゝりける母は御らんしてこはなさけなや源五我はおいきのはてなれはあすをもしらぬ露のみにゝ命のおしからんおことはいまだはたちにもたらぬ身かをいたる母をかなしみて出たる事の物うやといたき付てそなげかるゝ源五聞てよに有かたき仰かな去ながらあんしても御らんせよそれかしはよふちにてふもにおくれみなし子にて侍りしを色ゝにかいほう有かく人と成ぬる御おんの程しゆみよりもたかし其御おんほうするまでこそなからめ我ゆへつみにしづませたまはんことみやうのせうらんもおそろしやそれかしはちよつかんの身なれば一つたん爰をまぬかれたり共つりばりをふくむうをあみにかゝれる鳥のことくにてついいは打れ申べし只何事も何事もせんせのことゝ思召かまいてなげかせたまふな

よかへす／＼も御おんをほうせすしてむなしくならんこそよみぢのさはり是なりとおにのやう成源五もとうざいしらすになきいたりじこくうつればけいの物それこなたへと兩方へひきわくる母は夢の心ちしてさりとては今しはらくなこりをおしませたまはれとりうていこかれたまへ共みゝにもさらにきゝ入らず源五をひつたて都をさしてぞ歸りけるやかたになればよしをかくと申上る人々よろこひいそぎ六條川原にてうんきをはねよ畏て候とかはらをさしてぞ引にけるなわ取は山のゝ源内はるつぐとてなにしかふたる大ちから大事のめしうと是なりと源五につけたるなわを我たうにしつかとめ付兩方へそひつはりける太刀取はむしや所のすへなが日比のいしゆあるゆへにわざと切手を望ける川原にも成ぬればしきがはしかせ西むきになをしける源五四方をきつとねめまはしいかにすゑなが汝はつね／＼のいしゆにより望て切手に成つらん源五程成侍をはれのしやうぞくしてなどきらぬぞあしく切なばつらばねにくいつくべしと申けるすへなが聞てなんでうわかてにかけてきらんすくひかいてくい付んむようの口をきか

んよりさいごの念佛申せそれうれふべき所にてうれいなげくべき所にてなげかざるはかへつてふかくのいたりなりじやまんがまんをふりすて誠の道におもむけいかに／＼と申せは源五聞て有がたし／＼さればせつせんどうしはとらをらいしてしせうとすしやくそんはきじんをらいしはんげをうくすがたこそぞくなり共とうりをもつてほつしとす我もごへんをしきとたのみくかいをのかれんうれしさよとて物ことにゐんたうしてたまはれそくしに都へとひかへりあきたゝゆきはるはじめわどのばらのやうにひやりむさんのやつはらを一々につかみさきしんいのほむらをはらさんそれよりべちに望さら／＼なしけちゑんあれやすへながとかつら／＼とぞわらひけるすゑながしきりにいかりをなし出御ぶんわらはせんと太刀ずいとぬきうたんとすればかいくゝりなは取ちうにひつ立 三重こくうにこそははしりけるくいになげるあらむまがはなれてかくるにことならず大力のくせとしてたゝとぶ鳥などのごとくにてあへてをい付物もなしむざんやななわ取はいしのうへをらつくわのごとくひかれみぢんになつてうせにけるわた

なべなむ八まんと念しさうの手をのべければさしも  
したゝかにこしらへたるなわすんゝにきれにける  
然る所にすへなをさきとして我もゝとはせ來る  
心へたりといふまゝにやがてさきにすゝみけりすへ  
ながをはしりかゝつてかいつかみ大せいとうさいへ  
おつちらし人のくびをはかやうにきる物ぞとくびふ  
つつとねち切渡邊さしてぞいそぎけるかの源五かふ  
るまひおにかみもかくやらんとおぢぬものこそなか  
りけれ

#### 第四

扱も其後源五は渡邊に付しかば内につつと入かやう  
かやうの次第なりさだめてかたき來るべし先こなた  
へと母をはかたにおい奉り 三重とぶが如くに急ぎけ  
るみのゝ國に聞へたるたのいのしゆくに年比よしみ  
有ければあんないかうでたいめんしはじめおはりを  
かたりばんしは頼と申せはあるし聞て御心やすかれ  
とたのもしくぞ申ける源五なゝめに悦び母にいとま  
をこいあるしに馬を所望し引よせゆらりとものり三重

とう國さしてぞ下りける是は扱置國にまします頼光  
は都のさたを聞召ていとへ打て上りざんじやのくち  
をためすか又は城に引こもり打じにきはむるよりべ  
ちぎあらしとはげんさへぎり給ひしに御母上さま  
さまにかんげん有し故おんびんに國をひらかせ給ひ  
同御舍弟ちよ若殿并に北の御かたてるひの上を引く  
し御しうとあふばのくんしよよしひてのたちを心ざ  
し相模國へと急かるゝあふばにも成しかはあんない  
かうて此旨かくとの給へはよしひて驚きこはむねん  
の次第かな去ながら天とうは誠をてらし給へはざん  
じやいつまでさかゆべきまつ此所に忍ひ給ひじせつ  
を御待候へともてなし給ふぞたのもしき然共よの中  
は八くの思ひたがへたくいたはしや頼光はしんした  
へかたくおもきやまふを引うけたまふ人ゝ驚きせ  
んご枕に立より様々かんびやう有けれ共おもりこ  
そすれげんもなし頼光おもきかうべを上それ人間の  
しめいはしやうするよりさだよりいきるもしするも  
じこくとうらいかなしむへきにはあらね共我むなし  
く成ならば父まんぢうをたれかはよに立申べき其う  
へ母うへをはしめ何れもあんにまよふへしと思へ

はおしき命なりと涙にむせばせたまひける母うへ北の御方いよ／＼きもきへ心たへいしおんやうしにきふつとあたへ三重心をつくさせたまひけるさればにやはかりかたきは人のしん中よしひではやしんをさしはさみちやくし太郎國よし同次郎ひでみつを近付いかに汝ら頼光をちうとのみの上におもきやまふをうけたりよつく佛神三ぼうにすてられたりそれむこはいしやうたにんたりうんめいつきたる物共をひいきがほにかくし置せけん此こともるゝならは我我一家のめつぼうたるへしいさめし取て都に上りちうを天下にかゝやかしあんどのしやうに預からんと思ふかいかゝあらんとかたりける兄弟聞て我々もな／＼さやうに存れ共父うへの御しんていをかねてあひ引かへ候尤よろしき御くわててはやとく／＼とそすゝめけるよしひてなのに悦ひ頼光大力とはいへ共おもきやまふをうけぬればゆめ／＼はたらくことあらしこなたへこよや兄弟と家の子郎等引ぐし一とにはつとみたれ入取ておさへくもでゆいたるせばき所におしこめ三重其よのあくるを待いたりあはれ成かな姫君は此よしを聞召夢うつゝ共わきまへす

今ははや何と申とかなふまし所せんにござるよにながらへんよりめいどのたびにおもむかんしかしなから人々みつからも父と一所と思ひたまはんはつかしさよ心の内のくもらぬとをりをしらせ奉りともならばやと思召有し所を立出しのひいらんとしたまへ共四方をひやうとたてぬればいらせたまはんやうもなし姫君せんほうつきはてゝいのおもてをまわりやきりに上らせたまひ是よりもとふならばごたいも更につくましよし／＼とてもしする命なればおしむべき身にあらずとたゝ一すちに思ひたまふ何か女しやうのことなれば兩がんくらみしはしきへ入たまひしかやう／＼心を取なをし御そばに立よりこはうとましの御すがたやとくもてのこうしに取付てこゑを上てぞなげかるゝおつる涙のひまよりも誠に御めにかゝるもはつかしやさだめてわらはも父と一所と思召さるべしちはやふるかみもかゝみに聞しめせみつから夢にも存せぬなりおもきやまふの其うへにかくおしこめられたまへはさこそと思ひやられたりなふみだいさゝ御心の内おしはかられていたはしやいかによわか殿さぞやかなしくましますさん心にまかせぬう

きよやと三人の人／＼をみ上みおろしきへ入やうにぞなげかるゝみだい聞召御身の心をつね／＼しりたることなれば一所とさらに思はぬなりたゝとにかくに加程までゆくさきかゝる我々かとがの程こそかなししかくて此よもあけゆかはかうせんのだびに思むくへしちぎりもこよひ斗なりふうふとなり子と成おや兄弟とうまるゝも一せならぬゑんそかし今生のなごりおしまんとたがいに御めをみ合しのひ涙はせきあへずむざんや頼光はびやうきいよ／＼しきりにしてせんごにほうしましませしがみたるゝ心を取なをしいかにやてるひのうへ御身もおやの子なれば日比のちぎりへんすへしと思ひしに加程に心をはこびたまふたのもしさよすが頼光程の弓取かくなり行くことと思へをきうらみなし是天めいのきするところあつはれ我びようきにだにもおかされずはかやうにやみ／＼とはならし物やまひはつらき物ぞかし御身はわかきのすへかけてにはほひもふかきふじばかまさかりのはるを待たまへ身はあさがほの花ざかりひらきもやられてしほるゝなりちぎりをきにしかねことを思ひ出したまひなは一へんの念佛をもゑかうし

てたまはれやあけかたにも近付にとく／＼歸らせたまへやと只ほう／＼として涙にむせはるゝ姫君聞召何みづからにすへのはるをあひまてとは又よのつまをかさねていくよの道にちかへとや父上心かはりしことなればわらはも人とは思しめさぬもことばりなり去ながらふいといふおにのこにせんさいびくとて佛有もくれんそんじやはふるによといふあく人の子有父こそ道をそむき候共我は貞女のみちをたかへましにこりしよにすみ人のうたかいうけんよりは是迄なりや人／＼とまもり刀をすいとぬき心もとにさしあつと斗をさいごにてあしたの露となりたまふ人びとおとろかせたまひすくはんとするに力なく是は是はと斗にてなくより外のことぞなきよもあけ行はよしひで此よしをみてゑゝあさましのこと共や是と申も父をさみし道にたかふによつておのれとちめつしたりよし／＼其まゝすておけとさらになげくけしきもなく三人をろうごしに打のせ都をさしてぞ三重上りけるいそけは程なくいつの國みしまのしゆくにぞ付にけるひせいさんにかたむけばりよしゆくにこそは三重とまりけるさる程に其日のあるしをはうら

べのにかうとてゆへ有物のゆかりなり然に此あらましを聞よりもいつしうらべの六郎を近付やあ是にとまりたまふめしうとをよその事に思ひしに我らがせんぞの御しうまんちうのみだいきんだちにてましますなりそもおことが父はうらべの兵ごかねたかとて六そん王よりまんぢう迄二代そうでんのらうとう成しかふりよに御かんきかうむり此所に引こもりついにむなしく成さいごの一ごんにも我こそかくあひはつる共六郎をは君の御めにかけてうらべの家をつかせよかへすくと申置てあいはてしゆへおことせいじんせはいか成人をも頼君のげんざんに入ばやとけふよあすよとくらす所にまんちうねいしんのざんによりる人とならせたまへば力及す過ぬる所にかやうのちせつにあふこと君を年比たいせつに思ひ奉る天りまさにかないたりなんぢうまれ付のゆうりきはかやうの時のやうぞかし一めいにかへ君をうばい奉れいかにくとかいくとしくぞいさめけるよこてを六郎てうと打日比の望是なり父のゆいこん君の御ためみはつたくと成共君をうばい申べしへんしもはやくこなたへとふだいのけらい平次兵衛を只一人打

つれうらみちよりぬけおもてへ出なふ母上君たちはへ御出有ならば御とも申あしからたうけにおち行侍りたまへいかに平次兵衛それ成もりにあいまてとたたはらにつつと入身のにくを少おし切其ちをおもてにおしぬりかみをばつとさはき大いきついでわかつていへはしり入是は此へんちかき物にて候かあれ成もりにて只今ねんらいのおやのかたきを取候かあとりかたきの侍おつかけ参り候間御大名の御とまりをさいわいとかけこみ候ばんしは頼奉るととしゆしてこそいたりける侍共是を聞おくへかくと申よしひて聞てそれがしをみかけ頼て來る物をいかでせひなく出さんそれこなたへと立出る所をはしりかゝつて取てふせたちをむねにおしあて我かたき打たるとはいつはりなりかく申それかしはまんちうのふだいのかうけんたりあの人とをすみやかにもんぐわいに出すべしさなくはおのれがくびねぢ切て我も爰をは立さらしいかにくと申けるよしひで聞てやあ子共とも父をふびんに思ひなばめしうとを出し我をたすけよとふるひわなゝき申ける次郎聞てかやうに成上は父の命も共かくももろ共にうたんととんでかゝ

るを太郎おしとめあのめしうとは我々か身にあてたるかたきにてなし只おんしやうにあつからんためなり父の命を所領にかくてか思ひかへんそれ／＼とていそぎろうごしを打やぶり人々をおもてにこそは出しける待かけたる物共もりの内よりつつと出かやうかやうのきにて有はやこなたへと御とも申とぶがごとくにおちてゆく六郎今は心やすくしいかにかたかためしうとたまはるうへはさらは此人かへさんとひつたつるふせひにてくびねぢ切かつはとなけのこるやつはらを四方へはつとおつちらし跡をしたいといそぎけるかの六郎かふるまひ只はんくわいもかくやらんとみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第五

扱もそのゝち六郎はなんなくたせいをおつちらし跡をしたいあしから山にわけ入人々に尋ねあひ御前にひざま付あらましをのべにける頼光聞召扱はひでよしあくぎやくたちまちみにむくい思はぬしにをとげ此度のおことか忠せつゑつのはんれいか忠にもばづ

くんまざるべし殊にせんその郎等にめぐりあふこときゑつ誠にあさからす我きはまるさいこうをのがれたるしるしにやいれいも次第にかるく成ほんぶくせんことしさいなしされば過しよの夢竹のわかばのすへかけてさかふるはるといふすいむをまさにかふむりしが共我かくろうぐつにこめられてくるゝを待命にて何のさかふべき夢はこそふのわさなれば大病におかされこそふくるしむゆへあらざる夢をみることに我と心をうたがいしにおことかたすけにあふこと思へは誠のつけなり竹のわかばのすへかけてといふむさうの吉けうにまかせ汝がなのりをはすへ竹と付へしけみやうはせんぞの家なゝれは六郎をあらためうらへのきやうぶすへ竹とぞ召れるにかう仰を承り忝の御でうやなつまの兵ご君の御かんきかうむりしことさいごまでくれ／＼申せしにかゝるじせつに参りあひなのり迄下しあづかるめうがの程の有がたさよ草のかけ成父しやうれうさこそ悦び申べしかまひて／＼すへ竹よいよ／＼忠をぬきんて君を御よに立申せとあまりの有がたさに御前共はゝからずこゑを上てぞなきにけるげにしう／＼のれいきの程ぞた

のもしきかゝる所にこくうよりさもやんことなき女  
しやう一人弓を持せつなが間にまいり下り我は是た  
いとうのようゆうがそく女びんたら女といふ物なり  
然に父ようゆうは弓やを取てゝゝんになをふるいし  
事さき立て日本迄かくれ有ましさればようゆうしや  
ばのゑんつきし時ひせし所に弓のきよく我ゆつりゑ  
たれ共女しやうのみなれば誰かにか是をゆつらんと  
思へとつたへんきりやうの物なくとかうもだして我  
身も此よをみまかりぬ家につたはる大事のきよく人  
におしへすしうしん今に残つて三がいにてんしく  
るしみはるゝことなし然に日本はしん國として佛法  
るふのちなれば大六天のま王けんぞく共をさしつか  
はしさまゝくわざをなすべしそれをしつめんため  
しよじんの位にていにしへのはくた王しやうをかへ  
こへんと生れ來りたりさるによつて我も又時ゑて是  
をつたゆるとつのゝつぎ弓じんつうのかぶらや一つ  
巻物あひそへ頼光にそうでんし今はまふしうはれた  
りくはたくを出るをみたまへとひかりをはなちて上  
らるゝかゝるきすいのしるしにや頼光の病もきもさ  
めこすへをつたふ松風も悦ひの色をそへはる待たま

ふめでたさよ然る折ふしそはに有ける大のいわ二つ  
にわれ一人のらう女十六七成わらはが手を引立出我  
こそはさんかをめぐるき女にて有されば此子をじん  
りんにましはらせりんゑのかうをまぬかれせんと  
ねがへ共あきつしまが其内にしうと頼んものなくむ  
なしくもだす所に御身のみせういせんのおゆうけん  
ざいのかうりき聞に付てたのもしゝ此くわいとを奉  
るしんかとなさせたまへ時ゑてつかゆる君なればか  
れかなのりをはきん時とめさるべしいかにくわいと  
おやとな思ひそおにぞかしつねゝ申聞せしこと  
く我じゆみやう二百よさいにきはまり來る十三日に  
ちくらかをきにしつむなりりんゑのかうをはたすけ  
てゑさせよはんしは頼人々とたちまちき女とけんし  
こくうにとんでうせにけるくわいとはおんあいのな  
びりたへかたくしはしはあきれて立にける頼光御ら  
んじていできやつが心をみるとみれん成こくわじや  
やとそは成大石おつ取なげたまふをゆんでへひらき  
むすど取有し所にそつとをきおとろくけしきなかり  
けり頼光みたまひしんびやうゝそれつたへきくせ  
きかうは兩とまで大がにくつをおとし長良が心のみ

る我もかしんとなすうへはわとのかしんていをよつ  
くしらではかなはぬなり今のあしふみ身のひらき心  
かうにて大力頼光かしんかと頼くるしからざるきり  
やうなりいでしうくのけいやくせんなのりはは  
ばかりにまかせ坂田のすくねきん時とぞ付たまふか  
りそめながら三セのきゑんあさからず大系山迄御と  
も申あまたのきじんをほろほしなをせうにふれた  
りし坂田のきん時とは是なり頼光うきよの中をくは  
ん念有是に付てもいにしへのかうけん源五は何と成  
て有やらんかれら二人につなをあひそへ持ならばあ  
きつしまが其内に我にうへこす物あらじよしそ  
れもしこくとうらいまつこなたへとそま人のむすび  
すてたるあばらやに母上を御供有かくて月日を三重  
おくらるゝ是は扱置渡邊のつな君の御行衛を尋ねか  
ねあしから山にさしかゝりなをしもおくへぞ下りけ  
る行べきすへをみわたせはいわのうへにだんをつき  
四方につるきをうへならべ何とはしらず七尺ゆたか  
成物手ほこ引さけあたりをにらんでひかへしは人か  
おにかとうたかはるゝとをらん道には大のこぼくを  
十もんしによこたへ其せんごに切すてたるしにんは

たゝ人つかなんどのごとくなりじよのものをこれ  
みばたちまちきへもうすべきか渡邊更にとうてんせ  
ず先ならべ置たるこぼくをひつさけゝたにへなげ  
うへに望し折ふしまふけさかな是なりとし人のに  
くをおしきりさもうまをふにぞしよくしいるくだん  
の男是をみてあつはれ心ちよき男かなとて物の事に  
是をたまはれとしゝむらきつてさし出す源五みてよ  
になさけ有かなふれい御めん候へと立よつて口にふ  
くみした打してぞくいにけるあらどうよこでを打扱  
は我尋る人にて有べしゆへをかたり申さんかく申す  
それがしはしんしうすいのあらとうと申ものにて  
候が七歳よりぶもにおくれいたつらにせい長いたし  
はやわざするにことゝくして我身ながら力人にお  
とるまじ弓や打物取てもおそろくはと存れ共いまだ  
ふのうのなをとらずあまりのことのむねんさにうち  
がみとがくし明神にさんろういたしきせいをかけ七  
日まんずるよの夢にあしから山にわけ入ゆうりきを  
はけまはさ兵へのせうとしまの頼光と云物にあふへ  
しそれこそ三國一のゆうしやなり主君と頼ふゆうの  
なをまつ代迄とゝむへしとあらたにすいむを蒙り此

所に打こへゆきゝのものに渡りあい心をためすに是こそと思ふ物もなくみたまふごとく切すてたるしにんおよそ三百も有へし然るに御身のてい只人とはみへず頼光にてはましまさずやいかにゝと尋ねける渡邊聞て扱は君のよりやくしんりよにかないたりとうれしさ中ゝかぎりなく頼もしきしんていかな我こそ頼光のしつけん渡邊のつなと申物なりかやうかやうのしさいにて御行衛を尋るなり君御よの時ならば尤同道すべけれ共今はおちうとの御身といひ我も日かけ物なりとかなきこへんをもろ共にしつめてせんなし君御よに出たまはゝ必尋ね給へいとま申てさらばとてわかれんとするを引とゝめよに有人を頼はつねのならひ今のせんとをみつかんこそ忠しんとは云べけれ御へんにはあはぬことばかな只それかしか心をひかん爲成かく申出すからはせひ一所に頼光の御行へを尋ね行すへなかく我かしんていをみせ申さんと申切てぞいたげける渡邊聞て此うへはさらはこなたへと二人打つれ山ふかくそ三重入にけるかゝる折ふし金時すへ竹は人ゝをはごくまん爲このみを取に出けるかすへ竹はやくもみ付此物共はよのつ

ねの物ならずもし君の打手にやむかいたるらんおほつかなしと申せは公時聞て何にてもあらばあれ我手にかけて引きさすてん尤然しと二人手に手を取りみせばき道をそふさきけるあらとうみてゑゝしれたるやつばらやたにのすもりとなさんとかけ出るを渡邊おしとめあらきは人のきすなり何事も我にまかせたまへと立よりかくわらはの道をふさくはてうていよりのせんしか又はしゆこの仰かゆへをきかんと尋ねけるすへ竹只打ふせよとそば成大石引きければあらとうみてやさしきやつめかふるまひやと大の松の木ふつつとねち切てころにきつとふりまはせは渡邊もすへ竹も思ひすさつて太刀をぬき打てかゝる所を頼光はるかに御らんしやあしはしゝとかけ入たまひあやうかりける事共かな何れも一家の郎等なりとゆへを語らせたまへは四人共につつしんで畏る其後頼光や源五それ成物はいかにと御尋有ければ渡邊はしめおほりを申上る頼光聞召扱はさやうに有けるか我かふゆう諸じんになふうれしさよせんぞはいかにわうしん天王のはつそんうすいのせうしに三代のはつやうにてけみやうはうすいのあらとうさ

らはなのりを頼光といふ光の光のしをゑさせんと  
すいのあらとうさた光と付させたまひかしんとこそ  
はなりにけり頼光ゑつきしごく有一人ならず二人な  
らず汝かやう成郎等を四人迄持ことい國にも本朝に  
もならべて又とためしなき事なればしゆみの四しう  
そうちやうかうもくの四天をかた取方ノを四天王  
となつくへしと御悦ひはかきりなし時に四人の物共  
かうへをちに付こは有かたき仰かなもはや君しんり  
よにかなはせたまふ上は御うんは光明成へしせひ此  
うへは敵ひやうりのさん人ばらせひもなくまつ一々  
にふみころし思ひのまゝにあんひをきはめ申へし先  
こなたへく御入あれと君の御供仕りいおりの内へ  
そ歸りける此もの共か有さまおそろじき共中く申  
斗はなかりけれ

## 第六

其後頼光は四天王を近付かたきめつはうの御ないだ  
んをぞなされける四人の物共承りとかくのさたに及  
ずいそぎ上らく有べしか程のとをり有なからひきの

つみにおとされば天しもはからし公家大臣めら一  
一にふみひしきうむのあんひをきはむべしはやとく  
とくと君の御とも仕り都をさして上るゝみのゝ國あ  
ふはかしゆくのはつれにあたらしきふだ有立よりみ  
たまへは何ノあふみの國かうかけ山にきしんすん  
でしんりんは中に及ず弓馬りくちく迄國のさききな  
りかれをちうばつするにおいてはほうびは望たるべ  
しよつてせんしのおもむきくだんのごとし三條の大  
臣なりもろ時とかいて有頼光御らんし是こそくつき  
やうのさいわいきしんを打取さんたいし父まんちう  
のとかなきだん打たへ本いとげん何れも此ぎ然へ  
う候母上ちよわか殿をはつながらうほかくれいたる  
所へ渡邊御供申あつけ奉りやがてふたをくわい申し  
しうゝ五人かうかけ山へそ三重いそかるゝ山にも  
なればあなたこなたと尋たまふか大き成もり有立入  
みたまへはこすへくかけらへたる人のにくつ  
みかさねたるしこつはあたかも山のごとくなり扱  
は爰そと打うなつき木のねやしばにこしをかけ今や  
今やと待たまふ頼光仰けるは此山にすむといふはい  
つはりにてぞ有らん何のふしきも是なし方くとの

たまへもあへぬにもりのうへにこそあつてふしきを  
みよとよばゝり人のかしらしむらななく事ふる  
雨などのごとくなり頼光御らんしこはいかに人の首  
かよにめつらしき物となげたるくび引よせ枕としゆ  
たかにこそはふしたまふ時に大き成ほうし馬にのり  
こくうをかけつかへしつのりにけるさだ光みてあゝ  
のつたりほつし馬もくつきやうの一もつなりよの中  
の見物は是に過しとあさむけはずへ竹誠にこぼうはの  
りてなり去ながらじまんはむやくゆんでのあぶみさ  
がりたりおちてけがばししたまふなと一どにとつと  
ぞわらひける是もしらけてうせにけり其後もりの内  
に五尺斗の女のくひかねくろく付たるかこすへにあ  
らはれこよひの客はけなけなり去ながら更行よはを  
待たまへと申金時みてあつはれるかほよき女しやう  
かな是へくとまねかれにつことわらいうせにける  
其時頼光枕を上させたまひあつはれしれたるふるま  
ひかなむようのことをせんより誠をあらはせたし  
我々がけしきにおそれ近づかぬかいかにとよは  
はりたまへは四方一どにひゝき渡りらいてんいなつ  
ま三重ひまもなく二丈斗のあつきくわゑんをふきて

まはりける渡邊みて望所とはしりかゝつてむつとく  
みければ一どにかけよりおさへてなわをかけにける  
頼光御らんじて御悦ひはかきりなく今ははや是迄と  
きじんをさきに引立させ都をさしてぞ上らるゝ都に  
なればすぐにきんに上よしをかくとさうもん有み  
かとゑいぶんかきりなくいにしへよりきじんたいぢ  
する物有といへ共いきながら取ことためしなき高名  
しんひやうの至り何にても望にまかせんとのりんげ  
ん頼光承りさん候我々は何の望も候はす少打たへ  
申度事御座候とおそれ入てさうもん有みかとゑいふ  
んあつて何事なり共とくゝとせんし有其時頼光し  
やく取なをしそれかしはすんしうとしまのまんぢう  
がちやくし左兵衛のせう頼光と申ものにて候然にお  
やにて候まんぢうはすいぶんの忠しんにて候ひしに  
清原のう大將あきたゝならびにとうゝみの國みな  
せのくらんとゆき春がざんげんにてとがなきつみに  
しつみ候此度の御ほうびにかの兩人を我々に引合  
られせひの次第をゑいぶんにあつからばおゝい成御  
かうをん是に過候とつつしんでさうもん有みかども  
う大將の事なれば此きいかにとゑいりよをくだかせ

たまふ御前しかうの公家大臣すは大事と我もくゝと  
さしよりそれはもつての外の次第何と打たへたまふ  
共りんげんはあせのことし出て二度歸らす一たびと  
がにおちたる事なればゆめくかないかたし只所領  
を望べし口くゝに申さるゝ頼光何りんげんはあせの  
ことしとや尤にて候とくだんの札を取出し然らば此  
ふだをきじんたいぢのともからは何にてもほうびは  
望としるされて候我々か望はべちき更く候はず此  
物共を召出されりひあきらかに聞召わけられたまは  
れ此きじんをいけ取にいたせしことよにおこかまし  
き事なれ共かくにこりたるよの中なればくびを持  
て上りたるぶんにてはよもたいぢしたるとはのたま  
ふましと存扱こそかく仕つたりあんにもたかはすい  
きながら取たるにはうたがはせたまひほうびは望と  
しるされたるせいさつのこととはそらごとかなかくた  
らさせたまふりんげんのなとあせのごとくなかるら  
んそれい國のけん王はじきにけんたん所にしゆつぎ  
よ有萬みんのせひをかなかみたまふ是天道は一もつ  
の爲にくらからざるしるしなりそれ程迄こそ御ざな  
く共ねいじんを御ひいき有つみなき物をるにとな

しいたんの道におち入たまふこと只ようばくかみち  
なりにこりたるよの中に生を請頼光ががうの程こそ  
口をしけれ忠有物のとかにおつる御まつりごとにな  
かせいそぎ首を召れ候へとめんかくすぢをいゝらけ  
はがみしてこそおはします四天王是をみていやとか  
くことは御無用天かの大事をしつめし物かどうり  
を持たることを聞召入れぬみかとは天子共存せず  
所せん此きじんに付たるなわをおし切て本のすみか  
にかへし我々四人はかばねをさらし申さんしやいつ  
迄とすでになわを切らんとす公家大臣きもをけしい  
かやうにも方くゝの望をかなへんまつひらくゝとふ  
るいわななきたまひけるみかどおどろかせたまひげ  
にたうりなりさらば望にまかせんそれくゝと兩人の  
方へちくし立ければ四天王もいかりをおさへきじん  
をかん所へ三重引にける有かたくも天ていちぎにけ  
んたん有へきとこてんにりうかう有げにためしなき  
次第なり時もうつさず兩人ちよくにしたがいさんだ  
いす四人の者共是をみてたとじ此事かつとまくると  
おのれらをはあんおんにはおかし物をとこぶしをに  
ぎつてひかへける頼光みたまひいかにあきたい御へ

んはまんちうをきやくしんのくわたてとは何とてそ  
うもん仕つては有ける其だんつぶさに承はらんいか  
に／＼と有ければ大將聞もあへず我まんちうにいし  
ゆいこんあらざればぎやく心共むほん共そうもん申  
せしことなしそこつ成事共やとよそかましくそ申け  
るつないらつてすゝみ出何まんちうにいしゆなきと  
はいつはりなりとよのあかりのせちゑのよやみ打に  
せんとたくみしはいかに然共まん中太刀をもつて方  
／＼をたばかりつゝかもなくなんをのかる其だんを  
はい前ゑいふんにたつしぬれはくぎやう殿上人もよ  
つくおほへたまふへし其だんのくはたてにはそれ  
成ゆきはるをかたらひすせんの軍兵をもよおしゑん  
しうはま松に相待といへ共懸ちられほう／＼都へ  
にげ上る様々ひやうりをかまへとかなきまん中をつ  
みにしつめしだんちんしてもかいあらしいかに／＼  
とたゝみかけてぞ申けるゆきはる聞てこは跡方もな  
きこと共かなまん中むほんのしるしにそれかし方  
へのめぐらしぶみ是に有とうしろをきつとみたまへ  
は六ゐの臣はしり行み藏をひらきくだんのふみを取  
出しまん中にさし出す頼光みたまひ是は父か手にて

なし汝らがかきたるにせふみにて有へし只しきせう  
こ申せ時に大將ひさおしなをしやあ頼光我はしらざ  
る事なれ共あまり汝ら口聞に出たゝしきせうこみせ  
ん先年まん中が家のこかはくしゞッせしかきとめ有  
へしそれ／＼と有ければ又六ゐの臣はしり行持てお  
まへにさし出す大將みて是はまん中我よ打にいらん  
時御殿に火をかけよとやくたくししのびの物を一人  
六ゐの如くに出立せくろとのわき迄しのび入しを攝  
政くはんはくみ出したまひけんひいしに仰付られお  
さへてかうもんしければかやうにはくてうしたり此  
ぎには我一人にあらず公家大臣何れも存の道あらそ  
ふ共叶ふましふびんの物の有様やとあさはらつて申  
せはくぎやう殿上人げに其きは太將殿の仰少もちか  
はず我もみたり何かしも聞たりと皆口／＼にのたま  
へば大かう一の頼光おにをあさむく四天王もあたる  
だうりにつめられせきめんするこそ口おしき其中に  
金時はしんざんゆふことをすみかゝてわうどうを  
もははからずりひはともあれかくもあれ我君をあつ  
こう申くせものをいかで置べきととひかゝる所をさ  
だみつすへ竹おさへあまりにあらし公時せひことつ

まり我々思ひ切ならばおそらくは日本人たねはたつべしまつしづまれいかに／＼とせいしける時にしも口より下官の男つと出其しさいはそれかしよつく存候かのしのひのものはまん中のけらいにて候はず大將殿の家の子そのたの藤太みつひでとてそれかしをやにて候然るにそれ成二人の人々はま松の合戦にまん中におつちられせんほうつきてそれかしおやを色／＼たのみたまふ父にて候物も子をするとなればぢたいに及しか共ちう代の主君のひたすらなたのみたまふにせひなくたのまれ六ゐにいで立くろとにかくれいてわざとあらわれまん中の家の子なりと申候されば其時大將殿此こと思ひのまゝにしおゝせは此度の忠せつに汝か子をよに立ゑさせんとじひつにくだしふみかきてたまはりなからかつて其ぎなくけつくそれかしになんだいはいひかけてうしなはんとたくまれし間よのまにげ出只今はからす丸こゝうの中官のものとなりしせつをうかゝふ折ふし此こと承り罷出て候是を皆々よつくみたまへとれいのくたし文をさし出すみぶのひろつぐおつ取あげ高くよみあけるそのふんにいはくくだすしやうのおもむ

き一めいをくんしのみちにほつしかたきめつほうのちりやくかんせしむるあまりありそのちうせつとしてそくなん國みつにいふきかたゝしがゑいたいあておこなふべしせうこはくらんとゆきはるらくわう二年三月十二日きよはらのうたゝし將あきたゝとたからかによみあげければさしもくちきゝたる二人のもの共いろをうしないたゝどうてんしてこそいたりれみかどゑいぶんまし／＼てさたのほうぎはまつたりいそぎまん中めせとはい所へちよくしを立ければまん中夢さめたる心ちにて御せんにあがりたまひけるをくよりのせんしにはつみなきはい所のすまいふびんなり是なんぢかあやまりによつてほんりやうにあいそへやまとかわちならひにみなもとうちをたまはりかうづけのかみたゝのまん中にそふせられるされはげんしといふこと此時よりはしまれり同頼光にはいつみの國を下されせつつかみみなもとの頼光とぞなされける扱だい將をはきかいがしまになかすべしゆきはるをはまん中にとらすると御てんにいらせたまへは一人をひつたておの／＼御せんを立たまふやかたになれはたるいのしゆくにつかい立みだい

わか君をはつなすへ竹からうぼ御とも申参りけるた  
かいのうきつらきちよをふるともよもつきし扱四天  
王には其ちうにしたかつておんしやうすか所たまは  
りまさきのかづらすへなかくまつ代までもけんしの  
はんじやうめでたきともなか／＼申はかりはなかり  
けれ

延寶五丁巳曆正月吉日

八文字屋八左衛門板

## 四天王若さかり

### 初 段

さても其後をもく仁王六十一代れいせんゐんの御宇かとよ、其比都にははりまのかみ多田のまん中とてたぐいまれなる名將有せんぞをくわしく尋るにせいわ天わうのわうじ、六もん王經元しん王の御子也、その身のゑいぐわひをおつて御子二人おはしますちやくし左ひやうへのせうらいくわうとて十八さいはかり事をいやくの内にめぐらしかつ事を千りが外へ本マかうせきかうがとらをばくせしゆふ力をもさみする程のゆふし也、次はかくどう丸よりちかとて十五歳に成たまふその上家のしつけんに藤はらの仲光とて上をうやまひしもをなでじんぎ正しき兵の有こゝに天下のまれものにわたなべのつな坂たの金時すへ竹、定光とていこく本朝にならびなき大力、かうもくぞう長の四天王とかうしばんみんおそれをなしにけりされはまん中御心にふそくなくはるのあしたの

花のゑん、秋のゆふべの月のかくよにゆゝしくぞおくらるゝくわほうの程こそめでたけれ是は措置その比又ぶんこぶせんちくご三が國のあるしをばあかはし治部の太夫安かげとておごり第一の弓取有されは此程つくしよりこゝんめいよの大力とてかたちやしやのこつく成しゝふんじんの大男四人つれやすかげをみかけ閏九月のすへよりもかれに付そひいたりける先一ばんはらぐいの道くわんがうせきげんかくてつしん、ゆつぎの大がう宗とら八天句のりん正坊とてそのたけ八尺計にてかうりきはつたるゑせ物也有時やすかげ四人の者を近付御へんたち我を頼て來りしもあのらいくわうが四天王と力をためしなをあらはさんためにて有されはらいくわうにつかへしものゆふりきはつたると云共いまだはたちにもこすやこさしの若ものにて力かたまる事あらじ御へんたちはたぐいすくなきものにて有然るにあの若物を天下の四天王といわせつゝまさるかたゝ人しらすいぎやだいに上りみかどにそうもん仕りていしやうにてきやつばらと力をためしいちゝ取てなげちらし人にちぼくをおどろかさせまん中おやこめんぼくな

くいせひもおとりすいびせん其時は此やすかげまん中にまさはすると、おとらざる名大將にて有間天下のけんへい取おこなひかた／＼を四天王とかうしうへみぬわしとさかへんは人々いかにと申ける四人のもの共承りそれこそ望にまいたりたり君のふるまひまん中よりばつくん也人おゝき中にてもすぐつて奉公申さんいそぎだいにさんだい有我等が事をそうもんしきやつばらとはれわざの力をろんしいち／＼取てねぢすへちじよくをあたへ申さんいかにと申けるやすかげ大きに悦びさあらは我だいにて申上るとてゑもんつくろいだいをさしてぞ上りけるだいになればからす丸大なごんに申やう此程つくしよりめいよの大力四人迄まいり満中が四天王と力をためし申さんと望申候あはれ庭前にて兩方を召出しちからの程をゑいぶんに入申此ものが望の程かなへ申度とそうもんす大なこん聞召めつらしき事共やと急き此由そうもん有みかどゑいらんかぎりなくはればれしき見物かないそき力をためさせんまん中めせとのちよくでう也承候とて頓てちよくしを立にけりまん中何事やらんとさんたい有うちよりのせんしには

いかにまん中治部の太夫が申するは此程つくしよりめいよの大力四人上りなんぢか下人四天王と力をためさんとそうもんすいそき召よせためさせよいかにかにとせんし有まん中聞召こは珍らしき望也いかにやすかけいらざる事を取立て御望さるゝたとへこなたががちたるとも又はそなたががちたる共あまりよからん事にて有おとなけなくも御所望を申さるゝ事はひが事やと大よふに仰けるやすかけ聞てなふ我も左様に存しがせひなくそうもん申候まん中殿と申さるゝその時らいくわうさらばかの者召よせたまへやすかけ聞て頓て使を立ければ四人悦びさんだいす又らい光も四人をめしたまふ互にあいをへだてつまなこのそこにかとをたてゆう／＼となみいたりいくわうつなにむかい安かけが望にてあの四人の者共と力をためす事にて有すいふんはげませ物共と仰ければ承り候一々つかみひしがんとおのゝ思ふ所存いわねと上へあらはれたりかの四人のもの共もわかやつが何程の事有へしとこぶしをにぎりける其時六ゐのしん共くろがねのほうを三十八人にてかきて出まんなかはどうど置からす丸殿立出いづれにても

罷出あのほうをねち取べし承り候と定光つつと出ばうのはしをむずと取八天句のりんせう坊つゝゐて是も又ほうのはしをおつ取ゑいやゝとねちあいしがさし物かなぼうけふり立中よゝふつとねぢきつたり人々御らんし是は何れもせうぶしれず一人つゝの力を見せよ承候と申所に六ゐのしん百せうのもてあつかうあらくわ十枚ぢさんするゆつきの大力罷出かのくわ四枚おつ取二つにさつと引さいたり人々御らんし残六まい一度にさけ承候と申六まいのくわおつ取ゑいといふて引共さくる事はなしその時すへ竹罷出是ゑたまはり候へと六まひのくわうけ取さつと引き是程の物はものゝかすにて候はすさきの定光のほうは是よりばつくんまししたるゆふ力也坂たのきん時罷出ていせんの松の木二本兩のまんなかむすと取ゑいといふて引よせ二本の松をねぢ合是をはなせと云ければ山がきげんかく立より力にまかせゑいやゝと引はなせとちつ共はなれずわがうではかなはずとせきめんしてこそ入にけるまんざの人ゝ金時がかう力ばつくん也とのたまひてしたをまいてぞおはしけるおさめのせうぶに也ければ四天王すい一わた

なへのつなゆらりゝ罷出なにを持てせうぶをせんとおにをあぎむく力うでなてさすりさらぬていたりけり然るにくろがねのたて二枚かさね七八十人にてかきて出うちよりのせんし也是をふみぬきたまへかたゝゝつな承何とそれかし仕らふからくいの道くわんいや某さきをせんとするゝとはしりよりゆんでのあしをふり上ちからにまかせ二つ三つとうとうとふみけれとちつともぬけん様もなしその時わたなべ立よりそのきたまへと云まゝにめてのあしをふりあけ天ぢもぬけよとだうゝとふめば二まひのたてをふみぬきたりてい上の人々あはやめいよのわたなへとだうをんによばはる聲しばしはなりもしづまらずどうくわん大きに腹を立只今のは某が大かたふみぬき候を跡よりつながふみぬくはそれは我があらごなししたるゆへと申やすかけ聞て尤それはさぞあらんと大きにあぎむくらくわう御らんしつなが力てふみぬきしかくれなしと申せはさやうにあれば力なしとかうはいらず力すもふ一ばんとれと有ければわたなべじするに及ず、すまひにせん道くわん悦び望は是にて候とわたなべにつかみ付つなわら

つてなふひきやう者めがいまだやういもせずだしぬきたるふるまひと上おびつかみくるり／＼とふりまわし大ぢへ入と取てなげはしりかゝりこうべみぢんにふみくだくすかけを初め三人の者共こはいかにらうせきと太刀のつかにてをかくるわたなへわらつてあふわが力をあらそふものゝせうこにはかくするぞよくみよと少もさはくけしきなしうちよりのせんしにはやすかけふるまひびろう也すてに力はらいくわう方かちたり兩方共にたいしゆつ仕れとのせんし也やすかけあまりの口をしさにしさい有げに御せんをたつわたなへみていかにやすかけ所望ならば望たまへ但御へんからすまふに出られうかと小がいな取て引たつるやすかけめんほくうしなひすこ／＼と御前を立四天王きつとみてうでもかなはぬ力わざとはきやつばらが事也とどうをんに打わらい君の御供仕りやかたをさしてかへりける此者共がふるまひぼんふのわざにてあらずやとて見る人聞物おしなべてみなかんせぬものこそなかりけれ

一二たんめ

さる間あかし治部の太夫やすかけはいそきしたくへ立かへり三人のもの共を近付いかにめん／＼今日たいにてらくわうがふるまひむねん也いそぎだいをふみつぶしまんぢふしに腹きらせんされ共なにあふゆふしそれかし思ひ出せる事有と頓てゑちごゑつ中の大將ゆはらの右門つね光へ使をこそは立にけりつね光何事ならんと使と打つれ來らるゝやすかけゑつきかぎりなく是へ／＼とせうじしゆ／＼にもてなしなふいかにつね光殿かやう／＼のしさいにてだいにてまん中と力くらべのいしゆの有御へんもよからぬ中なれはいぎや二人といたしかのまん中をほろぼしてきん中をふみやぶり天下一とうに兩人してむさほらんはいかに／＼と申けるゆばら聞て尤それこそ望たりらい光未だ若物とは申せ共なんぞ我こそ天下のしつけんをかうふるとてよをわがまゝにふるまひ見るにしんいのほむら也そも兩人してぎへいを上はそくしに國／＼みだれおのれとまん中じがいせん其時兩人立わかれ日本をはん國つゝちぎうせん事うたがいなしはや／＼思ひ立たまへやすかけ悦び

某がちりやくにはまん中を國中に置かなふまし御へんはくにへくたりゑちこゑつ中のせいをもよふしくちくを切ふさきろう城なされ候べし定てせけんにかくれなくまん中おや子むかふべしそのるすにそれかしみかどをいけ取らく中をくろつちとなしさいかいなにかいきりしたがいはた口を大てと定めまん中を待うけん御へんはていたきいさもせず時々かけ出ふせぎに心をくだかせは付そう者共みなちりちりにおちゆかんさあらばまん中京へ入もかなはずおくへおちんもかなはずしかいなく腹を切へきぞいかにくと有ければ是こそ望のちりやく也へんしもはやくいそかんとやすかげにいとまをこいひそかに國へぞくだりけるくにゝもなれはさいそくまはしせいそろへおくかい道にせきをすへみつ物をばい取りきをひかゝつて待にけりされはにや大はかたちよりひきやくとうらい仕りそうもん申ける様はるちごゑつ中の大將ゆばらのゑもんきやく心のくわだてあたりちかきくにくへみだれ入兵らうをうばい取城をかまへおくかい道を切ふさきむほんのくわだてしきりにて候すてに天下の大事也と大いきつてそうも

んすみかと大きにおどろかせたまいまん中ふしを召たまふまん中おや子やかてさんだいなされける内よりのせんしにはゑちごゑつ中のしゆびゆばらのゑもんきやく心のくわだつるいそぎ向てついはずせよ承候と頼てだいをたいじゆつ仕り五きないのせい共へふれ状態はしせいそろへつかう官くん五百よきあんな元年二月二日くわらくを立てはつ國さしてぞむかはるゝあかはし時分今成とて一もんいへの子八千よき馬ものゝぐとやういして上を下へとかへしける此事よもにかくれなくみかど大きにおどろきたまひまんぢうの次なんかくどう丸を召たまふよりちかせんぢん承り仲光を御供にて頼てさんたいなされける内よりのせんしにはすでに都にぎやくしんの者有きんりをしゆこせと有ければ承り候とぎい京の人々にいちく次第にふれたまふされともぐんせいときのかんにおそれをなしやすかげ方へと成にけりされ共だいりにつめたるはぎをむねとする兵共少もぎゝするきしよくなくもんくをかけためわつか六百七十きよせくる敵を待にけりあんのごとくやすかげは大てからめてふたてに也東西より時の聲をそ上にけるろ

くししんどうおびたし時のころもしづまれはなかな  
光やかてかけ出てなにものはきはきん中へもつたい  
なくもをしよするいかに／＼と有ければ安かけ聞て  
事めつらしきし事かな是こそあかはし治部にて有  
いらざるぬるきなまくけに一身いたししなんぞやた  
だねんぶつを申さいこをまてとよばはつたり仲光聞  
てうちわらいさてはちぶにて有けるかむかしはせん  
ちを向てよみければかれたる木にも花さきとぶ鳥も  
ちにおちあつきあくしんもしたがいきまつだいぎや  
うきなればとていかで十せん君に向て弓を引矢を  
放すべきかへつてなんしか身にたちしせんとかんら  
／＼とわらひけるやすかけ聞て腹を立あれ引さけて  
まいれさげ切にいたさんぞ承り候と三人の郎等共一  
めに打て出だり方には中みつうたせかなはしと  
あしたの二郎大たちふりかざし一もんしにはせよる  
をでんしんやがてかいつかみはいかいたすべき大  
かうみてこなたへと云まゝにたがいにもをむすと  
取二つにさつと引さいたりいわ松八郎むねんと思ひ  
とんでかゝる所をりんせう是をかいつかみめよりた  
かくさし上二でう計なげたりけるくわんぐんぎし

て見へけるを仲光ざいを打ふつてかいなき物のふせ  
いかなかけよ／＼とよばはれば人々これに力をへて  
一度に本戸をひらきやうめいもんのすしかいにお  
つつかへしつひはなをちらしてたゝかいけりだり  
はふせいと申せ共なをおもんしぎを守るものなれば  
命をちんかい共おしますこゝをさいことたゝかへば  
よせて一千よきうたれ身かたはわづか百き計しんた  
りけりかくてその日もくれければ軍はあすのうのこ  
くこそしからんとそうもんをかたむればやすかけち  
んをぞ取にけるこゝに八天ぐのりんせう坊今日のた  
たかいにわがてにかけ五六十もなぎふせたりとは思  
へとも打ごみのいくさにてめにたつ事なしこよひぬ  
けかけし大將とくむか又なか光めをつかみさくか二  
つの内ははづさしと只壹人しのびたいりをさしてぞ  
いそぎける爰に又仲光もけん見のためにたいまつも  
つて辻／＼をまいりしか道にてはたと行あひて中光  
やかてことばをかけそれにしのびてまいりしはなに  
人にて有けるぞりん正聞てさゆふはたそ是こそ藤原  
の仲光ゑゝ望所のさいわい林正はうにて有けるはと  
はしりかゝつてむすつくむなかな光もぐわんらい心聞

たる大力と申せ共りん正事共せず取ておさへくびをかゝんとしたりけり中光上成てきの左右のかいなをとつてりん正ぼうをくみとめたりよれや／＼とよばればさき坂兄弟はせ來りいづれか敵ぞ中光とてたいまつ取てきつとみてゑ／＼うへなるこそかたきぞとて左右よりむんずとくみけるをりん正ゑたりといふまにあにの太郎をかいつかみ七八間なげすておしかかつてくびねぢきるそのひまになかみつさしぞへするりとぬきつかもこぶしもとをれ／＼と三かたなさしさゝれてよはるをはねかへしくびかき切て立あがりおに神と聞へたる八天匂のりん正を仲光うつて有けると本ぢんさして引かへすかの中みつがてからの程ほめぬものこそなかりけれ

### 三たんめ

▲去程によはほの／＼と明けれはよせておこり出ゑびらやなぐい打たゝきて時の聲をぞ上にけるよりちか此由御らんして身かたはもはやせいもなしいでちしんのせうふにせんつゝけや／＼とのまひて切て出

させ給へは御まへさらぬ若者共い上三十八人前後につらなりたせいの中へわつて入おもてもふらずたゝかいけるおの／＼ぶん取あまたしてついぢの内に入にけりみかどなんでんのひろび／＼しに出させたまひゐんのせんし承り惣大將よりちかを御めし成はと有承候とよろひにたつやその數しらす三か所てをおいたまひしろいとのおよろひを、くれなゐの如くそめかへしながるゝちをもぬくはずきしよくかうだるふせいにて庭上に畏るつゝいてなる者共もまた十五十六の若侍あるひはきす五か所か七か所おいながら事共せざるていたらくけみやじつめうはちがへ共つら玉しゐにをいては何も同事ならんと上下かんしたまひけるみかどつく／＼御らんし是らがふせい何にたとへんかたもなしいくさの次第をかたるへしとせんし有よりちかこうべをちに付さん候敵大せいと申せ共身かたは命をぎろにかけおつふせ／＼きりふせられよせて八千七十き<sup>本ノマ、</sup>八方にやぶられて七條かはら迄五六度迄おい出し候あはれ君の御事だにも心にかからずたとゑ天ちく迄もおい行やすかけをさげ切にいたさんと申けるみかと大きにゑいらん有あゝの者共

に酒をのませよとのせんし也さいしやう承たいへい  
 ひとつかき出し三うらの五郎にわたしける五郎たい  
 へいたまはり、よりちに奉る大將御かはらけ取上  
 三ごんさらりとほしたまへは御めん有ぞかた／＼承  
 るとてたがいにのふづうたふつしばらくしゆゑんぞ  
 なされけるかゝる所へ中光敵のくび三つたちにつら  
 めきまいり某ゆうわうもんに候ひしが餘り御内の酒  
 ゑんのおと高くいくさ心にそまづして是迄まいり候  
 御さかなは何より御すきのやすかけがしやてい兵衛  
 の介がくびさて郎等がくび二つ是／＼御らん候へと  
 御前にさしいだし敵はせいつきみかたは皆々打しに  
 仕り候かくてはかなはせたまふましいそきみかどは  
 ゑいさんにりんがう有しゆとをたのませ奉らん敵は  
 やみだれ入候へんしもとく／＼と申けるゐんのさい  
 しやう尤也はからへやと仰もてぬにかたきうんか  
 のことくみたれ入ときの聲をぞ上にけるすはやと云  
 まはおそかりける頓てみかど八歳の宮一つこしにの  
 せまいらせよりちか仲光其外いせの住人山田の九郎  
 い上三十二八せんご左右にかこみ大せいをおつはら  
 いひへい山へとおち給ふされ共敵跡をしたいおつか

けけるかなふへき様更になしその時仲光山田に向て  
 やお御へんは君の御供中はや／＼おちのびたまふべ  
 し我々爰にふみとまりしはらくかたきを防くべしと  
 く／＼と有ければ承候と四五町計は行と見へしが忽  
 心かはりかたきの方へとくわはりけるよりちか仲光  
 おどろきなむ三ぼうきやつめに君をうばはれしな此  
 うへはなにといふ共君をとりごとなさせいにか／＼せん  
 とおとり上り申せ共かなふへき様あらざればさらば  
 敵をおつはらいほつ國へくたらんと大せいを四方へ  
 はつとおつちらしい上十三ぎほつ國さしてそくたり  
 ける去間やすかけは思ひのまゝに軍にかち其うへみ  
 かどをいけ取悦事かぎりなく山田の九郎をめされ御  
 へんがちうかうばつくん也とていつみの國五千てう  
 くだしたまはる又みかどを汝にあつつけ置也きびしく  
 しゆごせよと有ければ承り候と御前を罷立いそき宿  
 所にかへりける一間所にみかどをおし入奉り八歳に  
 成たまふ御宮をはわざとひとしきりとをへたてゝを  
 し入申物おもはせんものをやとなさけもしらすふる  
 まひしをにくまぬ者こそなかりけりあらいたはしや  
 みかどはそも思はざる御なんにあひぎよいのかはく

ひまもなくあゝ定なの次第かな昔が、いまに至迄十  
せんのていとしかやうのなんにあふ事は聞たる事も  
更になしされはちんばんしやうの位をうけ四かいの  
まつり事わたくしなしと思へ共あやまる所あればこ  
そかやうに成ゆゝちん是ぎやくしんのわざならず天  
のばつするけい也よをも人をもうらむましあら定め  
なやとたからかにりんけん有泪にむせばせたまひけ  
るあらいたはしの御事や八さいの宮きり戸のあなた  
にて父みかどの御こゑを聞召こは夢かと計にてなふ  
それなるはちゝうへ様にてましますかやあらなつか  
しや父うへさま此戸をあけてたひたまへうさやつら  
さをかたり申さんときりとをたゝきこゑを上あめや  
さめとぞなきたまふみかど此由ゑいぶん有やれそれ  
なるは宮なるかこはうらめしのやすかけや我といつ  
所に置たりとて何程の事有べしやなさけもしらぬふ  
るまいかなさこそおさなき物として一人すこゝと  
くらさんこそよにもさびしく有べきさ程のとかめも  
有ましきぞ爰をあけて今一度あはせてくれよしゆご  
の者いかにゝとせんしにてりうていこがれなきた  
まふさすかにたけき物のふも御斷を聞からにそゝろ

に袖をうるをしいかにかたゝ宮を御めにかけてたり  
とてさまでのとかめも有ましき餘りになさけなきふ  
るまい天道の程おそろしいやいざや戸をあけて御め  
にかけん人々いかにとだんかうすみな一同に尤いわ  
れたりとゑつみにしづむ共君の御ためそのうへさ  
程のとがにてよもあらじなにかくるしかるへきとき  
りどをあけ奉れば宮は夢共わきまへするゝとは  
しりより父のみかどにいたき付きへ入様にぞなきた  
まふみかど御らんし御泪をおさへさせたまひみやの  
御ぐしかきなてゝあらくわほうなの次第かなちんは  
はやもすでにかたふけはくらしいをゆづりほつたい  
ほう王とあふがれ御身におもくもてなされくらさん  
物をと思ひしはみないたつらに夢と也たりかなしや  
といたき付てぞなげかるゝあらいたはしやみやは  
そもみかどに向何とて日本のあるしとしあのぼんけ  
の安かけにかやうにせばめられけるなどしよこくの  
ぶし共にりんしをなされ打たまはんかいなやとおと  
なしやかにのたまへはみかど此よし聞召あふおと高  
しゝやすかけ聞ならば又うきめにやあふべきにも  
のな申そ我子とて又さめゝとなきたまふかゝる所

へ山田の九郎きたり此由を見るよりもこはいかになんしら何とて此とをひらきいつ所にみかどを置けるなるゝ天めい付たるやつばらやいちゝ切てすつべきとはつたとにらみするゝとはしりより宮の御てをあらく取あいそふなけに引たつるみかどはすがりたまひつゝこはなさけなの九郎かなさすか天てるわうしのながれをつくへき此みやを左様にいたすほうや有いかにゝとせんし有九郎聞てうちわらいあふ十せんのくらか廿せんかはしらす只安かけより外はおそろしき人もなしはなさせたまへといふまゝにかしこへかつはとつきたをしみやを引たて一まの所へおし入あいのとをはたとたてばんのやつらくびいちゝにうつてすつへきぞにくきやつがふるまひとあたりをはつたとにらみつけしたくへこそは入にける山田の九郎がふるまひあつはれめうがをしらぬぐにんやとみなにくまぬものこそなかりけり

#### 四たんめ

▲去程にはつ國へむかはせたまふまん中おや子の人

人は北國事ゆへなくしづまれはくんせいを引くしていとへのぼらせたまひしが其ひはみのゝ國たるいの宿に付たまふかゝる所によりちか中光を御供にて以上十三ぎ來られしが人ゝを御らんしいそき御まへに畏り都にての有様くわしく御物がたり有ければまん中を初人ゝよこてをうつて是はゝと計也まん中仰ける様は先こよひは爰にりよしゆくして明日早天に打たて一もみにうつて上り一時にせうぶを決せんいかにゝとのたまへはおのゝ陣をぞ取にけるさればにや夜のまにかはる人心付したがふくんせいと心の中に思ふ様たのみがたなき事共かなかたきにひいにぐんせい付みかたは次第にせいおとりはかはかしき事あらしされはとて君を見すてやすかけをたのまばこそ國ゝかへりいかなる山にもとちこもりさいしをはぐくみすぎんとて其夜の内にぐんせいとも五人三人うちつれてをのかちりゝ成にける五かうの天もひらくれば仲光やくしよゝにはせまはれど人一人も更になしさてはおち行ありけるかとむね打さはき大將にかくと申まん中聞召さぞ有らん頼かたなの人心いかゝはいたさんせいはいか程のこり

しぞなか光聞てさん候わづか六十八き敵のせいにくらふれはきうくが一もう大かいのいつてきふせかんとするにたよりなし是ぞげんしのめつぼうと仰けれは四天王承りあら御大將共思はざりし御ことば我我はなにのためにて候敵二十萬三十まんぎより此四人をたのもしくおぼしめせてにだにあたる物ならば取ては引よせ太刀のかねこそかぎりなれじこくもうつり候にはやうつたちなされよと人々の御供し都をさしてぞいそぎけるいそげば程なくあふみ成やばせにこそは付たまふそつしに都へ入へからずまつく是にしはらく有都のやうすをうかい申さんと有所に宿を取おのくひやうでうかぎりなし中にも頼光すゝみ出のたまふにはこよひ某つな公時をめしつれまつく都にまいりらく中の様子をうかいひまだにあらば敵のやかたにしのび入やすかけを引さげ御めにかけんと事もなげに申けるまん中間召あらふてきならくわうかなさやうにももの事成へき物ならば軍をする迄もあらずとからくわとわらはせたまふらくわう聞召せひは某あまりふかく成事いたすましむねに覺への候いそぎ供せよ二人の者

つな金時承りあつとこたへて立けるを定光すへ竹君にすがり扱此二人は御やくにたつましと思召れ御殘しなさるゝ事にて候からいくわうにつこと打わらいあふ申所しごく也といまるも供するも同ちうせつ汝はちゝ上しゆぐすべき時こそうつれとのたまひて二人のもの共引ぐして都をさしてぞいそがるゝかのらくわうの御所ぞんぶんぶ二道の侍やかんせぬものこそなかりけれ

### 五たんめ

▲是はさて置治部の太夫安かげ御まへに山田の九郎を召れやあいかに山田いつ迄みかどをめしこめおかんされ共がいする物ならば人の思はん所も有こよひひそかにみかとゝ宮を引ぐしてかも川にしつむべしいかにくゝと有ければ承り候と御まへを罷立安かげしばしとをしとゝめ御へんうたがふにあらねども一つはなんしがためなるぞけんしをそへんと朝くらうこんをさしそへ給ふ二人御前を罷立其日のくるゝを今やくゝと待にけるすでに其日もくれければ山田み

かどのおはします一ま所にたちより木戸をひらき申様君すでにこよひ御さいこにて候とくく出させたまへと云みかど夢共わきまへすこよひかぎり有けるか、みやはいかにとせんし有山田聞て同御さいこ候といひもあへず御てを取引出し宮をは下人がかたにかけ、たいまつもたせうこんも共かも川さしてぞいそぎけるしかもそのよはきさらぎ二十五日めさすともなきやみよに忝も十せんのてい王都のつちをふませたまふ事共は昔も今もためしなしみだぞ道のしるべなれ御あしよりもあへるちはたきのおつるかごとく也ひろいかねさせたまひけるうこん餘りにもつたいなく思ひ御前にひさまづき何かくるしくはんべらんかたにかゝらせたまへやとみかどをかたにかけまいらせしつかにろしをあゆみしはなさけ有てぞ見へにけるかもかはに成しかはと有石のうへにおろし申宮はみかどのそばによりそもくいづちへゆかせたまふぞやみかどとかうのへんじもなくなみだにむせばせたまひける朝倉あまり御いたわしく存みやの御まへにまいり君すでにしやばの御ゑんつきさせ給ひあの浪のそこにあんらく國と申てめでたき國

の候それへりんがうなさるゝ也御ねんぶつと申させたまへと有ければ山田立よりゑゝいらざる御へんのあを道心何のやくにたち申なふ君こそは只今某がてにかけ浪のそこへふしづけにいたす也よをいなされ候へとあいそうなげに申御てを取引よするみかどしばらくなさけなや我々さきへしづめて其後みやをいかにもいたせいかにくとのせんしにてすがりつかせたまひけるあさくら見るにもつたいなくやれなんしそれ程物をしらざるな忝もてい王に左様にあたる天はつかでのがれんあら物しらすのぐにん哉いかなる鳥類ちくるいも物のあはれはしる物をとほつたとにらんで申ける山田聞て心へぬ事はかな御身は心かはりかや我をけだ物にたとゆるはいかであくにんのこさんと太刀のつかにてをかくる心へたりと云まゝにはしりかゝつてむすくむ山田が下人とびかりあさくらに取つきしをゑたりといふてゆんでのあしにてかも川へけをとし上になり下に也ころりころりところびけるかゝる所にいくわう二人の郎等引ぐしてきやうをとをさせたまひしが人のくみあふおとを聞わたなべ金時はしより二人の者をかいつか

みうこん二人の物を見るよりもなふつきん時にて  
ましますかかやう／＼の次第にて候とかたりける公  
時間て扱は左様で有けるかとうにんをはゆるしわた  
なへ山田をかいつかみ君の御めにかけにけりみかど  
らいくわうを御らんしやれそれ成はより光かとする  
するとよらせたまひ初おほりをかたらせたまふらい  
くわう聞召扱は左様で候はんいかにわたなへものも  
しらぬぐ人めをはからへと仰けるつな承りおのれて  
んめいしらざるゆへはやくもあたるいんぐわざとく  
びねぢ切てすてにけり扱らいくわうこしよりやたて  
取出しそばなる岩に思ふ所ぞんをかき付扱みかどを  
はわたなへおい奉りきんときは若君をしゆごし奉り  
やばせをさしてぞいそがれけるあやうきみかどの御  
いのちたすかりたまふ御事も是ひとへにらくわう  
のゆふりきはつたる故也こゝんぶそうの大將やとき  
せん上下をしなべみなかんせぬものこそなかりけり

## 六たんめ

▲去程に山田の九郎が下人共いそきやかたにはせか

へり安かけまへにまいり宮みかどをはらい光御供仕  
りおちうせて候があたりの石にかやうにかき付候を  
うつしてまいり候と御まへにさし出すてつしん書  
付うけ取たからかによみ上るそも／＼左兵衛のせ  
うらくわうみかどをうばいそのうへ山田がくびね  
ぢ切てすつる也それのみならずそれへおしよせやす  
かけを初付そうやつばらいち／＼つかみひしかんか  
まへてゆだんいたし候なめん／＼いかにとたからか  
によみ上たりやすかけ大きにりつふくし扱は大事出  
来るきやつはらがかやうにいたす上は定てこれへお  
しよせん此うへはなま／＼にてかなはしとくち／＼  
によせて共いつ所にあつめてかたきをふせかんとみ  
なこと／＼くめしあつめやすがけがまへをとへはた  
へに取まはしよせくる敵を今やおそしと待いたり去  
程にやばせのうらにも爰かしこよりはせあつまり三  
千よきと聞へけるらくわうなのめに思召みかた三  
千き有うへは敵三十萬ぎにおとるまし先此度のせん  
ぢんは四天王いたすへし某はぐんせいわづか引ぐし  
ぢぢんにひかへ有べきそいかに／＼と仰ける四天王  
共承り我々せんぢんいたさんうへは後ぢん迄も事な

らす只四人に御まかせ候へと事もなげに申上るまん  
 中なゝめに思召あふいさきよし／＼このたびのかつ  
 せんさぞおもしろからんはやうたてやめん／＼とや  
 ばせのうらを打立て都をさしておしよせける都にな  
 れはときのこゑをぞ上にける城にも兼てよういの事  
 なれはきくちのせんじ矢くらに上りな程の事が有  
 べきあれけちらせよとげちすれは我も／＼と切て出  
 四天王共是をみてんでにかなぼう引さげ四かく八め  
 んにひしぎつけ大せいのぐん兵をむら／＼はつとお  
 つちらすされ共爰にいよの國の住人河のゝあん平と  
 しすけこまのたづなかいくつて一もんしにかけよる  
 をすへ竹つつとはしりより川のを取て大ぢに入とど  
 うどなげ馬のまへあしおつ取て中に引たてかたにか  
 けけふのとくぶん是也とにつことわらひ引にけるこ  
 こにつくしちんせいの住人天のや兵内宗しげとて大  
 力のおのこおどり出て申様たとへ四天王にてもおは  
 しませ我きう州にてつねにすまふをこのみしに九が  
 國がその内に又てにたつものなきぞかし此宗しげを  
 打てのち四天王とはなのられよとにくげにぞのゝし  
 りける定みつ聞てあふやさしき男のことばや出けん

ざんとはしりよりもろひぎ合はたとけまつさか様に  
 はねたをしのりかゝつてくびを打かれが郎等せんご  
 より三人おり合しを左右のわきにさしはさみ是をは  
 いけてかへり君のみやげにいたさんとかうげんはい  
 てたちかへるてつしん大かう是をみて是らはよ人か  
 なふましいで二つとなき命やすかけに奉らん見物せ  
 よや人々と大かう一ぢんにすゝみ出おびたゝしの人  
 人のふるまひやどなたにても出たまへはれいくさし  
 てなぐさまんとてつぼうをふりまはしにわうだちに  
 立たりけるきん時みてあふおのれらはだいにてふ  
 かくをかきめんぼく有てたい今出て有けるぞとかな  
 ぼうおつ取うちあひしがよくまん大かうとおしな  
 らべむずとくみかしこへとうどまろび上になりした  
 になりゑいこゑを出しくみけるがついにきん時うへ  
 に也大かうが左右のうでをつかみゆんでゝそば成が  
 んせきをゑいと云て引よせその下におし入てかうべ  
 少出たるをわれよくだけよとてつぼうにて打程みち  
 んになつてうせにけりてつしん今はこらへかねそこ  
 を引なとかけるをわたなへすかさすはしりよりは  
 はそれかしうけ取とてつしんとだうどくみしばしね

ぢあいたりけるがうちからみにひつかけてかしこへ  
はたとあげたをしすかさずうへにのりかゝり八つし  
たのはこ取なをしちのしたよりかたさきへくしざし  
につらぬきめよりたかくさしあげ山ざるの木のぼり  
になられたるとにつことわらつて立たりしがきくち  
をはしめしよぐんせいこはあくまにて有けるとどつ  
とくづれて城中へにげ行を二の木戸までぼつこみけ  
るやすかげかなはしと思ひからめてへおちゆくをら  
いくわう四天王引ぐしからめてへまはりぼつつめひ  
きやうものと高てこてにからめ本ぢんに引かへすご  
ちんにひかへしまん中かう頓て城へのりかけたまふ  
らいくわうゑつきかぎりなくいかにやすかげ十せん  
の君をなやましたてまつるむくい程をしらざるや  
とくび中にうちおとしきつさきにつらぬき今は心に  
かゝる事なしとみかとをうつし奉りいよ／＼天下の  
けんへいまん中ふしにくたされける源氏の御代すへ  
はんじやうめでたさよとも中／＼申計はなかりけり

右此本者太夫直傳之正本を以て令板行者也

大傳馬三町目 うろこがたや新板

## 四天王女大力手捕軍

## 初段

さても其後それせんあくの二つをつら／＼おもんみるに善はかすかにあく道にかくれ有といへともそのせいすい天道にかないあくは一たびせい有て大いにほこるとついにめつしうせぬべし爰に人王六十六代のみかどを是一条のいんと申奉るその比天下のぶ將をはせつつの守源のらい光と申ける御父まん中公御たかい有いまだきちうのうちなれは出仕をやめておはしますあいしたがふ人々にはわたなべのつな坂田の公時うらべのすへ竹とを／＼みの守定光さて又平井のほうせうとてかれはらいくわうの御いとこ過にし比はりまのしよしやにすみけるをまん中御ゆいげん有てめし出されいまだむくわんにてかくどうとかうしけりらい光ほうせうを召れ御へんは我一るいなれはいづれへだてはなけれ共取わけ大せつに思ふなり御へんはいまだくらないなしけふかうあらためすな

はちはりまの守平のほうせうとかうすべしちうをつくしたまはれとひせんはりまのおさへに仰つけらるるほうせうつつしんでおうけを申時のめんぼく世の聞へ何か是にこさんなれ萬一しせんの時も候はばまつさきかけてのり出し御せんど守り奉らん四天王の人／＼いまだふあんのものなれはよきにたのみ申ぞとれいぎ正しくのたまへはつな公時もなに／＼おろかの候べしきやうかう申合すべしと四天王に一人ましひとりむしやとぞなのりけるらいくわう御きげん淺からず御ざをた／＼せ給へはおの／＼君に禮ぎ有次第次第にたいじゆつ有かのらい光の御いせひうら山ざるはなかりけり爰にかゝの國しら山の城主立花もろへ公のこういん立花のとうやすが／＼なんたち花の大じん正とうがごけに立花のかう正とうつまをばさなたひめとぞ申ける大臣正とうが／＼一子きんしゆわうとかうす然にたち花大臣はぶゆふの譽れよに聞へまん中に上をこす弓取ゆへ天下のぶ將正とうに仰付られんと世のさたもつはら成しかばまん中わがぶゆうの劣れる事をかなしみゑんゆふゑん御ざいの時なきそら事をざんげん有おきがしまにながさる／＼立花の

とうやすはふぢ原のすみとを打取ぶゆう第一の弓  
取とてかゝのとゑちせん三が國をりやうちなす所一  
ゑんに召上げられわづか三千てうの所をにかうにく  
だしたまはつて有かいもなくぞくらしけるにかう金  
しゆ王をともないたいめん所に出たまへは御家のか  
うけんやばとみ鬼丸やだの八りやう國宗かれらは其  
たけ八尺にあまりひげ空さまにはへ上りこんがう力  
のくせもの代々立ばなの御家につたはり御ふだいの  
ちうきん成まつたやばとみのうばつらとてかれは鬼  
丸が母にてせいは九尺二分すみ友とくんでなをあら  
はせし矢ばとみのおにとみがつまにてとしつもつて  
八十三力のつよき事かずしらすどの高名なをあら  
はし人々おそれうやまいける其次はやたの八女とて  
やだの八りやうがいもふとせいは七尺二分年つもつ  
て卅一力は五十人か力めいよのはやわぎのあら馬の  
りの女むしや又すゝい力女とて生年としは十七才せ  
いは八尺ゆたかにしてさなだ姫の御そばさらずよこ  
めにてあさ夕うやまひ申ける立花のかうさなだひ  
めきんしゆ王にのたまふ様物をかたらはおさなく共  
みゝをすまし聞たまへわがつま立花のとうやすはし

ゆしやくゐんの御宇のとき鬼をつかゆる藤原のすみ  
友をちうばつしそのなよに高く弓や打物取てかたを  
ならぶる者もなし其子なればゑんゆういん御身の父  
立花の大臣正とうを天下のふ將にそなへんとひやう  
でう有を定すみしん王が孫に源のまん中おのかいせ  
ひ正とうにおとる事をかなしみざんげんのなされお  
きがしまにてむなしく成そのこなれば御身十五才に  
成ならばさつそく家のはたを上させまん中をうらみ  
とがなき由を申ひらき本領なさんと思ひしに此度ま  
んけいむなしくなり人をさしんしよをたもつといへ  
共おのれもめつしした三寸のからくみにておほくの  
人我々にねをのみなげかする事むねんなりせうねん  
わとのも十五才父の經やうにらくわうをせめほろ  
ぼし一度家を引おこしなを高く上たまへいにしへは  
かゝのとゑちせん三が國の主たれば此國の者共は代  
々ふだいの侍なりくわいぶんを以まねきなばはせつ  
かはんはぢでうなりいかにくくと仰けるやばとみの  
うばつらするくくと罷出そのぢぶんにも水からせひ  
御むほんと申せしににかう上いなければ力なし今迄  
は御ゆたんなりはやくく用いせよおに丸とすゝめ立

てそ申けるさなだひめ聞召うばつらのたまふこと  
く水からつまのかたきなればさつそく打たゝんと思  
ひしに其比金しゆ王はようちにて女のむほんと有な  
らばよにあさまに思はれんと思ひ今まで打過ぬその  
にくきまん中ははてゆけばそのこらいくわう成共せ  
めてうつてうらみをはらすべし八りやう鬼丸罷出今  
時いたる御むほん成御一家のかすあまた候へはない  
たんを以みかたにくわへ中國をあいなびけぞんぶん  
にまかせ候べしとつつしんで申けるきんしゆ丸はき  
こし召われはいまだようせうなり頼にかう母上は女  
せうにてましませは軍の方おぼつかなし鬼丸八龍が  
ぐん法にまかせ我を一たびよにたてよとかくはたの  
むとのたまへは鬼丸八りやう兩がんになみたをうか  
めせんだんな一ばよりかんばしし今の上いいかで  
そまつなし奉らん我々一めいをなげうたば天下は手  
の内にとつくとおさめ候べし御心やすかれとひそか  
にふれをぞなしにけるかゝのとゑちせんのぐん兵共  
まねかざるにはせあつまるうばつらみていかにおい  
丸とかくてきのきにはかるは手だてなりものゝかす  
にはあらず其此國のとがしふんせいはきんしゆ丸御

いとこよも一身にいなとは申し國大名二三十人ひ  
づをおさへてたのむべしやたの八女此うはつら二人  
打こへてひそかにたのみかへらんと申さるゝ鬼丸聞  
ていやとよ母上かゝる大事をかたらせ申いなといへ  
んせば事の大事出きなんこなたにまねきおさへて四  
はんのなさせむりに一身となし申さんはやよをいせ  
よ者共よとよろいものゝく取そろへやのねをみがき  
ほりさらへしのびにやういなしにけるかのおに丸八  
龍が有様あつはれかうの兵のやとかんせぬものこそ  
なかりけり

## 二たんめ

其後立花のかうさなだひめは思ひの物のぐし  
て上にはしろきほろぎを打はをり其名をゑたるゆふ  
力にておに丸を召れやくだくかたくあいきはめ一門  
の其内いさゝないだん申へき事有とこまゝと書し  
たゝめこばやの七郎に相わたしかゝのとゑちせんゑ  
つ中をしのびやかにふれにける立ばなのにかうはと  
うやすのみだひ御いせひつよければ一もんいつけひ

ろくして我もくとはせあつまり一ばんにかゝの國にとがしのぶんせいはやしの左衛門いのうへはんぐわんのとに土田の八郎石ぐろ宮さきおのく御所に入たまふやはとのみの鬼丸やだの八龍きんしゆ丸にこがねさねさせその身もくろかはのよろいきてさゆをしゆごし立出るま一門の諸大名ぎやうさめて見る所に鬼丸つつしんで畏此度きんしゆ王父のとかなき由を申ひらき父大臣のかたきをほろぼしくわいけいのちじよくをそゝぎ奉らんとおさな心に存たつ近比そこつに候へ共一家の事に候へばかとうど有てたまはるべし又いなと思召れん御方には少もうらみと存候ましひへんなされ候へとことばすしく申ける時ばつぎに矢ばとのみのうばつらかみを四方にふりみだしひおどしのよろひ五れうかさねくさすりながにぎつくときて六尺八寸の大たち四尺二寸の打がたな十もんしによこたへ一ぢやう斗のてつぼうの三かくにのべたりしをかるく引さけいやと言をはたのむまし一家のはぢは身のはぢなりたのます共みかたにはみなくはゝりたまふべしくどき今の口上やと二王たちに立たりけるさ中の大名小名ふるい

とかくの事は候はすわれく立花の氏をけがしいかでいへん候べしともかくもにかうの仰次第とぞ申ける其時立花のかうゆんでめてに強力の女引ぐししらへの長刀取もたせ其身むらさきすそごのきせながにくれないのはかまながくふみしたき金のざいひさけつ上だんになをらるゝさなたひめはこがねのよろひにかうばい色のうちはをり同くれないのはかまいろはさくらうすやうにゑんゆういんの御ざいの時日本ひじんのそろへし時しなの國さなだの官じやいゑよしのひめ君にて大力の上郎とみかどへ三人のかたちにならまれ出たまひし大じん君よりたまはり正とうとひよくれんにましませしがいつしかあかぬわかれとなりたまひけるがひすいのかんざしたをやかにしほうにさつとふりみたき御一門とは存れ共御げんざんははしめなり此度きんしゆ王がうしろみとて御身かたあらんよし身にあまりくわぶんなりそれれんばんなさせ申せと有畏て候とやだの八女こざくらおどしのよろひにうすむらさき打はをりすそをながくひかせつゝ大たち十もんしによこたへとがしのまへになをしけるうばつらみてやあ方

方今がいのぶのかためなりれんばなすべきかいや  
とは更にいわせぬを御らんのことく此女そつとよば  
んにかはりなまくだき事がきらいにて見るきくもい  
やなればよくしあん候へとあいそうなげに申け  
る大名小名いはひに及はす次第しにおしつゝめ戸  
田の五郎にまはりける此五郎らいくわうとたじなく  
いゝかはすなかなればしあんがほに見にける八女是  
をさとり何とやらん此とのほむつまじき有様かない  
やと思わばそれ迄よ今二三人におしつゝまりしあん  
がほはなに事ぞうけたまはらんとつめかくる土田石  
くろみやさきはたとへ此まゝしするともしはんかな  
らすおすへからすと申合有けるがひぎ立なをしされ  
ははん行をなし申度候へ共われしはげんしのおん  
ふかく今身方にいまる事ぶしの道をちかへむとどう  
じはん行して敵たへんな道ならす御めん候へ御身方  
にまいらす共せんぞかたき打なれはいへん申に候は  
すと返ごんふつゝかげにぞかうへりけりにこう聞て  
おゝよくこそあれ八女さのみつよくみせつけそあれ  
こときのおく兵者身かたになしてゑきもなしはやは  
ややかたをいで命をたすかり候へや御一身門のはぢ

をだにはじと思わぬせは人はよそのみかたになりた  
まへはやし立さり候へとはつたとにらみのたまへ  
は石ぐろ宮ざきすこゝとさしきを立出る所をうば  
つら道の中に立ふさがり汝が様成おくひやう者此道  
はけがれなりあとへゆけとにらみつくる三人の者共  
跡へかへりいでんとすれはおに丸八りやう太刀にて  
をかけにらみつければ中にほうまいなしにける八女  
みてあゝめんどろ成うろたへ人大事のざしきにやう  
なくてなんぞやゑぼしひたゝれは中し見にくしと  
三人のゑぼしを取てなげすて命おしくははやくか  
へれとゑんよりしたになげおとす土田石くろ宮ざき  
はいきたるこゝちはなかりけりされ共ようしに  
しのび出ためいきをほつと付三人めとめを見合あゝ  
あやうきめにはあふたりや都へはやくうつたへんと  
駒引よせ打のつてやかたしにけ歸るそれよりも  
にこうはつがうそのせい八千よき軍のかど出に石く  
ろの城せめつふさんやばとみのおに丸やたの入りや  
う大將にて寛弘元年三月三日にかゝの國にはたをあ  
げ石くろみんぶ安村が城におしよせ時をどつとぞ上  
にける安村大にどうてんしてうらの山よりおち行を

やばとみのうばつらごぢんにまはり有けるが石ぐろ  
を見るよりもかたきをすてゝいづくへたこくましま  
すぞひらに／＼とよばはればみんぶ馬にふち打てい  
つさんにのり出すやだの八女は是をみてあゝきたな  
しや石ぐろあますましとかけあをり馬のたつなかい

くり一文しにのり出すみんぶつよくのりかけられ馬  
をかしこにのりすてゝと有岩あなにくゝり入八女み  
てきたなしや石ぐろ殿御身をつよくおいかけしも命  
取んためならず水から御へんをたのみ物申す方あれ  
は是迄はおい來りひらに立出候へとこま／＼とのた  
まへは石ぐろふるい／＼女郎の事なればさのみ荒は  
なしたまわしなにやうばし候とおつ／＼あなよりは  
い出る八女につ事わらい御身とわれかだんかうなり  
さのみ心な置たまいそよちかへより給へと云石ぐろ  
今は打くつろぎちか／＼と寄所をあへなく取てふせ  
御へんにむしんは力けすぐれ候へ共ねぢくびといへ  
る事今はしめて候へはきるゝものかきれざるかく  
びをからんためなりとうしろをまへゑねぢまはす石  
ぐろこへをたかくあげなさけなし女朗たすけてたべ  
となげきける八女はけいかうだになすならば命はそ

なたの者なりとふつつとねぢ切かしこにすてそれよ  
り土田宮さきの城その外七か所せめおとし白山に引  
かへすかのやだの八女がゆう力あつはれめいよの女  
やとはめぬものこそなかりけり

### 三たんめ

其後此事都にかくれなくらい光みかどにさんだい有  
立花のにかう正とうが一るいぎやく心の思ひ立ろう  
城の由せ上に申あへ候なりいか様すぢなき事はさた  
有まし國／＼の諸大名きんに召れじつぶをたゞさ  
るべしとうつたへたまう所に土田の五郎が方よりは  
や打を以ごん上す立花の金しゆ丸かゝのとゑちせん  
ゑつ中をあいなびけはたを上る所に我／＼かけ合ふ  
せぐとすれ共かれはたせいふせぐとするにかなはず  
めんほくなくせめおとされるろうの身と罷成候天下  
の大事たるべしさつそくうつてをむけさせたまふべ  
しと申もはてぬにゑちこの國の佳人わたべのみんな  
はやくにか方よりはや打を以そうしける御門大きに  
おどろかせたまひらくわうはからへとのりんげん

なり頼光つつしんでおうけを申やかたにかへりたまひて四天王平井のほせうを召れ軍ひやうでうまします所に金時すへ竹兩人罷出我々打てを蒙らんと申上る頼光しばらく御しあん有うすいの定光に三千よきを相そへられ引田の判官時かぬ國のあんないかうふりていそぎ御前を罷立定光いくさ大將たまはりたへ立花のにかうはんくわいがぶゆうをかねこんかうりきちにまさる共ぢたいなまぬるき女原手にたつ程は候まし急一々に搦取立歸候へしと先ぢんは三月十五日の午のこくに都を積てかゝの國へそおしよするぢぢんはすへ竹公時兩人大和河内の官ぐん木村かしはき高やすねのび村岡さきとし同十八日たつのこくに都を出次第／＼によせにける此事なをもかくれ無やばとみの鬼丸此由をつたへ聞立花のにかうにまいり都よりの官ぐんさつそくせめ上るよし承本より望所に御ぎ候我うはつら二人なをいのうらに人じゆをめしつれつかれはてたる官ぐんを一あてあてゝたゝかい都におつかへし申さん此ぎいかにと申けるにかう聞召とかく御へんがしんいにはかるべしと立花のいへのうすくれなるのふきながし空ふくかせになび

かして白山の城を出なをいのうらにぢん取てよせくる敵を今や／＼と待にける是はさて置都せいよを日についてうつ程にゑちせんの國にきこへたるなをいのうらに付にける兩ぢん互にすはやかたきと見るよりもゑびらやなぐいたゝきたて兩方一度に時のこへをぞ上にけるよせてのぢんよりむしや一きこま一ぢんにのり出し仰かたしけなくも十せんのものよくによつて引田の判官ときかぬせんぢんと云國のあんないかうむり只今爰にをしよするたかいにせうぶぢんでうに心しつかにたゝかふべし敵のけしきはいかにたからに呼はりける其時九尺ゆたかのむしやこ山のごとくおどり出事もおろかや立花もろへ公の御時より代々つたへきたるきんしゆ王のこうけんによばとみのうばつら同その子に鬼丸とはわが事なり都方の官ぐんせんぢんと有からははな／＼しく軍して敵身方の名をあけんかゝれ／＼とげちをなすいさみにいさむ都せいきつさきをならべつゝ兩ぢんたがいに入みだれ軍は花をもらしけるかゝる所によせてのぢんよりむしや二き一ようにつかけ出たゝ今爰元にすすみ出たる者は大和の國の住人かしは木小藤太宗正

かく申某は河内の國住人高やす八郎とはかねても聞  
及らந்தかいに太刀のかねをためしはな／＼しく軍  
せんかけよ／＼とよばわつてまつた立花かたよりむ  
しや二き一もんしにかけ合かく申われ／＼ゑちせん  
の國の住人あまの源内やすかげしのさき十郎高のり  
とはわが事なりたかいにせうぶをきはふる本よりぶ  
しのならい都方の御くびをたまはりくんかうにあづ  
からんと兩方たがいになたりあいおつつまくつた  
たかいけるたかやすめいよの太刀じゆつにて天野源  
内かくび打おとししのざきかしはぎとしのぎをけづ  
る所をあへなく取てをしふするかしはぎみてこはい  
かに高やす兩方せうぶを見合せすが頼てはかくな  
すずすは八まんあまさしと高やすがたぶさを取下成  
しのざきそのひまに高やすを二かたなさしとをしよ  
はる所を心ねかへし柏木を取てふせうつればかはる  
世の中やたゝ今わがくびをあらそひてとらるゝくび  
にりをそへ二つ取はま事に時の仕合なりと柏木が首  
かきおとし二つ引さけしづ／＼とひいて入よせての  
ちんより引田の判官こま一ちんにのり出ししのざき  
をゆんでにあいつけてうどうてばふたつに切はりけ

りやばとみのうばつら此由を見るよりあますましと  
てつほう引ざけかけ合さん／＼にかけむかふ官ぐん  
をさんのみだいてなぎたをす引田此由を見るよりも  
きやつはなにあふ大力なりよも馬上に合かけたてば  
大力とはいわすましと太刀引そばめこまにたつなを  
かいくられ一もんしにのりよするうばつらみてくわ  
んたいなりよせてのせい馬上のふれいゆるさしと  
馬共にかいつかみはるかのかたに／＼とつてなげさも候  
はんと二わう立にたちぬれは官ぐんすゝみかねてみ  
へにける定光みてあますましと打てかゝるうばつら  
から／＼と打わらい人もおゝきになんし一人かゝる  
はくせ者かないて／＼てなみを見すべしおしならべ  
て引くみしがうはつらは事を事共せず定光かたてにて  
さし上念佛申せ官ぐんと十間斗人つぶてにどうと打  
定光ゑたるかるわざにて中にて二三とくるり／＼と  
とびかへりさてもめいよのゆふ力かなさるにても汝  
人間にてはよもあらじ此定光をかくなさん者日本に  
覺へなしさてもあやうきおのこかな汝今はうぶの神  
のよけ成ぞはやくにけてかへるべし又ものみせん子  
共とてつでうをふるいきをいはこんごう力しと申共

是にはいかでまさるべし定光みて先此ぢん引しりぞ  
けちりやくを以討べしとぢんをさつと引取けるうば  
つらみてさもそふづ／＼と兩ぢん互に引とつてか  
の國に引入るゝかのうばつらがはたらきあつはれめ  
いよの女やとほめぬものこそなかりけり

#### 四たんめ

其後ぢんにつゞく金時すへ竹は先ぢんの定光が方  
よりないつうを以聞けるはかたきてごはく聞よりも  
きん時いかつてたとへはんくわいかわたりきてけん  
のふらし戦かふ共いか程の事かあらんわれせんぢん  
に入かはらんと二千よき二てにわけ一きを引つれご  
ぢんにつゞけすへ竹とむほうやぶりにかゝの國に取  
かけしら山の城をふたへみへにおつ取まき時をどつ  
とぞ上にける城の内よりやたの八りやう矢くらに上  
りめつらしや都せいよろひものゝく花やかにかいこ  
の出立見事なりよせての大將のけ名を慥に承らんと  
よばはつたり其時金時こま一ぢんにのり出しくわん  
たいなるおのれ原王位をそむきてうてきと成身にて

のちのなげきに今のかうげんくらへてみせんかけ合  
てせうぶをせよけみやうを名のりきかせんと大おん  
によばはりたり八りやう矢くらの上にてから／＼と  
打わらいせんなきあくこんなさんよりこなたへちか  
くせめよれと女むしや花やかに三十き程出立てあふ  
ぎをひろけひらり／＼とまねきけるきん時みしかき  
くせなればなまぬるき女原あれけちらせとぞいふり  
上せめよらんとする所をすへ竹おさへてあゝそこつ  
なり金時いか様にあのへいは敵をちかよせかけてき  
つておとすつりへいなり色よきゆふくんそなへ置か  
たきをあな取てだてなりひらにむやくととゝめける  
公時みてたとへ石をつりてひかゆる共いつ迄時をう  
つしなんかゝれとさいふれば公時が一千よき一もん  
じにのり上る八りやうみて御太儀や敵のせいさらば  
いとまを取せんとあいづのつりへい一どにきつてお  
とせは先ぢんにかけよせて一ばんのりとなのりける  
三百よきは一どにわつとくつれおきへいの下にうつ  
まれけるきん時大きにいかりをなし一そくも引へか  
らずせめ入／＼身方のせい人はくわんらい土より出  
つちにかへるはならないなり君のために命をすつるは

日比さいしのはごむおんをくりしねばかたきもいさ  
しらすといのしゝむしやにのりかけ一のへいをのつ  
とり二の門外に取かくるまつたかたきの方より矢ば  
とみのおに丸やくらの上に立上りけふの軍の大將四  
天王の其内坂田殿と承るはるゝの御しんらうにゆ  
うくんにまいひとつきよくさすべし一かなてけんぶ  
つなしたまへとよばはりけるさん時いかつてにくき  
敵のふるまひかなわけかけ入てほんまふをたつせん  
とはこ引さげかけ出るすへ竹定光おしとめふかく  
なりきん時御へんなさ程ふあん人とはゆめゝしら  
ず敵は御へんのきをはかりしゆゝのてぬるきてた  
てをなしこなたをあな取しろぎはにせめよせさせ右  
の手立のこくとねつたうをわかしかくるか大石をお  
とさんか二つの内のてたてなりさ有に御へんわがま  
またんきも事による身方一きうたるればかたき千ぎ  
のつよみなりむねをさすりめをふさきしばし内待  
たまへなにとぞかたきをおびき出してつめのせうぶ  
になすべし其時は御へんが心にまかすへし心なが  
にひかへたまへきんとときと定光すへ竹せいすればき  
んとき力なくはがみをなしてひかへける鬼丸わらつ

てなにとだんかうきはまり候や四天王はきゝしより  
おくれたりかけよゝとよばはりけるすへたけ聞て  
おゝをもしろきゆふくんやそのてたにはよもあらし  
門のひらいててつめのせうぶ仕れ四天王がてなみは  
なはなしきくさせんかけてみよとよばはりける  
やたの八りやう木戸をひらきてせい五十き斗相ぐし  
まつしくらについて出すへ竹がくん兵一千よきにわ  
たりあいさんゝにたゝかいけるいくさ中はの事な  
るにむしや一きひおどしのよろひに五まいけのかぶ  
とをきてくろきこまに白くらをかさせ左右のあぶみを  
けはなつて大長刀をちらしつゝゆんでにあい付めて  
によせむかふものゝまつかふにくる者のこしのつ  
がい大ちをめぐくるま切から竹はりといふものに  
さんのみだいてかけちらす金時すへ竹きつとみてあ  
ますましととびかゝり二人ながら押ならへひつくん  
だ本よりやだはゆふ力にてこんがう力をいたしつゝ  
ゑいやゝとくみあいける公時力やまさりけんやだ  
の八りやうをくみふせ首かきおとし立あがればすへ  
竹はと有小石にけしとんでやだ八女がしたにくみふ  
せられ今はかうよとみへにける所にきん時とびかゝ

り八女があげまきつかんでのつけにとつて引倒すすへ竹上にのりかゝりかぶと取てみてあれはいつくしき女なりきん時みて是はいかにすへたけ女むしやにて有けるはさすがなをへし我／＼か女を二人にてうつたりとさたあらんなむねんなり命助け御へんのふさいとなしたまへにとつことわらいさゆうにひつたて引て入城中より鬼丸うばつら是をみてすはやた兄弟ぶん取するはあまさしと馬引よせふちのつて三千よきのむらかる中にうつて入かいこひいきといふものにひつし／＼と打つぶすきん時みてあますましとかけよるを定光おさへきやつはやばとみのうばつらとてそのなをゑたる大力たやすくよつてかけらるゝなとをやにいとれととゝめけるきんときみてこととしやいか程の事あ／＼んやか／＼れ／＼と云すてゝをしならべてひつくんだうばつらみてあゝおのことてやさしさよなんしが様なることをとこはとをも甘もかいつかみて玉になしてあそぶそと上おびをかいつかみあへなく取てなげ出す金時こはむねんとかけよればものにこりぬくせものかな城のみやけになさんと十四五間中に引たてはしりけるすへ竹定光かけ合

金時をとられじと三人おしならべむんずとくむうばつらわらつて一人とこそ思ひしに三人つれて行とかやいざまいらん人々と三人をいつ所にむんずとだきこめて木戸をひらけとよばはりけるすへ竹今はかなわしと身かたはなきかとよばわれば三千よきのくん兵おめいてついていらんとすうばつら今はかなはずして三人をつきはなし大てをひろげ馬人にきらいなくあたるをさいわるに取てねぢくび人つふて三千よきのぐん兵をかしこのつまり爰のたになん所／＼をおいをとしわづか千ぎ斗に打なしける都かたのくわんぐん此いきおひにおそれしのび／＼におち行てきん時すへたけ定光い上五十き斗になりけるきんときすへ竹定みつはかくては中／＼かなふまし先此ぢんやめて引やとて軍をやめてひいて入かの者共が有様にか／＼しくぞみへにける此うばつらがゆふりきをほめぬものこそなかりけり

## 五たんめ

其後都にはてうてき大きにはこり四天王の者共さん

さん手取軍におよぶよしはやうちを以ごん上すらい  
くわう事なんぎに思召御馬むけらるべきやと上い有  
わたなべ承りま事にれきくををとらるゝだん尤に  
て御ざ候さしも立花のとうやすはふぢ原のすみとも  
を打てくん法第一の人にてにこうは心ゆうにしてけ  
んぞくをあまたもつ矢ばとみの鬼とみてふゆうす  
くれ大力の者にて御さ候がちやくし鬼丸と申はいこ  
くのかんしん長良が一まきをあざむく程のぐんしや  
と承たゝおろそかには中く此城おとさるへき共存  
せず候小てきの大てきとは此度の敵となりいわれは  
わづかの城くわくといへ共その名きこへ有やうがい  
こもり入は千ぎ一きにまさる兵共何とそおに丸を打  
とらは心やすく候べし御ゆたんのていにもてなして  
いとをかたく御守り候べし我しのびはせくだりてた  
てよを以て打取候か若つのつて敵はいくわいせばあ  
れよりいさひこ御上申べしていとにほうせうをの  
こし置たく候へ共敵かう力と承若かけ合におよんで  
は一きを千ぎになし申度事も御ざ候間はりまの守を  
ともない申へしとつつしんで申けるらい光御聞有て  
ともかくもわたなべがむねにまかせめでたくきこく

仕れとほうせうつなに御いとまたまはれば二人御ま  
へを罷立人めをしのぶ事なればあらはれてかなわし  
とつなはものゝくくさつとに引つゝみ重代の太刀を  
竹のつゝにおし入ほうせう二人とみんなのかたち  
にさまをかへやふれかさにきれ衣たびのしやうぞく取  
そへ花の都をしのび出やたけ心の物のふのいさむ心  
を引とめてはなちかねたるあつさ弓てきによはみを見  
すましと思ふ斗のたよりにていさむ心は春こまのい  
そぐとすれど玉ばこのたどりたどろと行道の草のや  
どりに目かずへてあくるあしたの朝ぼらけうつあし  
なみのひまもなくけふもくれぬと入あひのかねもし  
ゆしやうにひききつゝ心ばそさはかぎりなしほうせ  
うつなに打向ひかたきは今にじやくめつのいらくに  
しづみ我々はしよぎやうむ上をさいごしてげきとを  
しづむる四天王敵はあのなみの下打はうしをのさつ  
と引てはかへし水浪をさつゝとけたてつゝ國土  
にはこるあくしゆをは太平樂に打しづめきこくの  
ゑだ花ひらけめでたくかいちんなすべしと互にいさ  
みたわふれてかゝの國にきこへたるあたかのさにと  
付たまふすへ竹定光立出たいめんし右のあらましか

たりけるわたなへ聞てかた／＼の有様いくさのかけ  
引おろかなるべしと不存時の仕合うんのなす所なり  
扱きん時はいづくにわたり候ぞすへ竹聞てきん時は  
けさも御へん御くだりと聞たまひめんほくなくおも  
てむくべき様なしと引こもりふされたりわたなへ聞  
て尤なり去ながら軍にまさしくかつ斗はなき物なり  
うてばうたれかくれはひき時のせうぶにまかする事  
ちじよく共めんほくともたれか申候はんとあいのせ  
うしをさらとあけ公時わたなへくだり候はなどたい  
めんはなしたまはぬそおきあへたまへと申けるきん  
時よう／＼おきなをりめつらしや御兩人かた／＼に  
いきておもてをむくる事去とはめんぼくなき仕合な  
りかけ入打死とは思へ共一つは君のためならず何と  
そ敵をしたがへ二たび都に上りなんとかくなからへ  
候なりわたなへの思召もはつかしやとあふぎをかほ  
にさしかさしいこはものもいわざりけりわたなへき  
いてきん時がてにあまる敵ならはよく／＼かうの者  
と見へたりといへば定光聞てされはつな聞たまへ矢  
ばとみのうばつらとて九尺ゆたかの女有かく申それ  
がしくみはくんで候へしが七八間もん取かへし人

つふてにうたれ金時もすへ竹もあやうくひんずの命  
をのがれ二度たいめん申なりとかたりけるほうせう  
わたなへ聞てさては敵はゆふ力けつきのときなりこ  
なたよりちりやくにて打とらんさ有けつきのやつば  
らをはおとしあなをしゆつらいてその内におとし入  
上よりばんしやくをなげ入たやすくうち取かどくを  
以うしなふかかけあいのせうぶなす事なかれとよの  
まに人ぶをめしあつめ軍のてたてをなしにけるかの  
わたなへがちりやく長良かんしんたいかうほうしん  
のくはてきと申共是にはいかでまさるべしわたなへ  
はくろかはの大よろい三兩かさねざつくときて敵の  
城くわくまぢかくのりよせて城のやうがいのみせ  
んとこたかき所にのり上り一々にみはたしけるゆん  
ではそうかいまん／＼と海にてばりて矢くら七つぞ  
上にけるめてはふかたあらやまこものさは／＼とか  
せになびきて水流そこなめらかにこまよせなん様  
もなくうしろはいんざんくんしよをたがゑすかまへ  
ける矢さまついち馬だし物みのまどよこあいよりい  
とらんと矢さきをそろへ待かけたりされ共爰によは  
み有此城に水をこうと打みへてやくら／＼のその上

かすはこにかめをすへて有けるは天水をうけて水つかうと見たはひがめかわたなべ爰にのつ取てたて有うしろの山よりおつるたきを切おとさばかたきはすなはち水にはなれしうをとひとしくかう力がまんも水にかつてよはらん敵は此わたなべかむねの内にとつくと取ておさめたりとものみのあんないくもりなしとそれよりたつるもんく馬しるし家のはたをぞみたりける先一ばんにとかしかはたと打みへてあさきにこんの水くるま浪の内よりあらはしてばせうのはには半月有くとうつたる大馬印と見へにけるそれより北に白きはたにくろくきつかうわちがへ雪おれ竹三本からかさ三つもつかう三がい松のはたのてはゑちせんのおまのしのさきほりへ本てうの家

のもん又こなたの山かげにくれないのふきながしきんのばれんと打みへててる目にかいやきみへたるは立花の金しゆ王が馬印おなじくれないのはたす百本なみあらせて立にけるそれ八町程へたゝりてくろき白きのはたの有是こそとの住人石くろ宮ざき土田の一とう三本しないにたうちはつたのからくさ竹にとらくもにまいたる龍のもん二つ引きやう三

つ引きやうあふぎながしきくながしさくら川にたつた川はなともみちを付させて月をみがくはとくさのもん家々國くつたはり申まくのもんにはたのもんあふぎやうくしの有様や今に此わたなべかむねの中より白うんのきへしごとくになすへしと城のあんない見すまして本ちに引かへすかのわたなべか有様あつはれめいよの兵とかんせぬ者こそなかりけれ

## 六たんめ

其後四天王ひとりむしや思ひくものくしてはいくんのてせいかりあつめ五百よきのちやくとうつけわたなべかちやくにまかせてきの城ちかくぞひかへける城の内よりやばとみの鬼丸此山を見るよりもすはかたきのしよりをつくる事ながちんをはつて城をひやうらうつめになさんのたくみ此てきをおつはらへととかしのぶんぞい二百よきをいんそつしもんしにうつてかゝるわたなへいさんでたゝかいしがかなはぬてにもてなしさつとひいてかへしけるぶ

んせいきをはかゝつておいうちせんと二百よきいさ  
みすゝんておいかけしがいきも残らすちりやくのあ  
なにどうとおつるわたなべ下知して見たまひたるか  
人々一きものこさず打ころせときん時すへたけ定光  
岩ばんじやくをなげ入みちんとなしてうしないける  
鬼丸うばつら怒りをなしあゝしなしたる事かないで  
物みせんとてつほう引さけむ二むさんにうつてかゝ  
るほうせうものゝしやとわたり合爰をせんとゝた  
たかいけるうばつらみていでもの見せんいさくまん  
とて大でをひろけおいめぐるわたなべみてほうせう  
くむな太刀わざにせうぶせよ敵はがうてき此ぢんひ  
けとたけたばぢんやをふのすてゝ仰をも見ずしてに  
け行けるうばつらおに丸是をみて日本にてあら人神  
といわるゝ四天王聞と見しとはちがいつゝにげあし  
のたつしやさよ見ればしゆゑんをなしぬるかていた  
く我にせめ立られ大つゝたいへいすておきてにげし  
はいさぎよかりける人のしゆゑんをわが酒もりとな  
すへきはと城なる身かたを打まねきかめにひさくを  
ざんふと入いかに身方の人ゝよ此比うちのもふき  
をはれ一つのんでさすそとてひつくみゝほしける

がくつきやうのむしや日本一のおに丸をはしめ大ど  
くの酒なれはなにかはもつてたまるべき天かしたへ  
かゑしつ大地はてんにくるりゝゝとめぐりつゝむね  
んやかたきにたばかられどくしゆのんたる口おしや  
とちをはいてしするむしや八百よきぞふしにける  
うはつらは大とくをも事共せずゆいかいなきおに丸  
やとたふさを取て引たてしがそのかいなくみへけれ  
はあらむさんなり本らいくうにかへりしはくやむに  
かへはなきものと上おび取てついちのうちになげ入  
れは矢くらのとだいに打あてられみぢんになりてう  
せにけりうばつらおに丸をうたせつゝ命をしむに  
あらばこそかたきのはたのてみへぬればのも山もか  
へり見すかけみだしあたりによるをさいわひにめに  
さへぎるをばつかけゝひつつかみ取てねじくび人  
つぶて馬も人もきらいなくみぢんの如くなすふせい  
虎が風にうそをふきたけつて龍をにらみつけ二つの  
なかさけられていかるふせいもかくやらんとおもて  
をむくる者もなしうばつら今は手にたつ敵あらざれ  
ばてつほう打かづきむさんやおに丸はわれよりさき  
にはてぬるよなむあみだ佛みだ佛あはれかたきの五

百も六百もかゝれかしめいどるときにうちひしぎたむけんものをとひとりつぶやきひいて入わたなべきん時をまねきなにと坂田定光すへ竹みたまへ人はつよき斗にてうたるゝものに更になしおに丸をだに打とればもはや此城ごとく城したりあのみへたる山におくりたきを切ておとし水ほしとなすべきはほうせうすへ竹いそがれよ城の内のくん兵はわれとめつしうせぬべしはやくと申けるすへ竹ほうせう心へたりとうしろの山にしたいあがり水といを切おとせはたにゝたきはおちにける城中のくん兵共わたなへかけいりやくにて水にはなれしうをのごとく水にかつへ馬を引よせさしころしながるゝちをぞのみにけるうばつらりき女にかうのまへにまへりかくては此城たもちがたく御ざ候かたき水の道をしつて切ておとせば力なし此しみをすておきのとの國に引しりぞきあれにやうがいかにため候へし御やういあれと申けるにこう聞しめされま事につまのとうやす此しろのおさとは水にて成へしとあさゆふのたまひしはこゝならんいざやうつたてきんしゆ王さなだひめもろ共にすゝいの力女やばとみのうばつらはくろき馬のた

くましきにはこ長刀をからみ付しうゝ五きのり出し千き斗にて取かこみよこさまのりとをるわたなべ身方にげしをなしさいふりあげかゝれゝといさむれは坂田うらべうすい平井をさきとして一もんしにのりかくるうばつらみてすいさんなりおのれ原そこを引なと打てかゝりきん時がのつたる馬のまへあしづんどはらいのりとをりすへ竹をみぢんになれと打所をとびちがへおりたてば馬はらつくわとなりにけりにこうは下ぢしてかゝれゝとのたまへば千き五百きかけ合みだれいくさのぶん取といのちをすてゝたゝかひけるうばつらがうつばうにあたりてしするぐんびやうはいくらといゑるかすしらずきんときすへ竹馬にはなれかち立になつて爰をせんとゝたゝかいけるがりき女わたり合火はなをちらしたゝかいけるきんとき太刀つばもとより打おられすへ竹のおかにふかでおいすてにあやうく見へにけるきん時すきなくとんで入りき女をとつておしふせゝびかきおとし立あがりすへたけをかたにひつかけひいて入わたなべほうせうさだみつは大將にこう金しゆ王を打とらんとせめよりゝたゝかいけるにこうみていて

いててなみを見すべしと定光をかいつかみひさのしたにひつしいてくびをとらんとする所をばほうせうくびをたまはつて太刀つらぬきよばはれば定みつさなだひめをとつてふせ御くびをかきおとし立上るわたなへすかさす金しゆ王をからめ取うばつらくとはしらでかたき西になびけひがしにとつておいまわしさんぐにたゝかいしが大將をうつたりとよばはるこへをきくよりも今はなにをかこすへしとむかふによるをさいわゐにかたきのうつをも事共せずやばとみのうばつらがけふをかぎりのしにくるいかゝれかゝれとよばはつてさんぐに打破れは一きちかづくものはなしきんときはうばつらを打とらんとつけもはなれずかけめぐりうしろ様にむすくとくむうばつらものゝしやととつてふせくびねちきらんとする所にわたなべほうせうかけよするを三人共におつふせふみつぶさんとする所にさたみつすゑ竹かけよするうばつらみてものゝしやとすへ竹をかいつかみ七八間とつてなくればふかておいぬ心はやたけにはやれども大ちからになげられて五たいすくんでかなはずさだみつなむ八まんとときせいしてやばとみか

右のうでをしつかと取ふれ共きれ共爰を大事と取ふせけるうばつらあゝ身かたはなきかとよばはれとさしもめいのくせもの共さうないちかづく事もなく四方に立わかり見物する所に互にこんがう力にてゑいやゑいやとねちあいける折ふし主はたれ共しろきはたに三つほしに一もんしをつけたるむしやせいは六尺ゆたかなる大男しらひげそらになでとぶがことくにかけ來りうばつらを何の手もなくかいつかみ取て引よせおしふせくびとれやといふわたなべ公時とびおきてあへなくくびを打おとすみればわたなべのはや國なりゑちごの國よりたゝ今こゝにきたる事天のなす所なりめでたしゝ若とのばらとわたなべにたいめんしてゑちごの國へ歸ける四天王の者共は金しゆ王を引立て都をさしてかいぢんす天下太平におさめけるすへはんじやうめてたし共中ゝ申斗はなかりけり

右者太夫直之正本也

いろこかたや 新板

## 京今宮御本地

### 初段

さて其後つらく世のくわんらくをかんするにせい有てぎ有ものは二たび身のかうたいをはかりいたつてせいなきときんば身をいたつらくちぬとかや本てうのみかどをば仁王六十六代一でうのゐんと申奉る花山のいんの御いとこみかど御出家の後御位につかせたまひける然に此君わかの道に心をうつさせたまひ御きさきは上東門ゐん御だうのくわんばく道ながの御むすめせいせうなごんあかそめゑもんその外いせの太夫いづみしきぶ小式部とて天下めいよの歌人にて日や朝ぼの御ゑいか公卿わかにかむりをかたふけむねをくだきはなにゑいじ月によそへ四きおりおりの歌のくわひ天下一ようにおさまりてぶげい弓をうちおさめ太平らくにおさまりけるその比のぶ將は源平兩わにわかつてげんしは多田のまん中公にてわたらせたまひしがほつたい有てまんけいとかう

し御ちやくしせつつの守らい光東三十三が國のふ將御いへのじつけんわたなべのつな坂たのきん時うらべのすへたけうすいの定光とて四天王とかうし日本一の兵にてかたをならぶるものもなし又平けはたいらのさつまの守かねもりとて西三十三が國をあひ守り君をうやまひ奉るかの人々の御いせひなびかぬくさ本はなかりけりその比はりまひせんの大將をはものゝべだん正のちう道かせとてちかたがすへのながれをくみあゝ第一のゑせものにて神づうま道の兵なり然るにせんていかうきでんの女御の御くけたれは日本しやめんをかうむりあまつさへ兩國をしよちしてわがまゝぶ道にくらしおにがしまよりけ道をめしよせおさなき時よりのなしみとて日やひざもとさらすのくせげ道をんき、しやう王きとてそのたけ九尺あまりかみは四方にはへわかりつのはさゆうにうしとひとしくみへにける其外こま鳥源八うしだに山のは九八てたれの二郎あしかは小六さまなのたもんいへつねとて山／＼たに／＼のあふれものをめしあつめくわぶんにれいおんゑさせつゝゑぼしひたゝれきかさね道かせがあくを尤とどうし人のなげきも

かへり見すくわへんまんしん日にましてちやうじほ  
 ころぞうたてけれものゝへの道かせ二人の外道其外  
 かしんまねきあつめけふのすいめんさまさんときよ  
 くろくに打かゝりよも山の物かたりくわん／＼と打  
 聞あゝめんどくなるしやばせかいなんぞや小國わつ  
 か二か國あんどしてよに有がほのむねんさよなまな  
 か國の廿か國も卅か國も所領せんこそ人共更におも  
 はれんあまつさへたいら源なととて同じくけのな  
 がれにてわれ藤原のばつよう、おきかせがちやくし  
 としてうちもくらしいもしやつはらにおとるべきにあ  
 らずさん／＼に打ちらしせんぞのとふらい軍はしむ  
 へしそのむねよつきたもてなんし原とわがまゝにそ  
 はんへりけるさまなのたもん家つねする／＼と罷出  
 げに御所存のだんおしはかり奉るされ共あくぎやく  
 に身をくだき國のさはぎをなす時は天のせめちかく  
 して昔よりてうてきと成し者かす有といへ共御せん  
 ぞちかたふちはらのすみ友御いせひばくたいたりと  
 いへ共御身をうしなひたまふされはわが君も御いせ  
 ひばくたいにて日本にたれ有へし共存せず候へ共然  
 るに源のらい光其外四天王そのほまれよに聞へたく

いまれなるくせものなり若しそんしてはあしかりな  
 んひらさら思召留まらせ候へしと言ばをつくしかん  
 げんす道かせ聞てへんしよくかはりやあすいさんな  
 りさまなせんぞのちかたすみ友はわかごとくき神の  
 つかはしむるといへ共その比ぶこつにしてぐんのし  
 らすむほうやぶりにつよきを一すちにかけ引をしら  
 ざるうへおのれとかばねをめつしたり大事のむほん  
 のさまたけはなに事ぞ一めいをまとにかく、天下を  
 望はふしのほう又らい光がけんぞく四天王とてかし  
 つけば我も二人の外道その外名有郎等有汝は心おく  
 しかんげんだてはむやくなり罷立とぞいかりける  
 たもん少もはゝからず御上意にて候共今世の有様と  
 きめきてらいくわうにかしつき候へばじせつとうか  
 がいそのうへ名有諸らう人又はゆふ力はやわざのく  
 せものをしのひ／＼あいまねき御身かた十ぶんたる  
 時うつたゝせたまふべし此ぎいがにとくりかへしと  
 どめける道かせしばらくしあんして尤なりたもん名  
 有きりやうのものあらばいち／＼めしかゝゆべしそ  
 れぞれと悦びて色をなす所にこまどり源八こした  
 にすゝみ出申様しよしやてらのかくとうほうせうと

てたいのまん中がおいらい光にいとこなり然るにみつなかのかんきをゑはんぞくのかたちにて今がくもんだうに候へ共その心たくましく大力のくせ物なりかれを御めしかへかしんとなさせたまふへしいまだら光とはたいめんなくまん中を打うらみ此年月罷有ひそかにたのませたまふへしとはかりなくうつたへける道かせ聞てそのくせものこそぞみなればはや／＼召してまいれしよりやうは望にとらすべしはや／＼と申けるこまとり源八承りはりまのしよしやに急きける是はさて置平井のほうせうかくどうはまん中のかんきをゑはりまのしよしやにすみけるが郎等を近づけ父ひらの經やうに出家となれとはのたまへ共なが／＼ほつしにならん事と思へば／＼むねん然にまん中はわれがつみをはゆるすまじ然にちやくしらい光天下のふ將をかうむるよし都に上りたのまんか又此國にいつ迄もわがまゝらくにくらさんかげんしにやつかへん平けにやおもむかんいかいはせんけんもつと大たちをよこたへしばらくしあんする所にこまどり源八あんないかふて中に入りほうせう立出たいめんして右のあらましかたりけ

るかこう聞てあゝすいさんなることはと思へ共いや道しばしわが心きやつはら心のまゝにたふらさんと思ひさらぬていにてま事に道かせには我を人と思し召御ふちあらんとは近比くわぶんしごくせりされ共我は御存のごとくまんけいがおいとして今らい光のいとこなり國の二かこくや三かこくたまはるとてもなにならず道かせはわつかはりまびせん兩國なりそれをわれにたまはらばだんじやうには所領に事をかゝるべし但我に兩國をさせつゝ此ほうせうを大將とだにあをぎたまわらばふせうながら道かせをけらいとして二か國も所領せんものゝべかことばには此ほうせうがしんなどはそつとくわんたいしごくなり此ぎかへりうつたへよとから／＼と打わらう源八めんほくうしないやあすいさんなるかくとう此はりまのちは道かせが所領なり國中に身をおきてこくしの事をもどくものはおこの者よつくしあんしてへんごんなせぼうずのくびのうせたらんは見にくきものとあいそふなげに申けるほうせう聞てけに汝がいふことく此しよしやに十二才よりがくもんしてはつしにならんと思へ共なんじかやう成くせ者をいけ

ておかんきのどくさにはんぞくにてくらすなりぢよ  
のほつしとはちがふへしいで／＼なんじでしとなさ  
んとかくうき世は夢なれはのちのよをたすかるへし  
又ものゝふのいつそかみをすらんもなまぬるしかた  
びんをすりのこしはんぞくに成たまへとかたびんす  
つてたかてこてにいましめはりまのしよしやのどう  
じゆくはんぞく源八入道とふだをかき太刀をくびに  
からみつけ其身もけんもつともないて都へ上り候な  
り御ゑんあらば又こそめぐりあふべしと源八をつき  
はなし都をさして上りけるかのほうせうがはたらき  
あつはれきらくのくせものとはめぬものこそなかり  
けれ

## 二たんめ

▲其後こまどり源八こしだにはおもひの外におくれ  
を取ほう／＼にてにけかへり道かせにうつたへける  
ものゝべ大きにいかりをなしよもおゝくはへだゝら  
しおつかけてうてと下知をなす山のは九八てだれの  
二郎あをんきしやうげ道四人ものゝぐ取てなげかけ

五十き斗おつかけたり是をはしらでほうせうはけん  
もつ一人供として兩わのほこ取もたせ今はあかしの  
うらに付びんせんかふてのらんとする所におつての  
せいのがすましとこへ／＼によばはりゆんでめてよ  
りおつ取巻かく道みてあふ心へたり定召道かせかも  
のならんはる／＼のかとおくりいわれぬ御ほうしざ  
れ共是迄の見おくりにはうびなふてはかなふましと  
そばなる舟のかないかり七十八斗にてうがちかたき  
をかる／＼とふりまはし是へ／＼とまねきける道か  
せかおつての者さうなくあたりへちかづかずとをや  
にいよとひしめきけるてだれの二郎きつと見てあゝ  
ゆいかいなしめん／＼われくみとめんと太刀ひんぬ  
きうつてかゝるほうせう見て念佛申せかくどう坊が  
いんどうよと怒りふりあげてうどうてばかうべみぢ  
んとなつて失にける山のは九八是をみていさぎよし  
御ぼうそこを引なと平井がうついかりをひらりと  
つしてうど切かくどうにつ事わらいなんちらがへら  
へら太刀に此ほうせうは及ましいて／＼いとま取せ  
んと一もんじにかいつかみまいに引よせ首ふつと  
ねぢ切かたきのぢんへなげ入けるあをんしやう王き

げ道みてあゝじひにんにくの衣はかばねにきたるとも心はおにもかなふましいて／＼つみふかきくせ入道あび大ぢごくへつれゆかんと二人さゆふより取こむるかどうみていざぎやつはらかなない／＼おのれ原おにがしまより出来してみちかせにつかゆると聞及たり我はりまのしよしや寺平井のかく道ほうせうとしてしやかむ二佛のほうをるつうしてあくふかきざい人をさいどするほつしなり近比大事の法なれといで／＼ゆるしゑさせんとれいのいかりをかる／＼と打ふつてむ二む三にうつてかゝるげ道共是を聞あゑ心ふときくせもの共手取にせんとさゆふよりひしひしと取こむるかく道さらぬていにてよつくとれ此ほうせうは手の下にあれ共今にぬけて出べきぞよく取こめよとさらに事共せざりけるげ道共聞いてきながら物思わせんいざゆけゆかんとひけどもうてどもばんじやくに事ならずはたらくけしきはなかりけり外道みて身方はなきかかく道を組とめたりかゝれかゝれとよばわれは甘き斗かけよせて四方八めんに取かこむけんもつ太郎是を太刀ひんぬき打てかゝるかく道みてやあせんなき事をし出してげ道をにがす

本ノマ、

ましそれにてよつくけんぶつせよといふこゑのしたよりあをんせう王きゆんでめてになげすて四五間うへにとび上りなひ／＼しよしやにさるもの有とは聞つらんいて／＼てなみを見すへきと兩はのほこおつ取むらがるなかにわつてむかふものゝまつかうにくる者のほろつけせんだんいたがへしつゝぬきぬちくび人つぶてさん／＼に打ちらしよせてのぐんせいし是をみていや人けんにてはよもあらしいか様かうもく四天王べんさんしてしよしやにすませたまふと覺へたり叶はんひけと跡をも見ずにけかへるかく道ほうせう是はめん／＼ひきやうなりせんなきたびのかど出にむだほねおつたるよしなやとけんもちを引ぐし明石のうらより舟にのり都につけよせんどうとふなばりを枕としてゆたかにふしてこぎいだすかのほうせうがはたらき日本一の兵とかんせぬ者こそなかりけれ

### 三たんめ

其後二人のげ道ものゝべ道かせかへり此よし申なか

なかかく道ほうせうと申くせ物人間とはみへ申さず  
かくてはかなはせたまふましとかく我くか一ぞく  
やくじんげ道をあいまねき御みかたと仕るべし此ぎ  
いかにと申ける道かせきてゑみをふくみそれく  
まねぎしたがへよはやくと申けるあをんげどう、  
せう王き天に向打まねけばいるひいきやうのくせ  
外道うつせんと道かせかまへに現れ出われくはし  
きむてんにすまひなしさいどをさまたけ人みんなや  
ますしゆらにて候かた、今あをんしやう王きつうり  
きしききやうにつうじわれく御身方に参たり然  
に君御はたを上られあをんしやう王き二人てつくわ  
をふらしせめ上らせたまひなば天かは君の御手のし  
たたな心にとつくとおさめさせたまふへしその時は  
われくにげ道の法すへひろく御ゆるされをかうむ  
らん此ぎいなやとことばをそろへ申ける道かせ聞て  
ゑみをふくみよく申たれ此事しあふするものならば  
御ぶんらが望にまかせはかるふべしさてかたくか  
はかり事はいかに其時ふうてんくわつきねつき三方  
に立わかりそもく我々がつう力は今有と見れ共そ  
くぎになくちりにましはりひにくわゝり水にうかん

で浪にのり空をかけりちにおちてふうてんかせをふ  
かすれはくわつきねつきはゑたりあふとすかたをみ  
ちんとあらはして人のひにくにわけ入て五たいはな  
れてしにうせよとくわゑんのいだしなやませはふう  
きはいさんでみなみにまはりなまあたゝかなるかせ  
をふかしむざんやなほんぶのよつ五たいをしつかと  
しめあしもこしもたゝせばこそ此さつすをもつてく  
びをさしつめてのんどのいきのかよひをとめ此さい  
つちはしんきづつうのさいつちなりがまんのとよき  
ばんぶをは二百も三百もくだけてのけと打ふせてし  
んばのゑんつきゆけばそつと五たいをくゞりいでそ  
ばなるばんぶをたちまちに火水になれとなやませば  
たとへ今一天に其名をゑたるつなどのも公時うらべ  
定みつもそくぎにひしと取なやまし五たいはさなが  
ら大とくにゑいふしたることくにてあさかせのあさ  
日にむかふににたるべし御心やすかれとてに取やう  
に申けるあをんきせう王き立むかいさきよしく  
去ながら日本は神國の事なれはしんれいを以いのり  
せばふうてんごたへそれこそのだむ所のるほつし  
がしやだんにのりほんぶくの御へいをばまつさか様

にたて置てこなたもつうをおこなはんあをんき聞て  
尤なり人間さとつてやうじんせばくわつきこたへあ  
あやすきひまなくなやまさばふしたるそのまにと  
をのゆびつめをわけひにくをくゝり入ぬべし四そく  
のつめはひにくのもんあうんのいきにのつとつて五  
たいに入て御ぞうをくみ六ぶをみだし取ころさんし  
やう王きすゝみいでくすりを以かんげんせばねつき  
こたへじやまんくわゑんのひさくを以むねにたもた  
ばくみいたしたいにまはさばこそときやくとな  
してこらしめん三日が内に取つめばいこくのぎばが  
きたりつゝせむるともるともちいばこそやまふは四  
百四病なり日にはちたびよに千たび入かへもみかへ  
みやくのしんかんめいもんの道こだはりさまたけは  
くすりかへつてどくとなり思ひのまゝに候べし道か  
せ大きによるこびてとかくたのむめんゝ先ぶ將を  
なやましうしなふべし三人のやくしん御心やすかれ  
やかて吉そう申べしさらばとてふうてんたちまちさ  
まをかへいざさらばといふかと思へばくわつきねつ  
きはすまんのちやうとあらはれてあくふうにもま  
れつゝくも井かすかにあがりつゝ都のかたへとび行

本ノマ、

はものうかりける次第なり是はさて置爰にふしぎぞ  
出きたり其比年號はゑいろく元年八月三日の事成に  
朝日きた西ひがし三方にあらはれ日のいろくれない  
にひとしくしてくるりゝとまはりける天下の人み  
んふしぎの思ひをなしいかなる事かいできなんとか  
たづをのんでかなしみけるみかどにはけい上うん  
かく兩ぶ將平のかねもり源のらいくわう四天王を召  
ぐしかゝるきたいの天のつげいか様昔よりこうきに  
しるし候べしはかせをめしよせかんがへさせゑいぶ  
ん有べしとそうもん有みかどげにもと思召くわんば  
く道長をもつてあべのせいめいを御てんにめしかん  
がへ申せとりんげん有せいめいつゝしんでおうけを  
申しばらくかんがへしやく取なをし是は天下のわづ  
らい又日りんはいつたい然るに三方に出る事はきた  
いのくせものきんだいゑんゆういん御ざいの時大ゑ  
ん三年いの八月廿四日にし東さるのかたにまん月あ  
らはれ同九月十六日におよへ共月あしなくやみとな  
り天下のわざはひおびたゝし十八日大ぢしんらい  
てんして國をなやます去によつてていけん元年とね  
んがうおくりかへおだやかにおさまりぬされ共大か

せふきおちて此あくふうにやまふをうけ天か一よう  
にわづらはしむる事うたがいなし然るに今御代にあ  
たつて三方のあさひ天下の煩まのまへたりゑいろく  
おくりかへしやうれき元年とまつりかへ候べし其上  
都まのあたりにやくしんきらくして御門をかたふけ  
奉らんと仕るいそきふなをか山にりんがう有て御れ  
うしをはしめやくしんまつり候は天下太平成へし  
と見とをすことくうらなひけるみかどを初兩ぶ將聞  
召いそきふなをか山にみゆき有べしとくぎやう大臣  
はなやかにふなおか山にくわいかう有そのほかたい  
らのかねもり源のらい光おの／＼四天王を御供にて  
道のさいれいにぎやかにさきをはらつてとをらるゝ  
所にふしぎやかせばつとふきおち道しばをまくりた  
て三ぼうの日一おもてにとびつらなりくわゑんと成  
てもへあがれはまつさきのつゆはらい平のかねもり  
ののつたる馬三どいなき身ふるいしていぬいにと  
うとふしにけるかねもり馬ののりかへとつてのらん  
のらんとしたまふが兩がにくらみ大ちにおち遂にむ  
なしく成たまふらい光つな公時定みつすへたけ御車  
をと有木かげにとゝめいか様しよい有へしと天のに

らんで立所につむじかせはつとふきてらい光をまき  
あけんとしたりけるらくわう心へたりとひげ切ぬ  
きもちほらいたまへは手ごたいして大ぢにおつる金  
時すかさすとびかゝつておさへみればひりやうのく  
びのこりけるらくわう御らんしそれしさい有くせ  
ものならんとゑいらんにたつする所にくぎやう大臣  
六るほくめんこと／＼五たいのふらんしていぬい  
にふしまろぶわたなべ太刀ひんぬき諸天に向やあす  
いさんなりおのれ原日本一の四天王御車をとの仕  
その生たいをあらはすべしもつたいなくも十せん  
みかどをさまたけ申事たとへてつへきをふらしさい  
れいをさまたくる共りんげんいかでむなくしてふ  
なをか山にりんがうをやむべし今めにさへぎるもの  
ならばいでものみせんと四人たちぬきそばめひかへ  
たりされ共かせはとゝまらず一おもてにとびつらな  
りし日月しやりんのごとくひかりものとなつて御車  
ちかくめぐりよるつなきん時さだ光すへ竹きつとみ  
てそれこそぞむ所ゑたりやおふととびかゝつて四  
人さほうに立わかり太刀ひんぬき切われはたちまち  
内よりあつき三人あらはれていよ／＼しやうげなす

へしとくも井はるかにあがりける四人のもの共こは  
むねんおのれはらうち有をしるならば思ふまゝに  
なさんものむねんなり去ながら今にくびをうしなは  
んと御車をふなをか山におしむくるかの四天王のは  
たらきあつはれめいよの兵とはめぬものこそなかり  
けり

#### 四たんめ

其後ふなをか山に御車つきしかばくげ大臣御こしを  
しゆごし御まつり事はじまりけるらい光つな公時定  
光すへ竹御供にてせんごをしゆごし奉れば神道には  
せいめい佛道にしやうくう上人しんごんひみつの大  
法ひほうおこなはるせいめいへいはくおつ取日本六  
十餘州の御神くわんじやうおろし奉りくちきつてう  
やまへば三井寺の僧正ゑいざんは天台ざす一ぢきん  
りん五だんの法さんごさいはいくうやまつて申忝  
も日本は神國なり先げかいのちにいたつてはいせは  
しんめい天照太神ないくう外くう百廿まつしやぎお  
んかすが住吉ひよし大明神やはたは八まん大ほさつ

きたのは天まん天神あたごはぢぞう大ぼさつあさま  
にふく一まんこくうぞう天の川のべさい天川しもに  
さがつてはしんくうがあみだなちがひりうごんげん  
たき本がせんじゆくわんおんかうやにこう法大しね  
ごろにかくばつくば大こんげんおたがしらひげ松し  
ま小島ならは七道大からんかゝに白山ゑつ中に立山  
ほうきに大せんあはに入てはてうさうかん四國にこ  
んひらおはりたつたふちうに六しや大明神かしまか  
んどりうきすのみやかうづけにいたつてははるな八  
まんきやうこんげん一の宮か女たいにてめうぎはは  
くうん大てんぐかつらきたかまひらよがは力を合あ  
くれいを千里か外にはらいたまへ忝も十せんのてい  
わうくわんかう有てかぢあればぶつじんきみやうを  
あらはしたまへともみたていのらるゝふしぎやへい  
はくたちまちにまつさか様につつ立てしんごん天た  
いのこまのだんをけやぶりてあつきは四方にとびさ  
りける人々きいの思ひをなしいよゝさかつていの  
りける所にうしとらのかたよりくろくも一つまへさ  
がるうん中にけしたるかたちあらはれけるくび八つ  
のうしにのりそもゝ是は天ちくしきむ天にすまひ

なすやくじんのづい一ばつらつたげどうなりおのれ  
はらが一めいことごとく取つくさんそのためつやく  
じんとあらはれる、今思ひらせんとてつくわをふ  
らしほのを、ふきくもにかけりぢゆうじぎいのほう  
をみせ東にとびにしに行こくうにひぎやうしてじん  
べんいりきをふるまいけるらい光は御らんし引めの  
かぶらや打つがい此弓はようゆうがたもつてはなつ  
めいきうなり請て心みせよとよつ引すばといたまへ  
ばあやまたすうん中にひかへたるやしやつらだつか  
みつけんにつばとたつ夫事のでなればあやまたずろ  
くぢにどうぞおちにけるわたなべすかざす首ちうに  
うちおとしやく神まつり御かど出めでたしと太刀に  
つらぬきさし上るとくもの内のげ道共しだいにかけ  
きゆるがことく行へもしらずうせにけるそれよりも  
せいめいはやく神はらいの御へいす百本切したゝめ  
御とのいの公卿いち／＼にさしつらなりふなおか山  
に五りう宮とまつる事此ときの事なりとやおの／＼  
御門をしゆごしくわぎよなるせいめいへいはくいち  
いちに取あつめれんだいのにまつりすてかへりけ  
るされどもくぎやうきさをはしめ國々の大名小み

やう高位下官たみ百せいに至迄やく病になやまされ  
まくらをならべゆ水をたへてくるしみけるらくわ  
うの御うちにはうすいうらべをさきとしてみな大ね  
つさにおかされてさんのみたいてふしにけるらく  
わう御らんし是天下の煩ならんと兩人わたなべ坂た  
をめされ上い有きん時承げにめにさへぎるにおい  
てはやく神もかうじんもあますべきに候はずされ共  
かげもかたちもなくめにまみへねば力なしいか様や  
きやつばらをおもふ様に打ほろぼし天かのなげきを  
やめ候へしとはかみをなして申けるつな聞てきん時  
ののたまふことくめにさへきらぬくちをしさは心は  
やたけにはやれ共うすいうらべも力なくついなや  
み打ふしぬ此上は御ぶんも我もすいふんやくじんや  
うじんかたく守り申べし身あやしくちかづくくせも  
のあらばたとへ夢まもぼろしにさへきる共切はらは  
んにしくあらじ君も御ゆだん有べからずと御いさめ  
ん申ける頼くわう聞しめされとかくつゝしみかんや  
うなりとれん中に入たまふわたなべ金時御ざまのつ  
きの間に二人まくらをならべふしにけるすでにやは  
んもすぎ行ば西の間のしやうじさら／＼とあくるを

わたなべかみゝにうつゝのことく入にけるつな枕を  
さしあげみればあをさめたる女ぢぶんなよしはやき  
たれと打まねくを見ればやくじんさいづちさすまた  
引さげきんときがまくらもとに立よりわれなやまさ  
ん人なやまさんとうばいやうれいの女われかれもむ  
つかししそれがしきやつを打ころさんとふすよと見  
れば金時かつはとおきわたなべおきあへんげをく  
みとめたりとひしめけばつなはすはよとおき上り四  
方八めん切はらいなんなく神打とめてたいまつとよ  
ばわればとのいぶしかけ合火をさし出しみれば金時  
がくみとめしはれんだいのにすておきしやく神まつ  
りの御へいなりわたなべが切とめしはふるきそとば  
岩切にのりことくつきてさしきはくれないにそ  
まりけるきん時はこはむねん打もらしぬ是は正しく  
清明かふなをか山にてきりはらいたる御へいなりい  
か様此そとばを見るにれんだいのにきやつばら有と  
覺へたりあけなばのりをしたはんとあいづを定いた  
りけりこれはさて置平井のかくとうほうせうはけん  
もち一人召ぐし都には入ぬれとまん中のいかりはか  
りかたくおりをうかいひ申わびんとかくらく中は事

さはがしくむつかしとむらさきの方はらにくさの  
やかたむすびあけ心をすましいたりける所にたれと  
はしらずやはん斗にしばのあみ戸をはた／＼とおと  
づるかく道聞てふしぎや此れんたいのは人のやちう  
にきたるべし共覺へすいか様さんぞくがうとうなら  
んうんのつきたるやつばらかな出ものみせんと兩は  
のほこひつきけしばのとに立いでいかなる者とたづ  
ねけるやくじん聞ていやくるしうも候はす此あたり  
の者成か都にくしむものの有本望はとげぬれど存  
の外にふかでおひおちゆかんなかなはす御やかたを  
見かけ申たりかけをかくしたまはれといそがわしけ  
に頼けるかく道聞てとかくの事はしらね共手をあふ  
たるとや侍はたがいの事うちにとをり候へとおくに  
せうじみればおのこ三人一人はぞんめいふじやうに  
して二人は力なげになをりけるかくてほうせうはげ  
にいたはしき次第かな見たまふごとく爰は人ざとは  
なれしれんだいの心しづかにかん病有いづくへもお  
ちたまへさてかた／＼はたれやの人のかしんそやそ  
のなをなのりたまへたとへおつてす百きにてしたい  
きたり共心やすかれあるじがうでに覺へありよせ來

らんやつばらをかたひしきにとつてねづくび人つぶ  
てかいこつぶしといふ者にらつくわみちに打ひし  
き此身は八ざきになるともかた／＼をばわたすま  
しはや／＼なのり候へといさぎよく申けるやく神  
共は是を聞たのもしき御ことば我／＼ははりまの國  
の住人ものゝへだんじやう道かせがけらいの者にて  
御さ候やせんいしゆ有物を打取是迄おちのひ候なり  
此者へいゆふのおりまで御なさけに御かくまひたま  
はるべしひとへにれのみ奉るとかうべをうなだれ申  
けるほうせう聞てなに道かせのかしんとやものゝべ  
の御事はたねもなく存たり所はなにあふのへんにて  
人のしる事よもあらじ心ながくかんびやうして國に  
かへり候へとさま／＼いたはりもてなしけるかのか  
く道はせうが情の程あくあれは善心有ぶんふ二道の  
兵とかんせぬものこそなかりけれ

### 五たんめ

▲其後わたなべのつな坂たのきん時兩人は五かうの  
天もひらくれば兩人御前に罷出らい光に申上右のあ

らましうつたへけるらいくわう聞し召れふしき成次  
弟かなそれ／＼きやつばらかすみかなき事は候まし  
はや／＼とのたまへばつな金時兩人はけんそくをと  
もなひてのりをしたいてあそこ爰よと尋行の道山み  
ち行過てれんだいのにつたへ行てみれば一つのしば  
のいほり有きん時すは是に有とかけいらんとしたり  
けるわたなへおさへそつしに内に入るべからずおん  
びんにたつね申いはひせばくびねち切てすつべしと  
あんないかふて申けるかく道みて三人の者をかくし  
置其身さらぬていにてこのふちをまくらとなしそ  
らねいり初けるけんもち太郎立出是はいつくより御  
出ぞあるしは今やすらい罷有御用ばし候へば仰おか  
れ候へとなにげなく申けるきん時きいて何あるしや  
すらい有とやながきよをばなにをなして時ならぬ高  
いびきあるしにたいめんせんとおくのでいにつつと  
入御ほう／＼とおしうごかしければかく道よう／＼  
めをさましたま／＼すいめんなしぬるになにのやう  
有てかは來りしぞかたれきかと申ける公時聞てい  
やとよ御ほう御へんのいへにふしき成ものは候はす  
ややせんやく神を切はらいのりをしたひきたりしに

此しばのやについたり御へん身に覺へはあらざる  
かよつくめをさまし心をしづめかたられよねまよい  
たりや山ふしとあらけなく申けるかく道聞てなにや  
くじんのわがうちへのりを引て來るとやたとへやく  
神にもあらはあれ我をたのみきたらんにかた／＼に  
おそれ是有やとわたさんや其上我はやくじんのか  
しらはせずやくじんもかう神も我はしらずちか比そ  
こつのおのこかなりふじんにふしたるものゝやのう  
ちにあんないなくみだれ入びろうのふるまひきやつ  
くわいなりねつびやのそのうへにくびをうしないか  
へるましががなきさきにとつくかへれあゝようがま  
しやと又打ふしいたりけるわたなへきんときよこで  
を打てから／＼と打わらいさても／＼も世の中や心  
ふとき、くせものかな金時我兩人にてうたんにはん  
くわいなり共あまさんやされ共かゝるものをたすけ  
おきわが君のかしんとなし家の寶とあをくべしと  
二人が中に立入兩方先しつまれ／＼あるしの一りも  
こゑたりぶしたる身のわがうちに見かけたのみ來ら  
んにむげに出すほうはなし又御ぼうと打はたしたいの  
ちをすてゝかいあらすとかくわたんの以きたいの有

様かたるべし先しづまれとおしはけれ／＼は聞及  
たまふへしらい光の御内につな金時と申者なりやせ  
んむちうにやくじん來り二人の者をなやます我／＼  
むちうに太刀ひんぬきはらへばてごたへしてのりを  
引したいきぬれば御身のやかたにつゝきたりさ有に  
互にろんし打はたさんな是ねつにおかされ命うしの  
ふににたり御身はいかなる人ぞなのりたまへ向後た  
かいに申合へしといんぎんにのべにけるかく道聞て  
よこでうち扱源こうのかしんとやとくにもなのりた  
まはてせんなき命あやうかりし事まづめでたし／＼  
我ははりまのしよしやに有ける平井のかくどうほう  
せうなりまん中我を出家となさんとしやうくう上人  
にあづけたまふされ共がくもん身に脱力しますはんぞくに  
てくらせしかあまり都のなつかしくさんぬ比上り候  
へ共みつながのいかりおぼつかなくおりをうかひ  
此所にあんやをむすび日をくらし候是天の御引合つ  
な殿も金時も今のぶれい御めんなされてやせんのく  
せ物はわがたちにかくしをく是をみやげにらい光の  
御めにかゝり候べしとれいのやつばらをかくし置た  
るひとま所をみてあればいづくへかもれ行けんきじ

ん一人あけにそみしにいたりほうせうあきれこはむねんとかうくわいすれどかいぞなき公時わたなべみてやく神がくびかきをとし引さげほうせうをとまないらい光の御まへにまいりける源御らんしかく道とは御へんの事候そ内々そんしの事なれ共おりをゑざれはたいめんなくむなく過候なり然に此たびのわさはひふしぎ成しだいかなそのくびらくくわいにさらすべしとごくもんにかけさせけるほうせうかうべをちにつけむねんのしだいやく神とそんせす打もらし候去ながら此一きと申ははりまの國の住人ものゝべのだん正道かせとて君も御ぞんししられ候べしものゝべの道おんが子くわさんのていにゑんとうをしやめん有ひせんはりま兩ちして罷有といへ共その心ふてきにしておにかしまよりあをんげ道正わうきとておにをつかいちかたすみ友にばつくんまさるくせ物なりそれかしをもかしんにめしつかへよと使を立候へ共あく人にくみせん事道ならずとぞんしはりまを罷立候ぢぶんもうつてをさしむけ候へ共我事共せず切ちらし都に上り候に御めみへ申上べきぢせつもなくむらさきのゝへんにしばのいほりをむすび罷

有候へはやちうに來りきづをかうむる由をなげき頼候にそれがしぶしの道をぞんしつなきん時にも相わたさず打もらし候事めんぼくなき次第にて御ざ候去ながら此やつはらなのり候は道かせかけらいと申候いか様道かせめしつかふきじんをまねきあくれいを一身として世をなやまし候はりまに下ちやくいたし道かせにしたがいおりよきぢぶんないつうを以申上候べし御いとまと申上るらくわう聞召とかくはほう正心にまかすべしと小ざくらおどし御腹まき五尺貳寸のしやくどうづくりのやしや切と云御太刀をへてたまはりけるほうせう三どいたゞきつな金時にいとまをこいけんもち太郎召ぐしてはりまのしやしやへと急けるとにもかくにも此人々の心中あつはれふしの手本やとかんせぬものこそなかりけれ

## 六たんめ

▲其後御父まんけいは御よわいかたぶきてゑいくわをきはめましませは御子げんちん上人御ともない有て西のでんのぶつせんに入らせたまひかうをもち花

をつみ此よはわづかかげらうの有かと思はれはひを王  
ののべにこがれて跡もなしとかく此身はあだしみの  
ゑいくわの花もいつしかにちりて昔と成ゆかん心な  
とめを夢のよにゆふへにしゝてけさは又のべのくさ  
ばにおくつゆのもろきは人の命なりとかたせたま  
ふその内にいたはしやまんけいは大ねつきにおかさ  
れたまひつゝやまふのゆかにふしたまふらいくわう  
はじめ四天王みなくおどろき天やくのかみさまさ  
まくすりを奉れ共おもりこそすれげんはなしまんけ  
い今をかざりと見へたまひしが御ちやくしらい光け  
んちんほうねんよりのふを召れすでにわれしやばの  
ゑんつきこよひとすこしまし我むなしく成なら  
はほうれん出家の事なればきへ行跡ともかくも思ひ  
残す事はなしさてらいくわうは天下のせい道みち  
すぐに國のしをき正しくして君をうやまひきをおも  
んし是第一のいうらみなくあには弟をあはれみ弟は  
あにをしたいつゝ國のみたれなき様にかもんのはん  
じやういへながくじひはかみよりくだしつゝいへの  
子ふだいのめんくをなさけをかけてつかふべしさ  
て又はりにくだしぬるほうせうを召のぼせかしん

となして國の一つもゑさせよや一門のはしなれば  
あしかれとは思わねどもわが一言をそむくゆへ今迄  
かんとうなしぬるぞそれく四天王ちかふまいれと  
上い有おのくわたなべ坂たうらべうすいかうべを  
ちにつけつつしんで承やあいかなんぢらゆふ迄は  
なけれ共らい光わかけの有時は一めいをかるんし身  
をなげうつてかんげんするはかしんの道一家の内に  
大事有その時はあやうきをしぞきりをもつて家をお  
さめ國にらんげきおこりなば四天王いつ所にかげよ  
せ跡をあくる事なかれらい光馬を出しなばわたなべ  
跡にとまりよりのふを大將にてきんりをしゆごし  
申へし金時ともくうつたつてわたなべむかふ其時  
はうすいうらへ一身せよひがし卅三が國いつゝにわ  
けてほう正かたくおつどなくしをきせよげんしの  
家はんじやうにめつぼうなき様にすへめでたくおさ  
むべしらい光よりのぶはいふ迄は候はねと老母にか  
うくつくしたまへいひ置事は迄ぞたとへむなし  
くなるとてもわれ有ことくおこなふべしさばすこ  
しやすらはんと御めをふさぎたまひしがかなしきか  
な秋の比のつらにすだく虫のねと長とく三年酉の八

月廿七日ひつしのこくと申にはついにたかいましま  
せはらい光を初源氏三十三ヶ國の諸大名はつと斗に  
うれいつゝおくからと様に至迄なげきかなしむ斗に  
なりわたなべきん時罷出今はなげきてもかへらせた  
まふ道ならずと御しかいをかいしやくしてのへにお  
くらせたまひつゝむじやうのけふりとなしまいらせ  
なく／＼やかたにかへらるゝあはれといふもあまり  
有是はさて置やくじん共はりまの國ににげかへりも  
のゝべの道かせがまへにひさまつきかやう／＼にわ  
れ／＼ひじゆつをつくしさま／＼なやまし平のかね  
もりたゝのまんけいか命のきづな引ちぎるといへ共  
四天王のやつはらうすへうらへ兩人をなややましふ  
せ候へ共かへつて我／＼きやつはらになやまされく  
わつきはついにわたなべのてにかゝりむなしくなつ  
て候われ／＼二人もきやつはらにしふせられん所に  
平井のほうせうかく道坊がなさけにてよう／＼にげ  
のびまいりたりとかたりけるものゝへ聞てゑみをふ  
くみそのほうせうといへるくせものははりまのしよ  
しやのあく僧なりまんけいがおいなるが源氏をうら  
み有ときく我がしんになさんと使を以ていゝ入しに

かへつて我をけらいになさんとあくこんして有つる  
が此度かた／＼がめいをすくいあんおんにかへす事  
さりととはきどくのくせものなりかたてにかへてほし  
きは此ほうせうとうれしげにかたりける所にあんな  
いのぶし御前に罷出平井のかく道はつしとてわが君  
に申上べき事有と申來り候此ぎいかゞ仕らんとうつ  
たへけるものゝへ聞て是天のあたへたまふ臣下なり  
うれこなたへと申けるほう正おめすおくせず道かせ  
がまへにひさまつくものゝべみてほう正とはわたの  
の事か此度都にてのかたうどしうちやくいたし候な  
りふうきねつき罷出れんたいの御情いつのよにかは  
わすれ候べしちか比ゆいかいなく思われんされ共お  
つての二人らい光か一二のしんかつな金時とてもて  
あつかふたるくせ者かけ合てはかなはしとにげ來  
り候去ながらまんけいがめいを取て候とかうげん  
がましく語けるほうせう聞てこはなむ三ぼうと思ひ  
しがいやましてしばしわが心さとられてあしかりなん  
とてもきやつばらいけておくにあらばこそと心の中  
に取なをしいさぎよし／＼其まんけいだに取ふせた  
まへは天下は君のての内それがしちりやくを廻し候

へし君御存のことく我はらい光がいとこなりまんけ  
いひだうのつみにふせ候事なんぼうむねんに存るな  
り此たび御はたをあげたまへ又こゝに一つの手だて  
有是成あをんきしやう王きをともないらい光へかう  
さんの體にもてなしな本より一家の事なればふび  
んのくわへらい光ぶゆうの兵にて此人々を見ならば  
悦び一がなかめのふぼくにあへる如く玉をもとめし  
心ちして相したがい候べし時ぶんをうかい三人一  
どに心を合頼光をさしころしほんもふをたつし候べ  
し此ぎいかにと申けるものゝべ聞てしばらしあん  
したりしがとかくはわたのにまかするとれん中に入  
にけるほうせう四人のげどうをちかつけいづれ成共  
二人なわをかゝり候へちりやくにつくるなは是以て  
ちじよくならずしうにかうあらん時は天道まさ成所  
なりいかにと申ける四人の外道あきればととか  
うのへんじなかりけるほう正みてとかくわれ人むつ  
かししうらみこいなく四人なわを付たまへほう正が  
なはかゝり敵に行手たてあらばいつとてもはぢなら  
す命は君のためぞかし君あれは家たのしくいこく  
のかんじん百人のまたをくいりぶ人のかたをこすち

りやくなればちしよくとせすこうきにといめうやま  
へりはやと申けるあをんきせう王き聞てとかく  
のろんむやくなりたとへしそんする共神つうをゑた  
るわれがちりにましはり火に入てもぬけ出んと  
四人うしろをならへさし出すほう正みてあゝいさき  
よき四人のやく神と高てこてに引くゝいぎゆかん  
めんゝと郎等を引ぐし都をさして急けるほう正と  
有所にていかにめんゝ都もはや程ちかしらい光と  
云くせ物はすきまかぞへのふてき者人々のなわゆる  
かせにかけゆかばふしんのなさんはひつでうなりか  
けなをし申さんと一々にしめ上て何とめんゝ今か  
かりたるなわはあくまがうふくふだうのばくのつな  
何とくるしう候や我はふどう明王につかゆるこんが  
らせい高坊とてやく神をたいらくるやくなりと手  
ごろのこぼくねぢ切たゝき立て行程に頼光の御前に  
引出すらい光を初一ざのめんゝほう正かはたらき  
ほめぬ者こそなかりけりそれよりれんだいのに引出  
し首一々に打をとしやく神の事なれば今みやといわ  
いたまふ其後四天王はりまへおしよせ道かせをから  
め取はく中にかうべをはね天下太平に納られ平井の

ほう正をはりまの守ひとりむしやと名つけせんたい  
みもんの兵ときせん上下をしなへてみなかんせぬも  
のこそなかりけり

右者太夫直之正本也

うろこかたや 新板

## 日本兩武將始

### 初段

つら／＼四きてんへんのうきよの中ふゆの白雪いつ  
となく春のとうくわと引かへしらうにやくなん女を  
しなへて色めきわたるよもの空のとけき國こそ久し  
けれこゝにしんむ天王より六十三代のてい王をはれ  
いせいゐんとかうし奉る御まつりことしゆんちよく  
にたへたるをおこしすたれたるを取たて下をめぐま  
せたまへはばんみんふかくたつとみ御せいとくちよ  
はんせいとあふかぬ者こそなかりけれ比は八月一日  
はつさくの御いはゐとてくきやうてん上人玉をみか  
く將そくにてかふりをならへさしたまへは下たんの  
右のさにはかうつけの守たゝのまん中其ちやくしせ  
つつのかみらいくはう二男かはちの守よりのふ左の  
ちやくさには二かいどうしなのゝ守うちひで其弟ぎ  
やうぶの善次うちもり其外諸國の侍袖をつらねて相  
つむるかくてきよゆふ事をはりかく國土せいひつに

おさまる事しかしまん中とうちひでかふゆうのはけ  
みつよきゆへ其ちう誠にばくたいなりとてまん中に  
は源氏のせうをたまはり源うちにふせらるゝ是より  
源氏といふ事はしまれり扱しなのゝ守をとよ原うち  
にふせられ二人に天下のふ將をたまはりける是日本  
のふ將の初なり時のめんほくよのきこへうら山さる  
はなかりけりかさねてのせんしには近年きうしうや  
やもすれはみたれけきらんじに及はんとする是しゆこ  
けんたんなきゆへなりまん中か次男かはちの守より  
のふうちひてか弟きやうぶの善次うちもりをつくし  
のけんたん仰付らるゝいそき罷下よろしくせいたう  
取おこなへとく／＼と有ければ兩人ちよくせんかう  
ふりつつしんでお請を申おの／＼御前を立たまふさ  
れはにやまん中はやかたにかへらせたまひよりのふ  
を近付それ物のあいやくは大事の物兩ゆうは必あら  
そふならひ有つくしにてうちもりとものまはりはん  
しをひかへん何とふれいをつくす共かまいとてかむ  
る事なかれおこいまたはたちにもたらぬ者にたん  
たいを仰付らるゝ事君よつく此一門をよろしく思召  
るゝゆへかうちもりはすてに卅に及へりされはおひ

たるを親とせよといふせわ有何事もかれにまかせよ  
とこま／＼としめさせたまへはよりのふ仰の趣いさ  
い畏候扱少そせうの候事かりそめながら九か國のけ  
んたんしよくはよりのふか身にははくたい過たるや  
くぎ一つは家のかさり又はしせんの時のためと申五  
人の若殿原か内一二人申あつかりたく候かい／＼御  
さ候はらんみつなか聞召しまふのたんことはりな  
りしかしなから五人のわか者共はまん中か物ならす  
らいくはうしんのはたらきにてもとめたる事なれば  
よりみつかはからひたるべしらくはう聞召たとひ  
よりのふのそます共我申上たき折からよく所望仕候  
つなきん時をさしそへられ然へう候みつなか聞召ま  
ことに都にはおことか有といひいまたさたみつすへ  
竹ほうせう三人けつせんたれは一ちぎなしつくしは  
たもんのまじはりなりみつから此度のはなむけにつ  
なきんときを兩年か間よりのふにかしゑさせよすて  
にはやうぢもりは此日くはらくを立たりいそいて罷  
下れ畏て候と吉日ゑらみ花の都をうつ立ちんせいさ  
してそ下らるゝつくしになれはうちもりはちくせん  
の國よこたの城にあいすみよりのふは同國ださいふ

にこそ入たまふさる程に九州の諸侍一つ所にあつま  
り都よりの兩けんたん初ての國入いさやもてなし奉  
らんさいはゐ來る九月十三やあんらくしにて月見の  
くわい然るへしと事のないたん相きはまりうちもり  
への使にはとうまの善次よりのふへの使にはとみ岡  
兵こなりすてに其日にもなりしかはさま／＼のほう  
らいざしきのぎしき相かさり今や／＼と待所へ兩け  
んたん思ひ／＼の將そくにてうちつれ／＼入せたま  
ひけりいつれも出あい誠に御出泰と色々のちんくわ  
をつみかへ／＼もてなさるゝうちもりしゆえん一入  
にけにやもろこしにては八月十五やの月をのみもて  
なす日本にてもちかき比まてはこよひの月をはなか  
めさりしかんせう／＼しへいおとゝかさんけんにて  
此あんらくしへなかされつれ／＼をなくさみかねみ  
そめたまひしより諸人あまねくけうをなす一しほこ  
よひははれやかに雲ゐにかゝるさはりもなしけにや  
一じのえいようにはちとせのよはひをのふるとかや  
げこも上ごもをしなへてのめやうたへや人々と今や  
うらうゑいとり／＼にをの／＼けうをなしにけりう  
ちもりしゆきやういやましにいかによりのふ殿我々

九國のけんたんしよくかうふり罷下なからちせつな  
くてはほいなしつら／＼國のていをかにかみるにつ  
くしにはよ國よりあなたの宮れうこなたの寺のおさ  
め所とてくんやくにあらざるゆうみんのついへ多し  
此しれうしやれうを半分つゝ召上たみ百姓に甘ふん  
一のくはやくをかけ其へいせんを以此はこ崎のうら  
よりすしかいに五りも七りも石のつゝみをつき所々  
にやくらをしたゝめ置ならはもろこしよりいく万き  
のせいにてよせ來り候共中／＼上たて候まし此きい  
かにとまゆをひそめて相のふるよりのふもくねんと  
してやゝ有て仰せらるゝ趣りなきにも候はすしかし  
なから我が存るたんをも申べしはこ崎のつゝみよ  
うがいのためよろしき事とは申ながらじれうしやれ  
うをきやくせしめたみのさいさんをつくさんは何と  
か候はんそれわかつてうは神國しんむ天王より此かた  
代々あかめてよせられししやれうを召上候はんなふ  
るきをやぶるしんほう次に寺れうと申も其時々この  
ほり主親おほぢ兄弟のため付をかるゝじれうをつい  
はうせんとはかつうはせんほうのれいをそむくせき  
惡とや申さん其上近年はきうしうひそんすいそんし

たみに定る外にくはやくをかけられん事よろしきや  
うには存られすかくは申つ去なからふかき御心入も  
候はゞ御ないたんをはもれ候まし氏もり聞おもしろ  
しよりのふ殿尤きん年打つゝき九州すいそんひそん  
とはいへ共さのみたみ百姓つかれたる共みへず其う  
へ是はよのきとはちかひ國土太平のかためのためな  
ればばんみんをくるしめても悅所又しやれうしれう  
召あけんせんほうをそむくよしとひいにしへよ  
りさたまるせんれいたればとてあしきをよきにかへ  
ん事何のはゝかりか有べき何のよしなきしやれうし  
れうこと／＼くついほうしくんやくにつとめんな是  
おゝいなる君のためあしくも心へらるゝ物かないか  
に／＼とかんしよくかはり申けるよりのふ聞たまひ  
何共同意仕りかたき事共さかしき事なからそもそ  
もふつほうと申は忝も三かいとくそんひろめそめた  
まひそれよりもろ／＼のそしたちつたへ來るみのり  
の道を我らごときのばんげとして善惡のひはん及  
へき道ならすことに本てうは神國なれば神をすてん  
はなかれをくんでみなかみをにごしこかけにふして  
えたをからすににたるへしよく／＼御しあん候へか

くは申つ君の御爲よろしき道にて候は、御はからひ候へゆめ／＼そむきは申ましとさも大やうにのたまへはうぢもりあたるたうりにせきめんししはしことは、出かねけるこゝに二かいたうの家のしんかいはせの太田左衛門すいさんかまし罷出りよくはいなからよりのふ公日のもとと神國しうにて候うちもりも一えんにすてさせたまへと申にはあらずしやれう半分さきとらんとの事次に佛法はあまりなくてもことかくへき道にあらずされは**大せいじん**のこうしもふつほうをはいたんの道とをとしたまふ**扱又**たみ百姓のあはれみのたん心へかたく候それふけ弓やを以天下を切しきはんみんをゆたかにならしむる其ほう／＼の爲さし上るへいこくたりされは鳥はたかにとらるゝかやくたみ百姓ははんもつをかみへさゝくるかやくあたりそまはこ崎につゝみいてきなばまつだいまで日本太平のようかいとつくと御くふう候へわけのゆへ物のこくびやくわきまへたまはぬせうしさよとなんしける坂田の金時は次にひかへたりしがあまりに聞かね罷出やあうへ／＼の御ひやうでうのさしきへひろうをかへりみぬそんくわいさよ

尤ふけぶんふ兩道をもつてこつかをおさむる其こうをんにたみ百姓は万物を上へ上るやくなりとて定るおさめ物の外にくはやくをかけんはたかゝ鳥を取ての上にねつみを取にたるへし扱又佛法の道を御邊おことかふんとしてよしあしのひごんはまうもくかふし山へのせんたちひきかへるか海をわたらんとするにことならすたけに及はぬ大かいのせふみ御むよう／＼とあざわらつて申ける次にひかへし大河きゝもあへすやあいはせみゝもあかさるくにんにむかつて何のけうけそをうしてげんしのともからは家にそなはるふけいをはけます道にもあらぬ僧ほつしをたつとふ明日にも事をこらは衣をくそくにちやくしたたきかねをかふとゝししもくをたちとひつさけかけ出みつけん二つに打われをくれをとらんせうしさよとことばをはなつて申ける公時聞何けんけの者はきうばをははけまぬとやかた／＼の弓やことあはれそつとくらへたや我々かちやくす衣はおことらか五兩十兩よろひをきたるよりてこはくしやくにもたらぬへろ／＼うてには及かたしこへびのふんざいて大しやにはむかいぞんくわいはき五たいそんほうい

たさんむさんさよけかなきさきに罷しされいはせ大河はらをたてこへひ大じやはいさしらずくはごんを  
はくあふれ者まつたくきよ所をさらせし太刀のつか  
に手をかけしを人々こはらうせきとをしとむるきん  
ときみてれつさをはかりよくわいをゆるせはを  
のれと火に入夏のむしくひふみをつてすてんとん  
でかゝるをわたなべ押留人か物にくるへはとて共に  
くるふ事や有いかに方々さすか弓やの家の生れたち  
のつかをにきらんする者か女わらんへか水かけくる  
ひすることくなかじやくはいかましき事や有まつこ  
といこんはれすはかさねてさんくわいせしめくひを  
ねするかねちらるか命かきりのうてすまひきやう  
しは此渡邊いたさんいかにわか君かゝるふれいのさ  
しきにながいはせんなしはや御きたく候へ一さの  
めんくまつひらゆるさせたまへと君の東西相しゆ  
こしやかたをさしてかへりける坂田渡邊かふるまい  
あつはれ弓やの手本やとかんせぬものこそなかり  
けれ

## 二たんめ

其後うちもりはもにすむ虫の我からとおほいなるを  
くれを取家のこ郎等ちか付きのふよりのぶかそんく  
わい家のこ共かりよくはいのたん是を其まゝさし置  
ては二かいたうの弓やのなをりたるへしをしよせき  
やつらにつめはらきらせそんねんのはれんはやよう  
い仕れといかりをなすいはいせすゝみ出御でう尤にて  
候きやつらはをふみつぶさんは鳥の水に入より猶や  
すく候よのはゝかりを存せずはやせん一々にくび引  
ぬきてすて申さんされ共かれらをうつならはみかと  
より御とかめ君にかゝらん事を存相ひかへ候たゝ何  
とそはかりことを以後のなんきなきやうなるてたて  
こそあらまほしく候扱大河は何と思はれ候そよくに  
打うなつきげにいはせの申さるゝことにくしと思  
てきをほろほしたりとてもみにむくはんなきなし  
たゝけいらくにしかしされはよりのふかいへの子に  
ひけたの五藤次宗時と申者の候かれか親ひけたのは  
んくはん宗みちと我はないえんに付へつしてしたし  
くかの宗みちをうらみとんせいとしふんも宗時を一  
筋に頼むとかき置いたし候間我を親のことく大せつ

に仕候くたんの宗時しゆくんよりのふが手を少もちかへすにせ候かれをつくし九か國のめくらし文をかかせ則宗時を使としてまつちくこの國のちう人あさせ兵部かつくにたちへ一はんにつかはさんされはかつ國は君とむ二のこんせつなれは一みする事は思ひもよらずつつかひの者をとめ置こなたへちうしんせんはひつ定しからはよりのふか惡きやくの者となり九州そうどういたすへし時に君よりのふついたうのためと御ふれ候はゝのこらす一み申へし其たせいをもつてやすくと打つふし其後そうもんなされ候はゝ御みの土になんきなくつちうせつとなるべしさいはいかのこ藤次御家を望み候かれとかたらはんにしさい候ましとやかてつかいを立にける宗時何事やらんと來る大河たいめんし内々たのみし事を君へ申上たり御禮申上よともなひ御前にかしこまる是は内々申上候源氏の家の子ひきたの後藤次と申者にて候うちもりうなつき大川か取つきにて御ふんかしんてい聞しうちやくせしめたり何時なり共參られよ是やくたくのさかつきなりとかはらけ取上さしにけり宗時は有かたき御でうとつつしんでをしい

たゝき悦事はかきりなし大川しふんと思ひくたんのあらましかたりける宗時おとろきとやせんかくやあらんとしはししあんに及ひけるうちもりみてかく一大じを打とけて頼上はいへん有へき事ならす此事しおふせなははりまのさよこほりに相そへつくしにて一萬町あてをこなふへしとじひつにくたし文をかき二人のこうけんにもそへはんさせひたすらに頼みける宗時此上は一命を奉ると則よりのふの手をにせくわいふんをそかにけるうちもりゑつきあさからすとてもこの事におことよりのふか使とて此くはいふんをちくこの國あさせの庄司かたへ持て參られよ畏候とちくこをさしてそ急けるあさせかたちになれはあんないこふて立入くたんのめくらし文をさし出すかつ國請取ひらいてよむ其表にいはいくつらうきよの有樣けいはくをのれが光のうすきをはかへりみつあきらかなる月のかけをすかすまつそのことく二かいとう氏もり源氏のゐせいをそねみつゝないかしろにせんとはつすさまゝの惡ごんいこんさらにはれかたしをしよせ本念をさんせんとはつすれ共折ふしせいひにしてしんでいにまかせす家のちしよくを

すて九州の諸侍へ勢をこいうくる者なり日比のよし  
みなしといへ共ふしたる者の手をさけ申いるゝ所を  
かんゑつ有御勢合力にあつかりほんまうたつする物  
ならは生々せゝのほうしん此事に候ちくこの國あさ  
せの兵部公へかはちの守源のよりのふとかきて有あ  
んのことくかつ國大きにおとろきさはうちもりへの  
いこんに事よせ九國をかたふけ天下へ弓をひかする  
くはたてと覺たりとやかて使を取ておさへ二かい  
うへと急きけるやかたになれば大事のしゆつらい  
たせりとくたんのあらましかたれはうちもりおとろ  
きたるていにもてなしあのよりのふか使をふかくを  
しこめよとひつたてさせさはひとへによりのふ我に  
事よせ天下へのきやくしんなりしこくうつさすせん  
しとかうし九州の勢をそろへ打とらんと國々へ一々  
したいにふれにけりきん國の諸侍あはてふためきは  
せ來るうちもり悦よりのふによりきのせいなきさき  
にはやくうつたてとたさいふさして取かけ時のこゑ  
をそ上にける時のこゑもしつまれば渡邊のつなたか  
き所にはしり上り何者なればたんたいのみちをもは  
ばからず時を上るくせ者其なをなのれゝとよはゝ

りける其時よせての大將こま一ちんにのり出しなん  
ちか主のよりのふきやくしんのくはたて諸國にろけ  
んかくれなくさつそくにけいはつせしめ國土ゆたか  
におさめよとのちよくせんのかうふり二かいとうの  
きやうぶとよはらのうちもりはつかうせりととのし  
りける渡邊聞て何よりのふかきやくしんとはさら  
さら以心へすけにゝゝ過しくはいかふの時すこふる  
をくれを取無念には思へ共一ふんのかいりきには及  
すよりのふをけきしんに取なしつくしせいをかたら  
ひはちをきよめん爲な此城には坂田渡邊とて人くふ  
鬼かひかへたりむようの所にはつかうし生をもかへ  
すちごくのせめをうけんよりすみやかに引てのけと  
よはゝりけるうちもり聞につくきくはしやめか惡ご  
ん鬼にても人にてもたゝ今一々に首切ならへみせん  
是へゝゝとしきつてさいをふりたつればうきたはね  
河いもせの一たうせんちんにかけみたす御所にはと  
んた一のゐもんまの一門てきをまはしうつて出おふ  
つまくつつこゝをせんととたゝかひけるよせてはた  
せいやかたはふせいといへ共其比しやばにてごづめ  
づとさたする坂田渡邊ひかへぬればよせてはおゝく

そんなれ共御所にはさらにたじろかすうちもりみて  
とかく此いくさつなきん時二人のやつはらをたにう  
つならは一しにせうりうたかひなしとぐんせいの其  
中にこゝそと思ふゆうしを四人すくり出すまつ一ば  
んにはみつのの大八國久長刀のめいしんなり同せう  
ごんゐんのあらいなは并に大たてこん藤次こん藤み  
かれらは五き七道に其なをあらはす大力のくせ者ゑ  
物くをひつさけ罷出我々はゆいしよなければなの  
るべきけみやうじつみやうもなしたゝ人の首を取事  
をゑたり日比あら人神のことくさいたす坂田渡邊  
殿とやらんにそつとけんさん仕り今生の思ひてにい  
たさんとこゑくによはゝりける坂田渡邊是を聞何  
めんくは人の首取事をゑたるかうのむしやとや扱  
なのなき者とはきつねたぬきのはけ物か人にあらさ  
るちくるい共とのさんくわいほんいにあらね共せひ  
に及はぬうきよの中わたなへのつな坂田のきんとき  
是に有望み次第にかけ出よとさも大やうにひかへけ  
るみつのの大八聞よりもくわんたいなるざうごんい  
で物みせんと長刀水車にまわしうつてかゝるきん時  
みて扱もまはる長刀かなむさんやさこそ心をつくし

ならひたるらんといひもあへすこむ長刀をおどりこ  
へうてはほね首はね一つかみ是わたなへとてなけれ  
はせうこんゐんのあらいなは一丈あまりのつげのほ  
うをふり上たゝ一打と打をゆんでへひらきむすた  
きぼうばい取又渡邊とてなけわたすこん藤次こん藤  
三こはしなしたりとはがみをしてかけよるをかれら  
は爰にてしまふそとほうふり上おとりあがつて打け  
れは二人共にらつくはとちりにけり爰にとよ原の家  
の子いはせの太田左工門時もと大川庄司より國は二  
ちにそなへいたりしかしつくと立出いさきよし  
きん時うたれしものゝけものゝけうやうにたむけの  
太刀たゝ一打今生のいとまこいそ念佛申せ坂田とは  
ばりかゝつてはつしとうてはきん時ほうにて受とめ  
ひつはつしうては太刀にててうとうけつからんすこ  
こをせんとせりあいけるうしろにひかへし大川此由  
をみて見事なりいはせすきをあらせすうち立よいで  
我渡邊か首とらんと二人か切むすふ上をひらりとと  
ひこへ切てかゝれは源五心へたりとうけなかしたゝ  
きたてまくりたて火花をちらしてたゝかふいはせ本  
よりかうの者きんときかほうを二つ三つに切おりけ

るこはむ念とゑしやくもなくつかまん／＼とかけめくるやゝ共すればきん時あやうく見へにけるつゐにはよはこしむずと取もはやきんときか物なりとひつかけねちたをし上にてうと打のり見たまへやわたなへ殿爰えは此ていなりちか比ふれいに候いはせ殿としはらくいきをつきにけり源五みてこはきんときにをくれたりやあこへん一人はめいとのかひのせんなからんつれの有時いそかれよなむ阿みた佛とゆんでのかかもゝうちばらひのつけにかへるをおし付いとまとらせんきんとき十方しやうとこしふをんとこゑをそろへ首打おとししなしたりと打わらひひつかへす坂田渡邊かふるまひきせん上下をしなへかんせぬ者こそなかりけれ

### 三たんめ

其後ちうやのたゝかひによせてはおほくうたるれ共城はちつ共くつろかすいづれもあくみはてにけりここにひごの國のちう人國山兵へたゝひろひせんの國の赤ほし庄司國としは西のてのせめ口にやく所をな

らへいたりしかある時一所にくわいかうし國山こゝゑになつて何とか思はるゝ赤ほし殿せんしと有により人なみに是迄はよせられ共よりのふのきやく心とはたしかなるしようこもなし是はいつそやあんらくしにてはこ崎のつゝみのいこんりんけんなりとかうしわたくしのしゆくいはれんためと覺へたりせんなき惡いにくみし後のなんにあはんよりいさや引てかへらん國とし聞我もさやうに存るとて其よのねのこくに兩人共にちんをはらひ國もとさしてそ三重かへりける是を聞我さきに／＼と皆本國にそ引かへすうちもり大きにおとろき今ははやせめ口にもたまりかね本城にかへり家の郎等近付きけはちくこの住人松崎兵こゆきひて大はんやくあき此ほとていとよりかへりたるとなりければなにおふかうの者よりのふと一みしては事なんきたるへし是をへつして頼まんと寺島興一國むろ小二郎にいさいこまかに相しめしまききぬ百疋もたせちくこの國へそ三重つかはしけるはや松崎になりしかはあん内こいて内に入ゆきひて出あい是へ／＼とせうじける時に兩し畏二かいたううちもりよりの使にて候まつ以なか／＼の御ば

んつゝかなく御きこくちんでうのぎに候したかつては源のよりのふきやく心のくはたて候ゆへ九か國のせいをもよふしたいぢせしめんとほつし候所にそんなしの外て合のいくさしそんなし候それに付きこの弓やの道内々聞つたへたり此たひ國の勢をもよふたさいふへのせんちん頼入候是は御きこく悦にしん上いたし候とくたんのまきゝぬつみにけるゆきひてもくねんとしてやあけんけのきやく心とは心へかたく候きんりよりのりんげんにて候かをそれなから其御りんしをおかみ申さんつかひ聞事もおろかや大事の御りんし我らこときのほんげの者いかて持めくり候はん望ならば只今參りおかまれよいかにゝとつめかくるゆきひてりんけんならばせひもなし私なるたんだいのけち此ゆきひてはいさしらす此引て物は何事そ持てかへり此むね申せとさしきをずんと立を兩しゆんてめてに取付あつはれ御へんはくわんたい者ゆかすとつれで有べきかとひつたでんとすれ共ゆきひてちつ共はたらかすこさかしきくはしやはらかなと二人共にまつさか様に打たをし寺島をは首ねち切國むろをはたかてこてにいましめいかにかたゝ我

ほのきゝたる事有是はうちもりかよこしまならん我か家はげんじの御せんそ六そん王の御をんふかくかうふり一めいをぼつす共いかてみつかて有へき馬物のぐ萬御ふじゆたるへしのこらすしん上仕らんと藏をひらき相もたせ家のこ侍引くしたさいふさしてそ三重急きける城にもなればゆきひてまつさきにすすみ是は此國の住人松崎兵こゆきひて御かせいに參て候とたからかによはゝりける折ふし頼宣やくらに上りとをみしおはしますか此由を聞召それゝこなたへ承候と門をひらき城の内へ入にけり御前に畏我はきよねんよりざいばんにて二三日いせんに罷歸候所に二かいたう方より國の勢をもようし此城のさきかけいたせとげちくはへ候間君の御むほんにては有まし是はうちもりかわたくしならんたとひ何にても候へ御せんそよりの御よしみいかてかよそに見奉らんをそれなから御一所にあんひをきはめ申さんはんたん御ふしゆたるへしとぶぐの品々しん上仕り候とつゝしんでのへらるゝ頼宣聞召申さるゝとをりうちもりかよこしまなりしさいはしつかにかたるへしまことの時の心さしとかうごんごにのへられすさらは

しん上のふくを一けんせしめん承候と三重一々次第  
にふつれそなへける花やかなりけるしたいなりそれ弓  
取の六しのしなその家々の色のほろ二はんにゑひら  
三はんにこんマたい雨ふのゆかけなり五しきいろとる  
こしはたや五はんにあふき六はんに尺のむち天ちく  
よりもはしまるけにやまことにもろこしのせつせだ  
いしいにしへは一つのむちのとくによりこくうをか  
けるはやわさのきめうをゑさせたまひける比しも冬  
の事なればこのはみたれて風さむく木々のこすへも  
しろたへにはにふりつむ雪はたゝ白はたやらんと  
うたかはるすてにしこくになりしかは御大將よりの  
ふ青地のにしきのひたゝれに花折むすふ小くそくめ  
しさしきに御出有ければ坂田渡邊其外家のこわか侍  
ぎゝどうくたる有様つゐに天下のふ將はげんしの  
家にそなはらんと行すへかけてたのもしきワキ時に  
御大將いかに行ひて此所のようかいのていは何と候  
そシテ松崎承り此きりたにの城と申は九州にたくひ  
まれなるめい城まつ東南はむばしつみかぬまとてこ  
んりんさいまでそこはかりかたきなかぬミ國土のせ  
いかあつまりふし山を切こみく候共やはかうめは

し申へしワキよりのふ近比しうちやくせしめたり扱  
にシテはさん候御らん候ことく大由かゝとそびへ  
みねはやいばを立たることくにてしうのほく王か  
はつ疋の天ばにてもおとしゑかたきけんなんにて  
候ワキよりのふ御ゑつきあさからす北の方はろくち  
にてへいくたるかいかにシテされは北は一二町か  
程へいちにて候へ共すへは一き打のほそ道さるこか  
しかたけとてめいよのなん所をかへ候いてを二  
三十きさしむけたまはゝ百萬よきにてもやふりか  
たき惡所なりワキ大將聞召四方共にきれかはつたる  
なん所もとより兵らう馬物のく御ふんのかいりきに  
てふそくなしさらは心さしのをくり物を一見せん  
それくわたなへ承り候と一々したいに相しるすそ  
れものゝぐの品々春はまつさく小櫻や糸火おとし大  
あらめよはなまづおのほしかふと君か情にひかされ  
つうつろいやすきむらさきの糸はさまゝおとし  
けの四方しろの甲をそへ黒糸黒かは赤かはどうか  
はらぬいろはいくちよと松にからまるふちなはめす  
くなる御よのかゝみにはにこれる惡をあらいかは白  
糸おとしすし甲ほし白くはかたきん甲卯月さ月のす

へかけてさくうの花のよろひの色いつしか秋となら  
のはもみちにまかふにしきかは火おとしをもたかも  
へぎとうくちはからかはこかねさねのはらまきせん  
たんくさりあやおとし竹に虎のさうのこてしゝにほ  
たんのはいたてひやくたんみかきのすねあて九寸五  
分のよろいとをし兵こくさりたち刀黒さやしやくと  
うこがね作りのうち刀しらえの長刀しらきの弓ぬり  
こめとかりやそめはのそやゑびらやなくひしゝとら  
くまのあをりも有扱又あさぎくれなるむらさきや色  
様々のたつなの品しろふくりん金ふくりんなし地ま  
きゑかなかひすへたる家のくら色々のあふみをそへ  
花のこつくにかさりける弓やのいきほひ此太刀かけ  
の光にててきを千りに切なひけ天下太平國土あんを  
んめてたき共中く申斗はなかノケリ

#### 四たんめ

其後うちもりはきうしうのせいはいくはゝらすあまつ  
さへ松崎はけんしに一みしたさいふの城へ入ぬと聞  
此上は何と思ふとかなふまししよせんろしに關をす

へよりのふをふせきとめ其内にていとへ上り思ひの  
まゝに申しつめんとせ川兄弟に三百よき相そへ此國  
をばたのかうはくつきやうのようかいすいふんふせ  
きとゝめよ承り候としたくにこそ立にけり時にひろ  
さはや二郎ひさまつきたとひ千き二千きにて相かた  
め候共坂田わたなへしたかひ候へ打やふらんはひ  
つ定よりのふつくしくたり宿ぶせん國かさきの  
里しらきの藤太はとんよくふたうの者にて候へはた  
からにあかせたのまんになとは申候ましうちもり  
悦是にこしたる事あらしはやくとくといへの子郎  
等相そへ其身は都をさしてそ三重急きけるされはに  
や頼宣は城のようがいけんこによせてをそしとまも  
らせたまふ所へふせん國やすたの三郎はせ來りい  
また聞召れすや二かいとうさへきつてはやきらくい  
たされ候以の外の御ゆたんと色をちかへて相のふる  
頼宣聞召扱はくはらくに上りぬるかきやつにさへき  
られてはかなふまし乍去此城をてきのかたへとられ  
てはななかき弓やのきすならんいかに行ひて我は都へ  
上るなり御ふんは城にとゝまり相まもつてたまはれ  
はんたんだのむいかに坂田渡邊いそいてようい致さ

れよ渡邊承り大せいほろしのなんきしのひて被出候へと坂田渡邊斗御供にて城を出させたまひける御大將渡邊も一めかさにてかほかくしよにひそかに出たまへきんときあらいかはの物のく四尺八寸の太刀よこたへ白はたを打<sup>うち</sup>かたけゆらりと立出る渡邊みてこはいかにきんときしのお道なるに其はたは何事ぞけしからぬ有様也きんとき聞待かくそくをき太刀をはきたるかいてけしからん大將の都入に御家のはたなくてかなはんや渡邊あらもかしふんさうおうの出立有よろひぬきはたをもおさめたまへ公時けにあやまつて候しからは此はた城におさめやかて追付申さんとかへりけりかくて渡邊は大將の御供申しそけはきんときもあとより來りかくて程なくをはたのかうにそ付にける待うけたりし者共すはやそこそよりのふよと時のころをそ三重上<sup>さんじやうじやう</sup>にける渡邊は少もさはかすろしをす<sup>お</sup>る者をみて時のころは心へするの倉十郎聞よりもろしをす<sup>お</sup>るも人によるさいふは渡邊のつなあれなるは源の頼宣にてましますや渡邊我等は諸國をまはるあき人なりと申所へ公時はたをして來りけるくん兵共あき人の物のくちやくしは

たをもつ物かなと一とにとつとわらひける公時みて是そあき人の正しんけんしの郎等坂田の公時と云あき人なりいてをのれらにわらはせんとさきにすゝむるの倉をかいつかみとうとなけつゝくやつはら一とにとつと三重きりくすし渡邊はかけなるこまをはい取君をのせ奉りいそきける程なくかさきの里にそ付にける藤太はかねてよりうちもりに頼まれ内々心かけし事なれはするゝと立出こはおとろき入たる有様まつこなたへと申せは渡邊聞しさい有てしのひて御上りなりこよひはこゝに御あかし候へと藤太か内へそ入たまふていしゆよろこひかん所に入ひろさはに近付よりのふ坂田渡邊共に只今つかれて候いづれも大しゆにて候へはふし候はん所を打たまへあきしけ聞誠に此けひりやくにてしそんせはかれらとつくとやとりたる時分天上よりほこをおろしさしころし申さん是そんのまうたいれうかそこくのなんこくを打しよりはしまりしなりいかてがあまし申さんすいふん酒をしいたまへ心へ候とてうしかはらけゆうくん共に取もたせりよしゆく<sup>ゆ</sup>の御とせん御はらし候へと色々にもてなすされはにや頼宣公酒にあいし

うふかきといひ又はひしよかしくといひつゝめと色はくれないのそゝろにうきたつ斗なりことに坂田は大しゆなりさしうけ引うけすてにしゆえんに及ひけるされ共渡邊ちつ共くつろかすをそれながら大じをかへさせたまふ御みにて御しゆゑんは心へかたしやあ公時酒にみたるゝも時によりゆたん大てきのもとひいかに藤太しさい有て御ようしんのみきりなりいそいて酒を入られよていしゆ聞御ようしんも所による御けらい同前の某に何とて御心をかせたまふ御みも一つきこしめせと打わらいて申せはゆうちよ共心へこは御情なし柳はみとり花はくれない色をもかをもしる人そしるせめては一つとゆんでめてよりすかりつく渡邊大のまなこにかどをたてやあ藤太か様のしふんはのまんといふをとゝめんこそしんしつならめそゝろにしいるは心へかたしいか様内にかいしん有と覺へたり女はらは何事そひろうなりと一とにどうとつきのくるあるしあんにさういしきをもひやしてにけさりける公時きゝかれらこときやつめに何ほとこの事か有へきげうゝしの事共やと君御やすみ有ければ公時も枕引よせせんこもしらすにやどり

ける渡邊よりのふの御すかた公時かていをみてあつはれ人の飲ましき物は酒なりされはもろこしのをんせいきうかことはに酒過ぬれはしのうはしよくをおこたりかくしやはかくにすゝますふしは弓やをわするほんなうのなかたちちゑのけし水といましめぬるもことはりなりさしもめい將の頼宣公日本のはんくわいといはるゝ公時もてきみたれ入はやみゝとうたれなん渡邊か生れ付たるすいさう左のうてそゝろにかゆく覺ゆるはいか様しさい有へしとそはに有たる弓やおつ取やとりたるていにもてなし事をすましてゐたりあんのことく天上に物をとしきりなり渡邊すはやときつと見あくれはやいはの光しきりにて頼宣の御うへへ大のほこさかりける渡邊こはいかに矢とつて打つかひやいはの光をめあてにそら様にはなちければてこたへはたとして大のおのこほこ持なからをちにけるをやかて二刀さしとをす是におとろき頼宣御めをさましたまへは公時もをきにける渡邊かやうゝのしたいなりたゝ今てきみたれいらんす間ゆたんしたまふな心へたりと待かけける渡邊大をんあけ思ゐのまゝにしおふせたり首取たまへとよ

は、れはていしゆもひろ澤もこはめてたしと太刀引  
そはめかけよるを公時二人共にむすとき何かめて  
たきそをのれはらしおふせたるとは天上よりほこを  
おろせしおのこをしとめたりなんちは何様さい有  
へしと中にひつさけ都をさして上りける公時かゆう  
力渡邊かちりやくきせん上下をしなへ皆かんせぬ者  
はなかりけり

## 五たんめ

其後うちもりはよを日についていそけは程なくらく  
やうになりしかはすくにあにうちひてやかたに立入  
うちひてみてつくしの事おほつかなく少もいそけと  
たせいをくたしつるか御ふんかちを上りしゆへ道  
にてちかいて有つらんさるにてもやうすはいかにと  
有ければくたんのあらましのこらすかたりけるうち  
ひておとろきこは一大じ道にちかひし事なからのり  
かゝりたる事なればひきのほうりやくめくらしいひ  
しつめん常々本ノマかけ大臣になれしたしみしはか様の時  
のためさいほうおしますすけいしやううんかくあひな

ひけせうりまつたくほんまうをたつすへし二かいた  
うのいへの大事此たひなり佛神のかいりきをたのま  
んしよししよさんへいのりの使を立へきしあんとし  
くとめくらせと有ければさ川の庄司はもくねんとし  
ていたりしかひさ立なをしあゝかなしきかなやかへ  
つて御ばつは有共何のり生か候へき次ににせかきの  
めくらし文あくしはあらはるゝ物にて候へはけつく  
思召外なるきあつて御なんきに及ひたまはん事けつ  
せん又くけ大臣の御したしみを頼ませ給ふ事も是は  
と天下こつか大事のさたさうゝ其せん候ましこゝ  
を以てあんすればけんしはんしやう御家のめつはう  
と申けるうちひて大きに立腹しつらゝ此せんきと  
いつはうちもりをたてんためうちもりをすては何の  
ないだんか入べき身をすてゝも忠をなすはしんかの  
ならひおくひやう神にひかされあらさる事をはき出  
すはらうまうしたると覺へたりきやうこうしゆつし  
むやくそこ罷立といかりけるもりのりめんほくうし  
ないぬたる所を罷立よの中今は是までみをすてゝも  
忠をいたすはしんかの道とは尤なりつたへ聞もろこ  
しのごししよはしゆくんこわうふさの惡をいさめか

ねみつかからけんにあして一めいをとゝむいこくほん  
てう所こそかはる共いさめにめいをとゝむもりのり  
か忠の道ふひんと思召ればうちも公御生がい有二  
かい道の御家を御たて候へはくしうの千年ふゆうの  
いつときも同したのしみ一人の悪きやくにてはんみ  
んをなやまし給ふあさましさとといひもあへすたち  
をぬきわれと首をかきおとしゆふへの露ときへにけ  
りのりもりかさいこのていかんせぬ者こそなかりけ  
れうちひてみてにつくきやつめかしはさらうまうし  
たるにうたかひなしとかくへんしもきうにけいしや  
ううんかくとしめし合よろしき様にそうもんせんま  
つうちもりが上りしたんけんしかたへつゝめと其身  
は九條殿へと急きけるさる程につくしのらんけきら  
くやうにかくれなく折ふしまん中は御びやうきたる  
によりらいくはうの御前はうしやうさたみつすへ竹  
を召れきうしうにてうちもりのふくはくしつとい  
てきうちもりにつくし侍一みしよりのふうたれぬる  
とさたするか坂田渡邊を相そへくたしぬればよもさ  
はあらしと思へ共はんくわいとでもうんめいつくれ  
はせひもなしすてに二かいたうかたより二百き三百

きつゝぬけかけはや一二千もつくしへ下りぬるとな  
りこなたよりせいをつかはししかるへし其よういい  
たされよほうしやうさたみつすへ竹めとめをきつと  
見合御ちやうのことく坂田渡邊御供申候へはよりの  
ふ公にをいては何の御つゝかも候ましたせいをさし  
つかはされんな後の御あやまりになり候はんたゝ我  
我三人罷下り候はゝをそれなから二かいたうか二千  
三千のせいも我々三人もあまり事かはりたる事は御  
さ候まし源氏の御弓やに少もきすはつけ候ましとた  
た一筋に申上るらくはう聞召けにゝゝ此き然へし  
いそいてうつたてとのたまふ所へよりのふ御やかた  
に入せたまへは皆是はゝと斗りなりらくはう御  
らんしおことはされぬると聞ぬるかつゝかなきこ  
そめてたけれ扱やうすはいかにと仰けるよりのふさ  
ん候すてになんきに及び候ひしと坂田渡邊かはたら  
きにてのかれ來り候とちんせいにての次第いとこ  
まやかに御物語有ければらくはう聞召二人のとも  
からかうせついつもの事といひなから此度はへつ  
してしうちやくせりとかくきうにゑいふんにたつし  
ちよくさいをあふくへしとのたまふ所へ五條の中將

ちよくしとして扱も大内のせんしには二かいたうきやうぶ善次うらもりよりのふきやく心の由そうもんせしむ然共一方のうつたへ斗にてとかにおとさせたまはんけんさいの法にあらすよつてさう方召合られりひめいさつにゑいふんあらんとのりんけんなりと仰渡さるゝらいくはう承りをそれなから明日早々さんたい仕るへき由然るへき様にそうもん頼み奉ると謹しんでのへたまへはちよくしは御いとまこい有たいりをさしてあからるゝ其後らいくはう人々を近付扱ははやうちもりそうもんをとけぬるなさきほとよりのふか申如くならはあやうき事はなけれ共かれさへきつて上るほとゝの所そんなれはいかやうなるたくみやせん申まてはなけれ共よつくしんいを定め申ひらけ公時承りこは御てう共存せすこなたにあやまりなくして何の申ひらきかあらん千に一つも天めいつきつみにしつまは二かいたう兄弟をしやはにのこしをき申さんやむたいにくひをもきおとしゑんまか前のみあけとしてうきよのくかいをはなれんなたゝ一ねふりの夢ならんとよにあんかんとそひかへけるらいくはう聞召いさきよし公時天にわたくしましま

さねはおとろくへきにはあらね共二かいたうは君の御覺へめてたくくけ大臣になれしたしめはひいきのさたにて思はさるひやりも有やせんよしゝ其たんに及んでけんし一たうめつはうと相きはめ此らいくはうとかたゝ五人一所に思ひ定めはよの中におもしろきけんふつの出こんとにつこと笑ひさしきをたせ給へは四天王ひとりむしや御うしろをつくゝみをくり扱もゝ頼へきしゆくんかなたゝ今の御一こんを承りもし此もんたうにまくるならはみかともたいりもいはさはこそくけ大臣北面けくわんにいたるまてかたはしよりせうきたをしのはらひ切玉をみかくぎよくでんをたちまちうしほのうみとなし悪きやくふたうの二かいたうの一門其外一みのやつはら一々に首引ぬき立ならんてはら切てに手を取くみして三づの大かをさんさめかいて渡らん何のしさい有へきといさみすゝむ四天王ひとりむしやかしんていいさきよしとも中々申はかりはなかりけり

## 六たんめ

さる程に大内にはかねてよりの事なれば御さいたんの其ため時のくはんはくすかはらのさねより公ちよくをかふむりさろく所に御出有ければくきやう大臣れつをやつてさしたまふひろひさしの左のさには二かいたうしなのゝ守うちひて右のかたまん中のさにはひやうきにてさんたいなき故ちやくしらいくはうなをり給ふ其外國々の諸侍系ほしを列ね相ならふよりのふうちもりは本人たるにより兩方に相むかふ御しらすにはさう方の家のこ郎等いへゝの一大事と我もゝと相つむる掛いなのは守山べのもり國しゆりのしんたむろの家ひろちよくをかうふりらうせきあらはしつめんとうてをさすつて兩かのあいひかへけるまことにしたいのきしきさしきのていきゝとうゝたる有様ふるなしこうのへんのかつてもたやすく一ごんも出難くはれかましさは限りなし時にうちもり一つのそせうをさし上るうせうべん有なり是をよむ其ふんに曰くけんぼんのともし火ちよくさいをあふき奉るの趣扱も此度源のよりのふまう惡を相たくみうちもりを打ほろはさんとさうしうの諸侍にぐわいふんのまはし候間是わたくしのいこん斗には

候まし事をうちもりによせ九州をなひつけきらんのくはたて時をうつすへき所にあらすと存ちよくせんなりとかうしつくしせいをもよふし相かこみ候へはさんろより忍ひ出くはらくににけ上り候つらゝ此しゆくいのをこりといつは諸侍くわいかふのさしきにてうちもりよりのふにむかつてそれもろこしよりわかつてうへ取かけし事わうこより度々なり今以有ましきにもあらすちんせいのたんたいかうふりしこそさいはひ箱崎のつよりすちかいに石のつゝみをつかせなはたとひなん百萬にてよせ來る共中々あけたてましくつきやうのようかいと内たんいたし候へはよりのふもつての外にきしよくをそんしそんくはいなる惡こん家のこまてらうせきに及ひさしきをけたて罷かへりあらさることをたくみ候はひとへにてうてきのしんいをふくむのいたりよくゝしつふ御せいたんこいねかふものなり二かいたう兵部の善次うちもりとつゝしんて申とたからかにそよみあけるくはんはく聞召いかによりのふうちもりか申ことくはこ崎につゝみをつくならはしせんいてうよりよせ來るにくつきやうのようかいたるへきに何とてないた

んをはけつせざるそまつ此たんまつとそうもん仕れ  
よりのふさん候つゝみの事もよろしき道とは存せし  
か共しやれうじれうを召上其ざいさんを以つゝみを  
つかんと申候間それ日本は神國しん道をやふらん事  
もつたないしことに以ふつほうと王法はいつはんに  
してわてうの守りなかに是をやふらんは大なるせき  
惡佛神のまぐみきれ國にわさはひおこらんとぞんし  
扱そせいしとゝめ候とけんきよくのたまへはうちも  
り一くにつめられとやせんかくやあらんとあんしけ  
るあにうちひてもたへかねこはあたらしき事共かな  
いかによりのふ佛法なきとてわさはいおこらんやそ  
れもろこしにはこかんのなんていのきように佛法は  
しまり日本には人王卅二代やうめい天皇の御宇に佛  
法わたるいこくほんてう共に佛法なきさきのてい王  
はわさはひおこり皆國をうしなはんや此りきつとあ  
きらめよらいくはう聞たまひちか比に候うちひてそ  
うして物にはじりの二つそなはれりそれ上代にはも  
んじなくかつらをむすふことをあきらむ然るにいに  
しへはもんしなくても事たりし間もんじはいらすと  
てやめなはおほひなることかきまつ其ことく昔は佛

法なかりし間今もいらすとてやふらはわさはひをま  
ねくなかたちとも佛法のむねとする所はせきあくを  
やめせんをおこすをもとゝすはんみん一せんをおこ  
なへは一けいをやむる一けい家にやむるときんはは  
んけい國中にやむるいながら太平を致すとはそうの  
かせうしかふんくはうていにこたふることはなりこ  
こを以みるときんは佛法と王法は鳥のさうよく車の  
兩りんなれは何佛法をすてゝこくとゆたかなるへき  
うちひて聞てそうしてみちといつはたうかにもじゆ  
たうにも惡をやめんをおこなへといさむるはめつら  
しからぬ事然共しゆはさしあたるいかにちようと  
うせんのを以道ひく佛法はめにみへぬらいせをこ  
んほんとするゆへきよせつを以てたみのさいさん  
をついやすゆうみんたり國のかいとはなる共ふきあ  
らしいかにくゝとさをうつてを申けるらいくはうう  
ちうなつきをろかなりくゝそれ上代はしのうこうし  
やう家々のかげうをつとめなから道をしゆ末代の  
今は人の心かたましきゆへしのうこしやうの外へ  
つにしゆしやとたつて道をしゆ是もいふくをおら  
す作らすしてはんをしよくす則ゆうみんといはんや

然共そうもしゆしやもなくてかなはぬ物なればはん  
みんあけてたつとふに御ふんあたらしく佛法をはら  
ひすてんとは天まはじゆんのすゝめならんされは佛  
法をやふりてたらまちそんかいせられしもの天ちく  
にてはたいば大たうにてはくしやそんしやわかてう  
にてもりや是せんたいのしようこなり御へんもむよ  
うのことをあくこんし五たいたち所にそんばうしむ  
けんのせめおろしとことはをはなつてのたまへはう  
ちひてたうりにせめられかさねてつかはんことはな  
き所にくはんはく聞召さう方共にせんなき佛法のろ  
んはむやくやあうちもりよのふかつくしの諸侍にく  
わいふんまはせししようこばし有か中々しようこ御  
さ候よりのふか家のこひけたの五藤次宗時と申者に  
くわいふんもたせ是なるあさせの庄司かたちへつけ  
しを有國おとろき則其使の者召取くわいふん共に某  
かたへちさんいたし候よりのふ聞給いや／＼其五藤  
次はしさい有ておひ出す扱其惡人をかたらひ某か使  
に事よせ九州の諸侍をかたふけて有けるなうちもり  
聞されはつくしまて召つれたる五藤次をにはかにか  
んとうしたるとはいはゝたつへきそらことばかい

に命かをしきとてあさましきよと大こゑ上てのゝし  
りけるよりのふちつ共さはかす御前にてのたかこゑ  
ひろうなりうちもり天なまことのかゝみにて少もか  
んきよく有ましきしよせん其五藤次めにすいくわ  
のせめをあて誠いつはりをあらはさんに出されよう  
ちもり聞五藤次を召こめ置といへ共なんちかきやく  
心のいくさに取まきれいつく共なくちくてんすせん  
する所おことかしひつのめくらし文有上は是に過た  
るしようこはあらしとさし出す頼宣こなたに覺へは  
なき物をとさしひらきたまへはけにも九國へのめく  
らし文まかふ所もなきじ筆なれば是はいか成事やら  
んとせきめんしてこそおはしけれうちもりみて何と  
候よりのふ殿さほとこの事をいたしなからよくもあら  
そひたりそれかふしの本いかとつめかけ／＼申せは  
兄うちひてから／＼と打わらひゝかにらくはう二  
かいたうかぶつはちあたりたるか源氏のともからか  
天はつあたりたるか扱もみことの有様やさたのしさ  
いはきはまつたりあれひつたてよとげちをなすしか  
る所になみいたる侍の中よりゑほしひたゝれちやく  
したるおのこ立出某はいにしへ源氏の家に有しひけ

たの兵衛宗道と申者にて候かしさい候てとんせいの  
みと罷成候か今日兩けのろんに付少申上たき義候ゆ  
へかりに男とへんしまきれ入候とゑほしひたゝれか  
なくりすてければくろみかへつたるほつしなりされ  
は諸國をめくると申せ共ふる里なつかしく都へかへ  
り候所に子にて候五藤次よにゆゝしけなるていにて  
行あい候間しさいを尋候へはさん候四國にて頼宣の  
かんだうかうふり候所にふりよに二かいたううちも  
りへ召出され頼宣のしゆせきをにせもちて參るほう  
びことの外にあつかりかくのていなり猶事をしつま  
れははりまのさよの庄をたまはるやくたくなりと申  
某人にはめてたしと申扱ちう代のしゆくんをつみに  
おとしをのれゑいくわにはこらんといたすこと子な  
からもちくるいと存罷出うつたへ候五藤次は二條通  
に候とて公時と打つれ御前を罷立じこくうつさす御  
しらすにひつすへ父の入道なふしやつか首にうちも  
りのくたし文かけたり公時心へたりとばい取御前に  
さし上ればうせうへん請取よみたまふ其趣にいはい  
一大事相頼所にまつたふ忠節たるによりさしつかは  
す下し文の事はりまの國さよの庄並に九州にて一萬

町あておこなふへきものなり是はかへり忠のをんに  
よつてくたんのことし二かいたう兵部の善次うちも  
り同かしん岩せの太田左衛門ときもと大河庄司兵衛  
より國ひけた五藤次宗時殿へとたつからかによみ上  
たまふうちもりあんの外なれば色をちかへてさしう  
つふくくはんはく御らんし扱もそれなるほつし一人  
のこをすてまことの忠をつくす是日本のけんしんと  
やいはん五藤次をは八つさきにもすへけれ共入道か  
忠のほうひにくたし賜はると仰けるらいくはう御ら  
んしやあうちひてふつはちたちまちあたりたりいか  
にゝとのたまへはうちひて今はのかれぬ所と兄弟  
めくはせし太刀をすはとぬく二人のおさへこはらう  
せきととゝめんとするをゆんでめてへ切てすてらい  
くわうへうつてかゝるをやさしやと二人共にかいつ  
かみちつ共さらにはたらかせすくわんはく御らんし  
さたのしたいといひ御前のらうせきといひ兄弟共に  
せつふく申付よ承り候と御前をひつたつる二かいた  
うか家のこ郎等一とにとつとくつるゝを公時すかさ  
す一々に切ふせ其後　しれいゑいふんにたつし  
源氏の弓や彌さかへけるすへはんしやうめてたさよ

共中く申斗はなかりけり

作者 岡五郎兵衛

日比谷横町 又右衛門

# 源平武將論

## 第一

### わたなべ命ごひ

それたいへいには文をもちい、らんせいにはぶをもつてす、さればふんふはすいはのごとし、爰にんわう六十八せ、ご一でうのゐんのぎやうにあたつて、源のらくわうのかうけん、するがの國のちう人とをくみのかみうすいのさだみつとて、弓とり一人おはします、しかるにさだみつ一とせ、大彘山のしゆ天とうしをたいらけ、其なを天下にあらはし、ぶんふりやうだうよにこゑ、かたをならぶるものもなし、しかのみならず御子二人有、あねをばかつらのまへとて十五歳に成たまふ、すいたいかうも<sup>本ノマ、</sup>代にすぐれ、わざいかんざいにちやうじ、さればおもひをわかのうらなみによせ、心をしきしまのみにかうせり、つきはおとづるととて十三、さて又家のかうけん、いばらの五藤太た、かげとて、おもてにくぞう顯はれ、まなこの内人にすぐれてすさまじ

く、大ちからのかうのもの、かれを家のしんかとして、めてたくさかへおはします、うらやまさるは三重なかりけり、是は扱をき其頃みかとは、けつけいうんかくめしよせられ、扱もこんどらくわうあひはて、天下のぶしやうどうなし源平をくめしあつめ、きりやうをゑらみふ將をさだむへし、それくみなみなめしよせよとのせんじなり、かしこまり候とて一々次第にふれにける、扱其後にぎい京の源平みなみなさんだい申さるゝ、ひがしのかたには源家みなもとよりのぶをさきとしてげんじのぶるいしかふあり、にしには平のたいつねをはしめ、平家の一ぞくなみいたり、上だんにはくぎやうでん上人、そでをつらねておはします、はれかましさはかぎりなし、かくて平家の大將た、つねすゝみ出をうもん有、扱もこんど源の頼光しきよの後、ふ將すでにたいてんすそもく我等のせんぞと申は、にんわう五十代くわんむ天王代<sup>本ノマ、</sup>五なん、一ほんしきぶぎやうかつらはらのしんわうのそん、たかもちのしゆくんをしやうぐんににんせられ、はしめてへいしをたまはり、天下のふ將にさだめられしより此かた、せ上ゆたか

にして四海の外もくもりなし、され其平のむねもりより此かた、平家にふ將たいてんす、そのせんぞ平家のちやくくにて候へは、なにかはくるしかるべきこいねかはくは此たびのふ將、それがしがかうむつてせんぞ代々のふ將をつき、君をしゆこし奉らんとはいかる所もなくそうもんす、其時源氏の方より源のよりのぶすゝみ出申さるゝは、尤御へんのせんぞ代々のふ將、たれとしてしらさらんものや有、我等のせんぞ六そんわうつねもとより此かた、父たゝのまんぢう公にて候、頼光まで三代のふ將なりわれ有し上は、御へんふ將の望はいかゝ有らんと申さるゝ、たゝつね聞たまひ尤其御ふんのたまふ所も、しごくせり去ながら天下のしゆごたるべきものゝ、年じやくはいにてはかるくしく、それがししゝての後思ひのまゝに望たまへとあざけるやうにぞ申さるゝ、よりのお聞召何それがし、じやく年にて天下のしゆごは成ましきとや、扱天下のせいとうをもすべきものか、御ぶんがやうにおごりをさきたて、ゑいくわをほんとするものゝわざ成べきや、それふしやうたるべき物は、いかにも心をすぐにしてじんぎれいちし

ん、一つもかけてはあやまる所をはかるべし、それ天はたかきをしりへいちをふんで下としる、爰を以てくんしんのれいをわきまゆる、きみかみにあつてしやうをたゝし、しやしよくをまもりたみをなで、しんかにしては君をうやまいちうをなし、じんぎをただしうしてこそは國かをまもるみち成へけれ、御ぶんとんよくしんよく此二つをはなれずして、天下をおさめたまはん事思ひもよらぬしだいなり、いかにたゝつねそれがしじやく年には候へ共、御へんかごとくすいぎうなぞの年をかさねしよりは、ばつくんまさり申べしいかにくゝと仰ける、もとよりもんもふのたゝつねにて、へんとうにもおよばず大いきついでせきめんす、へいけの一ぞく是をみて扱もむねんのしたいかな、よりのふいま一ごんにもおよびなば、きん中とはいはせまじとつておさへさしころさんと、こふしをにぎりきばをかみすでにかけいでんとしたりしを、わたなべをさきとして四天王のもの共、かけいで大のまなこにかどを立、つばもと二三寸くつろけはつたとにらみ付、ゑゝやさなおのこがしなせぶり、禁ちうの御まへ共はいからず、

くはんたいすぎたるやつばらかな、此四天王が有をしらざるかむやうのうでだてびろうなり、今一ごんのへんたうにもおよびなば、御せんとはいはせましたいつねかかうべみぢんにくだき、源氏一とうの御代になすべきと、ふんじかつてたつたりしはふしことの大事とみへにける、くぎやう大じんあはて、中へ立たまふ、内よりのせんじにはたいつねが申所一つとしてりなし、ふ將の望かのふましよりのふいまた、ぢやく年なれ共すが源氏の大將なり、けふこう天下のしゆごたるべしと、忝もとうざにせいゐ將軍ににんせられ、御りんしくだるぞ有がたけられあさましやたゝつね、今はぶしやうの望たへめんほくなくも打しほれてぞ歸られける、源氏方の人々はやがて御前をまかり立、さながらかたをいからしよろこひいさみ歸られける、かのよりのぶ公の御いせ、かみ一じんより下萬みんにいたるまで、あつはれめでたき次第やと、皆かんせぬものこそなかりけれ

## 第二

たゝつねむほん並さたみつたゝつねを打事  
そのうち平のあつそんたいつねは、こんどだいらにて大いなるちじよくをかき、人のひはんもめんぼくほん國に歸り、あへてもつて家のしんか、うんの九郎なりとしをちか付いかになりとし、こんどのちよくぢやうあまりむげなく思ふなり、何とぞしてたうくんをかたむけて、第二のわうじを御くらいに付奉り、おごる源氏をほろほし平家一とうのよとなさんと、きんりきん國に有し平家方のもの共、はやゝふれよとあれば、承候とて三重ひそかにふれをぞまはしける、つゝむとすれど此事花の都へもれ聞へ、よりのふめせとのちよくぢやうなり、よりのぶかしこまつて御せんをまかり立、すでに日けんきはまり都を打立たまへば、するがの國にはたうゝみのかみさたみり、百きばかりで御まへにはせさんし、御ともして 三重よを目についでぞ下られける、かつさの國に聞へたる六ちぞうに御ちんをとらせたまひけり、たゝつね大きにおど

ろき此城にてはかのふまし、ほうしやうへおち行あ  
はの助をたのまんと、うらの山ちにかけ上りあしに  
まかせてをちてけり、扱又よりのぶかれがじやうへ  
おしよせ三重時のこゑをぞ上にける、人をと更にな  
かりけり我もくともみだれ入る、大將御らんじてな  
にさま是はうら山へおちゆきぬへし、さらすはかい  
しやうおほつかなし、なんぢらてわけをしてたづね  
よ、もし打取物ならば、ちやうなんのしろへまいれと  
仰あつて、よりのふ公 三重長なんに入たまふ其中に  
取ても、たうくみのかみさたみつはてせい百きば  
かりにて、うら山よりほうしやうを心かけ爰かしこ  
とたづぬるに、馬のあしをとおほかりけり、さだみ  
つみていかにくんひやうてきのせい、此山をはなれ  
ぬを心ゆるすな人々と、いふよりはやくをつついて  
三重時のこゑをぞ上にける、時のこゑもしづまれば  
さだみつ一ちんにうまかけ出し、かく申は源家のか  
しん四天王の内、たうくみのかみさたみつなりあ  
ますましきといふまゝに、大せいにわつて入 三重い  
くさは花をぞちらしける、去程にてきみかた打じ  
にして、たゝつねしうく二きにてしげみをくゝり

おちゆく所を、さだみつはやくかけ付そこもとへお  
ち行は、大將とみるがひがめかあますましきとをつ  
かくるたゝつねかなはしと思ひけん、取てかへし  
切むすぶらうとうんの九郎しうをへたてむずと  
くむ、うんの九郎も一ごのあんひ爰なりと、おこゑ  
を出しくみけれ共ばつくんかはるさたみつみつに  
て、やすくと取てふせやれがきめ、おのれ此さだみ  
つをうたん事物によくくたとうれば、わしとすい  
めかすねをしるにことならず、みらひをたのめな  
むあみた佛とゑかうして、くひふつとかきてけり  
其ひまにたゝつね、一さんかけてにけゆくをすかさ  
すおつかけ、馬より下へまつさかさまに引おとし、ほ  
そくびをみつもたまらず打おとし、太刀のさきにつ  
らぬいきをいかゝつてひへたりける、かのさたみ  
つか有さまひとへにせうき大しんの、あれたるけし  
きもかくやらんと、皆かんせぬものこそなかりけれ

### 第三

さたみつだうしん并みたいみちゆき

そのうちとをくみのかみさだみつは、大將を打し

本ノマ、

すまししるしを持せそれよりも、山したさしてぞ下  
らるゝ是は扱置、爰に又せいしうのちう人に權之助  
みちはるといゝしもの、此由を聞よりも何とぞして  
うばい取我かうみやうにせんと思ひさだみつに近  
付、のふ御へんは大將を打取たまふ事、弓や取みのほ  
んいなりけふの合戦に、さぞつかれさせたまふらん  
こよひは心しづかにやとられよ、たといばてきのぐ  
んひやう打のこされしもの共、をしよせたりといふ  
共我ゝふせぎ申べしと、げにたのもしくそ申さる  
る扱さゝへのさけを取出し、打とけかほにてしいけ  
れは誠にたけきさだみつも、うんつきぬれはさしう  
け引うけのむ程に、かずかさなればうつゝなく天し  
やうも大ゆかも、ひらりくるりとまへければばんし  
をたのみ申とて、其まゝかしこにかつはとふしせん  
こもしらずやとりけり、道はる此よしみるよりもし  
すましたりとよるこんでやかてくひをぬすみ取りそ  
きよりのふのはたもとさしてぞ三重いそぎけるすく  
に大將の御まへにかしこまり、たゝつね打て参りた  
りと、くびをしつけんに入ればよりのふ公御らん  
して、しんひやうなりとていせの國一か國をたまは

り、扱よりのふ公は長元四年八月三日に、たゝつね  
をたいじしてよろこびいさみ御かいちんとぞ聞へけ  
る、是は扱置さたみつは其よもすてに明けければ、か  
つはとをきあたりをみるに人もなしなむ三はうみち  
はるにたばかりれけるむねんさよいそぎはせまいり  
大將の御まへにて、かれとたいけつせんと思ひはや  
とひ出けるか、まてしばし我心かへつてそこつに成  
ならば、まつ代までのちじよくなりと思ひ、らうと  
うのたゝかけを御まへにめされ、はしめおほりをか  
たり我よりのぶの御まへにて、たいけつにおよびな  
ばかれに二ごんとはいはせしなれ共、たゝつねがく  
びぬすみとられし其ちよく、いかにしてかはきよ  
むべしきうばの道も是までなり、しよせんうきよを  
すてのちのよをねかふへし、なんぢは國に下り兄弟  
の子共を、よきに取立ゑさすべしはやとくゝとの  
たまへば、五藤太承こは口をしき御ちやうかな、誠に  
ふたはのむかしよりくんしつなしみふかうして、  
へんしもはなれ申さんみがいま此年になり、はなれ  
申べきやねかふ所の御とんせいなを二せまでの御と  
もと、申きつてぞいたりけりさたみつ聞し召れ、お

ろかなりとよ五藤太何れもちうは同事、おこと國に  
歸らすはたれかまへりてかたるべし、ひらに／＼と  
のたまへばあかぬは君の御でうとて、御かたみをた  
まはりさらは／＼との泪のわかれぞあはれなる、去  
程に五藤太うれしからさる御かたみの色にぞめか  
へて、ゆめちをたとることくに本國としてぞ三重歸  
りける、國にもなればわか君の御まへにかしこまり、  
泪のしたよりはしめおほりを申ける、わか君聞召何  
ち／＼上の御とんせいと申か、扱は其道はるはおやの  
かたきよなよしなにはるにても候へ我／＼かくて有  
ならは、いかでか其まゝをくへきそは、上やあねこ  
に、御いとまといふならばいなやと、めたまふへし、  
た／＼／＼のひてのほらんとてしう／＼ひやでうし  
たまひて、文こま／＼とかきしたゝめ御かたみの物  
に取そへをき、しのひて都へ三重のほらるゝ心の内こ  
そたのものしけれ、いたはしやなきたのかた是をはし  
ろしめされすしていかにかつらのまへこいしき父こ  
の御方より、たよりの有と聞つるにこなたへとのた  
まひて、かつらのまへをいざない有し所に出立、御  
らんあれはふしきやとのゝめされたる、御たてゑほ

しかりきぬに、文を取そへおかれけるいそき立より、  
御文を取上みたまひ、はつとをとろきみたまへは、か  
つらのまへ父ごは御とんせいおとづるは都へのぼる  
とかいて有、こはそもゆめかうつゝかとなけきしつ  
ませたまひけり、や、有て北の方くとき事こそあは  
れなり、ともにうたれたまはん思ひもうけし事共  
なり、いきてわかるゝ思ひのすへやるかたもなきお  
ぐるまの、めぐりあふせもなきさこくあまのおぶね  
のよな／＼に、こがれてぬるゝ我がそてもほすひま  
もなくあさましや、あとにのこり何と成なんわが身  
ぞと、御かたみの物に取つてこそをたてゝぞなく  
ばかり、しばらく有ては、うへやあいかにかつらの  
まへ、おとづる丸を都へのぼせたれをたのみて此所  
に有べきぞ、あとをしたふてのほらんとてかつらの  
まへをとまひて、たびのしやうぞ、三重なされけ  
る、すけのこがさでかほかくしたづぬる人ゆくすへ  
も、いつとさだめあらしのをと、よをさむけ成うす  
ごろもたもともすそもしほれきぬ、泪のつゆはおか  
へのしゆくふしいとゝたにつらきみの、なをも思ひ  
をしまだのさと父にはいつかおゝひがは  
あみと  
ふしな

る、水のあはれげに、われてもすへにと聞からにね  
かいはかなやのしゆくとかや、さよの山風はげしく  
てかさにいるのはがばらんばらんはら／＼と、たに、をしかのつまこいかねてなくこゑに、しの  
ぶや我なみだかさにふりつむこのはの雨、打はらい  
打拂一しゆはかうぞ聞へける▲ふしおもひきや、さ  
よの山ちをふみわけてこのはのおとにとわるへし  
とはと、かやうにゑいじたまひつゝにつさかはやく  
すぎのかどに、いか成かせかふくろいとふしきくは  
我子をみつげのがう、あすをもしらぬ我みとおもへ  
とも、けふまではつゆの命をいげだのしゆく、なみ  
のつゝみやかせのさゝらさゝんざとふく、はままつ  
ばらふし打こへて行ば是ぞ此、うきめみかはの八は  
しをふしといろ／＼と打わたり、いつか我みのおは  
り成あつたのみやだちふしふしおがみ、きせいをふ  
かくかけまくもしはしは爰にいせし成、思ひすゝか  
のふもと成しづかふせやにやどかり、しばしやすら  
ひ三重たまひける、心の内こそあはれなりよもすか  
らの御なげき、けにやまことによの中の人のおやの  
ならひにて、子をおもふみちほどにあはれ成事よも

あらじ、子ゆへにきぬるふしたびごろも、はるは  
るまよふ我みの思ひをいつかはれん、あさましやと  
しばし泪にむせばるゝおつるなみだのひまよりも  
いかにかつらのまへ御身のちゝのただみつは大かう  
の人なれば、平家方の大將たゞつねがくびを取、よろ  
こび歸られしに權之介とやらんにうばはれし事、む  
ねんとばかり思ひ切さいごのゆくすゑもかへりみ  
ず、よをすてたまふによりおとづる丸もせひかたき  
をうたんと心ざしゆくすへしらずにまよひいで、か  
かるうきめにあはする事子にてはなくてかたきな  
り、うらめしさよとてかたりすてゝぞなきたまふ、か  
つらのまへはきゝたまひ御なげきは御事本ノマはりなり、  
さりながら爰はかたきのりやうちと聞、あくじ千里  
をはしりかべにみゝ有よの中に、もしもかたきにと  
らはれて、うきがうへにとりかさねまたうきめにあ  
ひたまふな、なふをとたかしはゝうへとなみだと  
共にのたまへば、はゝ聞召扱はかたきのれうない  
か、さらばこよひおち行べし此みちを行ならば、  
もしもをつてのかゝらんにいぎや山じをしのばん  
とて、かつらのまへのてを引たまふふしつおちこ  
きゆり

ちのたつきもしらぬ山中におほつなくもよぶことり

本ノマ、

の、こゑもろともにわれもまたなみだのあめにそでしをれ月ひとりのみともなひて、そよとふきくる風をだにもしもをつてのこゑやらんと、跡をのみみかへりてあふささるさを打ながめ、泪と共にはるかのみねへぞ上ら三重るゝあらいたはしや、はゝ上はなげきといひたひといひ、つかれはてさせたまひてなふいかにかつらのまへ、しばらくやすらひたまへとて其まゝそこにとふとふし、たゑゝゝにこそみへにけるひめ君あまりのかなしさに、御くじをひさに上なふいかに母上さま、御心は何と候さやうになやませたまひつゝ、行へもしらぬ道のべのくさばのつゆと共にきへ給はい、何となりなん悲しやなのふ御心つよかれと、泪と共にのたまへば母上いきの下よりも、我は今ぞかぎり成ぞことは女しやうのみなり共、何とぞしておとづる丸にめぐりあひ、ごせをとふてゑさせよおや子のちぎり今ばかり、せめて此よのわかれの水御みが手よりうけたきはとのたまへば、ひめ君聞もあへずそれよりはるかのにへぞ三重下りつゝ、泪のみづをくみ上立歸りみたまへば、もはや

ことされたまひけりひめ君ゆめ共わきまへず、しがいにかはといたき付是はゝとばかりにて、我もきへ入かとなげかるゝおつる泪のひまよりもひめ君あまりのかなしさにかみにて水を打しめし、なふいかに母上此程こいわひたまひつる、あかでわかれし父うへのたむけの水、よきにうけ取おはしませ又此水は、都へ上りしおとづるが参らする今まいらす此水は、御さいごまでつきそひ参らせたる、あねのかつらかたむけの水人ざとまれ成此山にすてゝはゆかせたまふぞとせんなきしがいに取ついで、よべとさけべとかいぞなき何と成なんかなしやと、しばらくへ入たまひけるやうゝ泪のひまよりもくとき事こそあはれなり父うへおとゝゝに行衛しらすわかれつつ跡を尋て上りしも、母うへたよりいてうきをわすれしかひもなくすてゝは行かせたまふそやゆかてかなはぬみちならば、みつからをもつれ行たまへとむなしきしかいに打かゝり、こゑをしますなきたまふ折ふしをく山に、かねの念佛のこゑかすかに聞ゆ、ひめ君聞召かゝる物うきゑんさんにも、御そうやおわすらん参りて頼奉り、母のしがいをかくさんと

て泪と共に立より、あんしつの内をみたまふにさも  
たつとき御そうの、しやうこをならし念佛となへて  
おはします、しばしたゝすみ聞たまふかうみやうへ  
んじやう、十方せかい念佛しゆじやうせつしゆふし  
や、なむあみたゝゝなむあみ佛とゑかふ有、ひ  
め君うれしくも有かたさよとてふしおかみ、たまへ  
ども、たがいにそれともみへわかず、しはのあみとを  
ほとゝとをとつれ是はたひの者成か、此山中にて  
只今母におくれて候、御けちゑんにしがいをかくし  
たまはれと、泪と共にのたまへば御そう聞召、よく  
も來られたる物かな、さやうの人をとむらふこそ  
しゆけのやくにて候と、打つれたちそれよりもはる  
かの<sup>なり</sup>みねへそ上らるゝ、程なく御そばになりぬ  
れは扱もゝ御いたはしき有さまやと、やかてとち  
うにつきしるしをたてそてより、御きやうを取出し  
しばらくどくじゆましゝゝ、とんしやうほたいとゑ  
かう有ひめ君あまりのうれしさに、まもり本そんを  
取出しいかに御そう、是はみつからが二せまでたの  
み奉る、御はとけにて候へ共はゝのため御ふせにま  
いらする、御ゑかうあつてたまはれと泪と共に、わた

さるゝ御そうほんそんをうけとり、つくゝとみた  
まひてはつとあきれいかによしやう、このほんぞ  
んをはいしたてまつるふしきや、御身のちゝはいか  
成人そとのたまへは、ひめ君なみたの下よりもなの  
るましとはおもへ共、御そうを頼み申あくるうへた  
にはしらしたまふなよ、そもゝみつからかちゝは  
けんじの大將、みな本のよりのぶ公のしんかにとう  
とうみのかみさだみつと申人の、つまや子とのたま  
ふこゑのしたよりも、さたみつこそわれなりおこと  
はひめ成かと、たがいにそでに取付すがり付て、よ  
ろこひ泪をながさるゝやゝ有てさだみつ、くどき事  
こそあはれなれ、さてゝゝいまのもふじやはわが  
つまともしらずして、とむらひけるこそはかなけ  
れ、げにまこと人げんはこのよのいきのきるゝより、  
ぶつたいをゑるときくなれば、もふじやはわれをさ  
だみつとしるへけれども、もふしうのくもにへだて  
られ、ものいひかはす事もなく、さそやこひしくおも  
ふらんわがつまとしるならば一ごんのことはをかけ  
て、さいごのなこりをおしむへきものをと、ころもの  
そでをかほにあて、きへいるやうにぞなげらるゝや

やありてにうどう、このうへはちからなしまつゝ、  
こなたへまいれとてひめをいさなひいほりにかへり  
うきことゝものあらましをかたりたしては、わつと  
なきおもひだしては、さめくゝとそなけれける此お  
や子の心の内、あはれともなかゝ申はかりはな  
かりけれ

#### 第四

みちのぶかも参けい並おとづるに打るゝ事

さだみつにうだうはひめにむかつて、扱ゝかゝる  
をく山にまよひきて母にはおくれ、やるかたもなき  
くるしみを思ひやられてふびんなり、去ながら我め  
ぐりあふ事いまだぶつ神三ぼうも、すてざるゆへな  
り此上は都へ上り、さかたのみんなふきんときの北の  
方は、おことがためにはおばにて有頼申さは、いか  
でそりやくに有へきやいそぎひめをともしひ、それ  
よりも都をさしてぞ三重のほられける、都になれは  
よはにまきれきん時のやかたにゆき、あんなひかう  
て内に入きんときにたいめんし、扱ゝひさしう候  
きん時とのかやうのすがたと成うへは、二たび又方

方におもてをむくべきとは、ゆめくゝおもはざりつ  
れ共子ゆへのやみにまよふとは、かゝる事をや申ら  
んあのひめにめぐりあひ、ことには又母にはなれみ  
なし子となり候へば、やるかたもなきあまを舟、な  
みぢにまよふ此子なりほうゆうのなしみといひ、又  
は御みのないほうひめがためにはよそならず、是ま  
てめしつれまいりたりあはれみたまへと、はしめお  
はりの事共を泪と共にのたまへば、きん時よこてを  
ちやうと打扱はさやうにてましますかたゝよの中  
のふうぶんは御みぎやくしんのたいつねと、心を合  
たまふやうに申たりされ共四天王の人ゝこそ、さ  
んくわいの折からは御へんの事のみ申なり、まづま  
づこなたへとをくのていにしやうじ、扱北の方に  
かたればゆめともさらにわきまへず、するゝとは  
しり出扱もゝおことが事のみ、思ひしに是まで來  
るかうれしやとかつらのまへにいたきつきさきたつ  
物は泪なり、きん時もさだみつも共に泪にむせばる  
る、やゝあつて北の方さだみつどのにちか付て、扱さ  
て御みはあまりに心のたけきゆへ、しそんのすへも  
わきまへずよをすてたまへば、子共はかやうにるら

うしてあまつさへ此子が母も、山中にてはかなくなりしとき心の内のせつ成をおもひやられてかなしやと、又さめ／＼となげかるゝさだみつとかうのへんじなく、たいもくねんと打うなづき涙にくれておはします、きんとき申されけるは今はなげきてかいもなし、よりのぶ公へごん上申一たびよにたてまいらせんこなたへ御入候へとかくて月日を三重おくらるゝ、是は扱置其頃權之介みちはるは、大ばんのやくにてぎへきやうして有けるが、有時々やくしごん太郎道のふをちか付、我りうぐはんのしさい有今日かもの明神へさんろうせんとおもへ共なにとやらんこよひのゆめみ、心にかゝり候へばそれかしかみやう代にさんろう仕れかしこまつて候とてとも人あまためしぐし三重てほり川を出、かものやしろへ参りけり是は扱置、たいかけは三でうのへんにいたりしが是もかもへ参りけるが何とか思ひけん、たいかけはあとよりゆきけるごうしきに、たいいまの大みやうはいか成人ぞとたづねけるごうしき何心もなく有のまゝにぞ申ける、たいかけかたきと聞からにきもそゝろにうれしくて、いそぎおつかけ道のぶをかい

つかみ、みちんになしうつふんをさんせんとこぶしをにぎり力あしをどう／＼とふんではやをつかけんとしたりしか、まてしばし我心それがし一人むねん本<sup>ノマ</sup>、申さんより、わか君にしらせ奉り跡をしとふてかもへ行、ちばうをもつてうたんとてはしり歸り、わか君にしらせまいらせ候二人もろ共、爰かしをかけまはりしかのかはをもとめ出し、かものやしろへ三重いそぎける、明神になればしう／＼二人のかはを身<sup>本ノマ</sup>たまい、はいでんに上りおしかのふしたるふせいにて、たいほうせんとふしたまふかゝる所に道のぶしんせんにとうといて、しよぐわんちやうじゆといのりける、たゝかげじぶんはよきぞとかつはとをき、はしりかゝつて取てふせはやあそばせとぞ申ける、わか君ゑんのいたをどう／＼とふみならし、我をたれとかおもふらんさだみつか一子、おとづる丸なりなんちかちゝみちはるを、せひ一太刀とねらへ共をりをゑざれば力なし、なんちはみちはるがちやくしと聞く、おのれなり共うつてむねんのはらさんとほそくびちうに打をとすたゝかけ是にありやとて、こしのつがいを切はなしとゝめをさし立のかん

としたまへば、らうどう共が是をみてあますましきと、大せいおり取まはしひみづになれとかゝりける、たいかげ是をみてもとより大かうのものをなればかたきを四方へおつちらしわか君をかたにかけ、つなのやかたへ三重かけ入ける、さる程にたゝかげつなの御所にまいり、かやうくのしだいなりひとへにたのみたてまつるとそ申ける、つな此由を聞よりも心やすかれ人々とて、をくにしやうじよきにいたはりたまひける、かゝる所におつての物共もんぐわいに來つて、大をん上てよばはりける、たゝ今是へかけ入たるらうせきもの、こなたへわたしたまへわたされぬにおいてはやかたの内へふみ入てらうせきせんとぞ申ける、つな此よしを聞よりもんにたてたるつくほうを、おつとつて門外にはしり出なにおのればらは、たがやかたとそんしかゝるあくごん申ぞや、われをたれとかおもひかくすいさんのはき出すぞ、ただししらすにきたれるか、さだめて此わたなべがてなみの程をかねてより、しらざる事はよもあらじいらざるかうげんはじかんより、あし本のあかき内にやあめんだいばら、はやもどれとぞ申けるかたきの

中より、しげみの十郎といつしものなにつなゝればとて、きじんにてはよもあらじと、たちまつかうにさしかざし一もんじにうつてかゝる、わたなべみてしやおのれはやさしきおのこかな、此わたなべにむかふてかゝる、ゑゝおのれは命はすへたかやれ念佛申せ、申たかといふよりはやくかうべみぢんに打くだき、あしたのつゆときへにけりのこりしやつばら、四方へばつとおつちらしじやうちうさしてひいたりける、かのわたなべかふるまひあつはれおにかみにもまさりし有様やと、かんせぬ者こそなかりけれ

## 第五

おとづるみちはるたいけつ并みちはる最期  
そのうちちもらされしらうどう共、我やに歸り此よしかくと申ける、みちはる大きにふくりうしいかなんぢら、此うへはつながたちへかけいつてうちはたさんとおもへ共、かへつてそこつに成ならば、むねんをばはらすしていぬじにせんも口をしかるべし、よりのぶ公へごん上し二人の物をうけ取、かうべをはぬる物ならば、つなもあんをんにあるましきと

おもひさだめて、とる物も取あへず御所をさしてそ  
三重あがりける、おまへになれはつゝしんてかしこま  
り、はじめおほりをこん上す、よりのぶきこしめしな  
んぢが申ちやう、ことはりにてはありけれども、一は  
うをきいてげぢはならずつなか二人のものをいだし  
んも、いかさましさいあるべしそうともにめしだい  
し、てんかのふしのがんせんにてりひのじつふをた  
だし、ゑさすべし、此むねをあいふれよとの御ちやう  
なり、かしこまつて候とて三重一々したいにふれにけ  
る、さてざいきやうのしよさふらひ、めしにまかせて  
しこうあるわたなへの源五、二人の者をうちつれて  
しゆしあれば、すへたけきんときほうしやうも同御  
まへにしこうある、かくて權之介みちはるすゝみい  
て、申けるは、いかにわたなべどのそれがしがちや  
くし權太郎をうつたる、ろうせきものをいだしたま  
わぬのみならず、おつてのものまでうちたまふこと  
なをもつて心へず、しさいをきかんと申けるわたな  
べにつこと打わらひ、さては御ふんはふしのほうを  
ぞんじられ候や、よのつねのものだにも、たのむとい  
ひてきたるものをかたきへわたすほうやある、其う

へこの物どもはとをくゝみのかみさだみつがちやく  
し、おとづる丸らうとうのたゝかげなり、さだみつと  
はつねくゝほうゆうのなじみといひ、さるによつて  
かくたのまれてありけるは、そのうへ御身おやのか  
たきとてこのものども、すねん心をくだきねらひし  
に御へんうんつよくしていであはず、むねんをはら  
にすへかねみちはるをうつたるは、ひが事成かしか  
るに御へんからうどうとも、それかしかもんくわい  
にきたつてあくごんのはきちらし、せひいださすは  
ろうせきせんと申により、もんにたてをくてつぼう  
をおとしにそつといたゞかせて候と、あざわらつて  
ぞ申けるみちはるきいて、さてはそのろうせきもの  
はさだみつか子成とや、そのさたみつがしそんふか  
くみつきたまはゞ、御身のうへの大じ成べしことの  
つのらぬそのさきに、とうくゝわたされよとぞ申け  
る、すへ竹ほうしやう一どうにさだみつしそん、ひい  
きの物そのみ大しとのたまふ事、よにもふしぎにぞ  
んずるなり、ゆへをきかんと申けるみちはるきいて、  
おふまことにおのくゝはらいくわうのみより、さだ  
四天わうとよばれいちみだうしんの人々なり、さだ

みつのごやくしんよくぞんせらるべし、一々御まへ  
ゑごん上あれといさぎよく申ける、人々おもひよ  
らざるぎやくしんの、一みなるといひかけられへん  
たうにもおよばすいかにとおつる丸ちゝがふた心な  
きをもむき、よくゝごん上申へし一せ一ごの大じ  
は爰成とぞ申されけり、おとづるつゝしんで申やう  
たたみつきやくしんと申事、みないつはりにて候そ  
れをいかにと申に、一年たいらのたゝつねたいじの  
ため、御げかうのみぎりちゝさだみつたゝつねがく  
ひとつてりよしゆくにやとり候所に、あのみちはる  
にたはかられ、くびをうばゝれそれをむねんにぞん  
じ、ゆくするしらずになりし事、みちはるかゆへなれ  
ばかたきにては候はすや、かたゝゝいかにと申ける  
みちはるきいて、よくこそいひたれおとづるまるな  
んちか申ことくたゝつねたいじのきざみおことがち  
ちのさだみつ、たゝつねと一みしてうらのやまぢを  
しのび、ほうしうのかたへおつるところをそれがし  
ぼつかけをつちらし大將をくんでうち、そのひまに  
なんぢちゝはかげをもみせず、をちゆきしはそのし  
やうこには、それたゝつねがしるしをきみの御まへ

にちさんせり、かやうのしやうこある人に、へつにし  
さいはあるましきは、いかにとおとづるまるなんちか  
父、たゝつねがくびりたるしやうこばしあるかい  
かにゝとたゝみかけてぞ申ける、おとづるはしや  
うこになるべきものもなく、あきればてたるはかり  
なり、かゝる所にさかたのみんなきんときまかり  
で申さるゝは、ことのしさいはしらね共さだみつか  
なれのはて、したくにまかりあり候めしよせられ、御  
たつねしかるべきよしを申ける、きみきこしめし是  
こそのをむ所なれ、はやこなたへとの御ぢやう成か  
しこまつて、にうだうかたへつかひたつさだみつこ  
のよし聞よりも、いてましきとはおもへとも、おとづ  
るたいけつにうちまけたるときくからに、ころもの  
そでをひきむすんてかたにかけ、太刀はつかうでせ  
ひたいけつにうちまけなば、みちはるめをたゝう  
ちにとおもひさだめて、いそぎ御まへにかしこまる  
さればいこくのはくいしゆくせいは、しゆやうざん  
にとぢこもり、二たびくんかんをはいせじとうかへ  
てしゝたる事共も、あとにおもひのなきゆへなり、か  
やうにふるもふらんわれもまた、みちはるほどのあ

く人にたゞつねが、しるしをぬすみとられしそのち  
しよく、いかにとしてかくんかんをはいしたてまつ  
らんと、山中にてともいかにもなるべきに、ひめが  
ありさまふびんさにきんときのやにまいり、年月を  
おくりしにまたおとづる御まへにてたいけつにつかけ  
まけ、ぎやくしんのものとなりぬるよしをきくから  
に、申ひらかんそのために二たびまた、めん／＼の御  
めにかゝる事どもは、おんあひの子どもにひきいだ  
されしゆへなりと、めんほくなけにさしうつつむいて  
なみだをはら／＼とながしける、ことはりせめてみ  
な／＼なみだをながさるゝ、よりのぶこうの御ちや  
うにはいかにさだみつ、なんぢか申所はめんほくな  
き一つうなり、たゞつねがくひなんぢがとつたるか、  
また一身としておちゆくをみちはるをつかけうつた  
るか、はや／＼申せとの御ちやうなり、そのときさだ  
みつおしなをつて申あぐる、三代そうをんのしゆく  
んに、なにとて一心候べきやたゞつねをば、それがし  
が打取たと申上る、みちはるすゝみ出たゞつねを  
うつたるせうこの候か、さだみつ聞てせうこそ候  
へと、やがてくわいちうよりたゞつねがはたさし物

を取出し、是／＼御らん候へ人／＼うつたるせうこ  
なりとて、さし上るみちはる是をみて、そのさしもの  
はつくりてや申上ん、まことのせうこになりかたし、  
なにかしがごとくたゞつねかくびを御まへに、ひろ  
うあれいかに／＼と申ける、其時入道申けるはいつ  
そやみの、國、ふじはらのたかひだいきやくしつめ  
んため、君御しまわたりなきざみ、源平のこらすうつ  
て出候に、たゞつねがさし物に月にほしを打たるを、  
御まへへめされし事のみさだめて、御まへに候べし  
引合て御らん候へと申上る、尤とぎよいあつてそれ  
それ引合よとの御ちやうなりかしこまつてやかて引  
合て御らん有に、ちつ共ちがふ所なしみちはる、色を  
うしないせきめんす其時さだみつ、大をん上なにと  
へんたうはましまさぬか、御みあらんたくみをし御  
かんじやうにかけたまへ共、道にもあらぬたのしみ  
ゆへ天ばつづいにのがれずして、さやうのていにな  
りたまふ御ぶんかやうなるさふらいを、かうめうぬ  
す人と申なり、なにとへんとうはましまさぬかと、い  
きをいか／＼つて申ける道はるは、たゞしほ／＼とし  
てひれふしける、ざちうに有し人々道はるを取て、ひ

つたつるよりのぶの御ぢやうには、此上は本國に  
ふぶして、もとのごとくにあるべしみちはるをとら  
するなり、心のまゝにふるまへとの御上なり、かたし  
けなしとて御まへを罷立、みちはるがかうべをはね  
本國さしてぞ歸りける、扱いにしへのやかたにやか  
たを立ならべ、二たびゑいぐわにさかへける、千しう  
ばんせいめでたきともなか／＼、申はかりはなかり  
けれ

寛文二壬寅年十月吉日

山本九兵衛板

# 敵討のいこん

## 第一

### 源平敵討遺恨并頼光北國

本ノマ、まうひそかに、おもんみるに、天下たいへいに、おさまる御代とは、申せども、天さいくんだり、じんくわを、やふりまさにこくどの、らんとなる、こゝに多田、まんどちうの、御ちやくしせつつのかみ、源の頼光は、さんぬる貞永三年に、かいしなの、大しやう、高井のくらんと、ありのりを、ことゆへなく、うちほろぼし、らくやうに、かひちん有、みかどをしゆごし、たてまつる、ゆみやの、いとくこそゆゝしけれ、扱御家のしつけんには、ふちはらの、なかみつ、并ひに、めつらしからぬ、わたなべのつな、さかたのきんとき、うすいのさだみつ、うらべのすへたけ、其ほか、ふだいのしよ侍、ちうぎをまもり、あひつむる、かもんのはんじやう、日にまして、あかしくらさせたまひしを、うら山ざるこそなかりけれ、是はさてをき、其頃また、大江の大しん、きよ村として、其身くきやうの、いるながら、

心かうにましますゆへ、てうぼきうせんに、身をやつし、ふゆうをせん一に、このまるゝによつて、すどのてうてきを、ばつし、ついにくげを出て、ぶけになり、とうし天下には、きよ村か頼光かと、くるまの兩わのこくとく、萬みんおもんし奉る、したかふ所のらうどうには、やぐろ八力がんせい、やにぎの平太清丸石田の左衛門むねひろ、田川の源内、ひでつぐとて、かれら四人のもの共は、力打物ゆみやを取ては、頼光の四天わうと、いづれかかうをつ有べきと、さたするほどの、ゆうしなり、爰に又、清村の家の子に、はつざき源太兵衛、うちつぐと申もの、ばつざよりつと出、なひゝ申あげ候、それがしがあにて、候ものかたき、川しまひやうご介、つねきよ、源のよりみつへ、いささかのきうよう候て、やせん罷のぼり、今日しゆつけ、仕り候年ゝすじつの、もうねんはれたく、ぞんし奉り候間、せひ御いとま、下され候へと、申上る清村聞たまひ、それこそさいわひの、事にてあれ、かまひてゝゝしそんな、すいふん心をはたらかし、くび取てしさんせよ、はやくとゝありければ、うち清なゝめに、よろこびて御まへを罷立、ちこくうつり

てかなはじと、御前を罷立三重すでによういと聞へける、人あまたにて、かなふましと、しやていやきりの、小太郎をめしぐし、其外の手のもの共は、爰かしこにかくしをき、小太郎とたゝ二人、いまやゝと待いたり、さるほとにかくてつねきよは、此由を聞つたへ、是日本一のことにて有、いかにもして、かへり打にうち取べしとてわざと人おもつれずたゝ一人、くさりかたびら、二かさねかさねてきるまゝに、しづしづと行所を、二人のものはみるよりも、すかゝとたちむかひ、やあめづらしやつね清、はつさき源太きやうだいなり、心へたるかといふまゝに、ゆんでめてよりはさけみる、さあしつたりと、いふよりはやくぬき打にゆんでのかたさきより、くひちうに打をとし、めてよりかゝるはつさきが、もろひざすんと、なぎすへて、のりかゝつてくびを取、扱もくせうし成ありさまかな、此うへはゆだんすべき、ことならず、もし大せいにて取まかれては、かなふましと、すぐにそれより、頼光の三重やかたをさしてぞ、いそぎける、御所にもなれば、頼光の御前にかしこまり、右の次第を、つぶさにあひのべひとへにたのみ奉る、とつつし

んで申あぐる、頼光聞召、扱もくゝいさきよきはたらし、しんびやうのいたりかな、もつ共わざはひを、まねくなかだちなれ共、たのむといふて、かけこむを、いかでかもつて見はなさん、いそぎこなたへゝと、御座をたゝせたまひければ、時に四天王申けるは、心やすかれつね清殿、此うへは、天地かさかさまに打かへり、しゆらたいしやくのあつき共か、千萬きにて来る共ゆめゝもつてわたすまし、あはれ扱ことかなふえをふくべしと、おもふ折からなりけると、いひもはてぬにきよ村からうとう共、われもゝとはせ来る、まつ石田の左衛門と、やつきの清丸、たゝ二人内に、入さだみつすへたけにたいめんし、扱もたた今、川島ひやうご、つねきよと申もの大急の清村の家の子、はつさき源太、同じやてい小太郎、二人のものをうつて、此御やかたへかけこみ候間、すみやかに御わたし候へと、ほうじやくぶしんにを申ける、すへたけ聞て、扱もぎやうゝしゝ有さまかな、我等はさやうものの、はんはいたさぬか、近頃そこつ成人々やと、さあぬていにぞ、こたへける時に清丸つつと出、いやゝゝそこつとはいわせまし、まさしく此御内へ

かけ入たるをみると、けて、是までまいりたるうへは、何とちんしたまふと、かなふまし、ことのたゝつものぬそのさきに、とく／＼御出し候へ、せひ又出されぬにをみては、ゆみやをもつて申うけんと、くはうけんはなつてのゝしりける、時にさたまつこらへかね、やあこぶんはいまた、じやく年とみへしか、ゆみやをこのむはおとなし、乍去わしのすみかを、すゝめののぞむにさもにたり、わとのばらが、ぶんざひにて、われ／＼にむかつて、ゆみやたては、むようなり、ことのつものぬ其さきに、いそひでかへられ候へと、大きにあざけて申さるゝ、清丸聞て、はらをたて、いやさあわしやすゝめは、いさしらず、ふゆうはほかにあらばこそと、とびかゝらんとする所を、むねひろ取ておさへければ、さだみつは、すへたけかせいしつゝ、兩方ぶじにてかへりける三重あやうかりける次第なり、やかたになれば、君の御前にまいり、よしをかくと申あくる、清村大きにりつふく、此うへはとかふ申におよぶまし、いそぎをしかけふみつふさんと、うへを下へとひしめく所へ、渡邊坂田か、はせ來り、あんなひかうて内に入、大將きよむらにたいめんし、是

はせつつのかみ、頼光かかしん、渡邊のつな、さかたのきんときと、申ものにてござ候、さき程は御つかひに、あつかり候へ共、其せつはたぎやういたされ、たゝ今まかり歸られ事のしさいを承はりとゞけれ、取あへすわれ／＼を、さしこされて候、扱もかの川しまとやらんか、頼光やかたへ、かけ入たるとの、たしか成せうこ有て仰らるゝとそんせられ候へは、其たんきつと承はりとゞけて、まいれとの御事にて、ござ候と、さも大ようにぞ申ける、時にやくろの八力、かんせい聞もあへずつと出、誠以方／＼は、渡邊殿さかたとのにて、おわすよな、まつもつてよき折からに、御近付をもとめて、しうちやく仕候、さりなから川しまか事はかんさきからうとう共、たしかにみとめて、かへりしうへは、何とちんほう有ても、かひあらじ、たゝすみやかに御わたし候へかく申かけしうへは、せひ請取申さては、かんにんいたさぬ、きにて候へは、とう／＼御出し候へ、いかに／＼と申ける、きん時間もあへず、はてなきといふに、せひあると、申さるゝうへは、とかふ申におよはれず、此うへはずいぶんてから次第に、はひ取たまへ、とらすはゆみや

の、ちじよく成へし、さりながらごへんたちか、ぶんざひにては、何とやらんおぼつかなし、よく／＼せいを出して、取たまへと、あざわらてぞ申ける、四人のもの共はらをたて、あふかあはさるか今に、おもひしらせんと、一とうにはらりと立を、渡邊きつとみてあしはらく／＼かた／＼よ、しつかひそれは、はむしやなどの、しやうきやうたり、まつしづめて物を、聞たまへかのくせものは、しんばつ此方に、かくしをかぬか、ひつちやうなれ共、せひにおゐて、たいさんとあるうへは、兩家のゆみやを、はげむべき、じこくとうらい力およばず、さりながら、今日は目もくれて候へは、さすがに清村、らくはうとて、はんみんさたする人々か、切取がうだう、などのやうに、やちうのいくさは、まつたいまでの、かきんとてもの事に、につちうによせられ候へ、花／＼しきさんくわい、仕り候はんと、べんせつさはやかにのべければ、きよ村聞て、誠もつて、四天王のすい一、渡邊程ありけるものかな、それかしかまへにて、是程までいさぎよく、物申さんものは、あめが下にはおほへず、あつはれかう成ゆうしかな、さあらは明日の、たつの一天に取かけ

ん、さ候は、かへりて、此よし申されよとて、れんちうさしてぞ、入たまふいづれもつゝひて、はらりと立、時にきんとき、らうどう共か、袖をひかへのふ、かならずやくそくたがへたまふな、明てう御出候へ、べちにちそうは申まし、此きんときかひそうせし四尺八寸の、おにきりまるの、そみ次第にいたしかせ申べし、いとま申ぞかた／＼、とおもふまゝにあつかうし、もんくわいさして出けるか、又立かへつて、二人のもの、大をんあげていふやうは、天ちくしんだんは、いさしらず、ほんてうにおゐてをや、我君をてきになり、われ／＼といくさをせんもの、まづしやうるいは、おほへなし、しにこうきたるやつはらを、たてわりだう切、くるまざり、ひじゆつとつくし切てあそばんもつ共とて、いさみにいさんで、立かへるきん時かふるまひ、又渡邊がゆうさひぶんふ兩わの侍あつはれげんしの、まれものやと、扱ほめぬ物こそなかりけれ、

## 第二

よしのりさいご並なかみつ川島うちじに  
此事なをもかくれなく、みかどゑいぶんまし／＼て、

大きにおとろかせたまひつゝ、よの内に兩方へちよ  
くしを、立させたまふゆへ、天あけゆけは、兩人共に  
さんたいある、内よりのせんしには、此度のらうせき  
はひとへに天まの、わさ成べしかたゝは、じりやう  
兩わの、ゆうしなり、たゝかはゝともに、しやうかひ  
におよぶへししからば、兩かうのかばねをはむ、一つ  
のきつねあらはれんは、ひつぢやうなり、時にてうか  
をたれあつて、しゆごすへし、其をもんばかりなき  
は、ちうこううすきゆへなり、たとへかの川しまゝ、ら  
いくはうをかくしをく共、なきとちんほうするうへ  
は、さへぎつてのいこんは、ほうにすぎたり、又頼光  
しんじつなきにきはまりなは、いくたひもゝ、をん  
びんにさたすべき所に、かへつてふれいのふるまひ  
は、兩方共にあやまりたり、猶上にも川しまゝ、頼光  
内にあるときく共、清村わたくしをもつて、ふるまふ  
こと有べからず、いづれもひやうちやうのうへにて、  
其さたすべきものなり、かまいてゝ今より後、二人  
か中にいこんをのこす、事なかれと、忝も御かはらけ  
を、下さるれば、こは有がたき次第とて、さいすもどし  
つ兩三度の、さかづきにて、わばくあるこそめでたけ

れ、かくてさかづき、おさまれば、みなゝおいとま  
たまはりて、御前の立て、それよりも三重わがやゝ  
に歸らるゝ、さる程に、清村したくにかへり、家の子、  
らうとうめしあつめ、やあかやうゝの、りんげんに  
て、力およばず、わばくいたしかへれどもさらにむ  
ねんは、はれやらず、せひにをゐて、明日のくれ程に、  
む二む三に取かくべし、よういせよと下ぢすれば、承  
はり候と、馬物のぐとひしめきて、うへを下へとかへ  
しける、此ことなをも、かくれなく四天王は聞付て、  
君の御前にかしこまり、かくのだんゝ承はりとい  
けて候、きやつにせんをこされつゝ、ごもんくわいに、  
こまのひつめを、かけさせては、御家のかきんたり、  
とかく此方より、さかよせにをしよせてざんしにふ  
みつぶし申さんと皆一同に申上る、頼光聞召尤方々  
か申所は一りありといへ共、忝もりんげんにて御か  
わらけまで下されて一たんわほくしたる身か、いか  
にきやつめかすゝめはとてりんげんをむくのみなら  
す、ていとをさはがせ申さん事ひとへにぐにんのな  
すわさなりとかく川島を、こよひの内にひそかにつ  
の國たゝのさとへさし下しきよ村がをしよせなば、

のぞみのごとく家内をさかさせ申べし是まつたく、  
ゆみやのちじよくにあらす何れもそのむねほつせよ  
とて、御いとこに多田の藏人よしのりこ御家のか  
うけん藤原のなかつ、其外くつきやうのつわ物二  
百よきろしのけいごと、あひさだめ三重くるゝをおそ  
しと待たまふさるほとに、かうじもんの出す、あくじ  
千りをはしるとかや、清村はやくも聞付てらうとう  
共を、まねきよせ是こそねかふ所なれ、道に相待打と  
らん、はや打たてやもの共と、しのびく都を出つ  
がふ其せひ三千餘騎、せつつの國と、やましろの、さ  
かひ成、きつね川に、ちんの取、三千よきを、二手にわ  
け三重今やくと、待いたり、さるほどげんし方には、  
此ことおもひよらずして、川島を、女のこしに打のせ  
ていづれも、下にはものぐかため、子のこくはか  
りに、ていとを立、やうくゆけは、程もなく、東寺四  
つづかあきの山、あけんとつぐるゑんしの、かねも聞  
へける、もはや都は、とをさかる、いそげやくと打  
程に、きつね川にぞ、付たまふ、夜はほのくとぞあ  
けにける、待かけたりし、かたきのせい、すはやこれ  
ぞといふまゝに、東西より、あらわれ出て、時をとつ

とぞ、あげにける、時のころも、しつまれば、大將清  
村、こたかき所に、こまかけすへて、是にすゝみひか  
へしは、大忍の大じん、きよ村なり、おのれはら、い  
つくへとてかおとすへき、こしの内成川島を、すみ  
やかに相わたらせ、それさもなきに、おゐては一人  
ものこさず、打とらんいかにくと、のゝしれは、な  
かみつゝもあへず、つつと出、いかに清村、きはせ  
んきんよりもおもく、命はかうもうよりかろし、川  
島を、わたせといふは、ゆみやの道は、かつてしら  
ず、をゝことわりなり、なまくげばら、ぶしのきんげ  
ん、いかでしるべき、いでてなみを、みせんとして、  
かけ出る所を、川島しげしと引とめ、つらく此  
らんしやうを、あんするに、皆是をれかしゆへにて有  
きよつねしやうがい仕るうへは、別にいこんは候ま  
し、とかく川島、はらきらんと、太刀ひんぬくを、取  
ておさへ、あゝふかくなり、きよつね、たゝ今ごへん  
に、しやうかひいたさせては、われゝゆみやのちし  
よくなり、とかくごぶんは、百きか一きに成までも、  
すいぶん命をまつとうし、此たびのなんを、のかれ  
たまへやと、ふかくせいしてなかつは、二百きを一

手にして、むらかりいたるまん中へ、一もんしにわつて入 三重ひはなをちらして、たゝかひけるされ共よせては、大せひにて、すきをあらせず、もみたれは、みかたのぐんびやう、のこりすくなく成にけり、よしのり御らんじて、いで一いくさはげまんと、馬ひきよせ、うちのつて、たづなかひくりしづゝと、出たまふ所に、河内の國のぢうにんに、せきのやの兵衛、まさみち、此よしをみるよりもあつはれ、よきかたきぞと、おもひつゝ、是もたづなかひくり、しづゝとかけよせて、まいりそうといふまゝに、二打三打うちあひしが、さらにしやうぶのみへされば、よくまん、もつ共とてむまのうへにて、むんずとくみ、りやうばかあひに、とうとをち、うへをしたへとかへしける、せきのやぶさうの、ゆうしといへとも、よしのりさらにこと共せず、とつておさへ、くびをかゝんとしたまふ所へわらはのくまわう、をくればせに、來りつゝ、よしのりのくさずりをたゝみあげ、つかもこぶしもとをれゝと、三かたなさゝれながら、よしのりは、くまわうを、とつてひきよせ、二人共にくびかききつて、ひつさげ、たちあからんとしたまふ、かな

にかたゝ中を、三かたなまで、さゝれければ、さのみはいかでことふべき、たちゝよはゝとして、かしこへかつはと、ふしたまふ、是はまんちうの、あねうへの御子なり、こゝろきひて、大ちからとはいへ共、うんめいつくれは、いたつらに、卅八を一せとして、やけのゝつゆと、きへたまふ、むさんなりける、次第なり、なかみつはるかに、是をみて、一もんしにはしりより、なむ三ぼう、しなしたり、さてもゝあさましや、はやくもかはりたまふ物かなと、なみだをはらはらとぞながしつゝ、今ははやちからおよはず、しでの山にて、御待候へ、やがてをつつき、申べしいでいで、御とふらいに、いまひといくさはげまんと、大をんあげていふやうは、ふちはらのなかみつ同川しま、是にあり、われとおもはんもの共は、かけあはせて、しやうぶをせよ、まいりそうといふまゝに、む二む三にわつて入、くもでわちがひ十もんじに三重ひじゆつとつくしてきりまわる、おもてをあはするものはない、しかれ共二人のもの、いたでうすでにきらひなくすかしよの、きずをかうむれは、いまは五たいも、じゆうならねば、さう人はらの手にかゝらんより、いざ

や爰にて、じがひせん、さてもく、しれぬは人の身のゆくゑ、かくやみくくと、この所にて、あひはつべきとは、おもはざりしに、ゑゝ口をしや、むねんやな、さぞやらいくわう、いひかひなくや、おぼすらん、よしゝ是もまよひなり、いさめいどまでちぎらんと、なかみつは五十三川嶋は四十八、さしちがへて、おなじまくらに、ふしにけり、あつはれおしき、さふらひやと、上中下にいたるまで、みなをしまぬものこそなかりけれ

## 第三

## 頼光四天王北國下向井道行の事

大弐の大じん清村は、心にかゝりし、川島や、ならびに、よしのりなかみつをも、おもひのまゝに打すまし、さへつのまゆを、ぞひらきける、され共清村らうとう共を、ちか付て、いかにかたゝゝわれりんげんのそむき、がいにまかせて、ふるまふうへは、さためて君の、ちよつかんをかうむるべし、さればむかしより、てうてきとなりしもの、一人として、ほんいをとげたるものはなし、よくく物をあんするにあたるかたきは

頼光なり、いざ先此たびは、いつちへも立しのび、じせつをうかゝひ、頼光を打取へし、然らば人あまたにては、かなうまじとて、らうどう共には、いとまをゑさせ、れいの四人のもの斗、以上しうく五人、打つれゆきかた、しらずしのびしは、三重すさましかりける次第なり、さるほとに、都には、きつね川に、いくさあるときこへければ、四天王をはしめ、其外のしよ侍われもくとはせ來りとうざい南北を、はしりめぐり、かなたこなたと、たづぬれと、かたきもみかたも一人もあらずして、たゝ打うたれる、しがひ共は、さんのみだせるごとくなり、こはふしきのしだいやと、ざい所の、もの共を、近付て、ことのやうすをたづねける、さん候いくさのはしまりは、こんてううこく、おわる所は、むまのこく、二時あまりのたゝかひに、げんし方の人々御大將をはしめ奉り、その外の人々、なかみつ殿とやらんも、いさぎよくもはたらきて、皆皆打しになされて候、扱かせんおわるとひとしく、かたきの大將、清村殿とやらんは、しよぐんせひに、いとまをたまわり、皆ちりくゝに、まかり成候、清村とは、わづかしうく五人にて、ゆきがたなくなりた

まひ候とはしめをはりのことねん頃にぞ、かたりつ  
つおいとま申てさし人は、をのかすみかにかへり  
ける、四天王是を聞、扱はよしのり、ななみつ、かなわ  
て打じに、ありけるかや、せめてわれ、一人な  
り共つききたらば、かほどまでは有ましきにゑ、口  
をしきこと共かな、一せのふかく是なりと、四人めと  
めを見合て、はらゝなひてぞいたりける、中にもき  
ん時、なみだをおさへ、此うへはとかふ申におよぶま  
し、たとへいつくの、うらはへおち行たり共、南はく  
まの、なちのをき、北はゑちこの、あらうみ東はつか  
る、そとのほま、西はちんせい、はかたのつまでも、を  
つかけおつめ、たつねあひ、此ほんもうをとぐへき  
に、打立たまへ人ゝと、はやかけ出るを、渡邊取て  
おさへ、のふけつきにはやるも、ことによるぞ、かや  
う成時に、いらちぬれは必ふかくを取物なり、おもふ  
にかたき、跡をおそれ、こまをはやめておち行べし、  
然るをわれ、いか程てひとくをひ行共、さらゝ  
もつてかなふまじ、日本ひろしといへ共、わつか六十  
餘州いつまでかくれとぐべきぞや、我ゝかくてあ  
るならば、いかでほん望とげざらん、只何事もそれか

しに、まかせられ候へ、それしを一時にけつするは、  
ちかふしてなりやすくなからへくろうをつくすこ  
と、とをふしてなりかたき、道なれは、何れも皆、すか  
たをやうし、國々をめくりつ、清村か有所を、聞出  
しいそぎ、都へつげられ候へ、一せの忠せつ是ならん  
と、泪と共に申さるゝ、諸侍共承はり、渡邊か一言を、  
ほとんどむねに、つうだつし、いさい畏て候、すいぶ  
ん尋出し、ちうしん申候はんと、すぐにそれより人々  
は、おもひゝにわかれ、本ノマ、心の内こそゆゝしけれ、扱  
四天王の人ゝは、草村にすてたりし、よしのりな  
みつが、くびを尋出し、むねんながら力なく三重てい  
とをさしてそ、歸りける、都になれば、頼光の御前に  
罷出一々次第を申上る、頼光大きに、おとろかせたま  
ひ、何よしのり、ななみつは、打じにして有けるか、こ  
ふんをせめて一人なり共、さしてへ下ししものなら  
は、かくやみゝとはせさせし物を、ゑゝ口をしの次  
第やと、かうくはいあれとかいぞなき、扱其後に、二  
つのくびを御らんして、扱もゝよしのり仲光か、忠  
義の道をたがへずして、いさきよき打死は、さすかけ  
んしのもんようたり、おもへはをしきもの共を、やみ

やみと打せては有よな、いつか敵を打取て、此者共か、きやうようには、ほうすべき、思へはくむねんやと、忝も御大將、さうがんに御涙を、うかめさせたまひければ、四天王をはしめとし、其さに有し諸侍、みなく涙をながさるゝ、其後頼光、御泪をおさせたまひ、いまはなげきてせんもなし、よしのりなかみつか、あととふらひてゑさせよと、御しやていゑんかく坊に仰付られ、ほうしになして、御跡を、とふらひたまふぞ有がたき、其後の御ちやうにはいかにめんめん扱も、清村かゆくするを尋に、つかひしもの共か、さうを待かみちなれ共、こつすひにしみわたり、まつもまたれぬ、しんていなれは、それかしも一命かけて尋出べし、此うへは清村を、打ゑすは、二度ていとへ歸るまし、何れも、よつくかくごいたされ候へと、仰ければ、四人の人々承り、おろか成御ちやう候、天地をくゝり、天のかけらは、力およばず、此しやばせかひにだに、有ならば、なとかあまし申べき、はやく御やうい候へと、皆一同に申上る頼光御ゑつきましまして、扱いずくよりか、尋んと仰ければ、渡邊承はりそれ人はねにおすと申候へは、まづ北國の方を、御

尋あれかしと申上る、頼光けにもと思召三重やがてしやうそく、なされける、ふるびたるかたびら、打はをり、ごんすわらんぢ、しめはひて、すけの、おかさでかほかくし、ぢよのものはつれたまはず、しうく五人すくくと三重御所を出させたまひける、頃しも時はかみな月、中の五日のこと成に、ほくろくだうへと心ざし、いつかかたき、清村に、あはた口こそめでたけれ、はやくも爰に大つのうら、打でのはまよりおぶねにめされ三重かひろはるかに、こがれゆきくうらうらやまく打ながめ、なみにゆられてた、よへり、頼光のたまひけるやうは、いかにかたく、せんちうのつれくゝに、かじんのつらねをきたりし、此水うみのうら山の、めい所をかたりさかすべし、まづめでにみゆるは、せたのはし、なみまになかれてほのくゝと、ろはんかくも井のかけはし共、かゝるけいきやいひつらん、つくくながめは、石山寺、かのいにしへの、藤しきぶ、此寺にこもりつゝ、大ひのかけをたのみてこそ、こすいにうつる月をみて、すまあかしの、まきをかきはしめ、ほとふけん、の、六十帖中にも、わかむらさきのまきそのかなれはとて、むらさきしきぶ

とめされしと、聞しをこゝにうつしみてげにもくゝ  
ゑならぬうみつらに、山田やばせのわたしぶね、たび  
のならひのおもはずも、くもゐのよそにみし人も、お  
なしふねになれころもたちわかれしも、そでぬれて、  
いそうつなみのたへまより、三井のふる寺ほのみへ  
てしもよのかねや、ひくくらん、なにをたよりにから  
さきの、ひとつ松さへ、冬木せで、ちとせの色やむす  
ぶらん、そなたはしがのうら、ちとりはねをは、水に  
とぢられて、しばしはあさるかれあしのよしやおも  
へは何事も、神にいのりをかけをひの、忝も此ごんげ  
んはな、たつの三てん、よこの一てんよこの三てん、  
たつの一てんと、ちかひたまふによつて、御なを山王  
こんげんと、いわ井、王城のきもんを守りおはしま  
す、やれあれをみよ方く、ひらやよ川のよあらし  
に、おき行舟のほをかけて、こゑ打あぐるかたかたの  
あはれと聞ゆる斗なり、みかみいぬかみか、み山、高  
枕して、とこの山、いわこすなみ打おろし、神といふ  
も、白ひげの、やとうのひかりしんくとして、いと  
としゆせうさまさりけり、をき中にく、くろみて物  
のみへけるは、竹にむまる、ちくぶしま、辨才天女と

ふしをがみ、にをの入うみほのかにて、しづかたけよ  
りふくあらし、みねの白雪さそひきて、なみのまにま  
にちりくるは、花かとのみぞうたがはる、はや今づ、  
おきも程ちかし、をせやかん取ほにこへかけよ、承り  
て舟子共、聲をそろへて、とんどろたん本ノマくくと、ろ  
ひやうしのをともかすそひて程なくかいづに付せた  
まふ、各舟より上らせたまひ、と有所にお宿をめし、  
舟ちのつかれをはさるゝかの頼光の御しんてい、  
四天王か所存の程、何れをどれとたくらへん、君々た  
れはしんもしんたりと、上下萬みんをしなへ、扱かん  
せぬものこそなかりけれ

#### 第四

清村きのめの城に籠井たき山源家へよ力

かくてその、ちよはほのくくとあけければ、かりの  
やどりを出たまふ、頃はしも月はしめつかた大ゆき  
ふりてさむかりしかげにもつきせぬ、しきしまのみ  
なれぬさとの、なつかしやとそなたの方をみたまへ  
ば、まつの一村あるもとにくびきりならべ、たかふだ  
そへてかけてあり、立よつて御らんあれば、何く源

の頼光からうどう共、國／＼をめぐりつち切がうだうするによつてかくのごとおこのふものなり大系の大じん清村とかひて有、いづれもよこでをはつたと打、扱は國／＼へさしつかひし待共、かたきにゆきあひうたれぬるか、よく／＼立より、みたまふに是はいりゑの藤次、そなたにはあしやの太郎、何れもつよくはたらきたると、打みへておもてにきず、二か所三か所、かうむらざるは、なかりけり、頼光御泪をはら／＼となかせたまひ、しばし物をものたまはねは、渡邊もせきくるなみだをおしとめ、今ははや、きよ村一かたならぬ、御かたき、こつすひに、とをりてぞんずるなり、たとへはふりつむ、ゆきにうつもれてのばらのつゆときゆる共、こよひは此へんをはなれず、心をつくしうかゝひたまへ渡邊かくせとして右のうてさひかゆければ、ひつちやう事にあひ申候、そのすひさうしきなみに候と、申上る、よりみつ聞召それかしも、何とやらん、心に物のかゝるなり、いさらはこなたへと、みきはの方へ立よりたまふか、中にも公時は、みへさりけり、こはいかにと人々はせんき有し所へ東の方よりゆきふみちらし、ゆらりゆら

りと、あゆみ来る、やあなんぢはいづくへゆきて有けるぞ、さん候此べう／＼たるのばら、山中にていか成くせものに、あはんもぞんせず、然るにかんきにとぢられつかれてはいかに、心かたけく共何のやくにもたつましとぞんし、そのようにのためにさにと出、是をもとめてまいり候、君も聞召され候へと、あはいひをしたゝかに、さゝばにつゝみ、御前にさしいだせは、頼光なゝめにおほしめし、やかて取あげ、きこしめししだい／＼にすゝめたまふ、やう／＼ゆきもはれければ、きん時申けるは、是でこそなれ、此うへは、しゆらたいしやくの、あつき共か、何程きたつてしやうげをなす共、とうはつよるゆきははるゝいかでかあまし申さんやと、うでをさすつて申ける、おゝいしくも仕りたりとて、御きげんはなはだ、かぎりなく、とある山かけに、大き成いわあなのありければをのの立入たまひける、日もはややう／＼くれけれ共、ともしひとても、あらばこそ、たゝまう／＼しん／＼としてこらうやかんの、なくこゑものかさま／＼心ねありてや、さけふらん、いとゝさひしさまさりける、やゝありてきん時申けるやうは、まことにかゝ

る、なんぎやうくぎやう、なさるゝも、是みなかたきのゆへなれば、いつか扱きよ村にめぐりあひ、むねのけふりを、はらし申さん、けちゑんあれや、日天月天、南無八まん大ぼさつと、手をすつて身をもたへ、きばかみならし、はがみをなしおもひ入たるきせひのてひ、誠にしゆしやうにみへにけり、さだみつ是をみて扱々きん時のをくそこもなき、きねんのていなどか佛しん三ぼうものうしゆうなくて有べきや、そうじてかゝる山中にて、きんのはなしをいたすればかならずへんげのあらわるゝと、むかしよりも申、ならはし候へはいさゝ其物かたりをはじめてまゑんのものを、引出しかんやのつれゝはらし申さん、めんめんいかにといへは、頼光聞召、是日本一の事を、申出して有、いでゝ頼光、かたつてまはさん、何れもちかふよりて聞たまへ扱もそれがし、十一歳の頃かたよ、我きうばの家に、しやうをうけ、源家のちやくしたれば、いくせのこともあはん身かおろそかにては、かなふまじ、心ねをためさんと、おもひ、ある時よふけ、人しづまりて後、しのびて、一人やかたを出、とりべのにわけ入てかなたこなたと、はひくわひするに、

つくれるつみのきへやらず、がうくわにもゆるつかも有、かすゝのそとばごりんをかきわけゝとをれ共、是ぞとおもふふしきもなし、あまりのことのもだしさに、とある所をみてあれば、大き成つかあなり、やかてかの、あなへとび入て、みてあれば、死人を其まゝ打入るあなとみへて、かみをみだせる女のしがいもあり、又二つ三つに、切入たるからだも有、頃はかみな月中じゆんのこと成に、むらさめ、一村さつと通り、いなづま天をかゝやく所に、物のあしをと、きびしくきこゆる、何ものやらんと、心をすまし待うけしに、何とはしらず、どうとなげこむ、はつとおもひさぐりてみれば、死人のたうより上なりはるかにあつて、又どうより下をなげこむ、それがしやすからずおもひ、やかてをつ取、なげかへせは、又はなげこみ、かへせはなげ入、三四五ども、せりあひしが、うへよりいらつて、とびこみし所をおしならべてひつくみ、そのよのうしのこくより、うへになりしたになり、爰をせんともみあひしか、つひにせうぶも、つかすよあけてみれば人にて有、是はといふてたがひにけみやうじつみやうをなのりそにて、其まゝ、しうゝの、

けいやくし打つて立かへりぬ、それをたれそといふに、是成渡邊にてあり、其時それがしは、十一歳、つなは十歳、にてありしか、きのふけふとは、おもへ共、はや卅年におよびて有、今迄つゝみて、すぎぬれ共、こよひのとせんに、かたりしそと、こしかたゆくすゑを、さんげあれば、人々よこ手を、はつたと打、扱も扱もためしすくなき、御ふるまひ、とかふ申におよばず、きくにぞきもをひやしける、わたなべ、つく／＼うけたまわり、誠におほせのごとく、何事も／＼、はやむかしがたりと、まかり成候さあらばそれがしも、身のさんげを仕らんと、いひもはてぬに、何ものとはしらず、いほりのまへをたいまつふりたて、ゆきふみちらして、とをりしを、火かげにすかしよくみれば、六尺ゆたか成、大のおのこ、太刀をよこたへ、さもすまましき、けしきなり、四天王きつとみて、さあくせものよ、のがさしと、われも／＼と、をつかけて、取あし取、くびをおさへ、たかてこてにぞ、いましめける、扱よくみれば、ほうしなり、渡邊つく／＼打ながめ、あらふしぎや、此入道は、何とやらん、みたるやうにおぼゆるか、人々いかにとへは、きん時間て、されば

われも、さやうにそんするとして、みあげみをろし、打まもり、やれみたやうなこそだうりなれ、清村からうどう、やくろの八力、かんせい成は、いかにごぼう、ひさしうこそ候へ、われ／＼は、つなきん時、さだみつ、すへたけにて候か、ごへん共しらで、なわをかけ、近頃そさう成事をいたしせうしにこそ候へと、かんらかんらとぞ笑ひける、頼光聞召、何清村か、らうどうとや、してなんぢがしうの、きよ村は、いづくにあるぞと、のたまへは、かんせい聞て、君は君、しんはしん、きやうげべつでん、ふりうもんしと、こたふ、渡邊聞てやあもつたいたなくも、其ごは、三がいのどくそん、しやかきんげんわとか、心へとは、ばつくんにちがふべし、よしなきことをいわんより、しうの有所を、まつすぐに申せ、さもあるにおゐて、なんぢか命は、たすけてゑさせん、いかに／＼と申けるきん時間て、こはなまぬるき、いひ事や、きやつかつらつきにては、何とさひなみたまふ共、とてもゆくゑは申まじ、心づくしに、そこのきたまへと、取ておさへ、くびねち切て、すてにけり、渡邊是をみて、あゝそこつなり、きん時、何とぞして、とひをとさんと、おもひし

に、あまりみしかき、しわざかな、乍去こよひの大ゆきにべちに、とをるものはよもあらじ、しよせんきやつか、あしあとを、したひ、たづね申さんと、あれは、君をはしめて、人々は此ぎもつ共然るべしと、ありし所を出たまひ、ゆきのうへなる、あとしるべに、尋行、かなたこなたと、みわたせば、ゆんでのいわかけに、一つのいほりぞ、ありにける、あやしきよとて、やかた立よりさしのぞき、みたまへは、清村しうく五五人、いほりの内に、ならび入る、日頃のねがひ今なりと、皆かけいらんとするを、頼光取ておさへいやくこゝにて、うつてはせんもなし、ほつするむねの、ありけると、たちより、あみどをほとくと、をとづれたまふ、内より、すへつくかといへは、いや源の、頼光なり、清村殿は是に、ましますかと、のたまへは、大きにさはき、どうてんし、たちかたなよと、ひしめけは、いやさやうにおどろきたまふな、まつしづめて、物を聞たまへ、扱もこのたびの、らんしやうとかくのせんぎにおよひ、兩らうせきに、罷成、それがしも、ちよつかんをかうむり候、さればてうてきとなり、くちはてんは、むねんに存、とかくきはうに、みぐりあひ、君の

御前にて、せひの次第を、申上たかひに、こめんかうむらんため、かやうに國々を、しゆきやうせしに、ふしぎに是にて、かうがん申たり、いさく都へ同道せしめ、うむのしやうれつ、きはめ申さん、日頃の御所ぞんとは、ちがひみれんにおぼへ候と、あれは、きよ村聞て、ことのだんいさひ、あひ心へ候、まづそれに、しばらく御待候へ、心得申と、先いほりのへんをのきたまふ、時に清村、らうどう共を近村、かれらか爰を、しるべき事にあらず、扱は入りきは、きやつらに、ゆきあひ、此へんにて、うたれたるは、ひつぢやうなり、たゝ今頼光、申せししなく、皆いつはり、おもへ共、かくぢう所を、しらるゝうへは、かれかいふにまかせて、ともなひ出道にて、ゆだんのみすまし、うつべきに、何のしさひか、あるへきや、人々いかにと、ありければ、もつ共此き、しかるひやう候、はやとくとくと、せんきはまり、扱あみどをひらき、まつこなたへ御入候へと、内にしやうし奉り、兩將れいぎたいしく、たいめん有、清村申さるゝは、誠わづかのぎに付て、たがひにしんいの、けふりを立候こと、是めんくわとや申さんと、ありければ、頼光聞召、仰のごと

紀御局考に彼物語の源氏君は嵯峨天皇に准へ桐壺天皇は桓武天皇に朱雀院のみかとは平城天皇に冷泉院のみかとは仁明天皇になすらへ奉り扱日本紀といふは日本後紀續日本後記の事なるを書紀より續日本後紀までの四ふみをむかしはたゞ日本紀といひつらん故にこゝにもおほらかに唯日本紀との給ひしなりと有て猶委き事ともあれと言長ければ略ぬあけて見へし誠にめてたき説なりかし

枕冊子に頭中將タラノヲ蘭省花時錦帳下と書て末いかにとて清少納言の許に文給ひしに草のいほりをたれかたつねんと書添て返しけるを譽て此事必語傳へき事なりとなん定しと源中將フツネ清少納言に云聞せて御名は今草のいほりとなん付つるとの給ひしは同し心はへにて其比かく興して殿上の人々異名なと付給ひしこと多かりけんかし 扱旁には日本紀局とのみあれと論又新釋惣考に引たるにも群にも契本にも御局とあるそよろしき○このふるさとの女の前にてたに 前のしりうこちいひたる條のことなり○侍らんよ 論には侍るらんよとあり

このかみ式部丞といふ人のわらはにて史記といふ書よみ侍しとき聞ならひつゝかの人はおそようよみとりわするゝ處をもあやしきまでぞさつく侍しかば書に心いれたるおやはくちをしうをのこゝにてもたらぬこそさいはひなかりけれとぞつねになげかれ侍し○このかみ式部丞 旁契群ともにこの式部丞と有て旁にはこのを兄と注し式部兄惟規を云といへりさる事ながら兄をこのとのみ云へき理なし論又新釋惣考に引たるにこのかみとあるそよろしき又或人は子コノ之と云ことならんかともいへれと他より親に對て子コノをいふとき又親より子コノをささといふはめ御許同腹の兄をさして子之某なといふへくはあらす扱このかみは同腹の中に子之上たるの意なれば子之とのみにては言不足古事記白檮原宮段に故吾カレハ雖兄ニ不宣爲上是以汝命爲上治天下云々カレハヘニニアレベタフヘニモテナリキコトカミマシテアノシタシロとあるそ子之上の意なる何れにまれ兄のことを子之とのみいふへき理なし

大系圖卷十に閑院良門長男利基系良門公贈太政大臣正一位利基

中將兼輔參木中從四上兼輔納言

雅正利部大輔豐前周防守從五下

爲時越後守  
正五位下

惟規イカ  
三位從五下母攝津守爲信女

惟通安藝守從五下

寺阿  
定退

女子

上東門院女房紫式部是也源氏物語作者或  
本云雅止女云々爲時妹也云々歌人 右衛門  
佐原官孝室 御堂關白道長妾

按に雅正女とある本は誤なるべし然らば惟規は甥なり爲時の  
詞に史記よみとりのとくさときに付て男子にて云々といへるも  
姉ならはさも有ましくおしはる又御堂殿  
の妾とあるも誤なるが紫家七論に論たり

群又契本に史記といふの五字なし按に有方勝ぬ

へしその故はまつこのあたりは御許の源氏物語の  
據あることを顯さんの下心ある事にてかの物語は  
しかと是を據として其事のみを初より終まで書つ  
ゝくる類にはあらて千萬の書ともの中よりいさゝ  
かつゝとり出てしかと其書とさせる書はなき中に  
も日本紀を大綱として書る事は前條の天皇の大御  
言にあらはし又其つゝきにかく史記をさとく覺え  
よみならひしことを書出たるは深き下心有事とお  
ほしくそはかの物語は日本紀を大綱とし次には史  
記を旨と據に爲し事を知らせん的心をあらひなるへ  
し明星抄にうるはしく文體を似する處は史記の筆

法をうつし卷の次第を立るも史記の面かけを摸す  
されは此物語のならひ物一つとりつめてはゑるさ  
す寓言は莊子によりゑるす處の虚據なき所は司馬  
遷か史記の筆法をかたとれりと有御説いとよく叶  
へりされと筆法を摸すのみにあらし本文の意に  
據多き事なるへし又は其心をあらひのみにて書るこ  
とも多かるへければ是は史記の此事と云かとあて  
云へき事のはのかなるも多からんされと先かの物  
語を見んにはかの四書の日本紀と次には史記との  
大綱を下心にゆひ結置て見るべき事にこそ扱かく  
いふを書の表になき事までを餘りにとりつけいふ  
やうに思ふ人も有ぬへけれと此御許はかゝる處に  
心しらひいとく深き人にて日本紀御局の事の次  
手に此史記をさとく覺えし事を云るは必其心有事  
なるへし前の日本紀の事に源氏物語の據なる事を  
ゑかと表にあらはしていへれば此史記の事はよそ  
外の事のやうに是も其據なる事はいはすしてたゝ  
文のつゝきにておのつからに其事とおしはかられ  
知らるゝやうに書たるいとおもしろく返々も此御  
許の心には常にかやうのよい見えたり又或人は

たり、いかに四人のともからてきをあな取しゆへ、よしのりなかみつを、うたせて有、又此たひも、ての内ににぎりしを、はなちて有此うへは、とつくとくふうを、めぐらさんと、さま／＼御しあん有所へ、きんこくのしよ侍、われも／＼もはせ、あつまり御かせいのため、さん上仕候と、申上る、頼光しよぐんに、たいめん有、さつそくの参入、よろこひ入てこそ候へしかしながら、それかし、そんずるむねあれば、何れもぢんやをかまへ、まつ／＼餘所に、ひかへてたへ、かしこまつて候とて、をの／＼ちん所をしつらひて、まづかたはらにぞひかへける、其後きり山をめされ、かくのだんに、けいさくをめぐらす間、ごぶんはゆふさり、よに入て、かやう／＼にかきしたゝめ、清村方へ、やふみをおくりたまへとあれば、畏て候と、仰のことくに、かきしたゝめ、すてに其よも、くれば、御前を罷立三重うへの山へぞあがりける、さるほどに、かくて清村は、諸ぐんせいをめしあつめ、いくさのないだん、はしまる所へ、きり山ゆみをつ取、さしかため、よつひきひやうど、はなちける、清村かゆんでなる、かしの木に、とをなりしてはつしとあたる、やつきの平

田きよ丸、御前を罷立、何やらんと、さしよつてをう取みれば、やぶみなりやかて君の、御前にさし上る、清村ひらいてひけん有、其狀にいわく、ない／＼のけいやくを、たかへず城内へはせまいらんと、ぞんし罷こし候所に、頼光への、かせいのともから、はう／＼よりうんかのごとく、はせあつまり、四方を取まき候へは、城中へ入もいられず、ひくもひかれず候ゆへ、熊頼光の、みかたにしよくして候、其しさいは、いくさ中ばにうら切して、城中へ、はせ入申さんしよぞんにて、かうさんいたし候へ共、中／＼頼光、一せんはけむしあんにあらず、たゝいつまでも、年數をおくり、ひやうらうつめと、かくこいたされ諸ぐんに、四方を取まかせ爰かしこの、やく所／＼には、らんぶゆふきやう、みち／＼て、ちとせまんねんも、ふりぬべきていと、みへしうへはついにめつばう、有べきなり、何とぞ御しあんまし／＼て、一たんわぼく然るべきものなり、よつてやぶみくだんのごとし、大畧の大じん清村公へ、たき山大せん、みちのぶはんと、よみあげける、さしもたけき、清村もいさむ心もたゆみはて、いかゝはあらんかた／＼と、せんきひやうぢやう

とり／＼なり、かゝりける所に、つなきん時二人のもの、たきやまに、城のあんなひ聞すまし、大手のもんにさしかゝり、大をんあげ、わたなべのつなさかたのきん時、わたんのつかひに、まいりたりと、たからかにぞよはゝりける、かくて城中の人々は、たき山かやぶみにて、つよき心もよはりはて、さそふ水あらはと、おもふ折ふしなれば、それこなたへと門のひらけは、二人は城の内に入、やゝしばらくしきだいし、扱參だん、べちぎにあらず、くはんばくとみをかきやうより兩將へ、御くだし文の御座候、是御らん候へと、さしいだす、清村うけ取、をしいたゝき、つつしんてはひす其ごにいわく、天いをうけて、下す狀のおもむき、日月そらに、あきらかならんとすれ共、ていしやにやとりて、かけくもる、つらくいにしへをあんするに、かのしうやうさんに、わらびをおりし、世をすて人も、せんしのそむき、かたきりをはしる、なんそや年頃、ちよくをんのもつて、人と成しともから、わたくしのじやきをはさみ、わうじを、さまたくるのでう、げきりんはなはた、かぎりなし、はやくその身の、ひをあらため兩けわぼくせしめ、上らくあるにおゐ

ては、右のあやまりを、ちよくめんなり、二度てうのふくしんたるべきものなり、ていれいはりんげん、くだんのごとし、大ゑの大しん清村、源の頼光へと、たからかにそよみあける、時に渡邊ひざ、をしなをし、さいせんも頼光、しゆ／＼に申され候とをりしきよくさら／＼候はす、然るにしやすいのなみ、しきなみに、御たてあり、よしなきごゑつの、あらそひゆへ、ばんみんのくるしみ、たかなすわさと、おほしめす、それこうのうたがひを、おもくしつみのうたかはしきを、かろくせよとの、ほんぶん有よく／＼くふうまし／＼て、いそぎ打つれ、上らくあるにをゐては、しよみんゑの御じひ、是にますこと候はんやと、ことばをつくしあひのぶる、渡邊かべんせつ、ふるなしくはうも、かくやらんと、うたがひさつてぞかんしける、一すちに、おもひつめたる、清村も、たちまちむねにやつうしけん、誠わういをさみするとかちう／＼たり、此うへはせんひをひるがへし、にうわのしんのおこすべし、然らばこなたより、ししやをもつて、今までのあくき、ほとんどぐにん、しやうろにしたかひ、奉るのたん、じやうぶんにたつし、とても事の事にりん

しをちやうだいせしめ、しやうらくよろしくせんするなり、此おもむき、頼光へ申され候へ、わたなべしすまじたりとよろこび御ちやうのたん、御尤なり、さらば其だんを申さんとて、御前を罷立、やく所をさしてそ、かへりける、何とかなひだん、したりけん、さだみつすへたけを、めしつれ來り、たゝ今のとをりを、申きかせ候へは頼光も、きここの御しんでいと、とういにて候ゆへ、則都へのつかひのため、此二人のものを、つかはされ候と、申ければ、清村聞て、さあらば此方よりも、つかひをそへ申さんと、やつきのきよ丸、石田の左門を、兩使とさだめ、以上四人打つれて、ていとをさしてぞ、のぼりける、其後渡邊、御前にひざまづき、何事も、じせつとうらい、まづめでとうこそ候へ、されは物には、すんせんしやくまとて、かならずさまたげあるならひ、此たひの御くはぼくを、くんせいの其中に、そねむ物もや候はん、いよく諸人にも、いつちさせんためにて候へは、つかひのもの共、ていとへかへるまでは、我く二人は是にまかり有候はんと、そこひなきやうに、申ければ清村聞て、あつはれごぶんは、日本のたからたるべきゆうしなり、か

くぎしんふかきめん／＼を、うたがひたりしそれがしか、ぐちのほどこそ、あさましけれと、しんでいのこさず、うちくつろぎ、てうしかわらけすへならべ、かすくめぐるさかづきの、ひたすらゑひをもよふせりかくてよもの、はなしになりしかは、いろ／＼のぶゆふ、むしや物がたりに、よもしんこうにふけゆけと、清村ならびに二人のかうけん、つなきん時五人は、めをすましてぞかたりけるもとよりきん時、けつきにいさむ、おのこにて、ひさたてなをし、とかうくさといつは、てつめのせうぶにしくはなし、ひろうながら、しかたをいたして御めにかけん、是のふいかな成大かうの、ゆうしも、かやうにいたければ、はたらく事かなはずと、きやうけんにもてなし、二人のらうどうを、むんずといだき、はたらかせず、わたなへ心へ、とひかゝり清村を、まつさかさまにけたをし、ちうにひつさけ、本ちんさしてかへりしは、心ちよくこそみへにけれ、其内に公時は、二人のものになわをかけ、御前にひきすゆる、大將御きけんかぎりなし、しかる所へ、都へのぼり、二人のらうともかねて、ちりやくの事なれば、さだみつすへたけ、みちにてめしと

り、御前にひつすゆるらくわう、御らんじて、いまこそ、のそみはかなひたりと、やかてみやこに、ひきのはせみかどに、そうもんなされ、はくちうに、五人ながらかうべをはね、てんか一とうに、おさめたまふ、けんしのいゑの御はんじやうせんしうばんせい、めでたしとも、なか／＼申はかりはなかりけれ

寛文八戊申菊月吉日

八文字屋八左衛門板

四天王筑紫責

第一

さてもそのうちひそかにおもんみるにういのさかい  
せんあくのだうり二つあり其比天下のしやうぐんを  
ばたゝのまんぢうの御子頼光の御しやていかはちの  
かみみなもとのよりのぶとぞしおるかうしけるしかる  
によりのぶふたうをのみたしなみふんをまなびたま  
はねばしゆゝのちんぼうをあひし日々におこりを  
きはめたまふこゝに又はりまのかみほうしやうむさ  
しのかみわたなべのつなみかわのかみさかたのきん  
ときたうとうみのかみうすいのさだみつするかのか  
みうらべのすへたけ是ら五人の人々はらいくわう御  
たかいののちも都にあひつめ申さるゝ中にもわたな  
べのつなはちやくしみたのくはんじやをめしぐして  
さいきやうせられたりはこと扱御まへにはあくにんと  
もあひつめ御きけんよろしきことのみ申あげ五人の  
人々はあるにかいなきふせいにてすぎにしかたのお

もはれてしゆつしも今はうとくしくひとま所に一  
しよにならびいられたりこはかゝる所へ三川の國あ  
すけの兵衛かたちよりもめいばなりとてくろうむま  
の三ずんほと成をたてまつるけふも其けしきよのつ  
ねの馬にかはりほねあかりすぢあつくひとへにりや  
うのごとくにてひの内に七八十りづゝやすくとぞ  
はせにける頼信きよかんかぎりなくいかにかたく  
むかしかうがすいとてす千里をかける馬有とは聞  
ぬれ共それはもろこしの事あきつしまが其内に天ま  
のあらはれたることつたへきいたるためしなし此き  
つきやうはいかゝ有べきと御尋ね有ければたくまの  
せんしまさよりとて御まへさらぬおこり物罷出て申  
様さればかやうのりうばのあらはるゝ事は御まつり  
ことせいめいたるゆへなりそれをいかにと申にたい  
せいじんかうしのよにはきりんあらはれしゆうのぼ  
く王の時は八ひきのりやめで其とくにより中天ぢ  
くに至りしやくそんの御せつほうをちやうもんして  
はつくのげをうけらるゝほつけのなかのしんひの文  
是なり其後じどうと申どうじに右の内ふもんぼんを  
しめしたまふどうし二つのげのとくにより八百年ま

でたもちかうそとなをかへぎのふていにつたへそれ  
はんしやうへ渡り今にをいてたへせずやのきく  
すい是なりかゝるめいよの經文三國に渡ることひと  
へにりうめのとくにはずや御よはんじやうの基ひな  
にか是に過べからずたとへば五か國三か國にかへて  
も御てうあい候はん此むねにて候へしとさもいさ  
ぎよくのべければし君をはしめ一さの人々あつは  
れぶんふ二道のめいじんやとふしふかくかんしてい  
られたりは然る所に五人の人／＼はまゆをひそめ  
てきゝいられしか中にもわたなべあまりきゝかねば  
つぎよりつつといでいかにまさより只今の物語は近  
比承りごとそうに候なり去なからかみよはしらすし  
んむよりも此かたりうめの日本へいでたるためしい  
まだ聞及す候へばせんあくいかゞ申がたしつく／＼  
ぐあんのめぐらし候に是きちしには候まし尤とうせ  
いの御まつりことにては今にもよのみだれんことう  
たがいなし時に大將軍にて日に七八十りをはせたま  
ふ共たれかほもつてつくせい一人も候まじ然らば  
君御一人ばかりにて色んなにのえきか候ましさうし  
てよにめつらしき物をはくんしのたからにすべから

ずとせい人もいましめをかれたりまたしゆうのほく  
わうの世にあくせいあらはれ八ひきのむまと成はく  
わうふかくもてならしほうばつきよのほかいதாகす  
といふところなかりしかば七ひやうのまつりとしに  
おつてすたれついに國みたれけるひそかにこれをお  
もんみるにきちしにはなくしてきみのこゝろをさま  
たげんがために天のあくまむまとあらはれ候とさつ  
し申候いそぎたゝやさうにすてられ天下一とうにし  
たがひみちとう／＼たるしんぎのほうをおこなはせ  
たまへ地かなしきかなやたうせいのあるさまひやう  
りねいじんさゆふにはひこりざんじやの申むねにま  
かせたまひさいなきものをむたひのつみにおこなは  
るゝ事申てもあまりありかやうに申あぐるといゝき  
よいにちがいてたとへばやつざきになさるゝともふ  
だいさうでんのわたなべかきみのあくしをいかでか  
よそにきゝてあるべきなにやうになりとも御はから  
いませとふしなみだをながし申けるはよりの  
ぶきこし召らうにやくくちにがくきんげんみゝに  
あたるとかや大きにきしよくかはりたまひおことが  
申事は一つもさらにわきまへず御ぎをたゝせたまひ

をくをさしてぞ入りたまふときにまさよりまかりいでいかにわたなべひやうりねいじんきみのさゆうにあるとはたが事を申ぞわたなべ聞て是やぬす人といへば手をいだすとはかやうの事をや申さんひやうりねいじんとはおのれが事よせんしをきゝもあへずなにそれがしをひやうりのものとは何事ぞ其しさいをきかんとぎを打てぞ申けるおふしらすは申てきかせうそれねいじんとはよのなかのさうどうたみ百しやようのなげきもしらずきみの御きげんいかにもしてきやうに身をへつらうをいふなり又ひやうりとはほうばいのかげごとをきみに申上ばんしうらをもてあるをいふ是にわたの一つもちがひたる事やあるゑゑらいくわうの御時ならばおのれをあんおんにおくべきかくびねぢきつてすてんものをとちまなこになつて申ければせんしいよゝはらをたてせひのしだいとはともかくもまつたくきよしよをたゝせしともんしにとんでかゝるわたなべにつことわらひおのれがうたん太刀それがしにはよもたゝしむようのことなはたらきそとふしたゝそらうそふいてぞいたりけるはこまさよりなをもすへかねてたつとたゝすと

うけてみよとうち物をするりとぬくわたなべも今はたまりかねみちんになさんととんでかゝるを人々さうへおしわけてさりとてはおとなげなしまつしづまりたまへつなどのとまさよりをおくに入れあいのしやうじをはつたとたつるわたなべきつとみてやれたとへ八めん大わうがてつへきをつみかさねてこもるともものゝかずとも思ふべきやおのれかやう成おくびやうものそれがしか手にかけてはなへつて我身のちじよくといひまたでんちうなればゆるしをくぞといかりをやむれば時に四人の人々一とにはらりとたつてのふごぶんはすいぶんものをこらへぬ人なればさだめてくびきちぎつてすてられんとおもひしにあんにさういの事かなまづあんしてもみたまへいづれもしよ侍れきゝのまへといひ天下に五人のまれものどもががんせんにて太刀をぬくことまんちうらいくはうのみよゝり此かたでんちうにてかゝるうせきためしなしたうきみの御心こそたらずともかつうはらいくわうのくさのかげにておほしめされん所も有かさねてじよのものゝをきてのためにとかく引出してすたゝにつかみさかとすゝみ出るわたな

べ取ておさへしばらく／＼かた／＼の申ぶん一々だ  
うりにつまりたりさりながらたう君の御しゆつとう  
ならひなきまさよりなればわれ／＼かへんしうして  
扱こそよろしあるやらんとふうぶんせられてはかひ  
あらじせひかんにんせられよとかへつてせいすれば  
ちからなく人／＼はふしし／＼のいかりをやめにけり  
ことときに又みたのくはんじやつつと出て申けるは  
ち／＼の仰もつともには候へともそれかしにをいては  
ふつ／＼とかんにんいたすまし其しさいはち／＼をはし  
め何れもらうたいの御身なればせけんのおさけりを  
おほし召わけらるゝ事はりなり此たけつなはいまだ  
さかんのわかものなれはうきよのとがめになになら  
ん三國に聞へたりわた<sup>るの誤カ</sup>なべにりやくわいをなせしく  
せものをむなしくすて／＼かへりては此わたなべか家  
のきずなりとかく人／＼は御かへり候へそれがしは  
まさよりめが出るまでは何れも是にあひまちなされ  
よくびねぢきつて歸り申さんとおもひきつたるてい  
たらくふしにか／＼しくぞみへにけるわたなべきつ  
とみてやれなにを申そ竹つなよきやつを人間と思へ  
ばはらもたつとはいむしとおもふべしそれはいい

ふむしはいか成かうけきにんのかふり忍ほしうへ  
にもやどりとまり色／＼のりよぐわいをすれともも  
とよりはいと<sup>色</sup>とおもへははらもたゝすまつ其ごと  
くあのまさよりめもはいむしとおもふてかんにんせ  
よといとやはらかにかんげんありければ地さしにも  
いさむ竹つなもち／＼のことばに心もほつきとをれし  
ほ／＼としてかへりけるふしれいぎの程こそしゆし  
やうなれかくてそれより人／＼はしよ侍にれいぎを  
のべわかや／＼に歸らるゝともかくにもこの人々  
のていたらくふんふ二たうのゆうし是成はと扱かん  
せぬものこそなかりけれ

## 第二

扱その／＼ちかくて五人の人／＼は一つ所にあつまり  
てわたなべ申されけるやうはうきよをつら／＼あん  
ずるに源家のめつぼうとをかるましきと存るなりあ  
さましき頼信の御ふるまひやとふしなみだをながし  
申ける人／＼聞て誠にぐいぐわう御しきよのきさみ  
とんせいするかはらきらばかゝるむねんはきかし物

をとふしふかくの涙はせきあへずおつるなみだのひ  
 まよりもはことかく此うへはしゆつししてもゑきも  
 なしいざや一所に取こもりうきよの有さまなかわべ  
 し此きもつともしかるべきとさかのゝをくに引こも  
 り五人一所にろうきよして三重日敷をおくらせ上た  
 まひける是は扱置爰に又平家のちやくりうにたざい  
 のやすむちとてちくごちくせんひごひせん四か國の  
 大しやうたりしかみやこのていをつたへきゝ家の子  
 らうどうをめしあつめ誠に此きん年まではげんへい  
 りやうわにしてみかどをしゆごし申せし所にらいく  
 わうたんばの國大系やまのしゆ天どうじをたいちの  
 後天下の將ぐんにふせられ平家はあるかなきかのふ  
 せいにてむねんといふもあまりありしかるに今程み  
 やこのありさまをきくに我かてうへついにいでたる  
 ためしなきりうめいづる是天よりくだるわざわい成  
 をしらすしてよりのぶがふかくたつとむによりつな  
 きんときさだみつすへ竹はうせうさまゝにいさめ  
 けれどもよりのぶさらにきゝ入す五人のものともう  
 らみをなしさかのをくにひきこもるとふうふんす是  
 ねかふ所のさいわいなり此たびよりのぶをうち取そ

れかし天下のしゆごと成へしとふれ狀まはしせいそ  
 ろへ三重うへをしたへとかへしける此こと都にかく  
 れなくよりのぶ大きにしうしやう有侍を近付此事い  
 かゝあらんとせんぎまちゝなり時にまさよりすゝ  
 み出かゝるせうしのいつきそうとうは何程の事か候  
 へきそれかしわかきみさまを御とも申てそくしにた  
 いぢ申さんとふし手に取やうにぞ申けるよりのぶ聞  
 召もつ共此ぎ然るへしと五きないのせいを付られ侍  
 大將にはふちはらの中みつが子にかはちの判官ひで  
 みつたくまのせんしまさよりりやう人におほせ付ら  
 れ三重つくしをさしてぞ上いそかれける此ことつく  
 しにかくれなくやすむらはやく聞付てはことさてむね  
 とのらうどうめしあつめみちまでではりをしてふせ  
 ぐべきか又じやうへ引うけてたゝかふべきかとせん  
 ぎ取ゝ成所へ都よりのうつてよを日についではせ  
 下りて四方のざいけにひをかけて三重時のこゑをぞ  
 上上にける時のこゑもしづまれば大將ひでみつこま  
 しつゝとのり出しそもゝ是へよせられたる大將  
 ぐんはせいゝ將ぐんよりのぶここの御ちやくしいよ  
 のかみみなもとのよりよし公にて候そかく申はふち

原のなかみつか子にかはちのはんぐはんひでみつなりなんぢは御かうをんのわすれぎやくしんのくわたてこつかをなやます其天ばついかでかもつてのがるべきいらさる事をせんよりもつるをばづしかぶとをぬぎかうさんせよとぞのしりけるやすむら聞てあつはれ身にあまりたるぞうごんかなおのれがしうのよりのぶこそきみへふかうをふるまふゆへいそぎせいばつしみかどをしゆごし申さんため扱こそはたを上しなりくわうげんはくくわんたいものあれけちらせとげちすればはやりをのわかものも我おとらじと打ていで三重ひばなをちらして上たゝかひけるさる程にいくさなかばのこと成に大將よりよしせうねんは十六歳むらさきいと御きせなにくだんのりうめになにかいすつたるくらをかせ御身かろげにめされしか一もんしにかけ出し三重かたきのぢんへそ上かけ入けるす萬のぐんせいとはゝともだゆれとも其かいさらになかりけるはるかに有てくだんの馬本ぢんへぞかへりけりひでみつ是をみてやあをのれはちくるいといひながら御をんのわすれ我かきみをてきのとりことなす事はごんごにもものべられずとす

でにうたんとすれば此馬にはかにけしやうとなりはこくうをさしてぞあがりけるふしきなりける次第かなわたなべがことばのすへかんせぬものこそなかりけれ時にたくまのせんしすゝみいで申やう是はひとへにげんじのほろぶべきすいさうとみへたりふだいのしうをすてゝかうさんするも侍のならひなり我にしたがへめんゝと三重城の内へぞ上入にける大將かうさんするうへはいかでもつてこたへんと我をとらしとかうさんす其中にもかわちのはんくわん是をみていかにまさより御へんはとしころの御をんのわすれかたきと一身する事いぬちくしやうにとりたりのがすまじきとおつかくるらうどうともしうをうたせしとせんごさうにうつてかゝれははんぐわんきつとみてゑゝすいさんなりさう人ばらとひつくみゆんでめてへなげたをしなをもすゝまんとする所にせかはの源太くろをつたひてうしろへぬけよつひきひやうどはなちけるむざんやなひでみつのためのかたさきへのぶかにいさせたちまちまなこくらみしが扱もかたきはなにもものぞとあたりをみる所へせがはすきをあらせすかけ來りくびをうたんとするを

取てひきよせくびねぢきらんとする所へふじへの五郎かけあはせくさずりをたゝみあげつゞけさまにさしとをしかしこへけたをし心はなをもたかさごのおのへのまつとはやれともあまたのふかてなれば心はしだいにみだれつゝ今ははや是までとふしべをむんずとふまへせがはをめてへひつさげなむあみだふつもろともに立ずくみしてしにゝけるつもりとしは廿七ひでみつがさいごのていあつはれかうの侍やかんせぬものこそなかりけれ

### 第三

さるほとにかくてやすむらはたくまのせんしまさよりを近付てまことに人かすならぬそれがしをたのみたまふだんゑつきほとんとあさからずとふこれいぎあつきたいめんして扱よりよしをばごくやにおしこめてなをもてきに物をもはせよとあまたのばんを申付三重きびしくしゆごし奉る是は扱をき都におはしますよりのぶは此こと夢にもしろしめされず御つれつれをなぐさまんとみだい所をともないてはなぞの

に立出よものけしきをなかめたまふかゝる所へみやいのとうしはせ來りさいこくにていくさの次第一々に申上ふうふの人くはきこしめしなによりよしはいけとられたるとやこは誠かあさましやとふしたをれふしてぞなげかるゝやゝあつてよりのぶ扱は天のあくせい馬となりけるをしらてあいせしはかなさよわたなべがことばのすへ今こそおもひしられたりふびんやなよりよしてきの取こと成事さこそ口おしかるべきとふしふかくのなみだはせきあへず地あらいたはしやみだい所はおつるなみたのひまよりもくどき事こそあはれなれ扱もむさんやなよりよしがおもひよらざるうきすまひなにかに付ても都のそらさこそこひしくおもふべしこんとつくしへむかふとてさもはなやかに出立てわらはがまへに來つゝ我しやく年なりといへ共ちゝうへの御名代として大將軍をかうむる事世に有がたき次第なりさりながらゑしやでうりらうせうふでふなりことにせんぢやうにてゆみ取の命をすつる事めつらしからぬ次第なりもしも此たびさいこくにてうちじに仕ると聞召候共かまひてくなげかせたまふなよ是はそれがしとし比あ

がめ奉りしまもりほんぞんなりめでたくかいちん申  
さんまではあづけをき奉るとて此十一めんくわんを  
んのこしをきしはかく有べきとてかねことかふしう  
らめしやさるにてもやがてがいちん仕らんとさもお  
となしやかに立いでしそのおもかげを扱なふしいつの  
よにかはわするべしいるなふ御ほんぞんさまよりよ  
しはいけとられ候そやさればわくさうわうなんくり  
んげうよくじうくねびくわんをんりきたうじんた  
んくゝゑわくしうきんかさしゆそくひちうかいねび  
くはんをんりきしゆくねんとくげたつとちかはせた  
まふきやうもんをいつわらせたまふかやなふよりよ  
しかへさせたまへみほとけとなふしりうていこがれな  
げかるゝふしり上しよじのあはれとふしみへにけるは  
ときにふしきや御ほんぞんな　ゆるぎ出三ぼうも  
いまだすてさせたまはぬぞや此うへはなけく及ま  
じさあらばかさねてのうつてにたれをかさしくださ  
んとあんしわづらひたまひけるみだい所は聞召今此  
きはにはちもちよくも入べきみちならねばとかく  
さかに有五人のものをたのませたまへとなしなげき  
くとかたたまひける大將今はちからなくじひつに御

しよをあそばされいさはひやうへを御まへにめされ  
あらましを仰付らるゝ承り候と申て三重さがのをく  
へと上いそぎける是は扱なをきあらむさんや五人の  
人くゝはさがのをくにひきこもり地よをうきくもの  
よそになしふし月日をおくらせたまひけるいざやし  
ゆゑんのはしめつゝせめてはうきをはらさんとな  
はさけをたんぶとうけ三どかたむけほうせうにさし  
是くゝ一つきこしめせ御さかな申さんとあふぎをお  
つ取立あがりてむかしがたりをいまやうにこそはう  
たひけれふしよの中ふしうきに付ても今さらにしふ  
思ひぞいづるふしゆりおほへ山しゆ天どうしたいぢの時  
とうし人の色をさとり地それくゝさき成は頼光と  
上なてつちやうふつていかりしときはふしいか成天ま  
やくじんもおもてをむくべきやうのあらざるに頼光  
山ぶしのなんぎやうをあなたこなたとかたらせたま  
ひおもひのまゝにたばかりたまひしは人間のわざ  
とはおもはれすふしかゝるはつめいよの御大將じや  
うこにもあるべからずはなれ申我々かごうの程こそ  
口をしけれふしかのまろこしのはんれいがかうめい  
本ノマなとけてのちはたうしゆこうとなをかへてかんでん

にのりをたれし事共は今さらになつかしやとあふきをかしこへなげすて<sup>ふしき</sup>ふしきめくとぞなきにける地人くもわたなべがむかしがたりにふしいよあはれをもよほして下ふかくふしなみだをながさるゝは<sup>こと</sup>かゝる所へいざはの兵衛はせ來り是はきみよりの御しよにて候とさしいだすほうしやううけ取おしいたいきよまたまふ其御しよにいはくひそかにおもんみるに大將のもちゆべき物はせんぞのらうどう此たびさいこくのいくさによりよしかたきにいけとられたくまのせんじをはしめみなてきにしたがひおはんぬ家のめつぼう此時なり<sup>せめ</sup>ねかはくはめんくみぎの恨みをひるがへしぎやくとちうばつにをいてはきゑつ是にすぐべからずよつてくだす狀くだんのごとしみやうゑい三年九月十八日みなもとの賴信と<sup>まひ</sup>ぶしよみにけるわたなべ聞ていかにみちきよかへりて申上られうはありかたき御しよのおもむき尤上いにしたがいたくは候へ共きりんもおいぬればどばにおとるとやらんにて我々もむかしとかはりらうたいと罷成ものゝやくに立申さずとかく只今ひいでられ候しわか手のしうへ仰付られ候へとごんじやうある

べしはやとくくと申せばみちきよちからおよはず御しよをさしてぞかへりけるはるかにありてたじまのじゆけいはせきたりさきほと御へんしをきこしめされそれかしをまた御つかい候まことにおのく御うらみのだんもつともにて候へともかのやすむらがていをつたへきくにじよのものはなんまんぎむかひてもかなふへきに候はず御家のめつほう此ときたりことによりよしこうのいけ取とならせたまふことせうしと申もありあり一つはばんみんのくるしみをたすけたまふといひじんぎの二つこゝにありひらにくと<sup>ふしき</sup>ふしなみだをながしくときけるは<sup>こと</sup>五人の人くつくくとうちきゝ扱もいはれたりこほうまことに賴義こう御じやくねんたりといへども御おちらいくわうにおとらせたまふまじき大將たるべししかるにむげにみすて奉らんこそ御いたはしし此うへは參らんと<sup>りく</sup>御所をふじさしてぞあがらるゝ賴のぶ御きげんあさからすみぎのうらみをすてゝ參らるゝだんよろこびいつて候天下のらつきよひとへにかたくをたのむなりとてはや五萬よきのちやくたうをわたさるゝ五人の人く承り是まで參るうへは

かたきたいちのだんいさひかしこまつて候よりよし  
こうを御ともしてめでたくかいちん仕らんとちこく  
うつしてかなふまじとおうけを申ごせんのたち 三重  
みなくしたくを上せられたり <sup>ふし</sup>まづ一ばんには  
けんしのしらはたまつさきにおしたつる二ばんには  
きんぐのびやうつたるさしたいこ三ばんには五  
つのならひのそとばに五人のみやうしをあきらかに  
かきあらはしてぞ <sup>ふし</sup>さゝせける <sup>ふし</sup>さてほうしや  
うはひおとしのよろひをちやくしきんのひやうたん  
をもち大ほうし三人にしらえのなぎなたもたせしつ  
しつとぞいでらるゝ <sup>ふし</sup>わたなべはこざくらおどし  
のはらまきにときんすいかけして天ぐうちをひつ  
さけ下人三人を山ふしにいで立せこんかうづえのや  
う成くろかねのぼうをこそもたせけれ <sup>ふし</sup>きん時は  
くろかはおとしのよろひにむらさきのふきぬきをも  
ちあく太郎あく次郎あくとうしといふ下人三人にま  
さかりをかづかせつゝひてこそはいでらるゝさだみ  
つはあらいかわの物のぐにくれないのばれんをもち  
下人三人にきんのかさをきせ七人ばりの大ゆみをも  
たせまちかくこそはつれにけれ <sup>ふし</sup>うらべのすへ竹

はしらいとおとしのよろひにきんのぐんばいうちは  
を持下人三人ははんかうにそらせくろがねの大のか  
まをぞもたせけるみたのくはんじやはきいとよろ  
いにあふぎ車のさいをもち九尺ばかりのほこを下人  
にもたせ <sup>ふし</sup>しつゝとのりいだす此人々のていた  
らく <sup>ふし</sup>しらがましりの大がつそう又はそうがうに  
ひげをいてすさまじかりける次第なり人々一しよに  
馬をならべまづ一ばんにははりまのかみほうせう卅  
三にてたんばの國きじんたいちのときみかどよりそ  
へらられすなはち頼光のかうけんとなり今ははや六  
十三そのつきはむさしのかみわたなべのつな十五歳  
よりらくくわうのしんかとなりこん年六十四歳三ば  
んにはみかわのかみさかたのきん時われは人間の子  
にてなければうむまるゝとしはおほへずはこね山に  
てらくくわうのしんかとなりとしつもつて四十二年  
とおほへたり <sup>引</sup>四ばんはたうとうみのかみうすいの  
さだみつ十八歳より頼光のしんかと成つもるとしは  
六十歳五ばんはするがのかみうらべのすへ竹十七歳  
よりしうゝのゑんのかねあたるとしは六十二 <sup>扱</sup>六  
ばんはわたなべかちやくしみたのくはんじやたけつ

なしやう年廿二さいなにしあふたる我々か出立をみよやみやとよばゝりてつくしをさしていそかるゝかの人々のいきをひふしたるものゝ手ほんはこれにすぎたることあらしとみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第四

さるほどに人々つくしに付しかは五人一所によりあふていくさ取々ひやうぢやうなり時にほうしやう申されけるやうはとかくまづなにとぞちりやくをめぐらしよりよしをうばい取申さんわたなべ聞てわれ々もさやうに存るなりさりながらそれかし存しいだしたるちりやくあり御心やすくおほしめせまづそなたへ御入候へとふしありし所へ立かへりこちやくしみたのくはんじやを近付やあなんちはしるにはせむかつてかたきのつわもの二三人いけ取て参れちといひおくるべきしさい有はやくとく々とありければ竹つなかしこまり候とちゝのおまへをまかり立て扱もくわうだい成ちゝこの仰かなきつねたぬきな

とを取やうにいけとれとは何事ぞかしながらなに程の事かあるべきとかたきのちんへぞいそぎけるほどなくしろにもなれば大をん上てたゝ今是へはせむかふつわものは渡邊のつながちやくしみたのくはんじや竹つな只一きぬけがけたるぞ我と思ふものあらばかゝれ々とよばはりたりいるま兄弟是をきゝあますまじきと木戸おしひらき一もんしにきつてかかるをゑゝすいさんなりおのれらと二人ともにさうのわきにひつさげとかふに及すふし本ぢんさして歸りけるやく所になればちゝにかくと申ければわたなべ立出やあ其ものあらくなしそ是へ々とありければかしこまつて竹つな二人のものをぞゆるしけるわたなへみていかにもかんしよくとけたるふせいにてかたゝゝをいけ取申事まつたくくひをはねんためならすそれかしはしろと一身せんとおもへともたのみていふべきたよりなしさるによつてかたゝゝをいけとつたり兩人ともにしろへかへつて申されうはそれかしは頼信のせいたうさたのかざりにましゝ候間世をうらみひつこみ候所によりのおさまゝにたのませたまふゆへせひなくはつかういたして候へとも

いさゝか本いんにはぞんせず候此うへは城中へかう  
さんいたし申さんそれに付すぎつるいくさの時かう  
さんいたし候たくまのせんしまさよりはそれがしと  
ふわのものにて候へばまさよりをたまはるにおいて  
はおやこともにかうさんいたしちうをはげみ申べし  
是はいつわりなきしるしなりと一しのきしやうもん  
をかいてわたしけるいるま兄弟わにの口をのがれた  
る心ちにていさいかしこまり候とじこくうつしてか  
なふまじとほんちんさしてぞいそぎける三重やがて  
しろにぞ上かへりける大將のおまへに参りよしをか  
くと申あぐるやすむらゑつきかぎりなく是こそ天の  
あたふるさいはいなりじこくうつしてあしかりなん  
とやがてまさよりをよびいだしあへなくくびをうち  
おとしじやうをかきしたゝめはやとくくんと申せば  
いるまくひを取持<sup>り</sup>かたきのふしちんへぞいそぎ  
けるやく所になればはこくびとしよさつをわたしけ  
るわたなべ大きによろこびいさい承り候さあらばみ  
やう日せめ口よりしろへはせ入申べしとつかいをか  
へし扱人々のやく所にゆきくだんの次第をかたれば  
何れもよこでをてうど打あんのほかなるちりやくか

なあくしをなせしまさよりのめかなれのはてこそおか  
しやと一どにとつとわらいける扱人々申されけるや  
うはごぶんを城へいるゝ事もしもたばかつてうたんと  
てきもちりやくをめぐらす事もあらん心もとなく  
おもふなりわたなべ聞ていやくかたきそれ程にち  
ゑふかきものにてなしもしもせんに一つのことあら  
ばうでと太刀こそかぎりなれ命をすてゝきつてまは  
らばしろの内のやつばらいくまんぎにてふせぐとも  
たい大ふうにこのはのちるにことならず心やすくお  
もはれよさりながらかたき心をひきみんためごぶん  
たちと我をいで合はんはひつちやうなりたがいひき  
よくをつくしりやうほうけがなきやうにいたされよ  
人く聞て其だんは心やすくおもはれよなにしにあ  
やまちいたさんまことに天下に五人のまれものとな  
にしあふたるはかり事といひながらかたき身かたと  
ならんことこそよしなけれもしも五人の中に一人も  
かたきにうたれんこともいさしらず是やかぎり成べ  
きかとおにのやうなる人々もふしなみだをなかしそ  
れよりもいとま申て人々いとま申てわたなべ殿と  
三重わかれく上成にけるさる程に兩はうのせい

せめぐちにいでければわたなべおやこじぶんすはな  
りとひまをうかゝい城中さしてぞ入にけるしろの内  
になりしかばやすむらよろこびたいめんし此こと  
しあふする物ならばなに事も御ぶんの望たるべし  
今よりしては此はたをさしたまへとあかはたをおや  
こともにわたしつゝふしをくをさしてぞ入にける  
こと竹つな是をみていかにちりやくなればとて年比  
のしらはたをすてゝあかはたをさゝんことはむねん  
なり此うへはやすむらがくびねぢきつて望とげ申さ  
んとかけいづるを取ておさへやあしはらくあゝそこ  
つなり竹つなたとへはたの色あかくとも心の内をそ  
めばこそあすのいくさにわかきみをうばい取やすむ  
らめをねぢくびにせんは只今の内なりゑゝ物をこら  
へぬわかものかなまづしづまれゝゝといとやはらか  
にぞ申ける扱竹つなをあひぐして一とま所に入にけ  
る三重心の内こそ上ゆゝしけれ是は扱をき地あらいた  
はしや頼義はいつしかかたきにいけとられ物うきご  
くやの御すまいに都のことをのみおほし召いだされ  
てふしほんさきだつものはなみだなりさこそちゝはゝの  
御なげきましまさんことなによりもつて御いたわし

やさるにてもげんけと申はかたじけなくもせいわた  
わうの御へうゑいとしてそふたゝのまんぢうより父  
頼信まで三代は天下の將ぐんにふせられけんへいと  
うきつはんの其内にたうけにむかつてかたをならぶ  
るものなきに今それがしかくなりはてせんぞのなを  
くださんこと思へはゝゝくちをしや地あゝ扱よには  
かみや佛はおはせぬかとよをかこち身をうらみなみ  
だにくれておはしますかゝるあはれの折ふしわたな  
へのつなはよりよしの御さ所をたしかにきゝさだめ  
ふみ一つかきしるしてろうのうはてよりなげ入ける  
頼義なにやらんとをつ取いそぎひらいてみたまへば  
きみこうせんのいにしへをわすれたまふな時にはん  
れい有べしとかいて有はつとおどろきうはてのかた  
をみたまへば地わたなべはおもひ入たるふせいにて  
なみだくれて立て有わかきみは都の事をたづねたく  
又わたなべはかくとしらせ申さんととびたつほどに  
思へどもよそのみるめもしげければかくと申さんた  
よりなくふしふかくのなみだせきあへず時うつれば  
わたなべはよそのみるめもあるものをとちからおよ  
ばずしほゝとし下ふなみだながらも立かへる地わか

ぎみはるかに御らんしてあらたのもしのしんていや  
てきをたばかつて我をうばいとらんがためかうさん  
してぞあるらんとすへたのもしく思召つらき中にも  
なぐさみて三重あかしくら上させたまひける扱其後  
にやすむら家のこらうどうを近付思ふしさい有間一  
といくさすへしと下ぢすれば承り候と我もくとか  
け出ほりばたにちんとればかくてほうしやうゆみひ  
つさけてかけいで我じやく年のいにしへはこゆみに  
こやをつがいかさかけいでなぐさみたる事有をいて  
二たびちごに成といへばいにしへを思ひいださん一  
とやうけて手なみのほどをみよやと五人ばりに十五  
そくきりくくと引しほりひやうどはなつ馬むしや二  
ひきいておとしうしろにひかへたるかちむしやのみ  
つけんにこそ立にける三きともにゆんでめてへおち  
にけり時にすへ竹かけ出扱もあそはしたりほうしや  
うどのさらばそれがしも一や仕らんにそのきたま  
へとまるきのゆみやにうちつがいきりく々と引つめ  
かなぐりはなしにはなしけるかちむしや三ぎいてお  
としいはをのせうじが馬のふとばらにすんとこそは  
立にけれといの十郎が是をみて持だてをつきたてや

あごぶんはいか成せいびようなりとも此たてはよも  
とをさしとくはうげんがましくひかへけるすへ竹是  
をみてにつくきやめつがことばやとまへよりつよく  
引つめひやうどいるたてのいたをいとをしうしろに  
ひかへたるならをたてにい付られたてをかくいてふ  
しにけりさだみつ此よしみてあゝいられたりくそ  
れかしもいでく一せんいたさんと扱てつのつふて  
を其かすあまた取よせうんかのごとくひかへたる其  
中へおつ取ひつ取うちにけりたゝりんぼうのみちを  
おすにことならずゆんでめてへたをれける時にきん  
時つつとよりそのき候へさだみつどのいでしんか  
りを仕らんとほこひつさげてたせいが中へかけいつ  
てはらりくとなぎたをすいまだじこくもうつらぬ  
にむねとのつわもの百きばかりうちふせゑゝ手にた  
つものはなかりけりとある所にさつとひきふしし  
ばらくいきをぞつぎにけるやすむら此よしをみてか  
れらはなんせんきはせよつてもかなふましさらばわ  
たなべいでられ候へとよばゝりけるつな聞てもとよ  
りごしたることなりと太刀ひつさけかけ出るをきん  
時きつとみてかねてあいづのことなればすは参りさ

うと渡りあひ火はなをちらしてたゝかいけり渡邊じ  
ぶんと思ひ打太刀をひかへきつとめくばせしければ  
きん時心へてわざとはこを打をとされきいめかして  
ぞにげにける渡邊是をみてゑゝ大事のかたきを打も  
らせし口おしややあきん時日比のよしみにひつかへ  
ししやうぶをせよいかにくゝとのゝしれば四人の人  
人はをきゝ少にてもてきにさとられては大事なりい  
ざ四人一所にかゝりて渡邊をばつこむべし尤といひ  
もあへずきつさきをならべ打てかゝれば渡邊かなは  
ぬていにもてなし一もんしに城の内へぞにげにける  
時に四人大おん上いかにわたなべじやく年のむかし  
より此かたてきにうしろをみせたる事なきと日比く  
わうげん申せしがふだいのしうをみすてゝてうてき  
になれば今はや命をおしみをくびやうがみにひか  
されてにげたるていのみくるしやたとへはひの中み  
つのそこをくゝりてもいかでかのかしやるべきやか  
へせもとせとのゝしつて誠しやかに引かへす此人々  
の有さまかんかはしらす本てうにも又ともあるべき  
人ならずあつはれゆうしのあつまりやと扱かんせぬ  
ものこそなかりけれ

## 第五

さる間すでに其日もくれければ兩ちんあひびきにひ  
いてしばらくちんをぞ取にけるこゝに四人の人々は  
一つやく所にあつまりてきん時申けるやうは明日の  
かつせんには城をのりとらんことひつちやうなりわ  
たなべおやこ城に有うへはわか君の御こといさゝか  
しさい候まじ去ながら此四人は頼光の御代より四天  
王とよばれてい國までも其名をへたる我々かもは  
や是ぞいくさのしをさめたるべし然るにたいよのつ  
ねのいくさをしては口をしき次第なりいかにもして  
かたきやす村をいけ取て都づとにせんと思ふが扱か  
たゝはなにと思はるゝぞ人々きゝもあへずおふい  
はれたりきん時たれゝも左様に存るなりさらば明  
日かけあひには此四人一所に心を合てきかけいで  
そらにげをするべし時にかたきかつにのつておつか  
けんはちでうなり其時ひつかへし中におつ取こめい  
けとらん何のしさいか有べききん時間て是も尤の  
御手たてにては候へ共去ながらてきもさすがなをへ

たるゆうしなればもし我々が色をさ取てはかへりて  
なんぎたるべしとかく此度はそれかし存出したるち  
りや有まづ／＼そなたへ御入候へといたる所をすん  
と立てかたはらさしてぞ入にけるやぶみを一つうか  
きしたゝめてきのちんへいたりけり折ふしやす村は  
渡邊をはしめ家のこ郎等を近付て軍ひやうでうの所  
へ此やおちとまる渡邊おつ取ひらいてみるに其ふん  
にいはいはく／＼五人の其中にもごぶんとそれがしは  
べつしてよしみふかきところに晝のかけあひにたか  
いにやいばをけづりきばをかみしこと時にしたかふ  
とはいひながら思へばあさましき次第か程に存らく  
るいそでをひたす所にほうしやうさだみつすへ竹是  
をみて扱は御へんのごとく我も二心有ものなりとこ  
ゑつとへだてられ候此うへはやちうにそつときどを  
ひらかれたまはれ候へかしそれかしも御へんと一所  
にあんびをさだめたく存候此むねやす村公へよくよ  
く申てたまはれ候へひとへに頼入候三川のかみさか  
たのきん時むさしのかみ渡邊のつな殿へとかいたり  
けり渡邊大きに悦ぶていにもてなし是／＼御らん候  
へ天のあたふるさいわいとかくお家の御はんじやう

すべきすいさうたり定て聞召及せたまふらんかのき  
ん時と申物は元來人間のしそんにてなし十六歳の比  
まではしん山ゆうこくをすみかとせしが頼光はこね  
山にしのはせたまふ時はのき女あらはれて頼光の  
しんかとなせしより此かた命をきはのたゝかいにあ  
ふこと七十五とされ其終にふかくをとらず四天王の  
其中にもすぐれたるけなげ物なればそれかしと兄弟  
のむつびをなし候かれか一人身方にくわはる物な  
らば残る三人の物共はよも一せんにも及ず落うせ候  
へしいそぎじきの御へんじつかはされ候へとげに有  
有しくたばかれはやす村大きに悦びやがてじひつに  
返狀かいて其まゝいかへさせけるきん時は返狀よ  
とおつ取ひらきみれば渡邊方へのやぶみのおもむき  
つぶつさにひけんきゑつほとんどあさからすいそぎ  
かうさんいたさるべしさるにおいてはくんこうによ  
るべしいさゝかうたがひ有へからすよつて返狀くだ  
んのごとしたざいのだいに平のあそんやす村とかい  
たりきん時しましたりと悦び扱人々の役所に行た  
いめんし是／＼みたまへもはや此うへにてきじん  
はせ參べしかまいて／＼かつてかぶとのおゝしめよ

とひやうでうのおくぎにもしるしたりゆだんしたまふなかつと城中さしてぞいそぎけるきん時がちりやくの程こそあさからねすであいづのこくげんにもなりしかば城中より木戸をひらきければなんなくしろに入わたなべにたいめんしふし是はとばかりにてたがいになりやくのほどおしはかられて人々はふしよろいのそでをぞしほりけるやあつてやす村立出たいめんしれいぎをのべて云やうは誠にかんしいつたるしんていかな此うへはいくさの次第ばんしに付て兩人を頼なりとまつきうそく有べしとふしおくをさしてぞ入にけるかくてきん時明日のいくさにかやうにいたすべしと所存のとをりをかたれはわたなべ聞て我もさやうに存なりおふしんびやうとたかいにつこと打わらひまづかたはらにぞ入にける去程によもやうあけ行ばよせての軍兵おしよせて時をとつとぞ上にける時のころもしづまればすへ竹こまかけいだし大おん上やあきん時はいづくに有ぞさしもふだいのしゆ君をみすて年比よしみふかゝりしはうばいをふりすてうらかへる事いぬちくしやうにもおとれりとのかしつて城を

にらんでひかへけるかくて城中にはわたなべきん時はすはよきじぶんと思ひわたなべやす村にむかつてかねて思ひしにさういして三人の物共中へ思ひ切たるていとあひ候へ候此うへは頼義をやぐらにひつはりぎうごんにかくる物ならば三人のもの共すゝみて我もともしんだういたすべし然らば其時たやすくいけ取申さんと手に取やうにぞ申けるやす村うんめいつきはて此ぎ尤然べしそれと有ければきん時は頼義をひつたてやぐらのうへにかけ上りいかにほうしやうさだみつすへ竹ことの心をたしかにきけ我々は源家ふたいの侍なれ共けんしうんめいつきたるをみすかしかうさんをいたしたり頼義のさいごのていをとし比のよしみに一めみばやといふよりはやくわか君をこはきにかいこみもんしにとんでをるれば渡邊やす村をひつつかんでよせてのちんへぞくわゝりける残るぐんせい是をみてのがすましきとをつかくるを竹つなゑたりやおふと四かく八方へおつちらしなんなく本ちに歸りけるあつはれ渡邊きん時かゆう力やとふし一どにどつとぞがんしける其後竹つな大をん上に城中のやつはら大將いけど

でたかり共中く申斗はなかりけれ

延寶五丁巳年正月吉日

八文字屋八左衛門板

らるうへは命をすてゝなにかせんかぶとをぬいでかうさんせよとよばゝればしよぐんせいはをきゝげにげに是はもつ共なり命をすてゝゑきあらじいさやかうさん仕らんとかぶとをぬきゆづるをはづし皆くかうさんにこそはいでにけるもはや此うへは心にかかる事なしとわか君の御としても悦びの時を上三重みやこをさしてぞのぼりけるていとなればわかきみ二でうの御所にうつらせたまへば頼信ふうふは御らんして是はくゝとばかりにてよりよしにいだきついでうれしなきにぞなきたまふさて五人の人くゝをめされ今にはじめぬことながら此たびのはたらきとかふことばにのべられず殊にやすむらをいけどりしやうらくありしことこゝんまれなるはたらきなりすなはちやすむらがことをさうもんして大ちをわたしそのゝちはくちうにしばりくびにぞなされける扱また五人の人くゝにはほんれうにあひそへ五千ちやうつゝくだされすなはちよりよしのしつけんに仰付られいそきめいゝにしよち入しおのくゝきうそくあるへしとはや御いとまをくださるゝ四天わうのはたらき源氏の御はんじやうせんしうばんせいめ

## 末武印問答

## 第一

さてそのうちそも／＼のせいとうといつはしづかなるときんばぶんをもつておさめみだるゝときはふをもつて四かいのらんをしつむるによつてぶんぶ兩とうはすいはのことし其比けんしのふしやうをはたゝのまん中のしなんやまとのかみ源のよりのふ公とそ申けるされは御しやきやうらいくわうの御しきよの後天下のけんへい取をこなひはんみんのりらんをかなかみたまふゑいやう日をおつてめてたく御いせい四かいにあまねくしたかはさるは三重なかりけりされは天ちのさうとうはわたくしよりをこつてやむ事なし其比しなのゝ國には平のこんのさへもんきようちといふもの有是はくはんむ天わう八代のはつそん平家一けのとうれうたりくはんらい其心ねふとうにして人のさかゆるをふかくそねむはりたましいのをのこなり有時の事成に家のこらうどうめしあつ

めしゆゑんしてあそひしかしゆきやうのあまりにあらざる事をそたくみけるいかにかた／＼此ちかき比まては源平あひならんて天下のふ將かうむり車の兩わのことく有つるにそれがしか父清ひろ源の頼光におしすへられ次第にいせいうすくなりつひに天下のふ將召上られ今それかしか代に至つてはわつかかいしなの二か國のしゆこととしていきてかひなき身のしき此まゝはてんこそむねんなれ此をこりをあんするに是皆頼光かなすわさけんしは我等かかたきなりされはとうし天下のふ將源のよりのふ兄頼光にはばつくんおとりたると聞是そ平家よを取へきすいそうなりいさやきへいを上げていとへ上りうむのあんひをきはめんいかに／＼とこ共なげにそ申けるされはるいをもつてあつまりにたるを共とするとかやいつれもしうにおとらぬむちあんへいのちうとう共跡さきのかんかへなく誠に御てうのことく平家も王そんけんしも王そんいつれかをとりまさりも有ましきに近年かやうにあひおとりていとの内をおひ出されほくろく道のかたすみにも月日をおくらせたまふ事我等ていに至るまでむねんのほむらむねをやきしんいのけ

ふりひそう天に通しさらにはるゝ事なしけんしの方にも頼光あいはつるうへはへちに心にくき物はなしひたゝと思召立たまへと皆一とうに申上る其中にほりの九郎さたすみは物のせんあくをかんかみたいちしんいのあんじやなりはつさよりすゝみ出人々は只今君の仰を御家のはんせうと悦ひたまふな此定すみかぐあんには御家のめつほとそんし候其りいかにと申に先頼光あいはてられ候うへはけんし方にへちに心にくき物なきとはもつての外のひか外なりつなきん時さたみつすへ竹ほう正しいつれもこかくの大名にてしせんの事もいできなはかりめのほうこうによりふへちうせつをつくさんとつれもふりきをはけんてひかへたりされは頼光大え山のしゆ天とうしをたいらけ其外さまゝのまえんへんけをほろほしほまれ一天につもりなかりしもかの五人の物か有しゆへなり今かれらとこかくのいくさせん物いこくの事はいさしらす日本には有まし其上わつかかいしなの二か國はかり御せいにて天下の大將よりのふをせめしたがへさせたまわん事とうろう車をさへきりせいえいうみをうまんとするににたるへしたゝいくた

びも御しあん有ひらに思召とゝまりたまへやと涙をなかしとゝめける清うち聞てはらを立何を申をさたすみふせいを以ても大將の心一つにてたせいをも打やふるいくさのほうをはしらさるか又其五人の物共かあらんかきりはいくさはかなうましきとやしやつはらもにんけん又我にしたかふ物共も同じかはらぬ人間さのみ何のこうけかあるへきやをのれか心をくるゝゆへをくべうかみにひかされ人までせいし大事のいくさのかど出のさきをからすふかくじん一人をくべうものあればばん人それにひかれて皆をくべうに成有てかひなきぐにんめにこんじやうのいとまとらせんとはしりかゝつてくひ中に打をとし太刀のきつさきにつらぬき九萬八千のいくさがみのちまつりめてたしはや打立物共と馬物のぐとよいしてうへを下へと三重かへしける此こと都にかくれなくよりのぶ聞召れ御なひたんのためにさい京したる諸大名を召れける折ふし頼光より五人のゆつりものむさしの守渡邊のつなとう國のおさへとしてむさしの國にきよぢうすさだみつきん時ほう正是三人は九州のいつきをしづめんだめつくしに下るするがの守うら

べのすへ竹はかり都にあひつめいたりしがめしにおふしてさんとうす其外の諸大名いづれも御せんにあがらるゝよりのふ御らんじ只今めすてうへちぎなしかいしなのゝしゆこ平の清氏ぎやくしんをくはたてていとへうつて上らんとよういす九しうのらんいまたしづまらざる所に又此らんおこる事ゆゝしき天下の大事たり其上かれはちよの國侍とはかはりさすか平家の大將なればよりのふ馬を出すべし一つは我天下のしゆことなりはしめてのくんちんなれば諸人のさみせぬやうにめんゝもすいふんくんかうつくされよはんしはたのむと上いなりいづれも御でう承り我もゝとせんぢんの望有けれ共といのかうめうかくれなきするかの守うらへのすへ竹もくねんとして有ければよもちよの物には仰付られしと一こんもいたすものなしあんのことく大將此たひのせんちんをはすへ竹然へしとそ仰ける時に大將の御まへさらぬとうしふそうのしゆつとう人八やの兵衛ともたかすゝみ出御てうにては候へ共國のあんないしらぬ人々のせんぢんはかなひ候ましそれかしこそしなの國に久しくぢうしかの國のへいちなんしよ山かわ

のあんないまでくはしくせんし候此たびのせんちんをは此ともたかに仰付られとはゝかりなく申上るすへ竹聞てあつはれおこのやつめかなことはをつかはんと思ひしかいや御せんなる物をしばらくとむねをさすつてひかへけるとも高なをもとゝまらずかへすかへすもくんぢんの一大事あんなひしらぬ人々はおほつかなしひらにゝそれがしに仰付られ候へとかさねゝ申上るすへ竹今はたまりかねいかにともたか御へんしなのにちうしあんなひしるは何よりもつてちやうほうさりながらあんないしつたるはかりにても心をくれてはかうみやうはならず此すへ竹は國のあんないはしらず共城をそくぢにふみつふしてきの大將のくひ取へきあんないをはくはしくしつたりこともおろかやぞれがしなどに仰付らるゝせんぢんをわたのはらかふんとしておほつかなしとはくはんたい過たることばやとひさをなをして申けるともたかきひてやあすへ竹ふし道のたしなみ御へんに我さのみなにをかをとらん御ふんいつするか兩國の大將なればそれかしもびせんはりまの大將たりわたの城へ左よりのりいらは我はみきよりのりこまん

少も御へんにをとりなはずは八まんも御ぢけんあれ  
二たひていとへかへらじとさをうつてそ申けるすへ  
竹むねんに思へ共いやく／＼かれていのやつめにそれ  
かしかうみやうふかくをろんするはかへつてわかみ  
のちじよくなり其上御せんなる物をと我と心をしつ  
めさあらぬていにていたりけるもとよりよりのぶと  
もたかか事をは西をもひかしと聞めすことなればか  
れかせんちんをかなへすは時のめんほううしなはん  
と思召大てのせんちんをはすへ竹からめてのせんち  
んをはともたかつかまつれと御さをたゝせたまひけ  
るありあふ人々是を聞こは心へぬ上いやとめん／＼  
にさゝやきけるすへ竹大將のうしろすかたをつくつ  
くとみおくりあつはれ頼光のよならはかやうにはあ  
らし物同じ御兄弟にてもはつくんかはりしものかな  
それかしは代々家のしんかなるにとうぎのてきしゆ  
とうとおほし召かへともたかめか御ひいきあり大て  
からめてのせんちんをとういに仰付らるゝ御しよそ  
んこそはむねんなりかくあるへきとしるならは頼光  
あひはてたまふ時はらかき切てめいと御とも仕ら  
ん物命なにかきものはちをゝしとはいまこそおもひ

しられたりとなみだをばらはらとそなかしけるしか  
る所にとまたかをくより立出いかにすへ竹御へんた  
た今はことのほか成かうけんかな君より二人に大手  
からめてのせんちんをたまはるうへはてきの大將の  
くひをわとのか取かたかひにかうみやうふかくあら  
そふへしさりなから御へんはらうたいの身なればむ  
かしのつるき今のなかな成へしかうけんはむやく  
とあさわらつてそ申けるすへ竹きひてをのれらごと  
きのものとういにせんちんをかうむるさへむねん  
なるに我をむかしのつるぎとやかみをはゝかりすい  
さんをゆるせはかつにのるあふれものいて物みせん  
ととんでかゝる所を人／＼取ておさへ天下の大事  
をもくせんにかゝへさりとてはおとなけなしすへ竹  
きひて大事もせうしも時によるあれていのあふれも  
のをたすけをきては天下のあたと成ものをこゝをは  
なせ／＼とかけ出／＼しけれ共大せい取付ひらにひ  
らにと申せはちからおよはすしゝのいかりをひるか  
へしこぶしをにぎりきばをかみやかたをさしてかへ  
りけるかのすへたけかこゝろのうちむねんともなか  
なか申はかりはなかりけれ

## 第二

さて其後八やのひやうへともたかはよしなきかう  
ろんゆへ大きなちしよくをうけむねんたくひはな  
かりけりつくくものをあんするに此たびすへ竹と  
ういに大手からめてのせんぢんはかうむれ共とて  
もかれかはたらき程はかなふまししよせんひやうり  
をもつてきやつかいせいを取よりほかはなしされは  
此たひむほんの大將平のこんのさへもんかきし物は  
代々あかきはれんにきんのひやうたんのをさすときく  
しせんのとときはかり事のためも有とにはかにあか  
きはれんにきんのひやうたんのさし物をこしらへひ  
つに入てそもたせけるさて神くへきせいかけねか  
はくはこんとのかつせんにすへ竹よりぬきんてかう  
みやうあらはほまれをせ上にふれてたまはれなむき  
めうてうらいといろくのりうくはんかけさまくの  
よういこそは三重かまへける是はさてをきこんの  
さへもんきようちかきやくしんよにもろけんしやま  
との守よりのふたせいをそつしうつてに下ると聞よ

りもらうとう共をめしあつめいまたみかたにせいも  
つかさるそのさきにうつてむかふ事こそなんきなれ  
こせいをもつてたせいとひらはのいくさはかなふま  
しやうかひをかまへやとてをつかせ柵をふりつま  
りくはほりほらせくんせいくばりうへを下へと  
三重かへしけるあひもすかさすよりのぶかう五百よ  
きをいんそつしもんむ二年二月五日に都を御立有同  
十五日にたつの一天にしなの國に付たまひくんせ  
いの手はけ有さへもんか城くはくをなんほくよりひ  
きまはし時のころをぞ三重あけにける時のころもし  
つまればはちやの兵衛とも高すへ竹をたしぬいて  
せんとしてせい五百よきを引ぐしきとくちへ  
つめかけけるされ共きとのまへにはからほりをふか  
くほりとをしなかなかこへんやうもなくあきればて  
たる所にすへ竹いそきはせ來りゑたる所のかるはさ  
ほりをひらりととひこへける城のもの共是をみてす  
はおとにきこへたるうらへのすへ竹なるをゆたんし  
てもんをやぶらるゝなときとをひしとかためけるす  
へ竹かたきの方へはめもかけずいかにともたか御へ  
んはすへ竹か行所へはいつくへなり共つかんと申

せしか何とてしんしやくしたまふぞむかしのつるき  
か今のつるきか爰にてこそよつくしるれたゝみのう  
へにてくちきゝたるとはつくんにちかふへし是へ是  
へとあふきをあけてまねきけそとまたか一こんのへ  
んしにもおよはすむねをたゝきかしらをかきめんほ  
くなげにひつかへすみくるしかりし有様なりすへ竹  
是をみてくちにはにぬをくひやうもの尤かうこそ有  
へきともんのとひらに手をかけゑいやゝといふま  
まになんなくとひらを引はつしかたきを二のきとま  
てほつこみくたんのとひらをほりのうへにうちわた  
しすはやはしをはわたしたりかゝれやゝとよはゝ  
れは城の内のもの共二のきとをやぶられしとほりの  
はたにうつて出てきみかたか入みたれをつつまくつ  
つひはなをちらして三重たゝかひけるすてに其日入  
あひの比になりしかは兩方より物みの大將さいふり  
あけいくさは明日とたかひにやくたくしあひ引にひ  
いてのきぢん所ゝへかへりける其中にすへ竹はし  
つはらひを心かけたゝ一人跡よりもしつゝとひつ  
かへす然る所かいの國のちう人おときりの小八郎た  
めむね此由をみてみかたのせいはいはるかにへたゝり候

にいとしつかに引たまふはゆへある人とおほへたり  
いてげんざんいたさんとをしなへらてむすつくむさ  
しもきこゆる大力とは申せ共すへ竹ものゝかす共せ  
す取ておさへはたらかせすしたよりつかんとすれ共  
あまりにつよくおさへられゆひかゝまつてたちのつ  
かもにきられすされ共ちりやくのめいじんにてかふ  
てきのくびを取といふは我もなのり人にもなのらせ  
てこそかうみやうにもならめすへ竹きいてやさしき  
物のことはかな我こそは天下に五人のまれ物とはん  
人におちらるるするがの守うらへのすへ竹なりなん  
ちはいか成ものそ小八きひて扱はをとに承はりおよ  
ひたるすへ竹殿にてましますなそれがしはかいの國  
のちう人をとぎりの小八郎ためむねと申ものにて候  
おなししする命御みのやうなる人手にかゝらんこそ  
しゝても弓やのめうかなりさりながら我等ていの物  
を打たまひてもさのみかうみやうにはなるましき御  
ちひにたすけたまへしからは今よりのちは心をひる  
かへし御てにしよくし申へしすへ竹きひてさやうな  
るひやうりをぢよのものに申せ此すへ竹はもちゐず  
と又つよくおさへける小八聞てまさなくもかう人の

くひ取ほうやあるひらに／＼と申けるすへ竹いよい  
よいかりをなしてきにおさへられ命をしさにかうさ  
んするをかう人とやいふへきとかぶとちきつてよく  
よくみれは其年十七八とうちみへすきつるとしみな  
と川のいくさにうたれしわか子のすへよりかおもか  
けによつくにたりすへ竹たけきゆうしなれ共わか子  
の事を思ひ出しあなむざんやかれか爰にてうたれな  
は國にのこる父母さこそなけくへしわれが思ひも人  
の思ひももつてはひとしわかこのきやうやうにたす  
けばやと思ひなんしそんなるむねあつてたすくるそ  
と取てひつたてそば成くろにこしをかけしばらくや  
すみいたりける小八いきつきなさけあつて我をはた  
すけぬれ共よきかたきなれはいかにもしてうたんと  
あんをめぐらす所へむしや二人うへの方より來りけ  
るすへ竹みてすはかたきよとたゝんとするをひきと  
めあれはそれかし一ぞく共に候さはがせたまふ  
なと申ながらかれらがちかつくものならばしやくま  
んよもをちあはぬ事はあらしとまちいたりすへ竹は  
しめはりやうはうのかたきをひとめつゝみたりしか  
したいにちかつくかたきをはつたとまもる其ひまに

小八ちからあしをふんてたちあかりすへ竹かむなひ  
たをとひかゝつてのつけにつきたをしすかさすのつ  
かゝりくひをかうんとする所をねながらかひつかみ  
ふかたへかつはとなげこみをちあふ二人のかたきを  
くひ一々にねぢきりふかたにとんていり小八をとろ  
の内よりひきをこしをのれめにじひをたれてたすけ  
ぬれはをんをしらぬぐにんやとくひちうにひきぬき  
みつのくひをたちのきつききにさしつらぬきけふの  
しつはらひはめつらしからぬするがのかみうらべの  
すゑ竹としつもつて五十八とかうしやうにのゝしり  
ほんぢんさしてそひつかへすかのすへ竹か手からの  
ほときせん上下をしなめみなかんせぬものこそなか  
りけれ

### 第三

扱も其後ともたかは手あはせのいくさにふかくを取  
人のひはんもめんほくなく此たひは命かきりにはた  
らきしよ人にみせんと人をもませす手せひはかりに  
て又きとぐちにつめかけける城にはかねてよういの

事なれはうへの山よりさし取引つめいたりけるとも  
たかせい共さんくゝにいたてられさきへはさらにす  
すみゑすしとろになつたる所へきとをひらきくつき  
やうの兵八百よき打て出ればともたかゝせいそくし  
にをひくつされあとをもみすしてにけにけり城の大  
將悦びすはやよせては色めきたりそつといきつき又  
うつてかゝれはいかにくゝと下ちすればかちにほこ  
つたる城のせいかしこまつて候此てひにてはよせて  
をていとまでをひのほさん事あんの内にて候御心や  
すかれといさみすゝんで又かゝらんとする所へすへ  
竹くつきやうの兵六十三き引くし上の山にいたりし  
か此よしをみてよしなきともたかをくひやういくさ  
ゆへみかたはいほくにおよびたり爰をちらさすは大  
將の御ちんもくゝるへしとやあなんしらするかの守  
うらべのすへ竹か是に有をはしらさるかいて物みせ  
んとまんなかへわつて入たせいを四方へをつちらし  
くひあまた打取かち時をとつとあけみかたちんへぞ  
三重ひきにけるちん所になれば大將の御前に出うち  
取所のくひ八十六きみのしつけんに入にける時にと  
もたかすゝみ出いかにすへ竹それかしかたきをひろ

みへたばかり出しまん中に取こめうたんといたせし  
を御へんよこあひよりかゝりかたきをおひくつしぬ  
る事はいくさのほうきにあらすいかにくゝとのゝし  
りける爰にいくさふきやうなゝをの源内むねきよは  
とも高かゑんじやなればひいきかほにすゝみ出誠に  
ともたか手だてをめぐらしたばかり出せしをすへ竹  
よこあひより切て取たまふ人にはねををらせちうに  
てばひとつたるかうみやう是くんほうをそむきたま  
ふおゝい成あやまちさそとも高ほひなく思ひたまふ  
へしらうたいの事なれは一わうはくるしからすいご  
をたしなみたまへとあらゝかに申けるすへ竹につこ  
とわらひ是は事めつらしきいくさのほうを承はる物  
かなむかしか今に至るまで爰はたれかうけ取是はな  
にかしかうけ取の所なりとてみかたの打まくるをけ  
んぶつするいくさのほうや候ともたかのせいきくら  
坂をうちこへすでに大將の御ちんまでにけかゝりて  
きはいさみすゝみうつて出る間事の大事とそんし一  
めいをかへりみすてきじんへわつて入りつか六十三  
きにてかたきのたせい城の内までほつこみ城の内に  
ても是そと思ふ兵共を八十六きうつたるは時にとつ

てのはたらきとこそそんせしにあんの外成事かな仰のことくそれかし　よりをいにほれてくんほうを

もわきまへずかさねても又かやうのそこつはいくたびも候へしまひと御めんにあづかり申さんとことはすいしく申けるたうりしこくたるによりかさねて一ごんもことはをつかふ物もなくくびのしつけんことおはり御前をまかり立けるをほめぬものこそなかりけれしかれ共大將はともたかをひいきにおぼしめさるゝによりなにとかもふかたゝすへ竹かへんせつあきらかに申てもげふのしあはせはともたかゝはたらきをそねんてしたるいくさなりさらにかうみやうとはおもはれすきやつはら頼光よりつたはつたるはまれの物そとおもひよりのぶかまへをもはゝからすひろう成ていたらく誠にをひほれたるとおほへたりと御ふくりうはかきりなく御さをたゝせたまひける大將の御しんていこそはかなけれさる程に城中のつはものをすへ竹にくははんうたれわづかにのこるもの共みな引いろにみへにける大將きようぢ今ははや此城にてはかなふましいつくへおち重てきへいをあけんこのき尤しかるべしと城にひをかけけふ

りにまぎれおちゆきけるよりのぶあはや城はをちたりあれあますなとさいふりあげたまへはわれもゝとをひかくるされはにやすへ竹はたひゝかうみやうひるいなければ共ともたかざんけんゆへ大將のおまへもよろしからすいくさしてもせんなしかゝる大將につかへんより此たひかへりなはいつくにも引こもるへしさりなからそれかし身一たいのはたらきなれはいかにもしてかたき大將のくひ取てかうけんがほ成ともたかめにおもひしらせんとこま引よせうちのりたゝ一き人にすくれてをつかけゝるあんのことくまへた山のふもとを甘きばかりにてとをるたそとみれは城の大將なりすへ竹よろこひそれへおちたまふはこんの左衛門とみるはひがめかかくてきにうしろをみするみれんさよかくいふはするがのかみすへ竹なりかへせゝとよはゝれはせんごにしたかふらうどう共すへ竹と聞からに四方へばつとにけにけるすかさす馬のもろあしなきすへおつる所をくひうちをとし我一代のかふみやうに是程うれしき事はなし口聞たる友高めかつらへ此くびをなげ付君に思ひのまにふそくをいひ本國に引こみかのせん惡をよそに

聞て有へきと悦ひいさむ所へ左衛門からうとう二人しうを打せいづくかをちゆかんと取てかへし一とにゆんでめてよりくみにけるすへ竹さしつたりとうへを下へとくみあふ所へ友高すへ竹かかたきの大將のくひ取たるをうらめしげにうへの山に打なめていたりしか此由をみて山のうへよりかけ下り左衛門がくひおつ取天のあたへと悦ほんちんさしてそ歸りけるすへ竹ゆめにもしらす二人のかたきを取てふせくひ一々に打をとし立歸りみればくひはなしこはなむ三ほうさき程友高かみへたるか定てきやつかぬすみたるらん扱もく口をしや是天めいのつきはなりいかせんともたへあこかれ大いきつひて立たりけるかくてあとよりをつかけ右のあらまし申共君友高を御ひいきましませはそれかし申事は皆いつわりと成へしきやつめを切てすつるならはかうみやうをしませんかたなきに切たりといよんひはんたるへししよせんいつくへも立しのひてしつかにくふうをめくらし此本もふをたつすへしかさねてせうこのために取てかたきのむくろにさしたるくれないのはれんにきんのへうたんのさし物を

ゑをねち切てくるくくとひんまきむねの間にしめ付とかく此ちつふをたゝさぬ内は男を立てせんなししやいつまと五十八と申にはほんなふのたふさをふつつと切かふとゝそへて西へなけゆくへしらす出にけるすへ竹か心中むねん共中く申はかりはなかりけれ

#### 第四

其後友高はなんなくひをぬすみ取ちん所に歸り都よりしたゝめて持けるにせさし物につ取そへ御せんに畏城の大將おち行候をほつめ打取候とせうこたゝしく申けるよりのふゑつきかきりなくくはしくせんき有にうたかひもなき大將のくひなり平の家のさし物をわがてへ取しは是すこふる悦たりとふかくおさめたまひ友高には此度のをんしやうにとていかの國を下されける友高めんほく身にあまりつつしんて畏扱もうらへのすへ竹こそ某大將のくひ取しをそねむしんいや候ひけんあとよりそれかしをめにかけやをはなち候間ごへんは心かはりとみへたり御せん

にてあらそふべからずとことばをかはし參候よつくりの御せんき尤にそんなし候と誠にやかにうつたへけるよきにて大かたみへたりなんしをそねんたるはひつてうとかくは都にてせんきをあひきはむへしまつかいちん有へしとくんせいを引くしらくやうさして三重上らるゝすへ竹のらうとう共はあなたこなたとたつぬれとしうのゆくへはなかりけるしさいいかにとしらされは何とさたすへきやうもなく國本さしてそかへりけるさる程によりのふていとへちん有とも高を召れすへ竹をたつねさせたまへはしなのゝ國より今にをひて罷歸り申さすいか様それかしにやをいかけしを事の大事とそんなしづくへかおちゆきたりと覺候もし本國へひつこみ候はなんきにおよび申べしいそき國へ打てをつかはされかれがさいし共を御つひばつましまして國へはこくしをすへさせたまひて然るへしとぞこん上すよりのぶ聞召げにゆたんしてはあしかりなるとち山兵こみちさたにかいたう大せんの太夫くにさたとに右のあらまし仰付らるゝいづれもちやうい承ぐんせいを引ぐしするがの國へ

と三重下らるゝいそがせたまへは程もなくまりこのしゆくにやどを取とかく事あらくは物のやぶれになりやすししよせん事の次第を申つかいすへ竹の子小次郎すへはるを是へよびよせん尤然るへしとかはの源太に事の次第をいひふくめふちうへつかひを立たまふ城になればあんないかうて家のかうけんきつ川のせんしよし時にたいめんし扱も御へんのしゆくんすへ竹公とかのしさいは存せね共君の御かんなきかふむりたまふにより國にまします小次郎殿にもちと尋申しさい有内山兵ごにかいとう大せんの太夫でうしとしてまりこのしゆくまで下ちやく仕るといんきんにのへにけるきつ川はつとおとろきそれに御待候へとわか君によしをかくと申上るすへわか聞召こはそもいかにとさきたつものはなみたなりせんし是をみて今はなけかせたまひてせんなしつくゝゝあんをめぐらすに兩しまりこまで下るは君のとかきはまつてわか君をもめし取てちうせんためと覺たりたとひ大とのこそつみにしづませたまふ共わか君かくて御さあれは城をはそうなくわたすまし打とけるなほうはひ立まつつかいのものがくびうつ

ていくさ神にまつらんと出て出るをわか君しはし  
と引とめおことが申だんちうきあつてたのもしさは  
いひながら事のじつふをきゝためさやうにあらき  
ふるまひはちゝうへのとかかるくともいよくをも  
くなりぬへしつくゝものをあんするにたゝ人のさ  
んけんにて有へしさあらば天うんくもりなくきよき  
かゝみと成たまはんしからん時はいよくそこの  
いたりなりたゝゝまりこへうちこへ兩しにたいめ  
んし事の次第を聞へしたとひとかきはまつてちうせ  
らるゝ共おやのためにきられんは子たる物のみちに  
て有なけくなとなみだをながしのたまへば吉川うけ  
たまはり扱もゝみちにあたる仰かなけにやきしは  
もゝとせなれ共とうねん生れたるたかにとらるゝ事  
は今こそ思ひしられたり君はいまだ御じやく年なれ  
共りひめいさつにあきらかなりそれかしたさかりに  
みちぬれ共あとさきのわきまへなくそこつを申上候  
君は是十さいのおきな我百さいのわらんへにて御さ  
候此うへはともかくも御いしだいに候あはれたゝ  
今の御一ごんちゝうへきこしめすならばいかばかり  
御よろこびましまさん心にまかせぬうきよとなみ

だをはらゝとそなかしけるすへはる聞召あらした  
のもしゝゝこの事をはゝうへにかまひてしらせた  
てまつるなきこしめすならばさだめてとめたまふ  
へしさは有ながら立出かへらん事もさだめなしよそ  
ながら御いとまこい申さんとをくをさしてぞ入たま  
ふおまへになれば母うへをつくゝと御らんし御す  
がたをおがみ申さんも是やかきり成へしとつゝむに  
あまる其なみだよそのたもともぬれぬへしわれ立  
出るそのあとにてあらましを聞召さこそはなげかせ  
たまはんと思へはゝゝかなしくてしのびなみたはせ  
きあへずやゝありてなみだをおしとゝめこんと都よ  
りとう八か國のこくしまりこのしゆくに下ちやく有  
國々のしをきの事をたつねたまふによりきん國のし  
よ大名のこらずまいられ候それかしもちゝのみやう  
だいとしてたゝ今まかり出候とのたまへははゝうへ  
きこしめし扱はさやうにありけるか都人ははづかし  
くそこつに物を申つゝいなかふしとてわらはるゝ  
なこくしのまへに出るならひさにてをつきてつゝ  
しんてれいをなしことばをうやうに申べしかまひ  
て事あやまつてちゝのなはしくたすなとつみにしづ

ませたまふわか子のすへをはつゆをもしろしめされ  
すいとこまやかにをしへたまふはゝの心そあはれな  
りわか君はゝうへの仰をつくゝと聞召いよゝお  
もひますかゝみふかくのなみだをなかしあらはれて  
はかなはしと何となくもてなしやがてかへり申さん  
と心つよくはたち給ふかあまりになこりやをしかり  
けん物のひまよりさしのぞきこんじやうのなごり今  
ばかりとひとりくどひてなくはかりあゝ何事もゝゝ  
うつれはかはるゆめのよになげくは人のまよひぞと  
なくゝゝいてさせたまひけるかの若君の心の内物の  
あはれは是なりゝゝと皆かんせぬものこそなかりけ  
れ

## 第五

其後わか君はらうとうのきつかはのせんし御共にて  
夫と打つれまりこのしゆくへといそかるゝしゆくに  
もなれは由をかくと申せは兩し悦ひこなたへとをく  
にせうし扱もすへ竹のとがしさいはそんなね其君の  
御かんきかうむり其によつて御身をも都へめしぐし

申せとの上にて候城をもすみやかに御わたし候へ  
といんぎんにのへらるゝわか君聞召上いのたにいさ  
いかしこまつて候しかしながらおやにて候すへ竹は  
しさいにおこなはれ候か又るざいにふせられ候か兩  
し聞召いや其だんは何共うけたまはらず候すへはる  
涙をなかせたまひ扱はふかきとかにてしざいにお  
こなはれたまふらんかねてより思ひまうけし事なれ  
は今さらをとろくべきにあらずさは有ながらとかの  
しさい有ながらとかのしさいをわきまへすはてん事  
こそ口をしけれよしそれとても力なしと太刀かたな  
をわたさるゝ兩しも涙にむせひたまひ其だんも都へ  
上らせたまはゝ慥にしれ申へしまつこなたへとをく  
に共ないたまひける扱つきのまに有ける吉川か刀を  
とらんと侍共一どにかけよりしを四方へはつとつき  
たをしやあ侍のたち取にはほうぎか有そつこつによ  
つてけがするなどはやたとこそはにらみける時にさ  
いせんのかいをくより立出わか君も事のやうを聞  
召わけられ太刀を御わたしなされたりふせうながら  
刀をわたしたまへせんし聞て扱はさやうに候な是成  
もの共は其たんをは申さすりふじにとらんといた

し候我々てむかひせんと思は、城を何しに出へき此事をかねてよりすいりやういたし候へ共わか君をんびんにしめしたまふにより罷出たりおそろくはかたかたか五十や百にて此吉川かたちをとらん事はなかなか思ひよらぬ事なれ共かみにしたかふ下なれはわか君たちをわたし有うへは我いぎにおよぶべきにあらずとたちをわたしければ人々やがてをくにめしこめける口をしかりける 三重次第なり其程に御共申せし侍共なくく城にかへり此よしかくと申上れば母うへゆめ共わきまへすこは誠か物うやときへ入やうにそなけるゝおつる涙のひまよりもかくて時うつしてはあしかりなんへんしもはやくまりこのしゆくへいそかんとなくく出させたまひける心の内こそあはれなれ兩しのやともなりしかは女はうたち事のていを申さるゝばんの侍かみへかくと申上れば兩し聞召こなたへとせしわか君にあはせたまふ母うへ御らんじおもはすしらすいたき付いかにすへはるをことかやうになりけるは定てつまのゆへ成へし其とかのしさひは何とかきゝて有けるそわか君聞召仰のことく父うへのか我も心もとなくぞんしすいふ

ん尋候へ共てうしの人々さらにあかしたまはすたゝ都へ上れと斗なりことのていをあんし候に父うへはおもきとかにてあひはてたまふと覺候とたをれふしてそなげかるゝかゝる所へ友高都より下り兩しにたいめんしすへ竹か一子すへはるならひにらうとの吉川をはそれかしにわたしめんゝはふちうの城に打入都よりこくし下るまで國をしゆこいたされよとの上いなり二人の入々聞たまひ上いにまかせめしうとをは友高にわたしふちうをさしていそかるゝ友高みてそれくとしてしうゝ二人をおさへてなをそ三重かけにけるみかよりちうせよとの上いにてはなけれ共かたきの子をへんしもたすくるはあやまり是にてすて君のおまへをはいかやうにも申なさんとやがてしきかはにそなをしけるせんしきひて何わか君をかたきの子と申か扱はしゆくんすへ竹をはなんぢがさんけんしたるなとつくかくとしるならばをのれかくひねち切てしうのけうにほうせんもの神ならぬ身のかなしさはかくとしらすやみゝときられんこそむねんなれ是もわか君をんひんの御さたゆへしうのかたきをあんをんにをく事思へはくゝ口をしや

とおとりあがつてくるへ共ちすしのなわをかければ  
はたらくけしきはなかりけりかゝる所へわたなべの  
つなむさしの國より都へ上りたまひしか事のていや  
う有と馬よりとひをりみたまへはすへわかなりこは  
いかにと立より次第をくはしくたつぬれは友高右の  
あらましのへにけるわたなへはつとをとろききほう  
をうたがふにはあらね共さすがすへ竹か子なとをし  
はりくひをうつことはあまり成しはさふせうながら  
それかしあづかりていとに上り事のてい承とゝけせ  
ひしさいにきはまらはせつふく申候べし友高聞てこ  
はいかに上いにて切とか人をあつからんことちか比  
そこつの至りかつうはかみをかろしめたまふたんゆ  
めゝかなひ候ましわたなへ聞もあへす何かなふま  
しきとや事のたうりを慥に聞頼光のみよよりもつな  
きん時さだみつすへ竹ほう正とて五人五つのゆびの  
ことくにあひならひしんし兄弟よりもちきりふか  
しとおことなともかねて聞て有つらん然るはすへ  
竹をなき物となしのこる四人うきよにながらへ有べ  
きやそうしてわたなべかくせとして申かゝりたる事  
をかなはてやむる事なしせひむたひに申うけん事こ

ははらぬさきにすみやかにあつけたまへやあこなた  
へまいれわか物共承り候とたち取をつきのけめしう  
とをくるゝと取まきける友高大きにかつてやあ  
天がしたにすまんものが上いをやぶる事や有ろうせ  
きなりかたゝとたちのつかに手をかくるわたなべ  
につことわらひひろうなり友高それがしが手にいつ  
たるめしうとをうばひかへさんなんとゝはおにのも  
つたるゑぢきをかきかねらうににたるへし上いをは  
ばかりも時によりちかふよつてけがするなととうざ  
いへけちらし人々をひつ立らくやうさしてそのぼり  
けるわたなへかふるまひたのもしきともなかゝ申  
はかりはなかりけれ

## 第六

去程にむさしの守渡邊のつなはすへはるを思ひのま  
まにはい取極月廿八日に都に付まつ母上をはをく  
せうじ扱ないきひやうてう取ゝなり爰に又さだみ  
つきん時ほう正是三人は九州のらんげき事ゆへなく  
しつめ三日いせんに上らく有りしか此あらましを聞

たまひをのゝ取物も取あへずつなのやかたにあつ  
まりせんきまぢ／＼有けれどすへ竹うきよにながら  
へ有やらん又はむなしく成やらん右の有まししれさ  
れは明日御所に上ても何と打たへんといつれもあ  
しわづらひよはすてにふり行とせんぎさらにきはま  
らすあきればてゝぞおはしけるかゝる所に何とはし  
らず門をたゝくたそととへばすへ竹とこたへたまふ  
人々なめによるこび是は／＼と斗なり時にすへ竹  
我がやう／＼の次第にて友高めにかたきの大將のく  
ひをぬすまれし事諸人のひはんもちろんかつうはめ  
ん／＼におもてを合ん事のめんほくなくうきよをの  
かれしづかにあんをめぐらしほんかいをたつせすは  
めん／＼に二度おもてを合しと一すちに思ひ切かや  
うの身とはなりぬれ共わたなべ殿すへはるをはい取  
たまふと承身のちじよくをふりすて是まで參候とせ  
ん年のいくさの次第つぶさにかたり我ごんの左衛門  
を打たるせうこには平の家の馬印是に有とくれな  
いはれんにきんのへうたんのさし物をみせたまふ人  
人は是を聞か程のたうりを持たながらいかてうろんに有  
べきさはいひながら友高はとう君の御前さらぬきり

のもの一てう御ひいき有べししからん時は五人ひし  
とかたまり御せんをふみやぶつて立へしされは日本  
がうごく共我々はたやすくは打れまし年をかさね日  
をおつて國のさはぎと成ならは定てわだんいらんは  
ひつでう其時我々友高めをもくせんにはり付にかけ  
たまわすはまつたくわだん申ましと心のまゝに申を  
こなひ本望をたつせん事なんのしさい有べきと一づ  
にせんぎきはまつてすでにしのゝめあけ行はこせん  
をさしてぞあがらるゝ是は扱置友高はめしうとを渡  
邊にはいとらしいそぎ都に上り御前に上りはしめを  
はりを打たへける頼信聞召こは心へぬ渡邊がふるま  
ひかなきつと申付へしときろく所に出させたまへは  
在京の諸侍是ぞ渡邊家のめつほうなりととうもかう  
けもをしなへ殘らす御前に上らるゝ跡より四人の人  
人しそんする物ならはしやいつまとと打うなつきで  
ん中にしこう有人々是をみてげにも天下の五人のま  
れ物とて代々家につたはる事はりかなきれうこつか  
らよにすぐれあつはれゆゝしき有様かなとて物事に  
すへ竹うきよにながらへ五人あひならんて有ならは  
いよ／＼はなやか成べきにかけたる事のおしさよ其

せんきも定て今日有へし渡邊の家のめつほう友高がめつほうせんあく二つ爰なりとかたづをのんてひしめきける時に頼信みすさつと上させいかにむさしの守すへはるは我に弓引ものの子たるゆへちうばつするに上いをもはいからずはい取つたる事ろうせき甚かぎりなし其たんだん上仕れ渡邊承さん候せんくん頼光の御時よりもつなきん時定みつすへ竹ほう正とてかくにあひならんでしんし兄弟よりむつましく候事を、それながら上にもしろしめさるへし申だんくはこんには候へ共我々五人かふかうちうせつ諸人かたをならふる物もなし殊に以てたんだの國大系山のしゆ天とうしたいぢの時などのはたらきはをそらくはぼんぶの及ぶべきにあらず其によつて頼光よりたい國あまたたまはりて四天王と名付弓やの道にをひては万みんあつくをもんす其さいしをはくちうにしはりくびをいたす事君の上にては有ましき何様友高がわたくしのしはさそと存ばい取て上り候はあやまりにて候はいいかやうにも仰付られ候へとはばかる所はなかりけり君聞召たとひ友高わたくしにてもあらはあれ上いと申をもちいぬはおゝいなるあ

やまりことにすへ竹は我に弓引んとせし物なり其子をしはり首打んかひか事かいそきこなたへ渡すへしかうへをはね王<sup>本ノミ</sup>ちにさらさんとがんしよくかはり仰けるされ共四人は少もきゝするけしきなく渡邊ひごをなほし扱はすへ竹君へ御敵と罷成候な御腹立尤に候しかしながら末武を召御尋候へ末武はいづくに有ぞ某がたちに候急參れ畏て末武を召出す君御らんしかに友高先年の次第くはしく申上よ承先年の次第といつは敵の大將こんのさへもん落行候を某ぼつつめ首取て候を末武そねみうしろより某に矢をいがけ候間御へんは心替かことばを懸られめんぼくなきにそれよりすくにいつく共なく罷出たるたんれきせんたりとべんせつあきらかに申上るすへ竹聞てあよくも作りたるそらことかな其こんの左衛門をは我打取かへる所に郎等二人取てかへし我とくむしやつを打ひまにわとのはせ來り末武が取たる首をぬすみをのれか取たるとひろう仕る事いこく本てうにためしなし跡よりほつかけんと思ひしか共汝くひを持たる上はろんして我ひにをつへし所せん弓やのめうかつきはてうきよを思ひ切かやうになりぬれ共さいし

けんぞくまでひぎのつみにしつむ事むねんに思ひ二度御前に出たり左衛門と我くんたるせうこには平の家のさし物はなりと差出す友高聞て左衛門かさし物はくびと共に某取御前へ上たりそれと申せはくたんのさし物持て御前に出にける二本共に同色のさし物なればそれこそにせ物はこそにせ物よと兩方たかにあらそいける頼信御らんし先年の軍の時かうさんせし左衛門か郎等さきぬま源太を召尋よ承候と御前に召出しみせければ是もとかうわけかねあくんで有しがげに其へうたんをわりて御らんせよ中にけめうじつめうしるして候へし是に過たるせうこなしと兩方へ打ん打わりてみてあれは友高か取たるさし物のへうたんにはもんしなく末武が取たるさし物のへうたんにはくはんむ天王八代のかういんごんの左衛門平の清氏とかきて有友高すはあらわれぬると思ひ物をいわずとうてんしぞい<sup>て脱</sup>たりける其時大將事のじつふきはまつたり友高をはめんく心のまゝにおこなへと仰渡され御さを立たたまひけるいつれも悦び友高を五き七たうを引わたしあはた口にはり付にかけにける扱すへ竹みだいわか君引くし本國に入ぶ有

二度さかへたまひけり上こも今もまつ代もためしすくなき次第すへはんせうめでたやくとて皆かんせぬものこそなかりけれ

山本九兵衛開板

きさきあらそひ

## 初 段

扱も其後つらく天地しんの三さいをくわんするに  
 天は地にくわして萬物しやうじ人はふうふ御あいの  
 みちをまもつてしそんながくたへすされはやくもあ  
 さか山の事わざもみな是いもせの中だち也然れ共そ  
 の道につよくおぼるゝときんば家をうしないその身  
 をほろぼす事たんせん也こゝに本朝六十五代のみか  
 どをばくわさんのいんと申奉るその比十二のつぼね  
 のうちふちつぼの女御かうきでんの女御この二人御  
 てうあひあさからず藤つぼと申はため平しん王のひ  
 め君也かうきでんは藤はらの爲光卿のそく女也中に  
 もかうきでんの女御なんかたち世にすぐれたるによ  
 つてみかど御てうあいあさからずつねにかうきでん  
 に御ゆき有て月にたはふれ色にめで千代をかねたる  
 御ちぎりあさからずさればないゝかうきでんを中  
 ぐうに立られ一のきさきにそなへはよとはおぼしめ

せ共世のはかりを思召いまだ女御にておはします  
 扱又ときのせつしやうにはさきのくわんばく太政大  
 臣たいより公つぎに左大臣源の正のぶ右大臣藤はら  
 の兼いゑる兩三人ばんぎのまつり事をし給ふ又天下の  
 ぶ將には源平兩かの侍也先げんしの大將には定すみ  
 しん王四代のまごせつすの守源のらくわうしやて  
 い大和の守よりちか是はかうきでんの御うしろみ也  
 同かはちの守よりのぶ兄弟三人郎等にはわたなへの  
 源次つなうすいの定光うらべのすゑ竹坂田のきん時  
 ほうせう共に以上五人は天下にならびなき兵也又平  
 けの大將にはかつらはらのしん王に七代のべうゑい  
 むさしの守平の正のりがちやくしくないのせう正平  
 一そくによこ將ぐんこれもちになん城のさぐわん重  
 持是はふちつぼの御うしろみ也郎等にはいきみの源  
 藏さだちかしめの藤太もりすみ高せの刑部あり國べ  
 つぶの五郎としかげとて源平の諸侍君をしゆごし樂  
 しいはつくうに至る迄おさまる御代とぞ聞へけりか  
 かるめてたき折ふし思はぬちんしいできつゝらくち  
 うしばらくそうどうしてみかどていゐをさり給ふゆ  
 らいをくわしく尋るに有時ふちつぼの女御はしらい

とのないしとて御身ちかき女くわんをちかつけいかにしらいと聞給へきのふ迄もけふ迄も二世とかねつるむつ事のいつしかあのかうきてんに思ひかへられ今ははや山田のそうづのあきはてゝとふ人もなき身と成ぬあまつさへかうきでんは中宮にも立一のきさきにそなはるべきとのふうぶん也若さもあらばかれが下手にあらん事いきては何のかいあらん思へば思へば口をしやと聲を上てぞなき給ふ白いと承り共にねたむ人心げに道理也水からがよそに見るさへよに口をしくさふらへは御うらみの數々は思ひやられてはんべる也水からが存には君の御うしろみじやうのさぐわん重持を頼候へて何とぞかうきでんをうしな給ふてたてを廻らし給ふべしと申ける藤つば聞召しげもちを召よせてぢきにいわんははかり有されはとて人つては大事也いかせん有ければしらいと承さいわい水からこそ重持によしみ候へはひそかにたのみ申さんと何のしさいのさむらふへしと事もなげにぞ申ける藤つばなのめならす悦はやとくゝとの給へは畏て候と御前を罷立ひそかに重持にたいめんし初めおほりをかたり源のよりちかかうきでん

のうしろみたるゆへにげんしの人々かうきでんをそんきやういたし候へは若此人一のきさきに立給はいよゝ源氏のいせひかさなつて平けはなきがごとくにはんへるべし何とぞかうきでんをうしなへ給へと頼ける本より重持しらいとにかよひなれ色におぼる者なれはいさひ心へ候と白いとをかへし郎等にはやみの七郎とてしのびのめいしんをちかつけかやうかやうの次第也かうきでんに忍ひ入女御をがいてゑさすべし若しあふせて有ならはほうびは望たるべきそばんしたのむと云ければはやみ承こは一大事の仰とはぞんすれ共しうめいなれば力なくせんあくは時のうん某が一めいをは君に奉り候いさひ心へ候と我やにかへりやういして其夜のうしみつ斗に忍び入こそあやうけれされはその比かうきでんの御うしろみ大和守よりちかは物事ゆだんなき人なればかうきでんの御てうあいを見まいらせいか様人のそねみおゝかるへし若しせん事も有ならは我あやまりと存つゝねゝ侍共に申つけかうきでんを守らせ給ふが折ふし其よ三田の源太ひろつな承はそ戸の口にとのいしていたりしがあんのごとくはやみの七郎源

太が有共しらずしてほそとのくちへしのびいらんと  
せし所に源太すかさぬおのこにてらうせき者あます  
ましととんでかゝればあらはれぬるかと取てかへし  
逃る所をいづく迄かにがさんとついじの内をかなた  
こなたへとおいまはししゝいでんの下口にてやがて  
おつゝめたふさを取てうしろへどうとたをしおき上  
らんとする所を取ておさへくびかき切てちうにさ  
し上らうせき者をしとめたりとよばゝればほくめん  
の侍共われもゝと立出たいまつふりたてみてあれ  
は平けの侍はやみの七郎かげ光也人々おどろき關白  
殿へごん上すよりたゞ公聞召いか様しさいをたゝす  
へし源平兩かをめしよせよとの給ひけり畏て候とて  
すてにそのよもあけゝれば兩家へかくと使たつ源平  
の人々取物も取あへずなんてんの大ゆかに伺公有く  
わんぱく殿御出有てこよいかうきでんの御方へまぎ  
れ者の入けるを三田の源太が打とめたりみれば平家  
の侍はやみの七郎と云者也とふうぶんせんぎせよ  
と仰けるその時平の重持はつと思ひさてはしそんし  
たりと思ひしがさあらぬていにて罷出そのはやみの  
七郎は某が郎等にて候が源太はいづくに有ぞ尋べき

しさい有と申さるゝひろ綱是に候と御前ちかふさん  
上す重持見て源太いかにやせんはやみの七郎をはふ  
づつぼの御方へけいこに付置て有けるを何たるいし  
ゆ有てきん中にてらうせきをは仕るいかにゝと申  
さるゝ源太聞て忝もよりちかが申付にてかうきてん  
に御ばんつとめて罷有所にたれとはしらずほそとの  
内へしのび入候程にみちんになさんと存とびかゝり  
候へ共めのとはやき男にて逃候をしゝいてんの下口  
にておつつめ打て候なりはやみの七郎とは人々の申  
されしにてこそ存たれそれいしゆ打にとりなしたま  
ん事思ひもよらぬ御事なり若いしゆ有てうつならは  
きん中にてうたす共あのはやみていの者をば五人十  
人有共此ひろ綱がてにはためす候とはゝかりなく申  
ける重持聞てはやみが何故かうきてんへは行へきぞ  
せうこもなき事申共人をあやめしそのつみはいかて  
か以のかるべきとうゝひろつなが首斬わたさるべ  
しいかにゝと申さるゝ其時よりちかすゝみ出いか  
に重持らうせき者を打とめて高名したる源太なれ  
は御ほうびこそたまはるへきに御ぶんがわざには  
かなふましと申さるゝ其時平けの大將正のり申さ

るゝはしよせんはやみはうたれつしにんにもふせう  
本ノマゝこなし是はひとへに時のけんくわと覺へたり法にま  
かせて仰付らるべしと申さるゝ其時らい光のたまふ  
はいかに正のりせひをいわせむむたいにけんくわと  
とがなし給ふ共天うんなあきらかなりさすか大内に  
てらうせき者を打取て高名したるひろ綱なれば御へ  
んたちのはからいにて源太がくびはちつと切にくう  
候べしとあざわらつてのたまへはその時正平罷出扱  
はけんくわ兩せいはいのしきもくはほんぐなりとは  
すいさんなりときしよくかはつてみへければかはち  
の守よりのぶ生年は十七年ちつ共こらへぬおのこに  
てするゝと罷出そうして平けのやつはらおのれか  
うでのかなはぬゆへ大ぎをかすめてあいてをとら  
んと思ふかやすいりやうするに是はいか様藤つば  
の女御かうきでんをねたまいて平けを頼たま  
ふと覺へたり何と成共今一言申て見よてんちうとは  
いわすましみちんになしてみせんぞとたちに手をか  
けすゝみたまへは定光すへ竹つな金時ほうせうとも  
にすは共いわばかたはしよりかいつかみみちんにな  
さんとうてくびをにぎつてつめかけたり平けにも一

ごのふちん今なるとたちのつかに手をかくるくわん  
ばく殿御らんしてそれしづめたまへより光とのたま  
へはらいくわうかしこまつてやあ何をさはぐぞわが  
者共たとへ平けがさゝめく共きん中にてらうせきは  
せさすまじ先しつまれとのたまへはさすがの大將  
の一ごんにてけんしの人々いかりをおさへしづまれ  
は平けもすゝむに及はすそのときくわんばく殿いか  
に兩け後日のさたに及べしまつゝたいいさんせよと  
仰けるおのゝ畏てたゝんとする所によりのお取て  
かへし後日のさたとはなまぬるし只今らち明てみせ  
申さんたとび出たまへは平けも取てかへすをはくめ  
んの大せいおしへたて引たつるよりのふこみ出ゝ  
したまふを人ゝひらにゝと取つゝみ宿所をさし  
てかへらるゝかのよりのふのいせいの程あつはれ天  
まやくしんも是にはいかてまさらんときせん上下お  
しなへてかんせぬものこそなかりけり

## 二 たんめ

其後じやうの左ぐわん重持は宿所をさしてかへりつ

つづく物をあんするに此度くわんばく殿の仰には後日のさたと有上は重てたいけつにおよばん時我何とちんし申共藤つば殿にたのまれてかうきてんをうしない申さんとてはやみをしのび入し事終にはかくれよもあらしさあらん時はふしつばの御身のうへはともかくもわがつみいかてのかるべきしよせん一もんをかたらい源平のかつせんにせばやと思ひ頓て平けの大將正のりやかたをさして行にけるかしこになれは一門をよびあつめ重持申ける様は扱も今度きん中にて源氏の者共に平けをあつかうせらるゝ事むねんとはおほしめされずやそれかしが身になつては郎等うたるゝのみならず一家にちじよくをあたへられなかゝいきたるかいもなしこのうへはそれかし一人にてもおしよせてより光よりちかよりのぶ兄弟のうちを打取てほんもふをとけんと思ひ定候也人いかにと申ける正のり聞たまひ重持が藤つばにたのまれてしいだしたるは夢にもしりたまはずされはとよ御ぶんがちじよくは一もんのちじくなりげにもげんしの者共がことばのすへ平けを見こなす所なりそのうへゆいかいなく郎等を打せあいてをもとらす

してかたてうち成しをき思へはゝむねんなりせんする所此うへはげんしと打はたし兩けのうんをためすへし打かつて有ならはさい國へくたりてうてきと成てなをまつだい迄に残すべしかたゝゝいかにとのたまへは一ざの人々此き尤然るへしはやゝと思召立たまへと平けの一もんらうじうつがふ一千よきはり川さしてそよせらるゝこの事かくれあらざれば源氏の一もん我もゝとはせあつまるよせくる敵を待かけたりあんのことく平けの人々二條はり川におしよせてときのこへをぞ上にけるげんしの方には同時をぞ合ける時の聲もしづまれは平けのかたより城のさぐわん重持一ちんにこまかけ出し大おん上てなのりける只今こゝもとへ罷出る兵のをいか成者と思ふらんよこ將ぐん是もちが二なんじやうのさぐわん重持なり某が郎等をうつのみならずきん中にての悪言のにくきゆへよせたるなり命がおしくは甲をぬいてやあかうさんせよとよばはつたり又けんじのちんよりも源のよりちかこましつゝとあゆませ出何しげもちと申か汝はふちつほのうしろみ我はかうきでんのうしろみなり此比かうきてんへのてうあひゆへ

に某をねたみはやみをほそどの口へしのばせて女御をがいし奉らんとせし所に思ひの外にしそんしみたの源太にうたれし故後日のせんぎを大事と思ひ當ざのけんくわに取なさん其ため一もんをかたらいおしよせたと覺へたりいかにみかたのぐん兵共あれ打とれとのたまへは畏て候と源平たがいに入みだれこをせんとたゝかいけるかゝる所に平けかたよりむしや一きすゝみ出某ははやみの七郎か弟にはやみの九郎かけ介と云者なり三田の源太は我が兄の敵なり是へ立出せうぶをせよいせん藤つぼ殿へしのび入あにかけ光がねいりし所をうかゝいてくびかいたるとはちがふへしいかにゝと申けるひろつな聞て打わらいちん中よりも立出おのれはまつさか様を云物かなあにの七郎こそ女御をあやめ申さんとてかうきでんにしのび入某にうたれたり兄弟のよしみなれはおのれもひろつながてにかゝつてあにの跡をしたへ行やと云まゝにとひかゝらんとしたまふをやがはの興一おしくゝりあれていのかせ侍それかしに仰付られ候へとはしりかゝつてはつしと打はやみさらりとうけながし興一がもろひざなぎすへことばにはにざり

けりとまつかう二つに切わつたりひろ綱はかみをなしつゝとよつてむつとくみかさにかゝりておしけれ共かれもきこゆる大力藤のまとふるごとくよりそふて打たをさんとしたりけり源太見てはゝきやつめはちつとつよかりけるよな去ながらわが力を出す程ならはなに事かあらんとくさずり二三まいどうの板に引つめてきのよはこしゆりあけゝ上おびをつかんとともに四五へんふりめぐりかしこへかつはとつきたをししばらくいきをついたりける九郎大きにいかつて大たちまつかうにさしかざしおかみうちにてうど打ひろ綱はつと云てしづみければ九郎あまつてかつはとふしおきあがらんとする所を取ておさへ七郎をはしゝいてんにてうち取たり弟の九郎かけ介をはこゝにて只今打取とくびかき切てたちのさきにつらぬき立かへらんとする所大せい一度にどつとかへしのがすましと打てかゝるを源太此由見るよりもゑゝものゝゝしのやつはらやとたてさまよこさま十文字にかけとをる西からひんかし北から南くもでかくなは十文字やつはながたと云物にあたるをさいわひにはらりゝとなきおとすすきもあらせず百き斗ての

したにはらり／＼となきふせたりげにも敵かこらへばこそ風に木のはのちるごとく村々ばつとおつちらし其身はちつ共てをおはす身かたのちんへしんづしんづと引たりける此ひろ綱がその有様おに神よりなをまされりとてみなほめぬものこそなかりけり

### 三たんめ

其後時のくわんばくよりたい公は源平のたゝかいを聞召大きにおどろかせたまひつく／＼と此らんじやうを御しあん有にしよせん是は藤つぼの女御かうきでんをねたまたまひて平けをかたらいたまふにうたがいなしされはとて此じつふをたゞさんにはため平しん王を初ふぢつほの身のうへ殊には源平のさうだうひとへに天下の大事と思召たゝその事となく兩けのさうどうをしつめばやと御しあん有ていそき源へい兩かをめされける兩かの人々おの／＼さんだいなされけるくわんばくたいめんなされつゝいかにかた／＼わたくしのしゆくいをもつてらく中をさかす事以の外のらうせきなり上にまぎれなき上は下

のいかりをおさへて兩方おんびんたるべきなり是ちうしんの道なりといさひになだめさせたまへはげんしは本よりいくさには打ちちたればべつきなし平けは事を是にまぎらかさんためなればしすましたりと思ひいさひにおうけを申兩方共にたいさん有くわんばく殿の御しあんにて都のさうたうしづまれば御悦びはあさからす是は扱置藤つぼの女御は此由を聞召白いとをちかづけてさてもむねんのしだいかなほんもふとげぬのみならず都のさはぎかつうは又平けにちじよくをあたへし事みな是水からがしよいなれはついいには此事かくれなく君聞召はぢでうなりさあらん時は水からが身のうへあんのんには有ましきとてものれがぬ身と成てしばしが内もながらへむねをこがさんよりかうきでんにかけて入てさしちがへむなしく成君に思ひしらせ奉らんと跡をたのむぞしらいとゝ守り刀おつ取てかけ出たまへはしらいとあはてですがり付こはしたなき御有様先こなたへと引ととむ女御せきかねこゝをはなせしらいとゝふりはなさんとしたまへは女ほうたち大せい立より引とゝめ奉る此事かくれあらざればみかと大きにげきりん有

てだいのうちにはかなふましいそきさとへおくれ  
とのりんげんなり畏て候とはくめんの侍共頼てこし  
をさしよせいたはしや藤つぼを取て打のせさとへ  
おくり出せしはむねたくいはなかりけりやかたに  
なれはかやう／＼と引わたしほくめんのもの共はだ  
いりをさしてぞかへりけるため平ふうふの人々は太  
きにおどろきたまへ共りんげんなれば力なし本より  
女御はむねのほむらはいやましにいまはひたすらき  
やうらんの身となりてかけ出／＼したまへは藤つぼ  
はせんかたなくひとまのごくやしつらいてをきふし  
わかぬ御有様はづすへにむすぶつゆのまもわすら  
ればこそ腹立やあらくちおしやむねんやとかうしに  
取付もたへさけびたまひしは身より出せるつみなれ  
共哀と思はぬ人はなし是は扱置かうきでんの女御は  
藤つぼの御身のうへを聞召あらおそろしや何事もみ  
な是水からがゆへなれば人のうらみをうけし身の行  
すへなにとなら坂や此てかしはの二道かへる君ゆへ  
に我も又いかなるうきめにあいもやせん、もへ出る  
もかるゝもおなしのへのくさいつかあきにあはて  
はつへき身にもあらざればけふは人の身のうへあす

はわが身の上と思召うき世のむじやうをくわんじつ  
つそなたのそらを打ながめ心をすましておはします  
かゝる所にふしぎやないとなまめいたるあを女ほう  
そのさまけしからぬふせいにてつまどのわきにたゝ  
ずみたまふはいかなる人にてましますそやその時こ  
たへてこはおろか成云事かな人の恨をうけながらな  
のらすとても今ははやそのをにうへしくれないのも  
れてもいろには出ぬへしかうきてんむね打さはきは  
つとおぼし召れしが心をしづめおだやかにげに／＼  
なのらせたまはす其大かたすいりやう申てさふらふ  
去ながら人のうらみをうけし身なからとは扱みづか  
らにはなにたるうらみの有らん身には覺へはなきも  
のをのふおぼへなしとはおろかなりありしむかしの  
くもの上ともにながめし月かけのうつれはかはるあ  
すか川はなむらさきの藤つぼをおい出さるゝはたれ  
ゆへそやあゝあさましやよもきにひとりこがるゝう  
き身の程思ひしらせんそのために藤つぼのおんれう  
是迄あらはれ來たりかうきでん聞召あゝあさましや  
しつとのねたみは人にこそよれたがいにおしもおさ  
れもせぬ御身にてふぢつぼの女御にはさりとともにあ

い申さぬなり殊更御身も水からもちうぐうささきの宮にもあらばこそ女御の數はおゝければわきてたれとは夕まくれおゝそれながらわが君をつまやおつと思ひたまふはおろかなりあらあさましののおん心ねやはやゝかへらせたまふへし藤つばいよゝ腹を立やあいかにかうきでん御身の命たすけ置君にちぎりをむすばせてゑいくわの花をさかせつゝわらははむくらの宿に只一人よはる蟲のねもろ共になきあかさせんと思ふかやたのしみつきかなしみ來るはた今ぞやいかにゝとのたまへはかうきてん聞召仰迄もさむらはす世はみな夢の内なればあすをはたれたのまぬものおろかの人のいゝ事やふしつぽ重てによむけんほうと思へ共夢の内にもくらく有おことがほんぶの身を持って口と心はかはりつゝくやみたまふとかなふましかうきてんおしかへしんははんにてんする共本らい一もつなき時は何をかとめてくやむへし藤つばいよゝ腹を立それ人の一ねんは有物かなきものか思ひしらせん去とては今ほうたてはかなはしとするゝとはしりよりさんゝに打ちらし立のかせたまひしが中にて忽すかたをへんし思へ

はゝ腹立や人のねたみのふかきとてうきねになかせたまふ共中ゝ思ひはとまるましか身はごくやにおしこめられはすへのつゆときへもやせん御身は君といやましにおきふしさよのねさめにもわらはかかみのうへそしりつゝとや有かくや成はつるとむかしかたりなるならはなをも思ひはますかゝみそのおもかげのつらにくやと又するゝとはしりより何と云共いのちをとらでかなはし二打三打てうゝと打てしんいのほむらは身をこがす思ひしらすや思ひしれうらめしの浮世やあらうらめしのうき世や思ひしらせん待たまへといふ聲斗有明の月にまぎれてうせにけりふぢつほのおんれうおそろしき共中ゝ申斗はなかりけれ

#### 四たんめ

▲其後いたはしやかうきでんの女御、藤つばのおんれうにておもきやまふを引請てばんしのゆかにふしたまふてんやく薬をつくせ共いれうのじゆつも付はて諸神諸佛にいのれ共其かい更にあらすして次第次

第によはらせたまひ今をかきりとみへたまへはみかど大きにおとろかせたまひいそきかうきでんにみゆき有女御の御てをとらせたまい心はなにと有けるぞやたとへかぎりの命なり共丸がひろのむつ事をわすれはせまし去とは心を取なをせいかによとりんげんなり今をかきりのかうきでんちよくこん成と思召、おもき枕をやう／＼とあけあら有かたの仰かなたとへ此身はきゆるともかねてかはせしむつ事天にあらばひよくの鳥ちにあらはれんりのゑだとしぎりしをいかでかわすれさむらふへきしやうじや必めつゑしやじやうりは佛もまぬかれたまはねはかならずなかせたまふまし本より此世はかりの宿ながきすみかのれんだいにおゝそれながらはんぎをあけて待申さんとてもかなはぬものゆへに大内にてむなくならんはけがれにて侍べりいまだこんせうにいきのかよふその内にさとへおくらせたまふへしわが君様とのたまへは主上御泪もろ共にかほどによはる身ながらも跡のけがれを思ふかやおことにわかれなしにだいに有へきぞや丸も思ひ定たりさぞやさいに父母見たふ思ふらんそれ／＼とせんし有畏て候

とやかてちよくしたつ大なごんふうふ取ものも取あへすいそきかうきでんに上らるゝくわんばくてんさま／＼かんげん仕るしゆ上をくわんかうなしたまふ扱ため光ふうふは女御の跡や枕にたちよりてくとき事こそあはれなり心はなにとましますぞやきのふ迄もけふ迄も御身を持てあれはこそくけぶけ共にうやまはれさしもゆゝしく有し身のむなしくならせたまいなばおいたる父母は何と成行申べきあらうらめしの女御やといだき付てぞなき給ふいたはしやかうきでん父母の御なげきを見たまひていとい心はきへきへと日にさしむかふ朝がほの花よりもなをたへかたき聲をあげ君のめぐみは身にあまり父母にはなげきをかけむなしくならん六からが後の世たすけてたびたまへ水からむなしく成ならばかならず／＼けふりとばしなしたまふなよなきから成共うき世にとゝめたくさふらへは花山寺のかたはらにどさうにつきしるしを立置たまはるへし千代よろつ代を重ても思ひはつきじ何事も世はみな夢とおぼしめせいとま申父母様御命めでたふまし／＼て君へつかへたまふへしさらは／＼と是をさいこのことばにて御年十七歳

と申にあしたのつゆときへたまふためみつふうふは  
扱置きん中にあらゆるなん女一どにわつとさけびし  
は是や此しやくそんねはんいらせたまひし時すだ  
いみてし五十二るいにいたる迄なげきかなしむ有様  
もかくやと思ひしられつゝよそのたもともぬれぬへ  
し扱有へきにあらされは人々立より父母をおしへた  
て御しがいをうばひ取御ゆいこんにまかせ花山寺の  
山かけにどさうにつきこめおきしはあはれとはぬ  
人はなし是は扱置こゝに又ふちつぼのうしろみなり  
しせうのさぐわん重持はいつぞやかうきでんへはや  
みをしのび入そんじ一もんをかたらい軍にも打まけ  
そのうへふちつぼはだいを出されたまへはかたか  
たもつてめんぼくなくさかのあたりにひつそくして  
いたりしが此度かうきでんむなく成たまふよし聞  
よりも大きに悦取物も取あへすためひらやかたへい  
そきけるやかたになれは藤つぼのめのと白いとを招  
きよせか様くゝと申ける白いと聞てげにま事わが君  
藤つぼのか様にならせたまふ事かうきでんのゆへな  
れは是に過たる悦なし此事女御へしらせ奉りよろこ  
ばせ申べし是にまたせたまへとてしげ持をはかたは

らに置急きふじつぼのおはしますかうしのそばへ立  
よりなふやかうくゝの次第にてかうきでんの女御む  
なしく成て花山寺にどさうにつきこめ候なり今は御  
心をはらさせたまへと申ける藤つぼ此よし聞召それ  
は誠かうれしやな其ぎにて有ならばその重持にとて  
もの事に花山寺へしのび行其つかを引くつしかうき  
でんがくびを切て持きたりわらはに一めみせよとゆ  
本<sup>く</sup>へにくかりしおもかけを今一め見るならはいかい  
うれしかるべきにはやとくくゝと仰けるしらいと承  
り畏て候とやがて立出重持に近付かくのたんこそ申  
けるしげ持聞てそれこそいとやすき御事なれ某に御  
まかせ候へとてしゆく所に立かへりその日のくるゝ  
をいまやくゝと待にける爰に又源のよりちかは三田  
の源太をちかつけいかにひろつなわれひさしくかう  
きでんの御うしろみとして女御の御おんをかうむり  
たれは御べうしよへさんけいして念佛の一へん成共  
ゑかうし奉らんと思へ共ひまなき身なれは力なしけ  
ふ三日にあいあたる汝御はかへまいりはなをたむけ  
奉れひろつな承候とて花山寺さしてぞまいりけるす  
でにその日もたそかれときに成しかはじやうのさぐ

わん重持はしふんなよしと思ひ下人にすきくわもた  
せ花山寺にうちこゑ御べう所へ立よりほりかへさん  
としたりけるひろつなきたり此由を見るよりもやあ  
それなるはなにものはれは御べう所のつちをかへす  
ふしんなれいかにくくとがめけるしげもちはずと  
思ひしがさらぬていにて是はきん中よりのちよくし  
としてやう有てきたりたりさきゆふはなにもものぞ源太  
聞て何ちよくしとやさ有とてつか引くづすは心へす  
我は源のよりちか公の郎等みたの源太ひろ綱と云者  
ぞとあたりまちかへ立よれば重持源太と聞よりもか  
なはしと思ひけんすきくは打すて下人もろ共にげ  
ちりけるひろつなこはあまさしと云まゝに跡をした  
ふておいくるくらさはくらし道もさたかにみへざれ  
はと有田のもと七八町おいまはされ重持今はかなは  
しと思ひ取てかへし大おんあげ平のさぐわん重持か  
うきでんのかばねをぬすみに來てあらはれたりま  
いりそうと入ちかへて爰をせんとたゝかいけりひ  
ろつな心へたりと引くんでかしこへどうとなげつけ  
ゑゝあつはれおのれはしうしんふかきおのこかなし  
したる人にねんをかけば今生にてはかなふまししゆ

らのちまたは爰なりとくびふつとねぢ切てかけく  
るやつばらおつちらしゑゝあつはれよりちか公への  
よきみやけものやとからくくと打わらつてやかたを  
さしてそかへりけるかの源太がふるまいきせん上下  
おしなへみなほめぬものこそなかりけり

### 五たんめ

▲其後いたはしやしゆ上はかうきてんの御わかれし  
ばしもわすれ給はねはひるはひめもすよもすからひ  
たんのなみだにふししつみかはくまもなき御ふせい  
今ははやきん中はあんにまよへる如くなり比はゑ  
いくわん二年六月廿二日のやはんはかりの事なるに  
中なごんよしかなぬさ中へんこれなりを召れ我れんは  
あいしうのきつなにむすばをれくらいに有てもゑき  
なし是をほたいのたねとして世をのがれんと思ふな  
りさらはくくと御ぎをたゝせたまへは兩人きよいの  
袂をひかへなみだをなかしさ様に思召候はゝいつく  
迄も御とも仕らんとくんしんもろ共三人御年十九と  
申には十せんてい位をふりすてゝよはにまぎれて出

たまふ是はさて置その比天もんのはかせにあべのせいめいと申てしんへんきいのぞう人なるがしゆくくわんの事有てひよしのやしろに百日こもりいたりしが六月廿二日はけちぐわんにてほうでんに立出こすいはるかにみはたして心をすます所にあらふしぎや水中よりまん月一りんあらはれ中より二つになりくもいはるかに上りけるせいめい是を見るよりもはつと思ひそれ日月は天よりこそ出へきに水中より出て天へ上るはさか様なりきつきやういかゝとしはらくかんがへ是はいか様ていわう、くらいをさりたまふてんべんなりとかんがへ大きにおどろき取ものも取あへず都をさしてそ上りける都になればさんだいし事のようにうかやうにくげ大臣に至る迄みかどのしのび出させたまひしを夢にもしらずしゝいてんにくわいかうしてぞおはしけるその時せいめいくわんばくてんの御まへにまいりいさひにこん上申たりければよりたゞ公ふしぎに思召此ほとは女御の御なげきやますしてよるのおとゝを出させたまはず去ながらなんぢか申所おほつかなしさらばたつね申さんと左右の大しんもろともになたこなたと見たまへ共い

つしか君はましまさず人々大きくにおどろきあきれはてたるはかりなりせいめい申やういか様女御の御わかれをかなしみ花山寺へ御き有よと存なりかしこへ御わたり候へとせいめいもろ共我もくゝとしたいけりあはれなるかなしゆじやうは十せんでいゐるをふりすてゝめしもならはぬそうあいには御あしをいたましめよしかな是なり御ともにて戀ちにまよふうたかたのかくらん水のあはとのみきへにし人のおもかげは夢にだにもみへはこそなれし昔のたまくらにかたりつくせしむつ事のみにとゞまりなつかしやわすれもやらぬこいくさのつゆも思ひもみだれつゝわが身は本の身なれ共こひしき人のなきゆへに月やあらぬとかこちしもげにことはりと思召御心ほき折そ脱からにやもめからすのうかれ聲われを思ふかと思はれてあはれをもよほす道のべによすからとぼすほたる火のしれぬ思ひのあればこそ蟲さへむねをこがすらんげに有はらのなりひらがきちうのながめにとぶほたるくものうへまでいぬへくはあきかせふくとなげきしもなみだくらべてあはれなりいとゝさへくゝ身をしる雨のはるゝまもなき中ぞらにおたのかはづのなき

そいて道もさだかにみへばこそなみだぞ道のしるべ  
なるやう／＼行はよこくもわたるしのゝめの今はち  
り行花のお山御寺につかせたまひけり兩人さきたち  
御べう所にまいり是こそなき人の御へう所と申せば  
しゆ上は御なみたながらに立よらせたまひいかにや  
いかにやかうきでん丸はこがれて来るぞかしせめて  
は聲なりともせずやあら戀しのむかしやとりうてい  
こがれ給ひけりかゝる所に三大臣せいめいもろ共に  
御跡をしたい花山寺にてぎよくたいをはいし奉りよ  
ろこぶ事はかぎりなしくわんばくでん世はまつせに  
およへとも日月いまだ地におちす是はいかなる御事  
とさま／＼かんけん有けれ共ちよくこんにもおよは  
すかへつてげきりんのていに見へければあべのせい  
めいする／＼と罷出おゝそれおゝき申でうに御ざ候  
へ共かやうのていにならせたまはすんはいかてかぎ  
よくたいにはちかつき奉らんしよせん御とんせいの  
みなもと此御わかれゆへなればそれかしがじんへ  
んにてかうきでん二たびよみかへらせたまはし御し  
ゆぎやうを思召とゝまらせたまはんやとはゝかりの  
ふぞ申けるしゆ上をはしめくげ大しん申にやおよば

んはや／＼やうい仕れ畏て候と頼てだんをぞかざり  
ける百八のとうみやうを立ぬればたゝまんとうゑの  
ことくなり五ちのによらいをかた取て五色のへいを  
五ほん立ならべ本よりせいめい三國にかへれなきじ  
んへんきいのはかせなりだん上にさしむかつていら  
たかじゆすをさらり／＼とおしもんで先神おろしを  
ぞしたりけりきん上さいはい／＼うやまつて申奉る  
上はほん天たいしやく下は四大てんわうゑんまほう  
王五だうのみやうくわん下界のちにはいせはしんめ  
い天しやう皇太神ぐうあめのみやかせのみや月よみ  
日よみあまの岩戸は大にちによらいあさまかだけに  
はふくいちまんこくうそう王じやうのちんじゆには  
いなりぎおんにかもかすがきふねは五しやの大みや  
うじんくらまさんにはたもんでんたかきお山はあ  
たござん大こんげんおとこ山は正八まん大ほさつ松  
のを平のをむめのみやふしみに一ごん五かうのみや  
大和にかつらききんぶせん吉野はさわうごんけんな  
りたうのみねには大しよくわんたつたは此はなさ  
くやひめくまのは三つの御山なりしんぐうはんぐう  
なちはせんじゆくわんおんなりつのくにゝいたつて

は天わうしにしやうとく太子すみよし四しやの大明  
じん四國のちにはさぬきにこんひらおなしく四どぢ  
のくわんせおんつくしにひこさんいづものくにゝは  
大やしろきつぎの明しんはうきに大せんたんごにな  
りあいきれとのもんじゆあふみの國に聞へたる日よ  
しは山王の一しやおたがしらひけひらの八かうこす  
いはあらはれたまひしは竹生島のへんざいてんなり  
みのゝ國にはなんぐ高山ゑちせんにといはらやいせ  
んしかゝに白山つるぎのこんげんゑつ中にくりから  
ふどう明王なりゑちごの國にはくがみよね山やひこ  
のごんげんきとは日ほんぶそうなり出羽にはくろ  
ゆどのはこんたい兩ぶの大日大りやうこんげん道の  
くにいたりては松島おしましほがま六しよの大明神  
しなのゝ國には上のすいしものすいせんくわうじ  
は三國一のみたによらいかうづけにいたつてはめう  
ぎ八方あかき山、下つけに日光山ひたちの國にはか  
しまかん取うきすのみやうしんむさしにみつみねさ  
がみは大山大しやうふどう明わうなりいづに三島は  
こねは二しよの大こんげんとをゝゝみの國にはあき  
はこまかたはまなのみやうじんみ川に入てはほうら

い寺みねのやくしは十二神おはりの國にはいちのみ  
や二のみ第三にあたつてはやつるぎあつたの大明じ  
んそうして日本六十餘州は三千七百餘しやなり天に  
有ては日月せいしん廿八しゆく大地のそこにおはし  
ますけんらうちじんにいたる迄三千大せんせかいの  
六まんがうかの諸佛神ことくくわんじやうおろ  
し奉るたとへじやうがうかぎりのいのちなりとも今  
一度よみかへらせてたびたまへとせめつけく「い  
のりける佛神のふしゆしたまひけん天ちにはかにし  
んとうして御べうふたつにさつとわれ女御たちまち  
よみかへり君はいづくにましますぞ君はくゝと有け  
れはみかど夢ともわきまへす丸は是にとのたまへは  
こはま事かとおもはずしらすいだきつきこれはこれ  
はとばかりなり三大しんせいめいかゆんでめてに取  
つきおゝ仕たりくゝと、御よろこびはかぎりなしせ  
いめいめんぼくほどこして御前をこそたちにけりか  
んかほんてうにかゝるぞうにん有がたしときせん上  
下おしなべてみなかんせぬものこそなかりけり

## 六たんめ

さる程にしゆ上三大じんをめされ我一たびてゐるを  
さりしよりちやうその望さらになしゑんにうゐんの  
一のみやをくらしいにつけ國土をおさめ申せとて御身  
はゐんにならせたまひくわさんのいんとぞ申奉る三  
大しんりんげんにまかせゑんにういんの一のみやを  
御くらしいにつけ奉り一條のゐんと申て國土をおさめ  
申けるさるほどにしゆじやうは御かざりをおろさせ  
たまひ花山のほう王とならせたまひ有夕ぐれの事な  
るにかうきでんもろ共にみなみおもてのひろゑんに  
出させたまひ庭のおもをゑいらんあるに小鳥二つと  
びきたりおもしろくさへつりしにいつくともなくい  
たち來てくだんの小鳥をくいころしたちまち左右に  
つばさおい出こくうをさしてとびてんけりほうわう  
おとろかせたまひせいめいめせかしこまつて候と御  
前に出る君ゑいらん有いたちにつばさのおいたるた  
めしをきかずきつきやういかにといんせん有せいめ  
い畏てひとつのようもん取出ししばらくかんかへよ  
こでをてうどうつて是はゆゝしき御大事明日のくれ  
程にふちつぼのねんあつきとなつて御所へ來り君も

ろ共にこうきてんを取たてまつり申へしげんしの内  
にてふゆうにすぐれし大將に仰つけられそのたいち  
仕らんとそうしけるしからばらいくわうに申付より  
のふめせ畏てせんしをたまはりほり川さしてそまい  
られけるらいくわうにたいめん有せんしのおもむき  
のべたまへは畏てよりのふに三百よきをぞそへられ  
けるよりのお御所へ行御もんくをさしかためやう  
じんしてこそいたりけれあんのことくふぢつぽかう  
きでんよみかへらせたまふと聞あらくちをしやわが  
一ねんあつきとなつて君もろともにかうきでんつか  
みさかんとつつたちあがつてゑいやつとおどりたま  
へはごくや一度にばらりとくづれたちまち一ねんの  
あつきとなつてくもいはるかにとびてんけり御所の  
うちには御もんをかため待ところにふぢつぽま一も  
んしにきたりたまへはかなはすしてむら／＼ばつと  
ぞにけにけりよりのお御らんしたちひんぬきはしり  
かゝつてちやうどうては上をずんどこしたりけるせ  
いめい御へいをおつ取てもうりやうきじんはいまい  
ましゝ出よくとおつたてられとつてかへす所をよ  
りのふ有やと引くんでなむ八まんとねんしゑいやつ

とはねたをしついにくびをかき切きつさきにつらぬ  
きもうれうきじんのしたがへたりとよばはりけるそ  
れより國土ゆたかにおさまりけるせんしうばんせい  
の御よろこび申斗はなかりけり

右此本者太夫直傳之正本を以寫之令板行者也

貞享四年卯ノ五月吉辰

大傳馬三丁目　うろこかたや新板

# 天狗羽打

## 初段

それかんしんくわかんの、はらをしのんで、終に親王の院をにきり、かううははちをしのばすして、おうこのしをいたす、此ふたりは誠に武將のたづぬべき道ならんか、爰に源の右大將いよのかみ頼吉、代々天下の武將として、御果報いみしくをはします、殊にちやく男に八まん太郎、次男かもの二郎三男しんら三郎、何れもきりやうのきんたちなり、したがふ所のらうとうにめつらしからぬ竹つな、金吉末重、其外三浦のわた左衛門たけちのやすかた、ちふの十郎重明、鎌倉のごん五郎景正むしや所の末行、晝夜の出仕隙もなく君をしゆし奉る、頃しも彌生半成に山の櫻の徒に遠風にもまれて、主なき花のしからめとやならん、ちらぬ先にと行幸あられ、扨人々を御供し櫻の庭にぞ出られける、げにもものどけき春の日に、ことのしけき八重櫻、にをいをこせやまかきのむめ、扨こそ

花のなさけならめ、くるゝぞおしき夕日かけ、ゑんしのばんしやうこゑすごく、しづ心なきやうの會、猶々めぐるさかづきの、たび重ば今ははやよもの咄になつて、大將仰らるゝは、いかに面々此程は、打絶て世間のさたをも聞ざるか、何と世中に、めつらしき事や有と、仰出されたりければ、其時六郎申様、されば爰にふしき成事を承り及候、すきつるきさらきの、廿八日にいまくまの大しん殿こそ、くらまへ參詣あれ、おくのゐんのきさはしにて、長さ二丈ばかりのあつきにあい、かへりて三日めに、あいはてられて候よし申上る、君を初人ゝ、何れもふしきしあへり、中に金吾きかぬがほにていたりしが、つと出て申様、いかに末重只今御ふんの物語は、ひつでうな、なかゝいかにもひつてう候よ、金吉聞て、先よくあんちても見たまへ、ほんとと鞍馬のびしやもんは、天の四天とかうし、多門ぢごく僧正、廣目とて東西南北を守たまふ、中にもた門は我等體のほん下を守、あくま外道をらはるゝとこそ承れ、目前にかてまゑんが住べき、それは世間のいゝなしさあ、六郎聞て、金吉のかたいちめつらしくも候はす、其上せわにも、よみち川

だちかた諺咄の、さきをりせぬ事なり、常々の我ま  
ま、御前にてはやめ候へとよ、金吉大きに腹を立、何  
にそれかし御前にて、我まゝを申とな、尤そこそ有  
もせめ、去なからおやのゆつりのすみずきんどうも  
こうもなり申さぬぞ、おたんなも御しやめん有は、御  
ふんこそ御前共なく跡先しらすのうそ咄、ひらにか  
らりと打おかれよ、末重大きに赤面し、何にそれがし  
御前にて、ひよりを申とな、幼少よりのちなみを思  
ふて度／＼のかうぎを許置ば、ゆるしおけはうりやうもなきあ  
ぶれ者、指ちがゑんととびかゝる、竹つな三浦取付、  
是は御前をもはゝからぬ、すいきやうかな、それ酒は  
いさみと名付、老人はわかくなり、わかきは猶もおい  
もせず、かゝるてうたる延命すいも、すぐれば、とく  
と成ときは、いらい此なかまの酒、きんはいせんと、  
ざきやうに取成、しづめし竹つなを各かんじ申さる  
る、金吉聞て、末重に大口たゝかせ、指ちかゑんもせ  
んなし、いかに末重御へんに對し、諱いしゆはなけれ  
共、御分それ共色かほをむすんで、思ひ切上は是非も  
なし、代々年頃の契りし、はうゆうのなじみを、もと  
すと思へはりはすむと、いふ物よ、去ながら其まゑん

が、住かひつでうならば、かつうは君のためなれば、  
一先それかし行むかつて、有無のしやうれつを、見て  
參らん、ふれふ天の下、そつとの内何くか、鬼のすみ  
か成べし、鬼神はまゑんの物なれば、せうたいむめう  
にして、眼にもさへきらす、力及ず、目にたに見ゆる  
程ならば、けしの中にやとる共、又は十丈の惡鬼とい  
ふ共、金吉か手なみには、いかでもらし候へき、去な  
から印をたまはれ、それがし今晚、見て參らんとそ申  
ける、大將聞召御へんか申ごとく、かつうはわがた  
め、天下のぶせうにそなへられ、四かいにあまねくあ  
く逆ともに何にてもよの安平をこそあふがめ、是を  
立置かへれとて、持せたまへる御扇に、天下太平國土  
安おん、賢き君の勅と書て下さるゝ、又立歸りいふ様  
は、人の心をみちのくのあたちか原に、あらね共はび  
こる鬼を、したがへずは二度金吉歸らしと、高言いふ  
てそれより三重我家をさしてぞ歸りける、宿所になれ  
ば、物のく取てかたにかけ、重代の太刀をはき、たけ  
成馬に白あわはさせ北山さしてぞ、いそぎける程な  
くくらまに、付しかば本どうをわきにみて、おくのゐ  
んへうつてとをる、頃は彌生なり月くまなくさへ行

共こすへしがりてさはりとなれば、花有といへ共、詠はくらまの山の内、みちもしどろにおほつかなくて、をちくるしやうふう花にあたつて、雪とふり雨と成哀猿雲にさけんでは、腹わたをたつとかや、心すこき氣色となつて、馬も心のあればこそいなくこゑは山林ぐわいとにもこゑつへし、うて共くあをれ共行ず、身ふるひしてぞ立たりける、それより馬をのりはなち、印の扇を神前にかけて置、拜殿の板とうくとふみならし、抑く此山は、大畧多門の地をしめて、あくまを退王城<sup>しりぞけ</sup>を守りたまふ北山なり、殊に我々其四天のすをけみやうし、君をうやまい國土を守るのけん武たり、故ぞや土も本も我お、君の國成に、聞ば此頃鬼神か住て、萬民をなやますとや、辱も頼吉公、ちよくをかうむり、うちほろほせとの上いに住、坂田の金吉是迄向たり、それがしが眼前に、そのしやうたいをあらはせと、八方をにらみ二王立にぞ立たりける三重其時山はらいでんしきりにし、めいどうしてぞ、山は天にもゆり上げつへし、木の枝をひきさき、たけかけけれ共、金吉更にどうてんせず、そらうそふいてぞいたりける、然所に金吉かまの前にたけ二丈餘成、

くまのことくのものはらばいしてぞいたりける、金吉は見てやあこけばつたるばけ物かなとてふまへて向へこへにけり、時にいつく共なくどうじ來りていふ様は、抑く此山は、姿ごときのぼん下來る山にあらず、早そこ立て山下せよ、金吉聞て、扱はおのれめは此山に住まにて有な、おのれなとかせうたいにて此金吉をおつ立んなどは、鴨とすいめがすねおしせしには劣りたり、をのれ立されくとからくとぞ笑ける、其時とうじ腹を立、いて物見せんと一丈餘の犬天狗となり、いかれる兩眼は日月のことくたつ一つかみととびかゝる、金吉さしつたりと引はづし、はたときるぐひんかたはを打おとされ、ひるんでこくうにとびさりぬ、金吉口惜や、討もらしぬるときつたる片羽を取持、我家をさしてぞ歸りける、金吉が振舞日本一のつわ者やと、かんせぬ者はなかりけれ

## 二段

去程に金吉、きつたる羽を取持、君の御目にかけてければ人く立寄是を見るに、天ぐの羽にうたがいなし、

竹つな申様、金吉のふる舞偏にとらのおゝふみ、さいろうの口をのがるゝことくなり、君聞召竹つな申さるゝごとく、ぼんぶの身として天ぐを斬事末代にためしなし、其討たる太刀をみせよ、金吉畏て候とて、大刀を捧それゝとあれば、竹つな彼、大刀をぬき見れば、ふしぎや、せつはぎはに赤き物みへたるを、取上みればあたこの山のひのふだなり、君御らんじいかに金吉、思ひ合事はなきか、金吉承り、我年月あたごをしんじ候、頼吉聞召扱はあたごの神力にて有けるよな、去なからか様の物を討が必三日か内にふしきの有物なり、先年も頼光の御代に、竹つなが父渡邊、らせう門にて鬼のかいなを斬、三日めに終に手を取かへさるためし有、随分たじなく三日が内は、事をつゝしみ物いみすべし、是は當座のいんぶつとて、よろいかぶとに太刀をそへ、金吉に下さるゝ、忝候とて御前を罷出三重我家をさしてぞ歸らるゝ、我やになれば、門屋内の口ゝをとちふだをおし、しめをかさりさまゝのきとうをし、件の羽を石びつに入、神道のひみつ文に曰く、地結四方結虚空毛と、書てからうとのなかへふうじこめ、其上に金吉、六ぐをかため

ひつそとしてぞひかへたる、去程に二日はやすき三日めのくれ方にいづく共なくかた羽のとびとんて來り、門より内に入、立まふとおもへはたちまちとうしとなり、金吉がひかへたるしやうしをへたて申様、いかに姿あたごのなふしゆ有、かた羽を姿に打おとされ、つうりきもうすく成、むねんといふかきりなし、姿ゆふ力にまかせ、しんつうをやふる事、たらまち罰をみすへき、いそぎ其羽をかへすべしと、あたりをにらまへ立たりしは、物すさまじくみへにける、金吉聞て何にしんづうやふるといふは何のへんじやうか來て言、姿しらずやくらまの山の太天ぐ、片羽かへせといかるこゑは、家もくつるゝ斗なり、金吉ことゝもせずからゝと打笑、それかみといふはしやうしきにして少もわだかまらず、かゝみにかけるうつるが如し、かるか故にかみの前にかゝみをかくる事、姿らがやう成大まをなし邪成者をいましめんためなり、それ神うやまふによつていをまし人は、みの徳によつて、うんのさうかみのりせうは有共なき共いふ難し、たゞ人の心に有其上、しんつうのうたにじひ佛すく成はかみまがり、人ひとひとりをは三つにわけけり

と有、なんそしやうじきにしてしんするをつかみ、なやまする神とはいわれし、あふことにおよはす、天ぐとは文字にも天のいぬとかけば、たゞちくせうにてこそあれ、姿がぶんにてそれかしてに入たる物をとらんなどゝは、ひきんかいしをふくんで海を、うめんとするに事ならず、あしくうずまひふかくをとるな、たゞしは又残るかたはもたまはらんや、其方の分づつしだいとあらゝかにぞ申ける、どうし大きに腹立、是非羽をかへさぬ物ならば、いて物みせんとあいのせうじをけやぶり、金吉にとんでかゝる太刀ひんぬいて、きりはらへばかなはずたちまち天ぐのすがたをあらはし、南の方へとびさりぬ今においてきいの國なちの山にかた羽の天ぐと申事此時よりもはじまりけり、金吉すましたりと、悦三日三夜も過行ば、石のからうとをいぬいのすみにゆわいこめ、是を偏にあたごときわめ、ごんげんの神力彌しん／＼をこたらず、是は協置おふしうの住人、三たちの權太郎清平がらうどうに小井出の藤太はや馬にてたいりをさして上りける、だいりになればけんびいしけんばのかみを以て申上る、是はおふしうの住人みたの權太

郎、清平か下人小井出の藤太と申者にて候、扱もあべのさたとうむねとう、逆心存立近國をきり取都へうつて、上るよし事きうに候へば、いそぎ討手をつかわされて、然るべう候とをそれ入てぞ申ける、くげ大じん驚たまひて一／＼にそうもん有、みかど驚かせたまひ頼吉めせとのせんじなり、頓てさんだいせられる内よりのせんぢには、あべのさたとうむねとうが、むほんをしつめよとのちよくでう成、とかふに及はす御うけを申罷立我家にかへり、四天王其外むねとの兵をめされて、かやう／＼のせんぢ成いそき馬を出すべし、よういせよとぞ仰ける、竹つな承り尤かふこそ候べけれ去ながら、何れもれき／＼の兵共罷有事なれば、仰付られ八まん君を御大將軍にて、一先むかはれて然るべし、君の御馬むかはんは餘にかろからしく候と、さいさん情誠申けり、頼吉ともかくもはからへとぞ仰ける、しからば八まん君を大將軍にて、末重金吉竹ち三浦かけ正に、北國を勢あいそへられて然るべしとぞ申ける、君けにもとおほしめしいかにかた／＼八まんうちに有間、萬事宜持なすべしまた竹つな一人は、京都のおさへに残しておくい

る、此事都にかくれなく頼吉公竹つなを召れ、聞は道友ねごろこ川の勢を頼、ことさらに責上ると聞、竹つな承りさればにや、敵すではやせつの國迄討手出ると承る、何によせられたばとていかめかしい事はよもせましきと存れ共去ながら、小敵あさむくへからずと、有時はゆだんすべきにあらす、其上ねころの者共はしのひの上手で有間、今もやしのんで城中に犬を入てぞ置つらん、それかし存るしさいあればとて物かしらを近付、寔敵明日たつの一天におしよすべしみかたはとりのこくにちやく帳を付其かしら／＼のちやう帳のいたをかたみにして、むしやを一面にたて、そなへをしやぎの馬のことくたん／＼かくかくにたてならべ、いざいざい立ざいかけ引のざいの手くみを合れ、もしざいにもつかざる無禮の者はあらば、おさへてなわをかけおくへしと、しのひ／＼に申付御勢すぐつて三千よき三重其の夜のおくるを待かけたりよせては程なくやまぎきにちんを取、馬のあしをぞやすめける、中に大膳すゝみ出て、こんやは人馬共にいきをついて、明日のたつの一天によせ、かくべしいさ、こんや城中へ犬を入て、てきの目前に、

うか、はせ思ひもよらぬ所より、火をかける物ならば大て、さわいてはいほくせん所を、ふみこみ／＼責取へしまつさらば、其てだて、いそがんとしのびの者五人近付爰をしそんする物ならばねころこ川のなをりなりすい分、其むねほつすべし承とて敵の方へはきりのいんをむすびかけ、我／＼はこたかのいんをむすんで、行かともへしがかいくれ、すがたは無人のことくなり、よもあけ方に成しかば、竹つなぐそくはだには、から綾の白きねりひおどしのよろいをき、金のざいを持くるき馬にのつて、みかたのめんしよくをみんなめ、ちやく帳の板を／＼にあらはし、件のいざいをしつとり／＼と打をさめたまへば、本よりあいづの事なれば、皆一同にしきだいし、面々大將の下知を背かじと、かをもち上てざいの色をそがかいける、竹つな本よりくろかねの、まな板をもみとをす程のものなれば、三千よきが中よりまたのもの五人み出し、それ／＼からめとれとて頓てなわをかける、竹つなおのれは何者なれば、かけごなしにまつすくに申せ、ころしもせましいけもおくまし、久うもない一せうにちにくをはいて、苦みうけてしなん

よりは、有のまゝにはくでうしくつうをたすかり、し  
ははしねとぞ申ける、五人の者共日頃は、さいのめに  
きざまるゝ共、はくでうなどはかたき事といふなか  
ら、竹つなのせいこんに、ほろりとしごくしなにか  
つゝみ申べき、ねころの法齋三川鐵玉、しゝが谷の蛭  
きりばう、とろ川のりうせんかつ川のうんばとて、代  
代のしのびの名をえし、者なれ共日本一のめくちか  
わきの竹つなに、かゝるこそふうんなれと、しんてい  
のこそすはくじやうす、竹つな聞てさすがねごろの  
者程有、かくけなげ成者共を、たすけてみたき者なれ  
共、末代のみせしめにたいきれとて、首きつて、東寺  
口にぞかけさせける、かくてよせての者共山さきを  
立て東寺口にさしかゝる、件の首をみるよりも竹つ  
ながあらん内は、しのひはかなうべからずたゝすみ  
やかに大手より、無二無三に責入と大手からめても  
み合、時のこえをぞ上にける、城中にもかねてごした  
る事なれば、同時にぞ合けるよせての方より、五人の  
悪僧しつゝと馬をのりかけ、ぐわんらいねつたい  
うらみふかき敵なれば、道友いきどおりのやむ事な  
し、ちやうやうふりやうのよの中にうつらゝと住

はてんとはぶしたる者ほうぎにあらず、せひ一せん  
をあいとげんとよせてみかたが入みだれ、ひ花を散  
して戦いけり、よせては大勢、みかたはぶせいの事な  
れば、みかたまばらになりぬ竹つなみて、君の御前に  
参すでに軍は、まけ色にまかり成軍のならい、かちま  
けは時のうん爰ぞ軍ほうのだい一なり、先落城あら  
れ敵に一たんりをゑさせ、重てちりやくを以て、ほん  
くわいをたつすべし先みたいきんたちをおとし申べ  
し、ともかくも宜様にはからうべし畏て、扱きんたち  
をば侍二三人付てゑい山におとし奉る、扱又御せん  
は御父關白殿へおちたまふ、君もめてめく竹つな御  
供仕二度御げんざんなさせ奉らんと、涙をながし申  
ける、みだい聞召あら心うやそれは君の仰にては有  
まじき竹つなのはからいにてぞあるらん、みつか  
らたいならぬ身といふ君は十五わらは十三の頃よ  
り、あいなれ参らせ片時のわかれをたにうしとかな  
しみ今はのきはに及、おやの本に歸らんはよの人よ  
しとははべらしあまたのきんたちのためにもあしか  
りなん、たとへみつから女なり共、君もろ共に火共水  
共成行共、おやのかたへは歸るまし、情なき竹つなの

る、此事都にかくれなく頼吉公竹つなを召れ、聞は道友ねごろこ川の勢を頼、こときうに責上ると聞、竹つな承りさればにや、敵すではやせつの國迄討手出ると承る、何によせたればとていかめかしい事はよもせましきと存れ共去ながら、小敵あさむくへからずと、有時はゆだんすべきにあらす、其上ねころの者共はしのひの上手て有間、今もやしのんで城中に犬を入てぞ置つらん、それかし存るしさいあればとて物かしらを近付、寔敵明日たつの一天におしよすべしみかたはとりのこくにちやく帳を付其かしら／＼のちやう帳のいたをかたみにして、むしやを一面にたて、そなへをしやぎの馬のことくたん／＼かくかくにたてならべ、いざいざい立ざいかけ引のざいの手くみを合れ、もしざいにもつかざる無禮の者はあらば、おさへてなわをかけおくへしと、しのひ／＼に申付御勢すぐつて三千よき三重其の夜のおくるを待かけたりよせては程なくやまざきにちんを取、馬のあしをぞやすめける、中に大膳すゝみ出て、こんやは人馬共にいきをついて、明日のたつの一天によせ、かくべしいさ、こんや城中へ犬を入て、てきの目前に、

うか、はせ思ひもよらぬ所より、火をかける物ならば大て、さわいてはいほくせん所を、ふみこみ／＼責取へしまつさらば、其てだて、いそがんとしのびの者五人近付爰をしそんする物ならばねころこ川のなをりなりすい分、其むねほつすべし承とて敵の方へはきりのいんをむすびかけ、我／＼はこたかのいんをむすんで、行かとみへしがかいくれ、すがたは無人のことくなり、よもあけ方に成しかば、竹つなぐそくはだには、から綾の白きねりひおどしのよろいをき、金のざいを持くろき馬にのつて、みかたのめんしよくをみんなめ、ちやく帳の板を／＼にあらはし、件のいざいをしつとり／＼と打をさめたまへば、本よりあいづの事なれば、皆一同にしきだいし、面々大將の下知を背かじと、かをもち上てざいの色をそがかいける、竹つな本よりくろかねの、まな板をもみとをす程のものなれば、三千よきが中よりまたのものの五人み出し、それ／＼からめとれとて頓てなわをかける、竹つなおのれは何者なれば、かけごなしにまつすくに申せ、ころしもせましいきもおくまし、久うもない一せうにちにくをはいて、苦みうけてしなん

よりは、有のまゝにはくでうしくつうをたすかり、し  
ははしねとぞ申ける、五人の者共日頃は、さいのめに  
きざまるゝ共、はくでうなどはかたき事といふなか  
ら、竹つなのせいこんに、ほろりとしごくしなにか  
つゝみ申べき、ねころの法齋三川鐵玉、しゝが谷の蛭  
きりばう、とろ川のりうせんとつ川のうんばとて、代  
代のしのびの名をえし、者なれ共日本一のめくちか  
わきの竹つなに、かゝるこそふうなれと、しんてい  
のこそすはくじやうす、竹つな聞てさすがねごろの  
者程有、かくけなげ成者共を、たすけてみたき者なれ  
共、末代のみせしめにたいきれとて、首きつて、東寺  
口にぞかけさせける、かくてよせての者共山さきを  
立て東寺口にさしかゝる、件之首をみるよりも竹つ  
ながあらん内は、しのひはかなうべからずたゝすみ  
やかに大手より、無二無三に責入と大手からめても  
み合、時のこえをぞ上にける、城中にもかねてごした  
る事なれば、同時をぞ合けるよせての方より、五人の  
惡僧しつゝと馬をのりかけ、ぐわんらいねつたい  
うらみふかき敵なれば、道友いきどおりのやむ事な  
し、ちやうやうふりやうのよの中にうつらゝと住

はてんとはぶしたる者ほうぎにあらず、せひ一せん  
をあいとげんとよせてみかたが入みだれ、ひ花を散  
して戦いけり、よせては大勢、みかたはぶせいの事な  
れば、みかたまばらになりぬ竹つなみて、君の御前に  
參すでに軍は、まけ色にまかり成軍のならい、かちま  
けは時のうん爰ぞ軍ほうのだい一なり、先落城あら  
れ敵に一たんりをえさせ、重てちりやくを以て、ほん  
くわいをたつすべし先みたいきんたちをおとし申べ  
し、ともかくも宜様にはからうべし畏て、扱きんたち  
をば侍二三人付てゑい山におとし奉る、扱又御せん  
は御父關白殿へおちたまふ、君もめてめく竹つな御  
供仕二度御げんざんなさせ奉らんと、泪をながし申  
ける、みだい聞召あら心うやそれは君の仰にては有  
まじき竹つなのはからいにてぞあるらん、みつか  
らたいならぬ身といふ君は十五わらは十三の頃よ  
り、あいなれ參らせ片時のわかれをたにうしとかな  
しみ今はのきはに及、おやの本に歸らんはよの人よ  
しとははべらしあまたのきんたちのためにもあしか  
りなん、たとへみつから女なり共、君もろ共に火共水  
共成行共、おやのかたへは歸るまし、情なき竹つなの

はからいやと、りうていこかれたまひける、竹つな申けるやうは尤御でうにて候へ共、是は一たんのけいりやくにかく仕上は頓て敵をほろぼし、父子ふうふの御たい面悦のきらくはちかかるべし、じこくうつらばあしかりなん、それ／＼と御手を取御こしにのせ申、供人あまた相添からめてよりおとしけり、かゝる所にねごろのせんせんからめてかためいたりしが、それおちうとあまさじと供人をきりちらし、みたい所を生捕頓てろうしやとなしにける、是をばしらで城中には頼吉竹つなを召れ今は心安し腹をきらんと、のたまへは竹つな承こはかいなきてういかな、それかし存るむねの候、爰にむらいともの介君の御おんあつくかうむりたる者なれば、此者を君のかわりにたてばやと思ひいかにともつ介。此度君の替に立たまへむらい承仰迄もなしたとへ仰なく共かね／＼心得の上なれば、御意をいかで背べしはや／＼しつふを何とさしたまへ竹つな、承りあふしんひようなり／＼とやかて君のよろいをきせ御大將にはふるきよろいを參らせ、ふたいの侍七十五き君を中に取まきからめてより打て出る、よせてのもの共あまさし

と、我ち／＼と打てかゝる兩方互、入みたれ爰をせん  
とそたゝかいける、むさんやな城中の兵卅きまゝら  
をならべ討れける、其ひまに頼吉程なくおち延たま  
ふ、跡より悪せん兄弟と名乗何迄御供申さんと、一面  
にきつてかゝる竹つな あい付おし合見へける、大  
將も今ははやいたでおいたまふ前後もしらず見へた  
まふ、竹つな悪せんち兄弟手下に斬ふせ残やつはら  
を四方へはつと、おつちらし君をかたにひつかけ、行  
かたしらずなりにけり、城に残しともの介今ははや  
君もはるかにおちたまふ、ともの介悦大手をさして  
きつて出大おん上ていかに敵の者共、源の頼吉うん  
命極やみ／＼としなんも口惜、我とおもはん者あら  
ば討取末代の手からにせよと、大勢の中へわつて入  
爰をさいことたゝかいける、くつきやうの兵廿七き  
りふせ、太刀を口にくはへつらぬかれ死にけり、皆々  
城へのり入彼とも介さいごあつはれぶしの、手本や  
とかんせぬ者はなかりけれ

## 四 段

去程に竹つな本より、くつきやうのはや道にて、賴吉を  
かたにかけ其よにわかきの國、おぼまの浦に付し  
かば、よはほのくくとぞあけにける、竹つな心に思ふ  
様いやく爰は北國みちすしなれば、てきあとより  
しとふ事もや有べしと、しん山ふかくぞ入たまふ、い  
たはしや御大將御手はいたむ、つかれにはおよばる  
る御心もきへくと、いきもはやたへくとこそみ  
へにけれ、竹つなかへくしくもかなたこなたとた  
づねみれば、きこりのむすひすてたりしいぶせきい  
ほりの有をたよりにて、しはのあみとををしひらき、  
君をうつし奉りよきにかんひやう申ける、賴吉仰け  
るやうは竹つなが心ざし、今にはじめぬ事なから此  
度のちうせつは、こうせん迄もわすれかたし、かやう  
に手をおい命有らん事かたかるべしかゝる苦惱をせ  
んよりは、はらをきらんとしたまひて、御はかせに御  
手をかけさせたまへは、竹つなおしとめあはいふ  
かいなの君の御所存かな、御命たに有ならは、御本く  
わいをとけさせ申さて、有へきか道友かおごり今幾  
程か有べき、何事もそれがしにまかせられ、時のいた  
るを待たまへ其内おふしう勢もかいじんすへしと、

云所へ八しゆんに及老人しばをこりてかへりしが、  
人々を見まいしせかたくは此へんにてはみなれ申  
さぬ人なりいづくの人ぞと申ける、竹つな申様我々  
は越後の國の者成が、都へ上るみちにて山だちに  
あい、是成人さんく手をおい萬事かきりに罷成此  
へんの人ならばあはれみたまへと申ける、老人承り  
かたくのけしき更に左様の事にてあらず、てきお  
しのぎこれ迄のかれたまふと見る、かくしんりんは  
なれし、山中なればうへにつかれたまふらんさゝに  
つゝめる、あわいゝを人くにあたへける、竹つな悦  
心有老人かないか成人そと申ける、らう人承り我此  
山里に住おきな成か、日夜木をこりらうめいをおく  
るなり、と語又々明日參らんと、いふかとおもへはけ  
すかやうにぞうせにけり、人く此由御らんじ扱八  
まんのげんじたまふぞありかたさよと、こくうをら  
いしたまひける、かくて賴吉山中に日數をこそおく  
りたまふ是は扱置、物の哀をとめしは牢にまし  
すみたい所にてとめたり、殊に其身たゞならず、御  
身の上はのたまはでつまの賴吉たけつな討れたまふ  
と聞召こはそもいか成むくいそと、りうていこがれ

たまひける、身づから城を出しとき同みちへと申せしを、竹つなにいさめられきぬくに別わかれ、ところゝの死をして、あからさま成たいこのていたれかかはねをかくすべしよしそれとても力なし、ひつしのあゆみひまもなく、月日かさなりていと哀成御くわいにん、よその見るめいといしく、過にしかたのよなりせば、めのとの女房あまた寄かいしやく有へきに、かゝる物うきろうの内、御さんたいらか成けれ共、たれあつてかつかう申者もなく、うきもつらきもとゝめたり、され共みつから取上みたまへはわか君にておわします、御はだへをぬがせておしつゝませたまふ、いたはしやみだい所はくどき事のあわれさよ、皆含兄八まんかも次郎しんら三郎、元服の悦迄もつゝがなく雨か下の諸侍にいにうせられ候に、扱も果報なき此子や、かく三惡道に性をうゝる、前後左右にごづめつあはうらせつの、番の者たまゝいねんとする時は、めしうとしゆごのせつかいのおと、人のかしやくも我身の上ときもをけし、まのあたり成じごくの有様いつさいこにて有やらん、未うぶやも過さるに、きうせんにかゝりめつせん事、ながくあび

にだぎいせん此世こそはかくはつるとも、來世にてはつまの頼吉もろ共に、同はちすに向させたまへやと、たな心を合てなむあみぜぶつくと、ひとへにみたのらいかうをねんしたまふぞ哀成、かゝる所にろうもりに木村かんへい此由をみるよりも、いそぎ道友かまへに行、頼吉かさい女ろうにて子をうみ候と申せば、道友聞て何其の女産したると申か、尤母はめらうの事なれば下べにさげて召つかふべし、又生れし其子男ならば、殊に上らうの子は二ばよりもかうばしゝ、それをたすけおかん事はんらうの子を取、たかいぬにそたてさせ後ぼんにんをくわるゝ事、眼前のことはりなりまさに我父道ふさを頼吉に討せ、我ふたばにてはなれしおやの敵を討事は今眼前のしやうこなり、いそぎ引出してちうすべしはやくとくゝと申ける、承り候といたはしや上らうを牢よりも引出しいかに上らう最期なり御念佛と勸むれば、みだい少も騒きたまはすよしゝかねてより思ひもふけし事なればかいしやく頼申なり去ながら片時の暇をたまはれおや子は一世の契りと聞は、今生後世の名残には責て此子に今一度ちをのませさせてたまはれ

ときへ入やうになきたまふ、しやけん成ものゝふ共  
もけに斷と皆袖をぞぬらしける、され共みだい少心  
を取なおしあゝ、扱此子か責て物いふ程ならば、親の  
せんぞを語たやせんせのかいぎやうつたなきゆへ、  
おもはずもはやさうせんにかへる事のかなしやと、  
もたへこがれたまへける、少心を取なおしあらむさ  
んや、此わかは夕邊に生れてあしたにしす、ふようの  
身にことならずいまだ三日もたゝずして、めつする  
事のふびんさよたゝ、今ゑさする此ちは、是をさいご  
のまつこの水、よきにのみ置しやうぶつせよ、むねに  
あてかほにあてこへもおしますなきたまふ、じこく  
うつれば道友大きにいかつてなにとてきらぬぞ、哀  
をふくむは二心有とみへたり、はやくとくゝと有  
ければ、高春是非なく若君をうばい取、みだい夢共わ  
きまへずあゝなさけなものゝふよ、今かわかれて  
有ならば今一めみせてたまはれと、きへ入やうにな  
きたまふ頓て、若君をさげ斬にぞ、したりける、扱又  
みだいにむかつていかに、女たすかりたくばたすけ  
申さんといふければ、みだい聞召つまにわかれ子を  
さきだてゝ、何のめんぼくによになからへん、いかに

道友、さすか天下のつかさたる、つまや子かくなさけ  
も、しらぬせつかいす、是非一念のあくしやとなつ  
て、生々世々においては、おのれを取ころさん、はや  
首討とさしのへて、うたせらるゝ、さすか天下のぶせ  
うの女なり、さいごの死にいさぎよし、ふしきやむく  
ろ、たちまちおき上り、太刀が刀をうばい取、首討お  
とし、當座に敵を返事、げんじのいきおい女迄も、よ  
に替りたるたましいかなとて、皆かんせぬ者こそな  
かりけり

## 五 段

去程に、猶も此事かくれなく、ひゑい山惠慶さす聞  
召、かもの次郎しんら三郎、其外ちこはうしを、かん  
しよにれつし、兄弟の人ゝに、父母の御事かたらせ  
たまへは、さなから夢のこゝちにて、わつとさけばせ  
たまひけり、泪の下よりも、くどき事こそ哀なれ、か  
く有へしと知ならば、幼少の我等にて、うでに、力は  
あらね共、弓馬の家に生れきて、しぬべき所をのかれ  
申は、いきかい更になかりけり、弟の吉定仰けるやう

は、いかに面／＼聞しめせ、堺を出る其時に、父母の仰にはそれぶしは、文武兩道とて、物をしらでははむしやといふ、ぶせうの子なれば、かく文よくせよと仰られしぞかし、かやうの事とするならはなにしに城を出べきぞ、やみ／＼と生捕れ、あさましきしにをせんより、いざさしちがゑしなるとて、おしはたぬきたまへは、皆／＼取付尤至極にて候、去ながら父母こそはまします共、八まん殿おふしうを切ほろはし、頓てめでたく御かいちん近かるべし、御父頼吉のたまはせたまふ上は、一命をかけ申べし、たんきかへりてあたと成、よは皆ふじやうのきやうがいなれば、うんに任て身をのがれ、時のいたるを待たまへと、さいさんきやうくん有ければ、泪にばうしおわします、扱八まん殿ほうしよを認、おふしうさしてぞ三重下らるゝ是は扱置、いはりにまします頼吉は、程なくへいゆうなされ、竹つなを召れいか／＼せんと仰ける、さん候かい道は、敵みち／＼て候へはおぼつかなし、山のねをつたい、何とぞゑい山の方へしのひ行、惠慶を御頼まつて、御本意をとげられ候べしと申上る、頼吉けにもとおほし召、竹つなに手をひかれ、此程のうきかなな

んの庵にも、すめば名残のこゝち有と、袖をしほりたまひけり、行も山中とまるもしげり、木かげにやとりたまはんとすれば、せう／＼のよるの雨、さそうあらしにこのはの音、きつねのともしびかすかにて、心細き折から、いわもる水の思ひに、むせんて枕にすたきり／＼す、おのかわざとてはたおりの、こゑのあやをきりはたり、てう語るうき身をとひがほに、虫さへむねをこがすらん、たいまつ虫のねにたてゝ、聞は扱我も共にこしかたに、預けおくつまや子共のわかれしを、思ひ出ればなつかしや、かれらか行へのおもはれて、まづさしくるは泪なり、そこ共しらぬ山中に、けふ三日か其間、しよくとて更にきこしめさず、心もくれ／＼と、はこぶそなたも遠山や、かすみがちにそみへにけれ、かゝりける所に山賊共五六人わうらへの者をはき取、つゝらかはご小袖其外、じきろふたるなと取そばめ、さかもりしてこそいたりけり、竹つな是をみて是こそ日本一の仕合かな、偏天のめくみと思ひ、いかにかた／＼爰は何といふ所にぞ、我／＼はゑい山の北谷へ行者成が、道にまよひ候なりおしへてたべといふ、山賊共是を聞あつはれよき者共かな、

先一人ははたにみなからあや、金作の太刀刀殊更つかれに及と見る、二人共に酒をのませゑいふせたらん所を、おさへてとらんに何の子細の有へきと、いかに旅人爰はくつきの松原とて、ゑい山へは程近したびは心よは情、かた／＼はうへに望ませたまふとみへたり、ばくはん一へいを持合たり是を少御用有、心靜にいそかれよ、竹つな聞心有人々かな、こなたより望べきに情あつてかくは仰候ぞやと、君もろ共に賞翫し酒にゑへとろり／＼とねむる所を、はた／＼と取付竹つな必得たりといふ儘に、取てはなけ／＼する隙に、頼吉をくみふせ太刀を取所をかへつかみ、二人共に首ねち切て、はうばい見せんとて、ふじにつなへて木枝にかけ置、君をかたに引かけ山ぢはるかにしのぎけり、かゝし所にとうじ一人牛に荷を付、我も特と有ばんせきに打もたれおのが尉へこま笛を、草のあおばのふしく／＼に、よねんなふこそふきいたり竹つな立より、あらおもしろの笛のねや、いかにどうし世を渡る事何れにしくはなけれ共、年もゆかざるどうし、身にもあふせぬよくとこそみれ、おことのもてる荷をも、牛に付もせて何にとて、自身持けるぞど

うじ答へていふやうは、御ふしんは尤なり牛もおもにをあふ心無物うくや、思ふらん佛も本はすてしよの、なかばはくもにうへみぬわしのお山とかや、それよに有人は人に善をなし情の道を本とす、我等體の草かりどうじは身に、相應のじひをなさんかために、しんらうくぎやをして、牛かくつうをたすけ候、竹つな聞て扱は草かりにてあらず、偏だいしのあらはれたまふと存なり、仰を聞ば有がたや我々は君につかへて、身をも命をもおしまぬゆうしよくの者成が、ゑい山にしるべ有て參なり、人目をしのぶゆへおちこちのたつきもしらぬ山里に、まよひいわねまつかねちをながらへぬ、よの中にふしの身程さいかうふかき者あらしと、しう／＼語さめ／＼となきたまへば、どうしもともにらくるい有、誠に人の心程世に衰成事はなし、幸我はゑい山へ行者なり、道しるべして參らせん、竹つな聞てあな有がたや扱御身はいか成寺におわします、さん候上の坊のしやみなり、しにづかへて晝はひねもすに柴をとり、よるはよもすから、しくわんのまとの前には、眼をさらせは十惡の、雲れい

しゆうにきへ、三つの月しんとうにあきらかなり、近頃たつとく候竹つなこたへていわく、ゑい山を都のふちと申はいかん、どうじ申ける様はさればにや、ふぢは八ようのみねゑい山は四めい山とて、北南中東西中日本の中有、ふもとに花の都有就中名すい山をきよめしんよの月ほからかにして心にも、ことほにも、及ばれずとて都のふちにはたとへたり、逆の事に山のゆらいを語たまへと申ける、さらは語申さんあら信心のかたがたや、さあらはきう牛が一毛程申すべし、それゑい山は人王五十代くわんむ天王の御時、ゑいりやく元年に始て、傳教大師とうとの天だい山をうつしひらかれたり、谷は十六にて三千坊の寺有、二度參ともからは十惡五逆のつみをほろぼし、正に傳教大師のお歌に、あのくたら、三みやく三ぼだいの佛達、我たつ杣にめうがあらせたまへと、ゑいしおかれし山なりと語たまふと思へは程なくゑい山の坊に付たまふ、どうしは其まゝけすやうにぞうせたまふ、有かたし共いふ斗なし、惠慶ざすの寺に入たまへば、惠慶初奉り兄弟の人く是はく斗にて、先立物は涙なり扱兄弟の人くは、母上の御さいこのてい、

有のまゝに語たまふ頼吉ひとかたならぬ御なけき、よその袖もぬれぬへしとりわけたけつな、りんゑにかへりたけき心をしほらかし、扱も我等いさめ申しは若君たちを此寺へおとし、御みだいは大じん殿へと申し時、君の仰にてはあるましき竹つなかはからい成べしと、おくへかけ入らんとしたまふを、それかし大きにいかつていさめしか、扱は御さいごにてましますなあらいたはしの御心ねやとたをれふしてそ、なきいたりしうしう互のうき事を、思ひたしてはわつとなき語出してはさめくとなきたまふ、さす至極の泪のひまによりもたゞ何事もせんせの事と、おほしめせ然共御身父子つゝかなくおほします事何より以めでたし、さらは東山三井寺の法師むしやをいん牽し參らせん御本ぐはいをとげられよ、くわいぶん狀をかゝるゝ所へ末重金吉三浦竹ち大いきついではせ來、君も竹つなも討死の由承り候所に、かく御ちやうきうにまします事、扱々めてたく候と、悦事はかきりなし竹つな申ける様は、いかにかたく近頃面白なきしたへ有、御みたいをかくなすと、語ければ人く驚是は夢かやうつゝかと、皆泪をそなか

しける金吉申ける様はよしそれとても力なし、是も  
せんせの定事、竹つな心にやたけに思へばとて、三方  
あら神にては有まし手も二つ足も二本兩眼二つあれ  
ばとて、まつ方へはかなはぬ物なり、また竹つななれ  
ばこそ、君を堅固にせられたり、何に其道友め、せん  
も萬もいらぬ首引ぬいて腹をいんと、まつくろに成  
てかけ出す、竹つなおしといめ御へんが、せきふん  
尤かくこそあらじと、さはあれ共大事の敵で有間、五  
人共に打つれて四方よりもみだれ入、おもひのまゝ  
に討へきなり、面々したく有べしとおしきづめて、し  
ぎをはからず竹つなか信ていうれしき共中々申斗は  
なかりけり

## 六 段

去程に頼吉ゑい山三井寺の法師むしやをかたらい、  
らくやうの口くより責よせ時のころをぞ上にけ  
り、城の中よりねころ大膳大手のやくらに上り只今  
よせ來るは大將の名をば何といふぞ、其時末重一ち  
んにすゝみ出姿しらずや、源頼吉なるがしらぬよな

おふ州の討手に向故、一たんかく成事むねんさよ、と  
てもおのれら、かくては置まし一く立ならんで腹  
を切、なまじいにしぱり首をかゝれんよりも、侍の本  
意任清くしねとを申ける、大膳聞もあへす何頼吉と  
はしにそこなつて、何とぎへいを上げたり共、たゞ心  
念に望てはくひようをふむがごとくなり、無用のか  
うけんいわんより其ちん引とぞ申ける、末重聞もあ  
へす何にはくひよう共にいわせましとて、一面にき  
つてかゝるねころ五人いきおもつかせず、火花を散  
してたゝかいけりさしもに、かう成よせてなれ共し  
しんで退斗なり、大將いかつて金吉はなきかあれふ  
せけ畏て鐵のほうを引さげ、む二む三ににうちたて  
うちたておつめけるねころもかけては引ひきてはか  
け、二三度斗はみへけれ共金吉につよくうち立られ、  
城中へ引こもる金吉猶も城中へ切て入、はや三の木  
戸打破つめの城に、おしよせいきおもつかせずたゝ  
かいけり、道友やくらより見物あつはれかう成兵か  
な、たれか有きやつに酒をのませ板はし藤九郎承り  
候中、道友申されける様は姿中へきは、御へんのはた  
らき目を驚斗なり、此いくさ打かたばらうとうに頼

べし先程のはたらきにてさぞのとかはき候らはめ酒をのんでいさまれよと、申てかへれ畏候とながへのちやうしに、酒を入金吉が前に行右のだんを申渡す、金吉聞て扱も唐のかんやうきうより、まだ大心成やつめかな、扱こそ一度はとりたれと舌ぶりして、甲をぬきたんぶとうけさなりとほす、あら過分や心いさみ立て候さらばおしやくへさし申さん、あつまかゝりの甲酒くめば酒をもしころもち、じほのみきわへよりし敵のよをるのらうしやうとなりつれ共、しほらしきに耻られて跡もみせずのみけり御へんかへりて道友に申さるへきは、御情しうちやく申て候昔より情をはこのはにつゝむとこそ申せ、それかしは餘大せつさのまゝ甲にこめていのふにつゝみ、いきおいまさり珍重に存るなり、若又討かつたらんにはらうどうにと仰らるゝ、外聞と申満足に存さあるが中に奉公の忠には、道友が首切てゑさせたらば、何時成共望に任せんと、早くかへりて申されよと、はたとにらんで申ける、使かへりてかくと申道友大きに腹を立、きやつをやにいころせ、高島七郎四人ばりにからりとつかい、ひようどいた金吉が左のあしに、のぶ

かにたつ、物くしやと引かなぐりすてければ、足更にふみたてられす、たちくとする所に城中より北膳かけよせ金吉をむすといたく、金吉物のかす共せす取ておさへ首ねち切てすてにけり、北膳からうとう主を討せて有へきかと、左右よりかけより所をゆんでめてにあいつけ、一人はかいつかみゑいといふてなぐれば、つかいくをなけさかれ五りんくだけうせにけり、今一人はおのれ命をたすくるゝ、命がおしくはそれかしをおへとてむたいにおはれて、本ぢんさしてぞかへりけり、又坊中よりなん膳坊と名乗て一文しに馬をのりいだす、六郎馬をかけ合あぶみをふみのべけをとし、おき上らんとする所を首うちをとす所に、さいせん大長刀ひつさけのかさしとおつかくる、竹ち、かけへたゝり、わたり合さいせんなきなた取のべ討所を、やすかた引はつしてむすところ、さいせんものになれたる者なれば、長刀すてむすつくむ、ゑいやくといへ共暫らくせうぶは付ざりけり、さいせん力やまさりけん竹ちを取て押ふせ、首討所へ三浦はりきたつて、うしろよりかいつかみあふのきに引たをし、是首うてといへばとうせんか

け付、三浦がよはごしむすたく、三浦事ともせず二人共にくび打おとし、本陣に引かへず大膳今そさいごなり、かけよくとよわる竹つなよき敵ぞと心得、おしならべむすたくみねころぐわんらい大力、竹つなをとつてふせる、竹ち是をみて大膳が右の手をしかと取、大膳竹ちをも引よせひざの下にひつしく、末重來てむすたく是ら引よせ三人と一人ゑいやとこへを上てぞねち合共、三人の方あやうくみゆる所へ二人のあら者來て大膳をひつしぱり城中へみたれ入、道友を生捕なわをかけ、法師か首にかせをゆい、道友を肩くるまにのせ、いやがる所を四方よりさいなみ、ひつはり立せんなき者のかとうとし、いきながら首かせにかゝり、ざい人の責をうくるを見たまへと、はやしものして來りたり、君の御目にかけてたちまちにほろびにけり、げんじの御代すへはんせう、かんせぬ者こそなかりけれ

萬治三庚子三月上旬

四天  
王むしや執行

## 初だん

扱も其後それいにしへ今に至までつらく／＼ちらんを  
かんかふるにかみけんくんせいしゆの世也といへ共  
しもじやよくひだうのものあればかならず國をさば  
がしよをみだすしゆんのよにしけふのもの有がこと  
し其ねをたつね其みなもとをうかがふにみなとんよ  
くよりおこりけりこゝにご一條のみかどの御時せい  
ゐ大將軍みなもとのよりのぶ武將を給はりましませ  
はよもしづか成といへ共とういさいかいにやゝも  
すれば事おこつてさうどうたひ／＼におよべりさる  
により五人のもの共もせん年正つぐ入道がどく酒し  
ゆにて三人はあいはてのこるきんときわたなべ許君  
をうやまいたみをなでこくどをしゆごし申けりかゝ  
りける所にくだん五人の若もの共大將の御前に参り  
御そしやう申上げるはわれ／＼がおや共まん中公よ  
り此方すたびかうめう仕りを名を萬天にあげあまつ

さへへんげたいちに至までなか／＼かそへつくされ  
ず然るに其子共として我々はいかめしきわざもなく  
いゝがいないくとしざかりまで罷有この身のほどなん  
ぼう口おしくこそ御ざ候へあはれおいとま下されい  
つくのうらへも罷出ふしぎなる事にもあいわれ／＼  
五人がしよぞんの程ほうばいなからもあいたかひ  
にためし見申たく候也御いとま給はるへしとそ申け  
るよりのぶ聞召なんしらがぶどうのぎんみ尤きびし  
きおもむきかな我はいとまとらせん事何よりもつて  
やすけれ共又ことなき子共らをいづくとさだめす出  
しつゝさそおや共かしんていおぼつかなく思はんと  
とまれかしとそ仰けるわたなべきん時もかねて此よ  
ししらざれば大きにおどろき申やうなんじらが心中  
あつはれ四天王の子共かなおゝかい／＼しきこそう  
れしけれ又君にうちむかい御てうのおもむき有がた  
く存候得共それてんぢくのしゝは子をうまるゝと一  
まんぢやうのがけより子をおとすに其子しゝのきり  
やうあればかろくちうにてはねかへりしする事を  
仕らすもししゝの子かいなくしてみぢんになつてし  
するをは少しもかなしかり申さぬよし弓取たらんす

しよそんは尤かくこそ候はん一つは天下の御ため又はかれらが身のためしあはれおいとま給はれかしと二人ながらともに御せう申けりよりのぶせひなく思召おもひ立ぬるしゆ行のみちいかでむげにとむべき是は此たびのはなむけ也とて五人の子共によりい五りやう太刀をそへそれ／＼に給はりつゝがなくめでたくきこくいたせとて御いとま給はりぎよれんに入らせ給へば五人の子共ちゝともにいとまをこい立出んとする所をつなきん時おしとゝめそれたびにおもむきてはまづよるをやすくふすべからず人にしたしみちなむに是ゆだんの第一也もとよりきんじゆの身なれは何分もつてまんぞくせりしよ國しゆ行ことおはらばとくかへりてかほばせをちゝ共に見せよかしめでたくきこくまつそとて心つよくはいゝけれどさすがおんあいのわかれのはしつゝむにもるゝそでのつゆけにことはりとそ聞へける扱それよりもわかもの共たびのしやうぞくしたりけり是がおや子のわかれとはのちこそ思ひしられたりあづまぢにさしかかりさすがいそがぬたびなれば此處やかしこに目をくらしやうたどりゆくほどに廿日あまりと申にはし

なのゝ國に聞へたるあさまのたけにそ付にけり山ふかくわけいれはとしおいたる山人二人たきゝをこりてくたりけり五人のものは共是をみていかにらう人此所は何とか申候そ山人こたへていふやうは此所はおとにきこへししなのゝ國のあさまのだけにて候也あれにみへたる山こそおにのすみかといゝならわし人を取候ゆへ人のかよいはさらになし道ふみまよふ人ならは此川のきしにつきなかれにそふて出給へはや日もくれ候得ばとく／＼とかたりすて山下に下りけり五人のものは共聞よりも何おにのすみかと申かさいわいかないぎゆきてたづねつゝおにとちからをくらべてみん尤然るへしとどうしんしてをくづたいそはをこへなを山ふかくわけ入てかなたこなたとたづぬれどさらにけしたる物もなしなをふかくたづぬれはこゝに大きなるいわあな有しこつはつこついわのはな木のゑだにかけならべなまぐさき風ふきげにすさまじきふせい也きん平是をみていか様にも此あなこそおにのすみかとおぼゆるそふしきなる物もや有われ立入てさがしてみんもしぬけあなの有もやせんとこゝかしことたづねみればあんのことく又一つ

に口あり御へんらは其くちにてまちかけよさがして  
こんそといふまゝにいわあなにつつと入すへはるさ  
だかげもろ共につゝいていれは源二郎とひとりむし  
やぬけあなのくちにまつあんのことくかのおに三人  
にかりたてられおこゑをあけてとんで出るひとりむ  
しや源次郎ゑたりやあふとむすときみ上を下へとす  
る所を三人のもの共とんで出おさへてくびをかきお  
としづだゝに切おとしあふふしやうなるおにかな  
ふりよなるものに出あいひごうのしにをしけるよな  
せうしさよとうちわらいなをく山をさかしけり此  
もの共のありさまおに神にもまされりとみなほめぬ  
者こそなかりけれ

## 二だん目

其後五人のもの共はおにをたやすくだいらげ又もふ  
しぎにあはばやとにんばのかよひとつらざるつゝら  
おりなる山みちをいわのはなをたづさへ木のねをた  
よりと取付なをおく□□□け入けるさるほどに其山  
にすむ天ぐたち一ツ所にあつまらせ給ひつゝないだ

ん申されたりその口よりのぶがらうどう共いまだと  
しもじやくはいなるがぶだうの心ふかくしてわれと  
わか身を□しつゝ修ぎやうすると聞て有いざ心をそ  
とひきみてけにかいゝしき物ならば心さしもふひ  
んひやうほうのじゆつをさづけん尤とてかのもの共  
のとをるを今やゝとまち給ふさる間五人のものと  
うゝ上りゆく所にはかにしんどうらんでんして  
はたゝがみなりわたり天よりはつるぎふりちよりく  
わゑんもへ出たへしのぶべきやうはなしされ共五人  
のもの共は少もさはぐけしきなく切はらいゝちを  
ばとびこへゝこともなげにぞゆき過ける天ぐたち  
是をみてそこをとをるは何ものぞそれよりはやくか  
へるべしさらすはつかみさきすてんと天もひやくこ  
はねにてこゑゝによははりこくふをかけりそらを  
とびひぎやうじざいをまなびつゝいよゝゝらいでん  
やまざりけり五人は是を聞よりもおもしろしゝひ  
きさかれんはそのみ也こくうをかけりまはりつゝて  
もとちかくよりそはではなかゝに引きかれしかう  
げんきくほどならばてもとへよつて引きさきみよのそ  
みなりとよははりつゝ一どにとつとそわらいけりそ

れよりさかをゆき過れば何かはしらすむかふよりこ  
なたの山へはし一つかゝれりめつらしきはしかなと  
心に思ふ所にほどこかくなりしかばはしにてはあら  
ずふとき大ぼくのこくとにてたけ廿丈あまりなる大  
しや也まなこは日月のこくとたうにはゑしつのふり  
たて口よりはくわへんのやうなるしたをはきいかれ  
るまなこを見出し五人のものゝ近付をみちをさへぎ  
りよこたへてさつとにらんでふしたるは身のけもよ  
だつ許なり五人は是を見るよりも扱もけしたるもの  
かないざすだゝにきらんといふわたなべおさへて  
ゑきなき事を申さるゝなくだんのき神をうちけるも  
かの木こりのもの共か人を取とかたるゆへたいぢし  
ては有ぞかし大じやのさたのなき事は人のわざわい  
あらぬゆへかたらてこそはとをりけめむさと命をと  
らん事ゑきなしとといめけるさらばのりこへゆかん  
とて四人のもの共どうをんに御めんあれ大じやとて  
せばねをふんてそとをりけるあとがとをりしがつの  
引あげきつとみておゝしをらしきくちもとやとあざ  
わらつてそとをりける然はそらもはれわたりよもゝ  
しづかに也にけりかゝる所へとしおいたる山ぶし一

人こつせんとあとよりおいかけ來りいかにかたゝ  
御へんらにとうべきしさひ有とゞまれとまねきける  
又々何事やらんと立かへれば山ぶしの給ふは我は此  
山のあるじなるが御身たちがしゆ行をかんじ心を引  
みんためあるいは大じやにかたちをなしさまゝけ  
しやうとへんすれともさらにおそるゝけしきなしさ  
りとてはゝぼんぶにおいて又まれ成たましいをも  
ちけるよなかほどにゆふ有もの共にひやうほうのじ  
ゆつの大事をつとふべしちかくよつてたしかにきけ  
それひやうほうといつは第一は心也心ざす所はせん  
べんばんくわとかわれ共てきを見て太刀きつとさ  
しかざしするゝとゆく所は二つもなく三つもなし  
たゝ一心にとゞまれりその一しんをたづぬるにおく  
ひやうにてはかなはすされはほとけの御きやうにも  
一しんの外にべつにのりなしと心のおくをとき給ふ  
御へんらが心中是にあたれりたとへ又せんまんのし  
ゆくんたりといへ共大將一人おくれてはしそつのか  
うみやう成かたしされはすゝむ大□□を□もふしや  
うゆふしと是をいゝゆうしやのいたす所也扱又一き  
にてのはたらきよりばんそつをつかふにいたるまで

けいりやくなくては成がたしてきの心の取やうぎよりんかゝりくわくよくのひらきいんようのにんずだてぐんきをかながへしる事ちゑなくては有へからずまづ／＼人をしたかへしそつをなづけ國をあわれむぐんほうはしんなくてはかなわし此三つをかねたるをちじんゆふの三とくとてよにたつとむ所也大將しそつにいたるまでなくてかなはぬものぞかしくはしき事は此まきにつぶさにしめしおきて有長りやうがいにしへせきくわふよりつたはりしもいかで是にはおよばんやとうじんだん／＼ゑりんぎやうよくじゆうらうのまきは也五人らへんしもはなたす身をおふるまでもちいなば天下こつかをかけはしりすまんのてきにあふともそのなんをのがるべしかならずうたかふ事なかれとかのまきをわたしつゝたちまち天ぐにかたちをかへこくうにあがらせ給ひけり五人のものは共是をみて有かたし／＼と三とらいし奉りおの／＼まきをおしいたゝきなをも國をめぐらんとあふしうさしてそ下りけり五人のものゝ心中あつはれきたいのもの共とてみなかんせぬものこそなかりけれ

### 三だん目

其後きん年こくどしづかなる所に其ころ又いよとさ雨ごくのあるじはびたつ天王の御すへたちはなの左大じんもろへここのかういんあらじまはんぐわんたいかけちかとして其心ぶとうなる大みやう有おりふしざい京していたりしがらうどう共を近付いかなんじらたしかにきけ我は是今のよにあたつてたれかは上らすものあらんいぢみことにそうもんしせんぞの國にて有あいだいよとさをさし上ふんごふせんの給はり扱又九こくのこくしを名付られ候へとのぞまばやと思ふ也めん／＼いかにと申けりあれまのぎやうぶしげ國あしやの次郎大夫もとみつてるまの藤太とも平此よしを承りおなし心に申やう御てう尤にてこそ候へと申中にもあれますゝみ出内々われ／＼そんな候も源平とうきつあいならんで天下のけんを取事はたがいにたび／＼也然に君きんねんの御いせいにてよりのぶにおさへられかやうにわたらせ給ふ事くちおしくこそ候へ君ちきにそうもん候はいよりの

ぶへんしゆの心出あしきさまに申べし一つはれいぎのためも有一たんよりのぶを御たのみ仰上るべきにて候もしよりのぶせういん仕らずおろそかにしたいたさば國へかへらせ給ひつゝ九こくのせいをあいしたかへはたを上させ給ふべし承候へはれいの五人のわかもの共こくゑんいたし候由のこりし二人のおや共は有にかいなきらうたいのむかしのわさにはかはり候大てくちによせきたらばわれゝがゆんせいにたゝいやにたゝなかをいとをしくれ候はん何のしさいか候べきと手に取やうにぞ申ける二人のもの共うちうなつきかけちか大きによろこびけにゝ是はさもあるべしまづよりのぶをかたらはすはさだめてさまたげたるべしむねんなりとは思へ共かれがたちへうちこゑたのまんとそ申けるてるまの藤太ともひらあゝかいなき仰かなよりのぶがいまぶしやうだてことおかしくこそ候へくんせいにもてたてにも何をかおとり申へき四天王のしにのこりつなきん時とやらんは今にとしふるねすみのせもはげわたるふせいにてくちきく所は人なれどてきにむかつて太刀うちの中ゝおもひもよらす候われゝはそんな候

はよりのぶを是へめされつゝおさへてしよもふ有べしせひにいはい申さはよりのぶをうつてすて武將にもてい王にものそみにならせ給へやとこともなげにそ申けるさればよの中はにたるをもつてとものとすあいしたがつほうばい共是□□かしといひければかけちかもどうしんしてやかて使を立にけり使はよりのぶのみたちに參りかやうゝ申けるよりのぶは何事やらんときん時を御供にてかけちかたちへ御出有かけちか出あひたいめんししゆゝのさかなをとゝのへしゆをさまゝにそもてなしけるやゝあつて申やう是へ申入る事べつぎにても候はすそれかしがりやうちいよとさをさしかへられぶんごぶせんを給はりつゝいは九こくのしゆごなければ九こくのしをきわれゝに仰付られ給はるべしとそ申けるよりのぶおどろき給ひのそみはさこそ候らめいま國ゝふさかつてあき所一所も候はねはなりかたき御事也ましてぶんごぶせんの兩ごくはたぎいのせうにすへかた大とものさへもんたゝみち給はつてこれもつて成がたし九こくのしをきの御事は君かさねて御せんぎ有きりやうによつて仰付りんしをは下さるべししばらく

それまでは御待あれとしとやかにの給ふをもとより  
かげちかけつきのものかねてたくむ事なればひざた  
てなをしいかりをなしいかによりのお御へんをひと  
へにたのむは成難き事をこそたのむとはいふべけれ  
ことさらそうもん申さずしてかけちかなとかたのむ  
ぎをちうにてへんじする事はすいさん也とぞ申ける  
よりのぶにつことうちわらひとう御よにたれか有此  
よりのぶか成べき事は御へんにかきらすたが事もい  
そきそうもん申也ならざる事を取もたんはおろかの  
いたす所ぞかしかけちかとぞ仰けるみうちとさまの  
ものともすはや事のいできたりわれくまん人うたん  
とつばもと二三寸くつろげいまや／＼とひしめきけ  
りみかわのかみきん時はるかへだてゝいたりしがひ  
しめくおとを聞付てすでに出んとする所をわかさぶ  
らひ立より御前なりとおしとゝむきん時いよ／＼す  
いりやうし大せゐをつきたをしはねたをし御前へつ  
つと出大のまなこをいらゝげあたりをはたとにらみ  
しかばもとゆいふつときれおち大わらはになつてぞ  
しき中へどうと出たゝ今までわか君のましますゆへ  
しゆう／＼のれいぎをおそれ罷出す候へはこなたの

うちのさほうにやみうちとさまの人々まで太刀おつ  
取／＼しゆくん二人を取まきてあはてふためく有様  
はちそうにてばし候か家にいつてはいへにしたがへ  
がうにいつてはがうにしたがへと申つたへ候條此き  
ん時も少さわぎ申べしもし此うちわかとのばらの  
うでばねつよき人あらば此きん時とそつとさわぎく  
らべし給へかしあたりをにらんでたつたるはにがに  
がしくこそ聞へけるかげちかははじめとしてよりの  
ぶをうちこみすでにうたんと思ひしがきん時かつら  
たましい其まゝやしやのことくにて身のけもよだつ  
て見へければうたん事は扱置かけちかふるい申やう  
たま／＼よりのぶの御こしなされ候に何のきやうも  
候はでめんぼくなくこそ候へきんときへ御酒一つ奉  
れ此さかつきをまいらせんとたぶ／＼とひかへしを  
きん時見てそれがしはげこにてふだん給はらずおさ  
かなのしよもふならばつるぎのまいを仕り御めにか  
くべく候やいかに／＼と申ける其時よりのぶちやう  
ぎにて候へば罷立候とてざしきをずんと立給へばい  
とま申てかけちかもいそぎおくへぞにけ入ける其時  
きんとき大おんあげつるぎのまへか見たくはめづら

しきはたらきしてひばなをちらし見せんすにしも  
ふして見給へかしとうちはらい／＼君の御供申つゝ  
やかたをさしてかへりけるきん時がふるまいあつは  
れ今のはんくわいやとみなおじぬものこそなかりけ  
り

#### 四だん目

そのゝちはんくわんだいかげちかはきん時にいから  
れよりのぶのかへるさをうれしき事に思へ共さすが  
わが身のちじよくのはてなましいなる事いひ出し口  
おしく思ふにやかんにんなるべき事もなくらうとう  
共をちか付いかに我なんじら思ひ立ける事空しくな  
すのみならずあまつさはちの上のなんぎたりより  
のぶさんだい申つゝわが身の上のあらましをよくい  
ひなす事もあらしなんじらがかねてはよりのぶにお  
いてはわれくまんつなきん時をはたれうたんかれら  
一かうとしおいて何のやうにもたゝぬなどゝいふか  
うけんにはかわりてよりのぶをおめ／＼と何とて  
かへして有けるぞおくびやうしごくのいたりかなと

大きにいかり申けりあれまのぎやぶ承りもとよりそ  
れがしよりのぶをせひにうたんとぞんせしにあのて  
るまの藤太かねてよりよりのぶをは人ではかけま  
しきわれにうたせよとのそみ申候ゆへ藤太がてをま  
もりいてむなしくかへし候事口おしくこそ候へと申  
藤太聞ていかりをなしいかにあれま何とて御前にて  
すじなき事をは申ぞ御ふん我よりとしもましこと  
さらいへのこうけんにていゝしことばも有なればさ  
へきつたる事すへきにははゝかり有とそんきやうし  
御へんがしよぞんをまつ所にてのひにしてかへしつ  
つ我をあざけりそしる事きつくわい也とを申けるあ  
れまもいろをひきかへてなにと申そともひらなんじ  
こそ君をいさめ奉りよりのぶをうたんといふかう  
げんいひしはいつはりか藤太いかにといふまゝにた  
がひにあらそひいかりをなすでにちやうく見へけ  
るを次郎太夫もとみつ二人をおさへていふやうはよ  
りのぶかへりて其あとにとかくのさたはむやく也お  
なじいへのもの共どしいくさしてしになびよのあ  
ざけりあさましとてもよりのぶ此まゝにて有ましき  
もし大ぐんにてよせられなばひらばのいくさかな

ふまし一たんまづ都をひらかせまし／＼て國へ下らせ給ひ御はたをあけられ候はゞ四國九こくの御一そくなどかはよそに御らんせんこよいにまざれとくとく下らせ給へや人／＼のあとをせんぎせんなしとぞ申けるかげちかはきくよりもげに／＼是はことはり也都のすまいなりがたしいぎや下らんもの共とてよにまされ大せいを引ぐしとさの國へそ下りける此事都にかくれなくだいりにはおどろかせ給ふ所へよりのぶやがてさんだい有事のよしをそうもん有みかどいよ／＼事のなんぎに思召かれは一もんひろきものなればぢきによりのぶはつかう仕れとのせんじ也承候とて御前を罷立わがやにかへりわたなべきん時御供にて五まんよきのせいそろへとさの國へと下らるゝとさの國に成ぬればかげちか／＼じやうを二ゑ三ゑに取まきときをどつとそ上にける時のこゑもしづまれば城中にはかねてよふいの事なれば大將大てのやぐらにかけあがりくつきやうのいてをそろへやざまおしあけさせさしつめ引つめいるほどにさしもにたけきもの共せんぢんはいちらされ引いろになつて見へければ城のつわもの共よはみのいろを見

るよりも我さきにとうつて出ひ花をちらしてたゝか  
いけるよせてもさすがにせめけれ共城中でいたくふ  
せげばせんぢんあまたうたせつゝむら／＼ばつとそ  
引たりけるつなきん時はをみてあゝふびんの者共の  
いくさだてやとてきん時はてつのぼう一ぢやう餘り  
なるをひつさげわたなべは大長刀をてこりにふりゆ  
るき出たる有様は山の動くにことならずよせては是  
をみるよりもすはやたゝ今出るこそつなきん時ござ  
んなれたとへおにゝも神にもせよ大ぐんにてうつ太  
刀などあたらぬ事の有べきかゝれや／＼と一どうに  
四五百ききつさをならべてうつてかゝるつなきん  
時にかすましといふまゝにあたるをさいわいにはら  
り／＼とうちにけりさるほどにてもとにすゝむつわ  
もの一二百きうちふせられたまるべきやうあらすし  
て風にこのはのちることくむら／＼はつとそにけ入  
けるつなきん時一のきとまでおつかかけよせあらきた  
なきふるまひやけふははや日もくれぬ明ちやうしろ  
をはふみつぶさんゑゝなんじらが命もこよひ斗につ  
づまりけるぞ明日せうぶをけつせんと大おんあげて  
よばはりつゝ本ぢんゑひつかゑすかのもの共のてが

らのほどいつもめいよのはたらきとてきせん上下お  
しなべてみなかんせぬものこそなかりけれ

## 五だん目

そのうちしろの大將かげちはらうどう共をちかづ  
けいかになんじらいせんよりたれ／＼がいくさとい  
へ共四天王のやつばらにやぶられ城をおとされけ  
るときくしかれ共たゝ今は三人しゝてのこる二人の  
子なれはいかにもしてかれらをうつべきたくみこそ  
あらまほしき事なれかた／＼いかにと申ける次郎太  
夫承り心へ申候明日のいくさにもやじりちかくはい  
おとさんと心かけ候へばはや日もくれ其ひまにひつ  
かへし申ゆへせひなくうち過候ひぬさだめて又今日  
もしろちかくよせまいらんさも候はゝまつたい中を  
一やにいとおしくれ申さんとあたりをきつと見てあ  
れはてるまの藤太是を聞よくいふたりもとみつわれ  
もせひにねろうそかしいざうつたてあしやとてゆみ  
はきこふるせいびやうなり此もの共や來るとていま  
や／＼とまちにけり是をはしらで二人のもののいか様

にも今日はせひちやうをふみやぶらんひかすをふる  
こそわれ／＼が身の上のちじよくなれといつもこの  
む事なれは人ませもせずたゝ二人一のきどにつめか  
け大おんじやうにてなのりしはたゝ今こゝもとへた  
だ二人よせ來るつわものこそおともきゝめにもみ  
んよりのぶのこうけんにもさしのかみわたなべのつ  
なみかはのかみさかたのきん時二人なり城の大將は  
んぐわんにげんざんせん我と思ふ人あらは出あいて  
しやうぶせよやとよばわりけりされ共じやうないに  
はつなきん時と聞なれはきどをひしとかためつゝお  
ともなくしていたりけりつなきん時は見てかたき  
のよせてのゝしるにかしませぬ有様はこなたをおづ  
るかあなどるかいでもの見せんといふまゝに二人ち  
からを出しつゝもんのはしらをゑいや／＼とおすほ  
どにそくちに門をおしやぶりにわうだちにたつたる  
はたいしやくてんのいくさにあしゆらわうがいかれ  
るも是にはいかでまさるべき次郎太夫もとみつもと  
よりねがふ事なれば五人はりに十五そくしばしたも  
つてちやうどいるむざんなる哉きん時がむないたに  
あたりつゝちけふりがばつとたつわたなべはつと思

ひ立よる所をてるまついてはたといるわたなべかわきつほよりよこはらかけてすばといる二人のむしやめくれ心はきゆれ共やくつとかなぐりすてそらじにせんそきん時とて二人の人々よろいのそでをかたむけうつぶしにけるてるまあしや是を見てあれを見よ人々ひごろはおに神よりもおぢられしつなきん時をはわれ／＼がてにかけ一やにていころしけるそやくびとつて大將のげんざんにまいらんと二人ともにやぐらをゆらりととんでおり太刀ひんぬきさしかざしこおどりしてかゝりけるきん時わたなべちか／＼とよせすましうしおきにかつはとおき既にうたんとしければとつとかへし逃るを二人ながらて取にしおつふせおゝなんじらはい／＼しきやつ哉日本ふそのわれ／＼をよくはしたゝかいたるよなめいどのせうこになんじらたていざ大將の御めにかけんといつたて本陣さして引かへる大將は御らんしてやれ物うや御へんたちはてをにおいてありけるかそうして御身たちがくせには一き二きにて出るゆへかゝる事の有そかし物うさよとそ仰ける二人のもの承り御説有かたく候へ共それものゝふのならいにてついかく

こそはてん事もとよりごしたる御事なり思へばうんのつよくしてたゝ今までながらへ御ほうこういたせし事身の上のよろこび是に過す候され共心にかゝり候はしろを今日せひふみおとし申さんと思ひさだめ候にいまだらくじやう仕らすはかなく罷ならん事なんほうくちをしくこそ御ざ候へ是に候やつばらはわれらをい申候もの共なり一つはめいどのせうこにといひ又はわが君の御らんまほしくや候はんと捕へまいる候へば是にまします人々にあつけ置候おつつけせがれ共罷上り申べしちゝ共をいしものとてみなみなに見せられかれらが心のはからいにまかせられたまはれとて二人のものをかいつかんでさふらいたちにそあづける扱いなをりながるゝちをおしのごひ君も聞しめさるべしほうばいたちも聞たまへまんならゝい光より此かたおゝくのかつせんにすたびちうせつ仕りてきをほろばす事かずしらすことさら大江山のきぢんにいたるまでたび／＼けしやうをたいらけなをせ上にふれたりしつなきん時ほどのさぶらいがかほどのほそや一すじにてやみ／＼としにける事よとかならず思召るましせひ今日は城をせめや

ぶらん日かすをふるはわれ／＼がちじよくぞと心へかる／＼とはらまきをたゝ一りやう打かけこともなげに立出一のきどをおしやぶりうちへいらんとする所をかゝるとをやにあたる事ごうの來るきはめそかし五人のものと共かへりなば此由すたへてたまはれいまだわかきもの共にて心そこつに候へはつね／＼申候にもおや子のちぎりはかぎり有いつまでかそうべきかまいてわれ／＼なきあとにて君おろそかに申なほうばいたちににくまれ申なとつねには申候へ共じやくはいものにて候へばみな五人のもの共たらぬ事のみ候はんわれ／＼がとし久しくあいなれ申せしよしみにかならず御めんなされつゝなさけをかけたたまはれよあゝ御なごりおしのわが君やたび御かんき候へ共くちせぬちぎりは御ようにたち打じに仕り候こそなんほうよろこびにて御ざ候へいとま申ほうばいたちと是をさいごのことばにてきん時としはしらね共わたなべは六十六二人なから一どうについにむなし／＼にけり君をはじめ奉り御前なりし人人はこはいかなる事そとてこゑをあけてそなきたまふ是や此三ごくのいくさにしよかつこうめいがびやう

してわうびのなげきに今よりのぶあいかはらすあんなやにともしびきはてよのゆくすへもいかならんとなげきたまふ御有様あはれ共中／＼申斗はなかりけり

## 六だん目

四天王五人の子共らはきけば四こくなるかけちかはにわかにもむほんをくはたてとさの國へ引こもりはたを上るによりわが君かげちかちうばつあらんとて四國へはつかうときくいざやとさの國へむかいつゝかけちかをたいじせん此ぎ尤しかるべしとて夜を日についでいそぎけりほどなくとさに付ぬればよりのぶのぢんやのほとりにてかくとあんない申せは人々見ておとろき君に此由申上る大將御出まし／＼てめつらしのもの共やかるゝいくさに取むすび日かすをふれ共おちざればつな金時せきかねてたゝ二人かけ入きのふうちじにしけるゆへけさそうれいを取おこなふおや子のちぎりくちせすはなどきのふにも來らぬそくわほうせざる其内に一めみせん物をとて御ら

くるいはかぎりなし五人のものはつといひすへは  
るさだかけひとりむしや扱はさやうに候かわれ〱  
おや共しゝてのち二人のましますをば月共日共あを  
ぎつゝたのもしくぞんせしにかくもならせたまふか  
と御前をもはいからすこゑを上てそなきにける源次  
郎金平すゝみ出どうをんに申やうさてはおやどもは  
昨日うちじに仕候かきうばの家にうまるゝ身は君の  
せんに立まいらせうちじに仕候こそ本にて御さ  
候へまつたくなげくべきみちなしたゝかたきを取へ  
きてだてこそあらまほしく候へと二人はなげくけし  
きもなしよりのぶ聞召二人のものゝかたきをはきん  
時わたなべかい〱しくいけ取て来りしをいましめ  
置て有ぞかしおやのかたきで有間いかやうにもおこ  
なふべし二人かしゝて有よしはみかたはちからをう  
しないてきはつの事なればすいぶんひそかにかく  
すなりと仰けるいわう承り扱はかたき二人をはいけ  
取まいられ候かそれかしさいわいのてだて一つ候か  
のめしうとのなわをゆるめつなきん時こそ打じにい  
たし候でうみかたちからをうしなひみなおち行候ゆ  
へ大將もこよい都へかゑらせたまふよし何となくい

ひかたりうへを下へとさゝやかばゆるまるなわをと  
きつゝにけのがれまいり此由を物かたりしさかよせ  
によせぬべし其時われら五人は長もちに入られさぶ  
らいたちに取もたせひしめきにぐるものならばたか  
ら物ぞと心へうばいとらんはじじやうなりしろのう  
ちへもちまいらはとつてかへし人々しろをせめさせ  
たまうべし其時われ〱長もちをけやぶり出大將を  
うつてすてしろへひをかけあときより切て出なばてき  
百まんぎ候ともいかにあまし申べきたとへまたつる  
ぎのなかにねころびうつてとをる共われら五人のも  
の共はうたるゝ事は候はじわが君様とぞ申ける其時  
さだかげすゝみ出何ちゝのあたにはともにてんのし  
たにあらずとらいきにきするおしへなりいかにちり  
やくにあればとて正しきちゝのかたきをばはなち  
やるほうや有おぼつかなしとぞ申けるきんひら聞て  
なにおやのかたきといふへきはかけちかゝ事をかし  
きやつばらにおいては時にとつてのしそつなりさま  
でうらみはあらぬぞかし其上われら五人かじやうな  
いへ入ならばひとりもいけてのこさばこそみなころ  
しにするからはおやのかたきをまのまへにたすくる

とはよもいわれじ人々とぞ申けるよりのふげにもとおほしめし此たびのぐんほうはわたなべにたまはるはからへとの御でうなり承り候とて御前を罷立人々めしうとひきよせきりなはをかけなをしこよひ月も出なば都へかゑるさにせめてはきつてなぐさまんととくるやうにそかけをきける扱よもふくるにしたがつて落ゆくさたのみひしめきけり二人のめしうと是をみてかゝるさわきのおりふしににげて見ばやと心づきなわをときて見てあればやすくとそとけにけるいざやにげんといふまゝにしろのうちへにげかへりかやうくの次第にてはやおちゆき候なりと申さてはさやうに有けるかいざうつたてもの共とてみな一どうにそおつかけるあんの如くおいゆくせいのみうちになかもちもたせ行もの有のかさしとおつかけられみちのほとりにうちすてあとをも見すしてにけにけりしやうのもの共是をみていかさまなる物ならんとしろのうちへそもちかへるよせてのもの共是をみてぢぶんはよきぞとおしよせ時をどつとぞ上にけるじやうのもの共是をみてあますまじとうつて出る五人のもの共心へてなかもちをけやぶりいで

大しやうのはそくび水もたまらすうちおとししろへひをかけ五人しておめきさけんてきりければあるひはうたればらをきりいきのこるはなかりけりそれよりもよりのふこうかけちかをたいじあり都へかゑらせたまへば五人のわかものあいかはらすつきぬのちうせつ仕りこくとをゆたかにおさめけるせんしうばんせいの御よろこび申斗はなかりけり

右此武者執行は太夫直之正本をうつして令開板者也

萬治貳年亥七月吉日

通油町

# 綱金時最後

## 第一

源氏五だいでんき

本ノマ、

さてもそのうちそれおもんみれば、しうしのくわはかならずりんしのしるしをなす、げんじのみよあひついで、さかふるはるこそめてたけれ、其頃みなもとのよりのふ公は、わか君よりよし公へ、みよをゆつられ則御名を、さいしゆん入道と申て、御所のわきに御いんきよを立られて、にぎあうことはかぎりなし、あひつたはるらうど共には、わたなべのつな、さかたのきん時、同五人の子供は七人は、せつのかみ頼光よりゆづられたいくさうでんのからうなり、爰に又むまのせう、いせの七郎、大すみ源五、びごの平八、さつまのたゝあき、かれら五人はいしくのはんくわい、長良もおもてを合せぬゆうしなり、是はよりのぶ公より給りたるらうどうなり、扱國々の諸大名ひにしゆつしはひまもなく、よりよしの御いせいゆしかりける三重しだいなり、是は扱をきこゝにだざ

いのひやうぶやす村の子に、同兵ぶの正やすもとは、ちくごの國にいたりしか、有日のこと成にらうどう、を山の十郎なるかみを近付、扱もこんどつくしとかまくらにて、おやおうちを打せ我ながらふへきにはあらね共おやおうちのかたきをうたん其ために日かげの物と成有にかいなきしんたい此まゝくちはてん事こそむねんなれ其上けんとうさいせのかたきの子なればせひに打て下るへしいかゞはせんとひやうでうすなるかみ承り仰のごとく君此國にござのこともはや天下にかくれなく此頃の取さたにはちかき内に打てむかふとふうぶんせり一まづ東國の方へ御しのひ有てかたきのていたらくをうかゝいならふならされゆうしやの心をす、引しても御らんせましといつがいつまでさるがくのまひ、すさびたるあふぎのてあそこの山がこゝの里でんぶやじんのきを取てさしたる刀のよしなくもいつまでさびをおとさんと又有時ははくらくの市にまぎれて馬にのりぶしのたしなむしこのやもれうしのもてる竹の弓さゝのそぎやをこしにさしやせたる馬にこしはりくらはいやしいどうていをして口をしいとはおはさぬかそれしゆつけ

本ノマ、

になす子はようせうよりもきりやうにまじわりふつ  
たうのあんじんをさとり諸國しゆきやうしちしやの  
ほんいをたつすとやぶけの子にはぶげいをおしへぶ  
だうをみかゝせ一たびゆうしのほんいをたつすなを  
しくもうづもれさせ給はんよりはじがい有てかばね  
をいぬにも打くれさせたまはんこそまさらめと誠に  
ゆふせいあらわれてひたいにくろきあせをなかし泪  
と共にぞせいしけるやすもととつくと聞とつけあふ  
よくこそいひたれ我も此ぎおもわぬでもない思ふに  
付てしさい有先するがの國迄近付よりしのびやかに  
かけをかくしいつはし人<sup>本ノマ</sup>をなひけてみん尤なり三年  
おそき御ゆだんかなはやゝ心へたりとて三重たひ  
のしやうぞくしたりけり是は扱置よりよし公有日の  
うちうのつれゝゝにらうどうらうにやくしゆつとう  
人ことゝく御まへに召れすでに御しゆゑんはしめ  
られわたなせいたうのあらましを少申せばよりよ  
しあぎやかにこたへたまふつなはつとかんじけるか  
さねてよりよしいかにわたなべきん時われかくあん  
へいによをおさむることみな是かたゝもつてちう  
こうのせいとくなりぶだうにもかだうにもかたゝ

をしせうとせはくんじよのしだいあんもんならんた  
とへはいか成ぎやくとおおる共さんそくついばつの  
りはばつくんにかゝるめべし今ははやよの中に心に  
かゝる事ぞなきかゝるめでたきおりなればさかなと  
の御でんなりわたなべはうらかに付てほつくに、た  
ち花はよもきかしまのほひかな、きんときわきに、  
はつねもたかき山ほとゝぎす、其時よりよし先も先  
もしたり扱もわたなべはげんじさうでんの侍ぶだ  
うのたつしや一とせよりのぶ公さくらかりの御しゆ  
ゑんのみざりいづれもらんふさまゝなりしに取わ  
きわたなべ一きよくかなてのこと今もみにそひてお  
もしろやたゝ一さしとの御しよもふなりわたなべつ  
つしんでうけたまわり誠に其時はさだみつすへ竹は  
うせうきん時かく申つな五人ひつそろふてしゆんの  
まひをいたせしはゆめのうきよにのこりゐて物思へ  
とのかねことかあらよしなや物のふはながいきせま  
しき物そと人をきにいさめし我なれと今此君にみよ  
をつかせ奉り五人の子共を五かくにすへ置ともなら  
ばや今までもながらへぬもはや此上は思ひのこす事  
もなしけふはけふあすはあすいき引とれる其時はみ

つばのそやをいることくあすの命もさためなしとに  
かくに仰こそおもけれいかに人々はやしてたべさの  
みくすんたり共へうたんよりこまをはとてもよも出  
さしうたへうたへうたかたのあわれむかしのこひ  
しさに今もゆうしのらくあそびすへのまつ山なみ  
こゆる共君かよはかはらじないくちよをかさねてこ  
うはふる共まんざいらく君大急つかぎりなく二人の  
物に天下のしつけんたまはり我じやく年なれば兩人  
よろしく取おこなふへしと御ぎを立たせたまへはわ  
たなへきん時こは有かたき御でうかないまだ御年も  
ゆかざるにかく御せいたうこまやか成はとかくけん  
りよの君ぞかしとて物ごととにさだみつすへ竹はうせ  
う五人一同にかうむらは今の思ひはあらまし物を是  
に付てもそれかしかたひくせいぶん申せしを賴信  
御もちないきゆへに思ひもよらぬ京のぼりみのゝ國  
にてはてし事おもへばく口をしやといとゝ泪はせ  
きあへずあつはれ御父賴信公とはばつくんまさりし  
御大將やとすへたのもしく思ふへしかまへてなんぢ  
ら此君はすいぶんちうかうをなすべしと今ひとしほ  
のらくるいによそのたもともぬれすへしきん時申さ

るゝはいかにわたなへまつ子共を國々へおさへのた  
めにつかわすへし尤とて五人の物を近付なんぢらは  
國々のせいたう取おこなふべしまつすへ竹の一子す  
へしげはするかの國とをたうみさだみつ一子しげさ  
だはしなのゝ國はうせう一子きどゝ丸はひたちしも  
をさあく太郎源二郎は都に上りさい國のおさへを仕  
れはや打立承るとてみな國々へぞ下りける扱あく  
太郎源次郎は都をしてぞ上りける是は扱おきやすも  
とはよを日について行程にとうかいだうのうきなん  
所はこね八里を打しのぎおたはらのしゆくにかくれ  
しかげにかいだうのしゆくのならひとてなさけかま  
しくみへければねかふ所のさいはいとへんせつはた  
らふつていしゆかすけることのはにたけにあふらを  
ぬることくとつくりくとはなす程にていしゆ一は  
いくわされてあら心よきたび人かなとてことの外か  
にもてなししばらくきうそく仕る此やのていしゆは  
おかはの彌太夫とてしゆく一ばんの長ぢやなりめい  
ばあまた持つねに馬をすきけるがけふははゝのりす  
へきとてまつくろ成馬を南をかしらに引出すやすも  
とみてかねてのぞみうけしことなればあつはれ御馬

候おつさまむかふよこはたはりをくちさうどうつ  
まねのくさりよめのふしまてつくり付たるごとくな  
りとことばをつくしてほめらるゝ彌太夫一々打聞て  
扱は御ぶんは馬すきとみへたりせひ共是にとりう  
あれそれかしひさうの馬をおわりへつかひ候かちか  
き内にかへり申べし御めにかげんと申やすもとこの  
む所なればさも候はゝとて物ごとにむまのけいこを  
のそむ人はあらばおしえんと申ていしゆいよゝゝよ  
ろこびきん國の侍の子共六人しやをたつて申入則で  
しにぞさだめけるまづ一ばんにうへ村とのもまつだ  
の甚平ほりの牛助かなぎはたうたえばらのさないか  
たざり竹松其外の人々迄もびゝにけいこぞつのり  
ける有時やすもと六人のでし彌太夫いげにむかつて  
それかし一はゝのりて見せんそれにてよくゝけん  
ぶつあれはたつな打ひらりととりあふみふみしめま  
へ三寸のりすかしたつなくなりしめ馬のかしらを上さ  
せみたる所は兩のみゝくほんのとりいとくはんね  
ん心をしつめむまの心と一同し一きめしむればしり  
こみをよちゝとする所をわかうのたつなをゆるめ  
てたつくりゝゝとさくりこのめとのばら一ばん

にかみのまへのくわんたいのりふつはうくりきのら  
いはいのりあくまの物をはらいのりわくの四つたち  
くきやうのり七よう八よう九ようのほしをへうして  
こばんのりはしごの上のとのり子わたしみな是ぐん  
はうひきよくの大事をかた取てかくのひやしにあほ  
りのおとがほんはくゝゝゝとのりかへしまはりば  
ばすへよりものりしづめこまにしらあはかませつゝ  
しとゝゝとのりもと諸人のまへにてわのりをくる  
りくるりと三べんめぐりたつなひらくびにかけゆら  
りとをりしよ侍にしきだいしたるは日本めいよの馬  
の上手あつはれつよきやとみなかんせぬ者こそなか  
りけれ

## 第二

わたなべゆいごんの事

去程にやすもとときよくのりをも白くのりければ人々  
何れもめをおどろかしなをもしたかひもかしづきけ  
りすでに其よはよもすからのしゆゑんにてさけもな  
かばの事成にやすもとじぶんをかんがへこゝゑに成  
ていふやうはいかにめんゝ一じゆのかげにやどり

一がのなかれをくむ事もたしやうのゑんと云中にし  
でしは三世のきゑんと聞ば一かたならぬちぎりぞや  
扱御ぶん立頼たきしさい有頼れたまはし申べし人々  
承り其中にかなさは兵へすゝみ出こはいまめかしき  
仰かなそれ侍のならひあるいは人をあやまりあるひ  
はきにんかう人の時の仰をそむきてらう人するを取  
かくしめいわくに及も侍のきりましてしてしの中な  
れは一命にかけて承らんめんゝはいかゝおもはる  
るそ其時五人の人々も口をそろへて誠にすゝしくも  
申されたる御へんとうかなとかふはむやくたとへは  
六人同枕にしかいを埋めはとてたれかいはいに及べ  
きたとへいゝ成けうし成共はやゝらちを承らんと  
まふせははなはたいさみけりやすもとゑみをふくん  
てあふしんべうゝそれ迄もなしさあらはそれかし  
かせんぞをかたり申べし我をたれとかおぼすらんす  
ぎつるつくしのいらんに打じにせしだぎいのやす村  
か子に兵部正やすもとなりきよ年おうぢ入道やすし  
けをかまくらにて打せし事みな是わたなべかひやう  
はうゆへぞかしとかくかたきはわたなべなりおやお  
うちすこふるあくてきあたかもしやうにしうりんし

てさいのめにきさむといふ共あきたらす何とそめん  
めんちりやくをめぐらし我に一太刀打せて今のしん  
いをはらさせてたまはれと身をもたへつらにくはゑ  
んのすしを立のろひいなゝきのゝしつたるは誠にあ  
らかみやくじんのあれたるけしきもかくやらんと身  
のけもよだつばかりなり人々はつときもをけし引に  
引かれぬ侍の一ごんはきんせきよりもなほきよし一  
ごんにも及ずおのゝ一み同心のはやれんばんをぞ  
したりけるやすもときゑつかぎりなくこはたのもし  
きしんていかな我この本くはいをとげんためふしぎ  
に命をながらへてろう人と罷成扱かまくらのさたは  
とゝふた兵へ承りさん候わたなべきん時二人は天下  
のしつけん取をこないゑいくわにさかへ候と申やす  
もと聞てさあらばかまくらにしのひ入ひまをうかゝ  
ひよ打にせんかたゝゝ以て力をそへてたまはれ時に  
うへ村とのものせうすゝみ出しはらく聞ばわたなべ  
みのにてあたへしどくのさけついにほんふく仕らせ  
もはや五三日中に相うすべき由承り候へはまづじせ  
つをまたれて然へしとぞ申けるやすもと聞てあゝお  
とたかしゝわたなへさへしゝたれば天下は此やす

もとかむねの間に、おさめ置と扱なるかみを近付なん  
ちはいそぎ國々の諸らう人共をしのひ／＼にかゝゆ  
へしとて、ぐんはうへうてう取々なりわたなべがさ  
いごのことを今やおそしと待いたるはをそろしか  
りけるし、だいなりあんにもたかはす扱もわたなへの  
つなはせんねんみのゝ國大はかにてのどくのさけか  
ついにはせつめいのもとゝなりびやうきしきりにな  
りしかば、國々よりも子共をよひよせかいしやくせさ  
せいたりしかけふをかきりとやおもひけん源二郎を  
まくら本に近付なんぢはいそぎ御所へ参りわか君に  
申すべきやうはわたなべこそけふをかきりに罷成候  
今一たひさいこに申上たき事候へはおそれなから御  
成をあふぎ奉ると申上候御とも申て参べし源二郎あ  
つとこたへ泪と共に罷立馬一さんにのり出し御所  
をさして、そいそきける御所になれば、つゝしんで申上  
る賴吉驚かせられやれ馬引出せじこくうつるときん  
時一人召くしつなかやかたへいそかるゝむさん成か  
なわたなへは大病におかされしやうきおとろへいき  
もはやたゆる斗のわたなへも君の御成と聞からにな  
にしあふたるゆうせいを今もむかしにたがへしと弱

りふしたるまくらもさのみよはげなくすこ／＼とお  
きなをりやれ源二郎わらはにてうすいもてこよとい  
へらうたいと云びやうきの中は物のかおとかする物  
なりと香をたかせかをとめうがひてうすで身をきよ  
め誠に以てめうがしなき仕合かなわたなべがさいご  
にわか君を申うけいにしへのらいくはうをおがみ申  
心ちいたし心もわかやぎりんじうをとぐるこ一つ  
はおいのくははう又はわたなべつねにせんもんの道  
をかんかへいしんでんしんのむねをあきらかにさと  
りうきよに思ひのこす事つゆもござなく候去なから  
少心にかゝるぎはかる／＼しくもゑんろの御成おほ  
それ入て候へ共かつうは御ためを以て一ごんの申を  
きを仕りしうと存是迄しやうし奉る扱ゆいごとと  
いつはべちのしさい候はずせん年つくしいさゝにた  
いぢせしだぎいのやす村か子にやすもといきのこる  
よし承るかれかゆき方おぼつかなしあくてきのす  
へなればねつたいうらみをふくむゝしそれがしむな  
しく成ならはぎへいをおこす一でうなりきやつかし  
そののこんせうほねはいきほとけいきかみをもあざ  
むきうしおにのめをもくらまかすこときのやつばら

なればいか成事をかたくむべし是のみならず心にかかり候人はいんよくにまよひあればおもわぬむほんをおこす物なり然ばよしのぶ公よりおゆつりの五人の御しゆつとう人衆へそと申わたすへき事の候それれとやがてつかひを立らるゝ何れも間ちかへよびよせいかにめんゝたいゝつたはりしわたなべもしやばのゑんつきぬれば今をかぎりとはやなりぬ付ては五人の物共しよじのぎをしめし合よろしきやうに君をたつとみたみをあはれみたまふへしそなたもわかき人々なり我等か子共もわかき物共むかしか今にいたるまでしゆつとう人とからうの子共の中よきこと候はずことに家久き物かはてぬれば跡にいせいをあらそひてひばうのしをする物なり八十に及ふわたなへかゝたゝにきよごんは申さぬぞ今いきとらぬ其内に君をもそさうにいたすまじはうばいしゆ共中よくいたすべきとのせいごんでうをかゝせたう候が何と申かねたれ共かれらばかりではめいとのかはりもいかゝなりわたなべをぢごくへおとさう共ごくらくへ参らせう共かたゝのふんべつしだいと泪と共にぞたましける五人の人々口をそろへてこわわた

なべ殿の仰共おぼへぬ物かならう人のしめさるゝぎをたれかはそむき申べき我々とても御まへさらぬ物共なれば君の御ため思はぬ物は一人も候まし何とて心おかるゝぞ但我々か心みへしのかねこと候かと皆一どうにそ申さるゝわたなべむゝゝとおきあがりけるけ成とよわかとのばらそれ程みことに有べきとは思はざつたり扱はさやうにたのもしきしんていやとほていの子をなつくるやうになつかしさふにしぎだいしたゝ今の一ごんはくはうせん迄も忘るましかまへて其むねたかへらるゝ事勿れおいて二たびちこに成とは此わたなべがさいごぞと人々のてに手を取くませゆびをきらせかみを切たかひにかたみを以て五人の子共同五人のしゆつとう人一人々きせうをかきにける此わたなべかさいこのかたみにゆひかみ切し其ことを今のよまでもたみのぬひ子共のせわにのこすこと一かたならぬわたなべとかんせぬ物こそなかりけれ

## 第三

### わたなべさいごの事

去間つなはわかみやのへつとうをはかにしやうして四めにたんをかさらせごまをたかせ一つはわたなべかきたう共又はせうこの其ために其もんごんをそよみ立けるそもくうやまつてきせうもんのいしゆは扱も我々か君の御せんそ六そん王よりけんしの家はしまり御子まん中のちやくしせつのかみ頼光の御しやてい頼信公しそく頼吉公へ御よをゆつられ候きたいくのらうちうわたなべのつなこゝんにまれ成ゆうし四天王とな付られほまれをばん天にひゝかせけれ共らうせうふでうのよの習ひはのかれす既にさいごに及んで跡のおきてをしめさるゝ故に五人の子共同五人のしゆつとう人からうわたなべのつなゆいこんを背きて此君に二心在ならは上にはん天たいしやく下はし大天王ゑんまはう王ごたうのめうくはん下かいのちにはいせに神明げぐうないくう百廿まつしやくまのにみつのお山たきもとに千じゆくはんをんかんのたうにはさ王ごんげんよしのお山にぎう王ごんげんこもりかつての大明神ならは七たう大

からん天王寺にしやうとく太子いづみの國には大と  
りい五しやの大明神つの國にひるこの天神王せうの  
ちんしゆかものみたらきぶねの大明神きをん三しや  
の五す天王ひゑい山にでんきやう大しふもとに三王  
廿一しやふきおろしにしらひけの大明神みのゝ國に  
はなかへの天王おわりにつしまあつたの明神するか  
の國にはふし千けんべつしてはいづはこねおうしう  
にしほかまの大明神かゝにしら山ゑつちうにたて山  
のとの國にはゆるぎの大明神しなのにあさまあふみ  
にいふきちくぶしまのべんさい天女ようしうやたか  
きお山にぢぎうごんげんきよきなかれのいわしみづ  
やはたに正八まん大ぼさつ惣して神のそうまん所い  
づもの國の大やしる日本六十六國の大小のしんき  
迄くわんしやう中奉るばつはくびすをめぐらさしお  
のれとくるい出せつたうのつみにふすべきとのきせ  
うもんくたんのことしとよふたりけり十人の物共  
か一々ちばんすへたるは身のけもよたつ斗なり扱わ  
たなべにわたすつなおしいたゝきあふよくしたりけ  
なけ物共有か上にも君にそりやくをせらるゝなかみ  
はきねかならはかし君はしんかまもりなしとてしん

ははうかのりついとを持て引かことし爰をもつて君しんは水ゆくふねのことくにせよとみへたり君もゆたかにたみもさかふるはみな是れしんかの心一つて有ぞとよめんくせいしのへんはうにさいごのいくを申をきよくつゝしみたまへいかにへつたう二せまでのせうこ人そしゆせきは人のなき跡のおもひのたねとは申せ共我はめいどのかたみと思へは千ぞうくやう萬ぶのきやうにもまさりなんとふかくのなみだをこぼせしを君をはしめ御すへの人々そでをしほらぬ物をなきわたなへ源二郎を近付それくとよろひかぶとを取出し君の御まへにとうと置つないかに君是はまんちうよりたまはりたるはらまきにてみをはなさず今四代迄ちやくせしか一どもふかくはとらずなんはうめてたき物のぐなれおそれながらわか君に奉るいかにわか共わたなべうきよに有やうに心つかひをいたされよしもあくてきかゝる時此物のぐをみかたのぐん門に立置いくさのてつかひせらるへしそれにくたいはやけばはいうづめはつちこんはめいどにおもむく共はくは此よにとゝまつてたましひは其まゝ本のわたなべなればかたちにかげのそう

ごとくしんいのいかりをなすならはてつへきをもふみやふりたちまちてきをけちらかしまもり神と成べきぞやたゝはたもとのみたりがはしくなきやうにむたうの法のともからを一々のとくびをきつとしめされよとかく頼ぞきん時殿おいとま申て我君ばんし頼ぞ若侍名残おしき兄弟のわか共と是をさいごのことはとし年八十三にてひざをさうにくみひちをさうへはりわけがつせうしてまなこを八分ににらまへいかに人々わたなべかせかいをみひらきてしすることまつだいげんけをまもらんためなりと大わうじやうをとげたるはひとへにだるまのごとくなり君をはしめ奉り五人の子いづれもく一とにわつとなげかるゝ中にも御大將御泪のひまよりちやれ源二郎此やう成めいよの侍は物のみ入か有と聞其まゝもくよくすべしとびやうぶ引立ばんを付よ承るとて兵共しがいのまはりをももりける扱のべ迄馬を引せつじかためをなすことはあくまはらはんためなりわたなべかさいごしゆせうにこそはみへにけれ君々たりもとよりぶつせうどう一たいの人間三せきゑんに引れ二せあんなくのかたみをうる君のめくみぞ有がたき

よのめも更に御しんならずさうれいのぎをしめされ  
き日くゝの御とむらひをなし給ふげにくゝ思ひあい  
たるくんしんの中あつはれたのもしき共中々申はか  
りはなかりけれ

#### 第四

おにたけさいごの事

扱もそのゝちむざん成かなきん時か今はの時のこと  
ばのすへこそあはれなれ我々わかき時よりも五人の  
中はたれにてもしにのそむ其時はしがいを人ではか  
けさせず取かくそふぞとたかひにいひかはせしは何  
事ぞ今は我一人に成なればあすをもしらずたれをか  
頼申べきたゝ一時成共さき立てしする人こそ佛なれ  
のこりて物を思ふこといんくはの引入おくるまのめ  
くりあふせにながいきせしははかなかりけるかねこ  
とゝないつくといつやれわたなべふねが出るか我を  
もつれてゆかれよなふわたなべくゝとふかくの泪せ  
きあへずわか君まへをかきたまへば跡は竹つなかき  
にけりきん時わが君のそへごしをかきければ四人の  
子共ははた天かいをさしかけきん時かうせうにいか

にかたゝゝわか侍日本ぶさうのわたなべかさうれい  
に弓や取みはよりて手をかけあやかりたまへぶつは  
ういんだうのせんのつなぶしもはうしも一すちに道  
を立ればささそひ引二世のちきりやはうばいのかい  
なきめどいの道すから三世のきゑんに君のなさけぞ  
有かたきまよひをもてらせたまふ六道のくらき  
やみちにあきらかにとはすがたりのよそほひはげに  
ためしなきせいせいさなからしゆせうにそみへしつ  
いにのべにそ付れけるどしよにもなれば君を初め五  
人の子共しゆつたう人しだいゝにしやうかうを取  
こそ哀れなれおしやういんたうおくりせんたんたき  
を取くべむじやうの煙となし申けふりたゆればこつ  
を取君御所に入たまへば各々わがやゝゝに歸らるゝ  
七日くゝのとむらひ五人の子共きん時してせんちし  
きをくやうする三十五日に當る日は忝も御所に吊ひ  
給はんと千ぶせんばうせかきをなし御吊ひぞ有がた  
きよりよし一しほ御歎き有わたなべそれかしにゑさ  
せしよろひかぶと今一たびわたなへをみると思ひせ  
めて心をなぐさまんそれゝと常の所にかさるゝ  
さながらわたなべに二たひあふたる心ちして御しう

せうのおりふしふしきやかぶとのほちよりもむし一つ出る其色山吹色にはね四まい有口にはけんを含めり人々さはぎ申さるゝ頼吉御らん有てこはふしきのようにしてしばしかんしておはせしかやゝ久しうしてげに思ひ合たりかれかさいこにかはねはとちうに埋む共たましひはもとのわたなべにてあんなれはと云置しは此むしにてや有らんさあらばかぶとのほちよりしゆつせうしたるむしなれは其なをほちとな付ばんみん高もいやしきも恐るゝはちのゆらひは此時よりもはしまれりいそき神にいわへとていぬいのすみにやしろを立はちのかみと名付らる有かたかりけるためしなり此ことなをまかくれなくやすもと聞付六人のとの原なるかみを近付聞はわたなべのつなは三四十日さきにしゝたるとやもはや天下は取た物ぞかたゝには何さま大國を參らすべしじこくうつさす打立物共承るとてなるかみをいくさ大將とさためよりによつたるあら侍一千よき其みはむねとの六人一所に弓をのるなれはやすもとか七き打と名付てかまぐらの城にをしよせ時のこゑをぞ上にける御所の内にはおもひよらさるゆへうへを下へとかへしけ

る中にもきん時大てのやぐらに上り大をん上てやれおのれらは何物しにぞこないそ其しやうだいをはきおせいかけやたけにおこる共いまた此せかうのはげたるきん時かこもるうへは何とたゝ一のことのんだやうに思ふ共かききのめに水みへずとてはませるおぶくもたちまちにくはゑんとなりて其みをやくほむらのたねと成べきぞむやうのきべいをおこさんよりたうせいはやるつれねんぶつなむあみた佛とうきよをたつて命をつげうさいがきとそいかりけるよせての中よりなるかみ一ぢんにすゝみ出是はだざいのやす村の子にやすもとなりつくしかまぐらにておやおうちを打せ其むねんをさんせんためのぎへいのおこしことよやれいそいで心へさるは大き成ゆだんぞやことのたとへにじやの道をへびかしるぞとよおやににたる其事をはきつねの子をはつらじるとせけん

に云はよく云たうたふうたれしは心の覺か有ぞとよむかしおにの子ともせよあまりに四天王かせはふかせそ今ははわうとなりくだり御へん一人がうつたりまふたりしける共ひとりづゝみはよもならし是へよせたる兵には七き打と名付て七ようのほしをへうし

われ共には四三八つのそへほしにていつもこなたにはけんをかしらにいたゝきくんはうひしゆつのもからなればそちとこちとのはりあいはおぼねかたつまいたゝすみやかに誠をわたしさんやに馬をつなぎをきこうさんせよとそ申けるきん時間もおへずやれおのればらねつせうふかきあく人かな手取にせよとげちをなす所へいぬいのすみよりもくだんのはちひかりをはなつてとひ來りかたきのやつばらくつきやうの兵六十あまりさしころしじやうちうに入ぬ其ひまに物のぐさしかためよせてみかた入みだれいくさは花をぞ三重ちらしける城の内にはいまたせいもつかさるによせての方よりきば七き打かけ合のりかけのりかけきる程に何かは以てたまるべきみなことごとくうたれけりきん時こらへかねたち引ぬき近付かたきをはらりと切にけりのこるぐん兵四方へばつとおつちらし立かへりみてあればいたでうすでにきらひなく廿四か所てをあふたりさしもにつよききん時もたゝよろゝと引所によせての方より十八九成わかむしや大をん上にていかにきん時まさなくもひかるゝな我をたれとか覺すらんゑちせんにかく

れなきがんせきくづしのおにたけと云物なり引かへし力をためしめいとにて人々に物語いたされよと云もあへず打てかゝるきん時心へたりとてうけなかつされ共おにたけ心きいたる物なればたゝみかけて打程にきん時むずとくみわかし時なまはおのれに二太刀とはあけさせまじ物を口おしやいたでおいぬれはらうたいゆへつかれには及ぶまつたかなふへき共思はれすあゝさて年はよるましき物哉とはがみをなして上を下へとかへし既にあやうくぞみへし其時五人の子共わたなべやにいたりしか其間七八丁斗なれば時のこゑやさけびのおとはてに取やうにぞ聞へけるすは御所にことこそおこりたれと大わらはに成てかけ付て候此由をみてかたきの中へわつて入あく太郎は横あいより走り行父か上成おにたけを取て引ふせくび打をとしきん時をいだきおこし扱々あぶなき御事やと父をかたに引かけ城中さしてぞ入にける殘の人々も一々くひをつらぬいていきほいかゝつて引たるはあつはれ小四天王おやまさりやとみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第五

きんときさいこの事

去間五人の人々きん時をかいしやくし君の御まへに  
參此由かくとぞ申上る賴吉御らん在てやれきん時で  
は何と有ぞもしも其てか大じに及ぶことならば我は  
何と成べきぞと暫し涙をながさるゝきん時承こは忝  
御でうかなかくいたでなれば力なしたゝ是に付ても  
四人の人々ながらへて有ならばかくやみゝとはう  
せましき物を五人のあのさててきしゆつとう人かま  
ばらにかけこみ引しをぬくれは心かせかれて亂れ入  
てきをふせきとめしによつて此いたでをいぬるも君  
のためとにかく五人の子共かくる共引共一所に心を  
合君にちうを仕れ御いとま申てわか君名殘おしきわ  
か共とかうせうにねんふつ申ついにはかなくなりぬ  
君をはしめ人々ははゝと斗なりされ共かなはぬ事  
なればしがいをねんごろに取かくし此上は一時もて  
きをほろぼしけうやうせんといきひやうでう本ノマ、  
取々なり其内あく太郎すゝみ出いやさせんぎもよし  
さたゝやすもとめいしゆくんのてきおやのてき此あ  
く太郎においては千ぎ萬ぎが中なり共思かたきは只

一人やすもとめがまつかうしやつらかけて切わりは  
ら切てしなんに何のしさいか有べきとかけ出れは源  
二郎おさへてしばらくあはてゝ事をしおんしたまふ  
なたれとてもみをすてゝ打たんはやすけれ共それは  
君を思ふにあらすおや共も君をよくまもれとこそ云  
おきければあれていのかたきをふせきかねみを本ノマ、もか  
つて命すてんは云かひなしされはかたきのやつばら  
人にすくれてうてふし三つ四つ五つ六つ共もつにこ  
そかたきもて二つわれゝもて二つわたし合する程  
ならば五人の者入ちがへもみちがへうちを以ては  
いをはるふがごとく成べし余にさのみせかるゝな一  
まつかたきにもいきをくれこなたのくん兵共にもと  
つくりときをのませかたきのやうだいをみすまし其  
時くだんのいくさのはうを以てふくろの口をしむ  
るごとくひつくゝてひしがふぞやしつまりたまへと  
おしとゝむる時に賴吉五人の子共は大てをかためよ  
又五人のしゆつとう人はからめてをかためしはらく  
時をうつすへしと御ぎを立たせたまへは何れもかしこ  
まつたりとてきどさしかためよするかたきを待いた  
り是は扱置やすもとは六人の殿原らうどうのなるか

みを近付こんどめんくのはたらきしよ人めをおと  
ろかし殊更よりよしかゆんでめてと頼しわたなべの  
つなはほろひぬきん時はうちしにす今は、や心やす  
し此上は大將子共を打ころし天下のしゆごとあふが  
れんいそきよせよといかりけり時になるかみすゝみ  
出こゝによりよしを打べきけいりやくこそ候へと申  
やすもと聞て扱其ひけいはいかにさん候てだてとい  
つはよりのぶよりゆづりし五人のできしゆつとうと  
んよくふたうにしてつねに五人の子共をそねんで  
中よからずかれらに大こくをあたへ頼せたまはゝそ  
くしに頼吉かかうべをはねみかたに來らんとへは  
五人の子共か切て出れはとて只いけすのこいを八方  
へおいめぐり四つてのあみにてぎこやいはしを取こ  
とくひまなくくびをしめるならば四天王の子は扱置  
ぬ五たうりんゑのあなた成あしゆら王と申共あゝた  
たゝゝたな心の内なりとてに取やうにそたくみ  
けるやすもとさもうれしけにきうに其むねさんせん  
とでうをしたゝめ其よにからめて城中へふうつう一  
やしかけさせゝい兵にこそいさせれぐんしや取上  
うまのかみにつかはすやがてひけんつうぶんにはは

くこんとやすもとぎへいをおこし大ての大將きん時  
を打取上はいそぎ頼吉かかうべをはねさうぞくちう  
しんせらるゝにおいてはまふこく二か國つゝはうせ  
いにあておこなふべき物なりよつてでうくだんのご  
としきやうくはうとんしゆ五月五日五人のしゆつと  
う人へだざいの兵ぶやすもとゝよみ上る馬のせうか  
いはく聞たまふかめんくつねくのぞみは此時也  
むやくしきはうばいにおもてをむけあけくれに心を  
かぬるもよしなやああすをもしらすせんなきうきよ  
に一時のゑいくは千ねんの命をのぶるとなればまし  
てや二か國のぬしと成ならばよはあんせんにおく  
るべしいかにかたゝ天のあたへを望ぬはかへつ  
て天のめいをやぶるなかんづく兩ぢんのけいりやく  
をみるによせてはいさんでけいきをます身かたは此  
程うれいにしつんてむしやのいせいもいんやうま  
さにらんしきなりあし本のあかき内にいさふんべつ  
をきはめん何れもゝ尤とどうしてしからば城にひ  
をかけよりよしを打たんといふいせの七郎やにはに  
打へきはかりことこそあれひをかけうよりはさあ五  
人の子共の内すへ竹か一子すへしげとそれかしゑん

しやになりたればかれをよびよせかたり聞せいざや  
ひけいをめくらさせんもしそむく物ならはいくさか  
みにいわふべしめん／＼尤しかるべしとやがてつか  
いを立にけりすへしけ何ことやらんとつかひとつれ  
て其さに來る則六人はくるまざしきにいなかれ是へ  
是へとしだいにしきたいす七郎念頃ぶりして物云が  
ほにうじめきしを六郎みてやあよう有げ成有様やと  
ちつ共心ゆるさゝりしか七郎こゝゑに成てさゝやく  
六郎わざとけんによもないかほばせして打うなづき  
しひやうしに七郎とたんやあころりとなげたへんし  
は只今太刀さきにてみしらせうよつてみよとてそは  
成ごはんすご六ばんてにあたるをさいわいにさんこ  
みじんに打ちらしすいさん成とよあをとり共四天  
王の中まの物に云事といわぬことゝが有一人もあ  
ますましきか一時もはやく君にしらせ申さんと御所  
をさしてそかへりける扱人々は六郎かいにどうて  
んしちから及ず打つれてかたきのぢんへぞうらかへ  
る扱人々にたいめんして城のあんない五人の子共か  
ぐんはうこと／＼我々かたな心を合てそくしにせ  
めおとしあんきをなさせ申さんとみな一どうにぞ申

けるやすもと聞ておふたのも／＼さあらはめん／＼  
此上はくんばうの手だてにまかせてすいぶんちりや  
くをめぐらせ一むしんにいくさをせられよ時の一き  
むほんなと、云ことは手のひにしてわらんべの水い  
さかいたゝ一つにせいりきをはけしひらせめにせ  
めて城をのり取しはあいは天か一の折からなりと  
ぐんばいはなはたかきりなしうらべの六郎すへしけ  
は大いきつて君の御まへに參りからめての大將て  
きしゆつとう五人の物共心がはりを仕よしを申上る  
頼吉おどろかせられよしそれとても心かはらはかは  
れよしなきぐにんばら千人萬人うらかへる共むちさ  
し一人かけたる程にも思はぬそたとへかたきもうせ  
いにてむめくさをこむとてもけつき斗のうきむしや  
なればひとへにさすらをる五月もなるの水げんくは  
程迄はよもせましれいの手ほこを持ておつちらせ逃  
る所を國こほりの百せうらにすきくわまでづるのは  
しよきまさかりを以て一人もあまさすひしきころせ  
と仰けり五人の物共あつはれ君の仰こそおもしろけ  
れ扱も／＼おふち頼光によくもにさせたまふ物哉千  
ぎに一きの大將なりとぞ申ける源二郎かしらをたゝ

き扱もきどくに云たり殿ばらくんせいはみな大將の  
いに付物なり若の御ゆうりきこそ頼あれとてかんし  
ける扱みかたのせいは何程有ぞくつきやうの兵五百  
よき斗有げに候時に頼吉さらばぐんはう取おこなは  
ん先大手へはやすもとかせいゐんにつらなりへいを  
のらんと望べし源二郎きとう丸三百よきにてかたむ  
べし扱からめてへは五人のしゆつとうが大將にてむ  
かはんつらん是へはあく太郎小六郎荒二郎二百よき  
にてふせくべし承るとて大てからめて五百よきよ  
するかたきを待いたりよせての方には其せい二千五  
百よきとぞ聞へし大將やすもと大もんのひたたれに  
ていまだよろいはきざりけりぐんばいうちわを持  
らうとうになるかみを召ぐし大やうにひかへたり扱  
六人の殿原は一きはすくれみへにけり皆一やうにあ  
い色のよろひにぎんのかな物打たるは只道しばに  
ゆきをめくらすたもと哉其中にもできじゆつとう皆  
ひをどしのはらまきにくれないのほろをさつとかけ  
大將にむかつて我々そとわき道よりしので城のか  
まへむしや立をみて參らんと人四五十人にてかねて  
かよひしわきのもんをしのびよる時に源二郎とあく

太郎はもしよ打にやよするかと二人よまはりに出て  
つのぼうをからめかしあしかるしうよくばんを召れ  
う打とけいねてこけはへな御ようじんようじんせよ  
と云所にわきのうつみ門のへんにあやしきおとこそ  
聞へけれへいのさまよりみてあれは八四五十程かち  
立にてきば五きみへたりたぶんあれは五人のやつば  
らがあんないけんみの其ためにおづ／＼是迄のめる  
とみへたり何とそきやつはらを一人もあまさずなぐ  
りふせんばんの物共めさはぐな只あく太郎と竹つな  
次第にまかせおきて物をみよともんのく／＼りをそつ  
とあげさせ是やりやしのよごひくつまこふしかをよ  
はい打あしもとから鳥とこそいへかきめ一人もど  
つこへ／＼はい／＼／＼と打よつす五人は馬に  
のりたればごせう大しとにけて行おつけ／＼れ共  
よき馬なればつゐに／＼けのひたすかりぬかち立五十  
人一人ものこさす打とめももの内へぞ入にける二  
人の物かてがらのほどせんだいみもんのためしやと  
上下ばんみんをしなへてかんせぬものこそなかりけ  
れ

## 第六

子し天王ゆうりき付やすもとさいこの事

去程に源二郎あく太郎は君の御まへにくひ五十持て  
參かやう／＼のしだいなりされ共五人のやつはらは  
よきむまにのるなればさんりにけさつて打もら  
しぬることなんはうほいなく存なり去ながらきやつ  
ばらをいけて置候もいく程か候へき賴吉大系つ限り  
なくおゝよくしたりとてよする敵をまちゐたり是は  
扱置爰に又つくし大みやう一つ所によりきしてあき  
のはんくはん申さるゝは既にかまくらゝんけきに及  
ふやゝ共すればげきしんにまよはされて思ひのひを  
むねにたくことは作り病なりいざ賴吉をみつかんと  
むねとの兵二萬よきさい國を打立てかまくらさして  
そ急きけるあしから山にちんまく打てこまの足をぞ  
やすめける先是よりつかひを以て打たへんとやしま  
のこふんしをしゝやにぞ立にけり御所の大てのもん  
外に立よりほと／＼とたゝきあんないこふた御所の  
うちにはしげさだ聞ふしきや入あい斗になりたそか  
れの人のおもてもおぼろけ成に門を叩くはくせ物哉  
あまさしとつくばうをつ取出んとすきどう丸をしと

めまたれよ左様にあらくてはおちてさうなくより付  
まし我たばかりみ申さんとしげさだをとめ門をひら  
きたそとゝふさん候つくし方よりのつかいの物なり  
其由をくへ申されよと云きと／＼かたきぞと  
思心へ申たりとかんしとかいつかみ供の侍是はらう  
せき哉とて太刀に手をかけひしめくきどうはたとに  
らんでらうせきであらふとまゝよとがなくはのち  
かやさふとゆんでにつかみめてにて門をはたと立君  
の御まへに參りけり賴吉はるかに御らんして何物そ  
とあればさん候是はあきの國にあくちのはんぐはん  
國其か侍やしまのこふんしと申物にて候かまくらら  
んげきのよし承りさい國大名こと／＼御みかたに  
參るべしはやゆるぎのはらにちんを取明日御城中へ  
さんにう仕べきとのつかいに參たるそれかしを是成  
おのこかあらけなくいためしことふしたる物のち  
しよくなり二たびかへりて人にわらわれんよりは只  
今はら切てしなんとてこしの刀に手をかくる源二郎  
おさへて先待たまへそれはかたききやつばらかけん  
みのためにたばかりそと心へてとかめあやしめ申た  
んよくあんしてもみたまへかた／＼もつてはる／＼

是迄らいりんの所も君のためあやしめ申も君のため  
りぐはいは心のほかなればかまへて心にかけたまふ  
な其上かゝる大じのつかいに來れるみかすこしあや  
まりあればとてはらを切らんせを切らんとは近頃御  
ぶんのあやまりなりことしつまりてあらはちうせつ  
のはうをんにおこのうべしと五人さまゝなためら  
れさらは御めみへあれとて君の御まへに出しけり君  
御たいめんなされ諸大名ゑんらいの所さうそくかけ  
付らるゝなさけのだんしんべうなりいそぎにうじや  
うせられよと忝も御じひつを以て御はうしよ下る御  
ぶんしめんぼくほどこしおのかぢんやにかへりけ  
り扱人ゝに御しよをおがませ各はいけんせしめか  
かる御しよにあつかること弓や取てのめんぼくなり  
たれあつて此なかに二心在べきとは思はね共つよき  
か上にもゆうちをくだきかはねをせんぢやうのちり  
になし東國にとゝめほまれをせ上にひやかせはまつ  
だいいい國ふしのゆいせき共成べしさらはうつ立人  
人と家々のはた共をしたてゝかまくらさしてを參  
るゝ五人の物共たいめんし則君へひろうす君も御出  
ましませばしよ侍くびをさげひしゝとしこうす四

天王の子五人の物共せんごにはこつるきてつはうい  
らかを並べ置たるはひとへにゑんまくせう神ごつめ  
つあはうらせつのなみいたるやと身のけもよだつ斗  
なり其時小四天王の者共しやく取なほし何れも諸大  
名はるゝ是迄かせいせらるゝたんかうをんにゑさ  
せらるゝとの上いて有そいよゝちうかうをいたさ  
れよとしきれいす上にさかつきすはりければ何れも  
御しゆたまはりよろこぶことはかきりなし扱五人の  
人々きつけうのしらいとおどしのよろいをちやくし  
思いゝの道具を持せ御大將賴吉公まつ白成馬に召  
大の男二人さうのたつなにあいぐして御きつけうの  
馬しるしをおし立させゆるき出させたまひしをあ  
つはれきりやうの御大將やと人々はつとそかんしけ  
る其時賴吉いかにめんゝかたきよするかと思へは  
よせもせず扱はゆふへのかたひしきにきを取れしら  
んでさうなくよせさるとみへたり何れもぢんのな  
らいしふかみはりのていとしてねこやに陣を取とて  
みな百せうのあはらやにけつき斗のうかれ物ひやう  
らうもつつかすしておち行こと有へししからは二日  
のわつらいたるべし二萬よきをせんごさうのひつし

と取まかせはたもとよりむら／＼とおしよせ一人も残すかたきのねをたてめん／＼と二萬よき四方へめくればひとへにくろかねのあみをはつたることくなりすてに五人の小四天王かたきのせんこをおつ取まきあいつのたいこかいふき合時のころをそ上にけるかたきもこらうのふる兵なりよのまに人をつかはしつちべいをかき上山をからくりやうかいこまへらんくいさかもきをうへ竹たはきびしくかまへたり源二郎みて扱もふてき物はぢんこやにきどをしさかもぎを引はおこかましやかく云はわたなべか一子みたの源二郎竹つなすくねのあく太郎きとう丸うらべの六郎さだみつ一子うすいのあら二郎なりこんとの大將殿はもちろんいやでもおふでもげんざん申さう先五人のしゆつたう同六人衆日頃のよしみに御參成しや扱も父わたなべかさいごにかく有ことをあんにさとつてきせうかゝせ申せしことみなかた／＼のみのためにあらずやそれをそむいてひきやう物哉いまた一日も過ぎるに君に弓を引るゝ天ばつくひすをめぐらさし刀よごしにさのみ切たくもなけれ共まつたいはうばいの見せしめにこんきをはねてためらはん是へ

出よとよはゝりける爰に五人のしゆつとうみかたの物にめをおどろかせんと一もんしに打てかゝるさだみつ一子しげさだ十文字おつ取きよくみへたりできしゆつとう此しげさだかくび取てなをかうたいに上たまへとほこさきをきつと上てみせたいせの七郎何しげさだなればとて何程のことか有べきと一もんしたかくかゝるひつはつしわきつほをすはとつらぬきたかくさし上是みたまへ人／＼日頃はしゆつとうとてじまんさういきられたるかいもなくくれんの母ごになられたるはととつとわらふて引かへすうまのせうこと／＼しきくはうげん哉とおもてもふらずかかりけりすへたけ一子に六郎大でをひろげてよる所を心へたりとちやうどうつどつこへさはつとさかいぐりかんしとつかみ七八けんぐわらりとなげたころ／＼ともんとりうつてせゝなきの中へうちこまれ水におほれてしにゝけり小六郎みて此ころのできしゆつたうはつちほとけの水あそひとは是なりと是もわらふて引たひらいのかくどうきとう丸となつてかゝる大すみ源五らうどう二人ちか付なんちらはかれとくむへしそれかしはうしろより打べしと二

人をさきに立て切てかゝるきどう丸長刀取なをしも  
つてひらいてこれからはからゆんでめてへなぎたを  
すおふすみかにくる所をいしづきにてこしほねをど  
んどつくのつけにかへす所をきり／＼ほねから下さ  
まにさつとのすれはゆんでめてへさんばけたたゝあ  
き平八これを見てほうばいをうたせやすからす思ひ  
二人ならひ打にきつてかゝるあく太郎てつのばをも  
つてかゝる二人なのつてみくりのさへもん山のゝき  
んこいやさおかき聞たくもなしたがいに命をろんじ  
このいそかしきしゆらのはげみをあらそひてうつら  
うつらと聞へきものゝ有物か四天王の習ひはすきま  
をあらせすはつとさまいたくびをひしくをこんほ  
んとす御大きにみくりのさへもんとなのられたれ共  
うちぐり殿になられたりとわらふて入ぬ源二郎大將  
やすもとをうたんと切てかゝる所へらうどうのなる  
かみをさへてむす／＼とくむやあおのれは何物そやすも  
とからうとうに山の十郎なるかみとなのる源二郎聞  
てなるかみとはこと／＼しや扱はなんぢはこくうを  
なりひゝかしばんみん共にきひわるかるなるかみの  
おとしこかいでさらならせてみんと大ちへ三尺打こ

んたれはぢがみなりにぞ成にけるやすもとかなはじ  
とにぐる所を五人の物がてくるまにのせ君の御めに  
かけ六人の物を一／＼にくびを切やすもとかかうべ  
をはねするはんしやうとさかへたまふめてたしとも  
中／＼かんせぬものこそなかりけれ

寛文元年辛丑閏八月吉日

頼光蜘蛛切

第一

頼光くもきり

さてもそのうち、それせんあくの二道をおもんみるに、せいとうのたいしきけんしやは、日月のめぐみ日にをてさかんなり、ひどうにしてわがまゝをふるまふねいしやは、家をほろぼしめいをうしのふこともくせんたり、たいまもるべきはじんぎの二つにきわまれり、こゝにせいわ天わうより四代のこうゐん、たいのまん中のちやくなん、せつつのかみ源のらくわうとて上をろしこゝんまれ成めいしやう有、然るにらくわうぶんのもつては國どをおさめ、ぶを以は四かい、たな心にしずめことにはたんしう、大系山のしゆてんどうじを平け、しかのみならずすどにいたつて、ちやうてきをついばつし、ぶかうは一天にひるまり、せいゐ將ぐんのぶしやうにそなわり、都にしきの御所にきよちう有、ぶけのせいばつ取をこない給へば、おそれぬおくり物こそなかりけれ、御子一人

おはします、御名をはせいわう丸と申奉り、御さいちにまし／＼きりやうゆゝしきわか君なり、頃はちやうわ五年正月廿日の事成に、御吉例にまかせ、御ぐそくの御しうぎとて、御家のしつけん藤原の中みつ扱四天王の人／＼、其外とさまの諸侍何れもしゆつし仕り御いわいのぎしき事終りて後、らくわうの御でうにはいかにわたなべ、せい王丸今年十五歳になれば、げんぶくせんと思ふなり、殊によきついでなり方々か子共、五人のわか物をもけんふくさせ、せいわうかかしんにせんやういせよとの御でうなり、つな承り扱々みやうがなき御でう哉、忝も君の御ゑばし子になされ、あまつさへわか君のかしんに仰付られん事、せう／＼せゝの御をん此事に候と、泪をながしいたりけり、大將御きげんあさからず、かみ一人のぎによつて下ばんみんに至迄、誠にゆゝしきめいくんやと、うら山ざるは三重なかりけり扱其後、四天王の人々はわか物共を、さも花やかに引つくろいつれて御前へさんにうす、藤原の中みつ君に、ゑばしきせ奉りしきだいして畏まる、時に大將御しゆつましまして、上だんなをらせたまひ、扱せい王丸をさまの

かみ、よりなか公と付たまひ、げんけのぢうほうらんでんくさりの御きせなが、八まんぐうよりたまはつたるたつがしらのほしかぶと、頼仲にゆづられ我物のぐをちやくし、と、のてうてきをたいらげ、ぶゆふ四かいにはなはだし、なんじも劣らずみやうがあれと、御さかづきを下されける頼仲つゝしんでちやうだい有よろこびたまふ御きしよくげにらい光の御子やとをのゝかんしていたりけり、頼光なめに思召、扱はうしやうの一子けん王丸を、ぎどうくわんしやほうめい、つながちやくし竹王丸を、三田の源次郎竹つな、きんととき一子あく太郎を、さかたのきん吉さだみつちやくし、あら市をばうすいのあら次郎さだかげ、すへたけが子はうらべの六郎すへしげと、めされきやうよりしてはより仲が、しんかのこうを許すなり、ちゝ共に劣らずちうかうをつくすべしと、はなやかにおどしたる御よろひに、かぶとをそへ次第次第に御さかづきを下されける、渡邊御しやくに罷立、りうはくりんがながれのすへ、くむさかづきもきよく水の、めぐれやめぐれ小車のうたいぶしつわ物のましはり、たのみ有中のしゆしんぞをもしろや、上か

ら下に至までをのゝきやうにじやうしける、君の恵みはちよばんせい、國も豊にとみさかへさかふるみよこそ三重めでたけれ、既に春すぎ夏來りみな月なかばの事成に、らい光ぎやへい本ノマをわづらひたまひ、てんやくいりやうをつくせ共、をちぎりけりすでに卅よ日に及たり、四天王の物共ちうやかんびやう仕る、少げんにみへさせたまひしかば、四天王をめされ思ふしさいの有、先方ゝもこよひはしゆく所にかへり、きうそくせよとのたまへば、いづれもかしこまつて御心にさはりあしかりなんと、御つぎへたつてをのゝきうそくしたりけり、かくて頼光只一人すこゝとしておはします、すてに其よもやはん斗の事成に、ともしびのかげよりも其たけ七尺あまりの大のほうし、するゝとあゆみよりいかにらくわう、心はなにと候ぞといふよりはやく、ちすしのなはをかけたたりけり、頼光御らんじさあしつたりと、まくらに有しひざ丸をするりとぬき、とびちがへちやうど切た、ひるむ所をひつくみつゝけさまにさし通し、ゑたりやをふとのゝしるこゑに、かたちさへてうせてんけり、四天王聞付はつと驚き、はせ來りこは

何事やらんと申上れば、頼光聞召かやう／＼とのたまへば、誠にあたりにちながれたりいづく迄かやるべきぞと、四天王の物共たいまつにひを付、ちすじをしたひて三重おふてゆく、程なくほつつきみてあれば、くらま山のふもとに大き成つか有、つかの内へち流れければ渡邊みて、ゑ、何物ぞと思ひしに、此内にすむ程のやつなれば、何程の事の有べきぞつかみひしげといふまゝに、四天王の物共たちかゝり、大りきにまかせつかを崩し、岩を引のけみてあれば、つかの内よりけしたる姿あらわれて、ちすじのなわをなげかくれば、四天王みてやあすいさんなり、さやうのてわざはつねの物にまなふでみせよ、きじんをもしたかへし四天王はくわぬぞと、まん中に取こめさんさんに切たりけり、さしもたけきへんげの物四天王に切立られ、ひるむ所をつふせ／＼ないたりけり、ついにへんげを打したがへ、たいまつにひをたてよく／＼みれば、其たけ七尺のつちぐもの、かしらにつのあつて、りやうがんは日月の如くかゝやき、さもすさまじきけしやうなり渡邊みて、ゑ、をのれ此ころ君をなやましたる、天ばつはやくもあたつて有物か

なと、てつぼうつらぬき、御所をさしてかへりける四天王かはたらき、あつはれ天まやくじんやと、みなかんせぬものこそなかりけれ

## 第二

頼光ちよくせんをうけいづの國へ下り給ふ四天王の人／＼はへんげをてやすく打取、いそぎ御所に立歸り、一々次第を申上る頼光御らんで、やすからざる事共かな、か程の物におそわれけるこそむねんなれ、方々さつそくかけつけ、したがへるこそしんびやうなれ、いそぎ大ぢにさらすべしとく／＼との御でう也、かしこまり候とてつぼうにつらぬき、侍共に申付六條川原へ三重さらしける、是は扱置かくて大りには、九月九日きくすいの御ゆふらん有べしとて、わかきくげてんじやう人、色よき花をたをり、既に御ゆふぞはしまりける、かゝりける所にいづの國のもくだい、北條の平四郎ときたい、はや馬にてはせ上りつゝしんで申上る、いづの國大嶋にきじんすんで、ゑんしうをかざりにたう國の人みんを、つかみ行事をびたゝしく、みな人なげきかなしむ事、國どのさ

わぎ此事に候と、大いきついでそうもんす、みかどを  
どろかせたまひ、きん中ひつそとしたりけり、時に中  
なごんす、み出、ばつぎのせんぎそこつの至に候へ  
共、きちれいにまかせられ、頼光に仰付られ候へかし  
と、そうもん有君ゑいふんあつて、さあらばめせとや  
かておくりちよくしを立らるゝ、らいくわうちよくに  
まかせ、さんだい有内よりのせんじには、いづの大し  
まにきじんがすみ、とう國のなやみと成、いそぎはせ  
下りたいしせよとのせんしなり、頼光ちよくめいか  
うむり、誠にたんばの國大系山の、しゆ天どうしたい  
じ仕て後、爰かしこにへんけ出来仕り候事、是一系に  
大系山のきじんのしよいにて候べし、いづくかわう  
ぢならねば、いかでかあまし申べきと、いそぎ御前を  
罷立やかたをさしてそ三重かへられける、やかたにな  
れば御子頼仲公、御しやてい頼のお公をはしめ、家の  
子らうとう召れ、今とそれかしきじん大じのせんじ  
をかうむり、いつの國へ下る也かゝるしせつに、必て  
うてきのげきしんおこる物なり、かまいてしよしに  
ゆだんなく君をしゆごいたされよ、扱きちれいなれ  
ば、四天王斗めしつれんと思ふが去ながら、かのしま

はふうははげしきかいゐるなれば、つわ物せう／＼め  
しつれんそれ／＼中みつ、すくれとの御てう也かし  
こまり候とて、しゆのながいたに人／＼のめうじを  
こそはしるしけれ、先一ばんに四天王はうしやうを  
はしめ、ひたの平わう山田もりもと、あらきおかざき  
みこし中もりいりへの冠じや、ぬまのけんしかんは  
ら藤太、しば田の十郎いきの八郎ちかなを、ゑびな  
のひやうへ介ざね、をきつのぎやうぶた、よし、此人  
人をさきとしてくつきやうのつわ物、五十よきぞし  
るしける、時に五人の子四天王がすゝみ出、なにと  
我々はめしぐなきか中みつきて、さればかやうの  
時けきしんおこる物なり、方／＼やそれがしはあと  
にのこつて、きんりをよくしゆごいたすべしとぞ申  
ける、其時金吉すゝみ出こは中みつどのゝ、おゝせ共  
おほへぬ物かな、わか君のおゆふちゝ共がゆうりき、  
天下にしらぬ物のあらざれば、てうてきとならぬ物、  
今此みよにはよもあらじ、しかればいつかちくさき  
事にあい、ぶゆふを人にしられんや、我／＼ちやく年  
の身として、君のしつけんのかうむりむなしく月日  
をおくりなは、しよ人かろく思ひなし、四天王が子共

とはいわれまし、かやうの事出来するこそさいわい  
 なれ、君こそなにとのたまふ共御へんは家のしつけ  
 んなれば御前よく申なし御とも仕べきやうに御取な  
 しこそ道成べきに、君たにとかうのういもなきに、  
 御へんちうにての御はからい、いらざる中みつの仰  
 やと、きばかみふんじかつてぞいたりけり、中みつ聞  
 て尤金吉の申ぶん、しんびやうなり去ながらせん年、  
 しゆてんどうじたいじの御時は、御家ひろしと申せ  
 共四天王の人々、い上六人にてたいしたまふ、此  
 たひは君おほしめすしさいあつて、かやうによかた  
 のつわ物をもせうくめしくしたまふなり、然ばそ  
 れがしも身ふしやうながら、しんかのかうをゆるさ  
 れ候へば、せひ御とも仕べき身にて候へ共、せん年も  
 さるしさいの候へば、あとにと、いまり申なり此中み  
 つが、ひとう成事は申まじとかく方々は、と、まつて  
 君をしゆごいたされよと、さもやわらかにぞ申ける、  
 時にはうめいさだかけすへ春申けるは、なにと中み  
 つとのせん年も、さるしさい有しゆへ此度も、御とも  
 なきとのたまふはしてせん年、いか成事あつて御へ  
 んも御ともなく、又我々迄とめたまふは何事にて

候ぞ、我々つね々そんなせしは、あはれことのいて  
 よかし御馬のさきにかけ出、ち、共かゝせし太刀  
 のかねをも心み、むしやぶりを御めかけ申さん  
 とをもひし所に、さへぎつてとめたまふ、とかくせ  
 んれいのやうす承其ほうの仰のとをりにしたがい申  
 べし、又れいなき事にむたいに、とめたまは我々  
 しやく年とはい、ながら、あし二本にても二つりや  
 うがんひらき、み、を持候へば、此大ぢの下をく  
 り、くもをかけたもせひ御とも仕らんと、口をそろ  
 へ申ける中みつ聞て、つ、とよりさればといわんと  
 する所に竹つなす、み出あ、しばらく、中みつ  
 との御まへにて有は、いかにわか物共中みつのせん  
 れいと、のたまふ事こそ尤なれせん年、まん中かうほ  
 んまの入道ついはつのため、さがみの國へげかうな  
 されしきざみ、ゆらのらいしんぎやくしんのくわた  
 て、君をなやめ奉りたると、ないく承り及たり御供  
 申も、とまるもみな是君のためなれば、とかく中みつ  
 とのにまかせ方々は、と、まつて帝都をしゆごい  
 たすべきが、かんやう也としづめける、金吉聞てを、  
 竹つなのふんへつ、日本一御とも申せは思ひよらぬ

本ノマ、

なんぎにうけてもいらざる物、とゞまればべちにく  
ろうもせず、君の御きしよくには入中みつどのにも、  
たんのふさせ跡先のとくあつて、なんぼうましかな  
あつはれさいかく人かなと、あさわらふていたりけ  
り、ちゝの金時こらへかねつツとよつて金吉をはつ  
たとにらみ、やあをのれさいせんよりも、是にて承れ  
ば御まへ共はゝからず、今のことばは何事を、いまた  
きのふけふのせかれめが、年よりたる中みつにこと  
ばをすごし、又竹つなの申されてう、一つとしてかけ  
たる事なきに、をのれがいぬちへ有がほに、人の事  
ばをあざむく事こそすいさんなれ、罷たてとぞいか  
りける、金吉はつとこたへてつべきをもくたくべき、  
しゝのはがみをひるがへし、ちゝのことばにめんし  
つゝしほゝとしていたりける、れいぎの程こそや  
さしけれ、君をはしめ奉り一ざの人々さしもあらし  
金吉が、れいぎの程こそしゆせうやと、みなゝかん  
したまひけるらくはうなのめに思召、わか物共が  
しんてい一しほもつてしうちやくせり、ちゝ共にお  
とるましき物共かな、げんしのはんじやうないうた  
かひの有べき、いかになんちら行もとまるももつて

は同ちうせつ也、たゞめんゝはていとをしゆごい  
たすべしとのたまへば、はつとこたへつゝしんでい  
たりけり、其時らくわう御さかづきを取上たまへ  
ば、中みつおしやくに罷立次第ゝにもりながす、い  
つれも引うけゝのふたりけり、せんしうらくはた  
みをなで地まんざいらくには命をのぶ、あいをいの  
松風さつゝのこゑをたのしむと、御かといでをい  
わいつゝ、扱人ゝを引ぐしいづの國へといそかれ  
ける、かのらくはうの御有様あつはれ天下ぶそう  
のめい將やと、みなかんせぬ物こそなかりけれ

### 第三

きよつなむほん附子四天王ゆうりき

かくて其後源のらくわうは、四天王をはしめ一き  
とうせんのつわ物、五十よきさも花やかに出たつて、  
いづの國しもたのうらより、大せん三ぞうからくみ、  
大しまさしてぞわたらるゝ、ことになみ風しづかに  
て、君をはしめ奉り一せんちうの人々、よろこひいさ  
む所ににわかにあくふうふき來り、なみをびたゝし  
くあらたつて、舟共のもやいのつな一どにばつとき

れ、みちんのごとくくだけたり、され共らい光の御舟  
 は佛神しゆごやまし／＼けん、なみ風にもまれた  
 よいける、しきりに大風ふき來り三重行へもしらず  
 ふきながす、みの行衛こそあはれなれ、是は扱置爰に  
 又くわんむ天王に、五代のかうゐんはりまのかみ、平  
 のきよひろがしやてい、さこんのだいじやうきよつ  
 となとて、じんぎをもわきまへぬぼうじやくぶじんの  
 ゑせ物有、びせんはりま兩國の大將として、ばんしう  
 むろ山にざい京す、したがふ所のらうどうには、ひら  
 ほしの一てき坊ほしのらん正坊、くろぼしのたんか  
 いくまぼし、こつせきをにはしのでんかい坊、あらこ  
 ぼしのせきざん坊みつぼしのうん三とて、大力の法  
 師むしやさるによつて、七ようのほしをかた取りきよ  
 つなが七ようむしやとは是也、時にきよつなかれら  
 を近付、聞ば源の頼光はきじんたいじのせんしをう  
 け、四天王もろ共にいつの國へ下ると聞、是ひとへに  
 へいけのうんをひらかんすいそう也、かれはだいだ  
 い家のかたき然共、頼光は天下のぶ將我はわづか兩  
 國の大將なれば、ぶせいたるによつてせひなくいか  
 りをおさへ、今までもすぎぬ此たびのるす、天のあた

へ成べしらいくわう四天王なきうへは、手にたつ物  
 はよもあらじいそき都へせめ上り、げんし方のやつ  
 ばら一々にけちらし、みかどをいけ取奉り諸國へく  
 わいぶんまはしなば、我も／＼としたがはんしから  
 ば頼光、とう國よりうつてのほらんひつぢやう也、其  
 時うぢせたを切ておとし、あはた口をあふてとし、す  
 まんのぐんひやうさしつかはし、ふせきた、かふ物  
 ならば、なにといさむ四天王也共、いかでかもつてた  
 まるべきやす／＼と打取、天下のあるしとならん事  
 なにうたがいの有べきぞ、方／＼いかにと申ける其  
 時七ようむしや、すゝみいで扱もいさぎよき御でう  
 かな、けんじ方のやつばらが、はんくわいがゆふりき  
 をはけましこくうむりやうにはたらく共、何程の事  
 は候べききんくわのあさ日ににたりいきをもたてさ  
 せまじいそぎ打立給へや、はやとく／＼とぞすゝめ  
 ける、きよつな大きによるこびさあらば打立て方々  
 と、ちう國にふれをなしつがふ其せ、二萬よき三重都  
 をさしてぞ上りける、此事かくれあらざれば、都にし  
 きの御所には中みつをはしめ、子四天王其外侍立を  
 めされ、ないげひやうでう取々也、中みつ申けるやう

いかに金吉、かやうの事もし出来いたすべきかと、さへきつて方々をとめ候か何と中みつがぐあんもちつとやうに立候と申せば、金吉につことわらい誠に中みつ殿は、物になれたる人かな今更思ひあたつて候、いそいでいくさのやういしたまへと、いさみすゝんで申ける竹つな申やうなにかたきを是へ近付ては、京中のさわぎと成べき間、道まではせむかつて然へきと申せば、中みつ聞て尤よきはからいとかく道迄出むかい、すいしく軍いたすべしとていとの御るすには、頼のぶ公とさだめよりなか公の御ともし、つかふ其せい一萬よき三重もみにもふでぞいそぎける、こまをはやめてうつ程に、つの國せがはのしゆくにて兩ぢんはたと行あふたり、たかいにそれとみるよりも三重ときのこゑをそ上にける、時のこゑもしづまれば、かたきの大將はぢんにこまかけ出し、只今是へ出たる大將はぐわんむ天王五代のかうゐん、さこのの大じやうきよつな也、らいくわうの一子頼仲に、げんざんやつとぞよばわつたり、中みつ聞てなにきよつなにて候か、御へんいらさるあくしんをおこし、かまいてめいと迄けんけをうらみたまふな、あれわ

か物共一人もあますな、うてやか、れとげちをなす、我もくときつさきをならべかけ合て 三重いくさは花をぞちらしける今はや兩はう共にさつとひいて、しばらくいきをぞつぎにける、かたきの方よりくだんの七ようむしや、一ようにいで立大をん上さだめてをとも聞たまはんきよつなかうけん、七ようむしやとは我く也、をとに聞へし子四天王はおわせぬか、我くかたちさきをうけてみよとよばわつた、時に五人の物共かけ出、七ようむしやのことはみみにかゝつておもしろし、のをみにまかせいで、候、たかいに一きつゝのゑらみ打かまいてびろうをふるまひたまふなと、さかたの金吉つツといで、一てきとむすとかみさうのうでくびをとつて、子四天王がゆふりき心みたまへと、ちうにさし上はるかのたにへなげける、らんせうすかさずむすとかむ、金吉につことわらいやさしの御ほうのふるまいかな、ほうばいのよしみにしでの山ちをともない行と、大こしにかけはたとなげのつかゝり、くびふつとねじ切、みかたのちんへぞ引にける、さだかけそばに有ける大せきをつ取、さあらぬていにてひかへたり、時にうん三

はしりかゝつてちやうとうつ、さだかげすさつてや  
 つといふて、打ければらつくはとなつてうせにけり、  
 でんがい是をみて一ぢやうばかりの、てつのぼうを  
 ひつさげ、かけいつるすへしげ心へたりとわたりあ  
 ふ、でんかいぼうをおつ取のべ、おがみうちになちやう  
 とうつ、ひつはつしてぼうのはしをむづと取、あつ  
 はれきりやうのほうしかな、御ほうににやわぬてつ  
 ぼう、それかしあつかり申さんと、ゑいやつとひき取  
 すかさずちやうとうちければ、かうべみぢんにくだ  
 ける、せきざんはしりよりける所を、ほうめいすか  
 さずむすつくむ、せきざん大ぢからと申せ共、ほうめ  
 いよろひのうはをびかいつかみ、だいぢへどうと打  
 付るだんかいてつせきこらへかね、大こゑ上て切て  
 かゝる竹つなみて、きやつはそれかしうけ取たりと、  
 二人の物にわたりあいうけつかへしつた、かいし  
 が、さしもにかう成竹つな大力に切立られ、ひたいに  
 あせながしける、され共かうなれば二人のかたき一  
 方へ切たて、ふんごうてすそをなぐたんかいもろひ  
 さ打をとされたぢくとする所をはらい切に、ゆん  
 でのそわへ切ふせてつせきとひつくみ、やあをのれ

いそぎめいとおもむき、八まんぢごくのあるじと  
 なれと、取ておさへくひふつつとねち切、あらしやう  
 しの御ばうたちのなれのはてやとにつことわらふて  
 たつたりけり、きよつなかなはじとにげゆくを、五人  
 のものともぼつつめ、たかてこてにいましめて、らく  
 やうさしてかいぢんある、子四天わうがはたらき、を  
 やにおとらぬまれ物やと、みなかんせぬ物こそなか  
 りけれ

#### 第四

頼仲中山さんけい附じゆんれい物語

そのゝちみなもとのより仲公、てうてきとならんき  
 よつなをいけ取、都へ歸らせ給ひよりのぶの御めに  
 かけたまへば、よりのぶなめに思召いそぎ<sup>わく</sup>りた  
 いらへあがるゝ、大りになれば一ノ次第<sup>り</sup>そうも  
 ん有、みかどゑいらんあつて頼仲をはしめ、子四天王  
 の物共いまだじやく年也といへ共、しんびやうに仕  
 つたる物かな、扱きよつなをいそぎつみにふせ、しん  
 さんのやすめ奉れとのせんじ也、<sup>り</sup>かしこまつて御前  
 を罷立、扱きよつながかうべをはね、六條川原に三重

さらしける是は扱置、いたはしや頼光は、おもはぬあ  
く風にふきはなされ、わつかにのこる物とはしう  
しう六人、風にまかせて行程に有しまにも付給ふ、人  
人よろこび舟より上りみ給ふに、いわをがゝとそ  
びへさも物すごきはまばたに、色くろきやせおの子  
つりをたれていたりけり、らくわうかれらに近付、  
こゝはいづくの國ぞととひたまへはしま人聞てい  
づのしほひがしまと申所にて候、方々はかせには  
なされ來とみへたり、そうじて此しまはごゝくなけ  
れは、た國より來る物命にもたんやうはなし、舟あら  
ばじきもつきぬ其内にいそぎ本國へかへりたまへと  
申ける、らくわう聞召さればこそとよ、舟をそんじ  
しよくもつつきはて、本國へかへるべきたよりなし、  
たい方々のはごくみをうけ、天のじゆんくわんを  
まつべし、ばんしはたのむと仰ける、しま人承りげに  
いたはしき御事かな、方々ばかりとおぼすなよ、む  
かしもためし有田村將ぐんとしひと、やらんも、風  
にはなされ此しまへなかれ來、かなしみのあまりに  
せんじゆくわんをんをみづから作り一しんふらん  
に、きこくの事をいのりたまふ、誠に大ひの御ちかい

に程なく國へかへりたまふさればとしひとよろこび  
のあまりに、弓とやをくわんをんのしんもつにこめ  
られたり、それよりして御しまのうしのしんとあふ  
き申とかたりける、らくわう聞召扱は此しまのう  
ち神はとしひとのこんりうかや、いざやさんけい仕  
き國の事をいのらんと、四天王もろともに<sup>り</sup>おくしん  
前さしてぞ參らるゝ、おまへになれば心しづかにき  
せい有、其よはおまへにこもらるゝ、頃はきさらぎ  
十五日月はくもひにすみ上り、あきのそらよりさや  
か也、らくわうかいしやうはるかに御らんすれば、  
なみびやう々としてきわもなく、心はそさはかぎ  
りなし、かゝるをりふしきがんのころかすかにこそ  
はをとつれる、らくわう聞たまひあれきいたる  
か四天王くもひをかへるかりだにも、をのがしやう  
じよを心ざし、さもうれしげにこゑたて、かへる心  
のうら山しやわれはいつしかふるさとにかへりうき  
をかたりてなぐさまん、かゝるうき身のありさまを、  
ふるさとにありしつまや子は、ゆめにもしらすある  
べきが、あらたゝさためなき我かみやと、心ぼそさは  
かきりなし、あはれ神のりしやうにて、今一と頼仲に

あふとだに思ひなば、かゝる思ひは、よもあらじあらうらめしのうき身やと、しばしなみだをながさるゝ、あまりのこの物うさに一れんのしをつらねたまひける、こよひゆふぶたりはしやうの月一せいのりやうれき、ちやうでんにもどるとくちずさみたまひ、われぢやくねんのむかしより、君をうやまひたみをなで、あやまるとがはあらざるに、かゝるなんぎのみとなりて、下とりだにかよわぬはなれしに、いつをかぎりときだめなく、むなく月日をおくらんと、こはそもなにのむくひぞと、しばしなみだにむせばるゝ、おにをあざむくものとも、みなくなみだをなかしける、されどもかなはぬ事なれば、さていとなみのたよりなければ、いにしへの花のたもとをひきかへ、御身をかいへんのおとなし、しうく六人つりをたれ、ぎよるいをとつてしよくちとして、つゆの命をおくらるゝ、しよじのあはれと三重きこへける、是はさてをき都にましますらいくわうの、みだいとこ此事ゆめにもしろしめされす、いかによりなにかきゝたまへ、さてもつまのらくわうは、いつの國へ下らせたまひ、ひかすもはるかに重なれとも、風の

たよりもあらされば、心ぐるしきあまりにやふつじんにきせいをかけ申せし也、ことに中山のくわんをんな、つまの御うち寺なれば、いさやさんけい申つ、御行すへをいのらんと、おもふはいかにとのたまへば、より仲聞召仰の如くけんせごしやうのためなれば、いそぎさんけいなさるべし、おりふし今はやまやまのはなもさかりに候へば、御心もはらしおはしませ、それがしも御とも仕らんと、はうへをともし子四天王を御ともにて、中山さしてぞ三重参らる、おまへになればわにぐちちやうと打ならし、おもふことはねんじゆして、さてしゆくぼうに入たまへは、じうじはなめによるこび、めつらしの御さんけいやと、やがてをくにせうし申さんかいのちんぶつに、こくどのくはしをとゝのへ、げにはるの一日はせんきんにもかへしとは、こじんもつたへをかれたりあらおもしろのがめやと、はなにこゝろをよせたまひ、きやうにせうじしばしながめておはしますかゝる所に金吉さだかげ、とあるこかげによもをながめていたりしが、こゝにとう國がたのじゆんれいとうちみへて、二人つれだちものがたりして通り

しが一人か申けるはあれに、まぐうたせ御ゆふらんあるは、らくわうのみだいきんだちにてあるとや、いたわしくもらいくわうはいづの國、大しまにてふう、にあいむなしくならせたまひしが、誠にそのなもたかき大將の、くちはてたまふいたはしや、なむあみだふつと、とふらいてこそとをりける、金吉さだかげはつとをとろき、ちかふつてなにとらくわうは、ふねをなにとあそはしたぞ、さん候いづの國しもだのうらより、御舟にめされしか、にはかにあくふうふききたりみなことぐくつかへしむなしくならせたまひ候、二人の物ともきををけし、はつとをとろきよくもしらせたる物かなと、いそぎ御せんにかかりいでいかにみだい、わかぎみさまわがきみや、ちゝともはかやうくのしだいにて、むなしくならせたまふよし、たいまいうけたまわつて候と、さしうつむいてなみだを、はらゝとながしける人々ゆめのこちにて、これはくゝとばかりにてしばしなみだをながさるゝ、おつるなみだのひまよりも、くどきごとこそあはれなれ、こはそも夢かあさましや、風のそよとふくをだにも、はや歸らせたまふかと心をつくし

思ひしに、しのみちこそはおゝかりし、こきやうをさつてあづまぢの、さもすさまじきかいていに、御みをしづめたまふ事、是はなにたるむくいぞと、たをれふしてぞなきたまふ、あゝさてあさましやさぞや御さいごの御時は、より仲やみつからをさこそこひしくおほすらん、御かといでのその日より君あんをんのそのために、まいにちくわんをんきやうをどくじゆせしが、御さいごをしらずして、けさまでいのり申せしが、かみならぬみのはかなき事よ、さぞや大ひくわんせをんおかしくおぼし候はん、のふわがつまかへさせたまへや、みほとけとりうていこがれなきたまふ、げに御ことはりとぞきこへける、ときにぢうじはたち出さてもくゝ、おぼしめしよりなき事いでき、御なげきのみちげに御どをり也、ことはりやとつれてなみだをながしける、おつるなみだをおさへ、もはやかなはぬ御事なれば、おほし召きりたまへ、そうしていきとせ本マいけるもの、たれかめつせぬ物の候べき、さんごくのきやうしゆりやうせんのしやかだにも、三みやうの月のひかりを、しやくりんのくもにかたし、たいしやく十せんの花のかたちも、くわんぎ

そのふの霜ときへをわんぬ、いわんや人間にをいて  
 おや、しがういそかるゝ、のかるべきあるいはやもふ  
 のくるしみうけ、又はかいくにをほれてするも、み  
 な是せんせのしくがうなれば、御なげきをやめられ、  
 御きやうやうをねんごろに御とぶらい候へと、さま  
 さまにけうけありければ頼仲聞召、誠にありがたき  
 けうけかな、去ながらまづあんしてもみたまへや、御  
 いでなされしより此方は、へんしも忘るゝにまもな  
 くせめて御とも

なみのあわと成ならば、かゝ  
 る思ひはよもあらじ、あらうらめしの我身やと、きへ  
 入やうになきたまふすがにたけきわか物共、しゆ  
 くんのかかれに、ちゝが事をおもひやり、あまるなみ  
 だの色ふかく、つゝむけしきもあらわれて、聲をたて  
 てそなくばかり、されども竹つなはすこしもなげく  
 けしきもなく、あららか成こそをあげ、ゑゝふかくな  
 るかたゝがふせいかな、心を鎮めてあんじてみよ  
 さすが天下の大しやうの、かいしやうにて御たかい  
 あらんに、そのかくれあるべきや、ことにとうごくは  
 のこらずきみの御下人なれば、ごんじやうせぬ事よ  
 もあらじ、それこじんのいわく一人きよをつたふは、

十人じつをつとふといへり、なんぞじゆんれいしき  
 のゆふことを、しやうにいたしとりみだしたるみく  
 るしや、さやうなるこゝろざしにては、かたじけなく  
 も、めいくんのしんかとはいわれまし、とかく都へか  
 へりうむのじつをきゝとけ、そのゝちあんひをさ  
 だむべし、はやとくゝといさめ申、みなゝ御とも  
 仕り都をさしてぞ上りける、かのたけつながしんて  
 い、いこくはしらすはんちやうに、たぐいまれなるゆ  
 うしやと、みなかんせぬものこそなかりけれ

## 第五

頼光きじんをうち都へ上ちくの事

いたわしやらいくわうは、物うきしまの御住ひ、あ  
 はれ<sup>おく</sup>なりける次第也、あまりの事のかなしさに、  
 百本のそとばを作り、思ひの色をかきつけて、あはれ  
 しんりよの御ちかいに、いつさがみのらうとうの、て  
 にわたしてたべやなむ八まんとときせいあり、かいし  
 やうはるかながさるゝ、こゝろのうちこそ 三重あ  
 われなれ、まことにぶつじんさんばうも、あはれとや  
 おほしけんさがみの國、大いそのうらへうちよせた

り、かゝりける所にみうらの平太夫ためかた、をりふ  
しかいへんのとをりしが、かのそとばを見付やあわ  
か物とも、いそばたにそとばのあるこそふしぎな  
れ、それこなたへと、らせみれば、一しゆのうたを  
ぞかきてあり、たれかしるはるかのをきになかれき  
て、しほひかしめてつきをみる、本ノマ、ゑいじみなもとのら  
いくわうとかゝれたり、みうら大ききおとろきさて  
はらいくわう、あくふうにはなされしほひがしまに  
ましますか、御有所をしらせんため、そとばをながさ  
せたまふかや、さてく御いたわしき事ともかな、い  
そぎ御むかいにまいらんと、こまにしらあわかませ  
つゝ、いづのくにへぞ三重いそぎけるいそぐにほど  
なくつきしかば、しもだのうらよりふねにめし、しほ  
ひがしまのあんないしやをめしぐして、かのしまへ  
いそかれけるしまにもなれば、やがてふねよりあが  
り、このへんにみなもとのらいくわうはましまさぬ  
か、みうらの平太夫御むかいにまいりたりと、大をん  
じやうにてよばわれは、人々ゆめのこゝちにてする  
するとはしりより、是はくそとばかりにてよるこび  
なみだはせきあへず、是を物にたとふれば、わうじつ

がやまよりいで七せのまごにあいたるも、これには  
いかでまさるべき、らいくわうなみだのひまよりも、  
われこのしまにあることを、なにとしてぞんじたる  
とのたまへば、ためかたうけたまはりさん候、すこし  
ようの事ありて、大いそのかいへんのとをり候へば、  
そとばのなみにうかみしを、とりあげみたてまつれ  
ば、まさしくきみの御しゆせきとみ申、をどろき入御  
むかいにまいり候と申あぐれば、らいくわうきこし  
めされ扱は、是よりながせしそとば御へんがてにわ  
たりけるよな、これひとへにぶつじんのりしやうな  
り、このうへはへんしもはやく大しまへわたらん、い  
そぎしんせんにまいり御いとまごひ申さんとて、人  
人を御ともにて御ほうせんにまいり、まことにふし  
ぎのたよりをうけ、二たひきこくいたす事ひとへに  
大ひの御じひたりありかたやと、こゝろしづかにら  
いはいしさてしま人をめされいにしへ、たむらとし  
ひとのこめられし、ゆみやを申おろしゑさせよくわ  
んをんの御くうでんに、いつのこうをたてまつると、  
やがて御はんをくたされける、しま人よろこびとし  
ひとのこめられし、しげどうの大ゆみをらいくわう

にたてまつる、らいくわうなのめならずにおほしめ  
 し、しんせんにむかいちやうだいあり、まことにふし  
 きのゑんにより、かゝるきたいのうほうのいまら  
 いくわうがてにわたる事、是くわんをんの御をんた  
 りそもこの弓と申せしは、とし人せんじをかうむり  
 たまひ、せいしうすゝか山のたてゑぼしといふ、八め  
 んきじんをいとめたまひしゆみぞかし、きつきやう  
 めでたきゆみなれば、きじんたいじせん事は、なにう  
 たかひのあるべきと、しま人にいとまこひ人々をと  
 もない、よろこびいさんでおふねにめし、大しまさし  
 てぞ三重わたらるゝしまにもなれば、ふねよりもあ  
 がらせたまひ、めんくゝものゝぐせられける、まづら  
 いくわたのしやうぞくには、あかじのにしきのひた  
 たれにひをどしのよろひに、おなじけの五まひかふ  
 とにくわがたうたせ、いくびにめしこがねづくりの  
 御はかせ、さてくわんをんのほうでんより申おろし  
 たまひける、しげどうの大弓にとがりや一てたばさ  
 んで、さきにすゝんでいたまふのこる五人の人々  
 も、思ひくゝのしやうぞくして、いさみいさんでい  
 てられける、ときにらいくわうためかたをめされ、き

つきやうなれば六人してうつべきなり、御へんはふ  
 ねにとゞまるべしとの御でうなり、みうらかしこま  
 りてせひ御ともとぞんずれども、御きつきやうと候  
 へば、おうけを申みうらはふねにのこりける、さて六  
 人の人々しまあがりかなたこなたとみたまふに、い  
 ぬいにあたつてまつ山あり、わけ入つてみる所に、さ  
 もすさまじきいわあな有、あたりですてしはつこつ  
 は、すこぶる山の如くなり人々こゝぞとうちうなづ  
 き、大をんあげいかにきじんたしかにきけ、なんじお  
 うぢにすみながらにんみんなやますてんばつ、いか  
 でのがるべしわれくゝたいじにきたりたり、ほんし  
 やうをあらわせと、こゑくゝにのゝしつたり時に内  
 よりも、大せきこぼくをなけいだすとみへしが、そ  
 らかきくもり大あめふり、いなづましきりにひかり  
 わたつて、はたゝがみなり 三重なりわたり、やまもく  
 づるゝばかりなり、されとも人くゝちつともさわが  
 ず、てにてをとりとくみ、四方にまたこぞくばつていた  
 る所に、いわやのうちより四めんくわつきがけんぞ  
 く共、てつぼうふつてかけいづる 三重こゝをさいご  
 とたゝかいける、五人のものどもわたり合、ひばなを

ちらしてたゝかいける、すゝみ出しあつき共、みなこ  
とくくうつたりけり、時にこくうしきりにらいで  
んして四めいわくつきはこくうんにうちのり、くわ  
ゑんをふく事すましかりける 三重したいなり、本ノマ、源  
此よし御らんじて、なむ八まんとくわんわんしよつ  
ひきひやうといたまへば、てこたへしてはつしとた  
つひかりわたつて、いぬいにどうどをつる所を、四天  
王すかさずさしかゝつてさんくきにきつたりけり、  
きじんくびうちをとせば、こくうんはれてのとけき  
そらと也にけり、かゝる所にためかたぐんひやう共  
を引ぐし、御むかいに参りたり頼光なために思召、き  
じんのくびを取持せ、都をさしてぞ 三重上られける、  
都になればすぐに大りへさんだい有、きじんのくび  
をさゝげ、大しまのてい其上しほひが鳥の事迄も、み  
なこくくくそうもん有、みかどゑいぶんあつてさ  
やう成なんきをうけ、さぞや物うく思ふらん今には  
しめん事ながら、本ノマ、此度のはたゞき一系にぎよかんか  
ぎりなし、其ちうかうに本領にあいそへ、みのあ  
ふみ兩ごくをゑさすると、あんどの御りんし下され  
はうせうを、はりまのかみになされ、わたなべのつな

はむさしのかみ、きん時は三川のかみさだみつはと  
うくみのかみ、すへ竹はするかのかみになされ、か  
ずの御所領下されける、扱みうらの平太夫をくわん  
八しうのむしや所に仰付られ、おのく御前の罷立、  
頼光御所へ入らせたまひ、人々にたいめん有御よろ  
こびはかぎりなし、せんしうばんせいめでたき共中  
々、申はかりはなかりけれ

寛文二年壬寅正月吉日

山本九兵衛板

天子四北國合戦

第一

それかんのかうそは、きほわがしよくろうをつたへて、はくじやのれいをきり、てんのなをいだすことをゑたり、しんのしくわうは、けいが、ひじゆつとへ、ゑんしのめいをたつて、せいめいのうんの、いだす事をまつとうす、是みなくにをさむる、ひじゆつくらいをたもつともいなり、もつともしやうくわんせらるへきは、とうけんのたぐいなり、其頃天下のぶしやうは、せいわたんわう代六のわうじ、さだすみしんわうの御子、六そんわうつねもとの其ちやくし、たゞのまん中のちやくなん、みなもとのらくわうとぞ<sup>上</sup>ふ申ける、然るにらくわう、御ち、まん中公を、はじめてげんじのうちをたまはりしより、天下をしゆごしたまひける、扱御しやていかわちのかみよりのぶ公は、ほつこくのおさへとして、ゑちごの國にきよじう有、しかるにらくわう、すどのげきしん、つえば

つし、じんぎをまもり、四かいをたな心におさめ、其身の御いせいさうもくをも、なびきかたを<sup>り</sup>おくならぶる物もなし、有時大將御子、頼仲公<sup>り</sup>四天王の人、其外侍をめされ、我まん中公の跡をつぎ、天下のぶ將かうむり、かみをうやまい、にんみんのあはれむといへ共、ともすれば、けきしんに、さへられ、あやうきなんに及事、すかとなり殊に、さんぬる長わの頃、いづのおきにふきはなされ、又もやていとにかへらんことは、中々ふじゆうなりしか共、誠にふしきのたよりをうけ、二たびきこいたす事、是ひとへに佛神のりしやうたり、なかんづくすどのきじんしたがへしこと、ひとへにとうけんのいせいなり、かゝるきたいのちうほう、其ま、置あしかりなん、吉日をゑらみ八まんをくわんじやうし、しんりよをすゝしめ奉り、たからをきよめおさむべし、いそきかんぬしときやすをめせとの御でうなり、畏まつてやがて時やすをめされ、いかに時やす、たからを八まんのほうでんにおさむべし、それゝとの御でうなり、かしこまり候とて、一々次第に三重かさられる、はなやか成ける有さまなり、其後かんぬし時やす、上だんをあら



しゆゑんぞ、はしまりける君をはじめ奉り、をの／＼きやうにじやうじ、思ひ／＼のつらねうた、誠にめでたき有さまやと、一ざの人々とうをんに、君か代はちよにや、ちよを、さ、れいし、のいわをとなりてこけのむす迄、かはらぬみよこそめでたけれど、うたひおさめ、みな／＼おいとまたまはつて、しゆく所／＼へ三重歸られける是は扱置、爰に又でわの國、はぐろ山に、ほんまの大せん、てつしゆんとて、おごり大一のあくそう有、かれがせんぞをたつぬるに、さんぬるしやうりやくの頃、むほんのおこせし、ほんまの入道たむねが次男たり、ち、ほんまの入道うたれし頃は、わづか十一さいにて在りしが、はぐろのべつとうを、たのみいたりしが、かくもんに心を、入すあわれ、天下をくつかへし、ち、ほんまのはしをも、きよめ、此さんねんのはらさんと、つね／＼あいとものふ物までも、かくもんを打すて、きうせんに心をうつす、あくそうより外はたじなし、さればるいをもつてあつまるならひ、かれにをとらぬあくそうには、まづ一ばんに、はくさんのうんりやうぼう、たて山のがんせき、はやかはのくわいりん、にわう山のゆふけい、つ

ち風のよくてん、とてもふはふそうのあら物なり、かれらを一きとうせんのらうどうとなづけ、なさけをかけていたわりしが、其外のあくそう共をまねきよせ、いかにかた／＼扱もみなちのらいくわうは、四天わうがゆふりきをはげみ、四かい我ま、成とふるまふとや、ちちをうたせ、日頃さんねんにおもふなり、此たびうつてのほり、日頃のむねんのはらすへしたとわば、じんづうをへて、かうもうがいかりをなす四天わうなればとて、方／＼かゆふりきにはよもまさらじ、又それがしも身ふしやうながら、頼光にはをとるまし、然上は、かくひかげ物となり、くちはてんむねんなり、方／＼の心を合、一せんはげみたまはい、きへいを上、一もんのついせんに、たむけりうしんひらく、物ならば方／＼には、かわふんのをんしやうを、あておこのふべきが、此ぎいかにと仰ける、其時くたんのあくそう共、このむ所と悦、誠に仰のごとく、かくひかげ物となり、あたらうてのゆふりきを、人にしられず、し／＼けた物を、おつつかみ、さき、なにのやうには、たち申さん、あのめんざいのごとく成、こくはじやばらを、四天わうなぞとはいわ

せ、ぬるこそむねんなれかく我々がごとくに、あはれ  
事のいでよかしと、存せし物よにおゝくはびこり申  
べし、去ながらときのけんにおそれ、四天王風に、ふ  
き付られ、其まゝ有物を、かるべし、はやうつたちた  
まへことに、とう國には、こにうとうの御をんゑたる  
物あまた候べし、然る間はたを上、たまはゞ我もゝ  
としたかわん、其せいをめんをつし、いそぎ都へせめ  
上、じつふをたいしたまふべし、我等も年頃の御をん  
に、一めいをなげうつて、をとに聞へし、四天王うと、  
ひつくみ、げんざんに參らん、はやとくゝとこそ、す  
すめける、すてにひやうでうきはまりける、爰にて  
つしゆんが、めのとかなざはの、ぎうぶみちふさは、  
しんぎたいしき物成か、一まをへだて此よしを聞よ  
りも、あいのしやうしをさらりとあけ、てつしゆんの  
まへに、かしこまりなみだをはらくとながし、扱も  
扱もあさましき、思召立かな、まつあんじてもみたま  
へ、らいくわうと申は、忝も六そんわうのしそんとし  
て、天下のふ將にそなはり、其身ぶんふにましますゆ  
へつどのげきしんついばつし、あまつさへ國どのわ  
すらひとなりしきじんをも打したがへ、みかとの御

きしよくあつうましまし、殊に四天王の物共は、ほん  
人にてはなく、其外の侍に、一きとうせんならぬはな  
し然るを今わずかのせいにて、天下をくつかへさん  
とは、なかゝおもひもよらず、たいこのぎにおいて  
は、おほしめとゝまりたまへと、りをつくして申け  
る、其時たて山かんせき申けるは、こはみちふさの申  
でう共おほへぬものかな、其頼光四天王なればとて、  
人げんにかはりは候まし、又われゝもにんげんな  
り、たととはゝてんまやくじんなればとて、何程の事の  
候べし、われゝに御まかせ候へばはやうつたちた  
まへと、手に取やうにぞ申ける、みちふさ聞て、おゝ  
ゆゝしき今のことばかな、尤はたを上たまはゞ、こに  
うとうの御をんゑたる物、御みかたに參へし、たとへ  
ば千ぎまんぎ、來ればとて、なにのやうにたち申べ  
し、此みちふさがひとう成事は、申まじいかにわか君  
さま、誠にすねんがくもんんなされ、御心も柔らぎ、ち  
ちははの御きやうやうなさるべきと、思ひ悦ひ入候  
所に、かくあく心のおもひたちたまふ、是もつての  
ほかのひが事なり、たいあくしんのふりすて、しゆつ  
け、どうしんましゝて、御一もんの御とふらいこ

そ、みち成へけれ、このぎにをいておぼし召とゞまり  
たまへと、なみだを流し申ける、てつしゆん、大き  
にいかつて、やあをいにほれたか、みちふさ、おのれ  
さやうのをくびやう物と、しらずして、付そいたりし  
くちをしや、なにとちりやくをめぐらし、ゆふりきを  
もつて、たゝかはんに、など天下をくつかへさでをく  
べきか、うんは天にあり、ちからはむねに、有ぞかし、  
さきもしれざる、ごしやうさた、をくびやうものゝく  
せとして、をのれが心にあはせ、人までせうするはら  
たちや、だいじのいくさの、かどんでに、さきをから  
す、ぐにんめをみれば、なかゝゝむねんなりと、とび  
かゝりくびふつつ、とねぢきり、をゝいくさのかどん  
でに、九萬八千のいくさかみのちまつりにかどんで  
よしとよろこび、いそぎ打たて物共とて、一々ふれを  
なし、しようう人を、かたらいつがふ其せい二萬よ  
き、まづ是よりも、ゑちこの國へをしよせ、よりのぶ  
を打とり、そのゝち都へのぼらんとて、しあんくわん  
ねん、三月五日でわの國を、うつたつて、ゑちこの國  
へむかはれける、かのてつしゆんが有さま、すさまし  
かり共、中ゝ申斗はなかりけれ

## 第二

### ほんま大せんむほんの事

なをもこの事かくれなく、ゑちこの國に聞へしかは、  
よりのぶの御まへには、ふじはらのなかみつ、同ちや  
くしなかひでを、はしめ、家の子らうどう、めされ、ほ  
んまの大せん、ぎやくしんくわたて、きんへんの侍  
共、大かたかれに、したがつとや、しかれはみかたこ  
せいにて、いくさにおよんでは、中ゝかのふべきに  
はあらね共、大將たるべき身が二せんもおよばず、を  
ちゆかんも中々いきたるかいあるまし、しよせんか  
たきをまちうけ、はなゝゝしくいくさして、うちしに  
せんより外は、また二つ共、あるまじきは、方々いか  
にと仰ける、何れもはつと答へ、つゝしんで、いたり  
けり、其時中みつ申けるは、去ながら此内に、都へち  
うしんいたさるべき、人はなきかと申せば、しよさふ  
らいきくよりもこは、なかみつの申されでう共おぼ  
へぬものかな、いくさもいまだはじまらず、とこ  
うの、やうすもしれざるに、何をせうこに、都へはのぼ  
るべき、まつかたきをまちうけ、一せんも、二せんも

はげみそのうへにて、せんぎしだいに、都へのきたはしかるべしと、みな一どうに申ける、なかみつにつこと、うちわらい、おふたのもしき、しよぞんかな、かく申せしも、方／＼の心をひきみんためぞかし、しんびよう／＼とぞ申ける、なかひで申けるは、さあらばかたきよせぬ、其内にみだいわかきみをいつかたへも、御あづけなされ、心安くい／＼さなさるべしと、申上るよりのぶげにもと、おぼしめし、いかになかみつ、それ／＼はからへとの御でうなり、かしこまり候と、さたけの五郎國しげを、ちか付御へんは、みだいわかぎみを御ともし、しなの、國へんみの介とのまてをち行たまへ、くにしげきいて、いやそれかしはあとにのこり、御せんとをみるといけ申べし、いつれのかたへも仰付られかしとそ申けるなかみつ重ねて申やう、いかにくにしげとかふいたすも、みなこれきみのためぞかし、かくいふうちにもてきにとりこめられてはせんなし、へんしもはやくとく／＼とさいさんしいていさむれは、ちからおよばず、きみに御いとま申あげ、人々にいとまをこひ、みたいわかきみの御とも申<sup>り</sup>おくしなの、國へそ、おちゆきける、よりのふ

本ノマ、な、めに、おぼしめしいかにめん／＼、てきの大せいにみかたをくらぶればきう／＼がもう、大かいの一てき、かのふべきには、あらねども、さふらいは、命よりなこそをしけれふかくを取なかつ／＼、せいめいあきらかに、かうだいにといめよと、御ぎをたゝせたまひける、なかみつ承り、御まへをまかり立いかにかた／＼みかたはたといふせいなり其のかれぬところをよくしり心ざしを一つにし、一きとうせんのゆふしなり、いさめや／＼かたかた、かくいふとても、あまりにはやり、きとをそこつにはなれ、たせいにまかれいぬじにすなどつとをめてきつとかけ、もみたて／＼、すきをあらせつてすてよときこそうつれこなたと、大門小もんさしかため、ゑびらやなぐいおつとりそろへ 三重よせくるかたきをまちいたり、あいもすかさずかたきのせい、とうざいよりも、取まき 三重ときのかゑをそ、あげにける、時のこゑもしづまれば、なかみつやぐらにはしりあがり、たゝいまこれへよせられし大しやうの、けみやうはなにと申ぞや、うけたまわらん、そのときかたきの方より、まつくろに、よろうたる、むしや、一きこまかけ出し、

こともおろかや、さがみの國のちうにん、ほんまのに  
うどうの、二なん、ほんまの大せん、てつしゆんにて  
わたらせたまふ、おや一もんのついせんのために、き  
へいを上られ候、いそぎはらをきるべしと、ゆんつへ  
すかつて、ひかへたり、なかみつ、からくとうちわ  
らい、さてはてつしゆんにてありけるか、御へんはぐ  
ろさんにかくれ入るとは、ききもないくしろしめ  
されて、有けれ共、おとこ、やめ、しゆつけになりしう  
へは、いのちをつがせ、おや一もん、あとをもとはせ  
んと、しらす顔にて、ましませしに、ありかたきとは、  
おもわすし、あくそうをたて、國どをなやますおごり  
物、あれ一人もあますな、うつていでよとげぢすれ  
ば、われもくくと、きつて出、三重いくさは花をぞちら  
しける、いくさなかばの事成に、かたきのかたより、  
其たけ七尺あまりの、大のほうし、くろいとものよろひ  
をき、てつほうをつえにつき、我におとらぬあくそ  
う、二人あいぐし、た、今すゝみいてたる、ほんま大  
せん、てつしゆんの、こうけんつち風の、よくてんと  
は、それかしなり、しやうの内にも、われとおもわん、  
人あらばかけよ、てなみをみせんと、はうじやくぶじ

んに、申けり、ときにじやうのうちよりも、花やかに  
よろふたる、むしや三きかけいで、ものゝかすには、  
あらねとも、かく申はふじわらの、なかみつかちやく  
し、ふじわらのながひで、のこり二人は、五とう源五、  
ひらの、九郎とて、何れもよりのぶの、らうどういざ  
まいり候と、ごとう源五、ひらの、九郎、きつさきを  
ならべうつてかゝる、かたきの方にも、二人のあくそ  
う、わたりあい、さんく切結ぶ、源五、ひざぐち、  
わられ、たちくんと、する所をよく天、てうど打、らつ  
くわとなつて、うせてんけり、さきにすゝみしあくそ  
う、ゆんてのうでくび打をとされよろくと、する所  
を、中ひで、おがみ打にてうと切、ひらの、九郎も、打  
じにす、くだんのほうし引所をなかひではしりかゝ  
つてゑしやくもなく、打程に、こしのつがいを、切放  
す、よくてんこらへかねてつほうひつさげ、てうど  
打、さくりと、はづしぼうのはしを、おつ取、ゑいやゑ  
いやと、ねちあいし、さしものかなぼう中より、ふつ  
つとねちきつたり、我も人もうんのきはめはこれ迄  
と、押ならべむんすつくんだ、くんだかおのこ、くん  
だかほうし、めに物みせて、くれんとて、大わたしに

取てなげ、のつかゝりくびふつと、ねち切、此年頃  
おにかみのやうに聞へしつち風の、よく天を藤原の  
中みつか、ちやくしなかひでなり、年つもつて廿一、  
軍はかうこそする物よ、かゝれやかゝれと、よばわつ  
て、本ちんさして引かへす、けふの軍の花成はと、み  
なかんせぬものこそなかりけり

### 第三

頼のぶかゝの國へ落給ふ井みだい道行

かくて兩ぢん、たかいに入亂れふせぎたゝかふとい  
へ共、かたき大せいみかたは、ふせいの事なれば、皆  
ことゝく打たれ、かのふべきやうなかりけれ、大將  
よりのぶ公、諸ぐんせいをめされい、かにかたゝ、  
かくては此じやうたもちかたし、一ほうをうちやぶ  
りて、かゝるちせんのかたへきりぬけ、はくろくとう  
のせいを、もやうしかさねておしよせ、ほんいをたつ  
すへし、されば大てきをやふるには、ようちにしくは  
なし、ちぶんのはからい、おしよせよ、中みつ承り、あ  
つはれよろしき、御でうかな、たれもかくこそ存れ、  
さいわいこよひは、あめ風しきりにして、くつきやう

のをりからなり、扱よはなん時ぞ、ねこくばかり、時  
こそよけれ、はや打立物共と、てんでにどうのひよう  
いして、山といわば川とこたへよと、やくたくししの  
ひゝゝに、しろをいて、一ぢんにをしよせ、てわの國  
のちう人あきたのきやうぶが、やくしよにひをかけ  
どつとおめいて、かけてひ花をちらして三重たゝ  
かいける、すゝみ出しやつばら、みなことゝくきり  
ふせ、あるいはくび二つ三つ、太刀につらぬきかけ出  
る、物も有、又はてをい、し人かすしれず、のこりしや  
つはら四方へばつとおつちらしじやうの内へさつと  
引、みかたのせいをみたまへば、わづか五十きばかり  
のこりけるうちじにせし物、かんがへみたまふに、ふ  
ぢわらの中みつを、はしめ、廿七きうたれける大將御  
らんじ扱もゝ中みつはうちじにして有けるかや是  
よりのぶがうんのきとおぼへたり一きとうせんとた  
のみかけしにやんみゝとうたれけるかやあさまし  
やかくいゝ、かいなくもうなるべき物にはあらざる  
かうんめいつきはてうたれけるかやはかなやとしば  
しなみたをながさるゝ爰に中みつかちやくしなかひ  
てはちゝがさいごにとはうにくれていたりしかしや

く取なをし申けるはそれかしはかたきのぢんばへ参り  
おやにて候中みつかしがいをもちねおやのきやうやうにうちしにいたし申べしうゝは三世のきゑんと承らいせにてかならず御めにかゝるべしこんじやうの御なごり是までとかけいつる人ゝとつておさへまつしつまりたまへとせいしけるかゝりける所にしたのかたのとてよりもとひをりしつゝときたるをみれば中みつなりきみをはじめ人々は是はとばかりにてよろこびなみをながさるゝ大將御なみだのひまよりも誠に中みつはなき物とおもひしに二たびあいけるうれしさよ扱たいいま迄なにとてあとにのこりて有けるそ中みつ承りさん候こよひおしよせ其まゝおちゆかん事あまりさんねんにぞんじいかにもしてかたきてつしゆんめをうちとらんと心がけあとにのこりさまゝちりやくをめぐらし候へ共かたきのやうじんきびしくなかくゝ心にはつせずたゝかへらんも口をししく存愛かしことみまわりし所にいちんの大將あきたのぎやうふかなたこなたとせし所をくび打をとし其外のやつばらあたるをさいわいことゝくきりちらし是まで参候なりかたきの

やつばらこよひのよ打にどうてんし愛かしこといたすへし此ひまにすこしなり共おちのびさせたまふべしみをまつとうしててきをほろぼすをこそめい大將とすはやとくゝとすゝめ申せば頼のぶげにもと思召御ぎをたゝせたまへばなかつはしりまいり門々をかためうらのもんより君を出し奉り打のこされしぐんびやう共い上卅七き御馬まはりにひつそうてよはにまされて城をいてかゝの國へと三重おちらるゝすでに其よもあけ行ばかたきの大せいおしよせ時をとつとぞ上にけるされ共じやうにはおともせず其時てつしゆん申けるはやせんおち行てもや有らんとへしろにこもる共何程の事か有べきぞたい一もみに打つぶせとさいをあげぢずれば我もゝとみだれ入され共をち行たることなれば一人もなかりけり扱はおち行て有けるよなまづいくさのかどんでにきつきやうめでたき次第やとくがみのじやうをのつとつてよろこぶことは三重かぎりなし是は扱置爰にあはれをとゝめしはよりのぶのみだい所やわか君にてしよじのあはれをとゝめたりやうゝやかたを立出て人めしのびのたびなればいやしきしづのめにさまを

かへわかきみをめのとにいだかせたまひつゝふしす  
げのおかさでかをかくし國しげにしゆごせられふし  
なにのみ聞ししなのちはそなたのそらぞと思ふ心を  
たよりにてたどろ／＼とたまほこのしらぬ山ぢにま  
よひつゝつまのゆくへをみもわかすいまだふみもな  
らぬくろつちをわけてのぼるこそ物うけれあま  
のことの物うさに跡立かへり打ながめあゝ扱物うや  
我かつまはなにとかならせたまはんと心ぼそくも打  
ながめ泪ぞ道のしるべにてまよひたまふぞあはれな  
れたま／＼こととふ物とてはそらにさ口たるさるの  
こゑみねよりなかれておつる水のをとしかのこゑか  
すかにて又あきならぬ道のべにほたるかすかにとび  
つれてまよう心のやさしやなむかふをみればしづの  
さとはらにしほやのけふり立ひやう／＼としてき  
はもなく心ぼそさはかぎりなしとゝ物うきをりか  
らにみやまからすのこゑ立てなくにつらさやまさる  
らんやう／＼行ば今ははやゑちごしなのゝさかい  
成くまさか山に付たまふいたはしやみだい所此頃の  
うき思ひたびのつかれにや御心もよからすしたゝぼ  
う／＼となりたまひあゝくるしやいかにめのと水は

なきかとのたまひてと有こかげにひれふしたへ／＼  
にみへたまふめのとをとろきそれ／＼とあれはく  
しげ心へたりとはるか谷にさがりかなたこなたと  
たつねけるあらいたはしやみだい所次第に心もよ  
りはてやあめのはいづくに有ぞこなたへ來れとの  
たまへば御まくら本に立よりいかにや御心はなにと  
ましますそいかに／＼と申けるいたわしやみだいか  
すか成御こゑにて此ていなければわらはゝむなく成  
べきは其おさあひものをこなたへ參らせよとやうや  
うおきなをりくるしけなるいきをつぎやあたわかよ  
わかよ母はめいどの旅におもむくなりおことせいじ  
んいたしなばあと思ふてゑさすべしか程うすきゑん  
成とはかぬておもわざりし物あゝなごりをしの此わ  
かやあゝらこいしの我かつまやいかにめのと此わか  
をばんしはたのみ申なりよくもりそだてゑさすへし  
せい人ずるをみとゝけすかく成ことよしなやとす  
がり付てぞなきたまふ是がさいごのことばにてつい  
にむなく成たまふめのとおどろき御しがいに取つ  
いて是は／＼とばかりにてしばしきへ入やうになき  
いたりおつる泪のひまよりもこほそもゆめかあさま

しやのふいかにみだいさまわか君やわらはをばふり  
すていづくへゆかせたまふぞやわらはもつれてゆき  
たまへとよべとさけべとかいぞなきなになりなん  
かなしやとしばし涙をながしけるいたわしやわか君  
いまだ三さいにもなりたまはねばなにのよしみもし  
らすして母の御かはゝをしなでさせたまひわつとさ  
けばせたまふにぞいと心はみたれつゝせんごもし  
らすなきいたりかゝる所に國しげやうゝみつを取  
もとめ歸りけるがなげきのこゑを聞よりもはつとお  
とろき立よりみてあればはやこときさせたまひこ  
はなむ三ばうかなしやとたをれふしてぞなくはかり  
やうゝ涙をおさへ御そうかうをみてあればやんこ  
となき御かはばせさなからねむれる花のことくなり  
なにが此頃ならはせたまはんたびのそうさぞやくる  
しくおぼすらん扱ゝ御いたはしき有さまかないか  
にめのともはやかなわぬことなればせめてまつこの  
水をたむけられよめのと此よし聞よりもなくゝわ  
か君をいたきみつを持今まではさり共聞召ざらんと  
のたまいし此水はやまつこの水になりたよなのふい  
かにみだいさまたゝ今の此水は國本におわしますち

ち母のたむけの水にておはしますよきにうけ取たま  
ふべし又此みづは御つまのよりのぶ公扱又今上る此  
水はたまわか君のたむけの水よきにうけとらせたま  
ふべしおゝそれなから此みづはわらは國しげ參らせ  
候なれあゝ扱御いとふしき有さまかなとこゑを上て  
ぞなくばかり本ノマ國しげ涙のひまよりも今はなけきか  
なわぬ事なれば御しかいをかくし申べしそれかしは  
さとへゆき御さうをたのみ參るべしとひなやをさし  
てぞ三重いそぎけるかゝるおりふしいづく共なく御  
そう一人來られ扱もふびん成事共かないづくいか成  
國の人やらんめのと承りさん候こきやうは都方の物  
成がさるしさいの候て是まで參りかゝるほんぎに及  
候あはれ御しびにかけをかくしてたびたまへと  
みたをながし申ける御そう聞召扱もいたわしき事共  
かな去ながらいまだじやうこう來らねばそれかした  
すけゑさせんとくわいちうよりも御くすりをとり出  
し口に入させたまへば其まゝ御めをひらかせたま  
ひやれめのと玉わかはなきかとのたまへばののさ  
るこび是ゝ御らん候へと御力を付けければゆめのさ  
めたるごとくなり人ゝよろこひ御そうにむかひ手

を合らいはいしておわします其時御そうわれをたれ  
とか思ふらん我なか山のくわんせをんなりとひかり  
をはなつてうせたまふ人／＼よろこひ御あとをらい  
し扱も／＼かたしけなやと涙をなかさるゝかゝりけ  
る所に此へんにすまひする物共成がよとう山だちし  
てとせいをおくる三人打つれ此有さまをみるよりも

扱も／＼よきさかて是に有むばいとらん物をやと我  
も／＼と立よりなさけなくもはぎ取けるみだい此よ  
し御らんじてこはなさけなの次第哉やう／＼心を取  
なをし有けるをじやけん成人々やとこゑを立てぞな  
きたまふ中にもあら五郎是をみてやおおのれはたか  
こゑたつる女めとはしりかゝつてたぶさを取すでに  
くびをかゝんとしたりし所へ國しげ大いきつて歸  
りしが此よしをみるよりもなむさんぼうはしりかゝ  
つてこかいなをむすと取やあをのれは何物なればか  
くろうせきふるまふぞやといふよりも早く取てふせ  
くびふつつとねぢきり立あからんとせし所を二人物  
かけよる所を國しげ心へたりとゆんでめてよりひつ  
つかみおのれぐにんなつのむしとんでひに入とはお  
のればらが事成へしいそきめいどにおもむけと二人

共に取てふせくびふつつ／＼とねぢ切みだい所をさ  
きへたてよろこひいさんでしなのゝ國へといそぎけ  
るかの國しげが有さまはんくわいもかくやらんと皆  
かんせぬ物こそなかりけれ

#### 第四

頼光よりかせい井子四天王馬をろへの事

かわちのかみよりのぶ公人々にしゆごせられいそか  
せ給へば程もなくかゝの國はやしのひやうへがりおく  
たちにご付たまふひやうへ立出めづらしの御下かう  
やとう國よりげきしんおこり君をなやめ申とほのか  
に承りなにとかなされ候をと心もとなく存せしによ  
くこそ來らせたまふ物かなとをくにしやうじよきに  
いたわり奉る頼のぶなのめに思召人／＼をめされ我  
此所に有事を都へしらせ然るべきかとのたまへば中  
みつ承りぎよいまでも候まじはやとく／＼と申上る  
さあらはとのたまひてみづから御しよをあそばしも  
り山に下されけるかしこまり候とはたせ馬にうちの  
りて都をさしてぞ三重のほりける都になればすぐに  
御所へあかりひらいのほうしやうをもつて御しよ

を上る頼光御らん有に其じやうにいわく今どほんまの大せんぎやくしんをくわたてとう國のしよ待かれにしたがひ大くんにておしよせすでにいくさに及候みかたのつわ物ぶりやくをめぐらし候といへ共たせいにかこまれわつか卅七きに打なされかのふべきやうなく候ゆへむねんなからもしやうをひらきかゝの國はやしのひやうへかた迄おちのび候あはれねかはくは御かせいにあづかり今一どかたきついうせしめほんいをたつしたく候はおはんぬぢあん元年三月下じゆんかはちのかみよりのふしん上源の頼光公へとひけんあつて頼光大きにおどろきいかに方々是をみよ其てつしゆんとやらんめははぐる山に有とはないく聞つれ共おとこをやめしゆつけすると聞からに打すて置たりしがゆだんたいてきとはかやうの事にて在けるぞ此上はへんしもはやくはせむかいよりのぶにかせいすべしういせよとの御でうなり何れも畏まつて候と申所へびつちうの人ひろせの源太はや馬にてはせのぼりぶせんの國のちう人うきすのはんぐわんときうしきやくしんをくわたてちんせいの物共一かうかれにしたがいさいかいどうを切

したがへさんぬる十六日に四國へわたりいよの國にたなふのしやうをせめおとしちう國へせめわたり候よし聞へ候いそぎ打てを下され候へと大いきついでごん上す君をはしめ奉り一さの人々おどろきとう國はつ國をむく所に又さい國にげきしんおこる事こはいか成事やらんとないげひやうでう取くなり其時ひとりむしやすみいでかやうに國くそうとう仕る事ゆゑしき天下の御大じいそぎぐんせい御てわけ然るべしと申上る時によりな公すみ出此度はつ國の打てにはそれがしに仰付られ候べしわか物共を引くしとう國のけうどうを一ついとう仕へしとつしんで申されける頼光聞召いしくも申て有物かなさあらはぐんせいのてわけせんまつほつ國の打てにはよりなかを大將にて千四天王むかふべし去ながらかの大せんはぶんぶ二たうの物ときいて有わか物ばかりは心もとなしわたなべをあひそへんみのあふみ兩國のせい二萬よきにてはつかうせよ扱さい國のうつてには公時さだみつすへ竹雨三人大將にて津の國いづみかわちのせい二萬よきにてむかふべしひとりそれかしはていとをしゆごいたすべしとの御て

うにてすでにひやうでうきはまりをの／＼御せんを  
まかり立いそきやういせられけるかさねて大將わ  
たなべを召れわか物共かむしやぶりをけんぶつせん  
それ／＼との御でうなりかしこまり候と御前の罷立  
はやしやうぞくをぞ 三重せられけるすてにくくげん  
きはまれば御大將たかき所にまく打せ御けんふつを  
こ成けるまつ一ばんにげんじの白はたまつさきにを  
し立る大將の御馬まんねんぐろといふめいばにはる  
ちよよろつよのかげたかき きんこのしたかげのおち  
ばまて 下かけどもつきせぬ 七つこほれまつきんぎ  
んにてほり付たるくらをかせ色／＼のいとをもつて  
打ませたるあつふさむらさきのたづむすんでさげ行  
衛めでたき君がよをいらいそへたるふせいにてとね  
りあまたあいそへひめ小松にしらはとすへたる御馬  
しるしいさむ心ははるこまの ふしあしもしどろに引  
出す二ばんにわたなべの竹つながさなみといふめ  
いばにかいみくらおかせくれないのあつふさかけい  
そへのなみもどう／＼とうてば心も つきいさきよく  
是も一所にかさりたてこへにくび三つ付たる馬じ  
るしあたりをはらつて引出す三ばんにひらいのほう

めい四つじろといふまきをのこまに三ばんがはたか  
ながいにすつたるくらをかせこがねのゑりがいかけ  
させ白はた五本の馬じるしかけおとらしと引出す四  
はんにうすいのさだかげがなんりやうにけん打たる  
馬じるし是も一所に引せける五ばんにうらべの六郎  
すへしげかげとりといふめいばたち花をきんぎんに  
てほり付たるくらをかせきいともしりがいかけかの  
つのに三つぼし打たる馬じるし きんかくも 上りひを  
かけよと引出す扱しつはらいはさかたのきんよし  
がおにあしげにこきくれないの大ぶさかけきんぶくり  
んのくらをかせしらあははませて出来はなはた天へ  
も上りぬべし三本ぞとばにあかはたの馬じるしさも  
ゆゝしげに引出す大將御ぎを立てみたまふにりやう  
のみゝは竹をそぎたるごとくにておがみふつさとす  
しふとくしゝ八ぶんにあまつて前より共に至までた  
ぐいなきじゆんそくなりぼくわうはつ引のてんはか  
うがぼうこんすいと立共是にはいかでまさらんい  
づれをどれといゝがたしあつはれ馬やけんふつやと  
どつとほめさせたまひける扱大將よりなか公あかし  
のにしきのひたゝれにらんでんぐさりの御きせなが

けんし十代のひげ切といふおんはかせたつかしらの  
ほしかぶとわらはに持せざいをつ取出たまふはあつ  
はれげんじの大將やとをのゝかんしたまひけるわ  
たなべのつなはもゑぎにほひのはらまき三尺五寸の  
しやくどう作りの大太刀はきゝる君をしゆごし奉り  
扱五人のわか物共一やうにくゝかはおどしのよろい  
をき一めんになみいたるはげにゆゝしくぞみへにけ  
る時に頼光わたなべをめされ何れも若物なればけつ  
きいくさいたすべし其むねよくゝせいすべし是に  
てぐんほう仕れと金のざいを下されけるかしこまつ  
て候とざいおつ取立上り扱ぐんはうとぞ聞へけるそ  
れかつせんのかうを取べからずせうぶはうんにより  
さだまらずわづかのせいをもつて大ぐんにかつ事は  
よのつねにしてかのふましせつにあたりぎによつて  
かけ引を大じとせよ一ちんやぶれば二ちんかはりせ  
んちんのたゝかいにくたびれたるをごちんへ廻しご  
ちんのせいをさきへかけ五人一所に心びやうしをし  
つ取ゝと合べしくりかへしまきかへしくるまかゝ  
りといふ物にいきをつがするなさりなからかへるば  
かりがてがらにあらずもし引時の大じ有むらくもの

さかまくやうにあと成物がさきへのりつきがのりか  
けのりまはしざいをふつてそなへをこのてに立させ  
たいこを打て跡ぞなへにきを付よ五人の物が馬の鼻  
を引揃へ心ひやうしをしつとゝ合ひだりのたすなを  
うけ心にみぎのたづなの手の内をじつくりゝとし  
めつけゝ弓はり月のかたむく頃にこつぷりかたむ  
けのりかけゝせめよかまひてゝゝふしまばらがけ  
してゆり打たりなみだれいくさに及んでてきしげく  
は首取なかたて切すてにしやうは其みのちうに有ま  
つたおのれがつみに有五人の内にひきやうをさばき  
こしをぬかす物あらば打てすてよみな是きみのため  
なれば四天王が家のなをばしくだすなわか物共のが  
れん所をよくしつて一じんをほぞの下に落し付時の  
てうしにのりたらばそこのりこみ切ていでよかま  
いてけつきのいくさすべからずあい色をみすましせ  
んちんごちん一つになりとつておめいてかけ合たゝ  
一時の其内にやかてかち時つくり立そくしにじやう  
へのりこむ共ふせせいよこやりある物ぞ其むねよく  
よく心へよ大じの天下のたゝかいにふかくを取な方  
方とちへふかうしてむねつよきりひあきらか成ぐん

ほうはい國のちんべい長郎も是にはいかでまさるべきと一ざもあつとかんしける頼光きよかんあさからすいさぎよし／＼かゝるゆゑしき渡邊にげしをさせ若者共にはげませもみ立／＼せめたゝかふ物ならばいか成天まやくじんもをもてをむくべきやうあらじそくしにかたきついとうしめでたくかいぢんいたすべしとはや御いとまを下されける人々御前を罷立て頼仲の御ともし門ぐわいよりうま引よせひた／＼と打のりほつ國さしてむかはれける此人／＼の有様あつはれゆゑしき次第やとみなかんせぬ物こそなかりけれ

## 第五

兩大將てつしゆんをいけ取かいぢんの事  
源の頼仲公しよぐんせいを引ぐしいそがせたまへば程もなくかゝの國のはやしのひやうへがたちに付たまひ人／＼にたいめん有御悦はかぎりなし中みつわたなべに打むかい我君のしつけんをかうむりたるか  
いもなくおめ／＼とかたきにじやうをのつとられ口をしく候へ共みかたふせいになり候へば力なく何と

ぞして君の御命をすくわんと存ちりやくをめぐらしやう／＼是までをちのび候扱／＼いゝかいなき物とおほしめさん近頃めんぼくのふ候とはがみをなして申ける渡邊聞いてこは中みつの仰共おほへぬ物かはいくさは時のうんたり心ははする共みかたふせいに打なされては思ふやうにはなりかたし御ぶんなればこそ大せいのかこみを切ぬけ君あんをんにしゆごし是迄は來られたりそうじていくさに及かなはぬ時はてきをたばかりみをまつとうしてをち行事是長郎がぐんほうのおくぎたりおゝしんびやう／＼とぞ申けるかゝりける所にゑつちう人宮ざきの藤太はや馬にてはせ來りかうづけ下つけむさしさがみのくん兵おゝかた敵にしたがい候かやうにひつはく仕内にてきはいい／＼大ぐんになり申べしかたきかつにのらん其内にいそぎいくさの御やういませと大いきついで打たへける頼仲聞召げに／＼かたきにせいを付あしかりなんいそぎおしよせ打とらんよういせよとの御でうなり渡邊承り尤よろしき御でうかなさあらば打立たまへやと兩大將の御ともしかゝゑちせんのせいをあいそへつがふ其せい五萬八千よかゝ

の國を打立てゑちごの國へぞむかはれける猶も此事かくれなくゑちごの國にはほんまの大せんてつしゆん諸ぐんせいを近付聞はよりのぶ都よりのかせいをうけ子四天王とやらんを引くしむかふとやさやつばらがぶんにてなん十萬ぎでよする其何程の事か候はん去なから是へ近付ては國のさはぎと成べし道まではせむかい一／＼にけちらしほんいをたつせん諸國のせいをゐんぞつしつがふ七萬六千よきゑちごの國を打立てかゝの國となみ山にぢん取てよせくる敵を三重まういたり去程に大將かゝの國となみ山に付たまふすでに其日もくれければ同ぢんをぞ取にける渡邊進み出申けるはかたき大ぐんとみへたりかけ合のいくさに及てはじつをうつし申べしまつそれかしは上の山へあがりかたきのやうだいをうかい申さんといふよりはやくしのびて山にあがり敵のていをみてあれば爰かしこにかゝりをたきすてこてすねあてをまくらしせんごもしらすやどりけり渡邊なめ悦いそぢん所へはしりかへつて時こそよけれ打立たまへ此山のてい四方がんせきにて候へばうへの山よりせめかけきやつはら一人ものこさすうしろ

の谷へをいとさんまつ中みつおやこは二萬よきあいぐし東のみつれへまはりたまへはうめいさだかすへしげは一萬八千よきにて西の山を取まきたまへ竹つな金よしそれがし兩大將の御ともし大てにまはり申さんとぢぶんのかたくやくたくし三方にせいをかけ思ひ／＼におしよせの時のこゑをぞ三重上にけるかくてかたきの物共爰かしこにふしまろびいたりしが時のこゑにをどろきとうてんしうしろのたにへとかけ出るよせてのくんびやう是をみて三方よりも合ぼつつめ／＼せめたりけりてつしゆん此由みより今は、やかなはしと思ひけんのこりしくん兵引ぐしゑちごの國へと引にけるかくて兩大將なのめならずと思召すはやかたきはおち行たりいそぎぼつかけ打とらんと三重あとをしとふておふて行ゑちこの國に付しかばくがみの城を二ゑ三ゑにをつ取まはし時のこゑをぞ三重上にける城の物共門をかためしづまりかへつていたりけりよせての方よりさかたの金吉かけ出ゑ、なまぬるき有さまかなゑいやゑいやとをしければなにかはもつてたまるべきさうのとひらをおしやぶり我も／＼と押入けるていしゆ

ん此由みるよりも今は何をかごすべきそかけ出／＼いさぎよく打じにせよとざいをふりけしをなすくだんのあくそう四人一所にかけ出大せいのぐん兵をむら／＼はつとをつちらしと有所へさつと引しばらくいきをぞつきにける中にもうんりやうすゝみいでやあをとに聞へし四天王とやらんはいづくに有ぞ我々かゆうりきを心みたまへ方／＼やつとよはわつたり渡邊かけ出やあ若物共かうけんはくくにんめらを一一にねぢくびにせよ竹つなはいづくに有ぞおくびやうがみがひかゆるかこしがぬけても有けるかそれかしくまんとかけ出る竹つなはしり出あゝらうたいのみとしいらざる所へさし出でこふしの一つもあてられこうくわいする共かのふまじそのきたまへとかけ出るうんりやうきつとみてあつはれきりやうの若むしやけみやうをなのれくまんといふ竹つなにつこゝと笑いおゝやさしのごほうのとい事や何にけみやうを聞てめいどのみやげにするか御へんがくびのつけきはなを付ゑさせんこれへよれやといふまゝにおしならべむんずとくんたうんりやうしたてにまはりはねかへさんとせし所を竹つなそくをふんでうちから

みひつかけまつさかさまに取てなげくびふつとねち切かうげんはきたるくにんめはかくこそふるもふ物そとよをとにも聞らんめにもみよわたなへのつながちやくしみたの源次郎竹つなとはわか事なりとみかたのちんへしんづ／＼とひいたりけりたて山かんせきこらへかね大こゑ上げて打てかゝる金吉つつといで御へんもくびがうすくかとをしならべむんずとくみそくびを取てひさの下にひつしいてなにとごほうよいきみかちとはらきたまへとめてにてひげををしなで空うそふいてぞいたりけりがんせき下より太刀をぬかんとしたりしが大りきにしめ付られゆびかがまりてかなわすしもはやいとまをたまはれかたいきついでいたりけり金吉につこと打わらいおゝさもあらんで／＼いとまとらせんと力にまかせふみければかうべみちんにくだれたりくわいりんゆふけい是をみてはしりかゝつて金吉がこかいなひつたてしやう中へ入らんとす金吉心へたりとゆんでのあしにてむないたをはつたとけたのつけにかへす其ひまにくわいりんとむんずとくんでゑいや／＼とおめくこゑ山のくするゝばかりなりかゝりける所へさだか

げすへしけはしり來つて二人共にひつくみゆんでめてへどうくんと取てふせくびをかゝんとせし所をきんよしみてやあしばらくまたれ候へてきは二人みかたは三人むげにをとげなき次第なり君の御まへゑつれ行とうふんにわけてとらんと二人共にかゝる取みかたのちんへさつとひいたてつしゆん今はこへらかね大太刀をさしかざし大せいにか中へわつて入はらりくんと三重なぎにけるさしもたけきてつしゆんか今をかぎりのたゝかひにおもてを合物はなし残りし物共四方へばつとをつちらしふんじかつてたつたりしはひとへにきじんのごとくなるよせてのかたよりあふみの國のちう人にきむらの平太となのりかけいてげんざんに入らんとかけよるをまつかう二つにきりわられあしたのつゆときへにける二ばんにみのゝ國のちう人おやまの九郎となのつておもてもふらず切てかゝるを車切といふ物にすんど切てをとしける三ばんにかゝる國とかしの六郎はせよるをから竹わりといふ物に三つにさつときりたりけるなかひで是をみてはしりかゝつてむんづとくんたてつしゆん事共せず取ておさへくびをかゝんとする所へほうめい

はしりかゝつてこがいなをむんづと取てつしゆん事共せずやさしのこくわしやがしなぶりなんじも共にゆけやとて二人の物を取てふせずでにくびかゝんとせし所子四天王共かけ付たかてこてにいましめ兩大將の御めにかくるなゝめならず思召それく都へひけやとて悦の時を上都をさしてかいぢん有せんしうばんせいめてたきともなかく申斗はなかりけり

寛文二年壬寅三月吉日

正本

# 四天王最後

## 第一

藤井寺おち四天王さいご

さてもそのうちそれひちやうつきてりうきうかくる  
こうとつきてしゆんがくにらるゝかうなりなとげて  
みしりそくは誠に天のみちなり其頃天下のふ將をば  
せいわ天王より五代のそんせつつのかみ源のらく  
はうの御しやていかわちのかみよりのぶ公とぞ申け  
る然るに御子よりよしとのとて申ふはめいちにして  
御年十八さいに成たまふ若君一人おわしますあひと  
もなふらうにはつなきん時さだみつすへたけほうし  
やうとて天ちひらけしより此かた國どにるいなきあ  
ら物なり是はらくはうよりあひつたわりざいゝゝ  
の兵共其なのほまれはよにたかしさんぬる比だざい  
兵ぶのかみやすしげが子に平のごんのかみやす村  
むほんをおこしよりよしをいけ取にすでに御命も  
あやうかりしを五人の物共さがへんにしばらくろう  
きよにおもむきしをよりのぶこいうけたまひしゆへ

力なくろうしやうをあらためてそくしにうばいかへ  
し其上かたきやす村一もんのぎやくしん事ゆへなく  
ついさんしよりよしをいよのかみににんせられかま  
くらに御所を立ゑいぐわをきはめたまひけるいせい  
の程こそゆゝしけれ是は扱をきこゝにだざいのやす  
村かちゝ兵部のかみやすしげはさんぬる比我子のや  
す村をはけんけのこひやうに打せ我身迄も天下のす  
まい成かたくむねんといふもあまり有とてわづかの  
らうどう共をめしあつめいかになんぢら聞かとよ此  
度我ちりやくをめぐらしてむほんを企て天下をのぞ  
みやす村かきやうやうにほうせんと思ふはかたゝゝ  
もつて力をそへてたまはれとしんてい残らずかた  
られける時にらうどうのかげすみ御まへに出尤君の  
仰のことく御しんていをさつし申又いやしき我々迄  
ものいぬのさとふしとやらんとてひかげいとうて  
いとすむねんたびゝかさなりて一どは此ほんいを  
たつせん物をとかすならぬ身にも思ひ入のなき物は  
のみのいきが天につうずとかや申候思ひこみては望  
にことはり有いつとても身をすてゝ飛こみたらばか  
たきのかばねにちをあやさてはおき候べきか去なが

ら星はたいていのかたきうちにあらず天下を望たまふなればまつじせつをまたれて然るべし其上五人のからう共が罷有ける内は天下の御望はかなひ候まし年をかさね日をおくり何れもかれらはらうたいなればおのれとじめつするも世のならひひとりひとりもかけたらばそこでくだんのひやらりを以てしせつに御身をまかされよ先思召とまり候へとせいしけりやすしげ聞ておろか成とよかげすへせいをそろへて打にこそじせつひやりもまつべれたゝちりやくをもつていかにもいしうとつくりとしあふする山のあななからくりをまくらをわらしてたくんだり天下を望やすしげなんぢらがちゑはかるましき此やすしげにまかすべしと我かやをさしてぞ三重かへりける扱其後によりのふは有日うちうのつれゝに五人の物ども御まへにめされせけんのやうたい御はなし有しかは何れもゝうけこたへ取ゝなれや人心引つたへたるあづさ弓やたけ心のひとつ成つわ物のこのこもりげに頼み有けふのくれ君もなのめのあまりにやたゝ打とけて人々御しゆをたまはれよをいをだにやしなはゝ一すりとなをはきくのさけと御ゑいかを

ぞたまわりけるほうせうやがて取あへず大星のなぐれのすへの我等迄ゆたかにくめるきくすいのさけさだみつすへ竹わかき時の系物とて大くはんとうのかさいふしを打つれてうたふた山もどうせすかいへんもなみしづかにしてたにこと成あんだそうだばいがたきん時もあしびきの山より出る清水をなかゝしくもくむもうれしきつなはもとよりまいはゑんねんの上ずにて一ちやうしはり上てたうゝたらとなるはたきの水たへせしおもしろやとりわけ源家の御よは萬ざいゝゝ萬ざいらくとおしかへしゝうたいおさめていかにかたゝゝかゝるめでたき折からなればよのせいとうのぎを申上ん扱もせんねんついたういたせしださいのやす村かおややすしげはいまだうきよにながらへ有よし承る今迄御さたなきことおぼつかなく存なりもし御しつねんもや候かかた時もしそき御さたあられて然るへしと申けるよりのぶ聞召かれかぎはまづかさねてさたすべきと御ぎをたゝせたまひけるつな君のうしろすがたをつくゝとみてあかくあさましき君の御しんていかなけんご成道を申せばあんにさういの御さしよくかなあつはれらい

くはうの御時ならば我々かやうに申さず共てうて  
きと有からはねほりはほりたやさるべきにとかく我  
我か申ことばは一ゑん御せういんなければせんもな  
しとにかくかた／＼もつて此君に御ちうせつをつく  
す事まつたくもつて思ひとゝまりたまふべし先年も  
いさめを申て一度さかへひきこもりしにあの御心成  
申へぐにん共にまどはされよのせいとうまばら成ゆ  
へぎやくとおこりすでになんぎに及れしを我々かか  
け付てこそかくあん平にはなせしなれけふ此比の御  
なんぎにもこりたまはず又ぐ人にまとはされ御せい  
とうふんみやうならず又重ねていか成あくかたき起  
る共もはや我々年はよつつ力はうすく成心のまゝに  
振舞はれずはかゆい所かかゝれすしてやみ／＼と打  
たれん事こそ口をしけれどとへぶにくびを打るゝ共  
よりのぶせいくんにましまさばかきにほねをしわぶ  
らるゝ共おしかるましき身なれ共にんじんをしり給  
はぬしうのためにあつたら命を捨ん事八まんおもへ  
ばしに成しよせん我々都へのぼりかた山かに年こも  
りねんぶついつさんまいでくらすべしと既にたゝん  
とせし時にきん時まづしばらくくなにのこたへもなく

立のかばおふとうと人さみすべしいつはしおくかた  
の法印衆をよひ出し我々がことのとをりを申聞せと  
のこそしんにみちなく共御ふだいの人々にくんしん  
のれいをなし御いとま申上心のまゝに立のくべし尤  
とばんの侍を近付て折ふし時のそうしや宗印法印宗  
舟道喜いしやにほうげんほつきやう其きざみはか宮  
のそうじやうふぢさはの上人も御所御みまいのじせ  
つとのはらのふくりうのたんちやうきをもつてなだ  
めんと御廣間に出らるゝ何もしきだいあり車座にこ  
そなをらるゝ五人の人々扱代々のはたらき一々にか  
たらるゝつなは十一さいよりまんぢう公へこいうけ  
られ誠にはやさま／＼のことわりをいひ聞れらく  
わうへゆつられらくわうしきよのみぎりそんめい  
ふしやうにみへしかは我々五人か申せしはまん中と  
申らいくはうと申かゝるゆふちせいめい成大將ぐん  
いか成よにも有ましかれば我々此若のよにしにそこ  
なわはかしらをかくはひつちやうよびほうのしをす  
る物ぞと五人のものがれんばんしみのちをしほりの  
み頼光より一兩日もさきにはらををもやぶらんと思ひ  
きはむる所に頼光聞付御枕元によび付られ我いくら

の人をもころしまゑんけしやうの物までかすおほく  
 ころせししうねんのらいりんも有物なれ人にこそよ  
 れなんぢらはつぢがためけいごの物にも心を付よろ  
 づけがのなきやうになんぢらが手にかけてしかばね  
 をもはつこつとなさうとはおもはずしてたいていの  
 物のいふ如くをいばら<sup>う</sup>を切らんなどゝはさりとて  
 は年頃のちぎりの物にはにあはぬ物共かなよりのぶ  
 をもり立て代々のはちをからせよと大き成御しうた  
 んの御うらみを承り何も涙をとめかねせんごふかく  
 に罷成る所へくわんとうにぎやくしんおこりぬ四人  
 は京都にめしおかれそれがしにちうばつ仕れと有し  
 かはよりのぶ公はしめの御ちんたちにことゆへなく  
 かづさの大たちはんぐわんといふあぶれ物今四天王  
 と名付てごづめづあほうらせつよりてごはかつしを  
 子共にあてゝ打取らせかいちんいたしくび共を御め  
 にかけし其時にやれわたなべかと仰られさもうれし  
 げにたゝねむれることくに御たかい有その時の御一  
 ごん思へはおしき御大將やとわたなへがなけき人々  
 の思ひくゝのしうたんにぎ中なみだをながさるゝ扱  
 五人の物共口をそろへてよりのぶのふそくたらゝ

申て御いとまのぎを申されける人々何れもみゝ聞な  
 れば尤くゝたうりにしごくしたんゝのきさみをく  
 だいてとめ其の中にきん時は少用にたち聞をもしら  
 ずつぎのしやうしにつまあなをあけて人ゝゝををし  
 りけりしらがつぶりをまはしそれ程の心中ならば頼  
 光しきよの時なとをいばらをきらさるぞと口きたな  
 くぞ申けるきん時間もあへずくるりとまはりみてあ  
 れはしゆつとう人の子共成を七八人ぐわいとつかみ  
 引さけ出これとのゝてきに成べきやつばら我等か中  
 間をおいばら切らすのちぐやみとかけ申しせしを取  
 らへたりくちをためされわたなべとごちうへはらり  
 となげ出すにげんとするをわたなへ又かいつかみ取  
 て引すへおゝいづれもよくつくつたるわかへ物かな  
 さぞをいばら切らぬをあさましいとや思ふらんおい  
 ばら切てために成しやうこばし有かたゝしおのれか  
 まへでよりのぶのしきよの時あだ口にはたゝく共誠  
 の時はよも切らし人にこそよれわれゝゝがみのうへ  
 をまたすをはなれぬすゝめのあくちもきれぬぶんざ  
 いにてにやわぬひはんのへんほうにほうかまちをひ  
 きさきすてんはやすけれとそれにましますそう衆へ

めんしてたゞくるぞとざちうへはらりとなげちらし  
おの／＼御めん候へとれいぎをのへてそれよりも我  
やをさしてぞかへらるゝ人／＼のふくりう尤／＼こ  
とほりやとみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第二

### やすしげかうさんの事

さる程にだぎいのひやうぶやすしげはかまくらにし  
のびゆきこゝによりのぶをたてうとふしやうと我ま  
ま成たうけの一しゆつとう人をばあんざいの左衛門  
ともやすとてやすしげかいもとむこなりかれをたの  
んでとにもいかにも取いらばやとおもひかさをかた  
むけともやすがやかたをさしてぞ入にけるばんの侍  
取付ともやすふさいにたいめん有ふさいの人の聞付  
て御身はこんどのたゝかいにきやくとの一みたるべ  
きに何としてかは命たすかり是迄來りたまふはそも  
ふしき成とぞ申さるゝやすしげ聞てされば候それか  
し是迄參るだんべちぎにあらず我子のやす村めがぎ  
やくしんをくわたてついいはほろほされあまつさへ  
我等までかやうのていたらくになしはてぬそれ人が

いのしゆくわうとてぬすみをする子をもてはおやの  
くびになわをつくるおに子をうめるおやとてもふび  
んに思ふもならひなりとりわけふしはもちろん時の  
こうろんにもまけよといふおやはなくことさらせん  
ぢやうのはたらきはいさきよく打じにせよとこそい  
へくちおしややす村はよしなきむほんを起しつゝと  
しよりたるおやに思ひをかくるやす村は子にてはな  
くてかたきぞやとしはよつつらう人といひたゝすみ  
はつべきすみかもなしあはれ日比のよしみに今一度  
君をおがみ奉りをいゆくすゑのはてをばせめて心や  
す／＼おうじやうせさせてたびたまへこんじやうの  
ほうをんに此望かみへ申上てたまはれとなくどい  
つ申けるともやす聞て誠にもつてきでんのしんてい  
かんじいつて候あらなにもなや是は近頃申にくき  
そしやうかななるふ成ましきはしらね共ふしのなら  
ひたしやうたもんの中だにもたのみをかけられ命を  
すつるも侍のぎりことにきでんのいもとはそれかし  
か女と成ばかりそめなから五百しやうのゑんにひか  
れて有しよしとうざいにをよぶ共いつはしごんじや  
う申さんと御所をさしてぞあがりける御まへになれ

ばつゝしんでかしこまりみぎのおもむきごんじやう  
すよりのぶ聞召されそれこなたへめせともやすはつ  
とこたへ罷立やすしげをつれて御まへに上りけるお  
まへになればはるかの下ぎにしほくとしたるふせ  
いにてつゝしんでかしこまる君御らん有ていかにや  
すしげこんとやす村ざやくしんとなりとのぶに弓  
をひくことなんじもうとうしらざるとのおもむき尤  
さは有べけれ共去ながらもとよりわりなきおやの中  
ことにゑんじやのしうこなればじよの物のさみなさ  
さるやうにきしうをかいてはやとくみせよとの御ち  
やうなりかしこまつたりとてわか宮八まんのごおう  
を申おろし日本國中の大小のじんきをかきしるしま  
つたくこれいつはりかきにあらすすこしもひやうり  
これあらば此もののばつとかうむり三日かうちにろ  
けんせしめちくびとなつてごくもんにかけられふた  
たびはちをさらすべしとのきしやうもんくだんのご  
としとかきせしめるよりのぶ聞召あふしんべうく  
おやかしよそんにひきかへてやすむらは天めいつき  
はてよしなききやくしんゆへついに打れぬ我うらむ  
る事勿れやすしけもとよりへんせついつわりのしや

うずなればかうべをちに付涙をはらくとながいて  
誠にもつて有かたき君の御でうかなぎやくしんの物  
のおやなればかゝる御ちやうはくだるましきと思ひ  
しに君せいくんにましませばかやうの御ちやうにあ  
つかり申事めうがなき仕合かなかへすくもやす村  
めは何たるいんぐわのめぐりきて君に弓を引ことお  
もへはくもつたいなきくにんかな我お子のゑんに  
むすほふれ諸人におもてをまぼらるゝかうの程こそ  
口おしけれとかほをあかめてなきいたりよりのぶ聞  
召申だんふびんのいたり去ながらつまなきときや  
くしんのおやなればたとへ命はたすくるともさどか  
しまゑぞ八ちやうへもつかはすへきが子もなき物の  
ことにともやすか女はなんぢが一ふくのいもとへ  
聞さらはともやすにあつくるそいかにやすしげすい  
ぶんそれかしにちうせつを仕れとて御こそでをく  
ださるやかてちやうだいいたし御つきのまへ罷出か  
みをこそくそりとそりこぼしすがたをかへて御まへに  
出此たびの御おんの程身にあまりて有かたく候しざ  
いの所を御しやめん成され今しやうこしやうの御た  
すけにあづかりぬ此うへはおとこをたてなばよくす

てられず人のそしりのなきまへにきみのなさけをふ  
つくわのゑんになし奉るかしらをそり御いとまたま  
はり都にのぼりねんぶついつままいにてうきよを  
くらしのちのよをたのみに仕らんと申上るよりのぶ  
いよ／＼申所しんべうなり心ざしあまりふびんに有  
間いづみかわちをちりやうとなしふちいてらをほん  
ちとさだめ有べしと御はんを下されかたしけなしと

御まへを罷立らうどうのかげたかを近付もはや天下  
はそれかしが胸の内におさめたりと都をさしてそ  
三重上りける是は扱置四天王五人の人／＼はひとつ  
所にあつまりてわたなへ申されけるはいかにかたか  
た我／＼よりもさきに子供をのぼすべきかわかき物  
はこぶあゆみもはやかるべしそのうへしよちのぎを  
申付させん又我／＼かくうき世をうらむる京のほり  
なればたちのきしよりあつまのかたへまたこすへき  
共おもはねは今日もさきにひかすをおくりつゝみ  
ちすからのめい所きうせきをもみめぐり心しづかに  
のぼるべしをの／＼もつ共とて扱わか共をちか付い  
かになんぢら我々は明日都へたつへきなりなんぢら  
はあとよりばんしのしまいを取おさめすいぶんした

したまでもをんびんに申付五人いつしよにしめし合  
てのぼるべし扱又ろしのあいでもゑしやくをせよ少  
もぎりをやふるなと事こまかにいひきかせすてにや  
ういをしたりけりとにもかくにも此人／＼の心の内  
はかなし共中／＼申斗はなかりけれ

### 第三

ほうせうすへ竹さだみつさいごの事

さるほとにやすしけ入道都に付て五人の物のほるよ  
し天のあたへとよろこびらうとうを近付聞ば五人の  
物共はよりのふをうらみすでにかまくらを立のき都  
へのぼると聞て有あはれいかにもしてかれら五人を  
たにもうたは天下は我まゝなれ共まゝにならざるは  
ゆうりきふりやくのたつしやなり何とそよきちりや  
くかなとあふきをひたいにあてしばらくかんしてい  
ふやうはいかにかけすみそれぶしたる物のうつたへ  
のそまざるもいひかいなし爰に日本一の事を思ひ付  
て有はいつもかれらがおり上りのやとはみのゝ國お  
おはかの長か所なりかれをたのむにいかでそりやく  
にのがすべきかげすみ聞て扱もゆゝしきはかり事か

なはやたちたまへわか君とぐんびやう共をもよをし  
てみのをさしてぞ 三重いそぎける程もなくみのにも  
なりぬれはおゝはかの長かもとにゆき長をひそかに  
ちか付いかに長それがしきたるだんへちのきにあら  
すかやうゝの事をくはたてごぶんをたのみにして  
是まで參候と金百兩取出し是はとうさのいんぶつと  
て長にたふ誠はいやしき物なればとうの山のやうに  
おもひ三どちやうだい仕何事もそれかしに御任せ候  
へとてたな心を合て申せしはひとへにわしくまたか  
のことくなり入道なめによるこひ萬事は御へんを  
たのむぞと三百よきのこしをきおほりをさしてそ  
いそぎける是は扱置四天王五人の人ゝはらうどう  
四五人めしぐしてふだいのなしみあさからぬくんし  
んの中もたへゝのかんなきみとはおもへ共なごり  
ぞをしきいにしへをおもひいつればなつかしやうま  
れし所はあかまがたさだみつはしなのゝうすいのう  
まれすへたけはとをゝみほうせうはひたちのむま  
れきんときはいつの國松川の生れつなはむさしの三  
田のうまれいか成きこしづのおがたぐひまでもちぶ  
さわすれぬならい成に一やにかはるあすか川かすむ

そなたやかまくら山雲井の月をみやのそらふる里を  
さつていつの國二とせとかねししゆくんの中をへた  
てはこね山足からしもにさしかゝりこゝはいにしへ  
らいくはうの御らうにんのみきかしの木のおゝかみ  
あしからのきたのこしまのかへかはらとて大きな  
いわやありしをたゝみてやうをんのためにこしらへ  
おきてきよせばうちころせとてぞんぶんはなはたか  
ぎりなかりしかいざらくわうをはいし奉るとおも  
ひたちよりむかしをかたらんとはやまつかへがほら  
になればつなきんときさだみつすへ竹いかにほうせ  
うよくみたまへこはらいくはうの御さのまなり四ほ  
うにいしをたゝみあげしかいわきにこけほりしよ  
ぼくもおい木の間をきさみてよりいはびこりみどり  
をあらわし中にも此まつはらいくわうびやうきの御  
時此處にて御ほんふくありちからためしのねぢまつ  
はとは是なりなにがたちからにできめられたればさ  
のみせいちやうもいたさずまつはもとよりときわに  
て變らぬものはまつ宮かわりし我はわれゝかと  
しのよわいきみはかはらせたまふぞやあらむかしこ  
ひしやとこほるゝなみだのひまよりもほうせう申さ

るゝはさてもたんばの國大系やまにてしゆてんどう  
じにあいしとき君らいくはうの御はたらきすでにど  
うじさかづきもちきたりてそれかしにむんずとさつ  
其時らいくわう御まなこのつけところとうさのゑし  
やくみのとりまはしよじともせはひつくまなか共  
せばさしとをさんとことばにはなをさかせこゝろに  
くじをもちたまふかゝるめいよの大將のまつだいに  
いたつてあるべきかとなみをながしかたたるゝき  
んときはきみ是なるいわを取あげそれがしにたまは  
りしをそつとりあげ御そばにおきたればさもうれ  
しげにゑみたまふそのいしは是なるかいまさらおも  
ひいだされてあらむかしこいしやすへ竹はうらべの  
六郎といふときす百人の中より君をうばいとりたて  
まつり此ところにくたりやまに入このみをひろいて  
きんときにはたきゝをこらせ君をいたわりしうきを  
かたるつなはみやこの大いくさにうちじにせんとお  
もひしかともらいくはうをみたてんとつるきのやま  
をふみやぶり君をたづねまわるところにさだみつを  
うすいのあらどうといふときふりよにゆきあいしゆ  
くんのゑんのむすばせはや二むかしのすぐるはゆめ

のうちなれやあらこしかたこひしや、とにつき、かく  
につきても、おもひいだせは頻りにこゝろがみたる  
るぞやあゝさてよしなやなせんなきわれゝゝながい  
きしてあたわぬおもひをすることよむかしをわすれ  
ぬ物がたり百日月やかたるともよむ共かく共よもつ  
きしいざゝらいそきのほらんとみしまのみやにつや  
申はやよこくものひきまよりはらにしほやのけふり  
たつしづやかねけんよし原をゆいにけらしなにこり  
えのむねはふしそではきよみかせきなれやふるきな  
かめのあとまでもさながらしゆせうにおもわれてけ  
本ノマ、  
出て心をくばるまりこ川うつ山のつたのほそ道  
をわけてのぼるぞ物うけれおかべのつゆにすそぬれ  
てそでになみちる大井川くもはにふねをみつけれ  
こうと天りう川のわたりしてなみのさかまくはまつ  
や人にも心おかざきのはなもちりうになるみがたみ  
のゝ國に付しかばおほはかのちやうじやかしゆく  
所に入たまふ長なめによるこびこくどのくはしを  
とゝのへしゆをさまゝにぞすゝめけるさてそのゝ  
ちにかねてたくみしことなればどくのさけをてうし  
に入此さけと申はかたゝゝわれらかやうなるらうた

いのもちいて心のわかやくすりのさけにて候ときも有そうにぞ申けるそのときさだみつかはらけ取あげのみたまふのこる四人の人々もさいつさゝれつのもほどこに長よろこびすまじたりとれん申さしてぞ入にけるもとよりどくのさけなればにはかによいぞきたりけるその中にもすへ竹は大いきついでいふやうは何とやらん此さけはまさしくどくとおぼへたり其時人々ゝわれゝもさやうに存なり扱はやすしげ入道めがぎやくしんとおほへたりといふよりはやくかくし置たるぐん兵共うんかのこくみたれ入さだみつ是をみて大手をひろげて五六人かいつかみおのれなりとも此よのさいごにとて首を引ぬきすて年つもあり七十三を一ごととしてついにむなしくなりたまふのこる人々ゝ是をみてちかつくてきをてゝゝひつさげ誠に天下に五人のあら物かおのれらがてにかかりしせんすことのむねんさよとをのゝくびをねち切ひきさきすて扱すへ竹はかたゝゝ御いそぎ候へやしでの山にて待申さんとかうしやうにねんぶつ申つもるとしは七十五あしたのつゆときへにけりほうせうもはやかなはしと思ひ又たぢゝゝとしたまへ

はきん時みておしとゝめまつしはらくといへ共引ちぎつてかけ出れば金時もつゝいてかけ出るほうせうむしやひつさけ出おのれらにさいごの力をみせんとさかさまにひきさきすてたまふ扱わたなへに打むかゝいもし命ながらへましまさばきだう丸を萬事はたのみ奉るあゝ名残おしのわたなべとのやなこりをしの金時やと七十八を一ごとしついにむなしくなりたまふ金時もむしや五人つかまへゆんでめてのひざに置き此太刀は一とせ頼光の大江山にてきじんたいしの御時たまわりし太刀なればたちのいとまも是迄と思ふまゝにぞ切たりけるまなこも暗み大いきついたりしがわたなべ是をみてれん中につつと入やとの長引つかみどうとおきやれ金時まだわたなべか是有は心をはつたともて金時にわたし又かけいりて七八人ひきつかみおのれらがぶんざいにてわたなべをばうたんとやて打にせんもあやしとて百びろ斗のいどの中へさかさまに打こみ其後むま引出し長を引くくわあふ付にしててごろなほうをおつ取何と長せにかねをわしつかみしたがよいか是かよいかたゝ今爰てはきだせいそげやゝゝ金時とかまくらさして下り

ける此人／＼のふるまいみなかんせぬ物こそなかり  
けれ

## 第四

やすしげ宿をかたらい子四天王打たんとす

かくて其後つな金時はかまくらに付五人のこ共をち  
か付めんほくなけれとわか共よしゆみをよくする  
我々が此がいに及ふ事はよく天めに付たるらんと  
涙をながしかたりける人々よこでを打合しはしなみ  
だを流しけるこぼるゝ泪のひまよりも五人の物共長  
かそばへ立かゝりやれおのれめはぐに、んかなとかく  
かたきやすしげか金きんをあたへいかにたのめばと  
てことによれわつかのよくに引まよひ天下のかゝみ  
にそなへられ誠にゆうりきはたうと天づく我てう三  
國に有ましきとしてしゆみの四しうをかためとり四天  
王となつけらるゝ天下のまもりをいだしぬくはひと  
へにいしをいだいてふちに入がごとくなりゑゝ我々  
ももろ共に打つてのぼるならば今のむねんはよも  
あらじさしも我等がおやとしてかゝる長などがたば  
かれはとてつゆも思ひよらされはあとのほれと

有つるはいとまことばとなりたよなさなきだにおや  
と子は此よばかりのちぎりと聞はいしき哉や我々  
はようせうちくばの比よりもせんじやうにつれられ  
ての山にぢん取時も有同きのねにまくらをならべお  
んやをいづれはつれて出かへれは共にいきをつきか  
やうにあとに残らんとはなかゝ思はざりつるに是  
が限りのわかれかところゑをもおしますなく時はわた  
なべ金時しうたんす時にすへ竹が一子すへしげは  
長をはたとにらんであゝにくや已れににうたたく  
みそと太刀ひんぬいてうたんとすほうせうか一子き  
とう丸いや待たまへ我うたんさだみつの一子しげさ  
だは我にうたせてたまはれとわれさきにと打かゝる  
わたなべおさへまでしばらくいかに金時あれみ給へ  
やたかの子かゑをうばいあふことくなりいかにかた  
かた是はおのゝ三人のかたきにあらず我ゝ二人  
の物共はしやく年の時よりも此としまでしんし兄弟  
よりむつまじしと五人は五つのゆびのことくにてもし  
一人なり共大事出きなは殘四人の共はそれをさいこ  
と相さだめ候へはなんぼうむねんに存かれめをなま  
でに打さて二人さしちがへしなんと存しか共かた

かたかへか末を思ひしゆへまつ長めはてきといへは  
いふさしてもなき物なれば心ゆかしにきりたまへ一  
ばんのたちはうすいのあら二郎しげさだはゆんでの  
かいなをきりたまへ二ばんはうらべの小六郎すへし  
げはめてのかいな三ばんにきどう九ゆんでのたかも  
も扱四ばんにはすねのあく太郎めてのたかも、切た  
まへ扱又五ばんはみだの源二郎竹綱なんぢか心まか  
せにさばくべし竹つなかしこまつたりとてめてのう  
でにてむないたをおさへゆんでにくびふつつひき  
ぬきはるかの下にすてにけりわたなへみてあふ／＼  
きん時あれみたまへ六十斗のくははう物か六つにわ  
られ候とつとわらふて扱わたなへ五人のものに向  
ておの／＼はいそぎ都へのぼりかのやすしげを打  
たまへいまだふちい寺にい申べくそさて我々はし  
はし是にのこりどくをもはきようじやうしあとり  
のぼるべしと互ひにいとまをこいこはれらうどう四  
五人めしぐしよを目について急ける是は扱置やす  
しげ入道思ひの儘に長をたのみかけたるをちか付此  
所の長文太夫はかの五人の子共のやどなれはかれを  
頼んで打べきなりかれはわがき物共なれはおや共に

はよにもまし人四五十きのこすべしまづぶん太夫を  
よひよせよとてやかてつかひをたてにけりぶん太夫  
承何事やらんときたりけるいかにぶん太夫かやうか  
やうのしさい有ひとへに頼むとあれはもとよりぶん  
太夫わしのしやうにておだんなとしてじやうやとを  
いたすうへはかしこまつたりとぞ申けるやすしげき  
いてていしゆそうかあふたのもし／＼いかに誰か有  
すいり／＼と有しかばすいりりようしをもち來たる  
さら／＼とかきておはりの國を取らするとたゞ天下  
をわが物がほにていしゆうに國をぞとらせけるぶん  
太夫よろこび何事もとかくそれかしに御まかせ候  
へとやす／＼とうけあへはらうどう共をのこしをき  
都をさしてぞのほりける是はさてをき五人の人／＼  
はいそぐに程なくおはりの國につきしかは六郎すへ  
しげはいかにかたかたますけふは此所にとりうし  
ひそかにのほらんみな／＼もつともとくだんのじや  
うやどぶん太夫がもとへ下人をよせおの／＼うちへ  
入たまふぶん太夫よろこふてしゆをさま／＼にもて  
なしけるそのときすういのあら二郎ぶん太夫を近付  
このころ此へんにてなに事もきかざるかぶん太夫承

りされはなにこともいさゝかのぎはぞんせずと申や  
やひさしくあつてぶん太夫ちやうだいへつつと入た  
くみし毒の酒をちやうじに入人々のまへにかしこま  
りかた／＼もつて御しやうらくのよし五三日もまへ  
承はり候は、／＼よい仕り候はん物をふせいもなく  
御恥かしひとつはきこしめされよとしきりにこそは  
すゝめける時にあら二郎おろか成とよていしゆなん  
ぢもよくしづつらんうと／＼しいふりなせそわれわ  
れかち／＼うへはさけにてむなしくなりたまふさけ  
はきんしゆあらいや／＼のたいとれ／＼とそもうさ  
れけるていしゆ一ほん仕りあゝあやまり候さらばよ  
もすから御はなし仕らんかさりながら此てはふねに  
て候とおとけてさけを引にける五人のとのばらよい  
とうけかなといちどにどつとぞわらはるゝまことに  
わらふ心へてあまたのゆふちよ五人十二ひとへをか  
ざらせてやかてさしきにだしにけるにうほう申ける  
やうはいかにとのばら立はやよもふけてはんべりし  
は御とこ取らんと申六郎きいて大のまなこにかどを  
立はつたとにらんでやあわれ／＼は父におくれてい  
まだ七日もこさずしやうしけつさいのところへ女を

いたしざしきをけがすほうや有罷立としかりければ  
あきれてこそはたちにけりさて五人の人／＼もまこ  
とによふけつらんとひとつとところにふすまをひきせ  
んごもしらずふしたまふやはんばかりに竹つな人々  
をゆりおこしのふいかにかた／＼はおやのかたき  
をもちなからかくゆたかにふすものかななにとやら  
んにはかにむなさわざのしけるがかた／＼はさわが  
ざるやきどう丸きいてさればわれ／＼もしきりにむ  
ねかさわき候たけつなきいていさねやをかへんとて  
ひとまわきにそいたりける六郎かいふやうわれ／＼  
かち／＼上わかやうの事もあるべきにはかなくもうし  
なわれけるよないさ此五人のふすまをもとの所にね  
すがたにしてをき事をためらわんとふすまをもつ  
てひとがたちにとりつくろひいねたるやうにつくり  
をきつきのまへに入ひつそとなりをしつめたる所に  
あんのことく入道がかくしせいぶん太夫をさきにた  
てねやへ入てみてあれは五人をなしまくらにゆつく  
り／＼とふすとみてぶん太夫こごゑに是へ／＼とを  
となせそとまねきよせくだんのふすまにわれも／＼  
と打つくる五人一どにとんで出此やつばらを一人も

なく打とらんとさてぶん太夫をひきぐし小六郎かいふやうはをのれがふんべつにてわれ／＼をうたんとことはすの絲にてふしの山をてんにつりあげんとするに事ならず源次郎がいふやうはそれよりちかき事ぞあるうら／＼のかり人をたのんであみをせかいにをろしてみよかかろう物かあつばれをのれかをふぢうばくわんすをはしさいてんへもつりあげてせんしちやはかりてすます事をあまりにをのれかどうかよくしんゆへあがりなますのみづのむごとく口へもいらざるみつをのみ百日よごとに入るゝ共あきたらねともすゑいそぎのたびなればとてさかさまにひきさきてたまふあく太郎いふやう是程のたくみをするうへわいまだをくにわなに事をかしてをきつらんとてをの／＼うちへ入所にらうかのいた二三まいをちまとしてたちかたなをうへならへをきにけるこれをはしらであく太郎いきをいかゝつてあゆみしがかのいたなかよりはつしとをれめき／＼／＼はら／＼はらとつこいとんだされともあしにけんをふみたてゝことゝもせすなむ三ぼうとぬいてすてかた／＼是みたまへとぞ申けるたけつなみてをゝさすが御へんは

をにのまごほどありけるよなすこし此ていをきんときにみせ申たやとをの／＼とびこへ／＼れんちうに入にけりとも人一にんもあらさればあらきやう／＼のきやつばらかたくみかなとそれよりもをもてをさしていでみやこをさしいそかるゝこの人／＼のゆうりきみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第五

やすしげかまくらの城をのつ取付よりのふ  
をちたまふ

さるほとに人／＼は程なくみのゝ國に付しかは人のなさけにて三人の人／＼のはか所にぞくみやうをあらわしあたらしきそとは有人／＼みて其まゝそこにたをれふししばらくなみだをながさるゝこぼるゝなみだのひまよりもをもひ／＼にはなをさしひさげの水をたむけてはいま參らする此みつはうらべの六郎すへしけか參する是はうすいのあら二郎しげさだか參する是はひらいのきどう丸が參するとよきにうけ取じやうぶつなされとんせうぼだいとゑかう有すへいそぎのたひならずはせんじしきをもくやうすへき

に心ばかりのゑかうぐせんくわ萬くわとうちわひ  
ゆるてかなはぬみちなればなごりのなみだほしあは  
ず都をさしてぞ上りける是はさておきだぎいの入道  
やすしげはかしうになればらうどうをちか付てもは  
や天下はとつた物ぞこのうへはよりのぶをほろぼさ  
んまつさい國へふれ狀まはせ承り候とて一くわ  
いぶんまはしけるさて國くのしよ大みやう一々ひ  
けん仕したかふ所の大みやうまづ一ばんにかつらの  
ぎやうぶすきかげしうたの八郎ありしげあすけのひ  
やうへはせ川とうまつらうとうきつかわふなごした  
ぢをのくわんじやすだの源藏むろやまはんぐはん三  
とのかんせきいまゝの太郎よし田とんたひうがのせ  
んじつくしむしや大せんせうけんあかぎはしろさき  
れんばん以上三萬三千よきにはた一ながれさつとた  
てかまくらさしてぞ三重よせにける是は扱をきわた  
なべのつなきん時にむかつてなにとわか物共をさき  
へのぼせわれくかやう成物たにもくちのよき長め  
にたばかりれかやうのていになり申すましてわかき  
物は何のしやべつもわきまへずやみくと成ならば  
なみだの上のなみだなりいそぎをつつきちからをそ

へんきんときとはやしやうぞくをぞ三重したりける  
是はさてをき五人の人々よを日についてゆくほどに  
河州ふちい寺に付て六郎すへしけ大こゑ上る源二郎  
をさへてひそかくかたきかをちる事もあるべし大  
事のかたき入道たにもうつならばのこりはうぬがざ  
んまいさもつともさあをしこめんぞうろうかの  
すみくまでもこにくだいてたつぬるに一人もな  
かりけるこにあく太郎かこほうし一人ひつさけい  
て入道はととふたかまくらのかたへといふやれかま  
くらにくたらんとみちをはやめておどりゆくほとに  
あふみの國につきしかばゑち川にてつなきん時には  
たとあふたしてくかのありそうはかよやうくい  
ざかまくらに御けかうあつてかの物めをうち申さん  
あふ心得たりまつみのまでくだつてかまくらのさた  
をうかういうつべきでだてをさうだんせんとしてみの  
の國へぞいそがるゝ是はさてをきやすしげ入道かま  
くらにをしよせとよきのこゑをそ上にける御しよのう  
ちよりさたうへいまのせうくにとよき大てのやぐらに  
あがりなにもなればらうせきやなれきかんとよ  
はゝるそのときかげすみこまかけ出したゝ今是へよ

せたるはだざいのひやうふやすしげからうどうにい  
つみの國のちう人ほりのやへいだかけすみと申物な  
りいせんつくしのいくさにうたせしんしきやうだ  
いのかたきといひしゆくんのはちをきよめんとかく  
のごとくにふるまふなりいそいでしろをわたされよ  
とたからかにのゝしつた國とききいてなにかくいふ  
はかけすみとやをそらくは此くるときかあらんかぎ  
りは天下ののそみなふましとやぐらをひらりとと  
んてをりいくさははなをちらしけるこゝによせての  
ぢんよりも六尺あまりの大のをのこまつくろに出立  
八尺ばかりのてつのほうをふつてかゝる所へみかた  
のぢんよりむしや一きまへに出下をさの國のちう人  
さるしませい五ともやすとなのつてもつてひらいて  
うつたちををのこちとよめいぢんなればほうにて  
さらりとうけながしかへしてむねをはつしとつくと  
もやすひらいてゐるをのことびすさりよれくまんと  
をしならべむすとかむりやうほうをとらぬ大力ひき  
よくをつくしもみ合され共をのこちからまさりとも  
やすをとつてふせくびちうに打をとしはせよる物を  
きどくちまでをつこみ物ぐさいいくさかなとほんぢ

んへひきかへす國時君のをまへに参りみかたせうせ  
いよせては大せいあらてを入かいせめこみ候君は一  
まつをちさせたまへそれがし一人のこりいてふせぎ  
やを仕らんと申ければちからをよばずびしうへをつ  
べしなかせんどうををつべしとよりよし殿を伴ひ  
をわりをさしてぞをちらるゝ扱その後にくにときは  
さうひやうのくびのつらのかはをはきたかゝとさ  
しあげいかにかたきのなんぢはら君をやこたゝ今御  
はらめされたり此くびほしくば我命をたすけよとく  
だんの首かしこになげよりのふをや子によくにたる  
首二つかたきのかたへちさんしやがてその身はあと  
をしたいて落にけりそれよりかたきじやう中へみた  
れ入くびのせんきを仕りこゝにをもてのかわをはき  
たるくび有是ぞ識のくびなるとわれとらん人とらん  
とくびをばいあふ有さまを物によくくたふれば  
是や此たみのいやしきわらんべがぢび人のふるまい  
にをりだいの物をひらかせてばいとりかちをするこ  
とくをしあはせつかみ合かしらははられうでををり  
どしいくさをしいたししもひろきじやうちうにし  
にんの山をつきにけるされ共やすしげうんをひらい

たりさしもいみしきかまくらのしろをのつとつてよろこひ事をぞなしにけるきせん上下をしなへにくまぬものこそなかりけれ

## 第六

よりのぶ御うんひらきたまふ付やすしけさ  
いご

さるほとによりのふをやこほどなくをわりのあつたのみやにつきてかんぬしはたいめんありかやう／＼とかたらせたまへばをどろきてをくへしやうじ奉り此頃の取きたにわたなへのつなきんとき五人の子共にみのゝ國にあらるゝよしをうけたまはるゝいそぎ御出をたまはり一たび御うんをひらかれよと御しよをしたゝめ下人に持せみのゝ國へぞいそぎけるみのにもなればわたなべに御書をわたすわたなべ取上いかに金時は御書たまはつたるとはいけんすしよにいわくせん年かた／＼のかいりきを以てついたうせらるゝだざいのやす村かしんふ入道やすしげむほんをくわてすでにかまくららんぎやくに及ふせぐといへ共其かいなしよりのぶおや子づめいすてがたくお

はりのあつた逃ちやくしおはんなんぞ是とうしゆゑんさくららのくわいのしゆゑんのきさみかたくもつてくでん有しを大しゆのあまりもちいさる事今もつてみやうけんをはづかしむみなはおんしゆのとかたりほとんどさけはゑんめいすいといへ共いさゝかは大てきやくたり大しゆせさすんばいさめをやぶらずかやうにはぢをもさらけし物をとかうくわいす方／＼もつてせんくんのはぢなりさつそくさんこうせしめられざいちうのかたきをたいさんし二たびくわいけいのはぢをすゝがしめたまはゝそうぞくのほうをんなりきやうくはうとんしゆはみたまへ金時御ぶんていの程こそいたはしけれ金時聞てたとへ御所にあつからす共いそぎくたつてたいじせんと思ひしはや打たゝんと尤と五人の子共いへの子らうどう引ぐしあつたの宮へぞいそぎけるよりのぶおやこたいめんすいかにかた／＼めつらしや扱きたみつすへ竹ほうせう事もひとへに我なすしよいとさしあたり今更身にもむくう事か脱よめん／＼ばくかぎりのなきよりのぶなり去なら今一度よりよしを取たてゝたまはらばくさのかげ成らいくはうもよろこびたまふべしと御なみ

だのていつな金時も君の仰のおもくしてかゝるいきもにめいししがなみだをとゝめかの入道めがなにとあめかしたをうごかす共此わたなへかあらんかぎりとはとしこそよつたれしらがこそはへたれ共心ばせゆう力たましいあつはりとわたなへ成はたし何事も御心やすかるべしとさてよりよし公を大將ぐんに取たてけりよりよしの御しやうぞくにはむらさきすこの御きせながこがねづくりの御はかせいわ切といふ太刀をはきらくはうよりたまはつたるほしかぶとをわらはに持せ御馬しるしはひめこまつにしらはとうつたるを是も下人に持せ出たまふあつはれけんしの御大將やとおのくはつとそかんしける扱あいつくしるしには一ばんにしやうにけんをうつたるはさだみつの一子うすいのあら次郎しげさだ二ばんにしかのつのにみつばしはすへ竹の一子うらへの六郎すへしけ三ばんにしらはた五本たてたるはほうてうの一子きどう丸四ばんにあかはた二本そとは三本たてたるは金時の一子すくねのあく太郎むねとさ五ばんに御へいにくびみつさしたるはわたなべの一子みたの源次郎竹つな扱よろいは五人一しよにし

ろいとおとしに金のかな物うつたればひとへにすいしやうの玉をみがけるごとくなり金時はうの花おとしのなはもよきのはらまきにきつきやうよければ糸物くのこどうぐを<sup>本ノマ</sup>下人に持せつなきん時わか物共にうちむかいねこやにぢんを取時はたいこをうつてせいをそろへよのぢんにおよびて山中にぢんを取ときはかいをふきてせいをあつめよ扱もくち共によくもくにとるむしやたてかなかゝるきりようのわか物にはなくしきいくさをせめてみんとおもへは是とおいの思ひ出成るべしはや打立わか物とかまくらさしてぞおしよするぐはんらい人くしろのあんないはしつたりやもたてもたまらせてこそつめのじやうへよせかけ時のこゑをぞ上にけるしろの内よりりまさやくくらに上りいか成物ぞなのれといふ其時わたなべこまかけよせやあうぬは何物のなり上りぞなのれることばのみぐるしさよなをなのれとよばはりけるもりまさ聞て我はたれと思ふらんとさの國の住人しほたのせうじもりまさといふ物をと一ものぼうに打て出るを金時一子あく太郎となつてつ

に打くだかれてしに、けりあく太郎から、と打わ  
らいてやれ、こと／＼しくなられたるかいもな  
くし、はたはらを打くだかれぼうをよごされ候はん  
ぢんに引にけり又むしや二さかけ出一人はあきの國  
ちか清とななる一人はむろ山の判官清ひでとななる  
つなはみてやれ若物共かたきのまねせ一人／＼出  
打て取其時六郎太刀ひつさけてかゝる二人はせんご  
より打てかゝるをすへしけひらいてちやうど切ほう  
さき切れのつけにかへすくびちうに打をとす所を正  
のおおがみ打にする所をつかふで四五間はらりと  
なぐる城よりしうたの八郎切て出るあら二郎か大三の  
やりにてつきさすかゝりける所へぎとう丸かけ入よ  
きむしや二人ひつかつきてかへりけるわたなへみて  
今にはしめぬはやわさのしんろうと申所へくたんの  
大男物をもいはず打てかゝる竹つなみてめづらしい  
けどものともひかゝつてくんだやあきやつめはよつ  
ほど力が有とみへた何とておのれは物をはしかぬ  
なんぢうしの子か其時口をしや諸侍をちくしやうに  
たとへるなすみ山くま太郎とななる源次郎聞て扱は  
山かのすみやき成かむさいやつかなぢまんでものを

いはぬな今生ごしやう打たへにせよわたなべか子源  
二郎竹つなといふもあへずふり上いはに打付られみ  
ぢんに成てうせにけり是をいくさのしとめにして城  
中へみたれ入やす重かくびになわを付五人の物かひ  
つはりよりのぶの御めにかけどう切に仕る二度御代  
を取立すへはんじやうめてたし共中／＼申斗りはな  
かりけれ

丑九月吉日

## 公平誕生記

## 初 段

てん長く地ひさしくさかへめでたき折ふしきみやうのゆうししゆつしやうしてこくかのぢらんをなしける其らんしやうをたづぬるにゑんゆうゐんのございせてんくわん二年八月十五日にたいのまんぢうしつけしてまんけいとかいみやう有ゆうへいいんきよの身と也給へばちやくしみなものとらいくわうちんじゆぶのしやうぐんににんせられせつゝのかみになされ大うちしゆごのとうりやうたりさればしたがふらうどうにはわたなべの源五つなうらへのすへたけうすいのさだみつさかたの平太きんときい上四人のもの共は四天王とかうしてよにいをふるふつわもの也其中にも金時はやまうばの子成しが一とせらいくわう山中にてきちよにもらいたまひつゝくんしんのよしみをなしにちやにちうを勵ましるいたひぶさうのゆうし也さればしゆみに立給ふたもんぢごくぞうち

やうくわうもくでんをひやうしてわうじやうしゆごのゑぶなればたつみにはすへたけひつじさるにはさだみついいいはさかたのきん時うしとらはきもんとて其中にも渡邊四天王のすい一なれはうしとらにぞきよちうする然れはていとおだやかにいとたけかぶのもてあそびげに七年のよるのあめしらぬばかりのたのしみにてぎやうのけいべんくちはてしゆんのつゝみもねをたへてすたれたるよをおこさるゝよりみつの御いせいをうらやまざるはなかりければは扱置其比又さかたの平太きん時はしゆくくはんのこと有てくらまの寺へもうでけるくらまになればわに口てうと打ならし思ふ事のはこまやかにまもらせ給へとふしおがみ是よりきぶねへ參らんと山ごしにそれよりもきぶねをさしてぞまふでけるそう正かたにのほとりにて年の比十六七と打みへて眉けだかきよそおひのあたりもほとりもかゝやきてひかる斗の女房さもしほゝと打しほれなみだにくれてぞをりける金時はあやしみてこはしん山に只ひとりかゝる女性はふしき也いかさまけしたる物ならめよし何にてもあらばあれとがめんと立よりなふ上らう御身

はいか成人なれはかくもさかしき山中をひとりほと  
をり給ふぞかし女ぼうは聞よりもはつかしげなるふ  
せいにてやさしくもとはせ給ふ物かなみづからは少  
しさいの候て是までまよひ出て有みればさすかのゆ  
うしたりたのみたき御事有あはれたのまれ給はんや  
とうちきのそでの花ぞめをかほにあてゝぞなきにけ  
る金時いとゝあやしくていか成ことのましますぞ一  
じゆのかげに立しのぶもたゝならぬちぎりと聞人こ  
そおほきに此きん時がとをりあいしさいを聞もゑん  
ぞかしたとへこの身はうしなふ其のぞみはかなへて  
まゐらせんかたり給へと申ける女房はうれしげにあ  
あたのもしの仰やなさあらはかたり申すべしはづか  
しながらみづからはさるくぎやうの御方にみやづか  
いさふらひしをあゝなさけなやすさまじきねじけ人  
の口ゆへにあるじの人とわらはこそひそかにちなみ  
まゐらするとあた成なんを立られて北の方へもれ聞  
へ有もあられずさふらへばよしやたいよの中のなき  
身とならんと心ざしはからずやかたをしのび出是ま  
でまよいまいらするあはれたゝねがはくば御てにか  
けさせ給ひつゝみし物とおぼしなはなきあととふて

給はれとなげきしづみてたのみけるみるにたへ成其  
有さまなかゝことばにおよばれずすがにたけき  
きん時も心をらにうきくもの立まよひつゝうかれた  
ちあらいたはしの御事や聞ち中ゝあはれ也此うへ  
は我たちへともなはんたゝ何事もゑんそといふ女房  
につこと打わらひまいりたうはさふらへ共わらはな  
がらへ有ならばさだめてうきめにあいまいらせんさ  
もあれば御ためもいかゞ也又つくゝみまいらする  
にあゝおそろしのかほはせやゆるさせ給へと申ける  
坂田聞よりせきかねて何おそろくは日本に此金時な  
どがいざなはん女ばうをくげとの原がぶんとした  
とへたづねてあればとて何事か候べき心やすくおほ  
しめせ去ながら何とやらんそれかしをうとませ給ふ  
ことばのすへつらいぶせきはうまれ付心はほとけで  
候ぞやせひともなはんと申ける此上はともかくもか  
りそめながらたゝならぬふかきちぎりでましますら  
めいざさらばとうちわらひ屋かたをさしてぞかへり  
けるたちにもなればきん時はさよのまくらをかはし  
まの水のもるべきやうもなくあけぬくれぬとすきに  
ける月日かさなり今ははやなんによの中のわりなさ

は女ばうすでにくわいにんしたゝならぬ身と聞へける然れ共ふしきやなあたる月にもたんじやうせすやう／＼としをふる程に三とせまでこそすぎにけれ有時きん時女ばうに近付あやしやなおん身はたゝならぬ身と聞よりもはや三とせに及べ共いまださんする事もなく年をふるこそあやしけれ何さま子にては有まじき屋まひならめと申ける女ばうきいていふやうはかほとにとし月かさぬる事はつかしくさふらへ共去ながらもろこしのしうのらうしはたいないに八十年の月日をへて生れ給ふためしも有我てうをたつぬるにしやうとく太子は廿三か月にてたんしやう成忝も八まんは御は、しんぐうくはうぐうの御はらにやどりて三かんをほろぼし三年三月のしもをへて生れ給ふも佛也かゝるふしきの物なればいか成子にてさふらべきしばしまたせたまへとてきん時をなくさめやう／＼すぐるにしたがつて五とせまでこそたちにつれ其年のあきの比さんのひほをぞとくにける取上みればおににて有あたりにおどろき何と申ぞ女ばうと立よつてみてあれば十斗成おにこのおとりは

ねてぞいたりけるきん時はいよ／＼きもをけしはしりかゝつて取てふせさしころさんとたちをぬく女ばういそぎすかり付あゝなさけなやきん時殿けしたるすかたなればとて怪しませ給ふましいにしへふつきていわうはおにのかたちにつのはへてすさましきと申共天地のきをかながへて六十四けいのゑきをなし其後のしんわうもりようのかしらと申せ其人のやまひをあらはれみて草木をあぢはへひに七十三のどくにあひ本さうをあらはしてじゆみやうをすくひ給ひけるもし此わかゝせいじんしいか成ものにや也ぬべきたすけてすへをみ給へとさま／＼なぐさめなけきけるきん時げにもと心へ屋あ女ばう是をみよきやつがやさしのたましいやかいつかむわがうでにつかみ付くらしい付おどりはねけるおかしさよ何さましかれいき物也たすけおかんとはなちける後よりよし八まん殿のみよまでに三國ぶさうのつわ物さかたの兵ごのかみさん平とは此わかゝこと也きん時つく／＼なかむるにかしらはあかくかみそらさまにはいしげりまなこにくぢにさけのぼりくろめがちにひかりあつて口みゝのねまできればなれしがみ付たるつらたま

しいあつはれ我子やいさぎよしと悪太郎と名を付て  
よきにやういくしたりけるかのきん時が心の内ふし  
き也共中へ申ばかりはなかりけれ

## 二たんめ

扱も其後それくわうゐんはやのことくながるゝ水に  
ことならねばちうやをとめぬ月日にてあく太郎せい  
じんしてはや七歳にぞ也にけるある時の事成に女ば  
うなみだにくれながらきん時に近付なふいかにきん  
時殿それうらめしき世のならひ今はちぎりもつきは  
てぬそれをいかにと申にはづかしやみつからはそも  
ばんだいがいけにすむ大じやにてさふらふがきちく  
の身をへて三千年うかみもやらで候ゆへ人げんとち  
ぎりをなしたすからばやとねがへ共ぶつじんゆるさ  
せ給はねはちからなく打過ぬされ共爰にきん時は人  
げんとはいひながらきぢよのたねにておはしますゆ  
へしたしむべきしさい有御ゆるしをかうむりむつま  
しきふうふと也さいわいわすれがたみに此子をもう  
けはんべる也三ごくぶさうの大力一天に名をあらわ

すがうの物にて候へはよきにみそだて給るべし其う  
へ御身をたのみたきしさい有さだめて御身も聞及び  
給ふらんむかし江州みかみ山にむかで有しがよなよ  
なりうぐうかいに來りつゝ我等がしんるいけんぞく  
をみな取くらいいわらは一人のこりしが其後りう女た  
わら藤太をたのみかのむかでをたいらげ給ひけれ其  
其時のもうねんなをやまざりしかばりう宮のすまひ  
もならずばんたいに經下りしか此むかで今程しゆつ  
しやうして山すみのはん官べつたう時かけと生れい  
でかうづけしもづけのくわんれいと也佛法しやうげ  
のあくまにて代をみださんことちかゝるべしねがは  
くばみづから一もんのかたきなれば悪太郎に打せて  
たへあらなごりをしやとの給ひて泪なからにくとき  
けりきん時はけうさめてあきればはてたる斗也扱女ば  
うは悪太郎に近付扱もへはかなきおやこの契りや  
なしゝてせひなくわかるゝだになげきはつきぬ物成  
にいかなれば扱わらははいとをしきをん身をすてて  
ゆかんこと我身ながらもつれなさよかゝるわかれを  
かねてよりおもふがゆへにこそ人めをつゝみあけく  
れに泪のとこにそだつれすへもとをらぬきちくの身

にあひなれ給ふきん時のさぞ口をしくやおぼすらめ  
それはゆるさせ給ふべしいとま申てさらはとて涙に  
くれてみへけるがかきけすやうにうせにける公時あ  
つとおどろきあゝなさけなや女ばうよせめて此子が  
十歳までみそだてゝはゆかざるぞと只はうせんとし  
てゆめかとはかりあきれるなげきながらも今は  
はや月日のかづも立そひて悪太郎とう年は十二さい  
にぞ也にけるさらばくらまへ上せてかくもんをもさ  
せばやとらうどうをさしそへてくらまの寺へとのぼ  
せける御寺になればそう正にたいめんしみでしのけ  
いやく仕それよりもそう正はとんしやうばうとて御  
弟子の有けるを悪太郎殿に付置給ひよきにもてなし  
給ひけるされば心さとして一字を聞ては十字をさ  
とりさいちはならぶ物もなしある時のこと成にとん  
しやうばうもんじのかたちをなすとして爰かしこと  
いひければ心にやあたりけんやかましのほうしめや  
中／＼にかくもんはきむつかしき物也とてそば成つ  
くへおつ取てとんしやうをはたとうつとんしやうば  
うきもをけしたつてにげんとする所をひた打に打け  
ればむざんやなとんしやうこしのほねを打をられな

きさけびてそにけ入けるそう正大きにおどろきこは  
何事ぞとかけ出給へはそう正をみるよりもつくへを  
かしこへからとすてあとをのみずしてにげ出けるや  
れそれおつかけとらへよ大じの人の一子ぞかし承り  
候とてとうじゆくわかとう弟子其外二三十人打つれ  
てきぼうをてんでにもち山下をさしてぞおつかけ  
るさるほとに悪太郎心のまゝにかけ出いばらからた  
ちまつのだおひしげるにもいとわずなん所せつ所  
をはねこへこだかき所にとび上りあゝ此比はきづま  
りやとくはん／＼としてやすみけりかゝる所へおつ  
ての弟子共悪太郎をみるよりもわれさきにとびかゝ  
る悪太郎是をみてやあおのれらはすいさんやと大手  
をひろげてとびかゝればわつといふてぞにげにける  
其中にてはかんばうたん急つ坊あしよはくて悪太郎  
にとらへられさりとはゆるし給へおちござままつ  
ひら御めんと申共悪太郎きゝも入れずつね／＼おの  
れらがおにちご／＼とわらひけるゆへ今誠のおにに  
成たるぞやたゝひと口にくはんといへば二人のほつ  
しのふ／＼ほつしはくわぬ物にて候ゆるさせたまへ  
となきさけば悪太郎打わらひおのれらがいつもい

つもいまはいたづらいたされ候けふは手ならひ仕らぬほつしやちごをたゝきしなどゝささへことをそう正へ申たる時とはにぬよなちつと爰にて申てみよ只今おもひしらせんと取てふり立たにぞこへかつはとなぐれはらつくわみちに成にけりかゝりける所へからはしのさいしやうはとも人あまた召つれくらまをさしてまいられしが悪太郎にあい給へは太郎きつとみて是もおつてと心へのがすまじととびかゝる下人共是をみてやれおにこそ出たれとてわつとさけんでにげんとすされ共さいしやう太刀ひんぬいてとびかゝる悪太郎是をみてつゝとよつてかいつかみ二つにさつと引きき木のえだにかけ置扱も見事のながめやなはるはまづさくむめさくらなつはうの花あきはもみち是らはつねのながめぞかし人の二つにさきたるはめつらしやおもしろやと打わらひそれよりも山中さしてぞ入にけるかの悪太郎がふるまひせん代もんのくせ物やと皆ほめぬ物こそなかりけり

### 三たんめ

かくて其後さかたの平太公時は此ことしらでいたりしにくらまよりしそなたちくだんのよしをのべければ公時大きにおとろきこはもつたいなきらうせきや其儀にて候はゞそれかじむかひに參べしとしそをかへしそれよりもくらまの寺へといそぎける是は措置悪太郎山中をかけめぐりこらうやかんをゑじきとなしいわかんせきをすみかとしてさもゆう／＼とぞすまひけるかゝる折ふし公時は山中をかりまはし爰やかしとと尋ける山ぢはるかに入みればいわがんせきをうがら石をかさねてついちとなしたいぼくこぼくをねぢ切てさうにたかくつみならべおくのくらき所にはともしびにまつゝのえださもおそろしき所有是はいかさまおにすむ所成らんいかなれば我子はすむましきと思ひなからふしきさに立よつてみてあれはあかくちゝみししやぐまのやう成かみ打かゝるすきまより只日月のかゝやきてくもまを出るごとく成大のまなこをみひらきさもすさまじきこはねにて何物成ぞとあやしめける公時あつとあさましくみ聞に我子の悪太郎也やれすさまじききやつがふせいや打てすてんと思ひしがさすかおんあひのことなればすか

してつれてかへらんと只今は来るは父公時にて有けるぞ此比おことにあはされはなつかしくおもひつづ是までむかひに來りて有りそざとへかへれと有惡太郎聞よりもぢゝ公時とは何物そあしくうろたへけがするなそこ立のけとぞいかりける公時は聞たまひはるゝ來かいもなくあゝあひそうなきことばやなおやは子をおもへ其子はおよを思はすとは誠になんぢが事成べしと石打たゝきうらみけり惡太郎打うなづき父ならば聞給へうき世にすめはやかましやおん身も爰にすみ給へ是へゝこてまねきしてなふゑじきは山中にみちゝたりたまゝいつればみる人の我をおにとてにくるこそ世におもしろきたのしみなれつのゝはへぬ斗こそ残りおほけれ公時とてからからとそわらひける公時今はあきれはてやれさてなんぢはいかなればさやうの口を開けるぞ我身四十に及てたまゝ子をひとりもては中ゝみにくきすがたをもいつくしくながめなしせいじんするにしたかつて世にたのもしく思ひしになんじがやう成あく人にてちゝがめいにもしたがはずよくせんぞをあらわしてはぢをばあたふる物かなあゝあさましの我身

やとたけき心もわすれはてさめゝないてそ立にけるなけきのこゑに惡太郎おんあひのやさしさはあらしき心もしほゝとしほれはてたる有さまにてかほさし出しいふやうはふけうゆるさせ給ひなはさとへかへり申べし去なから歸りても物ならへのかくもんいたせとの給はゝふつとかへり申すまし其時公時打わらひ扱もゝ我子かな我わらんべの心入とつゆもたかわぬうまれ付此うへはともかくもさらはかへらん今とていわかんせきをけちらししゆく所をさしてそかへりける是は扱置くらま山にてほうゝ命たすかりにげてかへりし在所の下人共すぐにみかとへさんだいし惡太郎からうせきのだんつぶさに打たへ申ければみかとけきりんあさからすやかてにしきのかうじへちよくしたつ賴光何事やらんとゑもんつくろひちよくしと打つれさんたいす時にまでのかうじの大なごん仰出されけるはいかに賴光なんぢがらうどう公時か一子生れなからおにたるよしほうけつ近き九ゑにすませ置だにいふせきにくらま山にてらうせきなし其上今度そう正の方へ御きねんの事有御ちよくしにからはしのさいしやうをさしつかわさるゝ所に

かの山にてさいしやうを引さきし事第一京都の騒ぎといひ君げきりんなめならすいそき惡太郎をひたちの國へ流し置其上諸人にかはりたる物なればきつとろうしやいたさすへしとの御事也則かさまの左衛門ともはるにあつけらるゝとのちよくちやう也賴光せんじかうむり畏たりとてやかて御所にそかへられけるやかたになれば公時おや子を召れかやうゝの次第也ふびんにはおもへ共ちよくめいなれば力なし惡太郎をひたちの國へる人いたさせよとのちよくめい也やがて申なをしきらゝのしやめんをさしくださんと忝も大將も泪ながら御れんに入らせ給ひける公時御ちやうのだん承り惡太郎に近付なんぢがあくたう天子へまで聞へのがるゝ所更になしいそぎひたちに下るべしと泪くみて申所へかさまの左衛門ともはるあはたゞしくはせ來りはやおそしとてあいさうなげに申ける公時間てゑゝ口をしや賴光の御ため思はずはたとへ王いは背く共いかてひたちへ下べきいと申程ならば恐らくはすは八まん日本國がうごく共公時おや子はちつ共勤き申ましとはぎりして申ければ惡太郎ちゝに近付ながされ參といふことは何の事

にて候ぞ公時間てふびんやなんぢはげにこのしさいもしるまじきとがの有物をはとをき國へおくる也必ながされ行とても左衛門殿の御心にばしをむくなよともにかくにも仰にしたがい申へし惡太郎聞よりも何ながされ行と申事我等はかつてん參らねは御めん候へ參ましきと申ける公時間ていやさやうのことならすいなといわば賴光の御ためもいかゞ也王いをそむくにあらずや惡太郎聞て其王いをそむくとはかつてがてん參らずばいやゝいづくへもふつと參るまし參らばくらまへ參へしと下らんきしよくはなかりけりされ共公時色々にすかしつゝやがてむかいをつかはすべきとやうゝなだめ下しけるいそぐに程なくひたちにも付しかば惡太郎君よりのせんしにはろうしやと仰出され共御身のちゝ公時殿天下ふさうのゆうし成其うへ御身もようちなればわか心へにてろうしやをゆるし申也しばらくこのやにおはしませとさもねんころにぞ仰けるあく太郎つくゝきゝいつにしほれぬまなこより泪をはらゝゝとながし扱も有かたき御なさけやゆうしの道をおほしめしかずにもあらぬそれかしをかくまでの御ほうしいつのよにか

はわすれ申べき我等是まで下りしも頼光の御ため父のめいおもきゆへ下りては候へ共さりとては今までももしもろうしやをいたしなばてつせきにてつきかためくろかねをわかつてつくり立たるろうなり共たたひとふみにふみやぶりとかなき御身を八つさきにと心かけいまで／＼おもひしにいまのなさけのことはのすへきもにめいしてよろこびたりこのうへはあびたいじやうのことくなるくるしきろうにもいれたまへいとわじものをとさしうつむき涙くみていたりければ皆御まへの物共おにのめにも泪かなとよきにいたはり奉るかの悪太郎が心の内あはれ共中々申斗はなかりけれ

#### 第四

##### 公平たんじやうき

さるほどにそれ三がいのいんぐははのかれがたき物なれば一たび國のみだれけるゆへをいかにとたつぬるに爰にかうづけしもつけのしゆご山すみのへつとうはん官時かけとて三國にならびなきぶゆうめいの弓取有げにあく太郎が女ばうのかたりおきしごと

くみかみやまのむかでのけじんたりもとより佛法しやうげの物なれば此國をみださんためむまれ出たるきどくには力は申は申に及はずはやく事いだ天のごとくべんせつはふるなにこへたけし尺にあまつてほうひげさうへくわつとはへまなこのぞこにひかりあつて一にらみにらむには人たましいをうしないいか成かうせいりきしも立すくみいすくんで身をはたらかす事あらずわつとさけぶ一こゑにはいわかんせきもわれ碎けて山家本ノマ、河ノ衙也もくする、斗也あひまもるらうとうにはいわもとにうだうだんさいし、風平次ゆきむね山木のへん藏としはる三人の物共はいか成いんぐわのきしつにやあくを聞てはよろこびせんをみてはそしりをなすましやうへんさのあくきやく物君をうやまひ奉る有時の事成にかれらをひそかにまねきよせいかになんぢら物を聞かの源の頼光は何のかうみやうあつてかかく我まゝにふるもふぞや其うへ用にもたゞざるひえの山のほうしばら三井寺の入道らかうやさんのびく共にくはぶんの所領をあたへてきとう所などゝうやもふこそくぢのゆへとはいひながらかたはらいたくおほゆるなりいざ頼光をけちらか

し天下一同にきりしたがへあさひしやうぐんとあ  
をがれんはいかにくと申けるいわもと承り御ぢや  
うもつともにて候へ共わづかなるせいにていとへ  
打てのほらんはちつとあやうく候へばまづしやうく  
わくをかまへつゝきんへんにふれをなしたせいをも  
つておしのぼらせ給ふべし我君様とぞ申けるはん官  
聞て此ぎ尤しかるべしとていちくとしたいにふれに  
ける此こと都にかくれなくきんりには大きにげきり  
んあつてにしきのかうじにつかひ立又頼光も此よし  
を開付きんりをさしてぞあがらるゝろしにてちよく  
しにたいめんすぐにさんだいなされける内よりのせ  
んじにはいかに頼光なんぢもさだめて聞つらんと  
國の時かげむほんをくはたて京都へうつてのぼる  
よしいそぎかうつげに立こゑほんぎやくのともから  
を一一についてばつせよとのせんじ也頼光せんし  
承りいさ畏いて候かの時かげと申物人りんにかはり  
まわうのほうをおこないつうりきじざいと承る此た  
びはそれがしちしん罷立天めいにきする時かげをさ  
んしの内にふみやぶりおつ付しやうらく申さんと御  
まへを罷立しゆく所をさしてぞかへらるゝやかたに

なれば四天王を近付此たびはぢきに馬を出すべし又  
きんりの御しゆごにはしやていやまとのかみよりち  
かに渡部のつなうらべのすへたけ此兩人をさしそへ  
てのこさるゝ扱又御ともの人々にはさかたの平太  
公時うすいのさたみつ其外都合三萬八千よき御家の  
白はたさきにをしたてていくはん十五のれき二月十  
日に京都をたつてかうづけさしてぞ下らるゝ此こと  
天下にかくれなく時かけはやぐも聞付らうどう共を  
近付ていとより源の頼光打てむかふとふうぶんす  
國中ちかく取かけさせてはかなふましと家のしんか  
にいわもと入道しゝ風平次ゆきむね其外侍大將には  
山木のべん藏としはるほうしむしやにはぼう州しど  
みのせいがんかつさのたくま坊此もの共を大將とし  
てつかう五萬七千よきいつの國はこねたうげにちん  
をはり都せいを引うけ一さゝへふせぐべしきだめ  
てかみがたせい二萬か三まんにはよもすぎし一まく  
りにおつふせすぐにていとへせめのほるべし今十日  
とたゝざる内に天下の將ぐんとあをかれんはたゝい  
まのこと成へしはやとくゝとしきつていさみ仰け  
れば承り候とて大せいを引ぐしはこねとうげへいそ

ぎける是は扱をきみなもとの頼光はいそがせ給ふほどもなく是もいづの國はこね山にそ付たまふそれより兩ぢんよせかけてたかいに時をつくりかけひ花をちらしてたゝかいけしいくさ中ばのこと成にきん時とさだみつは此たびのいくさに御身のおんひそといひあはせし事なればたがひにおくれをとらじとられじとぬけばたまちる大やきばたちかせくもやさそふらんと五尺八寸まつかうにさしかざし大をんあげたゝいますゝみいでたるつわものをいかなるものとおもふらん忝も天下のしやうぐんみなもとのらいくわうの御内にさかたのきんときうらべのさだみつこのたびのいくさ大將たまわつたりちかづきよつて手なみをみてらいせのうつたいにせよやつとよばはりけり四天王ときくからに五百よきいんにとぢてうつてかゝるをたてさまよこさま十文じまつかうこびたいさうのこてほろ付どう中びざ口たかもゝをしなへてはらりゝと打ふするへんしの内<sup>本ノマ、</sup>にしにんのやまたかふしてかけ引のみちもたへたきに事なるちしほにゑいせんぢんごちんしどろになつて一どにはつとぞにげにけるかゝる所へばう州しどみの清がんか

づさの山なしたくまばう是二人は時かげがほうしむしや大方のゆうしやのとうりやうとさだめらるゝめいたいぶさうのかうの物ないゝぶげいをかうまにするげにも公時さだみつがおにかみとてもかやうのはたらきにつかれぬ事よもあらじくみとめんとゆるぎ出はん官の御内にはうしむしやの大力有とは聞もおよび給ふらんとてつぼうをふつてかゝる兩人きつとみておふみごと成むしやぶりかなまいりさうといふこそあれ公時さだみつつかゝと立よればばうふりあげてはたと打ひらいてぼうをおつ取らんとしたりけり法師共もとられしと玉のあせをながしゑいやゝとねぢあひしをたもつてひやうどはなつおぼへずまあおけにどうとたおれしを付入てふみかへしからめて二人共にひつたてげにゝこぼうたちばらふりかへり聞しにはにやわぬひやうりかなゆめをみたるやうにたばかられ口をしやと物にくるひておめきけりごほうしにくるいはどうりゝ本ぢんへは今少さはがてあゆめゝと引立ければ二人のほうしは大ちにどうとすわり中ゝいきながらはぢはさ

らさし爰にてともならんとなきさけふ兩人みてゑゝ  
めんどう成ほうしめとかいつかみひつかづきほんち  
んへぞかへりけるかのきん時さたまつかてからのほ  
どほめぬものこそなかりけれ

### 五たんめ

さればにやはこね山のかつせんは公時さたまつかは  
たらきゆへてうてきの物共皆おつちらされはこねの  
せきを打やぶられやう／＼おだ原さかはのまへにち  
んを取折ふし其夜大雨しきりにふりければさかはの  
水かさまさつてわたりもそらにならさればていと  
くん兵心はたけくいさめ共むなしく日かすをおくら  
るゝ爰にあはれをとゝめしはさかたのすくね悪太郎  
十二歳より人と也はや十五にぞ成にけるさればけ  
したるうまれなれはかんこつ日々にかさなつてたく  
せんたる事日にましひとへにりきしの如く也其比東  
國さうどうしぎやくしんいをふるふくせ物とほのか  
に聞て悪太郎あつはれむねんの次第かなすわやか  
出かしこへゆきてうてき時かげとやらんとひつくん

でくびねぢ切其をんしやうにしうの御かんきをもゆ  
るさればやと太刀おつ取出けるがいやましてばし我  
心なさけ有ともはるにさたなくゆかば年月のおんの  
わするゝ所也しらせばやとおもひつゝともはるまへ  
に畏承れは此比かうつけしもつけのしゆご山木の本ノマ、  
官時かげこそぎやくしんをくはたてはたを上げ國ど  
をなやまし候よし承候へばそれかし御いとま申請か  
れか國へ打こしざうひやうとましわり時かけとひつ  
くんでさしちがへ候はゝいたづらものゝ名もきよめ  
ちうの物とよばれん事しゝても我が身のほまれ也あ  
はれ御いとまを給はんやたゝしいなやとうかいひけ  
るともはる聞て打うなつきけなげ成心さしは誠にこ  
うしのことばにも三くんのすいはうばふ共ひつふ心  
さしはうばはれしとの給ふ如くに御身のかゝるいぶ  
せき大てきにたゝひとり打こへ時かげをうたんとは  
とうらうがおのなれ共わかき人のおもひたつ其しん  
ていのおとなしければそれかし身ふせうなれ共らう  
どう共をかせいにつかはし申さんと有ければ悪太郎  
承りこは忝仰かなまつ此たびはぞんずるしさい候へ  
はたゝ一人はせこへまいりたきよし有ければ此うへ

は力なしかの時かけと云物はじんつうふしきの物なればよくくしりよをめぐらし本望をたつしつゝめでたくきこくおはしませはやくくしと有ければあく太郎よろこびいとまごいしてそれよりもしのびやかに出立かうつけさしてぞいそぎける國にもなれば爰やかしことさまよひまづ城中をみわたせば三方は山高くせきがながいとそひへてはたにふかうしてながれ有一へんのくも跡をうづみ鳥ならではかけりかたし扱一方は一き打のほそ道に所々からほりほらせへいをかけやぐらかいだてかきならへさかもきしげくひきければ是も又いかゞしてしのび入べきやうもなくあきればはてたる斗にて時をうつしてしのびけり是は扱置時かげははこね山の合戦もさだめて大せいつかはしぬればていとへ打てそのほりつらんと心にかけることもなくつねに國中の物共をめしあつめしゆゑんゆうけうまた有時はよきゆうくんをめしあつめうたをうたはししゆくさまくにおごりける又今日は大かげ山へたかのに出べしそれくようい仕れと數百きをめしぐして大かげ山へぞいそぎけるさる程にあく太郎此よしを聞よりもくつきやうの仕

合かなかれがかへりを待かけてみぢんになさんとはがみをなし扱道聞さだめそれよりも山かげに立よりすゝきのしげみに身をかくし今やくと待にけるあんのごとく時かげ大せいを引ぐしろしすがらのなぐさみにこ鳥をとらせて來りしがすゝきのへんにてきつとこまを引とめあゝらふしぎや今爰にてけしからぬむなさばぎ肝にこたへておほへしは何さま此時かけをねらふもの有べし人間にはおぼへなししかくまかどくじやかそれくさがしてみよ承り候とて大せいの物共爰やかしことたづねけるあく太郎是を聞すはやてきにさとられたりとらへられて近付ひつくまんとおもひておのれとあらはれ出にけるやれふしぎの物有とて大せいやがて取付なわをかけんとひしめきけり大將御らじんでしばらくしばらくさなせそそれらしきのこわつはが國土の力を身にたもちちゝうの如く手あしが八つ九つ有とても何程の事の有べきとちかよせておのれいか成物成ぞなのれきかと云まゝに日月の如く成大のまなこをみひらきけれ共惡太郎こと共せすあざわらつて立ければ時かげけうさめはいかに我一めにらむにはいか成かう

せいきしもたましいをうしないそらをかけるつば  
さまでちにひれふしけるに此わつはから／＼とあざ  
わらふつらたましい何さまぼんぶのわざならす名を  
なのれとぞ申ける惡太郎すかしてうたんと心さしい  
やさやうの物ならずとさらぬていにもてなせば時か  
げ聞てなんちはたゞ物にてはよもあらし去ながら此  
わつはうつてに來るものにもせよ又はへんげの物に  
もせよ大かうにみへければ我かけらい共成なばめし  
つかはんとぞ仰ける惡太郎聞よりも有がたき御ぢや  
う哉ともかくもと申上る時かげ聞ていしくも申たる  
物哉なんぢには日本國を半分をしわけくれても惜か  
らじそくさんぶそうのらうどうか去なからなんち  
がつらたましい我につかゆる物にてなしさはいひな  
がらおもふ所存是あればいそぎ此太刀かくべしと  
てさし出す惡太郎うけ取て心の内におもふやう此太  
刀にて切てすづべし去ながら若木太刀にてもやあら  
んとおもひ御めんなれとすいとぬいてみてあればた  
まちる斗のつるぎ也一ふりきつとふりまはしあつは  
れ御太刀候やあはれ此太刀ほしさよと本のさやにぞ  
おさめける時かげみて打わらひ扱もしれたるわつは

かなおのれに其太刀とうするぞ心にくき物あらばそ  
れにてうてとの給ひてきたつてぞかへりける惡太  
郎よきわいとおもひければかの太刀をずわとぬきと  
んで、かれば時かげやがてとんでをり取てふせおの  
れはおんをしらぬやつめかな此ふるまひは何事ぞと  
きつと取てしめられいきもはづみ手も足もしびれま  
なこも暗む斗也され共惡太郎につこと笑ひちやくと  
ひやうりけるは扱は我しゆくんにはさり共にあいた  
る人かな我此ごとくにして此二三か年の内に切たる  
主君卅人に及べり心をみ付て奉公いたしもういをふ  
るひ天下に名を上げ申たき所存にて扱かくのこと  
くに候いよ／＼主君にあをぎ奉らんといつわりけれ  
は四そうをさとの時かげもやす／＼とたばかりれて  
から／＼と打わらひ扱はさやうに有けるか此上は  
いよ／＼ちうをはげむべしと我やをさしてぞかへり  
ける扱あく太郎は御とも申ひそか成所に立よりあき  
れはて涙をながしあゝ口をしやむねんやな心にまか  
せぬはらたちや三日か五日のぶる共おもふ本望たつ  
すべしとこぶしをにきりはがみをなししのびかねた  
るありさまもつとも也ともなか／＼申はかりはなか

りけれ

## 六たんめ

さるほとにふびん成かなあく太郎時かけを打そんじむねんたぐひはなかりけりいかゝしてかはうつべきとほうせんとしていたりしがつくく物をあんずるにいやくかれに近付より手づめのしやうぶかなふましなにとぞけいりやくにて打べしとあんじわづらいいたりしがあまりねむさにありし所をまくらにしせんごもしらすふしにけり爰にばんだいかいけにすみ給ふ母うへあく太郎がまくらがみに立給ひいかにあく太郎なんち時かけをねらふことしやうくせよろこびたりかの時かけはじんづうの物其うへ大力といひてづめのしやうぶはかなふまし此城の西の山に八まん大ぼさつのくうでん有此みやのほうでんにむかしもろこしのましゆら王此くにへせめ上りし時すみよし大明神やわた八まん大ほさつあつたの大明神是三じやの御がみ立むかひすまんぞうの舟共をあくふうをもつて打わり大將ましゆら王をいけ取うみ

にしつめ給ふ此ましゆら王がゆみたけ六尺五寸くろがねにてつくりたり同かぶら矢二筋有此弓はやをさしはさみひく時はちからも入すむかいにめあてをいたし心にくはんねんしてはなつ時はおもふかたきをあやまたすじんへんきどく有弓なれば我てうへわたりつゝ今西の山の八まん宮にこめて有いそぎ此ゆみにてかりばのかへりあしをねらひたらばおもふ本望たつすべしはやとくくとの給ひてかきけすやうにうせ給ふ惡太郎ゆめさめかつはとおき扱はたいいまづけしらせ給ひし我等か母にてましますかやあらこいしのはうへや今一たびまみへましますとしのびなみだをながさるゝいとむかしがこいしくてちきん時の事がおもひ出されかくかたきをねらひしことゆめにも主君頼光さまにも我かちゝにもやかて御めにかゝらん物をと心中に思ひ入はゝのをしへにまかせつゝ八まん宮へぞいそぎける山にもなればかなたこなたをたつぬれはもりの内に物さびしたる鳥る有立よりみれば八まん宮とがく有扱は此宮にてあるらんとかんぬしにことわるまでもなしとて我と宮へ立あがりとびらをひらきかのゆみとやを給はりおし

いたゞき此ゆみやにてかたきをおもふまゝにほろは  
しなは宮でんらうかく玉をかゝげ一々にこんりうし  
奉らんと心中にきねんしてまづ弓をしはりすびきし  
てあつはれ御ゆみ候やいにしへくらま山にて鳥けだ  
物をいころせし時けいこせしことなればやす／＼い  
ころさんとゑみをふくみそれよりも我やをさしてぞ  
かへりける扱時かげはおごりのあまりにかうつけ下  
つけのさかいに高なし山とて大山の有けるがけふは  
かりばに出んとて家のこらうとう引つれ高なし山  
へぞいそぎける山にもなればたにみねにせこを入た  
ぬきいのしゝうさぎさるおほかめきつねをかり出し  
あるひは二かしら三かしら思ひ／＼にさしとめけ  
る悪太郎は本よりしかおうかめにはめをかけず時か  
げをと心ざし時をうかうひいたりしがよきわいを待  
うけよつひいてひやどはなつあやまたず時かげがむ  
ないたをくつといぬきうしろのかしの木にたつたり  
けりやがて立より時かげかくび打をとしむかふ物の  
まつかうこびたいあたるをさいわいにさん／＼に切  
にけりのこりし物共是をみて人間にてはよもあらじ  
と皆々かうさんしたりけり時に悪太郎其ぎにて有な

らばいそきさかわへむかふべし承り候とて城中にの  
こりとゞまつたる家のこらうどう二千よきを引つれ  
さかはをさしてぞのぼりける是は扱置さかはにてさ  
さへし兵共ふせぎたゝかふといへ共四天王に切立ら  
れおい／＼ににげ歸る中にもいわ本入道だんざいし  
しかせ平次打もらされ大いきついでかへりけるあく  
太郎是をみてむかいよりしきりに馬にむちうつて來  
物はいか成ものぞと尋けるらうとう共是をみてあれ  
はまさしく時かげのしんかいわもと入道しゝ風平  
次にて候と申あく太郎是を聞ねがふ所のさいわいか  
せいのでいにもてなしいけ取にせんとて人よりさき  
に立て何とて方／＼は御かへり有ぞと仰ければあま  
りあはてふためきさん候かたき後より大せいおつか  
け候ゆへふるさとへ歸り出家の望にかへるなり御身  
たちはそれにてふせぎたび候へとふるひ／＼かけ  
とをるをいづくへにかし申さんと馬より下へ引おろ  
し二人共にたかてこてにいましめ都をさしてぞのほ  
りけるかゝる所へ都せいさかはのちんを打やぶりい  
くさ大將出木のへん藏としはるを打取けれ共いわ本  
ししかせを打ちらし後をしとふてせめ下る道にては

たと行あひたり頼光御らんじさだめてかうづけより  
かせいのせいにて有らんあれけちらかせと有ければ  
悪太郎つゝ立上つてきみかたはしらね共只今大將  
時かげに下るらうどう共がくび取て立上る兵は一天  
下の將軍源頼光の御内成さかたのすくね金時か一子  
悪太郎としつもつて十五歳できならばよつてくめみ  
かたならば名をなのれいかにくゝとよはわつたり大  
將御らんじて扱はひたちへなかし置たる悪太郎にて  
有けるか我こそなんぢが主君大將頼光也と名のり給  
へは悪太郎馬よりとんでをりかうべをちに付はしめ  
おわりを申上げて畏る父公時はをみて是はゆめかや  
うつゝかやなんぢか母がうみおとせし時天下るい  
たひのゆうしと申せしが更にちがはず此たびのはた  
らきかんじ入たり今よりはかんだうゆるすぞとて御  
まへ共はゝからずあふぎをもつてあをきたてかの公  
時のよろこひもつとも也とぞみへにける大將御ゑつ  
きかぎりなく悪太郎を御そばちかくめされ此たびの  
ふるまひせんだいみもんのかうみやう今よりは悪太  
郎を引かへ坂田の兵ごのかみ公平とげんぶく成こそ  
めでたけれ扱それよりも都をさしてぞのはらるゝて

いとなれはくゝしだいにさうもんすみかとゑい  
らんましゝゝて此たびの手がらのだん申にいとまあ  
らすいよゝゝ天下を相まもるべしとかさねてせいい  
將軍源のあそん頼光に被成ける時のめんぼくよの聞  
へ悦びいさみ我やをさしてかへらるゝちゝ満慶にた  
いめんし時かげがくび御めかけ扱いけ取たるらうど  
う二人ほうし二人をはくちうにかうべをはね天下一  
とうの御代をおさめ給ふすへはんじやうめでたき共  
中くゝ申斗はなかりけれ

鶴屋 喜右衛門板

# 澁根悪太郎

## 第一

金時都いり　すくねの悪太郎

それつらく、くんしんのれいをおもんみるに、きみきみたらずといへども、しんもつて、しんたらずんば、有べからず、とんでれいをこのまさるときは、わざわひ、其身におよぶといへり、爰にせつつのかみ、源のらくわう、天下の、ふしやうたりしとき、御家のしつけん、さかたのみんなさんととて、るいたひぶさうの、ゆうしあり、しゆつしやうをたつぬるに、一とせらくわう、きよはらのう大將のざんげんにて、ちよつかんをかふむり、あしから山にしのばせたまふ、折ふしいづくよりとも、しらまゆみ、やたけ心のたぐひなき、なにしあひたるあしびきの、山ちをめぐる山うばか、らくわうに、奉りし其子也、其時よりきみにつかへ、四天わうとがうし、すどのかうみやうひるひなく、其けんじやうに、するかの國をたまはり、ふちうの城にきよちう有、ゑいくはにくらした

まひける、家のはんじやう日につて、御子一人扱たまふ、其名をすくねの悪太郎と申、十五さいになりぶゆう人にすくれせいじんの後は、四かいに其名をあらはしばんみんおそれをなせし、坂田の公平是なり、扱又家のかりけんには、せいぼくせんしさへもんさだきよ、なんほくべつたう太郎はるちかとして、じんぎをまもるゆうしたり、其外諸侍、日々にしゆつしはひまもなし、有時公時すくねを召れ、我なか／＼さいこくせしめ、都の事心もとなし、近日上らくせん、るすの内よく／＼國をまもり候へ、おつ付き國いたさんと、人／＼にいとまをこい、せんじ左衛門御供にて、ろしのけいゑいはなやかに、都をさしてぞ三重上られける、是は扱置、其頃三條の中なごんみつあきらのきやう、ちよくめいをかうむり、くわんとうのこくしとして、いづの國みしまのしゆくに下ちやく有、たみのせいすい、國のいらんをたゞし給ふ、さるによつて、東八か國の諸大名、こくしの心をなぐさめんと、しゆ／＼のちんくはをと、のへ、我も／＼としこう有、日夜しゆつしひまもなし、されはすくねの悪太郎も、父のだいくわんとしてつめられける、爰に又森國

のぢう人、ほんまむさしのくんじ、藤原のひでみつかちやくし、けんもつうこんのしやげんみつなが、しやていすけのしんひで時、かれ兄弟は、い國のちんへい長良か、ひじゆつ、ごんそんしが、ひせし道を心がけ、力はやわぎ、およそばん人のわさならず、と皆人おそれをなしにける、兄弟共に御前にあひつむる、こくし立出給ひ、一座へしきたいあつて、さかづきすこんかさなり、よもやまの物語事おはつて、さしきもひつそとなりし時、さがみの國の住人とよたの左門きよさねすゝみ出申上るは、爰によき御なぐさみになさるゝ人、さいわい御まへに相つめられて候、あはれ御所望なさるべきかと申けるこくし聞召れそれはいか成ことやらんさん候是に候みつなか兄弟は兵法のめいよをつかはれ八か國にては何れもしやうくわん仕候一きよく御らん候へかしと申上るそれ何よりもつて時のなくさみしいかはてうていのもてあそびぶしたる身のたしなみ是にすぎたることよもあらしいそいび所望致れよきよざね畏てやかて兄弟に打むかい御へん達のたしなみ上によくしろし召れて御所望有いそひて仕られ候へ兄弟本よりけつつきさかんに

して我等二人にうへこす物あめが下には有ましきとつねくかうまんふかければはいかるけしきもなく御所望ならば一手つかひ申さん何れもよつく御らん候へともつたいを付しつとりと立出る其きよすねおつきよりしなへ取よせいざ一きよくとすゝめける時に兄弟しなへおつ取いざぎざれ參ると兩方聲をそろへさつと切むすぶだうけつ<sup>本ノマ</sup>かへしつあふつまくつうけながし太刀色をみてつかくくと切こふでまいつたくくくとつこへくくくはらりとほぐれてそれまいつたとひきよくを盡してもみあひしは時に取てのけんぶつやと一どにあつとぞ感しけるこくし御らんし扱もはけしくつかひわけたる太刀打のたつしやさよがんの付やう身のひしき誠にみ所有けるおもしろやとこうしやうにほめ給ふしやうけんかつにつてかやうの事はべちにかはりしことも御ざなく候爰に長良がひぐくのでんにてきの太刀をひりきをもつて打取と申ことの候其りはてき大力にまかせあるひは大太刀大長刀系物くをひつかまへるしやくもなく打てかゝるをこなたはわずか九寸五分のよろひどをしななどにて敵の大太刀打落しりをうる事の

候一手御前にかけ申さんしかしながら我々兄弟仕  
候は、本よりあいづの事なりとあざける方も候べし  
何れにてもゆうりきの有人、いかやうの大太刀な  
り共大長刀系物、御出候へそれかしあふき  
をもつて打おとし御めにかけて申さんとはいかりなく  
こそ申けるすくねもくねんとしていたりしが扱も人  
もなけ成いひぶん哉おのれならでは兵法を存したる  
物もなきやうにぞんぐわい成事をはき出すとがめば  
やととんで出しかいや、それかしとなざしを致に  
こそ其上こくしの御前なりと聞かぬかほにてこいね  
ぶりしてそいたりける其時介のしんす、み出何とす  
くね殿はつね、大力成とこうげん有と承るそとお  
あひてになられぬかと只一こなしにこそ申けるすく  
ね今はたまりかね何とそれがしはおあひてにはとつ  
とぶてうほうに候はん去ながら御なぐさみのためな  
れば御へん達のおてき、とそれがしかふてうほうの  
おかしきそとあて、人々のわらひぐさに致んとに  
つことわらふて立出るしやうげんこれをみてきやつ  
はない、につくし、と思ひしに是をついでに打  
ひしがんとゑみをふくみおくよひを心かけやいさそ

とつたへ申さんと力こぶを出ししなへおつ取立あが  
るすくね心へたりとそば成とこのだいのはしらひき  
はづしかる、とふりまはし参り候と打てか、れは  
人々中へわつて入是は、いつきやう千萬何とや  
らんいしゆ有げなる有さまかなひらにむ用とおしわ  
くるすくね聞いていや、いしゆいこんの身にてはな  
したがい侍のたしなむぶだんのけいこ成になに  
さはなしたまへととんで出る人々さへぎつてとめ  
たまふ其時しやうけんいかにもせかぬふりにていや  
いやすくねさやうにむほうむたいにそゝらず其てま  
へをみせんとおもはれなばてにあふたる物を持しと  
やかに出たまへ何と成共其方の望次第に仕らんとさ  
も大やうに申けるすくね聞てさればこそそれがしか  
こぶしには此はしらがつくにあひ申たりごへんさ  
いせんのかうげんには敵の大太刀をあふぎにて打と  
むるといふ長良がひじゆつのでんをもつて打取たま  
へと又打てか、れば是は、と人々さま、せい  
しける其時介のしんす、み出いかにすくねかやう成  
ざしきにて其ごとくみをすて、あひ色もなきはむど  
うしんと申て兵法の道にはあらず只ぢんじやうに手

まへをきよくしあひたまへすくねからくくと打わらひのふせんぢやうに望んではでんぶもきやしやもらばこそ力にまかせかたはしより打やぶつたるこそゆうしとは云べけれごぶんがうでのたゝぬゆへきやしやだてをこのまるゝは尤なれ共ぐんぢんにては必くびをうしなふ物ぞかしかねてはたい此ぶてうほう成すくねをよつくみをいて手本にせよとあさわらふてこそいたりけれひでときことばをつがんとすこくし御らんししばらく兩方共一りづゝ是有しやうげん兄弟かはやわざさんせんけんぶつ致にあやまる所なし又すくねいまだじやく年なりといへ共ゆうりきの有事是第一のてうほうなりかんのかうそのしんかに長良ははやわざはんくはいはゆうりき是一とうしてこそ名をばん天に上たり然ば方くも心を合一とうせばすへくに至つては我てうのはんくわい長良とよばれん程のきりやうなりかまひてあらそふことなかれとことめいはくにけんだん有然共しやうげんちつ共心打とけすひざをしなをしいかにすくね只今の御でうに付てもゆうりきはつたる斗にてもぶだうの道しらがればゆうしとはいひがたしたとへ一た

んりをうる共かへつてけつきのゆうしやとてぐんしよにはきらひし也それかうそ七十よどのたゝかひにかうそわずか十萬ぎをもつてかううか百萬ぎに打ち天下一とうにおさめしも皆是長良がぶりやくたり其上兵法の道といつは忝も長良つねにくはんをんしんかうし一心にりしやうをあをくわんをん則くはうせきかうとげんし給ひ四かいたいへいにおさまるほうを三りやくのしよとあらわしさをすけたまふさるによつて此ほうをつたへてこそ國とあんをんにはおさまれりそれのみにかきらずまゑんけしやう取付時ぐん法のひとのもんしゆをんじつたいさんがうまけんたんじやうとなへつるぎをぬいてたいしすそうじて兵法のいとく上げてかぞへがたしごへんかごとくけつき斗に身をまかせまつにふしのからむやうにすぢつつもぢつつねぢあふてきすい成有さまさすがわかけの至なりよくふんべつ致れよとにかにかしくこそ申けるすくね聞て誠に思召よられたる御いけん近頃しうちやくいたしたり去ながら御へんこそせかいに人もなげに申つれ其上ゆうりきはつたる斗にては何のやうにもたゝぬと申は是聞へざるい

ひぶんかな尤長良かぶりやくにて八か年後やう／＼  
かんにおさまりたると傳へたり御へん思ふべきか我  
等ごときのふてうほう物は七年八年なか／＼くらさ  
んよりけつきにもせよあらぎにも致れよ敵と聞かば  
只一すちに打取か又はこなたが打るゝか二つ一つに  
せうぶを付うきよの内をさらりつとあけたる事こそ  
ましならぬ扱まるんけしやうのおそろゝ兵法のしゆ  
もんそれはおくびやう成其方達の取さたぞ亦くはご  
んなれ共それがしがあらん所へまるんけしやうとの  
はちつとしんしやくせられ申さうあしくうろたへま  
なこにさへざる物ならばたとへたい六天のまわうな  
り共力にまかせ取て引きさすてんには何のひみつか  
入べきやとこともなげにぞ申けるしやうげんごんく  
につまりせき色になつて扱もいさぎよきいひぶんか  
なしてまわう成共御へんは手取にせんと申か何しに  
いつわり申さうか然らばこへんもよつくしつらん當  
國北だにごんげんのはやしにまゑんすんでひるだに  
人のかよひなしあまり口ひろきいひぶんなればこよ  
ひかの所へゆきせうこを取て來られかしすくねにつ  
こと打笑ひ扱ごへんはまるんのはよつくおそろ

しき物とおもはるゝよな尤／＼おくひやう心にはた  
うり／＼こへんしるしを出されやすわ八まんもしや  
うらんあれさつそくゆきて歸るべしとぎを打て申け  
るこくしをはしめ一ざの人々是はいらざるせんぎひ  
らに／＼とめたまふすくねこらへぬわか物いやい  
やさにてなしかつうは諸人のため其上ぶしたる物の  
かやうの事聞すてに致はまつ代までの人々のあさけ  
りいかにしやうげん何とせうこは出さぬかしやうげ  
んごしたることなればおゝいさぎよし／＼それそれ  
北たにおくのいわやにごんげんのちうもつにしらは  
しのかぶと有取て歸る物ならば御へんが望に一めい  
なり共わたさんとせいしをかい渡しけるすくねや  
がてくわい申し思ひよらざる時のきやうかの所へ行  
むかひうろたへたるけしやうなとの候はゝ二つも三  
つもいけ取て歸らんとづんと立てそれよりもいわや  
をさしてぞ三重いそぎける去ほとにうこんのしやう  
げん心におもひけるはきやつをあんをんに置ならば  
いか成ふきかいたさんとかくいわやにかくれて何  
心もなく來る所をやみ打に打ひしぎまるんけしやう  
のしはざのごとく二つ三つに引きさこほくのえだに

かけをきなは人のうたがひ有ましきとあんすまして  
八かく成かしの木のぼうをひつさげすくねよりもさ  
きに行ぬけくだんのいわやにかくれ<sup>り</sup>お<sup>く</sup>今や／＼と  
まちいたりかくとはしらず悪太郎何様せうれつあら  
わさんと思ふ心を一筋にからくれないのきぬをむす  
んで肩にかけはかま<sup>ま</sup>のもゝたちたかく取しらあやた  
たんでではちまきにむんずとしめひとをもつれす只一  
人いわやをさしていそぎける頃はきさきすへつか  
た風すさましく雨ふりてそこ共しらぬ山中にわけて  
入こそゆゝしけれくだんのいわやにはしり付ないじ  
んをみてあればとうみやうほそ／＼ともし物さひた  
る其けしきけにすさましくぞみへにけるやかてない  
じんに入くだんのかぶとをおつ取南無北だに大ごん  
げん此かぶとすこしの間かり申明日へんしん申さん  
としんせんをふしおかみ歸らんとせし所に岩やの内  
よりされたるかうべをなけ出すすくね心へたりとい  
ふよりはやくとんで入むんずとくんでうへをしたへ  
とかへしけるしやうげんたくみし事なれはいかにも  
してたにぞこへはねかへさんとかうまの力を出しお  
しつかへしつねぢあひしがすくねもとより大力かん

がうりきを出しゑいやつと取てふせ腰のかたなひん  
ぬいてすでにさゝんとすしやうげんかなはずのふ  
のふしばらくまたれやすくね殿何さはつ此けしやう  
はそれがしかなをよくしつたりなげに誠につねの人  
げんとはばつくんちかはんさんかをめくる山うばに  
三代のかういんさかたのすくねの悪太郎成<sup>本ノマ</sup>かなにと  
こたへたるいやけしやうにて候はすうこんのしやう  
げんみつながにて候すくね聞もあへず扱はけしやう  
もとき／＼はひやりをつかふなしやうげんかなにし  
に是へ来るべしむようのものにばけんよりしやうた  
いをあらはせとにか／＼しくぞおしかくる何か大り  
きにしかれしやうげん力もつきはてたにしにいつわ  
り申さん御身の心をひきみんなめなり御ゆるし候へ  
と手をあはせてこそ申けるすくねにつこと打わらふ  
ていや／＼しやうげんどのか此悪太郎になとくみし  
かれたまふ人にてなしゆるしたまへとよわげをはく  
ほうけものにてはおりのないかさよつくしやうげん  
にばけすましたるばけ物やと上おひといてたかてこて  
にひつしはりくだんのかぶととくびにひつかけさせ  
さきにおしたてこくしのやかにか<sup>本ノマ</sup>へりける誠に天下

に名をあらわし今にさかたのきん平とよばれし事こそもつ共なれあつはれきたいのでけ物かなと皆かんせぬものこそなかりけれ

## 第二

### しやうげんむほん井に惡太郎に生捕るゝ事

こくしのやかたにはおのゝよりあひたまひせんぎさまゝなる所へすくねの惡太郎しやうげんをちうもんのまつの本にからめをき一人おくにとをる人々御らんじやあ歸られたるかすくねしてゝへちのしさひはなきかすくね聞てさればさき程あせ水になつてあらそひもしせんかはりたることもあるべきかとそんしはるゝまいりて候へ共それがしまなこにはかつてまみへ申さすすゝゝと罷かへり候となにとなげにぞ申ける其時すけのしんむかゝとたち出いかにすくねごへんまいられたるかひつちやうな中ゝいかにひつちやう候しからばしるしなきことはよもあらじにせうこなきとはあふやがて心へたりさすかのいわやはましやうけわしきげんさんなればひるだに人のかよひなしましてやいんの事なれば

御へんもたくみのうへのこうげんとはばつくんちがい心はやたけにあるべきかゆくことさらになはす道よりかへられたるきしよくあらはれたりいかにいかにと申けるすくねきいてあふげにまことかにはかうにせてあなをほるとせけんにいふはよくいふたおのれが心にひきあてたるいひぶんかなさほどうろんにおもひなばたしかせうこをあらわさんとしやうげんを引たてもしかやうの物もせうこに成べきかとひきすゆるこくしをばしめ人ゝは是はゝとあきればてゝおはします時すくねおしなをつていかにすけのしんやあ何とせうこをみしつたるかやあ何とてものをばし本ノマ、かぬ則此かぶとはごんげんのちうもつよなまつたきやつめはすでにねぢころさんとおもひしか共しやうげんみつなかなりひらにゝとかうさんをしてたせしゆへふびんにおもひとかくからめて來りたり扱何れもへ申けしやうめがしやうげんかよつくけんぶつなさるべしやれすけのしんなんちも共にまかり出まなこたまをみいだいてよつくみわけようろたへ物とたゝかけてぞ申けるこくし御らんしたがい

のろんな是までなりまづそれゝとのたまへば人

ひとつけたまはりすでになはをとかんとすすくねお  
さへてあゝしばらく／＼ためて是はそこつになは  
をときつかまれたまふな／＼あゝすすくねぎやうも大

本ノマ、

かた成がよき物ぞまつこなたへ來られすすくね聞て  
何れもの御しんぢうにはさきやうであらすとおほし  
めさうが八まん／＼それではないすてにそれがしい  
わやにてすこしなり共うろたへなばやみ／＼といぬ  
じにつかまつらんひつちやうなりしからばぎきや  
うとは申されず此うへはかれが一めいを取べけれさ  
りながらいらひにくちをきかせまじきためのせうこ  
なりとしやうげんかしたるくもはらひといふたち  
をおつ取扱いましめのなはをとくしやうげんむねん  
におもへ共一ごんつかわんことばなければきやうだ  
い共にまつかたはらにそしのひけるその／＼ちこくし  
すすくねをめされじや、年なりといへ共一しんをきは  
めうむのせうれつたりすゝことこそしんびやうなり  
と御さかづきを下さるゝかたじけなしとちやうだい  
し大かはらけに三ごんほしいまはおいとま申べしい  
かに人々しやくはいものにて候へばふれいは御めん  
候へと人々にれいきをのへ本國さしてそかへりける

かくてそのゝちうこんのしやうけんみちなが兄弟打  
つれ父ひてみつのまへに出こんどこくしの御まへに  
てすすくねの惡太郎とかよう／＼のあらそひ仕りて候  
すなはち其座にてさしちがへんと存しか共よしなき  
あらそひにしまけせんかたなくはてたるなとゝいは  
れんははしのうへのはぢかさねてちりやくをもつて  
ほんもうをたつせんとぞんしむねをさすつてかへり  
候いかさまにも御しあんあつてたまはれとはがみを  
ならして申けるひでみつきて扱もむねんの次第か  
な此ことそのまゝさしおかんは家のちしよく是にす  
ぎずかれかたちへふんごんで打はたさんよりべちの  
ぎはよもあらじいそぎやういをつかまつれこしらへ  
よなんぢらと身もたへしてぞくるひける時に家のか  
うけん大しき傳太左衛門おも／＼しくすゝみ出との  
のはらだち尤にて候へ共さすがかれは天下のまれも  
のといわるゝ物の子にて候へはかれをはたしたまふ  
とおほし召れ候共一つは天下にたいしてはゝかりお  
ほく候へばまつ此たびは御しあんあつてごにちの御  
さたか然べしととめけるひでみつきてなんぢらが  
申もりがきこへぬではないきこへたれ共まつあんじ

てもみよ一つは家のきずではないか家にちをあへし  
てうきよにすむことは一時ても此ひでみつはかんに  
んまかりならぬよしは天下にたいしてむほん人とい  
はれんなそれこそぶけのしゆつせなりことにわれ藤  
原のひろもりに三代のかうゐんあふちを出てとをか  
らず然其時のうんによつていたつらにはなゝきさと  
のむれ木とくちはてんとおもひしに是ぞじこくと  
うらいたるへしかれをはそくぢに打ひしぎことつい  
でにぎへいをあげ國くへくわいぶん狀をつかはさ  
んしからば東八か國にとうけをうらむるさふらひお  
ほしそのせいをゐんそつし一命をなげうつて天うん  
のはからんよういせよとぞおほせけるそのときあい  
ばら大せんのすけまかりいで尤ぎよいしごくいたし  
て候さほどにおほしめすうへはたれかいぎにおよふ  
べきさりながら物はやぶるにちかしすくふにとをし  
さすかのしろもめいしやうなればすちつをこめてた  
たかはんはゆめくかない候ましまつこんどはいか  
にひそかにようちかけにおしよせあしもとからとり  
のたつことくにはたくくつめよせじやうにひ  
をかけ一どにとつとのりとらんかのしろ一かしよほ

つらくせば八か國はもはやてしたにつき申さんとさ  
もいさぎよくぞ申けるひでみつくわんくんと打うな  
つきなんぢか申だんほとんどわかしんていつうじ  
たり時をうつさすうつたてとふれしやうかいでばん  
どうかいだうにさしつかはしさてまたその身は手せ  
いすくつて三百八十きひそかに國をうつたつて 三重  
さかみをさしてぞおしよするやはんすぐるじぶんに  
ふぢさはじやうへおしよせ時をとつとそあけにける  
しやうにはおもひよらさればうへをしたへとかへし  
けるされ其家のしつけんへつとう太郎やくらにあが  
りなにもものなればやちうのろうせきそのしやうたい  
をはき出せ其時しやうけん一陣にこまかけ出しなに  
なのるまでもあるへきかいしゆあればこそよせてあ  
れとうくはらをきるへしと大おんあけてよはゝつ  
たはるちかからくんと打わらひあふいしゆあつてよ  
せたらばそれにしはらくまでやとてやぐらをゆらり  
とんでをりそれがしふせがんその内にめんくもの  
のくつかまつれとたせいの中へわつて入とうさいへ  
おひなびけなんぼくへまくりたておもてもふらすい  
きをもつかせすしうわうむさん<sup>本ノマ</sup>にたゝかひけりその

ひまにみかたのせいわれもくときつて出 三重ひは  
 なをちらしてたゝかひける頃はちやうとくわん年  
 十二月十三や月はくまなくさへければたゞ日中のご  
 とくにてたかひにそれとなりのかけうつゝうたれつ  
 はげみをなす爰にしやうげんみつながいかにもして  
 すぐねにめぐりあひ太刀うちせうぶをけつせんと  
 大たちひつさげむ二む三にきつてまわるされ共めぐ  
 りあはされば大おんあけいかにすぐねの惡太郎およ  
 そこゑにてもきゝしらぬあいてにふそくはあるまし  
 きいてくせうぶをけつせよと天もひゞけとのゝし  
 つたり時にじやうの内よりなんぼくのべつとう太郎  
 ちつとひけんいたさんと一もんしに打てかゝる心へ  
 たりときりむすびたがひにひじゆつとつくしけるべ  
 つとうさそくをふんで太刀をしやにひつかまへおと  
 りかゝつて打たちをしやうげんしつとゝ合せすさつ  
 てすそをはらゝばむざんやはるちかゆんでのひざ口  
 わられたぢくとする所をくびちうに打をしいか  
 にすぐねきたなくもいであはぬはひころのこうげん  
 にはにあはぬおくひやう物やとしろをにらんでたつ  
 たりけりかゝる所にわかむしや一きすきまもなくか

いくゝりよはごしをむんずとたくしやうげんさあし  
 つたりと取てふせせんぎまんぎのかたきよりおのれ  
 をこそまうちけたれとかぶとちぎつてみてあれはす  
 くねにてはなかりけりしやうげんはつとをどろき扱  
 おのれは何物ぞわきさか兵ごか一子かもんのせうの  
 りもとなんちかためにはよきかたきはやくびとれと  
 ぞ申けるしやうげんきいて扱はせん年こそさしばら  
 の合戦に打しにせしあきのりかせかれよなにくやに  
 くやおのれをうたんとのいくさにあらずしうのすく  
 ねきたれと申せいくさ中ばのじやまげだうおもへば  
 にくき小くはじやめとみぎのかいなを打をとしあひ  
 そうなくつきはなすのりもとむねんにおもへ共ごた  
 いさらになはすはをくしひばつてひく所へすぐね  
 のあく太郎からめてをふせぎいたりしかたちかへつ  
 て此よしをみてやあそれにひかへられしはせんしつ  
 いわやにて御げんざん申たまゑんどのにて候なすく  
 ねあく太郎是に有きこそそのそみにおはすらんさりな  
 から身がとうがくびをうつにはちつとうでかふるを  
 うぞだうをすてしつかとうたれよみつながはらに  
 すへかね太刀を八方にかまへすなくと打てかゝる

すくねみておほ見事しや／＼それたゝそれてこそは  
打れた物なれまいるといふてつほうとりなをしす  
きまをみてはづみをちやうとうつたまいつた／＼し  
やうげんすかさずむんずとくむすくねにつことうち  
わらいねんふつ申せみつなかとゑいやつととつてふ  
せくびをかゝんとせし所にさいせんのかもんのせう  
うれしげにてはせ來りかやう／＼とかたりけるすく  
ね聞て扱はさやうかやれしやうけんめいんぐははた  
ちまちむくふたるよな只今ねちくびにせんはやすけ  
れ共一時成共うきめをみせおのれに思ひしらせんと  
たかてこてにひつくゝり取てひつ立はなをそいでま  
つこんどは心あつてたすくるぞと敵の方へぼつこみ  
扱もせうげん殿のよしなきいくさをし出しはながも  
なきていたらく長良がくん本ノマ、法所にもすぐれてはや  
きにげぶりやあのおし本のはやさよとつとわろう  
て引かへすつもる年は十五歳おにかみより猶まされ  
とて皆かんせぬ者こそなかりけれ

## 第三

すくね母ろうしや並惡太郎うはい取都に上る

兩方たかひにはげみをなし防きたゝかふといへ共よ  
せては大せいあらてを入かへせめければ城中の物共  
皆こと／＼打れあとにのこる物とては年よりたるを  
く侍あるひは女わらんべ爰かしこによりあひていく  
させんぎとり／＼なり所へすくねか母くれなひの五  
つぎぬにくろかはおどしのはらまきおなくこぐそ  
くさしかため長刀をよこたへいかにすくねいくさの  
次第心もとなしとのたまへばすくね承りさん候よせ  
て大ぐんにて候へばみかたこと／＼く打しにつかま  
つて候去ながらそれがしを千ぎ萬ぎ共おほしめされ  
御心やすく御座有べしとさもいさぎよく申されたり  
すくねたとへかたきはなん十まんぎあればとて一  
しんをおとしつけおや子たがひにきつて出たゝかは  
んにそもなにことのあるべきかみづから女なり共心  
はおつとにちかふましうしろつめしてゑさせん心や  
すくおもふべしといさめられしは誠にすくねが母程  
有とはめぬ物こそなかりけり所にかたき大せいよせ  
かけ時をとつとそあげにけるすくね心へたりときつ  
て出るはゝもつゝひて出たまひみづからさきをかけ  
んあとをこなせと一もんしにかけ出むらがるてきに

わたりあひはらりと三重ないだりけりいまだ時  
もうつさぬまに三十六きなきふせ残りしやつばら東  
西におつちらしおや子手にてを取くんで城中さして  
引たりしはめをおどろかすばかりなりかたきひでみ  
つ諸ぐんせいに下ちしていはくかれらおやこ切て出  
るはもはや城中に入はなきとみへたり今一どつと  
かゝりなは又切て出ん其時よはと引ならばかつ  
にのつてはつかけんそのひまにからめてより廻り城  
にひをかけ中に取こめ打とめ尤此ぎ然べしとてす  
けんのしんひで時ぐんせいすこしく引つれからめて  
にまはりけり扱じぶんをはかつてしよぐんせい又き  
ど口におしかけ時をどつとぞあけにけるすくね太刀  
おつ取かけ出るを母取ておさへやれすくね此たびは  
ながをひむやうなりしばらくとまれとのたまへばみ  
みにもさらに聞入すしやうもこりもなきやつばらか  
なとてつほうをおつ取打てかゝるもとよりあひずの  
事なれはむら／＼ばつとにけさつたりいづくまでも  
とおつかけたり其ひまにからめてより城中にみたれ  
入びやうぶしやうじにひをかけ天下かすみとやきは  
らふ母はつとかけ出よせての中へとんで入むかふか

たきをさいわいにねち首つゝぬき人つぶてめをおと  
らかする三重ばかりなりされ共大せいおりかさなり  
母をいけ取まづかたはらにひいたりたりすくねひの  
てに驚き取てかへしみてあれば城にはくろけぶりも  
へあがりくんせい八方にはいゝんすなむ三ぼう母  
はなにとなられしとたけき心もよりははて涙にくれ  
ていたりけるやう／＼涙をおさへもゑたつ中をとび  
めぐりかたなこなとたつぬれと其ゆきかたのしれざ  
れば扱は打じになされしかもしかたきにいけとられ  
たまふかやなにとなりゆきたまふぞとおにをあざむ  
く惡太郎もたゝよは／＼となりはてのふ母上さまは  
いづくにましますぞとかきわけ引わけよべとさけへ  
とかいぞなしなにとなりなん我が身やとしばしきへ  
入なく斗扱も／＼あさましやかくなりはてんために  
こそひらにながをひむやくそとゝめたまふを聞入  
ずかたきばかりにめをかけてもつたいなくも母うへ  
をかくなす事の口をしやさそやぶつしん三ぼうも我  
をにくしとおぼすらんなむやしよてんせんじんも是  
を慙み今一と母うへにめぐりあはせたひたまへあな  
こいしの母上やと我みをだいてぞなきいたりしよじ

のあはれとみへにけるあゝおくれたり我心しやうし  
やひつめつゑしやちやうりたとへ此いくさおこらず  
共いつまでそひはて申べきふつつと是をおもひきり  
しよせんてきぢんにかけこみかたはしよりこくひや  
くみぢんに打ひしき母のきやうやうにほうせんとか  
け出んとしたりしがまてしばし我心もしもかたきに  
いけとられたまひなば御命すくふべき物よもあらじ  
ゑゝ八まんゝはやりすぎたりゝたとへ打しにな  
さるゝ共又いけとられたまふ共此惡太郎があらんか  
ざりはかたきをあんをんに置べきかまつ此度ははゝ  
のししやうを聞とつけそのゝちあんひをきはめんと  
思ひながらもむねふさがりなみだをそでにをしまき  
てかたはらにしのひける心の内こそ三重むねんなれ  
是は扱置かたきむさしのぐんじひでみつふぢさはの  
城をせめおとしよろこぶことはかざりなしされ共  
すくねがゆくすへをいかにもしてさがし出しちうせ  
よとせんぎさまゝ成所へはゝをいけ取御前にひき  
すゆるひでみつはつたとにらみやれわ女はすくねが  
母成よなふてき成せがれゆへさやうのなんにあひさ  
ぞ口をしくおもふべしすくねをいつくへおとしたる

ぞ有のまゝに申べし少もいつわる物ならばかうもん  
せんとぞ仰ける母につこと打わらひやれうろたへ物  
こへんなさ程うろんにてかやうの大事をよく思ひた  
れたたり扱もぶしのおれくすかな女なればとて侍の  
つまとあらふず物ががうもんにおよぶがせつなきと  
てはくしやうをいたすべきや誠にてん共ち共たのみ  
をかけし我子の行へかたきにしらするうろたへたる  
物のあるべきか打もゝいぬねこにおとりたるとひ  
ことやとあざわらふてこそおはしますひでみつはら  
にすへかね扱もかうじやう成女めかなしやつめをさ  
いのめにきざみおもひしらせよそれゝとあれは畏  
てひつたつるそのゝち大しま傳太左衛門すゝみ出御  
てうにて候へ共かれは女のことにて候へはとかくお  
んびんの御さた然るべし其うへすくねをうたんはか  
りことにはくつきやう一のことにて候其りといつは  
母をばろうをつくつておしこめ道のほとりにせきを  
すへたかふたを立られ候はゝさすがおんあひのちぎ  
りすてがたく母が命をすくわんとおのれとあらわれ  
きたるべしとてに取やうにぞ申ける尤此ぎ然べしい  
そひで其だんしつらへ畏てやかてよいをしたりけ

るかくてひでみつおたわらにちん取てくわいぶんの  
まはしぐんせいをもよふすに此とし月けんいにおそ  
るゝ諸侍あるひはふるきよしみをしたい我もゝと  
はせ来るまつするがの國にはきつかはしきぶの太夫  
ありしげしそくさませうしげさだ手せいすくつて三  
百よき三つわちかひのしらはたさゝせはせ来るかい  
の國にはたけだの太郎かつのり二百五十きいんそつ  
しすそくろにもつかう付たるはたさゝせつゝひてこ  
そはせ來れむさしの國にはうへすぎはんぐわんよし  
うちやくしぎやうぶのせううちまさ三がいまつの  
はたさゝせ是もつゝひてはせ来るそののみならずひ  
たちしもをさあはかすさいづさがみの人ゝさうじ  
てばんどうの八へいじむさしの七たうさきとして三  
つほしくやう二つ引三本たけふしのまるひだりども  
へみぎどもへまいづるとびづるつれちどり二つかし  
ら三つかしらつなぎ馬にはなれこまくさづくしさん  
びきさるばしやうばしゆるうはかしわのはうちわの  
もんにあふぎのもん家ゝのはたさゝせ我もゝと  
來りけるむねとの大みやう三百よ人つがふ其せい十  
一萬三千よきさらほしのこくぐんをなしてしこ

する大將きゑつのまゆをひらきまづかまくらにいぢ  
うして東國より打て出ぐんひやう二てにわかつてほ  
くろくどうをきりしたがへ中國は扱をき四國西國さ  
んようだうなんかいだうに至までこゝく打取日  
本をしたかへんはたな心の内なりとしよぐんせいを  
引ぐしてかまくら入とぞ三重きこへける是は扱置い  
たはしやはうへはつめろうにおしこめたかふだを  
たてすくねおそしと待いたり母つくゝとみてあな  
物しやか程の手すさみ引やぶらんはやすけれ共我は  
女のみなりすくねか命にかわらんことねがふ所とよ  
ろこびあはれあく太郎あんをんにて君の御ように立  
ならば今のおもひはよもあらじと涙にくれておはし  
ますはあはれ<sup>り</sup>おくなりける次第なりかくてさかたの  
悪太郎いくさやふれて其後はかた山さとにかくれい  
てせけんのやうをきゝいたりきん國た國残りなく皆  
かたきに一みしてかけをかくさん所なし一たび都へ  
のぼりかせいをうけて今のむねんのさんせんとおも  
ふ心を一すちに都をさしてぞのほりけるまりこのし  
ゆくをみわたせばせきやとおほへてたかやぐらみへ  
ければ扱はかたきそれがしをといめんためのせきや

なりとおぼへたり何きたんたひとひしぎに打やふらん物をとはかみをならしてゆく所にむかふよりひやくしやう一人みのかさひつかうではせ来るすぐねかに近付やあしばらく物とわんあれにみへたるしんせきは何のためぞとみんこたへてさればそとよさがみの國のふちさはのしろくじやうに付すくねのあく太郎をちゆきしが其母をいけ取あれにみへたるろうにおしこめゆきゝの物におもてをさらしたかふだをたてふだのおもてにきんじつちうすべき物なりもしあく太郎あらわれ来る物ならば母か命をたすけんすくねかゆくゑたすねんためのせきなりとかたりけるすくねはつとおもひ扱は母上いまだうきよにまします事こそうれしけれやあどみん我こそすくねの悪太郎也我一人とをらんなたとへくろかねのもんなり共打やぶらんやすけれ共はゝうへの命をすくはんためなりむしんながら其みのかさをそれがしにゑさせましきかと仰けるとみんはつとおもひ扱もすさましきものに出あふたる物かないぎにおよばゝねぢころされんはちてうなり扱も承り及たる悪太郎さまにてましますか只今のあくごんはまつひら御ゆるし候

へさやうにおちぶれさせたまへばこそ我等ごときのにてのべたるみのかさ成其何しにじたい申さんとふるひふるひぬぎすてゝ逃んとするを引くゝめ扱もなんぢは心やさしき物なり是はこれ此ほうひとてはだにさしたる石丸といふ太刀をゑさすどみん心に此人はあらものなりとうけたまはるがあまりやさかたに申は此太刀にて只一打にあふことかと取てもおぼへずおすゝ取ておしいたゝぎあまりのことにとうてんし御れいを申さんとて扱もあぶない事にて候とあとをもみずしてにげにけるすくねおかしく思ひしが是只事にあらす此みのかさをゑる事一糸に八まんのりしやうにて有へしとこくうを三どらいはいしかのみのかさをちやくしつゝせきやをさしてそ三重いそぎけるかゝる所にあとより馬のり一きはせ来るすくねふしきに思ひ下人に近付いか成人にて候ぞ下人聞て是はみやさきの左門殿と申人成がまりこのめしうとを東國へ下べしとのでういをかうむり只今めしうと請取に參らるゝはといそがはしげにとをりけるすくね是ぞくつきやうの事とおもひ山のそわをはしり

人々皆くそでをしぼらるゝ金時泪をおさへあまりの事にむねふさがり御いとまをもこはすしてざしきを立渡邊そでにすがり是は金時いづくへか御へんのけしきたゝならずまづ上いをかうふり出たまへ金時聞いていやさべつにいつかたへ行べきか爰をはなしたまへやいやくそれがしのさつする所ちがふまし有のまゝにかたりたまへ金時聞てされは渡邊とのまづあんしてもみたまへや一人持たる子を打せ一國の城は打やぶられ何にめんぼくあつてうきよにながらへ有べきか敵は百萬ぎもあらばあれ此一ねんをたつし申さで置べきかでういをかうむるも時によるごめんなされとかけ出るを引とめ尤それは御みが心も此渡邊かしんも同前たり去ながらことあらぎにしてかなふましまつしばらくとせんぎなかばへ金時のしつけんせんし左衛門御前にまいりすくね殿の御上りにて候と申上る君をはしめ人々何と申はやく是へめせ畏てやかて御前にさん入す金時渡邊はくくと悦事はかぎりなし君御らんじいかにすくね此たびのなんさぞ心くるしく思ふらんいしゆをくわしく申上げよとの御ちやうなりすくね畏てさん候めんぼく

なく候へ共ちやういにまかせ申上げ候こんどくしの御前にてしやうげんみつなかとふりよに侍のいちづくをはげみたちまち打てすてんと存候へ共一つはこくしの御前をはかり一めいの其かはりを此太刀をひつ取思ふまゝちしよくをあたへ候其いしゆをもつてかくのごとくろうせきに及候あはれ御かせいを申うけ本望をたつしたく候と泪をうかめて申ける君ゑつばにいらせたまひそれくとのたまひてくだんの太刀をめしよせられさやをばづし御らん有にしのぎのかたにたいらのだんじやう藤原のもりひろに四代のかうゐんけんもつうこんのしやうげんみつながとうるしをもつてかいて有扱もなんぢはふゆうたつせしわか物哉さすがにかれは東國にてはならびなきかうの物と聞及しに年にもたらずあらそひにしかつといひ其上かやうに太刀まではい取心ざしのたつしやさよさすが金時か一子たる物かなさしも御ひさうのこたか丸といふ御太刀に取そへられ則すくねに下されまづきうそく致べしとの御ちやうなり忝と御前を立かさねての御ちやうにはいかにめんく此くとゑんゐんしてはゆゝしきさうどうたるべし時をう

つさず敵つゝいとうのせんぎ有べしと仰ける其時金時  
申上るはかやうの事いでき候も一つはわたくしのし  
ゆくいよりおこつたる事にて候あはれ御ほうしんに  
此度の打てをそれがしあつかりたく候と思ひかうて  
ぞ申けるらいくわう聞召れ尤さありといへ共是わた  
くしのしゆくひにあらず天下をみだすげきしんたり  
よりみつ馬を出すべし何れもよういされよ金時本ノマか  
さねてぢやういをいはひ申に候へ共かほどのことに  
御馬を出され候ことあまりもつたいなく候せひ此た  
んは思召わけられ下さるべしとさへぎつてごん上す  
君げにもとおほし召れ其ぎならばよりのぶ大將にて  
五き内のせいをそつしむかふべし去ながらすくねは  
ていとにとまるべし畏て御前を罷立おの／＼ようい  
を三重したりけり是は扱置爰に又渡邊のつながちや  
くしみたの源次郎ちゝと一所にざい京していたりし  
が此ことを聞よりひとしく供人すこしく引ぐし金時  
のやかたをりおくさしていそぎけるあんないかうて  
すくねにたいめんし扱もめづらしのすくねまつもつ  
て此たびはなんぎにあはれしか共けんこにて上ら  
れ我一人の悦ひ是にすぎす候それに付此度は君より

とゝめたまふゆへていととゝまりたまふと有かひ  
つぢやう成かすくね聞てされば此度は父と一所に罷  
むかはんと色／＼ごん上いたし候へ共御ゆるしなく  
其うへ御せんよろしかるましきとおや共さへきつて  
申ゆへかれ是もつてのかれがたくせんほうつきはて  
ていととゝまり候何と殘おほきことにあらずやと  
物ぐるはしげにこそかたりける源次郎聞て其ことそ  
れがしも此たび御へんのはしめていくさにあはれた  
るがあまりうらやましくせひをんとも仕りいくさと  
やらんをけんぶついたさんと此由をおやにかたりつ  
れはちゝ渡邊申せしはかりそめながら此度のかたき  
てたてをめぐらすよしなれはていとの内心もとなし  
かさねてせんぎ次第に跡よりかせい致へしとさらに  
しやういんいたさず然共此度はあとのことをおも  
われずあまり御供いたしたく心をくだいてあんする  
に爰によきてだての候とかく人なみにはこへんも我  
もかなふまじぐんひやう共に打まぎれ跡よりぬけて  
下らんと思ふはいかにとかたりけるすくね大きに打  
うなづき扱もたくまれたり源二郎御へん程成あんじ  
や日本は扱置とうと天づくにもよもあらじ其ぐん

兵にましはることか程ちかきてだてを此すくねがふんべつにちつ共さし出ずさらばよいを仕らんごにちに御せんさく候は、御へんと我一所に御かんきかうむらは思ひのこすことはなししや何事かあらん時もうつるにはや／＼心へたりとてまつしやうぞくをぞ三重したりけるすでにくくけんきはまれば御大將よりのふ公はしめての御ちんだちの事なれば國／＼の諸侍さも花やかに出立家／＼のはたさ／＼せつかふ三萬七千よきにちやくとう付長とくくわん年卯月六日にていとをうつ立たまひける爰にみたの源二郎すくねの惡太郎人におもてをみしられしとちぎれしくそくかたにかけやせたる馬に打のつてわざと跡にぞさがりける既にごうしうあはづか原にてせんちんごちんのそなへをたてしよぐんせいの手わけをなし東國さしてそ三重下らるゝ此ことなをもかくれなくむさしのくんしひでみつかまくらに座をすへしよ國のぐんせいもよふをすになびかぬくさ木もなかりけりよをひにつひて打程に三川の國おかぎきにちんを取都せいおはりのなるみまで罷むかふと聞ゆさらば爰にてあひまてと何れもやく所をかまへける大將ひで

みつ家のしつけんに傳太左衛門を近付けなんぢは敵のぢん所へ行つかいのやうに申なし人じゆ何程有ぞくはしくみてまいれ畏てそれよりもよせてのぢん所へいそぎけるぢん所になればあんないかうた内より本ノマ、何事やらんとことうひでみつ方よりつかひのよしを申金時それこなたへとをくへしやうじ扱何のためのおんつかひぞたかもちつゝしんでさん候ひでみつ申候は方々をもふけのためまかりむかつておかぎきの宿にぢん取て候只今それへ取かけ申さんやたゝし明日さう天に取かけ申べきか御かへりこと承はらんと殊めいわくにのべにけり金時もくねんと打うなづきあつはれきりやうの侍かな御へんはいか成物ぞさん候ひでみつのかうけん大しま傳太左衛門と申物にて候扱も聞及しよりふてきかなつかいにことよせぐんせいのけんみにきたるはまがひなしよつくみをひてかへるべしへんしはそれがしまいりじきに申さんとじこくうつさす立出るともの侍御とも申さんよしよしそれがし一人まいるむやう／＼とつかひと打つれてきぢんさしてぞ三重急ぎける陣所になればたかもちさきだつてひでみつにかくといふそれこなたへ

と申所へきん時つつとをりいかにひでみつ久しう候ごへん此たびぎへいを上げられかくの如くぐんせいをもよふさるゝはちか頃おてがらゝまづ只今は此ほうよりつかひをもつて申べき所にさうそくじせつにあづかるだんごへんのしそくしやうげんみつながそれかしゝ子あく太郎と少いぢづくをばげみ其いしゆをもつてかやうにくどをさはかせらるゝは侍のほんい尤かうこそ有べけれ則此太刀はすくねか取てかへりし太刀なりいかにもしやうげんこへんものぬしなればひきて物にゑさするなり有がたくおもひてうほうせよいかには成お侍しうきのふまでもけふまでもらいくわうの御をんをかうむりさいしをふちしめ身をたてし人ゝのよくこそぎやくしんに一身せられて候明日さうてんにかならずゝけれい申さんとずんとたつて出にける大將をはしめなみいたるしよぐんせいさても人もなげ成ふるまいかないぎにおよばず打とめよとをりかさなつてひしめいたり金時みてあらせくまひゝ方ゝをこくびやくみぢんに打とめんな何よりもつていとやすしきん年はこくどおさまりゆみはふくろに入つるぎははこをひ

らかねはたがひにいくさめづらしゝ明日はなゝゝしくつかまつらんそれまではかたゝゝかくびをみやう日まであつくるぞこよひはかりのちぎりなれば何れものくび共によつくなごりを惜まれよ扱此長刀はききもおよはれんしゆてんどうじをたいじの時らいくわうよりたまはつたるはんしやくなり共あつるに切れずといふことなしさるによつていわきりとなづけたりまして方ゝゝかなまくび五まんや十萬きることはりやうがはいをのむよりいとやすしさらばちつとあて申さんとおつ取なをしふつてかゝれはすまんのぐんひやううしろへじやゝゝとにげさつたりあゝひきやうゝゝ是はおとしのためなりしんじつは明日ゝ何もよさとうこされさらはゝゝゝとかうげんはいて立歸るか金時がいきをひまことにやまうばのいきしやうじんやとみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第五

金時ゆうりき并ひて時みつなかいこの事すでに兩方よりよするせいちりうの宿にてたがい

むらかつて時をとつとそ合ける金時まつさきにかけ  
出扱も方／＼はやくたくをたかへずさう／＼の御出  
近頃悦び入て候昨日申せしごとく長刀のやいばをそ  
つとひけんに入申さん今ぞしんじつなりくはんねん  
せよと大せいの中へわつて入はらり／＼と三重ない  
だりけりときもうつさすくつきやうのつわものを八  
十三きおなしまくらにきりふせのこりしやつはら  
つちらしあたりをにらんでたつたりしはげに人げん  
とはみへざりけりすまんのぐんひやう此いきをひに  
きもをけしそいろになつてひかへける所へかたきの  
ちんよりも大しま傳太左衛門高もち大せんのすけと  
もあき二人もろ共にてつぼうをひつさげかけ出さて  
もいひかいなきありさまやいで／＼いくさしてた  
た今打れしもの共のきやうやうにはうせんと二人一  
所にあひならんでまくりたてゝそ三重ないたりけり  
さしもいさみし都せい此もの共にきり立られむらむ  
らはつとぞくすれける二人いかつてゑゝきたなしと  
よかた／＼にぐるはかりかのふ成かかへせもどせと  
よはゝれ共おもてをあはする物はなし所に源二郎と  
悪太郎ゆんでのそわにぞ打ごみのいくさけんぶつし

ていたりしかみかたはいばくするをみていかにすく  
ねいまそくつきやうのおりからいざきやつばら打取  
君のおまへのみやけにせんもつとも／＼いざござれ  
とくろをくいつてつツといてさても／＼方／＼のあ  
りさまさき程よりけんふつ致すにみ事成はたらきと  
てもものつひでに我／＼をも打取たまへといかりける  
たかもちあざわらつて扱もやさしきわつは共かなお  
のれごときのかくわしやばら千人まん人ころせは  
とて物のかすにて有べきかうろたへまわつてふみこ  
ろされんよりはやそこ立されとぞいかりけるすくね  
こらへすやれうろん物わつはもわつはによるそかし  
まつくんであぢをみよとはしりかゝつてたかもちと  
むんずとくむ源二郎とびかゝりともあきひつくんで  
やこゑをあげてねぢあひける雨ほうきこゆる大ぢか  
らさらにせうぶはみへざりけりたかもちもともあき  
もさいせんあなどりたるとははつくんちがひさて  
もおのれらはなりににもにせぬふてきものかな人げん  
にてはよもあらじとひたひにあせをなかし爰を大事  
とはげみける何とかしたりけんすくねたかもちにお  
つふせられた源二郎みていかにすくねはねかへせや

れはねかへせとそゝろにちからをそへにけるすくね  
下に有ながら高もちかみぎのうでをしつかりとはめ  
いや／＼せくまひ／＼源次郎きやつはそれかしとつ  
たごへんかていろをあいまつぞそれ／＼ゆんでをは  
つておしかけこゑをかけてとつたる源次郎心へたり  
ときそくをふみこゑをかけてとつたすくねみておほ  
見事／＼したり／＼源次郎いでそれがしもしあけを  
おめにかけんといふよりはやくしやとつてふせくび  
かゝんとする所へよこやましん五同しん六一もんじ  
にはせきたりわかものどもかしころをつかんで引ろ  
けんとす所をめてにてこがいなをおつとりほぐれて  
まへにゑいやつと引ふせ下成かたき一どにこゑをそ  
ろへてはねかへす又ゑいとけかへすされ共かたきは  
さゆうより取つけは源二郎もあく太郎も今はあやう  
くみへにける所へ金時はしりかゝつて上成二人のか  
いつかみ大ぢへゑいとうちつくるそのひまに下成か  
たき一／＼くひを打おとし二人共にかしこまり君の  
御前はよろしきやうにおんとりなしなされ下さるべ  
しかぶとをぬくをよくみれば源次郎とすくねなり  
金時大きにおとろき扱も／＼なんぢらはか程心かう

にしてゆうりきさかん成べきとはしんりよにかけて  
おもはさりしにいしくもしたりやさすが渡邊が一子  
又はそれがしか子程有御前のはいかるも事による心  
やすくこなたへとゆんでめてにあいぐしいかにかた  
きのやつはらおのればら一きとうせんと頼みおかけ  
し大しま傳太左衛門大せんすけともあき其外横山  
兄弟を打とめたるわかむしやをいか成物と思ふらん  
一人は天下ぶさうのまれ物渡邊のつなちやくしみ  
たの源次郎生年十四歳今一人は坂田みんふ金時か一  
子すくねの悪太郎生年十五歳よつく手なみをみわけ  
やと二人の物をさきに立扱もみ事のむしやふりやと  
あほき立／＼あをき立てぞ歸りける敵のぐんせい  
をみてかれら三人にたてつがん事共はとうらう車  
をおさへきるにたり只はちをすてゝ命をつげと一度  
にどつとくつれ皆／＼かう人したりけりひでみつ大  
きにはらをたてゑゝあさましきぐにんはらあしてま  
どいに何かせん我／＼三人切て出る物ならばがんせ  
んにし人は山をつかとおおん上げいづの國のちう人  
平のだんせう藤原のひろもりに三代のかういん本間  
むさしのぐんじひでみつ同ちやくしみつ長二なん介

のしんひで時けふをさいこと思ひさたむる此上は心  
あらん人くはかけよつてくひ打てと三人もろ共打  
てかゝれはくもの子をちらすがことく八方へにげさ  
つたり所へ金時しつくとかけ出いかにひてみつ日  
頃のよしみそれかしはいやくしてゑせんとうと  
うはらを切たまへひでみつねがふ所と悦ひおよく  
こそ出られたり金時御へんの首を一めみてはら切る  
べしとはしりかゝつて打太刀をとびちがへむすただ  
くひでみつもなにしあふたるかうの物さそくをふん  
でねぢあいける金時みて敵に力をつくさせはづみを  
みすまし取てふせくびをかゝんとする所へみつなか  
ひて時兄弟共にはせ來り公時かさゆふのてを取引ふ  
せんとすされ共聞ゆる大力下成敵をひさにてつよく  
ふまへさうの手をさしのへ兄弟かくさをひつくゝ  
り扱大將の御めにかけて都をさしてかいちん有せんし  
うはんせいめてたし共中く申斗はなかりけれ

寛文四甲辰年正月吉日

# 公平花だんやぶり

## 第一

そも／＼君として下をなでしんとしてかみをおかさ  
ざればかならずこくかおだやかなりこゝにげんけ四  
代のそんいよのかみみなものよりよしこうすどの  
げきしんことゆへなくほろぼし四かいみなしづかに  
てたみのかまどもにぎあひけりされば御家のはんじ  
やう口をかさね御きんたちまつちやくなん八まん太  
郎よし家かもの次郎よしかねしんら三郎よしぎね何  
れもようがんびれいにしてしいかくわんげんにくら  
からずきうばのみちかきやうきわかきの春のはなぎ  
かり御ゆくすへはさぞ有らんとしよ人かつがうふか  
つなさかたひやうごきんひらうすいのせんじさだは  
る竹ちのげん太やすもとわだ左衛門ためむね同ひら  
いのくらんどきようぢぐわいどまるかげまさとい  
こくにも本てうにもたぐいまれ成かうの者ぎゝとう

とうとしゆごいたせはいか成天まやくじんもおもて  
をそばむるばかり也すでに春すぎなつもきてやよい  
なかばの事成に大將の御でうには北山のはなぎかり  
さこそとおもひしられたりいさや打こへしゆゑんし  
てた年のうさをはらさまいいかゝ有らんと仰ければ  
竹つな然るべう候とろしのけいゑいはなやかに北山  
さしてぞいそかけれる御てんになればよものけしき  
をみたまへばはるかにさきしむめのはなにほひほの  
かにのこりつゝみな人ごとにきくの花あたにはせじ  
となでしこのはゝきゝのしげみよりかすかにみゆる  
をもしろやげにうた人も心そへ此花をのみかきつば  
た扱せきちくの花まもりつゆのやとりとかるかやに  
こてうむれ／＼とびあそびいとゝ心のいさめしくひ  
も入あひのかね共につく／＼とながめあひはやよひ  
月のほの／＼と出させ給ふぞかた／＼ときやうにで  
うじてさかづきのめくれや／＼おぐるまのいまやう  
ろうゑいこゑ／＼にながめをつくさせ給ひけりかゝ  
りける所に竹ちの源太やすもとさかづきを竹つなに  
思ひざしくわだんのきくをおりきたり一しゆはかふ  
ぞ聞へけるいにしへの人のなをのみきくすいのなが

れたへせぬすへぞひさしきとゑいじければ竹つな聞  
てよろこびいかに人／＼いざ我／＼もつらね申さん  
とうざのめん／＼尤と申中に金ひらきかぬかはにて  
つんど立はるかばつぎにさかりつゝ若待にしやくと  
らせ人はともあれかくもあれ我は二ばの昔よりかだ  
うもせどうをもしらばこそ酒にすぎたるあそびなし  
とひきうけ／＼ほしたりけり竹つなみて又金ひらの  
れいの我まゝの出候をふざしきのきやうもさめ候是  
へ來り給へと申けり金平聞て尤あやまり候也ふれい  
はつねの事大事のうたのくわいの其中へ此ぎこつ者  
の參りてはさぎの中へからすの有に異らす御めんあ  
れと申ける君此由を聞召げにやきんひらはきんとき  
ににたり我かの道よかるべしちかうめせと打わら  
ひて仰ければ承りてたけち三うらそ立にけり金平ど  
うてんして下べをさしてにげゆくを兩人御でうぞじ  
やういぞさかたどのとてとめけり金平せひに及ず  
してやう／＼御前に罷出ひたいにあせをながしせき  
めんするこそおかしけれ大將御らんじいかにさかた  
すまんのときよりもうたの心はたけきものにて有  
やいなや金平つゝしんでさん候おやよりそれかしに

至迄かたき所を打やぶりとをきてきをてに取やうこ  
そ心がけ候かだうはつゆも存せず候也金平こそうた  
一しゆにつまり候とひはん仕らんはいなき事に御  
座候それかし一人の恥は四天王のちじよく君迄のか  
きんにて御ざ候今日のうたのぎは御めん候へとしほ  
しはと申けり大將御えつき淺からずげにやたけき物  
のふもうたには心やわらぐとやけふのゆふゑんは金  
平にてとめたりといざ歸らんと仰有ざしきを立せ  
給へばおの／＼御供仕る其なかに金平御供は仕らず  
して花壇のあたりへつゝとよりあら口をしや今迄は  
おに神とこそいわれしに一ざのちじよく取事はて  
きはよそにあらばこそこじんのつたへし如くはをか  
りてねをたやしききの本望はらさんとさん／＼にけ  
ちらかしにわう立にたつたりけり其中に竹つなは金  
平がみへざれば立歸り是を見ていかに金平盛りの花  
をいたづらに散し給ふは何事ぞさかた聞てけふのち  
じよくのむねんさにてきと思ひて打散し候也竹つな  
聞てそれは御ぶんのあやまり也花にとがはなきもの  
を御ぶんにとがの有ぞかしいかといふにせいけん  
のよにはぶんをもつておさめ亂るゝ時ぶにてしめす

さればぶんぶはくるまの兩わのごとし弓やうち物取  
てはおにゝもかみにもまさりたりと天下の者におそ  
れられなさけの道をふつゝとしりたまわすやゝもす  
れば我は一せうふぼんのおのこ也との給ふこそおろ  
かなれされば御しんふきんときも御へんのもちてな  
をのこす我等が父もあひをなしそれ侍のせんちやう  
にのそみ身をちんかいとなをしまぬはしそんのは  
んでう思ふゆへ御ぶんはつゆもわきまへなしあゝ掛  
年比たじなく思ふかひもなしかまへてゝ少は心を  
やわらけていか成人にもみへ給へなさけの心つかば  
必うたの道も有としみゝとかんけんす金平大きに  
ゑとくしてはうばいおゝき其中に竹つなならでたれ  
かはかくは申べき今迄のあくぎをばはらりとすてゝ  
なさけの道をねかふべし去ながらくげばらのやうに  
ほうづへつきて天のまもり物あんしいたす事金平は  
よもならじくげはうたぶけはきうばのやくそかし何  
のぐんしよにもうたにててきをほろほしたるためし  
を聞かす一寸さきはやみぞかしまよひしきつまりこ  
とあひそふなげに申せは竹つなもせんかたなくもて  
あつかふたるあふれ者やと打わらひ我やをさしてか

本ノマ

へりける竹つながかんげん金平が申ぶんよこかみや  
ふりのくせ者やとみな上下ばんみんおしなべかんせ  
ぬものこそなかりけれ

## 第二

扱も其後がいをはけんで一たんりをうるといへ共つ  
いには天ばつをまぬかれすこゝにきよはらの右大將  
のばつやうに清原のしやうせうあきひろとてゑつち  
うの國さかいがわにきよぢう有ゆうりきといひちぼ  
うといひるいたいめいよのゆうし也つきしたがふ  
所のらうどうにはとなみの入道がつしんとておもて  
はさながらやしやのことく力の程は人しらずかれが  
子共となみの太郎もりかつ同もりひさ三郎もりなを  
とていわがんせきのはせうになれいか成おに神をも  
あぎむく程のつわ物也其外付したがふ者共一人とう  
せんならぬはなし然れ共あきひろおほち右大將あく  
きより此かたくらゐ次第へさがりてくげ共ぶけ共さ  
だめなくさなからる人にことならす有時入道に近付  
いかにかつしん我うもれ木の花さかす身のなりはて

をいかにせん其上とう國近國のやつばら迄出入もせ  
んのみならずよになしる人なにとてまゆをひそめ  
うしろゆびをさすとかやあはれ時もいたれかしせん  
ぞのはたをさし上てとし月のうらみ一じにはらしは  
びこるげんじに思ひしらせななたい何事も身ふでう  
なれば口おしやとはがみをなして申けりかつしん承  
り尤御しんていかんしいつて候ほんもうをたつせん  
事おもふしてことかろしてをくだかずしておもんば  
かりをめぐらしかたきをほろぼすぶりやくはやすふ  
してなりかたしそもくむかしより今迄のげきしん  
のあらましをかんがうるにせんなればともなしふん  
あればぶりやくなしゆうりきあればあく人もぶんぶ  
二どうなればうんよはしうんのよわきと申も道をそ  
むくによりて也さればげんじぶしやうをとつて三代  
さればとうけの頼吉君の御あくはうを身にうけてあ  
んらくにくらすこと天ををかすむるにたりなれ共  
ちふかして人をなつくる事をのみふうんのつものこ  
とはり也先大<sup>本ノマ</sup>一大將のかうなればとてしそつなくて  
は一人のはたらき有べからずよくくふうをめぐ  
らすに君御とんせいにてましませばあともたへ候也

こくちうのかたふ立よらせ給ひてじやうをもうけ  
取けんめいのちをもさたし給へとひたすらに申なば  
日比は何と存共ふびんのくわへ候てとぶらい來り申  
べしさあらん時何となくそれかきしやうもんを持  
出みかどよりのせんぢにて頼吉ついでこのれんばん  
也かうはちうによるべしとさしいたし申さんときげ  
んじに心ざし有物はさうなくもかいつかみ一く  
くびきつていへんあらんもの共はたれもかくと申な  
ばおめくと仕らんひしとれんばんさせつまや  
子共あるひはらうぼを人じちに取て此國はらくら  
くとわうれうし所くにせきをすへちりやくをめぐ  
らし爰やかしこをうばい取子共國のぶしをさしそへ  
おいのあそびにさいをとつてほくろくどうは心もつ  
くさす手の内ににぎりゆうくわんくと君をあ  
をき申事たな心をかへすべからずとたい手に取やう  
にぞ申けるあきひろ打わらひ扱もたくまれたりかつ  
しん日本の其内に御へんにまししたるゆうしなしさら  
ばぢせつをのばさすよういせよとこのもんかしこ  
のついでつまりにせいをふせてあんさいのみへに  
あきひろとんせいにて候あともたへて候也こひねが

はくは城をもわたしたからをもさし上たく候へば御出を待奉り候となみの入道かつしんとかきしたゝめ國中へこそまわしけれ國弓取日比はうとみとはざりしがふびんのくわへさしあつまりとなみの城へぞ入にける去程にかつしんわか侍にちんふつと持せひろびさしへしやうし其身は四尺八寸の太刀よこさまにさすまゝに九尺五寸のかなさいぼうをつゑにつきざしきになればめてのかたにむずとをき何れもさつそくの御出しうちやく申て候也是へ申入候事のぎにあらず扱源氏のとうりやう頼吉しんめいをもたつとますぶめいをおそれずやゝもすれはせんきよりのくげぶけもしたがはざるをざんしあるいはゑんとうにうつし又有時はりふじんにせんしをこいうけちんしやうをもようしこくかのなげきもかへりみずばうじやくのふるまい也さるによつて我等のしゆくんもとよりくげの御なかれことに御したしみふかきにより君の御なげきしつめこくどのうれいをしつめんためきんじつ御はたをさせ給へは御いちみ頼み申たきゆへしやうし申て候也いへん有ましききしやうれんばんあそばし候はゝ忝存候はめとべんせつきよく

のべにけり國の人々さいして一ごんにも及ずたがいにもめをみ合せきめんしてこそいたりけれかねてあいずの事なればかつしんが子共其外いけのらうどう物のぐを差固めくるゝと取まき何とかたがたはみかどをすて奉りぶとうのげんじにかしづき給ふやさもあれ御へん立御しやうをそむく物ならば一人もあまさしと前ごをかこみ取かくるかつしん此由みるよりも大きにかつてやあくわじやばらめことのしさいをかへりみすすいさんのふるまいかな是へ御出有上は何のいはいの有べきぞ其上家のじつけんとしかつしん是に有上はおのらにかくべきやらうせきはきつくわい也ひきしりぞけとに王立に立にけりひとへにきじんのことく也國の人々きやうさめて是へさんにう申うへはともかくもぎよいにしたかい申さんと申せばかつしんよろこびて子共を近付あらうれしやおもふまゝにしほせたり此上は人じちを取へき也そもゝ此城といつはおそらく日本にはならびなし西は山たかうして一へんのくものごとし北は六たうしかこわたしひんかしはするどにて鳥のかよひもかすか也なんぼうはかたさがつてさゆふにたに

をかへたりさつするに都より城へたとへばよする  
其南へならで来るましせいびやうをすぐつてさんさ  
んにもみ付くせめふせよそれがしがざいをうけか  
けひけをうかふべし手にあまる物あらば我等おや子  
打て出ばおよそてにたつ物あらしてつくわみぢんに  
なすべしときしよくかうたる其有さまはんくわいが  
いきをい長れうがゆうしよくあんろくさんかあれた  
るもたかくやらんと上下ばんみんおしなへてみな  
ほめぬものこそなかりけれ

## 第三

さてもそのゝちはやしのきやうぶ國ひては我やにか  
へりらうぼの御まへにかしこまりかやうくのしだ  
いにてみなくしやうせうにあひしたがいれんばん  
を仕りことく人じちをあひわたし候はんとやく  
そくいたし候へばさだめて明日は人をつかはし候べ  
しいかい仕らんと申上ればは上聞召何あきひろの  
とんせいのやうにきつれば日比はともあれいたま  
しさよとわびつるにさわなくしてげんじへ弓をひか

んとやわらはにきくにおもふましおことがしりよに  
有べき也去ながらよくくふういたされよ其れん  
ばんの一ざにつらなるはせひもなしげんじ重代の侍  
と誰しらざる物やあらんくわごんのはきしやつばら  
を一々に切てすてなどしがいせでは有けるぞはや  
たちにもあまる身のじやくはいとやいわんふかくと  
もちじよく共さたのかざり何のめんばくあつていか  
に女也共わらはに物語なに事ぞそれ侍はしすべき所  
にてしなぬはいきがひはなきぞ弓取のこはかふにて  
もかふなれとねかふ事はことわり也ふびんやなん  
じがちゝをくれたる子をもちてあつたらしきけみや  
うをよびさん事ぞかなしやとなみだをはらくとぞ  
ながされけるきやうぶ承りとかふはあやまり候也い  
かで二心候べき明日参るつかいをばいけてはかへし  
申まじは此由聞召あゝ扱おそきしあん哉かまひ  
てく國ひでよふかく成ふるまいにてなばしくだし  
給ふなよ年おいたる女也共わらはもよろひ打かけて  
一方はふせぐべし何共あれ名有侍のわらはがむかい  
にきたれかしちくびきつて大手ぐちにかかけ  
ならべかさねてよするやつばらをさんくにかかけあ

ひてあつはれげんじちうだいの侍たらん物とものて  
ほんにせんとよろこふでいまや／＼とまちいたりあ  
んのごとくおかやま十郎おなじく七郎かげともとて  
大かうのつわもの五十人ひきつれこれはあきひろの  
御つかいなり御らゝはの御むかいにまいり候と申入  
たりければやかてぎやうぶまちうけたいめんしこれ  
へ／＼としやうじ申ければやゝあつてはゝうへやか  
ていでさせたまひま事にそれさぶらいのならひ程よ  
にかなしき事そなしきのふまでもけふまでもげんじ  
へかしづき申てもいまはまたひきかへてはやしやう  
せうさまへうちなびきみづからかやうなるとしたけ  
たるをんなまでかとふどつかまつらん事ともはいと  
ふしぎなるゑんにてありしかしながらまつあきひろ  
のやうなるぼうじやくふじんなるぢんをばしうとた  
のみ申さんずる事はなか／＼おもひのほかなりと  
いふよりはやく十郎をおつかみひろにわへどうと  
なげやがて十郎をおつかみひろにわへどうと  
ばくにひで十郎をおつかみひろにわへどうと  
こりしやつばらをおつかみひろにわへどうと  
の前にさらさせてちまつりよしとよろこびいさんで

よせくるかたきをいまや／＼とまちたるはかい／＼  
しくぞみへにけるさてまたうちもらされしさふらい  
どもほう／＼にたちかへりあらましを申ければあき  
ひろかつしんいかりをなし手をのばさすおしよせふ  
みつぶさんとてそのせい五百よきをひきくしてうち  
だのしやうにおしよせときのことゑをぞあげにけるさ  
れどもじやうのうちにはい上六十き大將がよかりつ  
ればつきしたがふものともは一きとうせんならぬは  
なし大てのもんをおしひらきかけかへしつくんずく  
まれすうつつうたれつひばなをちらしてたゝかいけ  
りされどもよせては大せいなりみかたぶせいの事な  
ればあるひはうたれいたでをひはや一のきどをばや  
ぶられたりはやしのきやうぶもへぎおとしのよろひ  
きて三まひかぶとのおゝしめ四尺八寸の大だちをめ  
てのかたにかいかふで大をん上ていかによせてのも  
の共事のどうりをたしかにきけそも／＼げんじは  
たれかはしらんまんぢうより此かたふしやう四たい  
あひつゝき天下のせいひつ成になんぞやなまくげ  
ばらのぶんとしてしらんのまねきこくちうをさ  
はかする事天のせめてもみにうけて今にかうべをわ

られうきなを四かいにながさん事こそむざんなれわ  
れとおもわん物あらはかねのきたいとためしみよい  
かに／＼とよばわつこりいわうのかけもと立出した  
のやはらか成まゝになまくげばらとはすいさん也と  
大まさかりを打ふつてたゞ一打とてう／＼と打ひつ  
はづしすそをなぐゆんでのおしを打はなされ引かへ  
しにぐるをたぶさを取て引ふせ／＼びか／＼んとする  
所へいわ村兄弟かけ來りいけどらんとする所へにか  
うてつほうをもち來りさん／＼に打程にみちんにな  
つてうせにけりよせての者共馬のはなを引かへすお  
つかけねちくびつらぬき人つぶてめをおどろかす斗  
也みなこと／＼く打立られ後をもみずしてにげにけ  
りきやうぶおや子はてもおねずみかたのちんへひつ  
かへすをあつはれきたいのはたらきやとみなほめぬ  
ものこそなかりけれ

## 第四

さても其後くわらくには八まん太郎御しうげん御さ  
たに付おの／＼御所へ上らるゝ大將御らんしいかに

かた／＼よりよしすどのいくさにおくれをとらずお  
もひのまゝにふみしつむる事しかし我ぶゆうとはお  
もわぬ也かた／＼がはたらきゆへひとつは君の御ち  
くわうたり此たび大なごんもろずみのそく女とゑん  
へんのさだむさればよりよし天下をよし家にゆづり  
心やすくもあらばやなとゝおもふはいかにと御でう  
有をの／＼ゑぼしをかたふけて誠にめでたき御事と  
かみから下迄よろこびけりかゝりける所にうちだの  
ぎやうぶが方よりひきやくとうらしいいくさのしだ  
ひこまやかにごんでうす又ぶしうゆらのじやうあさ  
山ほうきのかみしげもとむほんのおこし候と申來る  
さるによつて御いわいもわきに也とや有らんかくや  
せましとひやうでうす金平參り出人はさだめてらん  
げきめいわくにおぼすらん金平はあさゆふごとと何  
事もあれかしとこひねがひ候へは何によりしうちや  
く仕人／＼は御しうげんを取おこなひ給ふべしいく  
さはそれがしに仰付られ候へさ程のこてき二人か  
たはしよりふみつぶし申さんと事もなけにぞ申ける  
竹つなこごゑになつてそでをひき人もなげ成いひぶ  
んなかな近比そつなりと申せば金平いやしやうちき

なりとさしうつむく大將御らんしてとかくは一時も  
はやく打たゝんとぶしうへはやすもとためむねうす  
ひのさたはる三人吉家にしよくすべしとつの國かわ  
ちのせい二萬よきをさしそへらるゝ竹つなきん平き  
ようちをさきとしてい上一萬六千よききうじ四年き  
さらぎなかばに花の都を打立ほくろくたうへといそ  
きけり是は扱置となみの入道がつしんあきひろの御  
前にかしこまり承はれば都せいきんしつはせむかひ  
候よしもとより大ぐんにて候べしひらはのいくさお  
ぼつかなしたいほんじやうにかいちんなされ然へし  
所はめいよのなんじよ也たとへばいくまんきにてせ  
むる共此入道めがてだてにてぎんじにほろぼし候へ  
しはやゝとすゝむれは大將聞召尤其りおもしろし  
さあらばさかい川へ引とらんとほんしよをさして引  
にけりぎやうぶおや子はぐんびやうゆうしも打じに  
してひやうろうたへてかつゝ也五三日もたもちが  
たき所にかたき城をほこしひき取ゆへふしきの命た  
すかりはゝ上ぎやうぶを近付かたき引しりぞきぬれ  
ばらくじやうにはあらずへんしもはやくていとへ上  
りきうに御下かふをこひ奉れとりくぎあきらかにの

給へばぎやうぶかしこまつて候とて打のこされし侍  
おや子共に八きにて心しつかに出にけりかゝりける  
所にむかふよりま本ノマつしくらうなつて其せいすまんぎ  
にておしよするぎやぶみてすわやてきのはかり事に  
のせられて城をそつじにはなれてぎにかこまれ候ぞ  
や中ゝいぬじにせんよりじがい仕らんと申けりに  
かう聞給ひいかに國ひでかたき取まきたるはめつら  
しからずちすしのやさきにむかいても其かうならね  
ば身にたゝずともしなんすいのちならはてきぢん  
へわつて入きり死にしねやとてさきにすゝんで出給  
ふよくゝみれば竹つな公平也是はとゆふてしきだ  
いす扱君の御まへに罷出はしめおわりを申上れば大  
將御ゑつき淺からずいかにぎやうぶてきいか程かあ  
らんさん候一萬ぎにはよもすぎしと申上る大將聞召  
げにもかたきはごせいもおしかけふみつぶさんとの  
御でう也公平すゝみ出御でうのことくおゝのかう  
てきにてもさはなきにまして一萬ばかりのむしや  
人でにはよもかけしそれかし一人仰付られ候へれい  
のてつぼうにてかたはしよりなくなりたてゝしやうぎ  
たをしにせめ付はよもつらだしは候はし公平があ

らこなしを御めにかけんとずんとたつ竹つなおさへ  
しばらくくくたいてきなりとおそれ少せい也とて  
あなどるべからずさすかにさかい川と申はならびな  
きめいしよ也さるによつてひらばをこのますろうし  
やうせりけつきにまかせおしよせくわはんみかた打  
るへしつらくくにづをもつてかんかふるに中く  
らくじやうすべからずそれをいかにといふににしは  
山たかふして一へんのくものごとしひんがしにつ  
きするとにしてひやうぶをたてたるごとくにてたに  
ふかうしてばんじんせきがんさへぎり北のかたは六  
だうじかごわたしとてたゞ一きうちほそ道也さゆ  
うのみねより下りこぶしにいたてらればおに神とて  
もたまるましなんはうはひらちとみへてほりを深く  
ほりおふてのとさきには一丈あがりからほり有てつ  
づらおり成なん所たり程とをくそなへをたててざし  
もせずまほらへいてひやうろうつめに仕ればないた  
の城ををとさんとほるくしくひやうろうをばもと  
めましひをおつてつかればてきつて出んはぢてう也  
かねてよりもみかたにはくわくよくにそなへをた  
てぎよりんにひらきやりさきをめんどりばにくみひ

かばつけ入すすまばひらき中をとをししん月にま  
いせんごそうより取かこ見せめよせくもむならば  
いくさは程なくりをうるべしはやつてさきへ押よ  
ばりやうのみねよりがんせきをくすしかけられし  
つを打せてきにつよみを付ん事かゝみにうけてお  
へたりいかさまくふう候はんといてかんげんした  
りけり公平あさわらつて竹つなのぐんほういつく  
よりもふできかとおほへたりさやうにいつをかき  
といふ事なくてきの出るをあいたんや人はいしに  
打れ又はやさきにあたりしにうせぬいか成いんぐ  
にやきんひらはいか程かやさきにむかいてもうら  
かゝすいしつぶてにあたりたる事もなしとへば  
ひに入水におぼれる共さだまる所のがふぞかしい  
きすきたりや四十二あく所なん所にきらいなし  
人にもたれし身にあらじとかくめんくのきまゝに  
あそばせかうみやうはてんくさばきとかけ出れ  
ば人く我もくつゝきたり其中に公平てせい八百  
よきなんもんへおしよするされは人はるいをも  
つてあつまりにたかをともするとかや公平がら  
うどうさかわの源太とんだかねみつあいそのし  
ん八などいふか

らう共大將よわくはぬけがけにもかうみやうせんと  
はやりまつたるゆうし也いちの木どにおしよせ時の  
ころをそ上にけり時のころもしづまれば公平大をん  
上さかたのみんなさん時が一子右京大ぶ公平一ばん  
がけぞやなまくげのなかれにてぶけいのわざはよも  
しらじ一天四かいにかくれなきゆうしをのぞむなら  
ば出あいてげんさんせよとよばわりけり此もんの大  
將はとなみのもりかつ同もりなを大おん上げに聞お  
よびたる公平とやくわごんのはくはむやく也あれけ  
ちらせとざいふれば木どおしひらきかけつかへしつ  
七とやりを合二とはかまへおきたるがんせんにうた  
れさかたがよこやりに打れ兩三どはみだれいくさた  
がいやしやうりはみへわかすおや打たるれ共子かへ  
りみず子うたるればふみこし／＼た／＼かいけりかゝ  
りける所にわかむしや一人いとひをどしのよろいを  
き三まいかぶとのを／＼しめしらへの長刀かいこみく  
れないのあふぎをひらき大せいにむかいてひらりひ  
らりとまねきけり公平かたにも大將とおぼへたりと  
我くまん人くまんとあらそふ間にとんたかねみつつ  
つとぬけ打物ぬいてさしかざしたゝ一打にとてうど

打をうしろへぬけさうのかいなをひたと取さし上て  
ゆんでのそはへなげければみぢんになつてうせにけ  
りあかまつ兄弟すきまなくはしりかゝつて打物をて  
うてうと打をうけながししばらくたゝかいしが兄弟  
共に同まくらにふしにけり公平せきかねかけ出んと  
するをさかわの源太かけへだたりあゝもつたいなし  
それかし打とつてげんざんに入奉らんといふよりは  
やくかけよせならべてむす／＼くむ物のかす共おもは  
ばこそおしよせくびねぢきつて立あがらんとするを  
あいそのしん八つゝとよりしころを取ておつふせん  
とするをめてのうてを取てまへ／＼引ふせつゝぬきし  
てこそすてゝんけれ公平せきかねあまさしとむ二む  
三にひつくみ打たをさんとするにおもひの外てごた  
へしてこんがう力を出しくろけぶりをたてゝねぢあ  
いける公平あぐんておのれは人間にてはよもあらじ  
れいの天ぐめが此たびしゆつげんしたまふな今ぞせ  
うぶのうむぞかしゑいやつとはねければまつさかさ  
まにどうとふすかふとちぎつてみたれがみをつかみ  
くびをかゝんとするにうたかいもなき女也あゝむだ  
ばねをつたる口おしや扱／＼かうりきの女かななを

なのれたすけんといへばかつしんがをとひめとこたふ公平聞て我女を打てかうみやうならすさればとてからう其をなんじにうたれたすくもあつたら物思ひ出したり我がゑほし子のふさいにせん去ながら此まゝにては心もとなしと力にまかせしめ付さきにおつたてあつはれかろふ百人にもかへがたき日本一のよめごをまふけたりとほんぢんゑぞかへりけるきんひらかありさまなにとへぬかたもなし

## 第五

扱も其後大將の御まへにはしよ侍をめされ今日のかけあひに公平わたくしをおこしぐんほうをやぶりくわはんでせいをそんほうする事有べきはたらきにあらずひとへに我をさみするにたりと御きげんかわつて仰けり公平承りこは御でう共おぼへすあるいはめい將又はてごはきかたきとて手ざしをいたさずあんかんとして有らんは侍のおくれにて候すや其上ぐんほう破り候由めいわくに存し奉り候おほそれながら君の御てわけも承らずことにやく所のきはまりな

くめいしよにて候いやなんぢよ也とてたゝかはずしててきにいのまれまかりあらんはかつうはみかたのよわり一つは君の御ために一めいをかへりみずむ二む三にかけ合てきの心をみ候にかげにてつもりたるとはばつくんかわりてせいを打せ候へばかたきにくびも手に入ておよそ二三百も御ざ候さればそんなくはいさしらすそれかしがもふけにはむすめをひろい候とくだんのむすめをさもあらけなくしめ付御まへに引出せば君も御きしよくなをりかに公平此たびはともかくもいごはぬけがけ有べからずさばいそぎ打たてとせんぢんぢんの手わけ有みなものもんへおしよする去程に竹つな公平にちりやくをみせがををらせんと心つけ手せい千五百七ようけんだんらんかうにそなへをたて一ぢんにかけ出し大をん上てなおりけりむさしのかみつなの太郎がちやくしわたなべの竹つな今日のせんぢん給りたりとなみとのの一たうにげんざんやつとよばはりけりがつしん聞て子供をまねきてきのはたいろ風にもまれなにさまみかたにしやうり有べしとつとかけてめてのそわに引へしてきなんじよをしらずおいかけんはぢでう

也よこやを入れてつきくづせゆんでのたにへおいこみをいこみせめふせよかしこまつてやがてそなへをなをしけり竹つなさとつてげじしていわくさゆふはたにそゆだんすなおいとさんとのはかり事てきをかりかへひらはをとつてたにへおとせとごいふればいんにとぢてせめかゝる城のせいば千四人こゝをせんとぞもふたりけり竹つながもりかへになやにわにたにへおいこみ人馬共にしする事人すしなとゝもいつつべしかつしんおゝきにいかりおなしにかにもりかつなんぢがゆうりきいつのようそやかかけよゝゝとげぢすればかしこまつて候とてつほうをふりかたけひくな竹つなとなみもりかつ也おしつけのみぐるしやちんじやうにせうぶせんとよばわれれば竹つなねがふ所のかたきぞとたちひつそばめけりもりかつゑしやくもなく打てかゝるをひたゝとつけこみおしならべてむすゝくむたかひにふかくをとらぢとてひきよくをつくしてもふだりけりされ共もりかつ力やおとりけん竹つなにくみしかれなむ三ほうといふ所をおさへこくびをかきおとし太刀のきつききにつらぬき大をん上てとなみのもりかつをば竹つな打とり

たり入道はおわせぬか子をさきたて何をたのみに命をかばい給ふぞやとたからかによばわつてしづゝと引所に公平來りあゝかんし入たるはたらきかなごへんならではたれかはあらん公平はぐんぼうをやぶりしくわたいにやうしろそなへを給はればてをむなしくして人のたからをかぞへるがごとしうら山しや浦山しやと申せば竹綱いこん有げに申様それがしがちりやくも少有げにゝゝこんどはごへんとかうめうてんゝゝさはきにててからくらべを仕らんと申せば公平手を取それかしをきよくり給ふかあらをとなげなやと申竹つなもこらへかねて打わらひみかたのぢんへぞ入にけるさる程にかつしんもりかつを打せむねんいよゝゝかきりなく兄弟を近付とかく城の内をはなれずして竹つな公平二人のやつばらを門の内へ引入いけとらんと思ふ也其てだてといつはゆうりきはつたるわか物共五十きすぐり門のさうに立かゝりかたきよするとおとするなけふのいくさのつとつて門破らんと掛るべし一さゝへさゝへてさゆうへひらき中に取こめいけ取らん扱もがんせんのかたききことばをかけられひかへしも此てだてを思

ふゆへよはみをしてきにみせんためおしからざりしお  
いの身のながらへて有つるとなみだをながし申ける  
兄弟承りちくばにむちを打しよりかたちにかけのさ  
うごとく力をそへしあづさ弓やたけ心もよりはりはて  
ていかやうにもしてかたきを打たんばかり事をこひ  
ねがひ候とはら／＼とぞなきにけるかつしんなみだ  
をおさへふかく也／＼おやも子もする道はかきり  
有とやくそくをきわめよせくるかたをき今や／＼  
とまちいたり是は扱置頼吉の御まへにてくびじつけ  
ん事おわりいかにかた／＼かたきらく城あんへい也  
され共なんじよなればそくざにふみおとされすさ  
ればとてひかすをふるはゆいかいなしいかゝはせん  
ところの者なればぎやうぶはあんないすみやかなら  
んなんじかおもわく申てみよいかに／＼との御で  
う有國ひで承りじやくはいながら上にまかせ申上  
べしほうばい立も御ゆるし候へとかくいくさはぎご  
つのはたらきかなふましそれがし存には城の内迄ち  
のそこをほりぬきたがいにてだてをやくだくしひの  
手を上てみだれ入一じにてきをほろぼさんにしく  
はあらじと申けり公平聞てきつねたぬきのやうにあ

なをもとめてゆかん事きづまり成ちりやく也もしも  
てきにさとられなばにわかにぬけあなをさがしつゝ  
あわてふためきしなん事むげにいひがひあらじ此公  
平はごめんあれとかまわんていにぞみへにけり竹つ  
な聞ていかに公平是有べきちりやく也竹つなはし  
のびのだんかうしんたり／＼公平はらを立かた／＼  
のちりやくふりやくに聞にいたりなまぬるし／＼そ  
れかしにおいてはけふをかきりと思へばむ二む三に  
かけ入て大將のくびを取公平がくびをわたすかこ  
んくらべ仕らんごぶん立は心ながくあなをほり城の  
内へ入たまわんとぞしきをたつて出んとす兩人取付  
たんきあらきも時による何れの道にも心を合給ふべ  
し公平いや／＼それがしはたんきあらぎに候へばひ  
やうでう御むようたゝかうめうはしがち也といひす  
てふりきつて出にけりでんぶやじんのふるまい也く  
ろかねどうよろい三りやうかさねてはらりと四尺  
二寸の太刀はいててつほうをゆんでにかいこふで一  
のきどへおしよせたゝ今こゝもとへぬけかけにたゝ  
一人おしよせたるつわ物をいか成物と思ふらんおさ  
なき時はあく太郎今はさかたの公平とて頼吉のらう

## 第六

どう也我とおもわん物あらば出あへやつとよばわり  
けりかつしん是を聞ねがふ所のさいわい也へんとう  
うつな者共門のとびらに立さうておしやぶらんと來  
りなばしはしさとつてさうへひらけ中にとりこめい  
け取れとしつまりかへつてをとめせず公平大をん上  
是程の門一つやぶりてみるとさうの手をかけゑい  
とおせばやつとたもつゑいや／＼とおす程になん  
く門のおしやぶり大力のくせとしておもわす内へ  
かけ入あひづのつわ物二百斗まんなるに引まとい  
いけどらんとするを取てはなけ／＼しけれ共さすが  
に今はせんかたなくひつたてられてゆくへに竹つな  
きようちかけ來りかたきのやつばらおつちらし公平  
をつれ來りほう／＼にぞかへりける人のいふ事聞入  
ず我まゝゆへのほねをりやといへば公平心の内はう  
れしけれ共にか／＼しくはらを立それかし取らわ  
れ城のあんないみる所に竹つな申やう公平のふりや  
くあやうく候へばかまいて／＼御むやうと申は公平  
打わらいおゝかた／＼なくはあしき事も有べし人々  
とせんしうらくと悦かへりけりかの公平か有さまか  
んせぬ者こそなかりけれ

扱もそののちとなみ入道かつしんは大將の御まへに  
かしこまりもはやいくさは是迄にて御ざ候さればと  
て打しにあそばし候はんはふりりやくのかひなき所  
也御はくぶはうきの守も御はた上させ給ふよし六だ  
うじより御おちなされあき山殿とくわゝりいかにも  
してしん王を取奉り二たびぎへいを上給はゞ後のよ  
迄のほまれにて御ざ候わか君さまとぞ申けるあきひ  
ろ聞召尤此儀おもしろし明日のかけあひに六だうし  
よりおちゆかんと其よのあくるを待いたり去程によ  
せてのせんぢんひらいのきようぢ也てきぢんよりや  
ぶみ一つういかけたり清うち是を取て大將の御めに  
かくる其ぶんにいわくこんどふりよに一子をとられ  
げきしんにかとうど仕り誠に天ばつ斗がたく君にふ  
ちうなきだんは明日馬のこくあきひろ六だうしより  
落んとのしだいしらせ奉らんため也とかきて有大  
將よろこひ給ひいかに竹つなむかつて打取べしかし  
こまつて御前を立清うち公平にせんぢん給り大て口  
へむけらるゝ城の内にはつかれむしや命をおしま

すたゝかいけり大將かつしんは北の門より落行扱も  
りひさてつほうを打かたげすまんの中へわつて入は  
らりゝとないたりけり此いきをいにおもてを合す  
る者もなしこゝにさぎぬま五郎と申つわ者これをみ  
てするゝとはしりよりたちぬきもちはずしとうつ  
をばもりひさこゝろへさなりとうけなかしすかさず  
てうどうつうつたちにてむさんやなまつかうふたつ  
にうちわられたちまちたをれてうせにけりきんひら  
ぼうひつさげいてんとすればきようちおさへかたき  
はそれがしいかにもみこみたり一でうしおほせんと  
いへばきんひらわらつてかたきはたゝ二人あるぞい  
つれにてもくみふせよあまりたるかたきはわかもの  
なりとも二人ながらうつていりおしならべてむつ  
とくむきようちはもりひさきんひらはかつしんとく  
んだきようちはもりひさきんひらおとせくびかきおとし  
たちあかる所をさんひらかつしんゑいこゑをあげ  
てくみあひけりいづれもこゝろはきいたりちからは  
つよしゝぞうのはげみのごとくねぢあひけりきよ  
うちをちあわんとすればきんひらにらみつけやあぢ  
やくはいものむやくゝといかればこゝろならずけ

んぶつすきんひらうちからみてかけつめゑいやつと  
はねければまつさかさまにはねたをしくびをかゝん  
としたりしがまてしばしわがころむすめのおやに  
てあるなればげんざいのあいやけなりとからめとり  
てあらしやうしのしうといりやとひつたてゝそれよ  
りも大將の御まへさしてぞおまへになれば大しやう  
ななめならずにおほしめしすぐにいとへかいぢん  
あるせんしうばんせいの御よろこびめでたさよとに  
もかくにもくんしんの御よろこび申ばかりはなかり  
けれ

萬治四年辛丑四月吉日

# 公平化生論

## 第一

だいらむらさき女郎井公平けしやうろん

それきやうらん月をねたむ、月ついにいからざれ共、  
かならずせいくわうをはつすること有、爰に源のよ  
りよし公、天下のぶしやうたりしとき、四かいらんげ  
きにおよびしを、竹つながけいりやく、きんひらがゆ  
うりきにて、國／＼のぎやくと、ことあんへいについ  
ばつ有、御よろこびはかきりなし、ことに御子よし家  
公をはしめ、かもの次郎よしむね、しんら三郎よしさ  
だ、何れも御さいちよにすぐれ、御くわほうゆゝしき  
御いせひ、おそれぬ者こそなかりけり、比はてんぎく  
わん年、正月五日、竹つなをはじめ、公平ため宗に、た  
けち、市丸、そのほかしこうのしよざぶらい、みなみ  
な御まへにあひつむる、大將御ゑつきあさからず、御  
かわらけを取上させ給ひ、次第／＼に下されける、  
皆々こくどあんちんの、御しうぎの御さかつき給は  
り、しゆゑんにきやうをもやうして、中にも公平かう

をんに、とうとうとなるはたきの水、いつもたへせ  
す、おもしろや取上源家の御代を、まんざい／＼／＼  
まんざいらくとそつたいける、君たいゑつき限なく、  
御聲を上らるれば、大小みやうもだうをんに、君ちと  
せふる、いわをと也てこけのむすまで、代／＼をか  
さねてめてたやと、皆／＼御いとまをたまはり、せん  
しうらくをつらね、我や／＼へ歸られける、かの頼義  
公のいせいの程、何にたとへんかたもなし、是は扱  
置、其比みかど御てうあいの御きさきを、むらさきの  
まへと申奉る、然るに此きさき、しゆつしやうしつせ  
さだまらず、いつくより共しらくもの、かうしよくを  
事とし、ようがんびれいにましますゆへ、みかどゑい  
りよあさからすちうぐうに立給ふ、いつその比より、  
れいならずなやませ給ふ、てんやくいりやうをつく  
し御くすりをたてまつる、さらにげんきもなかりけ  
り、すじつとおくるにしたがい、御物のげとて、もつ  
ての外にみへさせ給ふ、くぎやうせんぎまち／＼た  
り、其時三條の大なごん、進み出そうもん有、かやう  
のきざみ、きそうかうそうに仰付られ、大ほうをじゆ  
せられ、しかるべく候とつゝしんでそうもん有、みか

どげにもと思召、とかくはからへとのせんし也、さねふさのきやうちよくとう申、扱けんびいしのべつとうに仰て、ゑんりやくじのひじり、しゆかくほうゐん、扱よかわのしゆんぎやうほうゐんへ、いそぎちよくしを立られ、やがて大ゆかにだんのつき、五しきのへいはくを立ならべ、きやうしやをおそしとまち給ふ、去程に雨そう、めしにまかせてさんだい有、時に大なごん立出給ひ、たがいにしきだいおわつて、扱御のふの次第をのたまへば、雨そう畏て、だん上にさしかゝり、扱びやう人に打むかい、たといか成あくびやう也ともぎやうじやのほう力にてあらはさんと、ふどうのゐんをむすんでかけ、とつこをもつてむねをたゝき、れいしやくじやうをふり立、しきみをおつて、ごまのひに取てかけ、いらたかじゆすをおしもふで、たうほうにごうざんせ、みやうをうなんほうにぐんだりやしや、さい方に大いとかみやうわう、ほつはうこんがうやしや明王、ちうをう大しやう、ふだう明王、なまくさまんだはさらた、せんたまけつしやな、そはたやうんたらたかまんちやうがせつしやとくだいちゑ、ちかしんしやそく、しんじやうぶつとせ

めにせめてぞいのりける、其時びやう人まくらを上、いかにぎやうじやむやうのいのりをせんよりも、はやとく歸り給へ歸らずふかくをしたまふなと、おもてのけしきを引かへあたりをにらんで立たりしは、げに人間とはおもはれず、ぎうしやは是に力をへ、ひたひにあせをながし、せめかけ／＼こんがうどうじ五たいこくぞう、六くわんをん、いちじきんりん五だんのほう、六しかりん八じもんしゆ、ふけんゑんめい明王せめかけ／＼、ごまの煙は御所にみち、れゑの聲はそらをひゝかし、しゆほうのころに身のけよだつて、いか成物のけ也共、何しやうけをなすべきやと、かさねてじゆすをおしもんで、せめにせめてぞいのられける、時にびやう人かつはとをき、我をたれとか思ふらん、さがの天王のきやうに、しつとふかき女にてきふねのやしろに七日こもり、きじんのすがたをこひうけ、うちのかはせに三七日ひたり、いきながらきじんと也、人を取事おびたしく、有時はかつらき山に年をふる、つちくもとなつて、人をなやまし又或時は、大ゑ山にもすまひをなし、いかにもしてぶつほうわうぼうをかたむけんと、かりにびちよとへ

んし、ぎよくたいにちかつく所に、ちやうぶくするこ  
そむねんやとてつしやうをつ取打てかゝるを、とび  
ちがへいのりふせ、又とびかゝるをいのりふせ、打あ  
ひもみふせいのりふせ、せめにせめてぞいのられけ  
る、ついにだん上へとび上り、二人のぎやうじやを  
だんより下へ取てなげ、ぎよくざちかくとんでかゝ  
る、わういにおそれかなはず、天上をけやぶりこくう  
をさしてとびさりしは、すさまじかりけるしだい也  
きん中大きにそうどうし、みかど御のふと也給ふ、く  
げ大じんおのゝきさはきとかく、ぶしに仰付られ、け  
いご有べしと、おのゝせんぎまちゝたり、内より  
のせんじには、頼義きんりをしゆごいたすべしと、ち  
よくしを立よ畏て候とて、中なごんかねまさをちよ  
くしとして、頼義やかたへいそがれける、やかたにな  
れば、せんじのおもむきのべ給ひ、ちよくしは大りへ  
歸られける、かくて頼義竹つな、公平を召れ、かやう  
かやうのせんし也、兩人供を仕れとの御ちやう也、時  
に公平すゝみ出、扱もこは近比めづらしき事の出来  
仕り候物かな、此比は國々のぎやくとしづまり、物さ  
びしくそんせしに、よき折からの手なぐさみと、それ

がし罷むかい、こくうをにらみまわさんに、そも誠の  
けしやうならばすがたをあらわさんこと候まじ、た  
んだ一とにらみににらみふせ、むりむさんにつかみ  
さき、ごのふはらさせ申さんと、こ共なげにぞ申け  
る、さあらばよういつかまつれ、畏候とて、おのゝ  
しやうぞくせられける、先頼義公の御しやうぞく  
は、はだにはらんでんぐさりの御はらまき、うへには  
水いろのすいかんに、おに切丸の御はかせ、かぎをり  
ゑぼしを召れける、扱竹つなは、是もはだにはよろひ  
をきこめにし、くろきしやうぞく、そでをむすんでか  
たにかけ、しげとうの大弓に、わしのはの大かりまた  
取そへて、おそばちかく御供す、さてきんひらは、ひ  
おどしの大よろひ、こざくらおどしのはらまき、二り  
やうかさねてさつくととき、げんじ十代くもきりとい  
つし御はかせ、くだしあづかりさすまゝに、五尺八寸  
の打かたな、十もんじによこたへ、たいまつもつて出  
にけり、比はきさらぎ廿日あまりのことなれば、めさ  
すもしらぬやみのよに、しゝいでんの大ゆかにしか  
う有、竹つなきんひらも御しらすにかしこまり、御の  
ふのこくげんを、いまやゝとまちいたり、時にうち

より、う大じんたいまさのきやういでたまひ、御のふしきりなり、ひきめをもつていてみよとのせんじなり、頼義ちやくたう申、それくたけつなとの給へば、かしこまつてこくうをきつとみあぐれば、くろくも一むら、御てんのうへにおほへたり、大のかりまたうちつがひ、なむ八まんとくわんねんし、よつひきひやうどはなつ、ふしぎやうめいもんのうしとらな、いなづましきりにひかりわたつて、御てんのとしび、一とにきへあめふりらいでんしきりにして、御てんもくするゝばかり也、そのとききんひらつゝたち上り、つちも木も、わがわう君の國成に、何ものもしよいなるぞ、其しやうたいをあらはせと、大おんあげてのゝしつたり、時にたけ一丈あまりの大ほつし、御てんにむかつてまねきける、きんひらはしりかゝつてむすとかみ、上をしたへとかへしける、きんひらにつことうちわらひ、おのれ何物のわけそこなひぞ、此きんひらにむかつて、うでだてはむやくなり、とつておさへたてのしたにあるとおもへば、たちまちけちやうとなつて、こくうにとんでうせてんけり、しきりにくろくもまいさかり、とほうをうしなふ斗也、公

平大いきついで、しばし心をしづめ、こしをさぐりみてあれば、くもきり丸はなかりけり、はつと手を打、な無三ほう扱もむねんのしたい哉、てにぎつたるくせ物に、たましひをとられしは、八まんく侍みやうがのつきたるよと、いとゝあらききん平が、おとり上つてくるひしは、身のけもよたつばかり也、其時頼義おにきりをするりとぬき、ぐんほうひしのものとなへ、こくうをはらい一しんにかつしやうし、な無八まん大ぼさつ、げんけにみやうがましまさば、一つのきずいをあらはし給へと、かんたんくだき、扱めをひらきみたへば、にわかにくもるそらはれて、月のひかりもさやか也、人く是に力をへ、はつはうにまなこをくばつてゐる所に、まりのやう成ひかり物、ていしやうへどうとおつる、きん平すはやとはしりかゝつて取ておさへ、たいまつふり立みてあれば、女の首にくだんのたち、くちからぬけ、つかぐちまでさしらぬいたり公平あまりのうれしさに、くび共にさしあげ、是く御らん候へ誠に源家のまもりと、ひぞう有こそ尤かな、我だににがせしくせ物を、うん中までほつつめしたがへたるは、あつはれつるぎやめいけ

んやと、おどりと上つてよろこびける、かの公平か有さま、上一人より下ばんみんに至まで、あつはれ源氏のてうほうやと、皆かんせぬ者こそなかりけれ

## 第二

ゆきさだむほん井公平ゆうりき

だいらにはけしやうの物、しりぞけば、御なふ其まへいゆふ成、みかとりやうがんうるはしく、頼義を御座近く召れ、こよひのくんこうに、二るのちうなごんににんせられ、扱竹つなには、くもがくれといふ御太刀、公平にはほそおびといふ御はらまきを下され、何れも御ゆるされをかうむり、まごひさしまで召上られ、御さかづきを下さるゝ、忝とちやうだいしおもひおもひにのみながす、したがつて竹つな、いかに公平いまひとしほ、御しゆをたばれ忝も、一天の君の御さかづきを給はる事、いきてのめんぼくしゝてのなうたへやゝうたかたの、あまり仰の有がたさに今もゆうしのらくあそび、すへのまつ山なみはこゆる共、君か代はかわらじなやちよをかさねて、かうはふる共まんざいらく、有がたやとのみながす爰にあふみ

の國のちう人、たいらのごんのかみゆきさだとして、其心ねふたうにして、はりたましいのおのこ也、其日の御ばんにあひつめしか、また爰にほうもんのう大しやう、すけかたのきやう、日比頼義とあひさつもよからねば、頼義くはんいに、にんせらるゝをそねみ給ふ折ふしゆきさだすけかたのきやうに打むかい、光源家のてがらとはいひながらさすが日本ぶさうの公平といわれし身がけしやうにたちをとられしは、何にとやらんにあはぬやうに候と、二人打うなつてぞかたりける、きんひらたまらずつゝと出、やうゝめづらしやゆきさだは、此公平がけしやうに刀をうばはれたるがおかしいとや、尤さうこそ有もせめ、去ながらうでにだにあたる物ならば、たとひくろかねのふくろに入てつゝむ共、物のひとへは、さあんだくろかねだとはいはせまじ、つかみやぶつてまいらうすれ共、ちから及ばぬけしやう也、然共君のいせいひとつはつるぎのいかふによつて、うんちうまで、ほつつめけしやうのものをしたがへ、二たび我てに入事、是もつて公平かゆう力も、ちつとてつどうたる所也、またうぬしらが公平がする事を、ひをうたんとおもふ

は、ふしの山とたけくらべすることならず、いらざるひはんいやさ、きゝたくもない、たゝからりつとさつちおいて、爰へでされあのよ此よのさかひをみしやうぞ、ゆきさだと、にらみつけてぞ申ける、ゆきさだ聞てやれきんひらあまりに、くちひろひことな申てなんち程のものは、なんぢう人もわかうちにもちければ、かさねてのぞみにまかせんと、あざわらふてぞ申ける、きん平いまはたまりかねひくかひかぬかさらばそつと、あてゝみんととんでかゝれば、一度にとつとぞにげにける、おほうちつとさうも有ま

本ノマ、

いと、なをおくさしておつかくる、頼義竹つな取つてこはものにくるふか御せんなればまづしづまれと、さへきつてとゝめ給ふ、其時くぎやうでん上人、おのゝ出させ給ひ、ちよくちやう成ぞ、公平をつれ、まづゝやかたに歸るべし、頼義ちよくちやうかうむり、やかて御せんを立給ふ、きん平大のまなこをみ出し、くげ大じんをねめつくれば、おのゝ身ぶるひしてこそ入給ふ、竹つなさあ公平、君も御立なされたは、いざ歸らう公平聞て、いやそれがしはようが有、其時竹つな公平がてを取やあ爰はづくとおもふ

ぞ、忝も一天の君のましますぎよくざちかき所にて、さやうのふるまひむやく也さあよしゝひらにゝいやかぬゝあゝもはやよしと云に聞ぬ人かな、此公平にほうど、もてあつかうたるはと竹つなはとめんとす、公平はいでんとす、すぢつつもぢつつ館をさして歸りける、是は扱置ごんのかみゆきさだはやかたに歸り、しやていうこんの大ぶさだ時らうどうに村上源五ながとし、まのゝ九郎國みつ、あらむさしの平八たて山六郎、べつふの藤太、いわくぐりの力の介、其外らうどうを近付てこんやだいにて、公平のにあつこうせられ、むねんたぐいはなきぞとよ、方々やつとぞ申ける、らうどう共承り、御ふくりうは尤かな、我ゝか内せめて一人御供せば、其公平めをあんに置べきかと、せんぎまぢゝ成所へ、はやだよりよりちよくし立、きん中にてのらうせきゆへ、頼義ははりまのむろへ、ゆきさだはわかきの國へ、はい所いたすべしとのせんじそと、ちよくしはだいらへ歸られけり、其時力の介すゝみ出、まづ君は何となく、ながとし國みつ御供にて、はい所へおもむき給ふべし、それがしと立山平八ともあきは、さた時公の御供

し、山さきへんにまちうち、頼義はい所へおもむく所を、せひ一いくさ仕り、にくしと思ふ公平めを、しやりむり打では置ましきぞ、はや御立とぞすゝめける、尤此ぎ然べしと、しやていうこんの大ぶに、八百よきを相そへ、山さきへんにさしつかはし、其身は國みつながとし召ぐして、わかさの國へ下りける、是は扱置頼義は竹つなを召れ、やせんの次第、いかゝ有べきとの給ふ所へ、おつつけちよくし立、こんとろうせきゆへ、則こんのかみをわかさへをるに仰付られ候、頼義のことは、天下の武將といひ、其うへじぶんのかうろんならねば、さのみすこしたくは思召せ共、せけんのあざけりを思召るゝ間、大ぎながら一とせか内は、はりまのむろにしのばるべきとのちよくちやう也、公平はゝかりなく罷出、是は一天の君の仰なれ共、近比ふできかと覺へたり、やせんのはたらきゆへ、ざいくはにおこなはれうば、それかしこそおちどたるべきに、なんぞやとがもなきわが君を、おんるとは心行す、たといちよくでうなればとて、みちもなきことには、此きん平は御めんなれ、しよせんむつかしきに、ゆきさだとさしちがへ、しんきんをやすめ奉ら

んと、とんでいづるを、竹つな取ておさへ、心をしづめて聞給へ、りんげんなあせのことし、出て二たび歸らぬ事、何あせのごとした、中くの事おほひつつまして、おめにかけういやさにてはなし、たとへ御身がはてたればとて、君のざいぐわいよくおもし、かやうにとがなき御事に、君のさいぐわにあひ給ふも、ひとへに御身かなすわさならずや、それをもこりす、おもきかうへの、御さいくわになしまいらせんとは、さりととはくわらんべにおとりたりと、かきくどきかんにけんすさしもにあらき公平も、あたるたうりにつめられて、うまれついたるぶてうほう、御めんなれ竹つなと、さしうつむひて、泪をほろりくとこほしける、大將此うへは、みかどへおそれのためなれば、ひそかに都を出べき也、まつ竹ちみうらは、妻や子共をつれ、かはちよりくたるへし、二人畏て候とて、やがてよいをししたりけり、扱頼義公は、侍五十き御供にて、またよをこめて、花の都を打立てはりまぢさしてぞ下らるゝ、やまざきおもてをゆく所に、ましかけたりし、てきのせい、時をどつとぞ上にける、竹つなちつともさはがす、めんく物のぐせやと、まつさき

にかけ出、是は頼義公、さいこくへ御下かうなさるゝ所に、何物なれば、其名をなけれ、其時さだ時我こそごんのかみかおとをとに、うこんの大ぶさだときなり、一人もあまさしと、大おんあけてのゝしつたり、竹つなかんらくと打わらい、あれうちとめよとげぢすれば、てきみかたが入みだれ、むしやうむしんにたゝかいけり、かゝりける所に、てきぢんより、七尺ゆたかな大のおのこ、てつぼうをひつさげかけいで、さだめておとにも聞たまはん、ゆきさだかかうげん、いわつゝりのちからのすけとはわが事也、さきほどより、きんひらをめかけしに、いまにげんざんいたさず、たゝしそれかしが、是にあるをよくしりて、心をくして出あはぬか、はやく是へいでられよと、にくていすぎてぞ申ける、そのとききんひら、ゆるくと出なにとわとのは、ちからのすけだ、さてもかはつたじつみやうかな、さらばまつなんちかもちたる、そのてつぼうを、こなたへかせいくさがすぎたらは、のちにかへそう、ちからのすけ、こらへかねあふわたすかわたさぬか、うけてみよと、はしりかゝつてちやうどち、ひつはすいておつとり、さあおのれちから一

はいひいてみよと、めてにてひげをうちなで、そらうそふいてぞいたりける、ちからのすけ、ほうをとられかなはしと、こんがうりきをいたし、ゑいやくとねぢあひける、きんひらちつともさはかすさてもおのれは、じやうのこはきふてき物や、さいせんをじんしやうにかせといふをも聞入ず、今又あせ水になつて、其すうくは何事ぞ、またはなさぬかと、ひつ取てうど打た、ちからのすけひらりとくゝり、むずとたく、大ごしにひつかけ、取てなげおのれ、いわくぐりならば、さらばそつとくぐらせんと、そば成大石引よせ、上よりゑいとおし、何と候いわくゝり、ちつとくゝられて候か、もどくゝりくゝられよ、ゑいやつとをしければ、みぢんになつてどうせにけり、公平みておゝくゝつたりちからの介、其ていにては、あび大じやうのそこまでも、たゝくゝりにせらりやうはと、につこと笑つてひきにけり、又よせ手の方よりも、むしや三きかけいすゝみいでたるわれくゝは、ゆきさだがらうどうに、あらむさしの平八、たてやま六郎、べつふの藤太と申物なり、四天王のぶゆう、承はりおよびたり、いざ一きつゝ、ひつくみくゝたがいにてなみ

### 第三

すみよししんたく井義家れいけんを給はる

をあらわせん、じんじやうにいであひたまへ、竹つな  
一まるかけいで、かた／＼のことはうけたまはりお  
よびたり、竹つな一丸是にあり、なんとなりともそ  
のはうの、のぞみしたひにいざござれ、ときにたて  
やま、一丸とむんずとくむ所を、一丸さそくをふん  
で、ゑいやつとはねたをし、くびをかゝんとする所  
を、べつふの藤太郎かけつけ、一丸がゆんでのかいな  
をむずとする、竹つなはしりかゝつて、藤太がみだれ  
かみをかいつかみ、さいせんのことばにあはぬふる  
まひするかなと、ゑいやつとひく所へ平八たけつな  
が、うはおびとつて、わとのもいらざるぎんみやと、  
たかいにみかたをたすけんと、てを取おひとりたぶ  
さと、どつこい／＼はなさしと、おしあひひきあ  
ひ、ふむあしをとほ、ちしんなんのごとくなる所  
へ、公ひらはせきたり、いでそれかしもすけ申さう  
と、平八がべつそく取て、ゑいやつと引ければ、てき  
もみかたも一どに、よろ／＼と引ふせ、或は引きさふ  
みくだき、扱もあぶなき仕合かなと、み方のちんへ引  
いたる、かの公平か有様、誠におにのまごのいきせう  
じんやと、皆おそれぬ者こそなかりけれ

うこんの大ぶさだ時は、しよぐんせいに打むかい、い  
かに方／＼かたきはこせい也、てきにいきをつがせ  
ず、一度にどつと取かけ、ひつつゝんで打とめよと、  
一所にひつしとかたまりける、竹つなかたきのちん  
のはりやうをみて、いかに公平さき程のたゝかいに、  
少もひるむけしきなくて、一所になつてひかへしは、  
たゞ物とはみへず今少くらいをみるとけ、ばんげい  
にかるべし、其上みかたのうしろは山をかゝへ、てき  
のうしろはかはなれば、日くれ方には、とほうをうし  
ない、とにまよはん所をば、みな／＼かわへおひくず  
し、一人ものこらず打取申さん、しばらくいきつき給  
へ、きん平につこと打わらい、おゝ竹つなのはかりこ  
とはさそあらん、さりながらあらていのやつばらに、  
何さぐんほうの入べきか、其うへ日くれまでとや、こ  
はのび／＼也、御へんないつまで也共、とつく／＼とくふ  
うを廻らし、よからん時分にあとよりかゝり給へ、ま  
づそれがしはさきへ参らん、ごめん／＼ととんで出

るを取ておさへ、こはあらりやぢかな、さすがかたきは大せい也、ふか入はむやう也、ひらに／＼と引とむる、いやさ其ぐんほうは、此きん平はそんせすと、たそそれがしはてきをみては、山があらずと川があらふと、ひつしき一もんに切て入、かたきのくび取、くんほうをよくをばへたりと、ふり切て只一人、かたきのぢん所へむかいける、さた時をみて、それあますなとげちすれば、我も／＼と切て出る、きん平心得たりと、てつほうをおつとりのべ、はらり／＼とないたりけり、さしもかたきは大せいと申せ共、そゝろになつて色のきけり、きん平こらへず、大將さだ時をめかけ、無二無三に打てかゝる、くもの子をちらすがごとく八方にげさりたり、たにみねあく所きらいなく、一もんじにおつかくる、さた時めいばにのつたれば、ゆきかたしらすおちのびける、きん平今はせんかたなく、ゑゝむねんの次第かな、大將を打もらしぬること口をしけれと、はかみをして立たりしが、せめてはあとにのこりしやつはら、一人ものかさしと取てかへし、爰かしこをみけれ共、大將はいぐんするうへは、四かく八方へにげさつて、人一人もあらざれ

ば、あきれはて、ぞ立たりけり、所へ竹つなはせ來り、のふ／＼かたきは何程打給ふ、あまりひさしくみへぬにより、是までむかいにまいたり、公平につこと打わらひ、さればこそと大將さた時めを、いつくまでおつかけうたんとせしか共、ゆき方みへねはせん方なく、あとのてきをうたんと、立歸つてみれば、一人もなし、さればよくふかき、おてらこざうが、時ひじはづすとは、今きんひらかこと也、扱もむねんやはら立やと、身もだへしてこそ立にけり、竹つなからからと打わらひ、おゝして／＼御へんな、それかしをあげり、かうげんいひかいもなく、一人も打給はぬな、あゝしやうし／＼是／＼御らん候へ、御へんのあとにて、市丸とそれがし、かたきをおもふまゝに打たりと、太刀につらぬきみせければ、公平よこでをちやうと打、是／＼はつしたり／＼、さてもおてから／＼、それかしさき程より、ほねをりたるかゝもなく、一人も打とめさるに、いなからの御でがら、あらうらやましや今より後は、ぐんほうをさうでんなされよ、御でしになり申さんと、どつとわらふて、君の御とも仕、はりまをさしてぞ下られける、是

は扱置竹ちみうらは、みだいきんたちの御供申、つゝ  
國渡邊に付しかば、竹つなかしつけん、みたのぎやう  
ぶ立出、やがてをくにしやうじ申、よきにいたはり奉  
る、かくてあるひのこと成に、みだいわか君は、御つ  
れゝのあまりにや、みうら竹ちを御ともにて、何に  
わのうらに出給ひ、うみのおもてを打ながめ、うさ  
をはらし給ひける、あしのやのゝなだのしほやき  
いとまなき、しづがしわざぞあはれ成、むかいはいや  
うごなるをがた、こなたはすみよし天王寺、きしのひ  
めまつ千代をへて、かはらぬ色はうらやましすまや  
たるみのうらみへてあはちのせとの夕かせにしまが  
くれつゝ、こぐふねも、ほのほのみゆるあかし方、供  
よびかはすむらちどり、あはれをもよすゆふぐれ  
に、なきさによするつりふねは、こがれて物や思ふら  
ん、我も其身にあいおなし、うみづらはるかにみた  
まひて、あなうらめしや、あのかいじやうのあなた  
成、はりまとやらんに、頼義公はおわすらん、同じう  
き身と成ならば、なと一所にはつれ給はぬ、うらめし  
のうきみやと、もだへこがれてなき給ふ、かゝりける  
所に、いづく共なく山いぬ一つはげみをなしはせ來

り、はつといふよりはやく、義家をひつかけ、みなみ  
をさしてぞかけにける、みうらのがさじとおつかく  
る、竹ちもつゝ、いておつ駈行、みうらきつとみ歸り、  
もつたいなしとよやす本、みだいきんたち打すて、ふ  
かくのいたり、それかし一人おつかけん、御へんな跡  
をまもり給へと、いふやいなやあとをししたふておつ  
かけゆく、竹ちげにもと思ひつゝ、有し所に立歸り、  
はゝはゆめ共わきまへず、やれやすもとよ、義家は  
いづくへゆきて有けるぞや、頼義公にわかれしも、いき  
て此よにましますは、なげきながらも扱過ぬ、あなな  
さけなやちくるいにとられつゝ、はゝは跡にながら  
へて、何と成べき我身やと、きへ入やうになき給ふ、  
やうゝ涙をおさへ、げに此比に御心もよからず、打  
なやませ給ひしが、次第にしやうねみだれつゝ、只ほ  
うせんと也給ひ、わか君たちを、ゆんでめてに近付、  
いかにやなんぢらむなく成、今ははやみづからも、  
しやばのゑんつきはてたり、汝らはすいぶん心をき  
よくして、四天王のかんげんの、おろかにおもわす守  
るべし、あらうらめしやと、はやうちかみ八まんも、  
見はなら給ふかなさけなや、あからさまにも義家が、

歸るとだに思ひなば、今の思ひはよもあらじ、こはそも何のむくひぞや、義家と諸共に、我ちがいせよ竹ちとて、こゑをあげてなき給ふ、さしもにたけきやす本も、泪にくれていたりけり、いたわしやわか君は、いかにやす本、我々ばかり跡になからせせんもなし、いざやおつかけ申さんと、すでに御座を立せ給へば、やす本御たもとにすがり、御尤なれ共去ながら、母うへさまをすておかれ、いつくへ出させ給ふべき、まつまつやかたへ歸らせ給ふべき、はやとくくと申つづ、みだいわか君ひつ立申、やかたをさしてぞかへりける、是は扱置ため宗は、やまいぬをしたひ、もみにもふでおつかけしが、すみよしのしんせんにて、やうやうほつゝき、太刀ひんぬいてとんでかゝる、ふしぎや此犬義家をすて、おきなとけんし給ふ、ためむねしんくすくみ、はたらく事もならずして、太刀をすてて畏る、らうじん仰けるやうは、いかに義家それ源家の跡をつぐ事、其きりやうあらされば、かなひがたし今はまだつれ来る事、御へんか心を引みんたの也、扱此太刀は、天下をしづむるれいけん也、太刀をよこたへ、君の御ように立べき也、いかにため宗、誠にしう

をとられじと、是までおつかくる心ざし、かへすくもしんびやう也、いよくきのいをおもんし、君にふちうをなすべからず、然らば源氏のすへく、百代までもあんおん成べし、我をたれとか思ふらん、とうしや第二のしん也、そも第二といつはすみよし四しやと申は、第一は天せうくわう大じん第二は八まん大ぼさつ、第三はすみよし大明神、第四はくはんをん大し也、我八まん大ぼさつ也、なをく行すへをまもるべし、とけすがことくにうせ給ふ、義家もためむねも、こは有かたきこたくせんやと、かんるいきものにめいじつゝ、三どらいはい奉り、しんたくの太刀を打かたげ、わか君をさきに立、よろこびいさみて、渡邊さしてぞかへりける、やかたになれば、みたい所もわか君も、是はくと斗也、よろこび泪はせきあへず、かくてためむね、有し次第を申上れば、母うへわか君もろ共に、こは有かたき御しんたくやと、すみよしの方をふしおがみ、すへたのもしき次第やとて、あつぱれめでたき御吉さうやと、皆かんせぬ者こそなかりけれ

#### 第四

ゆき定手の者洛中狼藉井公平竹綱いけ取

ごんのかみゆきさだは、ながとし國みつ共ない、わか  
さの國にいたりしが、都のこと心もとなく、あんじわ  
つらふ折ふし、しやていさた時、大あせになつてはせ  
來り、人／＼にたいめんし、いくさの次第をかたり、  
それがし是まで參だん、此事申上んため、めんぼくな  
くも罷下り候、今は御いとま申とて、はら十文じにか  
き切、あしたのつゆときへにける、人々大きにおどろ  
き、是は／＼とあきればてたる斗也、ゆきさだ大きに  
りつふくし、此上はきうにあんびをさだめん、去なが  
ら是にてせんぎする共かいあらじ、三井寺のゑんし  
んは、それがしがおぢ也、殊にあんふかき人なれば、  
一まづ頼何とそちりやくを、めぐらさん、此ぎ尤然べ  
しとて、しのびやかたを立出て、三井寺さしてぞい  
そぎける、みてらになれば、あんないこうてゑんしん  
にたいめんし、はじめをはりをつぶさにかたり、ば  
んじ頼奉、ゑんしんしばらくあんじ、かく成上は今  
更何共せんかたなし、すいぶんで立をめぐらし、ぎ  
んげんせんより外はなしと、あんしわすらいいたり

けり、爰にゑんしんのみでし、かなこぶしのりうせ  
ん、六天ぐのけんかくとて、三井寺一のあくそう有、  
中にもりうせん、すゝみ出申やうぐそう一つの手立、  
あんじ出して候、げんかくとそれかし、又はながと  
し國みつどのを共ない、よな／＼らく中に立出、道  
行人をなやまし、らうにやくなんによにかきらず、さ  
ん／＼に切ちらし、時／＼こゑを上、頼義のかうげ  
ん、四天王の物共也、君をうらむるあくきやく也と、  
むはうむたいにらうせきせば、みかどもふしんにお  
ぼしめされん、其折ふしにいたつて、ざんげんまし  
ます物ならは、いかでかなわで有へきやと、手に取  
やうにぞ申ける、人／＼よこでをてうど打、扱もた  
くまれたりごぼう、あんの外成けいりやくかな、さ  
らば此ぎに相定ん、ばんしは方々を頼也、はやとく  
とくと有ければ、本よりあくじをこのむ物共なれば、  
後日のなんもかへりみず、やす／＼とうけあい、御  
まへを罷立、はやしやうぞくをぞしたりける、人の  
をしのぶ事なれば、四人共に八方づきんをひつかづ  
き、よはにまぎれらく中のかうじ／＼に立しのび  
ゆききの物をぞ待いたり、かゝりける所にたれ共し

れず、わかさふらい、十き斗打てとをる、ほのぐら  
き所よりつゝと出、一／＼くびを打おとし、扱くび  
共をあつめ、頼義がらうとう、四天王の物共、君を  
うらむるあくきやく也と、一／＼ふたをかきそへつ  
ち／＼に立置、扱それのみにかぎらず、女わらんべ  
にきらひなく、さんのみだして切すてしは、すさま  
じかりけるしだいなり、去程に京中、よるにもなれ  
ばもんをとち、人の出入なかりけり、くぎやうせんぎ  
あつて、此こといそぎそうもん有、みかどふしんにお  
ぼし召れ、頼義はさやうにあくじはよもあらじ、定て  
らうどう共がわざ成べし、いそぎはりまにちよくし  
を立、事のしさいを尋ねよ、かしこまり候とて、三位  
の中將ちよくしとして、はりまをさしてぞ下られけ  
る、是は扱置いたわしや頼義公、おもはざるちよくか  
んのかふむり、物うきへんどのすまひして、あかしく  
らさせ給ひける、竹つな申上けるは、あまり物さびし  
く、御心もつかれさせ給はん、折しもけふはせけんし  
づかに候へば、ふるさみだれに時をゑて、さなへ取を  
御らんあつて、つれ／＼を御はらし候へかしと申上  
る、頼義公聞召、それ何より以て時のなぐさみ、いざ

方／＼も來られよと、人／＼をおん共にて、たつらへ  
出させたまひける、かいなきひなのすまひとて、軒に  
としふるつたかづら、風やさるの聲いとさびしくも  
み／＼にふれ、まよいもゆめのうきはしをわたりかね  
たるつゆの身の、きへもうせなんだまがしは有にか  
いなき此もとに、せみのから聲いとすごく、おのがわ  
ざとてやさしくも、思ひ入るにしつのめが、すげのを  
がさをかたむけて、さなへ取こそおもしろや、なるれ  
ば爰もふるさとに、かはらぬまつのかみどり、とき  
はの山に出るひは、はたるのかげとうたかはれ、よは  
さだめなきならひとて、うきふししげきおざさはら、  
なをもちづきのひかりより、清くすめるはちすばの、  
にごりにそまぬみなれ共、人は何とか夕がほの、花  
と榮へしいにしへは、なのみのこりてたら花の、むか  
しにそでやにほふらん、枕ならべてみし月も、よを村  
くもにへたてられ、かいなきそでをぬらすにぞふる  
は泪かさみだれに、さはべのまこも水ましてたつら  
のかはずなくにつけ、いと、心をなやませり、水に  
うつろふ影みれば、つるも思ひにいつとなく、むかし  
にかへる、我すがた、うきをみするは命ぞと、すつれ

ば近きしでの山、こゑて爰にもほとゝぎす、ながきめ  
いどの道とへば、あやめもしらぬあをひ草、うつろひ  
やすきむらさきの、うきをへだてよかきつばた、げ  
におしみてもかへらぬは、このはまぢりのはなちり  
て、はる立なつもすぎのまど、あふぎを上げてまねけ  
共、日もはや西にかたむけば、かねもかすかに入あい  
の、ねを聞に付、誠にはかなきしやばのゑん、ゆめか  
うつゝ、かまぼろしか、只何事もふりすてゝ、ねがふべ  
きは後の代と、ぎやくゑんながらがつしやうして、な  
無あみだ佛とゑかふ有、竹つな公平供ないて、むろの  
みなとに歸らるゝ、かゝりける所に、三位の中將い  
そぎはりに下に下り、頼義へたいめん有、近比竹つな公  
平、都をさはがす事ゐん中にてかくれなし、きつとし  
づめられよとのせんじ也、頼義思ひよらざる事なれ  
ば、是はふしぎのちよくぢやうかな、竹つな公平がら  
うせきとはいかなる事にて候ぞ、中將聞し召れ、今程  
らく中にて、ひもくるれば爰かしこにて、人をあやめ  
しつちゝにさらし、竹つな公平がわざなりと、事お  
ひたゝしく有ゆへに、人のかよいもなき間、其だん御  
しつめられ候へとのちよくぢやう也、公平聞もあへ

ず、つゝと出何と竹つなきん平が、らく中をさはがす  
との給ふは、ひつちやうな是ゝよく御らん候へ竹  
つな公平只今爰に候、たゞし我ゝをたれと思召候  
ぞ、心をしつめよくみわけ給ひ、まつそれにまします  
は、頼義公な是成は竹つな、扱かく申おのこは、さか  
たの公平と申物にて候、日本にてかくれもなき、おの  
こ也、いやさよく、まなこをひらきみたまへ、其らく  
中をさはがす竹つな公平は、よその竹つな公平成べ  
し、頼義のかうけん、竹つな公平は我ゝばかりにて  
候、あらしきやうこつの御たくせんやと、あざわらつて  
ぞ至りけれ、ちよくしもそつじ成事なれば、しほし  
ほとしておはします、時に竹綱すゝみ出、是ゆき定め  
が、君をざんげんの斗事にてうたかいなし、其あぶれ  
物めを、一々からめ取、我々がとがなきせうこにて、て  
い上にてはくぢやういたさせ申べし、まづゝちよ  
くしは是に御入被成べし、おつゝけ御むかいにさん  
ずべし、おいとま申てわが君と、公平を供ないて、都  
をさしてぞのぼりける、人めしのびの事なれば、百性  
にさまをかへ、太刀かたなおつとに入、よを日につい  
で行所に、あくた川のほとりにて、是も百性とおぼし

き物、二人つれにて都へのほると打みへたり、竹つな  
かれに近付、ことのやうす尋ねばやと、あしばやにお  
つゝき、のふくそつじなから物尋んとよくみれば、  
竹ちみうら也、是はくしてく方く、なにのため  
ぞ、されば此比都にて、四天王の物也とて、さまく  
あくきやくすると承、さだめてゆきさだめが、斗事の  
ために、なせるわざと思ひ、しやつばらめをいけどら  
ん斗事に、かやうのすがたと也、扱方くはいかに竹  
つな聞て、その事に候我くも、其うはさかくれなき  
ゆへに、こへんたちかむねと同然也、時に公平申ける  
は、扱も人の心は、九ぶ十ふんとはよくぞいひつたへ  
し也、此比は方く共はなれ、しらぬいなかには有けれ  
ば、たがいにしらする事もなかりしに、加程までそら  
うたる出立扱もくみ事く何をみても、よひお百  
性衆やと、どつとわらふてそれよりも、都をさしてぞ  
上りける、かねてたくみしことなれば、よに入て都に  
入、けにもようじんと打みへて、しつまり歸つておと  
もせず、いかにもしてくせ物に、めぐりあはんと心が  
け、かなたこなたとかけまわる、然所にくだんのあく  
とう共、思ふまゝらく中をさはかし、いきをいかつ

て來りけり、五條あぶらのかうじにて、兩方はたとあ  
ふた、りうせん是をみて、それあますなと、四人を中  
におつ取まく、竹つなみてきやつばら也とうれしく  
て、是はいか成御事ぞや、我くはいつみの國しのた  
村の百性共にて候、我くのおきう人へ、さくけ物を  
持參、そこつ成物にてはござなく候、ゆるさせ給へと  
申ける、りうせん聞て、何おのればらは百性だ、むぎ  
いがきめを、刀よこしに切ては何のせんなし、命はた  
すくるそのさくげ物を、是に置とをるべし、竹つなは  
をくひしばつて、扱おのく方は誰人にて御座候ぞ、  
りうせん聞て、どみんのぶんにてなを尋るやさしさ  
よ、我々は賴義のかうけん四天王の物共成は、其時公  
平こそをふるはかし、扱もく其四天王達とやらん  
は、我等ことときのいやしき物は、なのみ聞てみ奉事候  
はず、中にも渡邊の竹つな、さかたの公平殿とは、あ  
れさまにて候ぞりうせんげんかく打聞て、おさ竹  
つな公平とは、我々也後くまでの物語に、よくみし  
り本ノマをけらうさ、扱はおのく方にて候な、承り及しよ  
りおそろしきおきやく達や、定て力もつよからんと、  
あざわらふてぞいたりけり、りうせんげんがくはら

を立、命たすかるを、有がたきとはおもはずし、かへつてあくごんのはき出す、うつてすてんととんでかかるを、竹つな公平心へたりと、二人共にひくつんで、力にまかせ取てなぐる、ながとし國みつとびかるを、みうら竹ちのがさしと、一々取て引ふせたり、四人共にたかてこてにひつしぱり、公平いかつて何におのれづらは竹つな公平た、お、けつかう成おすがたと、つきんを取てみてあれば、二人共にほつし也、公平みて扱もく竹つな公平の、御ほつたいせられ候わと、一度にとつとぞわらひける、公平あまりにこらへかね、四人共に一つなわにひつくゝり、竹ちみうらにひつたてさせ、て比のぼうをおつ取のべ、時つ時からにいたゝかせ、大りをさしてひつ立行、此物共かふるまい、あつはれ四天王なかまのできものやと、みなかんせぬものこそなかりけれ

## 第五

ゆきさたさいご井頼義歸京の事

おつて四人の物共は、あくたう共をからめ取、いそぎさんだい仕り、三條の大納言さねふさのきやうをも

つて、今度らく中をさはかせし惡とう共をかくのこ  
とく召取て候と、つゝしんでそうもんす、みかどゑい  
ぶんましゝて、それゝゝいか成物ぞ、ゆかりを尋よ  
とのせんじ也、くげ大じん畏て、扱は此比都の内を、  
さうどうさせしは、其物共がわざ成か、扱もいしくも  
仕たる物かな、やあ汝らは、いか成物ぞみればほうし  
のみとして、にあはぬあくじをなす物共かな、有のま  
まにかたるべしとのせんじ也、はやとくゝとの給  
へば、りうせんまなこをはつたとみ出し、おろか成仰  
かな、今此きはにいたつて、ことのいひわけ有べき  
か、只たんぞくかうどうにもして、とうゝ首取給へ  
と、はつたとにらんで申ける、時に公平やあこなづく  
にう達の、なまぐちを聞るゝな、やせんまで竹つな、  
公平とはげみをせられし、其きしよくは取ておかれ  
て候か、むやうの大ぬす人をはき出し、今更むねにあ  
たり申さん、おのれよのつねの物に、大ぐち聞たると  
は、ばつくんちがい申さん、いでゝはくじやうさせ  
申さんと、しらすをきつとみわたせば、み付に手比の  
大石有、二人のはつしかそくびを取て、いわの下にお  
しこみ、おゝみ事や御ほうの、ちこくおとしにかから

れたるは何とよいきみか、はやはくじやうせよやとをしかくる、其時けんかくいきつきかね、のふ爰をそつとくつろげ給へ有のまゝに申上んと、ふるい／＼ぞ申ける、さあらはとてひつ立る、げんかくあまりのせつなさに今は何をかつゝむべき我／＼は三井寺のゑんしんがでし、六天々のけんがく、かなこぶしのりうせんと申物也、是成二人はこんのかみゆきさだからうどうなかし國みつと申物にて候、然るにゆきさた、ゐん中にてこうろんを仕りろうせきに及候ゆへ、おんるにふせられ候を、むねんにそんじしやていさた時がぐんりよをめぐらし、すてに山ざきにて、賴義を打んとはげみ候へ共、かなはずあまつさへらうどう共をうたせ、さた時やすき心にあらすはら切てあいはて候、さるによつてゆきさだ、いよ／＼たへかね三井寺に參ゑんしんにないたんし、賴義をざんげんし、つみにふせんばかり事に、我々をひたすら賴候ゆへ、此比四天王の物也と、洛中にてらうせき仕候、是と申も是成りうせんがけいりやくにて候、罪にふせられ候は、先此りうせんめをつみにふせられ、ねがはくはそれがしが命は、御たすけ候へと、こゑを上

てぞなきいたり、くげ大じんをはしめ、四天王の物共、一どにどつとわらいける、時に公平する／＼と立より、扱も御坊のほへられたり、よし／＼汝斗は命をたすくるぞ、ゆきさだはいづくに有ぞ、けんかく悦びさん候ゑんしんとないだん致し、じぶんをはかつて三井寺に候、公平聞てひつちやうな、中／＼此上はとべふき事も是迄也、扱も御へんは命をしさに、残らず白狀せられし、御くらうぶんにさらばかうべを參らせんと、一／＼くびを打をとし、いざ此上は三井寺へ行ゑんしんゆきさためを打とらんと、四人もろ共それよりも、三井寺さしてぞいそぎける、かくとはしらずゑんしん、ゆき定を始め、寺中の惡僧共をまねきよせ、もはや時分もよからん、いそきて立をめぐらさんと、まつ賴義方より、君をてうぶく致ん、偏に我を賴と有、にせ狀かいて扱、ほうもんのさいしやう殿は、日比賴義とは相さつよからず、此人を賴さま／＼ざんげんに何のしさいの有べきと、一づにせんぎきはまつて、しやうゑん坊のしんかいの筆取にて、既ににせ狀書所に、四天王共つか／＼とはせ來り、座敷にむんすといなをり、竹つな申けるやうは、めづらし

びを打をとし御悦びはかぎりなし、せんしうばんせ  
い、めでたき共中ノ申斗はなかりけれ

寛文四甲辰年正月吉日

山本九兵衛板

やゆき定、御へんの御からう衆と、是成ゑんしんのお  
でし衆が、此比らく中をさはかせしゆへ、やせんから  
め取、一々かうべをはねて有、さぞ心くるしく思はれ  
んと、につことわらふて申ける、一座の人ノどうて  
んし、とかふ申物もなし、時に公平ゑんしんが、そば  
に立より何をあそばすぞ、御坊、おゝみことノ、の  
ふひつ何ノ頼義は、君をうらむるだんでうぶくの  
こまを、一ゑ頼とかゝれしは、してノ是はどなたの  
御あつらへかと、いふよりはやく取てふせ、くびねぢ  
切つてすててんけり、ゆき定かなはしと、太刀ひんぬ  
いて打てかゝる、竹つな取て引ふせたり、ゑんしんに  
げんとせしを、竹ちみうら左右より取つかみ、おもて  
をさしてひつ立行、寺中の惡僧のかさじと、おつかく  
る公平取てかへし、にあはぬ御坊のうでだてやと、七  
八人かいつかみ、ゑんより下へくはらりとなげ、残り  
しやつばら東西へおつちらし、とぶかことくにそれ  
よりも、大りをさしてぞいそぎける、御まへになれは  
一々次第さうもんす、みかとゑいらんましノてい。  
そぞ頼義召かへせとはりまへちよくし立、頼義やか  
てさんだい有、扱あく人共を頼義に給はり、一ノ

## 公平關やぶり

## 初 段

さても其後せんげんのことばにいはくいあつてもみ  
ちなきものはかならずほろぶとかやけだしこうしの  
きよにもいあつてたけからずおごつてやぶさかな  
らずといへり爰に其比東國のくはんれうをばいよの  
かみよりよしの御ちやくし八まん太郎よしゑとて  
こゝんはつめいのりやうじやうたりかまくらにきよ  
ぢう有じたのりらんをかんがみ給ふさればよいゑ  
こうたみにあいれんいとふかくぶものせきしをあい  
するにことならずぶいくの御せいたうたつとまざる  
はなかりけり扱又御しやていしんら三郎よしさだ是  
はさんぬるみだれの時田むらうこんの大ぶとしのぶ  
がとりこと成うきなんにあひ給へば御なぐさみのた  
めにとて御やうじやうにわたらせ給へ共是もかまく  
らにけちやく有則御家のしんかには竹つなきん平す  
ゑはる市丸みうらのわださへもんためむねかまくら

のごん五郎かけ正何れもちじんゆふの三とくをそな  
はつたるゆうしおのく心をひとつに合せ君をしゆ  
ごし奉る扱かまくらにぢうたくあればけんせいにき  
ふくして東國の諸侍日々にしゆつしをこたらずなび  
かぬくさ木もなかりけり是は扱をき其比しなのゝ國  
の住人すわのはんぐわんさだ長とて代々しなのゝ  
しゆごととしてちやうをんにほこりける扱あひしたが  
ふらうどうにはいぬまの源五さへもんむねたけをは  
しめとして其外のらうどう共何れもけつきのゆうし  
やたり然るに此さだ長は過にし比天下をみだせし田  
村うこん大ぶとしのふがーい也有時定長らうどう  
共を近付てきけばいよのかみよりよしがちやくし  
八まん太郎よし家おなじくしんら三郎よしさだ兄弟  
かまくらにぢうし東國のせいはいを取をこなへばさ  
かよりひがしの大名何れもかまくらにあいつめ日々  
にしゆつしするときく我としのぶがきんるいなれば  
ざいかまくらも然べからずさなくばをしよせきたら  
ん此上はかたきを引うけ城をまくらに打じにせんと  
思ふはいかにと申さるゝその中にも源五さへもんむ  
ね竹すゝみ出て御でうのごとくかねてよりかく候は

んとごしたれば今さらおどろくべきにあらね其此上  
は命をかたきになげうつてしをかるんじはげまばを  
よそみかた一きてき廿き卅きにはむかひ候べしさも  
候はいりをゑぬ事は候まじたとへそのりゑざるとて  
もこゝにをいて其むね心へられよとことばたいしく  
申けるさだ長ゑつきして一だんだのもしきさていへ  
をみかたにたのむべきものなきかむねたけ承り今た  
れあつて御みかたにたのまるゝもの候ましきなりな  
ら爰に田村右近の大ぶとしのぶのらうどう二人のき  
どうむしやが子共てつきあつきくわつきせつきと申  
て子共四人候ひしがむまれだちより人にかはりにく  
げあくまでそなはりあいするものにはつかみつきは  
いまはる有様はひとへにあらくまのごとく五つ六つ  
の年よりもとなふ子共を引よせはねたをしつきた  
をしあるひはうてをねびきりもてあつかふて此もの  
をさどがしまにながしをくせいじんするにしたがつ  
て力のほどはたけしれず野山をゆさんとして今にを  
きさどがしまなるよしを承るかれらをたのませ給は  
んにいなとはいかで申べきはやゝたのませ給へと  
いふさだ長尤ととうしたけだの甚平かげふさを近付

事のしさいをいひふくめひたすらたのむよしを中せ  
承り候とてさどが島へぞわたりけるいそぐに程なく  
つきしかば四人の者に尋ねあひ是はしなのゝ國の住  
人すわのはんぐわん定長より各へ使に參りて候その  
ゆへは田村うこんの大ぶとしのお天下をのぞませ給  
ひ其りをゑすしてうたれ給ふをのゝちゝたちきど  
うむしやもうたれぬしかる間定長はとしのぶと一  
いなればかたきをうたんとくはだて也此度定長と  
一みしておやのかたきをうち給へとの使也とぞ申け  
る四きはよこでをはつたとうつてさてはさやうに  
候か主君といひおやといひ一かたならぬかたきをば  
あんをんにおくこそむねんなれたとへばかたき其身  
てつべき成共つかみひしぎすつべきとかふのせんき  
にをよばずと其まゝ使と打つれしなのをさしてぞい  
そぎけるしなのになれば四人のものを定長の前にぐ  
していづる定長たいめんしてこさいつぶさにいひき  
かせ此上はごぶんたちひとへにたのむと申さるゝ四  
きはよしを打きいていやたのまるゝ迄も候はず、し  
うとおやのかたきなればいではせむかつて打ひしが  
んとわきまへもなくいでんとすむね竹をしといめそ

れはんくわいがひやうじゆつもまづぐんほうをかんがみててきほろぼすを第一とせり御へんだちかやうにはやりたる斗にてはかたきがむぐうにうたれぬぞまづくん兵をもよほしないげのひやうじやうしめし合せ其後おしよせ出んといふ四き聞て何それていの者共にぐんほうひやうでういるべからずむ二む三にかけ入て音に聞へし四天わうとやらんめをいちにけちらかし大將のくびねちきつて參らんはなせはなせといきりをたつるさだ長是をみてかたくが申もことはりなれ共さりながらふかく心へてあさくわたれといふ事あり御へんたちが様にゆふりきはづたるかたく大ぐんをくわへおしよせひたせめにせめてうたん事はあんのうちとおほへたりしかしながらてせいわづかなりきんぐくのぶしをたのむべし御ぶんたちがゆきむかつておさへてたのまんにかでりやうしやうあらざらんはやとくたのむと申さるればさしもはやりしもの共なれど大將のげぢなれば力およばず扱いづ方の何ものか頼まん定長聞てさればかいの國の住人へんみのさへもんのぶまさこそげんけにさるいしゆあつていきとをりをふくむおりから

其上大せいのものなればまづのぶまさをたのまんとて文こまくとかきしたゝめあらをの八郎あんないしやにてへんみのたちへぞいそぎけるいそくに程なくつきしかばあんないこうてくだんの文をわたしける折ふしのおまさ家の二郎等召あつめしゆゑんしていたりしが何事やらんとおしひらきみればむほんのくわいぶん狀也のおまさからくと打わらひいかになんぢら物をきけしなのゝ國のさだ長がぎへいをおこしかまくらへおしよせんする間それがしにもみかたにくははれとやあのさだ長がぶんとして天下をかたぶけんとはふじのみねにたけくらべねこのひたいに有物をねずみがねらうににたるべしあつぱれおのが身をしらぬぐにんかなと一どにとつとわらいまづ其使のものをめし出せ承り候とおもてに出てこなたへといふこらへかねたる事なれば四きはざしきにみだれ入ねめまわる有様はたいいかつちのをちかさなるやうにぞおほへける四きの中にもてつきがすゝんでいふやうはおのれがあくこうをあらましあれにてきいてあり何定長がむほんはねずみがねらふといふかいでねずみがねこをとつてみせん定めてざしや

うがのぶまさならんとそくびをとつておし付をのれ  
きやつ共はけひねりつぶしてくれんといふのぶまさ  
おさへられしろめをいだしていふやうはまつたくさ  
やうには申さぬたぢなきことそ申候へゆるさせ給へ  
と申ける其ぎならばしなのにきたり定長にあいへん  
とうせよさあらばゆるすぞとてひきおこしらうどう  
共これはといひて立よればつたにとらんで  
ゑゝすいさん也くはじやばらと立かへればみなどう  
てんしてにげいりぬ其隙に四きはのぶまさをひつた  
てしなのをさしてぞかへりけるかの者どもがいきお  
ひすさまじき共なか／＼申斗はなかりけり

## 二段目

扱も其後四きはのぶまさを引たてしなのをさしてぞ  
かへりけるいそぐに程なくつきしかば大將のまへに  
おつすゆる定長たいめんしてめつらしやのぶまさ我  
此たびぎへいをあげかまくらを打つぶし其後都へう  
つて上りせひのあんひをきはめんと思ひ立候也御へ  
んもひとへに頼み候うんひらきなばちうによつてし

よりやうはのぞみにきすべしとさもおふやうにぞ申  
さるゝむざんやのぶまさは四きがけんにをぢをそれ  
つねのぎせいも出ばこそやすき御事にては候へ共せ  
つしや如きのぶやうらが御みかたに加はり申さん御  
うけを申だんはづかしく候へ共いか様とも御はから  
い候てにあひ候ひやうらうまいのぶぎやう也とも仰  
付られ候へとさもあぢきなげにそ申ける定長ゑつき  
して一たんしんへうに候くわきうにせうぶを決せん  
間いそぎ手せいいんそつしらいが有べしと申さるゝ  
かしこまつて候とてあやうき命たすかりやかたをさ  
してそかへりける其後さだ長きん國のおし共にくわ  
いぶん狀をぞまはさるゝ近國のしよ侍かの四きがい  
きほいにをそれ我も／＼と家々のはたしるしをさし  
つらねはせきたるます一ばんには白きはたに三がい  
びしきんのざいをさしたるはかい國の住人へんみの  
さへもんのぶまさあかはたに三つかしははんげつの  
さし物はしなのゝ國の住人すわほうりの一とう三百  
よき白きはたにわぐるまきんひやうたんさいたるは  
わかさの五郎つねときはたにしやうきのこまさくら  
花をさいたるはあしなの兵衛みつしげくろきはたに

金銀にてみつおもだかたううちわをさいたるはなはの二郎ときまさ白きはたに三つひきりやうやぐるまのさしものはしほのやぎやうぶつねまさしらばたにくぎぬき大もんじのさし物は山城のせうじゆきなをきばたにもつかうちあふぎのさし物はくとうさへもんともながあかはたに金銀にて水にかもめそとは一本さいたるはさくらだひやうごの介くもにほうわうのあかはたぎんのざいをさいたるはひせんの太郎さだよし白きはたにまいづるしやくでうのさし物いわきだんじやう左衛門高久白きはたにたううちわきんのばれんをさいたるはさいか孫八きばたにまつかわちやうちんのさし物はのじりくら見つ此人々をさきとしてつがふ其せい三萬五千よきとぞしるしける大將ゑつきかぎりなくかたんのれいぎしきだいして何れもさうそくはせ參らるゝたんよろこび入て候此上はをのゝが命を申うくる也出るよりかまくらを枕と思ひさだめ命をみぢんになげうつてすいぶんはげみ申されよしおふせて有ならば其にんもうのしなによつてのぞみはちうにまかすべしじこくもうつるにはやうつたて人々とくわんとく三年二月下じゆん

にしなのをたつてかまくらさしてぞ押よする此事なをもかくれなくかまくらへもれきこへよし家の御前にはいつもかはらぬ四天わうみうらかげまさをめされしなのゝ國の住人すわのはんぐはんさだ長ほんぎやくをくはたてよせきたるときく此事いかいとひやうでう有をのゝ承り是はゆゝしき御大じさればみかたのせいわづか千ぎにはよもすぎしたとへ國々のぐんせいはせ參るとも今の用には立べからず千ぎにたらぬせいをもつてたせいをふせがん事いかゝあらんとひやうでう取々也中にもみうらのわださへもんすゝみ出れきゝゝましますなかにてはそれがしさへぎつて申でうはいかりおほく候へ共まづぐいにさはさめるおもむき申てみるまでにて候おほそれながら君ひとまづあはかづさの方へ御ひらきあつてせいを付られ御かせんこそ候はめかたゝいかに思はるゝ御いけんあれとぞ申さるゝ時に公平つゝと出やあわださへもん事めづらしき御へんのことばかなさればかたき大せいなればとて一せんにもおよばずかたきよせくるをきゝにげんなどは此きん平はきらい也かたきよせざるさきにいづ方まで也共てきに

あはん所まで出むかい命をかきりにたゝかふべしか  
たゝはそれにましませといさきよくいひちらしか  
け出んとする所を大將御らんじてやあきん平しばし  
しばしといめさせ給へばさしもいさむ公平も君の  
ことばにおそれつゝしはゝと立かへるよし家仰ら  
るゝはわださへもん公平が申ぶんたがいに一りつゝ  
有とはいへ共さりなからよするといふかたきをきゝ  
にげにせんもあまりなり又きん平がやうにか程のぶ  
せいにて出むかはんもよろしからずとかくかたき  
を引うけて命をかぎりになゝかふべしようにせよと  
ぞ仰ける時に竹つなすゝみ出おほそれおほき申事に  
て候へ共みかたぶせいに候へばひつでうかちいくさ  
共存じゑずそれに付しんら三郎よしさたこうさんぬ  
るみだれの時よしのぶに捕はれさせ給ひすでに御命  
あやうくわたらせ給ひぬるをふしきにたすかりおほ  
します其上御ようせうにわたらせ給へばこといでき  
なん其さきに何方へも御あづけ候て御心やすく御か  
せんあれかしと申上るよしさだ大にはらをたてさせ  
給ひ扱はそれがしを一せんのようにもたつましきも  
のと思ふかゆみやの家にむまるゝ身はらうにやくに

はよるべからず此度よし家この御みやうだいをも  
承り御命にかはらんと思ふそれがしを何方へも落ゆ  
けとはすいさん也竹つなと御きしよくかはつての給  
へばよし家御らんじて申だんしんべう也さりながら  
此度はたけつなが申ことく一まつしををひらきいづ  
の國の住人めらのくらんどゆきしげこそよにたのも  
しき侍なれかれをたのみしのび出かまくらくじや  
うときくならばすぐに都へ上りせいをもよほし打て  
下りかたきをやすくほろはすへしはやとくゝと  
仰けるよしさだ聞召こはくちおしき仰をかうむるも  
のかなしなばかばねを一所にとこそ思ひしにそのう  
へ一せんにもをよばす出ん事こそむねんなれされ共  
仰はそむきえずおいとま申て參る也さらばゝとの  
泪のわかれぞあはれなる君もなごりをしませ給へど  
心よはくてかなはじとなごりの心をたけくすて人あ  
またにてあしかるべしと侍すこしあひそへいづの國  
ゆきしげがたちに送らせ給ひいかにかたゝいそ  
ぎいくさのよういせよ打とけいるなとげぢし給へば  
承り候とおのゝよういなされけるあはれなるかな  
よしさだこうおのゝゝぐし奉りやうゝくらんどが

たちにつきゆきしげにたいめんしよしをつぶさにかたりよしさだこうをあづけ奉るゆきしげきいてよくこそおげかうましますこなたへ御入候へとてやがておくにしやうじ申よきにいたはり奉る是は扱置さだ長のぐん兵ども城におしよせ時のころをぞ上にける時のころもしづまればよせての方よりむしや一きすすみ出大おんじやうにてなのるやうたゝ今よせたる大將をいか成ものと思ふらん是は田村右近の大ぶとしのぶの一ぞくすわのはんぐわんさた長也然るにさだ長としのぶと一けのよしみをもつてとふらひいくさのためにぎへいをあげらるれはまたかう申それがしはさだながのらうどういぬまの源五ざへもんむねたけといふ者也おほそれながら八まん殿御くびを給はつてとしのぶの御ついせんにたむけんとぼうじやくぶじんにのゝしつた城の内よりさかたの公平もんぐわいにかけ出何さだながめがよせたとやをのれらがぶんとしてげんけをかたぶけ奉らんとはすいさんもぞくとめらいて思ひしらせんかゝれやゝとげちすればかたきみかたが入みたれひ花をちらしてたゝかひけるよせてはまうせいあらてをいれかへ四

きもろ共にきつて出爰をせんとぞたゝかひける城の内大かたうたれてみえければ四天王みうらかげまさ一どにとつとかけ合四方八めんにいれみたれあたるをさいわいにはらりゝときりふするねらひしかたきのくび共を思ひゝゝに太刀のさきにつらぬき城の内へひいている此者共が有様みる人きくものをしなべかんせぬものこそなかりけれ

### 三段め

扱も其後すわのはんぐはん定長はぐん兵共をちかづけてきは大かたうたれ城中にはわつかのていとみへたりきやつばら何とたけく共その身金てつにてもあらばこそよもこたへて城中にはたまるまじされば此ちん少ひいて落ちばおとしかたせこしごえはこねのせばき道にて待うけ跡さきよりひつつゝみうつべしとすわほうりの一とうにいひつくる承り候とて其せい三百よきにてはこねをさしてぞいそぎける扱城中のぐん兵其命をちんかいにひしぎきをきんせきにるいしたゝかふといへ共大ぐんにせめ立られ残りすく

なにうたれけるせう／＼残りしぐん兵共よにまぎれ  
をちゆきけるさしもたけき人々もあきればてゝぞお  
はしける時にわださへもんすゝみ出此ていにては何  
とたけくはけむ共かなふべき共存せずかたきちかづ  
かぬ其さきに君の御供仕り一まつをちさせ給へたと  
へはてきいく萬ごこそる共一方を打やぶつてとをら  
んはいとやすかるべしかまへてむさと命をすて給ふ  
なほんいは後日もとげらるべし何れも其むね心へら  
れよと申君をはじめをの／＼かねてござする事なれば  
みな一どうに此ぎ尤ととうしける其後君の御でうに  
は扱いつ方へゆかん竹つな罷出するがの國おきつの  
さへもんともみつの方までをちさせ給ひかのちより  
都へいくさの次第をつげられかせいを待つ御かせ  
ん有べきと申上るさらばよいせよかしこまつてよ  
ういす其中にもきん平一人きかぬかほにてよそめし  
てこそいたりけれすへはる是をみていかに公平御へ  
んはまたれいのよこしまかいやよこもたつもしらす  
むたいそれがしがむまれついたるくせなればてきを  
引うけをつるといふ事きらい也とそらうそぶいてぞ  
ゐたりけるすへはるかかねてやあ御へんのすねも時

によるぞじこくうつるにはやとく／＼と申さるれば  
いや／＼あまりいそげはげがするものぞかた／＼は  
いそがばさきへゆき給へそれがしは是にとゝまりか  
たきを待つ今一いくさして跡よりおつつき參らん  
とをちんきしよくはなかりけりときに竹つなさしよ  
つていかにきん平たんちをしつめてきゝ候へあやう  
きをみてめいをつゝしみしりぞくべき所をみてしり  
ぞくをゆうしのりやういといへばちつともはじなら  
ずとかくせんぎにおよびじこくうつらばてき近付君  
の御身の上大事たり御へんのゆうりきも時にこそよ  
れとりをたゞしてぞせいしける公平さしたるりに  
をれて物をもいはずさしうつぶいていたりしを時に  
一丸權五郎ゆんでめてよりひつたて我も人も跡に残  
り今一せんのせうぶをはげみたき物なれど君の御大  
事と有上はとかうのせんぎむやく也ひらにこなたへ  
とひつたつれはむねんながらもはがみをしてぞ出に  
ける是は扱をきすわのはんぐわん定長は思ふまゝに  
人々をおいおとしはやかまくらにぎをすてよろこ  
ぶ事かぎりなく今はや東國に心にかゝる事はなし  
都よりうつて下りなばふじ川のへんにあいまちかい

しなのゝせいをもつてふじのすそのよりからめてに  
まはしひつつみたゝかはゞぢでういくさにかつべし  
しからば天下は我もの成べし其時は何れもをんしや  
うはのぞみにまかすべしといさきよくいひちらし一  
時のゑいくわにちとせのよはひをのぶるとかやをこ  
れやゝかたゝと心のまゝにおごりしはきんくわ  
一じつのゑいぐわとぞきこへけるかゝる折ふしもん  
ぐわいにはおさなき人になわをかけちうしんのよし  
申ばんのものおくへかくといふ其ものこなたへめせ  
承り候とてやがてていせんにめし出すさだ長みてち  
うしんとは何事ぞさん候それがしはいづの國の住人  
めらの藏人ゆきしけと申ものにて候まつ八まん太郎  
よし家のしやていしんら三郎よしさだにて候きはう  
せいたらへろうししうの刻此よしさだをむたいにあ  
づけられ候へばせひなくあつかりおきては候へとも  
はんしやうにつきちうしんのためいたはしながらか  
らめとつて参り候昨日まではしゆくんとあふぎ候へ  
共今からめとつて参るだん人のそしりをもちへりみ  
ず又はをのゝもにくしとおぼしめされ候はんとよ  
我々ごときの侍はよろしきになびきわが身のさかへ

んをねかふならひにて候へば今までしゆくんとあふ  
き奉るとしよ人のあざけりをもわきまへずでうしか  
ほにてはんべりける定ながゑつきして御ぶん此たび  
のちうしんよろこび入て候をんしやうはかさねてほ  
うせん是はたうざのいんぶつとて五百丁をぞゑさせ  
ける忝しとてずんとたち我やをさしてぞかへりける  
其後定長らうどう共を近付あのしんら三郎をまづご  
くやにおしこめよ思ふしさいのある間はやとくく  
といひつくる承り候とていたはしやよしさだをあら  
けなき者共が取てひつ立参らせつらきごくやにおし  
こむるあはれとよそにしら露のきゆる斗の心ちにて  
あかしくらさせ給ひける心の内こそあはれなれ是  
は扱をきよし家こう人々にしゆごせられいそがせ給  
へば程もなくはこね山にぞ付給ふとうげをみればし  
しかきをゆひ木戸さかもぎをひつかけかたき大せ  
いにてまちかくるとみえたりさしもにたけき人々も  
今はのがれぬ所ぞととほうにくれておはします時に  
きん平はしりよつて天もひやく大おんあげやあそれ  
にひかへたるは何ものぞなをなのれたゝしは此山中  
にすむなるさんぞくがうたうのやつばらの我ゝが

ものゝぐほしさにかくふるまふか其きならばのぞみをかなへてゑさせん其木戸やぶつてとをすべしちつ共てきたいにをよばい一々にをのれらをつかみひしいでくれんぞとはつたとにらんで申けるせきもり聞てはらをたて何がうたうかとはをろか也是はすわのはんぐわんが一身のもののすわのさへもんさだかげといふもの也かたぐゝを打とめんまふけのためのせきにて有とてものがれぬ所也それにてじんじやうに腹をきるか又は跡へもとるかせひのあんひはかたぐゝの心次第とまつしろにのゝしつてとをさんきしよくはなかりけり公平はいかつて何かたき一身のやつばらと申かすいさんなる事をはき出すものかなをのれらごときにさゝへられ我ゝがはらきるべきか又はゆくへき所へもゆかずあとへやもとるべきかいでおのれらがほしがるくびをとらせんといひもあへずとんで出れば一丸權九郎もつゝいて木戸ぎはへつゝとかけよりしゝふんじんの力を出しやぐらかいだてみちんにおしくだきぐん兵共おつちらす大將かんゑきかぎりなくますこなたへの給ひてもみにもふてそいそかれける此人々のいきほい誠にてんまやくじ

んやとみなかんせぬものこそなかりけれ

#### 第四

公平ゆきしげをからの取井ゆきしげさいご

さてもそののちよし家の御まへには、人ゝを召れ我此たびあやうきをのかるも、方ゝかゆうりきたけきゆへ也誠にわにの口をのかれきじんがもんをこゆるとは、爰成べしさるにてもすへはいかゝ有べきぞ、方ゝいかにと仰ける竹つなすゝみ出申やう、御心ぼそくはおほしめさるべからず、されは此山こそ君御きつきやうの所にて御ざ候、其故はむかし御せんとぞ頼光御しよらうのみきり、此山中に御ざ有しに公平をや公時、すへはるおやすへ竹兩人参り、はしめて君にかしつきしに又つなさだみつ参あい、四天王の御ゆるしかうむりしも此所、されば一たびおとろへ後には御うんをひらき給ふ、ごきつきやうめでたしゝといさめ奉る、吉家御ゑつきあさからずをふきつさうよろし、まづするがへこさんとてたびのしやうぞく被成ける、しうゝい上七人は思ひもふけぬたびのそら、しのゝめあくるはこね山ゆくあし

からのあさがすみ、立まよふ身どものうけれむかふ方にはするが成、ふじの高ねに立けぶり思ひに胸やこがすらん、比はやよひの事なればのどけきまゝにたわむれて花にこずとふうぐいすのおのがはかせにちる花を、たれに仰てなくならんとつらねしも、げにことはりと今こそおもひしらゆきのきへぬるたにのいわまより、もへいすわらびをにあざみ、よもに色かをあらそひてさかん也ける花々は、さぞ心ある人々はゑならずこそはおぼすらん、せめてながめ我／＼も少うきをばさんせんと、まづ立よりてみね／＼にさくらの花のかす／＼を、今きてみるやみぎひだりをりたく思ふゑぼしさくら、かくあさましき山中にいかですみぞめさくら花、うきたびなれは我かむねのきりかやつれしみの程を、めぐませ給へいせさくら行衛何と有べきと、つゆ程我にいゑざくらすべらぎの御代のおぼろ月にしふるさとへかへりしかりのこゑ／＼は我をとふかと疑はれ、いとい心をいたましめなげきながらもゆく程に、いづの三しまのみやう神にぞ付にけり、心しづかにふしおがみ扱はいで

んに立より、おの／＼やすらいおはします時に公平すゝみ出て申上、それかしには御いとま給はれかし、是よりめらのくらんどゆきしげかたち参り、よしさだ公をぐし奉りすぐにするがへさんせんと申上る、吉家心に思召すはきやつはつねにがまん第一にて、ことにそこつ物なればいか、あらんと思召、暫し御しあん有所に竹つなをはしめ、をの／＼申上らるるは今度の御つかいには、公平をさしつかはさるゝこそくつきやうのぎにて御座候、いかに公平かしこき御へんに物をおしゆるににたれ共、つねに御ぶんはことあらければ萬の事に心をたをやかにして、よしさだ公を御とも申さるべきことこそ、かんやうにて候はやとく／＼と申さるゝ、公平聞て扱／＼かたかたはほうゆふのよしみとて、心付のだん近比くわぶんに候去ながら、よしさだ公の御むかいにさんすべきとは申候へ共、いや／＼それかし参ましといふ竹つな聞て、なにとてさやうに申さるゝぞたゞし今申せしことば、みゝに立て候か公平聞てまつたさやうには候はず、いつにてもそれがしが心の儘に参べきと申所へは、かならずおの／＼とめ給ふが此

たびは公平が參だん、くつきやうのことゝ申さるゝちつとふしんに存ゆへ、扱參まし竹つな聞てつねに御へんをおしとむるは、あやうきも願りみずむほうむたいにかけ入によつてこそ、とむれ此たびのつかひはよしさだ公を、御とも申ばかりのことべちのしさいはあらし其うへ御へんはあしはやくい人なれば、へんじもきうに打立給へ時刻移りて、しせんの事いできなばせんまなくゆるとかなふまし、かつうは君の御ためなればやとくゝと申さるゝ、公平きいて君のためと有うへはとかふのせんぎにおよばず、おいとま申て我君さまいとま申てはうばいぢちと、ずんと立てそれよりめらがたちへぞいそぎける、さる間吉家公するがをさしてぞいそがるゝ、いそがせ給へば程もなく、おきつの右衛門ともみつが本につき給ふともみつ立いでたいめんし君是までの御らいりん、まつもつてめてたく候かまぐらの御しやわせ、あしきやうに承り候へ共さりながら、かれら如きのぐちあんだんのゑびす共が、いくまんき候共きやつばらは、一たんのことついでにてにたつ物あらじ、まつゝ都へししやを立せいを是にてまぢうけさせ給

へ、一々に打ひしかんはなによりもつてやすかるべし、是にてきうそくし給へ都のせいをまぢ給へ、尤のしだいとて都へししやをぞ立給ふ、是は扱置きんひらはもみにもふで行ほどに、ゆきしげのたちにつくあんないともいわず、やがてうらにつゝと入ゆきしげは、よしさだ公をそにんして五百町をはいりようし、よろこびのいわひと一ものこらずよびあつめ、しゆゑんしていたりしがもとよりきんゑしやくすくなきにより、かほどにてなにのゑんりよもなく、ゆきしげがかみぎにどうといていかにゆきしげどの、よしさだ公をながゝゝ是に預けをき、さぞたいくつにおぼすらんたゝいまそれかし御むかいに参りたりはやゝゝくし奉らんといふ、ゆきしげ大きにどうてんし色をうしないとうわくして、しばしへんとうをもこたへゑず、やゝ有ていやゝゝよしさだ公此所へはわたらせ給はずと、ふるいゝぞ申ける公平きいてそれがしが參うへは、へちにゑんりよも有べからずとくゝ御めにかゝらんといふ、ゆきしげこたへていふやうはなにのきよごん候べし、しんりよをかけてもいつわる事は候わずと、誠しやか

にぞ申けるきん平聞て、じしやう此所へはおはせぬかなかゝること、いやゝおのれがていをみるにとうてんしたる有さま也、そくひをおさへてたうならば、さだめておのれはくじやうせん、有のまゝに申さすばめにものみせん、はつたとにらんで申けるいかていになさるゝとても、なからんことを何とかこたへ候はんと申、ことばをもなくしていきたる心ちはなかりけり、公平やがて取ておさへはくぢやうせよとて、にわの大木にしめ付る一もんらうとう、是はといひて立よれば公平はつたとにらんで、やあすいさんもおのれらと四方八めんにあたるをさいわいに、はらりゝと切ちらし扱立歸りいかにゆきしげ、よしさだかうをせつがいしたるかさなくば、かたきにわたしたるか有のまゝにはくでうせば、命の程はたすくべしといふゆきしけ聞て、もしもたすかる事やおもひ命をたすけたぶならば、有のまゝに申上んめんぼくなく候へ共よしさだ公をかまくらへぐし奉り、定長にわたし申候公平聞て其まゝちうしたるか、いまだなからへましますかさん候まづごくやにわたらせ給ひぬと申、それにいつわりはなき

かかくはくでう申上は、なにしにきよごんを申べしさにてもそれかし、つねに存よらざる事此たびのあやまりは、てんまはじゆんのなすわざと存候、あはれ御じひに命の程を御たすけ候へかしと申、公平聞てなんじが申でうしんべう成程にたするぞよろこべゆきしげうれしくおもひ、こは有がたき御たすけをかうむる物かなとて物の御じひにはやなわをゆるしてたび給へ、公平聞ておのれ此たびたすかるはくわほうの物、去ながらしたをぬいてたすけんとて、口の内へてを入したのねを引ぬき、すてたりけりむざんやゆきしげ、しゆくんの天ばつたちまちかうむり、あしたのつゆときへたりしをにくまぬ物こそなかりけれ、公平心に思ふやうよしさだ公なからへたにましますば、それかしゆうりきをもつて一たび取かへさんはやすかるべし、やあ爰にうれしきこと有いつにても、それかし一人かたきの方へかけいでんとするたびごとに竹つなといふやつがなましいにかんげんだてして、それがしをおしとむる此たびは心のまゝに我一人、かたきのやかたにかけいつてみちんになさんうれしやとよろこびいさんでかまくら

さしていそぎける、かのきんひらがありさまおそろしかりともなか／＼、申はかりはなかりけれ

## 第五

公平ちりやくさるつかいろうしやの事

去間公平はかまくらさしてぞはせにける、ほんみちは人めしげればかんだうにさしかゝりたにもみねもきらいなく、のりこへはねこへいそぐ程にかまくらちかく也しかば、と有こかげに立よりて少やすらい思ふやう、さだめてかたきゆたんなくようじんきびしく有べきに、そこつにかゝりことしそんしてはあしかりなん、とやせんかくやせんとあんしわづらひいたりしが、かゝりける所へいやしきをとこのほほかぶりをして、さるをひいていでけるがかれも木かげに立より、やすらうを公平つく／＼みておのれ何物なれば、さるにつな付ひきまわるぞとひければ、さん候はいやしき物のよをわたるしよさにて候、公平聞て扱々其しよさにもいわれが有か、なかなかの御ことまつもつてさるめでたき、いわひの物にて御座候い國本てうのれい、つぶさにかたりなか

んづくきうばの家の御いわひは、さるにましたることなしといさいこまかに申ける、公平心に思ふやうきやつにあふこそさいわいなれ、我此さる引にすかたをかへかたきのやかたへたばかり入、定長を取こに取てよしさだ公の御命を、たすけばやと思ひさだめいかになんち、我此比しうにおくれよになし物と也はてて、しんめうをつくべきたねにせんとぞ申ける、さる引いやしきながら心ばへやさしき物にて、泪をながしいふやうは御ろう人にて望せ給ふと聞は御いたわしく存也此うへはいかやう共しんでうし奉らんといふ公平聞ておゝじつしんなしとはいへ共、なんしはやさしき物かなさあらば出たちしてみるとやがてすがたをかへにける、去間公平かのさる引がきたる物を上に取て打かけ、そくそづきんをひつかふて、ゆんでにさるつなをひかへめてにむちを持、さるにむかつていふやうはなんぢちくるいなれ共、人間にはとをからんけだ物なれば、よく聞我天下のしつけん四天王の其中にも、さかたの公平とて人におぢらる身なれ共君をうばんはかりことにかくあさましきすがたとは也たるぞ、なんしも三王ご

んげんの御ししやなれば、力をそへよあゝむねんの  
我すがたやと、涙を流しきどきけるげにまことのつ  
たへ聞、もろこしゑつのしんかにとうしゆ公はんれ  
いは、しうをうばわんはかりことにあぢかにうを、  
入持、あき人にさまをかへあんをめぐらしなんなく、  
君を取かへし二たびよを取くわいけいのはちをすゝ  
ぐとかや、我はんれいにをとるべきか、其上はうば  
い共も此たびのつかいに、公平くつきやうの事とす  
すめしに、もししそんなるものならばまつ代までの  
かきんなればたとへばよしさだ公を、いわをたゝ  
んで入たり共一たびは取かへさんと、思ひさだめて  
かたきのやかたにいそぎける、是は扱置すのはん  
ぐわん定長は、おごりのあまりに鷹がりせんとして、  
はいたかこたかをすへさせさんざめかして出にけ  
る、公平よく／＼みるに是こそ定長也ねかふ所のさ  
いはい、たばかりよつて取子にせば、吉定公をたす  
けんはめいわくたな心をあはすべし、立よればせこ  
の物共是をみてそこ立のけとおいはらふ、公平ひざ  
をかゝめ是はめでたき御よろこびのために、罷出て  
候也いか成き人の御まへにも、罷出申物にて候へば

御なぐさみのために、一きよくまわせて、とのゝ御め  
にかけたきよしを申てたべとぞ申ける、人々聞て扱  
さるのめでたきいわれを聞、其後かみへ打たへ申さ  
んといふ、公平こたへてさん候さるめてたきといつ  
は、むかしもろこしのていわうし、かりに出給ふ、  
さるを三びきいけ取すでにころさんとせし時かのさ  
ることはかしいふやうは、我命をたすけたまはゞ、  
たからをあたへんといへばさらばとてたすけぬ、か  
のさるおく山にはせゆき馬を一ひき出し、ていわう  
に奉ればかの馬に召れ御うんひらかせ給ふにより、  
御馬やのすみにいわい置給ふ、我かてうにも心有侍  
は馬やにさるをつなぐとかや、取わけぶけの御い  
わい一きよく御めにかけ申さんと、ことばをつくし  
て申ける御よろこびの折からなれば、此よしかみへ  
申上んとやかて定長にかくと打たう、其ぎならばめ  
てたき所を一きよくまわせよ、かしこまつてかくと  
いふ公平聞て、とて物の事に御せんちかくにてまは  
せんといふ、いや／＼それにて仕れ公平力及ず、さ  
るを引立しなすくなきつくりこゑを、はつたと上て  
ぞうたいける、さるはめでたきいわいの物君の御代

はちよせんざい、めでたし／＼とをしかへし／＼二三べんまはせ、すきをみて公平さるづなむちを打す

て、とんでかゝる所をはそはにいたり侍共、是はといふていただき付其ひまに定長は、こくうをさしてぞにげにける公平物のかす共せず中にずんと引立あまさじとかけ出を、大せいおりかさなつて手取あし取なはをかけづきんとつてみてあればさかたの公平也、大きにおどろきいましめたりし其上をなをもいたくいましめ、大將の御めにかげんとかなたこなたと尋ねける、やう／＼に尋ね出し此よしかくと申ける、扱はさやうに有けるかまづ其公平めをろうしやさせよ去ながら、つねのろうにてはかなふまししんざうにつくらせよ、承り候とてやかてろうをぞつくりける、むざん成かな公平をたかてこてにしめ付、くびに大づ、三本までかつかせ、こしにはくろがねにて丸くふとくたくましき、とうかねをしめ付くさり三方へひつはり、あしにもくさりだしを打てつろうをこしらへ、ち引のかんせきをもしにかくる、いか成天まきしん也共此らうやぶつて出んこと、かなふべきとはみへざりけり、かのきんひらかしよぞ

んのほどむね／＼ともなか／＼申はかりはなかりけれ

## 第六

よし家はつかう井さたながさいごの事

扱其後きよみがせきにおはします、吉家の御前にはをの／＼さしあつまり、承り候へはめらのくらんどゆきしげは、心がはり仕り吉定公を、かたきの方へわたしたるよし申候其上公平いまだ歸らねばうたがふ所候はずと申出せば、君をはじめ人／＼はつとおどろき涙にむせび給ひける、よし家涙のひまよりも仰けるこそあはれなれ、ふびんやな吉定さんぬるみだれの時、としのぶにとらはれてうきなんぎにとぢられて、すでにしぎいに及しがふしぎに命たすかり、此上はちよばんせいをふるべしと、よろこびし事のゆめと也又ぞやてきにとらはれて、きられんことのいたはしやましてやちやうるいちくるい、あるいはかうがのうろくすまで、さいこの時はかなしむにさぞやさいごに吉定が、おさな心に我／＼をこいしくや思ふらん、あゝ扱ふびんの物かなと御らくるいは

ひまもなし、はんくはいそねむ物共も、共に涙をなさる竹つな泪をおしといめ、しやく取なをし申様おほそれを、き申ことにて候へ共、すへはる一丸それがしには御いとまをたび給へ、きうにかまくらへはせさんし吉定公の御行へを、尋申たく候扱のこるほうばい達も聞給へ我く三人さへぎつて御いとまを申たん、をのくいたいしてはいかりをく候へ共、去ながら公平吉定公の御むかいに、さんせんと御せう申せし時君御しあん有所を、我く三人が公平つかいに參たんくつきやうの御事と、さいさんしいて申ゆへ扱御むかいに參ぬ、つねにたにかのをとこ火の中水のそこまでもかたきといへばかけいらんとするをぢきやうくんしてをしとむるに、此たびは三人の物共ことばを心の内にはうれしく思ひ、はせむかつて有所に思ひの外に引かへし、吉定取子にならせ給へば物をこらへぬ公平にて、さだめてかたきへかけいらん大くんに打かこまれ、うたれてもや有らんもしいけ取にせられなば、我く三人をうらむることも有なまし、ことには吉定公の御ゆくへ心もとなく存也、跡をばたのみ申御いとま申て我か

君さまと、三人御前を罷立てば吉家御らんじて、なんぢらが申でうことはりなれと去ながら、都よりのぐんせいおつ付來らん間、待て一所にはつかふせよ三人承り御でうにて候へ共、へんしもこらへかたく候まつさきへさんせん間、君はせひを待うけさせ給ひそうく御はつかう待奉ると、いひもはてすずんと立かまくらさしてぞ、はせにける是は扱置かまくらには定長家の子らうどうを近付、いかに方々吉定公平をはまに引出し、はく中にかうべをはねよ其後都へ打てのぼらんといへば、尤の御でうとて吉定公平をごくやより引出しゆいのはまへぞいそぎけるいそぐに程なく付しかば、二人の人にしきかはしかせ西むきにおつすゆる、よしさだ公平を御らんじてめづらしや公平、なんちからめ取られしんどうのごくやにをしこめられて有よしを、ろうもり共つたへしが、誠にとられて有けるよな、今こそさいごなれはいふに及ぬことなれ共、心をたしなみきよくしね、さいごにおくれかまいてげんけのなはしくだすな、いきてもしゝてもなこそをしけれ、只念佛こそかんよくなれとかへつて公平をすゝめ給へば、太刀取なわ

取けもんじゆもさすが、頼吉の御子也とみなかんる  
いをぞなかしける、公平心に思ふやうまだぢやく年  
にわたらせ給へば、さいごをかなしみ給ふらんと、心  
もとなく思ひしにさはなくして、かへつて我をすゝ  
め給ふよろづけなげ成をみまいらせよろこび入てい  
ふやうはいかによしさだ公、それがしは心やす  
すくおほしめせ、たゞ今念佛を申させ給へ、らいせ  
はそれかし御ともしてしでさんずをおひこし、ゑん  
ま大わうとやらんがつみにふせんといふならば、そ  
れがしがゆうりきをもつて、ごづめづせつきあほう  
らせつを、一／＼にふみちらしゑんまわうを取子に  
して、ごくらくじやうどへ道引かせかのおとに聞へ  
たる、じやうばんじやう所たまのうてなれのれんだい  
に、よしさだ公をのせ奉り其れんだいの下にそれが  
しがすんで君をしゆごし奉らん、らいせは心やすか  
るべしとあざわらつてぞ申ける、太刀取なわ取一ど  
にとつとわらひ、なにしおふたる公平なれどさいご  
ちかづけば、心をどうてんしてらいせの事を、てに  
取やうに申おかしやなさ程かう成公平か、わづかの  
われらにいけとられ何とてかゝるうきめにあふぞ

と、手をうちひぎをたゞきどよみをつくりわらひけ  
る、きんひら／＼ぞとおもひをくのちからをいだし、  
ゑいやつとひきければ、くさり大つなひきちぎり、た  
ちとりなはとりけちらかし、よしさだをかたにうち  
かけこくうをさしてぞはせにける、けいごのものと  
もをどろき、きんひらこそをちゆけとてあはて、さ  
はきよばわりける、四きはこのよしをきくよりも、な  
におちたりとておとすべきかとて、四人ともにうち  
つれとぶとりよりもなをはやく、あますまじとてを  
つかくる、ほどなくをつゝめ四人ともにおりかさな  
り、きんひらをくみとむるかゝる所へ、たけつなすへ  
はる一丸、三人のものまいりあひのかさじととつて  
かゝる、四き四てんわう四つにわかり、くみあいける  
四てんわうのものとも、四きをいげどりひとつなわ  
にぞからめける、扱きんひらいふやうはいかにかた  
かた、にくさにもにくし此なわ取をそれかし仕らん、  
かた／＼は手をかけたまふなと、さきにおつたて出  
けるが四きは一どに力をあはせ、かけ出しにげける  
を公平にかさしとひかへけれ共、四きはまされる大  
力にてはんちやうばかりひつ立る、公平さきのこと

ばにかはりやれかわなぬぞ、かゝり給へとよばわれ  
ば、三人の人々おかしながらはせよつて引とむる、  
かゝりける所へ吉家大くんをもつてをしよせ給ひ、  
御兄弟のよろこびたとへていはん方もなし、去間公  
平はじめをわりを申上る、吉家御ゑつきかぎりなく、  
汝がてがら今にはしめぬ事なれ共、此度のちうかう  
すべてかぞへがたし、先其四きとやらんめをちまつ  
りに打てすてよ、畏て候とやがてかくこそさあらば  
をしよせんとて、本より城のあんないはよくしつた  
り、大ぐん一どに城の内に我もくとみだれ入、定長  
をからめ取君の御前に引にけり、それはからへ畏て  
りくす、扱本いをとげ給ふ千しうばんせい、めでたし  
ともなか／＼申ばかりはなかりけれ

寛文二年壬寅七月九日

山本九兵衛板

# 公平末春いくさろん

## 初 段

扱も其後それ一やうの春なれば冬こもりせしむめがえのにはひもよそにきこへきてやなぎのみどりふちなみのたそかれにまつほとゝきすあをばのかげにこゑそへてこすゑすゝしき秋風に春のこしぢのかりかねは月をめでゝやわたるらしもみぢちりしく庭のおも口口しろたへの雪ふりてけぬが上にも立かすみめくる月日ぞ面白きさればゑいしやう二年正月はじめの事成に右大将よりよし公の御前にはしよ國の人々あひつめてせんしうらくの御事ぶきめでたふ聞え給ひける扱又家のしんかにはわたなべさへもんのせう竹つなさかたの平太きん平うらべの藏人すゑはるたけちの源太やすもとみうらのわださへもんだめむね其外の諸侍<sup>本ノマ、</sup>あんちんこつが御いわゐとおのゝ御さかづきを給り次第ゝにのみ給ふのとかにめぐるさかづきのじゆんにまはりきやくにとをり大將御きげ

んあさからず人々禮義おわつてのちみなゝおいとま給つてぎよれんにいらせ給ひけるかのよりよしのいせいのほどなにゝたとへんかたもなし是はさてをき其比またはりまの國のあるじをばたち花のさ大將ともふさとぞ申ける此人くわんゐ共におもかるべきしさいはなけれ共いもうとのあさひのまへと申せしをみかどあさからず思召二の宮御たんじやうありて後さききにそなわり給ふゆへともふさ召上られはりまのしゆごにふせられくらしい三位ににんせられ左大將にへあがつてきんちうの取さたともふさ心のまゝなればみな人おもくもてなすゆへおごりはひとへにたうのやうこくちうにことならずおごりのあまりにとふさはなにとぞしてせんはらにてわたらせ給ふ一の宮をうしなひわがいもうとのはらなる二の宮をくらしいにつけ參らせんとてうほ心にあんじけりある時ゑのらうどうに新藤さへもんゆきたゝとてあんふかきものなりしをひそかにちかづけいかにゆきたゝあの一の宮をうしなひ二の宮をよにあらせ我天下をたな心におさめんと思へ共よりよしといふくせものあるがゆへに思ふまゝに成かたしかれをう

しなふ手だてやあらんと申さるゝ新藤さへもん承り  
 はこそやすき御事なれ今程天下の諸大名わが君にし  
 たがい申とみへたりことさらきくちのだんじやうは  
 をちのやす村をひとせよりのぶにうたせしゆへ今に  
 其いこん、残りつゝうへにはかれにしたかへ其下に  
 はやしんもつはら也いそぎかれをめしよせられ御な  
 いだんをしめしあはされたんせうが國にてはたと上  
 させきうしうをしたかへばよりよしはおどろきて  
 四天王のもの共をうつてにくだし申べしそのあとに  
 て一の宮の御事をきさきの宮の御かたよりむほんの  
 よししきり也とぞんし申させ給ひなば一の宮は御か  
 んきにおよび給ふべし其時よりよしかなしみてひい  
 きのさた候べし其時てうてきはいのくせものとして  
 四天王がなきうちをしよせ打とり申さん事何のし  
 さいの候べきと手にとるやうにぞたくみけるともふ  
 さきいてまづもたくみしゆきたいや是に上こす事あ  
 らじさあらばきくちへ使をたてようけ給り候とやが  
 て使をたてにけるだんせう聞て何事やらんと使と打  
 つれ参らるゝ右大將立出たいめんしてめづらしのや  
 すかた殿や是へくとしやうじつゝ洒さかなの珍物

にていろくもてなし申さるゝしゆもやうくすき  
 行ばあたりの人をはらいのけいかにやすかたかやう  
 かやうの次第を思ひたつもしも此事かなひなば御へ  
 んにはさいかい九か國あてをこなひ申べし萬事は頼  
 むと有ければきくち聞て打わらい思召たち給ふもの  
 かななひくそれがしおちやす村がいこんはなは  
 だしく候へば是さいわいのむほん也さらば國へはせ  
 下りはたをあげ申さんとりやうしやう申おまへをた  
 ちとるものも取あへず三重つくしをさしてぞ下りけ  
 る本國にし成ぬれば國中へふれをなしやぐらかいた  
 てかきならべはりはりまはしへいをぬりよせくるか  
 たきをまちいたり是は扱をき此事天かにかくれなく  
 よりよしは聞召人々御前にめされつゝいかにかたか  
 た今どきうしうの一らんはだぎの少二やすむらが  
 おひきくちのだんせうやすかたつるがさきにてはた  
 をあげうつてをまつときいてありそうもんするに  
 もおよばねば竹ちの源太やすもとわだへもんため  
 むねいそぎうつてに下るべしさりながらいづれもわ  
 かきものなればすへはるあいそふていくさ大將仕れ  
 とはやうつたてとの給へば其時きん平罷出でたびた

びのいくさにいづれも大將を仰付らるゝがいかなればそれがしはついに仰をかうむらずせひ此たびはそれがし罷むかい申さんことに九州のあんないよつく存候とはいかりなくこそ申けれ時にすへはるすゝみ出そうしてきん平は我まゝゆひとはいひながらよくふかき人なれ我らに給はる大將をごぶんの所望は何事ぞつねの我まゝとはばつくんにかわるべしゆみや八まん大ぼさつ命のあらんかぎりによじんにはわたすまじきといろをそんじて申けりきん平きいてあらうれしやそれがしを我まゝものと名を付給ふなかくいみやうの有なればせひにをいてまいらんといふすへはるいよゝりつふくして御へんの御いとまを申て下り給ふをそれがしはちつともかまい申さすさりながら此すへはるがむかふ城中をせめ給ふ事は成まじきぞ我らに給る大將なればいくさのさし引はそれがし也たゝかせんの次第をけんぶつの望ならばおいとま申て下給へとあざけるやうにぞ申けるきん平はらにすへかね今はとかふの事もなくおいとま申てわが君さま其外なじみのほうばいたちはまだぞ人々とすんと立ていせんとす竹つな取ておし

でノ術カ

とめ又きん平のれいのくせが出候よ今ははもとしたけてわかげとはいはれまじ君の御一ごんはりんげんにことならづ上意をいはいし給ふ事もつたいなき次第也きん平とぞしづめける大將聞召いやとよ竹つなきん平がそこつはちゝきん時がゆづりなれは今にかざらぬ我まゝ也さりながらきん平よてきと聞いていさむはゆうしのほんいといひながらしよきうはいつわりうちじにすればていゑいをちて命をたすかる是皆もつて君のちう也すへはる下りててきをうちしもきん平とまりて我をまもるもいづれかをろかなるべきや誠に一きとうせんとたのもしく思へはこそしはしも身をばはなたじと思ふ心をしらざるややあきん平とぞ仰けるきん平承り御一ごんの有がたさにしゝのはがみをひるがへしとかふの事も申ゑずしほゝと立さりて涙にくれてぞいたりけるさらはうつたてすへはるとて源氏ぢうだいの御はたをあげられもへぎにはひのはらまきにとけいといふ御太刀をそへられすへはるに給り扱又ためむねにはふしなわめの御よろい竹ちの源太にはひおどしの御はらまきを下されてうてきやすくだいぢしてめでたくきこくま

つぞとてぎよれんにいらせ給ひける人々物ぐちやう  
だいてよろこぶ事はかぎりなしきん平是をみてう  
ら山しげに打ながめ扱すへはるに打むかいにに藏  
人せんちんのあらそひ時の大將をのぞむはもとより  
ゆうしのならひたれどもごぶん我らの其中にてたゞ  
今のこうろんは返す／＼もはづかしやしかながら  
ひころたんきのそこつをば存の事にて候へはかまひ  
て心にかけ給ふなきくちか城をふみおとしせひやす  
かたがくびとつてめでたくやがてきこくあれとがん  
しよくとけてぞ申けるすへはる聞て申やうちくばに  
むちのむかしよりなれしたしみし中なれば何とて心  
にかくべきぞだんせうがくび取ていなかづとにさゝ  
ぐべしあとにて君をしゆごせられよいとま申てはう  
ばいたちやがてかいちん申さんと竹ちみうらもろ共  
に人々にいとまをこいつくしをさしてぞ下りける此  
人々のていたらくあつはれ一きとうせんのもの  
のよりあひ是なるはと皆かんせぬ者こそなかりけ  
れ

## 二段目

さる程に一のみや新王は御けいば二のみやのはう  
へよりさま／＼ざんげんふかければ御ちゝみかどの  
御かんきをかうぶりてひとま所へおしこめられけい  
ごのもののきびしくつきよるはよもすがら御なみだの  
とこにふしられうのたもともくちにけりかゝる  
御あはれの折ふしほり川のさいせうとういんのちう  
せうはよふけ人しづまりて後けいごの隙をうかい  
しのびきたり給ひつゝなみだをながし申さるゝは宮  
の御むほんもつはらなりとざんげん頻りに候ゆへ君  
げきりんはなはだしく則ともふさはからいにてちか  
き内にとをきしまへもなかし申さるゝかさらずは  
道にてうしなひ奉らんとひやうでうきはまり候へば  
こよひ一つうのしよをあそばし御せいしにてせひそ  
うもん有べし然らずばよにまざれしのび御出ましま  
してよりよしを御たのみ候て罪なきよしを申ひら  
かせ給べしはやとく／＼と申上る宮御なみだにくれ  
せ給ひみづからいか成むくひにやようせうにてはゝ  
にをくれ今又けいばにざんせられいとあさましきま  
るが身の行末とてもしられたりみづからあやまりな

きよしをそうもん申ものならばいたはしや御さきさき  
つみにしづみ給ふべし君のてうあひ深くしておひを  
なぐさみ給ふなるきさきをいかでかうしなわんちゝ  
みかどへの御かうゝにはたいみづからがしがいいし  
て御いかりをやすんせ奉らんと御はかせに御手をか  
けさせ給ひければ二のくぎやうすがりつきこはもつ  
たいなき次第かな何とてふかくにはみへさせ給ふぞ  
もろこししんの國にじんせいちやうじとて二人のた  
いしありけいばにふかくざんせられちゝのいかりを  
うけし時じんせいはたうざにじかいすちやうじはの  
がれ國をさり後にはついに國をたもてりさればじん  
せいがいしゝたるとちやうじのがれ國をたもち父の  
跡をおさめしは是第一のかうゝとしるせりとかく  
おちさせ給ひつゝ御よをおさめ給へやとさまゝか  
んげん申さるゝ宮はげにもと思召其ぎならば力なし  
さらばしのび出べきと人々を召ぐしてひそかにだい  
りを出給ひよりよしたちへみゆきなり程なくたちに  
もなりしかばひそかにいらせ給ひつゝよりよしにた  
いめん有はじめおほりをかたらせ給へばよりよし大  
きにおどろきて扱もゝよの中にけいしけいぼの間

ほどあさましき事は候はずされ共ざんしやのわざな  
ればいつまでか候べき心やすく思召せとおくにしや  
うじ奉るそれより二人のくぎやうたち御いとまを給  
り三重だいをさしてぞかへらるゝ是はさてをささ  
大將もとふさは新藤左衛門近付て汝がちりやくにた  
がはず宮よりよし君にそうもん申つゝよりよしとも  
にうつべき也急いくさのよういせよはやくゝと  
ぞ申さるゝ行忠承り申やうかく有べきと存つゝ四天  
王のやつばらをつくしへ下さん其ためにきくちがら  
んをくはだてしになかんづくにがゝしききん平竹  
つな残りゐて京とのまもりを仕ればそつじにいくさ  
し出してはかへつてなんぎたるべき也爰にくつきや  
う一のてだてをあんじ出して候今どすへはるうつて  
の大將かうふりて九しうへ下りし事きん平あとに残  
されしを是をむねんに存ると承るさいはいそれがし  
がいとここにたばやし源内みちかねと申ものよりよし  
の御内に候がべんせつかしこきものなればかれをか  
たらひいひふくめ竹つなきん平が其中をあしくあい  
さついせなばきん平もとよりたんきもの無二無三  
にあらければとかふのしやべつもいはずして竹つな

とさしちがへんはちでう也かれらあひはて申て後は御心のまゝ成べしといさぎよくこそ申ければ大將大さによろこびあつはれ汝はあんじやかなさらば其ものめせとある承り候とやがて使をたてにけるたばやしは承り取ものも取あへず急ぎやかたへ参りけりもとふさたいめんましゝて是へゝとしやうじ入しゆをさまゝにもてなし扱はじめてけんざんのしるしとて引出ものをゑさせつゝしふんのはからい申されしはいかにみちかね四天王のやつばらが又人なしとふるまふを御ぶんもむねんと思ひ給はんしかるにかやうかやうのくはだて有しおうせたらんにをいは御みもよに出し申べしばんじはたのみたてまつるみちかねもとよりどんよくの者なればしだい申にもおよばず御心やすくおぼしめせずいぶんはからいみ申へしとはや御前をまかりすぐにそれよりみちかねはさかたがたちへいそぎけるしたくにも成しかばきん平にたいめんしさまゝのものかたりよも山のはなしおわつて後いかにきん平殿今ど九しうへの大將は御へんに仰付らるべきを京とにむなしく殘されし事ひとへに是は竹つなの君へつねゝ我まゝもの

也そこつ人なりとあしさまにうつたへ給ふ故今度も大將ならず萬事思ひのかいもなくむねん日々にかさなつて口おしく候らんあの竹つなのおきてやせいたう我々にいたる迄かたはらいたく候としみゝと打かたりやあよしなきものかたりにながいたして候おいとま申とわがやをさしてかへりけるきん平もをくりて出げにもみちかねいふことく扱は竹つながさまたげと覺へたり代々よしみふかければ命にかへて思ひしにざんげんせられし口おしさよ此上はせひをいはせずさしちがへあつたら侍二人しによりよしにことかゝせんと思ひきはめしのびやかにふみこまゝとかししたゝめ竹つなかたへぞつかはしけりたけつな立出状をみるにごぶん我をざんせらるゝ事君の御うんのつきしゆへ也天しる地しる我是をしらざるべきやさりながら日々にあひなれしよしみふかき中なればひそかにたゞさしちがへてしぬべしそれへ参上申べきか是へきたり給はんや御報承らんとかきてあり竹つなはつとをどろきしばらくしあんしていかさま是はさんしやのわざ成べしと思ひ是より返事いたさぬと使のものをぞかへしけるそれより竹つな

はさらばまづ御てんへあがりふうぶんをきかんと思ひ立出る所へたばやし源内きたりけるやあめづらしやこなたへと内にしやうし此事いろにも出さず人の上はしな<sup>上はなしノ術カ</sup>どをしたりしが其時みちかね申けるはいかにわたなべ殿あのきん平のすいさんは生れつきとはいひながらたび／＼の我まゝさぞむやくにおぼすらん我々に至るまでむねん日々に候へば君へうかいひ申べし竹つな殿とぞ申けるわたなべちやくとさとり扱はきやつめがしわざ也天のあたへと思ひあふごぶん申さるゝことく我もさやうに存る也さらば御身ともろ共にきみへうつたへ申べしさらば二心あるまじきとせいしをかきてみせ給へみちかね大きにどうてんしいやせいしまでも候はずまづかさねての事にいたさんとたたんとするをとつてふせ扱はごぶんは我心をひきみんためかさらすは爰をたゝせじといふ源内つよくおさへられてごめに成ていふやうは何いつわりを申べきさらばかゝんと申ける其ぎならばとて引おこしのぞみ<sup>な</sup>のとをりにかゝせけるわたなべよろこびくわいちうし又とつておさへおのれは何のいしゆあれば日本ぶさうの竹つなをきん平とさしちが

へさせころさんとはたくみけるぞいで思ひしらせんと首ふつゝとねぢきりしがいをゑんしよへおしのけ首をきぬにおしつゝみたゝ一人きん平たちへぞ参らるゝ坂田立出きつとみてくだんの事にやきたるらんと思ひ是へ／＼と申ける竹つないなをりいかにきん平ごぶんが心にはいか成てんまが入かわりてさしちがへんとは申さるゝぞさためて人の中ことたるべしよくしあんしてみ給ふべしきん平とぞ申ける坂田きいていや／＼わたなべたとへ中ことにもせよ人もかたちのなき事は申まじことさら君にもうらみありとかく二人うちはたし國どをやみとなすべき也はやしなんとぞ申けるたけつなにつこと打わらいごぶんのそこつのたんきをはひころいけん申はこゝぞかし是はみちかねめがざんげんにて候ぞや此手跡をみしり給ふかごへんの事をわが前にてあしきやうに申ゆへ扱はかれめが二人をころしむほんをおこすとさとりつゝ口がきをかゝせてきたりたり是みたまへといだしけるきん平ひらきみればみちかねが手跡也大きにおどろききをけし扱はきやつめにたばかられて此間竹つなを恨みけるこそはづかしけれま

つびら御めん候へいでもちかねめが首ひんぬいて参  
らんとかけいつるをとつておさへごぶんのいかりさ  
ぞ有らんと思ひはやくびとつて参りたりさらばみせ  
申さんとつゝし顛倒方みくびをなげいだすきん平あきれば  
てとかく竹つなは人間とは思はれず人の心をよくさ  
とり扱もしづまりたるはたらきかな誠ぶんぶの侍や  
ごへんをいゑの中ぞんとしすへはるそれがし兩にた  
たば日本はさてをきらいかうらいはくさい國けいた  
んごくよりせめきたる共何程の事か有べきやいらい  
そこつを申なばこぶしをあてゝもせいし給へとがん  
しよくとけて申ければわたなべきいてあふそこい  
なきしよぞんのてい一入もつてまんぞくせりよしな  
き事に隙をゑてきのふよりしゆつしをせずいざや御  
てんへあがらんと二人うちつれ出らるゝかのきん  
平がぶたうの程又竹つながちほうのていあつはれた  
もんちごくのさいたんやとさてはめぬものこそな  
かりけれ

### 三段目

さても其後さ大將ともふさはたばやし源内うたれた  
るときくよりもやがてさんだい申てそうもん申され  
けるやうは源のよりよしこそ一の宮の御むほん折を  
ゑたるさいはいと宮を引取奉りきんりをかたむけ申  
さんとせいをそろへ候よしこときうに候へばいそぎ  
うつてを給るべしとぞそうもんあるみかど大きにお  
どろかせ給ひ扱はよりよしはちゝにてきする子をか  
こいあまつさへせいをもよほすきつくわいさよいそ  
ぎつ**い**ばつ仕れとのせんじ也ともふさ大きによるこ  
び御前を能立ふししのびにせいをぞそろへける此事  
よもにかくれなくにしきのこうじにもれきこへ人々  
御前にめされつゝいかにかたゝ我をかすとがなふ  
してぎやくしんのさたありすつうのせいしをもつて  
申ひらくべきと仰ければ竹つな承り仰にては候へ  
共せいしかずゝあけ給ふ共宮をかこはせ給ふ上は  
げきりんやむ事候まじいはんやゆみをひかん事お  
それおほく候へばとかくたゝの庄へ引こもらせ給ひ  
つゝよの有さまを御らんじてざんしやをたゝし給ふ  
べしはや御げかうとぞ申けるきん平きゝもあへず竹  
つなのかけんはそむくまじとは思へ共此度のいさめ

はむねにほうどつかへて候それをいかにと申に天し  
をおそれてひきしりぞいたるとは人申さで四天王の  
もの共あるひは討れ又はつくしへさし下り竹つな金  
平斗なるがゆへに事もみへぬ其さきに聞おちにをち  
たるなとゝいはれてはげんけのいゑのかきん也人は  
ともあれかくもあれきん平にをいては一かう御所を  
出まじきさ大將がくびとつて跡よりをつゝき申べし  
とくゝ用意しておそろしくばおち給へ人々とい  
ひすてゝかたわらに立よりて大ひざくんでどうとい  
なをりほうつえついてゐたりける其時御前の侍たち  
なふ先此たびはせひ竹つなのいさめにつかせ給へや  
としとやかにぞ申けるきんひらはつたとにらんで  
やおおちんといへるたんがうはさぞかたゝはうれ  
しかるらんたゝ人をさそはずともごぶんらばかりを  
ちゆけとて中ゝをちんすきしよくはなし竹つな是  
をみてげにきん平申もことはり也さらばまづてきを  
一あてけちらかしそのゝちひらかせ給ふべし我君と  
ぞ申ける大將げにもと思召そのぎならばいそぎいく  
さのひやうでうせよやあきん平參れとのたまへば其  
時きん平ゑみをふくみそれこそぶしの本意なれと又

御前にぞ出にける大將御らんじなんぢがいふもこと  
はりなればはやとくいくさの用意せよかしこまつて  
立あがりふしおのゝしくしたくをしたりけりかくてそ  
の後ともふさは大ぐんにておしよせて三重ときのこ  
ゑをぞあげにけるされどもげんしのしよさふらいぶ  
せいなりとは申せ其ものになれたる物共にてうわう  
さわうにかけたてゝふしはなをちらしてたゝかいけ  
るかゝりける所へひとりむしやが一子平井の市丸し  
やうねんは十六さいぢよあつてたんばの國に至りし  
が此よしをきゝつたへものゝぐとつてうちかけ我に  
つゝかんもの共はつゝけやゝとよばわつてほうし  
やうよりつたわりしわちがいのはたさゝせしの村を  
まつすぐにじんきくわんにさしかゝりこまをはやめ  
ていそぎけるされどもらうどう五きつゝきしうゝ  
六きにててきぢんをかけやぶりほりのきしべにこま  
かけよせ大おんあげてなのるやうたゝいましうゝ  
六きにててきぢんをかけやぶりしろにくはゝるつは  
ものこそけんじふだいのさぶらいにほうしやうがま  
ごひとりむしやほうめいが一子ひら井の市丸しや  
うねんは十六さいわれとおもふものあらばよつてく

めとぞよばゝりけるときによせてのその中より玉の井の太郎きよつぐとてむさしさがみに名をえたる大ちからのありけるが進み出ていふやうはせんねんわがちゝをぐぶんがおやのひとりむしやに討せむねんいまにたへやらずいざやくんでせうぶをせん一まる心えたりとおしならべむんずとくむ玉の井もとより大ちから一丸を下めにかけおしひしがんとゑい／＼とおせ共一丸よろいのきつとしめつけあぐれはかゝみなぐれは飛兩方あせをしつはとかいてひじゆつをつくすそのうちにかたきみかたのものともはめいよのけんぶつこれなりとこぶしをにぎりきばをかみかたずをのんでぞけんぶつす玉の井なにとかしたりけん一丸におつふせられおきん／＼とする所をおさへてくびをかきおとすおとゝの二郎いかりをなし一もんじにうつてかゝる市丸ちやうとうけながしよこてきりにきりければ二つになつてぞうせにける三なん三郎こらへかねむ二む三にきつてかゝるをとびちかへたかもゝきつておとしのつけにかへすところをばほそくびちうに打おとし三つのくびをきつさきにつらぬき大おんげんじ<sup>あげ脱スルカ</sup>かたの侍はとしはびちやくと

いへどもうちものとつてはおとなししいくさはかうこそするものよとにつことわらふてたち<sup>に</sup>けるよせてのものどもこらへかね一度にどつとうつて出る時にきんひらすゝみ出そこのけ一丸ごづめせんとうつていでんとすればよせてこれを見るよりもあらもつたいなやきんひらがいでけるはとくもの子をちらすごとくにむら／＼とぞにげにけるゑゝおくびやうしごくのやつばらや此きんひらにてあればとて手あしの甘もあるならばにくるだうりもことはりよあしも二ほんに手も二つほかにかたはゝたんきなとちからのつよきばかりなりかへせ／＼とよばはれどちかづく者はなかりけりいまははやせひもなしいかに市丸たゝいまのはたらきはちゝほうめいにもまさりたりいまのいくさのありさまをぐぶんがおやにみせたやな是につけてもすぎゆきしほうせうさだかげこひしやとなみだぐんでそのゝちにまづたちいりていきつけとしづ／＼とつれてひいたるかのきんひらがていたらくまた一丸がてがらのほどおほぢもおやもこれほどはいかでもつてあるべきときもみかたもをしなべみなかんせぬものこそなかりけれ

#### 四段目

扱も其後さか田の平太きん平はたび／＼うつて出けれどもきん平とみるからにむかふものゝあらざればかぶとをふかく打かぶりめんほうほうあてをしあててなぎなたを打かたけつくりなしてのりけるはただ今うつて出たるは平井の一九がおぢみのゝ國の住人きし田のさへもんためつぐ也我と思ふ者あらはをしならへて首うちせよとらうごの思ひでにうちじにせんとぞよははりけるよせてのもの共是をきゝ一丸がおぢならばて取にせんといふまゝに我さきにとうつてかゝる所を引よせつゝぬきねぢ首人つぶてあたるをさいはいにはらり／＼となげすてけるよせては是にきもをけしおぢてさうなくすゝみゑず新藤さへもんゆきたゝさいふりあげいふやうはあのきし田一人に何ほどの事か有べきかゝれや／＼とげぢすれば爰にみちのくの住人しかまの藏人ありくに下をさの住人とげの七郎さだとし力はつね／＼じまん也二人ともにうちうなづきおにかみなりともあまさじとと

んでかゝりむすつくむきん平二人をさうにうけゆんでめてにかいはさみゑいといふてしめければめ口よりもちをはいてたちまちむなしく成にけり新藤さへもんはがみをなし一もんじにうつてかゝるねがふところのやつかなととびかゝりひつゝかみての下におつふすればらうどうのなり時すかさずかけよせきしだがかぶとをつかんでうしろへやつと引ければかぶとめんほう引きてみればさかたのきん平也やれきし田にてはなきぞきん平なるはとてどつといふてぞ逃にける其内きん平新藤さへもんがくびをかきおとしきん平といくさせまじきとは何事ぞいやといふともせひせんものをと大手ひろげて追かくれば八方へにげちりけりかゝりける所へ竹つなからめてよりきたつてきん平をまねきよせもはや思ふ程いくさせられてあればなにゝふそくのあるまじきにいざ君をいさめてをちゆかんもつともといふまゝにやがて御前に罷出一まづおそれを思召いそぎ京とを御ひらきましますと申上ぐればよりよしげにもと思召さらば出んもの共とおの／＼打つれそれよりもふしただの庄へぞいそがるゝいつもかはらずぐすめにはた

けつなきん平一丸をさきとしてしづくとぞおちらるゝあとをきつとみてあれば何かはしらすぐんせい  
うんかのごとくおつかくるきん平是をみてすいさんの  
のをい事や我とゞまつておつちらさん人々はをちら  
れよといふよりはやくそばなる大木ねぢきつていで  
ものみせんとうつてかゝれば金平とみるよりもわ  
つといふてにげゆくをおつかけうたんとすれ共一人  
もとどまらず我さきへぞにげにけるおゝさもそうす  
さもさうすと棒振かたげて引たりけり時に竹つな一  
丸にめくばせしていかにきん平とかなき大木ねぢき  
つててき一人もうたずしてもらし給ふは何事ぞおか  
しさよとそうかしける金平聞てあゝたけつなはどう  
よくしたいないひ事やむかふものこそうつべけれに  
ぐる者をおつかけてゆへなく命とらん事つみのむく  
ひもおそろしやそうしてせい人は人をこらしめ給  
へ共ものゝ命はたち給はずいらいにをいてもあしき  
せつしやうし給ふな竹つなとぞ申けるわたなべか  
らゝとちわらいやれあれきいたか一丸よ扱も  
扱もなかいきしての一とくのきん平のごしやう心を  
今きいたるこそおかしけれかまいてゝせいじんの

心をとくとわすれずしてみたりに人をころし給ふな  
ちか比しゆせうにこそ候へさりながらせい人にも又  
はいか成けん人にもごぶんほどの大きなかほのあか  
いせい人はから天づくにもなあ一丸よ有まじきとは  
思はぬかとしやれつじやれられつ三人一同にとつと  
わらいたゞの庄へぞいそぎける此人々のてらたらく  
三重いさぎよくこそみへにけれさる程にたゞの庄に  
もなりしかば宮をかしづき奉りよきにかつがふおわ  
しますしかれ共よの中のさだめなかりしならいにて  
一まる此方頼よしふうきにおかされたしんじんのう  
らんかきりなくいれいのとこにふし給ふいじゆつの  
れうこうくすりをつくしおんようのかみいのりをは  
げませ給へ共ねつひやうさらにしりぞかす次第ゝ  
によはらせ給ひたのみすくなくみへ給ふ宮をはじめ  
奉り八まんに至まで御いゑのしよ侍あとやまくらに  
立よりてさまゝかんびやう申せ共其かいさらにな  
かりけり今をかざりとみえし時いたはしやよりよし  
は竹つなきん平にかいしやくせられおきなをり宮を  
つくゝみ参らせ御なみたをはらゝとながし給ひ  
よにくるしげなるこはねにてあゝくちおしやそれが

しはしやばのゑんつきはてゝめいどへ赴き候なり是  
と申しんわうの御うんのつきと覺へさふらふそれ  
がしながらへ候はいせひざんしやのつみをたゞし御  
しんしの御中なをし御とも申て上りつゝ御くらいに  
あらせ申さんと思ひし事のかいもなくたい今むなし  
く成候いかに竹つなきん平よ誠になんぢらは日比つ  
かへしちうせつをいくばくつくされずとももの事に  
きやうこは我ぞと宮をたつとみてよきにうやまい  
奉れいかに八まん汝おさなくとも父がゆいごんたし  
かにきゝ宮にちうこ奉り四天王がかんげんは父が  
いふぞと心得て少もそむく事なかれさはいひながら  
八まんがまだおさなきものとして思はぬかたきを引  
うけて心をつくさんふびんやとふかくの泪をながさ  
るゝ時に竹つなきん平どうおんにこはあさましき御  
しよぞんや兩三日の御ふれいにかやうにわたらせ給  
ふ事年ころはおにかみよりたけかりし御大將のかい  
なき今の御ふせいやせひ御心を取なをされ御代にあ  
らせ給ふをみなはせ給へやとなみだと共に人々は  
御力をぞそへにけるよりよしはかたゝ申はさる事  
なれ共しやうむしやうのさかいはたけきにもかぎ

らずちゑ有とても頼なし今はかなはぬ道なればせひ  
なく思へもの共よいとま申てさらばとて扱一の宮や  
わか君を御めをひらきなごりおしげにみ給ふかと思  
へは程なくむなしく成給ふともしびきへてあんやと  
なるこはそもいか成よの中ぞと人々御しがいに取付  
てこれはゝと斗にて聲をあげてぞなげかるゝをつ  
る泪の隙よりもいたはしや一の宮くどき給ふぞあは  
れなるあなあさましやみづからはしゆくせんのも  
くひにや十せんのはらにやどり出生したるかいもな  
くいとけなくしてはゝにわかかれいぼのざんにてち  
ちにはうとまれ今はひたすらよりよしを父共母共頼  
しにかやうにむなしくなる上はたれを頼みにたま  
のおよたへなばたへよみちしばのつゆのうきみの  
おき所たれにとはましあぢきなや扱もゝうきよには  
かみもほとけもましまさぬかうきをこはり給へや  
とくどきなげかせ給ふにぞおにをあぢむく人々もせ  
んごふかくにたをれふしりうていこがれなげかるゝ  
しよじのあはれときこへけるされ共竹つな泪をお  
さへげに誠わが君はねつびやうにてわたらせ給へは  
そつじにさうれいかなはじと又いだき上奉りそせい

のくすりを參らせける中にもきん平はあまりの事のかなしさにやはたのかたをふしおがみなむ八まん大ぼさつはげんけのうち子は皇う百代までもまもらせ給はん此御たくせんはいつわりにてましますかきみをかへしてたび給へさらずばてきはよそにはなし八まんのほうでんにてはら十もんににかききりごうをつかんでみちやうへなげ一ねんのあつきとなり參りげかうをつかみさき神々たり共申させまじなむ八まんとときばをかみふしおがみ又／＼そせいのかすりを參らせあらかいなしわが君／＼とゑをあげよばはり水をそゝぎ奉ればあらふしぎやなよりよしは御いきほつとつき給ひよみかへらせ給ひける人々是にちからをそへいよ／＼くすりを奉ればなをもつてくわいき有しだいに御きりよくつき給へはげんけのはんじやうすゑながくばんせいらくは是成べし扱もめでたや／＼と上下ばんみんをしなべてさいめきわたりみへにけり一の宮若君の御よろこび又四天王の心のうちうれしき共中／＼申斗はなかりけり

## 五段目

去程に右大將よりよし公はじやうごうならぬゆへにより御いれいいよ／＼へいゆふあればみな／＼きゑつのまゆをひらき上下よろこび奉るかゝりける所へすゑはるやたけちみうらはきくちが城をせめおとしやすかたがくびを持都をさして上りしが君たいの庄にましますときくよりはやくはせ參り人々にたいめんしてやがて御前へ罷出きくちがくびを御めにかくれば大將御らんじて誠九州をてきにうけやす／＼とたいぢせし事かた／＼ばつくんのはたらき也と御きげん中／＼あさからずかゝりける所へいづの國の住人といのなりやす方よりひそかに狀をつかはしける何事やらんと人々はうけ取御前にさしあぐる大將御ひけんまし／＼にそのぶんにいはく扱もともふさはおごりのあまりにちんじゆふの將ぐんとなり天下のぶしに向つてをのれかまゝをふるまひ候あはれ名ある侍を御代官に上せられくはいぶんのたまはらばざい京の人々みな／＼したがひ申べしなりやすはんとぞかきにけるよりよし御らんじて此比都より心をつうする人なかりしになりやすがしんていしんひやう

にこそおほゆれとやがて御返事を給り使のものをぞかへさるゝ其後たけちの源太をめされなんぢはいまだ九州のつかれもはれまじけれ共しよこくのぶしとしたしきといひべんせつかしききものなればしのびていと上りしんらのかんぬし圓長にゆきともふさがふるまひ都の取さたきといけざい京の諸大名へのびくくにくはいぶんをまはしつゝやがてかへれとの給へばかしこまり候とりやうじやう申御前をたちふしやがてしやうぞくしたりけるさる程にたけちの源太やすもとは人めをしのぶ道なれば山ぶしすがたにさまをかへくわいぶんをおひに入しもべのものにもたせつゝ心ぼそげにすごゝとたゞの庄を立出て都をさしてぞ上りける日もくれかたに成ぬればこよひはこゝにしゆくかはらかたきいつかあふたのさと夕立過る山のはにたへゝ残るくもみさかかゝるうきめをみやたのしゆくよきもあしきもよの中はちりにまじはるあくた川げにやさいこ中將のつらね給ひしことのけまであはれにいとゝおもほへてあまのさゝ山さらゝにたへぬ思ひのいつの日か山ざきにもたから寺めてをはるかにみあくればやはたの山

にかすみたなびきていはし水にぞやどるらゝ君の行末あんをんにまもらせたび給へとふしおかむよりはやみねのくもきりはるゝ月かげはかつら川にもうつるらんこひづか四つつかさし過て入あひのかね諸共にていとはやくつきにけりそれよりもやすもとはしんらのやしろに参りつゝあんないかうて内に入圓長立出たいめんしよくこそきたり給ふ物かな扱君はつゝがなくましますやいかにゝと有ければさん候君もいよゝ御きげんよく渡らせ給ふ我々いづれもけんごに罷有候へば御心やすかれと申圓長きいて先以てめでたふこそ候へさあらは是にとりうしせけんはやうすをうかい給へと奥のまにしやうじつゝよきにもてなし申さるゝさればよの中のしんしとても頼なく兄弟とてもはかりがたきは是かとよ圓長つくゝと思ひけるはいやゝ竹ちを是にをき後日にかたきへきこへなば我みのざいくわのがれまししよせんたいともふさ殿へひゑうしてほうび給らばやとあんじすまししのびやかに宿を出ともふさやかたへ参りつゝあんないかうて内に入さ大將の御めにかゝりごん上申けるやうは扱もよりよしのらうど

う竹ちの源太こそぞい京の人々へくわいぶん持來り  
都のふうぶんきかんため我らの宿所に罷有候よきに  
てだてを仕り是へ召つれ參るべしちうばつあれとぞ  
申けるともふさ大さによろこび天のあたふる所也い  
そぎつれて參られよ承候とやがてじたくに立歸り何  
となきふせいにて源太に近付いふやうはいかにやす  
もと御みは我らのよしみといひ又はよりよしの御  
ためなればいかにもてだてをめぐらしともふさをう  
たせ申さんいかはあらんと有ければ源太大さによ  
ろこび扱々有がたき御心ざしや何とぞしてうたせて  
たべ一つは一けのほまれなれば萬事は頼奉ると勇み  
すゝんで申ける國長しすコレヨリ以下其國長トアリましたりと思ひさればさ大  
將はまい月それがしを頼みやないのきたうに大はん  
にやをてんどく申が則今日あひあたりごぶんを大  
はんのにやチ脱スルカはこに入て參るべしかならずともふさ立出は  
んにやをちやうもん申也我じぶんをはからいふた  
をあくべし其時立出給へごへんそれがし二人して思  
ひのまゝにうつべきとてにとるやうにぞたばかりけ  
る源太誠とよろこびくつきやう一の事共かなはや參  
らんとぞすゝみける國長なのめによろこびさあらば

いそぎ參らんとはんにやのはこを取らせば源太立よ  
りてを合せしそくひちうかいしやくねんとくけだつ  
といふ一くのけをとなへみをほそめてぞゐるかんぬ  
しよろこび取もたせふしともふさやかたへいそぎけ  
る程なくやかたに成ぬれば先もんぐわいにをろしを  
きかんぬし立入ともふさによしをかくとぞ申ける左  
大將聞召いやゝ其源太と申ものは大かう一のくせ  
もの也とかく取はなしてはかなふましそれがしはは  
こをみるもうるさき也いそぎかんぬしはちうげん共  
を召つれられかつら川へしづめ給へ三日過後しゝ  
たるしるしをみ申べしはやとくゝと有ければかし  
こまつて候ともんぐわいへ走り出入々を近付とのゝ  
御ぢやうにて候へば此はこをかつら川へ持參あれと  
ぞ申けるやすもとはこの内にて是をきゝなむ三ほう  
とおとろき急いといふてけやふれば二つにさつとさ  
けにける人々是におどろきてわつといふてぞにげに  
ける源太すかさずかんぬしおつかけかいつかみ扱々  
おのれはにくいやつめかなよくも源太をたばかりて  
有けるようぬめに思ひしらせんとたかもゝをふまへ  
てやつといふてふみさきかしこへかつはとなげすて

てとぶが如くにをちゆきしは心ちよくこそみへにけれ是は扱をきたいの庄には竹つなきん平すゑはる君の御前に参りさだめてやすもとぞい京のぶし共にくわいぶんをまはし申さんそれぐんほうのならひさきんする時は人をせいしおくるゝ時は人にせいせらる

るとかんしんがぐんほうのごくに候也若ゑんにん仕さかよせによせられてはみかたに赴く人々もさ大將にかりたてられかへつてかたきと成申さんはやうつたゝせ給へやとみな一同に申上るよりよしげにもと思召此ぎ然べしいざうつたゝんもの共とて大せいを引ぐしてらくやうさしてぞ上らるゝいそがれければ程もなくあくた川にも付給ふかゝりける所へ竹ちの源太はせ來りざい京の諸大名大方一身のおもむき扱かんぬしがふるまい一々次第に申上れば大將聞召いしくも仕りあやうき所をまぬかれ來りたるもの哉なかんづくしよぐんせい大方一身とうしんのよし是汝がはたらきせめでたしゝかたゝゝよいさめやいさめとの給へば竹つな金平すへはるすゝみ出をろかの君の御ちやう哉日本國がひとつになれはとて天下ぶさうの我々にけつきさかんの竹ちみうらがくつ

きやうにひかへて候上は萬りが外へ切はらい御いきとをりをやすんせ奉らんとつよきにいさむもの共いきほひすゝんで上りけるあつはれゆうしのていたらく誠によの中のおしのてほんは是なるはとほめぬものこそなかりけれ

## 六段目

さる程に右大將よりよしはいそかせ給へば程もなくかつら川にもつき給ふとある所に御ちんをめされみうらのわださへもんためむねをめされ汝いそぎだいにゆき先それがしが所存のとをりを一々そうもん申て參れかしこまり候と御前を罷立だいををさしてぞ急ぎける程なくきんりになりぬれば事のよしをうかがふにゆふへいもんたいけんもんに至るまでももんひしとおしかため物かげにけいごのぶしうんかのことくなみいたりためむねやがてあん内こへばよろいむしや立出何事やらんとこたふ是はよりよしの使のものにて候と申せばやがてをくへ此由申ければけいしやううんかくの人々は事のよしをきかんとて

我もくゝと出給ふためむねきつとひざまづきかぶとをぬぎてそばにをきつゝしんで申けるは扱も今度よりよし思ひよらざるぎやくしんのなをうけ申候其しさいは一の宮御しんしのふわにならせ給ふ事ひとへに是はともふさのざんげんにて候所にたれとして禁中に宮の御事申ひらく人もなくよりよしがつみなきをもなげき給はんくきやうなしさるによつてせひなくさ大將を罪せんがためてうてに向つて弓ひくにて候哀君しやうらんましゝ一の宮の御方へともふさを給りざんしやをたいされ御かんきを御しやめんあらば一の宮もよりよしもゆるるをはづしかぶとをぬぎてうていふにのちんじゆとなり天下國どのはんせいをおだやかにあふぎ奉らんとことはすいしく申けるどうざにましますくぎやうたち此由を御らんじ扱々わたさへもんはいなか夷と聞つるにゆう力こつがらぶだうもさこそ有べきごんひ本ノマ禮義のしんじやうさよ何様げんけの侍はたけき斗にあらずしてゆうしよくのうるはしさよゝ各かんじ給ひけるそれより人此由そうもんある内よりのせんじにはよりよしが申じやう有難き事なれ共一の宮がきやくしんさらに

いつはりなければしよまう叶ひかたき也とかく宮を出しつゝよりよしかつみをたいのがれよとの御返事にて使をかへさせ給ひけるためむねせひなく罷立しが又立歸り申やうあさましの事共やきんしよくをつちくれとし石つぶてをたからとすさかさ成よの中なれば二心なきよりよしはざんしやのためにかんきをえあくぎやくふだうのさ大將はちうしん也ともてなさるゝ君のゑいりよの口おしやとあたりをにらみ付はがみをなして立ければあたりには有あふくぎやうたちどつといふてぞにけ入けるともふさおくにて是をきゝにつくき今のことばかないとれと申さるゝかしこまり候とてとのもつかさの下くはん共弓と矢をおつ取かけさんゝにぞいたりけるためむね又立歸りからゝと打笑いやあくげひくわんのやつばら己れがいる矢は此ためむねにはよまたゝじつよ弓あらばためしにこゝの程をいてみよとむないたをうちたたきそらうそぶいてかへりしをほめぬものこそなかりけれさる程に御ぢんにも成ぬれば大將の御前に参りよしをかくと申上るよりよし聞召其ぎならはちからなし明日は早天いくさのあんひをきはめんと明

るをおそしと待給ふ是は儲置だいにありあふしよ  
ぐんせいとかたきむかふときくよりもよりよしにむか  
つていくさしてはいぬじに也いぎをちゆかんもの共  
とて五人三人うちつれて我も／＼とをちにけるすで  
にそのよもあけゆけばさ大將ともふさはらうとう共  
を召つれてちんしよをまはりみてあればぐんせい更  
になかりけりともふさ大きにおどろき扱はみな／＼  
おちゆきたるとみへてありゑ／＼口をしき事共哉此て  
いにてはかなふまじきみを一まづさんもんへをとし  
申かさねてせいをもよほしてせひのあんひをきはめ  
んと君に此よしそもんしてあやしきはりこしにの  
せ奉りくぎやうたち打かこみともふさぐぶ申 三重さ  
んもんさしてぞをち給ふかゝりける所へ一の宮より  
よしははたのを閃かしあとをしたふてよせ給ふと  
もふさはじめ御ともの人々此よしをみるよりもか  
なふまじきといふまゝに御こしをすてをきてみなち  
り／＼にぞをちにける時にしんわうやよりよしはい  
そぎかけつけ給ひけるみかど是を御らんしてちんが  
ふとくながゆへにかくうんめいつきはてたり此上  
はいかやう成共心のまゝにをこなへと御なみだにく

れさせ給へばしん王よりよし御こしのまへにひざま  
つきかうべをちにつけ給ふはまつたくそれがしきや  
くしんにては候はずいそぎだいりへくはんかうなり  
なを／＼はんきのまつりことをとりをこなはせ給ふ  
べし是みなともふさが口ゆへにて君をなやませ奉る  
かみならぬうらめしやと一の宮もよりよしもおんな  
つかしきかなしさにみな／＼なみだをながさるゝを  
つる泪の隙よりも此上はとかふ申におよぶまじさら  
はくはんかうなし奉らんとみな／＼かつちうをきな  
からに御こしをかき奉りやがてたいりにうつし參ら  
せ奉るかゝる所へ竹つなきん平はともふさをいけど  
りいましめてこそきたりけれよりよし御らんしてつ  
みのむくひはちかきよなまづ竹つなきん平にあづけ  
をくかさねてさたをなすべしかしこまつて候とやが  
てひつたてかたはらにめしこめてこそをかれけれそ  
れより天下すなをにしてこくどゆたかにとみさかへ  
せんしうばんせいげんちいよ／＼はんじやうめでた  
き共なか／＼申ばかりはなかりけり

万治三年三月吉日

山本九兵衛板

## 公平天句問答

### 初 段

扱も其後古今のへんくわをあんするに上に有ては其政事たゞしく下其法を相守れば國家まさにたいらか也然るに源のよりよし公東國の一亂事ゆへなく大將頼ちかをいけ取都へかいちん有則さんたい有て軍のしだいそうもん有御かとゑいかんあさからず扱よりちかはらいくわうか一子なればまつきんこくせしめ重ねてそうもんいたすべしと御れんさつとおりければよりよしもめしうとを引くしてしゆく所をさして歸らるる御しよにもなればあたらしくごくやをしつらいよりちかをおしこめきびしくしゆくをおかれける扱きんひらをめされませうのうでを切し事ひつ方やうあたをなすべき也と時のはかせあべのすくねを召れうらかたいかにと上意也すくね畏てしばらくかゝんがへ御でうのことくませうのしうしん残るかならず七日の内に大事出来いたすべしきんひらには七日

か間ろうきよ尤に候といさい申上ければきんひら聞てことゝしや何程の事か有べきあはれ此たひ來れかしめた羽さて置いきながら手取にせんとそわらいける竹つな聞いていかにきんひらうらかたといふもしきほう有まつ一七日か内はかたくろうきよ有へき也きんひらわらつて又竹つなの物しりかほしよせん切おとしたるうでとはを取持はくろの大せんに立こへくせものにたいめんせんとすんと立を大せうしばしととめ給い如何に公ひらさやうのせんれいなきにもあらずせんそただのまんちうへんけのつのを切し時三日の内に取かへされ給いぬ又わたなへのつなもらせう門にておにのかいなを打おとしいはらきらうぼにへんじ取かへす只〱一七日が其内は外のたいめんむやく也と仰ければきんひら上意に力なく此上はとかなききんひらがへいもんあわれみ給へめんめんとやかたをさしてかへりつゝ諸侍に申付大門をさしかため天くのうでをからひつに入おきわか身は五尺三寸のうば切丸きの弓に常にこのむ雨はのほこゆんでめてにたてかけ大きなるつほに酒を入七日のとせんの其内はをのれならてたかなぐさんあつはれ

友やよき友やあたゝか成事はしゆんしよくのことし  
いさきよき事は秋の月ふかきちきりはかしまなるむ  
すびとめはやひたちおびかみのちかいはおもしろや  
と今やうをしとろもとろにうたいなし引うけ／＼の  
みけるか夜もしんかうにおよび何とはしらすひらり  
とかけのみゑければすわやくだんのくせものと太刀  
に手をかけよくみれば父きん時けつせんとしていか  
に金平扱もこのたび天くのうでを切取事ひるいまれ  
なるはたらきいよ／＼かめいをあらわすべしあらな  
つかしの昔やとやかてなみたにむせひけり金ひらみ  
てあつはれかのいはらきがつなをたはかりし事も有  
打てすてんと思ひしが見れはまさしきち／＼のかたち  
もつたいなしすかたをかへん所を打ばやとさるにて  
も只今はいか成所にましますそきんときはつかしな  
がらしゆらのちまたにさまよいしが汝が打取うでと  
はがいばい返さんとませうこくうにみち／＼たりよ  
つてゑんわうにいとまをこいて來りたりそれ取出せ  
とつくとうしゑさせん公平すはこそと思ひしがさ  
あらぬていにてけにやおやこのよしみとてはる／＼  
のしやばに來り給ふ事有がたく候へ共君の仰にて御

目にかけん事かない候ましとあいそうなけに申ける  
ほうれい聞てはる／＼來る某にむかいさやう成事や  
有此上は七せうまでのかんとそよつくふんへつ仕り  
公平聞て何かんとうとや某がちゝ金時はさやうのみ  
れんの者になしさつするに御ぶんは矢はぎにて御め  
にかゝりし大せんの御ほうなるべし心つくしに何と  
たはかり給ふそやひらにすかたをかへられよほうれ  
い今はことはなく今はのそみにまかせんと忽すかた  
を引かへとんてかゝるをきんひらすかさす打太刀に  
又片うてを打おとされくもゐるかに失にけり公平  
さもそうす／＼とそらをにらみ立たりけりためしま  
れなる高みやうと皆かんせぬ者こそなかりけれ

## 二たん目

其後金平は重てへんげのかいなを打おとし七日の物  
いみ事すみて御所をさして上りけり御前に成しかば  
件のあらまし相のべ切とめたるかいなを御めにかく  
る頼よし公をはしめ皆人々公平は人間にはなかりけ  
りとしたをまかぬはなかりけり時に竹つないかにき

んひら此たひのはたらきとかふ申にことはなしさり  
なからませうをてきにもちぬれはかまへてゆたんし  
給ふなとかんげんす金平しんていには何事かあらん  
と思へ共君の御前もはかりといさい心得候然らば  
今四五日引こもり申さんとしゆく所をさしてかへり  
けり是は扱おきよりちかのこくやのほとりにきやく  
そう二人あらわれいかによりちか過つる比かせいし  
たるかいもなく思いの外にしそんしたり今一ど天下  
をくつがへされよされはちくせん日向の大將にら山  
せうけんゆきのぶぶゆうのたつしやことにたせいの  
者なればわれ／＼むほんのきざしを付し間身かたに  
たのまは一みせんこなたへといふまゝにらうのかう  
しを引はなし壹人はよりちかとけんじどくやにのこ  
り壹人のきやくそうはよりちかをともないくもゐは  
るかに上りけり是は扱置ちくせんひうがの大將にら  
山將けんはませう其身にのりうつれはにわかによを  
うらむる心付われは是王氏を出て遠からす弓矢打物  
たれにおとらんに一國や二國のしゆごとしてくちは  
てん口おしやあわれよき大將を取たて天うんをはか  
らんと郎等をなみすへ高こゑにはなす所へよりちか

はませうもろ共ひうかの國に來り是こそくだんの所  
よとおしへ申てきやくそうは行方しらず失にけりよ  
りちかすは望たつしたりとあん内なしにつつと入上  
座になをりいかにわどのはにら山將けんな是こそ源  
の頼ちか天下に望あるゆへに御へんをたのみ來りた  
り行のぶおとろき扱はさやうにましますか望所もさ  
いまい此上は君に一命を奉らんまつ門出に竹ちの源  
太やすもとを軍神にせめんとてかれ是あわせ二萬よ  
き日向の國を打立てちくこをさしておしよする川せ  
の城になりしかば時のこゑを上にけりされは竹ちは  
もつての外のきやへいにて前後をほうしいたりけり  
され共家のかうけん上村源藏友きよ大手のやくらに  
こと／＼のさうとうや其なをなのれとよばはつた  
り其時よりちか馬のり出しわれは源のよりちか也城  
をあけて相わたせいぎに及ばふみつふさんと大を  
んあけてのゝしりけり上村聞て何頼ちかは去ぬる東  
國の軍にいけとられ給ふと聞きつるにはちをすてて  
らうをにけ又爰にさまよい給ふか身ふせうなれとち  
くせんのだんだい竹ちの源太城也あしくよつてけが  
有なやあわか者共あれおつちらせ承と大戸をひらき

打て出爰をせんとたゝかいけり然る所に遠山りつくわいじやうしゆんとて七尺ゆたかなほつしむしやつけのほうをおつ取のべたせいの中へわつて入はらりゝゝなきたをす此いきほいにあたりへ近つく者もなし上村今はこらへかね白糸のなきなたかいこみあらみ事也遠山とたかいにてうとあわせしがしやうしゆんか打ほうに長刀を打おとされ今は是迄といふまにつつとよつて引くむをしやうしゆんさらに者共せず中に引さけねんぶつ申せ上村と一ふりふつてなけにけりされ其中にて歸り何をするそしやうしゆんとにつことわらい立ければしやうしゆん大きにいかり只一つかみとかけよるをうしろへはづしきし通し中にて首を打おとし竹ちか家のてなみを見よと城の内へ入にけりかの上村かはたらきあつはれめいよのはやわざとみなかんせぬものこそなかりけれ

### 三たん目

其後上村はすてに其日もくれければ大將の御前に参り御心ちはいかゝ渡せ候そと軍のしたい身方打しに

にをかたりければ其時竹ち枕をあけ此度のはたらきかんするにことはなしいよゝゝ萬じ頼む也友清さりとてはやまいは心にまかせすやふたいのともからを打せつゝよそにみんな口おししめて木戸くちまても打出んと太刀おつ取立けるを上村たもとにすかり付こはいか成御事そつらゝゝ此いくさといつは日かすをかかねたたかはゝ其内都よりごづめのせい參なん然るに君けつきにはやり打死しまさはつくしは敵にしたかはんいかにも御身をまつとうし都のかせいを待給へ某かくて候上は城をはやふられ候ましとさまゝゝいさめ申つつれん中に入申はや夜も明方に成ければ又せめ口に出にけりちん所になればいくさの下知をなす所にきぬ川平治といふものよいより木かけに忍ひゐたりしか此よしを見るよりもよつ引てはなすやむざんや上村が物のぐの引合にはつしと立大事の手なれば馬より下にとうとおつるを平治すかさずはしりより首を取て引所を松田の七郎はつといふてかけ出高もゝを打はらいいたをるゝ所を首中に打おとし上村か首と一所にもち大將の御前に畏りあらましをあいのおれば竹ち聞もあへす何上村はうたれ

たるとやあゝ竹ちがぶめい<sup>い</sup>是迄也<sup>い</sup>とてもこの城たちも  
ちかたししやいつ迄とちやうたいにつつと入うの花  
おとしのよろいをき五尺三寸の大太刀はきさゝなみ  
くろといふめいばにくらおかせゆらりととひのりか  
け出る家のこらう等こはかるゝしき御事やと馬に  
取付引といむ安元聞て身をつゝしむも時による某都  
を出し時公平といゝあわせしことばあれは此軍手よ  
はくせいはきても口はかきれましそこ立のけと切は  
らい敵の中へそかけ入りいづれも力及はすいかゝ  
せんと待所へさゝなみくろ矢をおいてちしほに成て  
はせ歸る是をみて人々なむ三ほうはや君はうたれ給  
ふかや口おしのしたい也此上は御前へかくと申さん  
とおくをさして参りあやめのつはねを以て由をかく  
と申北の方は聞召是は誠かなしやなせめてさいこ  
にめされたる御馬を一めみんとひろゑんに出給い  
くどき立て泣給ふつほね由をみまゐらせ今はなけき  
給ふとかいあらしさすか竹ち殿の北の方人手にかゝ  
らせ給らんよりはや御じかいましませとなくゝ口  
口に申あわれ成かな五歳三歳の若君に白きしやうぞ  
くきせ申守り刀のひもをとき御前に相ならべ若君の

御供と皆ひろゑんに畏るみたい所は若君たちのかみ  
かきなてやあちゝ上はうたれさせ給いたりいかに花  
市ちゝ上のまします所へいさゆかんと御手を取給へ  
はをさな心のはかなさはちゝ上と聞召よにうれしけ  
にいつものことく花を折て給はらんつる君もいぎゆ  
かんと悦び給へは母上思いにみたるれと心よはくて  
かなはしと守り刀をするりとぬき既にがいせんとし  
給へはめのとがひさににけ行あらおそろしやとがも  
なきにいつこへもつれ行とすかり付てなき給ふ母上  
も今は思ひにみだれ刀をすてゝなき給ふかゝる所へ  
安もとは大わらわに成てかけ來り給ふみだい夢共わ  
きまへす安もとに取つき有し次第をかたらせ給へは  
やすもとあつはれあやうき事共やそこつに若共をう  
しないなばこうくわいせんとかいあらしわれ病きな  
ればとてやみゝとうたれんや何とを頼近とくまん  
と心かけぬれとおもてをしらねは其かいなくはむし  
や共を二三<sup>も</sup>切ぬればやまふもはらりとさめたり  
此上はらくしやうゆめゝ有へからずめてたしゝ  
とおくをさして入給ふあつはれなをゑしゆうしやと  
皆かんせぬ者こそなかりけれ

## 四たん目

其後都には比しも三月三日源家れい年の御かれいと  
てとうくわを折て水にいけかすのほうらいからくみ  
日ねもすの御酒ゑん御所中さゝめきわたりければ君  
もゑいにくわし給ひ竹つな一かなてと御所まう有畏  
て候とほうらいの松の枝をおつ取かなでけりたへ也  
や千とせの松の松のすへかけてゆたかにめくる御よ  
の春東西南北敵もなく弓はふくろにそのまゝにつる  
きははこをひらかずおさまる國こそめてたけれとお  
し返しかなでければ頼吉御きけんかきりなく御かわ  
らけ取上させ給ふ所に公平こしのつるきをぬきすん  
と立てまふたりけるおもしろや弓はつるをはりつめ  
刀はさやに納めず敵もみ方も諸共に首切流すたきつ  
川あらめてたやとまいければ君御けしきかわり一ざ  
ひつそと音もせず竹つなみていかに公平かゝる御悦  
のさしきにてかゝる事や候たしなみ給へと申ける金  
ひら聞て竹つな殿の御ゐんきんいたみ入候おゝくの  
御酒にたべゑいふ禮は御めん候へかしさりなからし

いかは公けのもてあそび軍さはぶけのわざなれば今  
日の祝にも首をつみそれをさかなにたべんそ千秋ら  
くにて候らんとゑせわらうていたりける君もあまり  
にわらわせ給へは竹つなもあきればてしほけうに  
入給ふ然る所にすわうの國の住人くもむら兵ごはや  
馬にてすくに御所にはせさんし扱もよりちかきやう  
つくしへ渡りにら山將けんをかたらい竹ちが城に取  
かけいとみたゝかい候をりふしやすもと病きにて候  
へは急きかせい仰付られ候へとうつたへける大將聞  
召ふしきや頼近はいまたこくやに有ものを見て參れ  
承候と田村の形部はしり行立かへりたしかにごく  
やに渡らせ給ふと申所へはんの侍はせ來り只今迄の  
よりちか卿俄に天句となりらうをやぶりこくうに上  
候と大いきついで申上る大將おゝろき給い此上は竹  
ちらく城おほつかなしへんしも出陣いそかんと公平  
は承り此度のけきしん某よしなき曲をまいしゆへに  
候へはよ人にはいかて手をおろさせ申べし某に仰付  
られ候へかし大將は聞召頼ちかはよのてきとはかわ  
るへし頼吉むかはてあしかりなん御ふんは先陣有べ  
しはや打立とすてに都を打立なんばの浦より舟にめ

しろかいをはやめおす程にめい所くを打過てびん  
ごの國に御舟よせ暫らくきうそくなされける其中に  
竹つな公ひら兩人は所のやうかい見んためにあな  
こなた行所にみぎの方に大き成池有水の色すましく  
ければいかさまゆいしよ有けに覺ると里のおきなを  
近付ことの由を尋るにさん候是はいにしへしつとふ

かき女此いけに身をなけ一ねんのどくしやと也つゐ  
におつとを取ころし其後佛經のくくとくにてしづまり  
しと聞しかど又此比はあれ出てしやいけとなつてや  
うすをしらぬ旅人あまた取れ候各もあやまちなき其  
さきにとく御のき候へとかたりすてゝにけさりぬ金  
平聞ていかに竹つなさやうに國をなみするもの品こ  
そかわれ君のてきかくと聞てかへらんやたとい甘ひ  
ろの大しや也と何ほと的事有らんとときしより下へ飛  
ておりやあいかに此いけの大じや人有に何とて出ぬ  
そとよばれば俄に風吹水すさましく向の方より牛  
のことくの頭にて角ふりたてとんでかゝる公ひらさ  
しつたりとむすとかくむ竹つなは見るよりもはつとい  
ふてとひこみつかもこぶしもとをれくとし通す  
よはれは公平以てひらいて打ければまん中より二つ

に成てとひくるふをおさへて兩人とゝめをさし思い  
の外にはね折と公ひら大しやを打かたけちしほに成  
て立かへる二人のものはたらきみなかなかせぬ者こ  
そなかりけれ

### 五たん目

其後つくしには日夜合戦やむ時なくあらてを入かへ  
せめければ城方の侍大方手おい打死す安もと今は是  
迄と家のご郎等近付もはや兵らう矢たねつき口へき  
方なしこよい大將の陣へかけこまんいづれも打死と  
定むへし竹ちもつまこをかいし心安打死せんとゐた  
る所をすんと立爰に村澤庄司か一子花月丸ふりよに  
かんきを蒙りあいをへたてゐたりしが城はつらくの  
よしを聞こはいかに都よりのかせい五三日の内には  
此所へ下着と聞何とそ此事城へしらせ申さんと陣所  
を忍ひゆく所を敵のせい是をみてすわ忍ひ者よと取  
ておさへ將けんにかくといふ行のお聞よりも是くつ  
きやうの幸といかにくわしやわ殿竹ちか心さしをわ  
すれ我にしたがい木戸口に立より都のかせいは去る

頃西風にあい皆そののみくづとなり給ふ何を頼にましますそいそいてせうがいましませ此事しらせ申さんと是迄參候死での山にて待申さんとそらはら切て見せよ其忠せつに國をゑさすべし花月心の内におかしくは思へ共こは有かたき仰やな此上はともかくもとぞう兵をともしない敵ぢんへいそぎ木どちかく也しかば大おん上て是は村澤花月丸われ御かんきを蒙れ共只今の忠せつに參り候心ていさつし給へ頼吉ははや九國の地まで御下向にて候そこつのせうかいましますなとたからかによはれはかくれゐたる二人の者あつはれをのれしれものと打てかゝるをゆんてに切ふせ残る一人と引組さしちかへふしにけるををしまぬ者はなかりけりゆきのお聞て腹を立扱はくわじやめにたばかりられたりと大將の御前に參り都せいははやすわうのち迄參と承る某はみち迄敵を舟よりあけぬやうに仕るべしとみかたのせいを引わけぶせん國へいそぎける去程に頼吉公早ぶせんのちになりしかばなぎさに舟をよせんとするに相待たりしつくしせい取つめ引つめゐる程にもくせんに大船二そうゐすくめられそののみくづとなりにけり残る舟すゝ

みかねて有ければ金平此由見るよりも大きにいかりかなる矢なりと公平が物のぐはよもとをさしと舟そこより馬引出し海にはめゆらりととりさかなみ立ておよかするす萬のときは金平を見るよりも一どにくづれ引にけり其中にいら山兵衛同中つかさ兩人は取て返し公平とても同人間と打つてかゝるを馬よりとんでおりゆんでめてにかいつかみきんひらおなし人間も爰に至てかはれりと首ふつつとねぢ切にげ行敵を打詠くはんくとしてひかへける公平が有様かenseぬ者こそなかりけれ

### 六たん目

去程に頼吉公舟より上りこまをはやめ玉ふ所に敵むかふの方よりよせ來る公平見てけふのなぐさみ有りとなとんで出しがこはいかにてきと見えしは竹ち也やがて打つれ御前にかしこまる頼吉きゑつかきりなぐいかに竹ち御ぶん病きと聞しゆへ夜を日について打たちしに今は心安し扱敵はいかに安もと承りさん候五日いせんに引取よりちかはちくせんのたゝらは

まにまします由承候頼吉扱はたゝらはまに一所にあつたらん今はせくべきにあらず人馬のいきをやすめれはぬけかけかたくきんせいと竹つなは下知をなしをのくちんを取にけり其中に平井の清氏うすいの定春一所にあつまりいかに清氏此度のいくさは公平か先ちん也我らぬけかけならては思のまゝのいくさはならし清氏聞いていしくも思いよられたり我もさやうに存也さらは忍へやこなたへと敵ちに成しかいこきかき所につつ立大音上て是は平井の清氏并にうすいの定春此木どの一はんかけ我と思はんともからはけんさんとのしりけりするかの守國かと此よしを聞よりもにつくきくはじやばらすいさんやとかけちらさんとする所を清氏以てひらき打ければめてのそば腹くらつぽかけて切たりけり其ひまに定春敵七八きなぎふせいさや木戸をやぶんと一どにこそはかけ入りかゝる所に竹つなはゆんでのそはよりつつと出あら若殿はら某はぬけかけをせいせんためとくよりここにひかへし也兩人のはたらきお家の實はかたくと悦所へ金平は大せい引ぐし來り此よしを見るよりもやあ竹つな人をはぬけかけきんせいとか

しこかほにふるまいける事は誠の竹つなにてはあらしきつねたぬきにてましまさん竹つないやゝさやうのぎにあらずしさいは此兩人に尋ねられよ金平聞てそれも同じあなの古きつねよし何にもせよ先陣は某が承て有足手まといにそこのけとすまんの中へわつて入東西南北打ひしぎ死人の山をつきにけり頼近にら山今は是迄と打てかゝるを公平さしつたりと將けんをまつかう二つにわりつけよりちかがむんすとかむ先年のことくほねはおらしとまつさかさまにけたをしたすけておけはわざわいとくひふつつかきおとしきみの御目にかけければ大將ゑつきかざりなくすなわちちんをひき給ふよりよしの御ゐくわうすへはんじやうめてたしとみなかんせぬ者こそなかりけれ

右者和泉太夫正本をうつし令開板也

正徳六年丙申正月吉日

うろこがた屋三左衛門

## 八幡太郎誕生記

## 初 段

扱も其後いつけひらけてよものはるのとかにめくる  
おくるまのときめきわたる御代の空風をだをならさ  
す雨つちくれをうごかさす四かいの波かせしづかに  
ておさまる國こそめでたけれ爰にせいわ天王のかう  
るん源家四代のお將二位の大なごんせいゐ將ぐん源  
のより吉公どゞのけきしんを事ゆへなく御ついはず  
有らくやうにしきの小路に御とのつくり有きんりを  
しゆこしたまひけり扱御ぢう代のかしんにはわたな  
へのつながちやくしみたのしゆりの太夫竹つな金時  
が一子坂田兵ごの守金平ほうせうのわすれかた見平  
井のきよはる定光かちやくなんうすいのげんば定か  
ねすへたけか一子うらべのごんの少ゆふすへ宗かれ  
らはすどの高名四かいにみちもろこし迄もかくれな  
き天下に五人のゆうし爰に又みうらの平太夫が一子  
わだ左衛門爲宗今年十六歳同はたけ山の重もとほつ

しが一なんちふの平太しげなり是もつもる年は十  
六歳かれらは東國の岩がん石の馬上になれいか成鬼  
神もあざむくほとん若者たりさてみたい所はくわさ  
んの大なこんため吉卿の御そく女そめ殿のまへと申  
御方也過し卯月の比より御くわいたいの御心ちれい  
ならずより吉御ゑつきあさからす諸神へ御悦ひの御  
ほうへんそくさいゑんめいなんしたん生と様々御き  
せいつくさるかくて七月八月はや過てあたる御月に  
も成しかは御さんじやうに三重入せたまふそめてた  
けれされはにやざい京の諸大名すはや天下の吉事  
是也と門前に市をなすより吉公は中のでいに御ざをす  
へさせたまへはおくより事をうつたへる使はたゝく  
しのはを引がごとし大治二年正月五日辰のこくより  
御さんしきりにしてよく日のみの刻迄いまだ御さん  
ならされはしや僧神主てんやくのかみその家々のり  
きをはけみ爰をせんときもけすより吉きちやうまち  
かくよりたまひさていかに／＼と御心をくたかせた  
まへはれいの五人の若者共はあつはれき万國のきわ  
うをあさむく程の者を千き萬き敵にうけたり共せん  
じやうにてはか程にむねをさはがしものなむ日天日

天とこふしをにきりきはをかみしきりにもたゆる有  
様はたとへいか成あくりやう死れうもいかてしやう  
けをなすへきとよにたのもしくみへにけり中にも坂  
田の金平大のこはねさし上源氏のうち神日比あゆみ  
をはこびしはいつのためそ御かい力ましませさなき  
ものならは神とはいわせ申まし存るむねこれ有なむ  
八まん／＼とはかみをなしてそ立たりける時に三位  
のつほね御れんをさつとあけ御さんへいあん若君御  
たん生とたからかによばゝりたまへは大将の御悦上  
中下に至るまでめてたやとかんするこへしはしはな  
りもしつまらすかねてよりの事なれば八まんの神ぬ  
し左京の進國久ぎん錢九十九文くわの弓ゑも木の矢  
則ちさん仕こしより御へいぬき出し東に向てはいれ  
いし御心にはせいとくのしん入かはらせおはしませ  
御じゆめうはとうほうさくか長命を御たもち有ぶゆ  
ふのほまれは御せんそらくわうへ御あやかしまし  
ませと天ち四方を打はらい／＼御なをは八まん大ほ  
さつの御しんたゝにまかせ八まん太郎とかうし奉る  
大将御ゑつきかぎりなくあふみの守かまくらのかけ  
もとをめされない／＼汝にあづけ置し若はいかにと

のたまへは畏候と御前を罷立くたんの若をいたかせ  
て出にけりより吉御らんしよくきけかた／＼此おさ  
なきものこそさしもちうせつふかゝりしわたみうら  
の介としなりか一人のひめに出きしわすれがた見の  
まご也尤一もんの中なればみうらのわだ左衛門こそ  
たのまんすれとも若年といひ又は思ふしさい有間坂  
田兵ごのかみをゑほしおやに頼也と御さかつきをく  
たさるれば金平御さかつきをしいたゝきかゝるめで  
たき御ざしきにてちたい申はおそれ有さらはけいや  
く申さんと四尺八寸の岩切をぬき出し我は一生ふほ  
んのおのこなれはとらすべき子なし汝に是をゑさす  
る身ふせうなれ共此金平にあやかれきよく高名仕れ  
と其身のしやくめうくわいと丸となつけ□□せい人  
の後八まん太郎の御家のかのけんとなをせ上にふ  
れたりしかまくらのこん五郎かけ正是也竹つなつく  
つくみて是そ若宮の御しんかの初也いて／＼しうけ  
ん仕らんといたる所をずんと立てそまふたりけるめ  
てたやな君は舟しんは水みつよく舟をうかむれば七  
ツユリ國土ゆたかに三重たみやすく人のくに迄日の  
本のいせいをあをぐ大君のみかげのすへそ久し久し

きと二ばん迄おしかへし本の座敷になをりける諸人あつとかんしける大將御きげんかきりなく八まんが行すへをいらい心さしのうれしさよいてくゝいわぬ申さんと御太刀馬くら其品々にしたがへ御もくろくにてくだされけるその時五人の者共あゝめをきつと見合げに今まで御一人にてたのみすくなく存せしに若君御たん生の上は是ばんせいの御せいとく二代のしんかとあをかれん事のうれしさよ日本の事はもちろんたとへは天ちくしんたんより取かけ候共われわれかくて候上はなに事かあらん千りの外に切はらい國土ゆたかに仕らんとよにたのもしきその有様ま事に天下に五人のまれものやと諸人こそつてほめにけり大將聞召君としんとの心ね少もたがふては國家はたいらかならずい國ほんてうのまれものを五人迄もつたるより吉かくわほうの程のゆゝしさよかまいて二世迄のきゑんぞと御さかつきおさまりけり八まん太郎の御いくはうちとせの松のすへながくついにけんしの大將とあふかれさせたまひけるせんしうばんせいめてたさよ共中く申計はなかりけり

## 二段目

▲扱も八まん太郎御たん上の後世の中いよくしつかにてばんみんたのしむ所に一つのわざはひ出來すそのみなもとをたつぬるに過つる明永五年八月十七日に惡きやくに身をぼつせし朝日將ぐん橋のもうぢか三なんうへもんのせう氏ますさんぬる比父もろうちめつぼうの時はせんじやうをまぬがれひゑい山ひがし谷にゑんゆふざすをたのみせき寸の身をそかくしけるされは人にしのお身なれはかみ□□とにし切よ川のきわうとかいめうし山ほつしのていにもてなしいかにもして一度父かほんもふたつせんとうやまとろむひまもなく有時ひそかにぎすに近付さてもくはらくの有様をつたへうけたまはり候により吉若をたん生し上下色めく有様を聞に付ても存念たへかたしとかたりけるぎすくはんくはんと打うなつきのたまふことくせけんのていむねんしきりにいやましたりいつ迄かくてましまさんとめうほうだうにしきがはしかせぎ王をなをしたち花のいへのしるしくもにりやうの大はたをひゑいの山風にふきなびか

せたいしゆせんぎの太がねを三重ひきわたりて「  
つきにけりさんかもうごく計也ゐんくたにくの  
しゆとはたゝ事ならざるはやかねやと我もくとは  
せあつまるその時ざすこゑたからかにさし上是にわ  
たりたまふはあさひ將くんもろうぢの三なんうへも  
んのせううちます公也さんぬる比よりぐそうか坊に  
まします事せうくは存しのしゆとも有んされは源  
氏の方には三井寺をきくはんしよし又立花一家の  
人々はとうざんの御きたう所とさだめ車の兩わのこ  
とく成しにもろ氏公めつほうの後三井寺は日にまし  
てはんゑいし我山はしかのふしどゝあれはつる一門  
のぢよくまゆをひそむる所也そも御山はでんきやう  
ち脱スカ  
大師の御こんりうゑしんおしやうより此かた四十四  
代か其内にもついに三井寺の下てにたつといふ事な  
ししかるに今初ておとろふる事めんくもむねんに  
は思はすや事に今程は天下に五人のまれもの四王天  
ひとりむしやせん年みのくには大はかの宿にてとく  
しゆを以ころされし定光すへ竹ほうせうが弟七年の  
ついせんとてきのふていとを立大はかにくたる是天  
よりあたふるじせつならずや此時だいしゆいてはけ

みをなさやらんやいそきより吉打はろほし此君を天  
下の將くんとあふぎひゑいさんのかれゆく木々に二  
度花さかせん事たいしゆのせんき今に有いかにく  
とよはゝれは三千のしゆと一とにみな尤くとう  
し時もうつさす三千坊にふれをなしかうそのせい  
七千よきひゑい山の打立三重ていとをさして「おし  
よする都になれはまつたいりの門くをさしかため  
御門を□□□□其後より吉の御やかたあやのかう  
しにおしよせ三重時のこゑをそ「上にけり御所の内  
には思ひよらざる事なれは上を下へとかへしけるさ  
れ共みうらのわだ左衛門ちゝふ平太たちひつさけ出  
かくせいひつ成よの中にかんくはをつこかすくせも  
のぶけか公家かなのれくくとよばゝりける時に大將  
こましづくとのり出しそもく是はあさひ將くん  
立花のうちます也うつふんの次第はなるに及はす  
めいはくたりすみやかにしやうがいをつつすへしと  
高せうにのゝしりけるわたちゝふ聞もあへす何たち  
花のうちますとやさすかふ將の子として一門のさい  
こをみすてあなたこなたとさまよひよし有かほにせ  
んそをなうる見くるしさよされは四天王を初大かた

御内の侍は定光すへ竹ほうせうのついせんのためでう州に打こへ残る者はわつか也され共けんしのならひにてかたきにうしろを見せすかくいふはみうらのわだ左衛門爲宗ちゝぶの平太重なり兩人共につもる年は十六歳そこを引なとたせいの中へわつて入てきみかた入みたれ三重火はなをちらして「たゝかいける然所によせてのぢんより七尺あまりのむしや二人一ようにくんばいうちは手にもちゆらりゝゝと出けるは人にかはつてみへにけり土やあいきやう是をみてあつはれてきやとはしりかゝつて打をうちわにてちやうとうけひつはつしてかいつかみみきわのほりへとうゝとすてにけり二ちんにつゝくざんまの七郎仕りたりとかげよるを一人のむしや又うちわにてうくると見へしかうしろへぬけたふさを取て引ふせおさへてくひをかき切けるより吉やくらの上より御らんしやあみかたに人はなきかあれ打とめよとのたまへは二人の者聞て何我々を打とめよとは事おかし是をおとにきこへたるくはんおん坊せいし坊とて三とう一の惡僧たり四天王が一どによつてくむ共とめん事はかなふましまして其外の者共をはものゝかす

其思はぬ也とかうけんはいてひかへけるといひの孫六此由を聞よりも、すいさん成ことはかなと打てかゝるをせいし坊はつしと合つけめぐりにみつけん二つに打はりける大將しきりにいかちをなしゑゝ五人の中に一人是に有ならはきやつはらにか様にくちはきかせしものむねんゝとしきつてもたへたまひけるちゝふの平太聞よりもまさなの君の御定やな五人の者なきとても重成是に候とんとて出る大將御らんし汝は八まんか行すへかけおしく思ふ侍なれ共源氏のちしよく此度なれば力及はすすいふんはげめ畏り候としつゝとちかつくせいし坊きつと見てあつはれきりやうの若者をうしなはんむざんやともつてひらいてうつをゆんでへとびきつさきさかりに打太刀にせいし坊左右の高もゝ打はらはれのつけにかへすをくひ中に打おとし源氏のでなみ見たるかとにつことわらい立にけりより吉御らんしあゝ仕たり平太扱も仕りたり重成と御ゑつき中ゝかきりなし跡にのこるくわんおんほうししのはがみをなしはしりかゝつてうつをしとゝうけはらはしきりつくればかゝみすきもあらせず切むすふされ共ちゝふわかむしやの

かなしさはたゞいきになくつくるをくはんをん坊ゆんでへひらき打ければくひ中に打おとされ十六歳を一ごととしてらくやうのちまたの土と成にけり大將ゑつきの色を引かへ御なみたはせきあへすわだ左衛門見るよりも今迄はちふ三うらとて兩はのこごと成しにはや一方はかけにけりなむ三ほうと一もんしにくむくはんおんぼうは七尺ゆたかな大のほつし三うらは今年十六歳大木に小鳥のとまることくにてすてんとすれはすてられすなくればひらきはぬれはむすふすまふので大力のくはんおん坊もてあつかいたゞ一もみにひしきつけんとするをわきの下よりつつとぬけくひ水もたまらず打おとし三うらのわた左衛門年つもつて十六歳源氏のてなみたしかにみつらんとしつゝと引かへすより吉の御悦わだ左衛門かてからの程みなかんせぬものこそなかりけれ

### 三段目

▲其後にしきのこうぢの御やかたはひらばとはいひながら二ゑのほりまんゝとして水ふかく我そと思

ふもの共爰をせんどふせけはよせてたせいといへ共せめあぐんてそひかへける大將うちます此由をみるよりも四天王に一人むしやもはせ來らん先東の方のよせてうち橋を扣かためよこもる所のぐん勢とも我さきとはいほくせんときにつまりゝより相待おつふせゝ打ん事何のしさい有へきかやうくはんゐんいなば坊はうちせたへかためよ畏て向ひける御所にあつまる下郎共此由をみるより上を下へかへしつづ共につれて落にけりより吉御らんしみたい所を近付今はよの中是迄也御身は女性の事成はおとしたく候へ共よもたすからんとはのたまふましと泪と共にのたまへばみたい聞召あつはれきよき仰かなはやく水からがいしきよくぢがいをとげたまへと若君の御かはゝつくゝと御らんしてなみたはつらぬく玉あられより吉もしきりに御泪すゝめ共心よはくてかなはしと若君を引よせ御はかせをぬかせたまふ所へわた左衛門みかたのせいおばおいちらして歸りしが此ていをみてはつといふて走よりこはいかにあさましし大將は命まつたふしてめい將とは申へしいわんや君は四天王一人むしや天下に五人のまれ者を持せ

たまふ事成は御うんひらかせたまはんはしせう也又  
若年成共爲宗が御供申上は千ぎ萬きの兵也と御頼も  
しく思召候へとむだい引立奉りむらさきのへとたと  
らるゝ寺にも成はふしきや寺中に人きれもみへすよ  
り吉扱は此度のいくさにおそれ落行て有らんとらい  
光の御びやうのまへにひさつきらいしたまひておわ  
す所へかたきのせい跡をしたひ時のこへを上につけり  
爲宗此由みるよりも出物みせんとわつて入はらり  
はらりとなきたをすかゝる所へ流れ矢來つてめての  
ひぎにはつしとたつ爲宗むねんとあたりをみ廻しと  
うのてきを打んとしけれ共ぎやうぶ更にかなはず太  
刀を取なをしあゝくちをしや今は是迄と云もあへぬ  
にかたき東西よりせめ來るより吉公も御はかせぬか  
せたまいすでにあやうき所に御びやう所の内にこへ  
有てさかたわたなへと召るゝかと思へば三つのつか  
一どにわれ何も有しすかたにてらい光はもみろぼし  
にはちまきし金のざいを持たまへはわたなへはくろ  
さやまきの大たち天ぐのうちはを持公ときはゆんで  
に長刀つへに付あたりをにらんで立たりけりおつて  
の者共是をみて五たいすくみてはたらかす立所にす

くむも有あるいははんしはんせうにて四方にちつて  
うせにけりらい光のたまふはいかにより吉政道わた  
くしなけれ共ゆだんたいてきのごくいをはすれ五人  
の者共一度に其身をはなち他國につかわすあやまり  
也今又此なんにあへり扱かの氏ますわ大江山しゆ天  
とうしがしう心源氏の家をさまたげん爲二度出生し  
たりおろそかにてはかのふましより吉聞たまひ扱は  
左様に候なとのたまひもあへすくたけしつかに御す  
かたたゝ松かせのおと計何もゆめのことくにてもく  
前のすかた昔の事となつかしく東西くれてなげかる  
るまつせのふしき是なりとすへたのもしき共中く  
申はかりはなかりけり

#### 四段目

其後より吉公はうこんのはけみゆへあやうきがいを  
のかれまします所へなんさんおせう來り是はくゝと  
計也より吉有していをかたりたまへばなんざん聞と  
かふ申にことはなく僧も御行へを尋申さんとは存  
すれ共らい光の御ひやうを打やふるべきとふうぶん

致候間ふかくしのひて有所にこよひふしきのつげ有て只今さんし候まづこなたへと人々をともないよきにしのばせ奉る是は扱置五人の人々はより吉打れたまふと聞よりも一時もはやくはせ上り氏ますめをみぢんになし御きやうやうにほうすべし君の御そばをはなれぬる事一世のふかく是也とおにをあざむく輩も東西しらすになきいたり又三うらわた左衛門ちゝぶの平太は若ねんなれ共ゆうさい有物成はいさめておとし申ても有やらん五人の内一人ていとへしのび事のくりぎをとつくと聞定君御しやうがいひつ定たらは其時こそせいのあんひをきはめん公平聞て然らは某上り申さん竹つな聞て御へんはぐはん來者をこらへぬしん成はかゝるをんひんのうかゝひにはそこつのあらし出へきと心元なく存る也公平聞て何竹つな御へんは某かそこつにてしそんしたる事のさんけいそ承んとてもか様にいわれ申上はそこつ付てにせひに上らんとろくぢにだうと大ひさくみ人のことはをはみゝにも更に聞入す只そらうそふいてそいたりける定かねすへ宗見るよりもこはいかにきん平わとのかふるまいつねゝもれいの事と思ひさしおけは

時も時によるにか様のじせつ左様にわかまゝは見くるしゝきん平聞てあふ心へたり三せのきゑんの君にははなれ奉る又二世迄とかねたりしめんゝにはそこつ也わかまゝ成なんどゝみかきられ申公平がこうの程こそつたなけれといかるおもてになみたをうかめほうばいのなこり是迄を若も命なからへは又こそめくりあふへしと都の方へはしり出るを取ておさへことはり也去ながら御ふんにもちがい有とつくとむねをしづめよと事の次第りをつくしてせいすればきん平泪をながしけにあやまつたりま事にほうばいの中ならすはたれかはか程にいさむへき只何事も君のためかまへて心にかけたまふな生れ付たるふれいは御めんなれや人々としゝのいかりをひるかへしたたしほゝとぞ成にける竹つな泪をおしとゝめ此上はちりゝゝに成て物思はんより五人一所に上らん尤然へしと殘侍をはあなたこなたにしのはせ五人は三重一めがさにて「かほかくしよにすゝゝと立出てはやあふみぢにさしかゝりよを目について行程にくやうに成しかはあなたこなたとうかこふ所におもてのかはをはいてすてちしほにそまるくひ二つわく

にのせてかつかせけいこあまた付源のより吉岡八まん太郎此度の一せんにかけまけむらさきのにしのひ有しをさかし出し打取所のくひ也と三重一々したいに「ふれにけり五人の人々是をみて扱ははやうたれさせたまひけるそや御おもかけのみへさるは人にはちをさらさしとおもてのかはを切てすてさせたまひけん五人の内に一人御供申ならやみ／＼とはうたせ申ましきに日比のちうかういたつらにたかため也しくちをしやとおの／＼涙をなかしける其中にきん平おつる泪をおしとゝめふかく也方／＼くへてもかへらぬ事共へんしもはやく都へ上りよには人もなき様におごりにおこるうちますたな心にかいつかみくひ中に引ぬさせめてのむねんさんせん／＼とんとて出るをわたなへたもとにすかり付尤也我／＼五人思ひ定てかけ入はすせん萬ぎのせい成共打ちらさんもちろんたりしかしなからかのうちますはい國の長良にもおとらぬ程のはやわさゆふ力有てあんふかし千に一つもしそんしては千萬くへてもゑきなし君あいはてさせたまふ上はたれか一人残らんや一めいをなけうつてかたきを打たん計事こそ第一也つく／＼事をあん

するにかのもろこしのけいかしんふやうかしくわうていを取子にせしけいりやくこの度のかたきにさうわうしたるてたて也五人か内二人か三人しやうかいし殘者共くひを持かたきの方へかうさんせはいか成じんへんぎとくの者と心をゆるさて有へきゆたんの所を引くみしやうふせんにやはかしそんす事有んとりをつくして申けるいづれもま事に此き然へし爰は人めもしけれはかん所をもとめ事ないたんたつせんとむらさきのへといそきけるむらさきのに付しかは一めんにさをならへ竹つな申けるはそれしをさきにするはかたふしてやすく跡に殘ておもん計をめぐらすはやすき様にて成かたしたれの是のといふ其丘のぢたいはてましきしよせんかしはうらにしくそなしとそは成木のはをてにてにもちあたりのさはにかつきいづれにても木のはのしつみたるものさいこをさためんとみなてより一とになかせしに竹つなとすへ宗かなかせし木のはしつみける二人の者共みるよりもしせうのさかいきはまつたりけりみな見たるかめん／＼日比のなしみ是迄とさはの水をむすひあけ木のはのさかつきあいいたかいにかはしかはすそあ

はれ也しこくうつれは竹つなすへ宗しはの上にもむす  
となをりいかにめん／＼申迄はなけれ共ゆうきを上  
にあらはしかたきに色をさとらるゝな先年むしやし  
ゆ行のときやくそうかしのせしかんにんの二字ゆだ  
んたいてきのぐくいをとつくとしんいにおさめとり  
ゑはすきをあらせすうてしての山にて相まつそかま  
いてかたきのくひをさけきたり二世のまふしうはら  
させよかいしやく頼そ方／＼心へたりと云まゝに金  
平定かね太刀引そはめうしろにまはり我々も今明日  
の内にかたきを打取おい付申さん思へは一やか二や  
のわかれ也しうしやくするはくちのいたりとはらい  
きつては申せ共日比ちきりしほうはいのなこりも今  
かかきりぞと太刀をかしこにからりとすてすかりつ  
いてそなきいたり二人の者見るよりもみれん也去と  
てはなけいてかいのあらはこそへんしもはやくてき  
を打君しゆらとうの御くるしみすくい奉らんこそ二  
世あんらくのきゑん也はやく／＼と申所へより吉  
しのひて御ひやうへまいられしか此由を御らんしこ  
はいかに／＼とのたまへはいつれも君を見まいらせ  
あきれてさらにことはなしはるかに有て竹つな有し

次第所存のていくわしく申上ればより吉聞召それは  
かたきめん／＼を出さんための計事さるにてもかく  
あやうき所にてめぐりあふ事三世のきゑんつきせぬ  
ゆへめてたしこなたへといほりをさしてそかへらる  
る此人々の心の内うれしき共申／＼申計はなかりけ  
り

### 五段目

▲其後それ君にしん有しんにちうある兩わのとくき  
かんするゆへより吉公五人の輩にめぐりあい互につ  
もる御ものかたり今一入の其泪やるがたなふそみへ  
にけるより吉なみたをおしとゝめたまひなに事も過  
しは夢さてかたきめつほうの計事いかゝあらんをも  
御門は其内の西におしこめ奉りきひしくけいこあい  
まもるいかゝしてりんかうはなし申さん五人の者共  
承そのたんは御心やすかれたとへはんしやくをたゝ  
みあけへいとなしすせん萬きのしゆこ候共我／＼一  
すちにさん上申上はやかはしそんし候はんりんか  
う只今なし奉らんと申もあへす一とにはらりと御前

を立三重らくやうさしてそ「上りける是はさて置うちますは上みぬわしのこくとにて其身は御てんに入かはりみかとははほうをくにおしこめきひしくしゆこし奉るかゝる所へ五人のともからあき人のていに様をかへらうの御所にそ近付けるばんの者其是をみて爰は大事のろうの御所しらぬはい國のもの成かそこ立のけといかりける金平聞もあへすやあそのろうの御所にやう有とおとたかし／＼と一々にさしころしなんなくろうを打やふり君をうはい奉り竹つなかに引かけ三重とぶかこくとに「おちて行いほりになれはより吉待請たまひまつ君をはあたらしきでんにうつし奉りやあかた／＼軍は事きうになるへしくんりよいかにとせんぎ有時に竹つなすゝみ出御でうのことくてき只今取かけ申へし爰を以あんするにまつかたきの方へわだんの使をたてさせたまひ然へう存候其しさいといつはてきさなたのちりやくにのせられわほくいたし候はゝねがふ所のさいわいいかにもわじゆつとしめしゆたんの所を打申さんまつたてきけいりやくをあい心へわだんいたし候はすはその使の者わうへんの内に近邊の諸侍をあいふれ城をかた

本ノママ

くいたしいとみたゝかい申へしいづれにつけても三方の正理是なりとくんほうの其りになつてあいのふるより吉聞召あゝきめう成竹つなかなともかくもあいはからへくたんの使には御ふんきん不然へし残るめん／＼はきへいのせいをもよふしいくさのやうい有へし承候と三重をの／＼御まへを「立にけりさはんにや竹つなきん平は思ひ／＼のたち刀十文字によこたへらくやうに立出るかたきのやかたになれははんの者に近付みたの竹つな坂田のきん平源のより吉公の御使にきたると申せはんのもの共おとろき内にはしり入由をかくと申せはうぢます聞もあへすくにんなつの虫とんで火に入やつばらかなひつつゝみて打とれとざしきのそなへ相かまへそれこなたへとしやうしける兩人うちにつつと入さしきをきつと見まはせはまつ大將うちますは兵ごくさりの大たちまへさかりによこたへ其左には立花のいゑのりやう二ぢれうのゆうしと聞へたるむねとの諸侍うてをさすつてなみいたりさて竹つな左右のひさをおり左のてをつき畏はきん平めてのひざをおしたて心へや有けん右のてをつき左をくつろげなをりける竹つなしは

しきだいし只今まいるだんへつぎに候はすより吉申され候はいつせんのはげまんためみかとをうばい奉りては候へ共つくゝあんし候にわづかのうちにすどのけきらんひまなくたみのくるしみさこそと存られたりそれ國土をたもつもばんみんをめぐまんためなれはたかいのいきとをりはしんせいをもつておさへほとんとわゆうせしめ昔にかはらす兩人車の兩わのごとくつらなり天下を守り申さんとの御使にて候と相のふる公平ひさ立なをし但軍が御望ならは御返事次第にそれへ參かう申さんとの仰おは何とおとされたか竹つなとはつたとにらんで申ける氏ます聞て是しんしつの使とは覺へすゆだんの所を打んとの今に初めぬ御へんかけいりやくおやにて候もろうちこそゆいかいなく打れし其此氏ますは打るまし但城のあんないみん爲かそれゝて引仕れきん平聞もあへす御すいりやく少もたかはすと前へしきりにすゝむ竹つなしのひに引とめこはおろか成仰かな都に有てもかたきのこもりたる城おはよく存るがゆうしのほういはんやははらく中我らかすみかと致せし所成はまつたくあんない望なし重てさん上仕らんと

しつゝと立けるはけにゆゝしくそみへにけり公平みて手ににきつたるかたきそとかけいらんとする所を竹つな取て引とむる公平しきつていかりをなし坂たか家のならいにてもく前のかたきを打もらすほうはなしかけ出ゝしけれ共竹つな更にはなさすむたひに引たて歸りける竹つなかさいちの程きん平がゆふ力ほめぬ者こそなかりけれ

## 六段目

其後わたなへは氏ますがやかたを出むらさきのへと歸りける道にて竹つな申様いかに公平てきながらも氏ますわおうほうゆふもそなはつたる大將かな其りをいふにたんちの者成らば御ふんにあれ程惡ごんせられても何となくぞを立しは我がしんじつのときはより吉公也扱殘る侍共こなたへことばをかけしは我にいかりをふくみ内へ切て入せんたくみ也それをさとらすして御ふんはかけこまんとしたる間引たて歸りしか城にいか成て立か有けん若あやまつて御へん某打しにせば君は何とならせ申べしとしみゝと

いさむれは公平大きにゑとくし打つれ寺に歸りける  
かくてより吉の御前に畏くたんのていを申上るあい  
もすかさすかたきのせい時のこへを上にける内にも  
時のこへをうけ同あはせんとするを竹つなぎいふり  
立おしとめ東西のなりをしつめさせくんりよのてき  
をしらるゝなよせては是をかつにのり一度にいらん  
とするを氏ますいraftてせいする様あな取てふかく  
を取るなすがめいよのしれ者共かこもつたる所成  
はいか成心や有ぬらんとしはらくちんを引にけり然  
る所へむしや一きぬけ出みしほの庄司となのつて出  
るわた左衛門是に有定て覺有し過つる比某ひざ口に  
受とめたるなかれやの返進いたさんとねかふ折節と  
くたんのなかさし引しほりさらはかへし申さんはな  
つやさきにあやまたすはつしと立まろぶ所をかけよ  
りくひ取てきつさきにつらぬき是ぞ三うらのわた左  
衛門五十四日持めぐり今とうのてきを打取たりとし  
つゝと引にけりしかるによせてのちんよりびぢよ  
を花車にのせて引出しときにかの女あふきをひらき  
せいをそ上にけりみな人のいかりをあらそふあき  
つ國ついいはなびく立花のあさい將ぐんあらめでた

やとまふたりけり定かねすへむね是をみてにつくき  
女のちさんかなあの車をとらんとかけよるを車のか  
けより引つめゝはなつ矢かひさ口かけてはつしと  
たつ物ゝしやと二人のてきかいつかみくひねち切  
女もくるま諸共にみちんのこときく打くたき二人手  
てを引くんでたつしゝと引かへす公平は是をみて  
む二む三に打ふするは只りんほうのかいこをおすに  
ことならす此いきをいにきもをけしすてむち打てお  
ちて行大將氏ます是をみて市川あら河はなきか畏て  
かけ合竹つな一人むしや是に有と云よりはやく取て  
ふせ首ねぢ切て立上る其ひまに氏ますわ公平とむん  
すときむさかたゑたりと引かけなげんとすればはね  
かへし公平いかつておのれ鬼神とてもあまさんやと  
ひしぎ付んとすれ共たゝばんじやくのことき也さし  
もの公平をゆんでへかへし打たをす定かねすへむね  
かけ付南のかいなに取付おのれしゆ天とうじかしう  
心也とらい光つげさせたまふにうたがいなし日本一  
のきん平をかやうにくみふせん者は三千せかいに覺  
なしとゑいやゝとねちあふたり氏ます是を事共せ  
す引よせひぎにしいたりける竹つな一人むしやかけ

合たぶさを取て引かへせは公平やがておき上りちす  
じなはをかけにけりより吉御きげんかぎりなく四條  
かはらへ引出しくひ打をとしくんもんにさらしける  
天か太平おさまりけるせんしう萬せいの御よろこび  
めでたし共中く申計はなかりけれ

藤屋新板

## 渡邊智略討

## 第一

わたなべちりやく打

さてもそのうち、ひそかにういのさかひをあんするに、ふじんのじんをおこなひ、けいばつみちにあたらざるときんは、そのをんあたにむくう、こゝに源のよりよしこう、ちんせいのいらんをあんへいにつひばつあり、あまつさへ大將かわせのくらんどをいけどり、にんとくぐわん年、うるう十月廿八日にていとへかひぢんなされける、かくてざいきやうのしよさふらひ、のこらず御所にあひつめて、ふしやうのいくさの御物がたり、こまやかにちやうもんしつれば、さんだい有へきとむねちかを引たてさせ、きんりをさしてそ三重あがらるゝたいりになれはつつしんてかしこまりいくさの次第ことこまやかにさうもん有、みかどゑいぶんましゝて、二てうの大なごんをもつて、つぶさに仰らるゝまことに今にはしめぬ事ながら、けきらのたいへい、ことにゑいかんあさから

ず、むねちかがことすしつとうつさす、ばつせらるべけれ共、おりふしこいんのこねんきにあひあたらせたまひ、らくちうらくぐわいのせつきやうきんだん有、七日の御ついせんすてにはや四日過、今三日たり此日數おわつておふちを引わたし、五けいのつみにおこなふへしそれまてはゑんどうはん官にしゆごいたさせ、頼義は何事も打すていくさのつかれをはらされよ、ぐんちうのちもくこくぐんの御さた、御とむらい過て有べきとのゑいりよたりと、事念頃にのへらるれば頼義、つつしんで承りよに有がたきちよくちやうのだんかんるいそでをひたし、いさひ畏て候と則ゑんどう判官に、むねちかを相わたしやかたをさしてぞ歸らるゝさればにやねいじんてうにつかゆれば、必國をみだすとかや其頃のくわんはく、みちうのきやうは源家のはんゑいをないゝそはめにかけられしか、しんていにいか成かまへか有けん、れつさのくきやうと御心を合、しやく取なをしそもそもかわせのくらんどかしけいのおもむき、尤のかれがたきざいたりさりながら、むねちかはすが原のおとゝに五代のそん、かうけを出てとをからす、ことに

こいんへはすとのちうせつつかまつり、くわんい六しやうたにこへ今とても、くさの御かげにてさそふびんにおほしめさるべし、せんぶまんふの御きやうの御ついせんより、かのものかしさいをしやめんあらんこそ、あらまほしくぞんし候、一ざのしよきやう何れも此おもむきにこさ候と其りはつめいにさうもん有、御門ゑいぶんましゝて、うつたへのだん其りなきにあらね共てうてきとなりし物をたすけんほうをおかすあやまり、一つはふしやう頼義かおもはんする所も有、たゝしさいのせんぎ然べきとせんじ有、道ちか承はりよん所なきちよくちやうかへして申はおそれおほく候へ共それさうもくはうろのめぐみ、てんちをもつてふもとあをき、こくどのにんみんは君一じんの父母と頼あいだをもつてあたをつくせばあたつきず、あたをおんにてほうすればてきもみかたと成とかや、たゝとにかくに御じひとそばんみんをほへ奉る所に候と、頼義も大じ大ひの御せひとくをは何とてさみし申べきとかさねゝそうもん有、みかどしばらくごしあん有此うへはともかくも、しよきやうのせんぎにまかすべきとせんしもはてぬに

くわんばくこう、それこなたへといましめたりしむねちかゝなわをとき三重やがてるざいにさだまれり、此こと都にかくれなく頼義はやく聞召、四天わうをめされかやうゝのしだい也、さていかゝすべきとのたまへば四人の人ゝてをうつて、あきればてたるばかりなり中にもさかたのまん平、ひざをしなをしいまたそのむねちかめはみやこの内に候べしたとへはい所へおもむきたり共、日本六十四州をはなれ候まじ、きかいかうらいけいたんごく、おにすむしまのはてまでも、此きん平か命のあらんかざりはいづくまでもぼつめ、たな心にかいつかみくびひきぬき、ほうぎもしらぬなまくげばらに一々になげつけ、ほんまうをたつせんととんで出るを竹つなひきとめ、まづしばらくつくゝことをあんするに、是はくぎやうの中にきみをねたむ物あつてこなたへおれひをふるまはせんとのほかりこととおぼへたり、人事をはかるときんばこなたも斗にしかし、たゞきみは御びやうきとかうし我々を御つかひととして、きんに罷いで一たんうらみのさうもんつかまつり候べし、それにてことのていあきらかにしれ申べしと、せ

ひをたゞして申上る、頼義聞召尤此ぎおもしろしきりながら、四人まではことおほし竹つな公平只二人まいられよ竹つな承りいかにきん平、れいのことき  
のあらぎを出さるゝにおゐては、此竹つなはあひしにはしんしやくなり、是にてよつく口をかためたまへきん平につこと笑ひ、このたびにおいてはすは八まんも御照覽あれ、何事にてもごぶん次第たるべし、もしそむくにおいては弓やのみやうかたち所にあたるべし、其だんは心易かれ、竹つな聞て近頃しうちやくせしめ候、いざゝらはこなたへと三重つれておまへに出にけり、二人なさだまるしやうぞくし、たいりをさしてあがり、とうの中將しげなりに近付、竹つなをほしをかたむけしうにて候頼義は、ながぢんのつかれにやびやうきしきりにござ候間、さりながら我われをさしつかはされ候、承はればかわせのくらんどむねちかをはしさい御ゆるめんのよし、らくちうにおいてそのかくれ候はす、聞召ても御らんせよ何れもぎやくしんはおなしこととは申ながら、かのむねちかはわたくしのしゆくひふかき物にて候、しさといつは頼義すどのてうてきすみやかにばつせし

も、是しそつのはたらきつよきがゆへ、しかるにこのたひのたゝかひに、ことに一きとうせんとたのみしひらいのひとりむしや、むねちかはかりことにのせられて、どくしゆのがいにあひ候、さるによつて我我をはしめ源家の侍、きやつをいかにもしていけながらとらんと、ほねをくだき心をもみ望のまゝにめし取、ていにてひとりむしやがきやうやうに、心のまゝにつかまつらんとはるゝと引上りたるむねちかを、ごしやめんとは何事ぞ、そのだんゑいりよのおもむきつぶさに承りたく候、よくゝさうもんあつてくだされ候へと申、しげなり聞たまひいやそれははやくぎやうのせんぎ、きはまつておんるにしよせられたり、りんげんなあせのごとし出て二度歸らす、さうもんあつてかなふまし只是より歸られよ、公平聞もあへずちよくせんの返答をいながら申は、扱はごぶんかしよいならんと近付んとすれば、はつといふてにげ入かくのだんのしさいなりいかゝあらんと、色をちがへて申さるればとうぎのくげでん上人物のひまよりさしのぞき、誠にさきにみゆるはわたなべのつなか一子三田のたけつな、次成は聞及

たる公平ぞいか成事かいでこんと、うへを下へとか

へしけるみかどもおどろかせたまひ、くわんばく公にせんじ有、何とぞしてまづしづめてかへされよ、道ちかちよくせんかうむり下くちに御出有、いかになんぢら釋義のうらみのだんしごくせり、みかども今更ごこうくわいなさるれ共、こときはまつたるを又物くるはしくそくぎに引かへられん事もいか、なれば、せひなくはい所へつかはさるゝなり、折をもつて望のごとくたまはらんとのせんしなりとのたまひすてゝ入たまふ、公平みて扱は此仁かわざと覺へたりと、とんでかゝるを竹つな取ておさへごへんな物にくるふか、あれこそもつたいたなくもくわんみちちかきやうにろうせきはかなふまじ、まづ静まれとせいすれば、なにとくわんばくのかうべには打物はたゝざるか、おそらくはきん中をじやうやのやみとなさん物をと、む二む三にかけこむを竹つなをもいだきとめ、さいせんのけいやくをわすれられたるかとせいしければ、公平聞いていや此うへはしんはつもみやうばつもあらばあれと、かけ出ゝしけれ共竹つなしきつていさめ、むたひに引立歸りける、公平

が心の内むねん共中／＼申斗はなかりけれ

## 第二

賴義東國おち并ろしにてさん門敵對申事

扱も其後竹つな公平は大より歸り、大將の御前に畏くだんのおもむきを申上る、賴義聞召れあゝよはまつせに及たり、かくまつり事たがふはとうしの公家大臣、れいぎをわすれひきよくをかまへるゆへなり、月きよからずとすれ共はくうんかげをうほふとは、今此御代にしられたりつら／＼ういをあんするに、人間は五十年わつか成世中にふとう成共からにまじはりをもすはんはさりとは人ならじ、しよせんうきよにすめはこそ聞まじきことを聞け、すつるにやすきみやうもん、いさせきの東に引こもりろさんの心いにしへをたのしまん、竹つな承はり御ちう尤にて候、誠にすどのてうてきをはつし、こつかたいらかにばんみんをあんらくに置ことは、おそらくは源家のぶかうたり、然に左様の忠をは思召出されず、やゝもすればねいじんのざんげんを聞召入られ、ふぎをふるまはせたまふ忍いりよの程こそな

さけなければ、一先御身をしりぞけさせ給へ、よのな  
り行ていを御らんせんにはしかし、人くいかにと  
申せば、公平聞てあはれそれがしが所存にまかせば、  
きん中にみだれ入世をへつらへるやつばらを一く  
にくびねち切、其後東國へも西國へも下り度存れ共、  
とかく申さはいの事と人々にさみせられんはひつ  
ちやう、只めんくのせんき次第とふきやうがほ  
にぞ申ける、頼義聞召何事もじせつたり、此度はお  
んびんにはかるべしかまいてあらきのさた有べから  
ずと、扱しよ侍を召れ何れも定めて一所にと思ふへ  
けれ共、たせいにてはせけんのひはんも有なん、ま  
ついづくにも立しのび心さしつきせづは、跡よりし  
たいたまへやと皆御いとまたまはり、扱御供には四  
天王三うら竹ちをはしめとして、わかつての侍卅餘人  
たびのしやうぞく被成よにしほれたるてうけんめ  
し、ごんずわらすしめはき、すくくと御出有みだい  
若君御こしにのせ奉り、御供の人々も有しすかたを  
引かへて物さひしけ成其有様、よそのみるめも哀成  
らく中の上下是をみて我もくとはしり出、四天王  
かまへに畏こはなさけなの御事や、君都を御出有な

らば又過する年の如く、悪人共かあつまりていとは  
やみとなりたみをふびんと思召れば、然べき様に仰  
上られ御じひあつてたまはれと、聲を上げてそなけ  
きける、公平聞てあれ聞たまへ人く、かくいけの  
物迄も物のだうりをしるぞかし、にくき兵りの公家  
ばらかすとのをんをわすれ、こかけにふしながらえ  
だを折悪人共、御ゆるされ有ならは一人も今生には  
おかし物、御ゆるしなきこそ口をしと引合よりゑば  
しを取出し、是は日本大りにて兵ごの守にふせられ  
し時、ちやくしたるゑはしなりきんりの奉公とまる  
うへは、御をんかうむりても詮なしと二つ三つに引  
さき、只今よりそれかしは本の坂田のくわいとに成  
なりかまへて兵ごの守とよひたまふな、ゑく口をし  
や我身ながらも、我まにならぬ事こそむねんやと  
はがみをなしてそ立たりけり、竹つな是をみてしつ  
まりたまへ公平、やあらく中のらうにやく男女しと  
う心はふびんなれ共、力及ぬじせつなりたかひのゑ  
んくちせずは、君二度きらくの事も有へしかへすか  
へすも名残こそおしけれと、たもとをかほに押あつ  
れはすせんのらうにやく一どにこゑもおしますなき

にけり、扱しも有べきことならねはおの／＼ていと  
を出たまふ、おにをあさむく人／＼もきせん物か  
なけきをみて、おの／＼そでをしほらるゝかくては  
やあふにさしかゝりおちさせたまふ所に、りうけの  
ふもとをみわたせははた二冊なかれ、み山おろしに  
なひかせてせい**本ノミ**のぶんりやうはしらね共、とうまち  
くいのことく打かこんで引かへける、竹つなみるよ  
りも一ぢんにすゝみ出、是は源の頼義公しさいあつ  
て東國へ御下向しますが、何物なればひろうのふ  
るまひ仕る、ろしをさつてけいこ仕れと大をんあけ  
て申ける、其時ゑんゆうきす、高き所に立上りやあか  
くいふは竹つなか、ろしをされとはすいさんなり何  
のたつときことあつて頼義かけいこをせん、是こそ  
さんもんの大しゆなり、しよくかんのともからまつ  
すくにとをさんことみかとの御とがめいかゝとお  
もひ、れいきのためにむかひたり過しむらさきのの  
おくれをは今日こそへんれいたさんといひもあへ  
ず三重ときのこゑをそ上げにける、公平此由聞より  
もゑゝそいろにはらたつてあひてのほしき折から、  
天のあたへのうれしさよいかによ／＼たいしゆ共、

よしなきあくいをおこしころものうへになわかゝり  
しは、きのふきやうのこと成にはやくもわすれてあ  
りけるな、此たびはおのれら一人もあんをんにはか  
へすまし、かまいて引なほつしはらと、たせいの中  
へわつて入おつつまくつつ三重ひばなをちらしてた  
たかひける、たせいにふせいの事なれば源氏の侍心  
はたけくいさめ共、あなたこなたにて打しにし四天  
王三うら竹ちしうじう七きになりたまふ、然所に大  
しゆの中よりも色／＼によろうたるむしや四人ゑ物  
ゑ物をひつさけ出、そも／＼ちんとうへたぐひまれ  
にすゝみ出たる我／＼を、其名いかにと思ふらんま  
づ一はんにはわにの兵へが三なんあくら三郎しけも  
と年つもつて廿三、二ぢんはひゑいさん東だにてつ  
きのせんじほう、三はんはかたゝの源八むねより、  
四ばんはよかはのりつしくわいしゆん、以上四人一  
きとうせんとゑらみいたされたりなひ／＼承はり及  
たる、四天王にけんざんとこへ／＼にのゝしりけり、  
公平聞もあへずおう所望ならば御めにかゝらんとか  
け出るを、三うら竹ちすかり付わか物共か候にさり  
とてはおとなけなし、かれらをは我／＼承らすと立

ふさかつて望ける、殘る三人聞よりも所望のだんおもしろしまつ公平はこなたへと、四人共にたかき所にかけあかりかけ引をけんふつする、時にわた左衛門しつくと立出三うらのためむね爰に有、かたきのてなみをみぬさきに一きたうせんとかうけんはく人々の、太刀さきちつとひけんいたさんとよばよりける、あくら三郎聞よりも四天王こそ望なれ三うらこときのしやくてき、あひてにはふそくなれ共、せんどやうの習ひあふもあはぬも敵と聞ばおもしろし只今がさいごかとくわん年いたせ三うらと、はしりかゝつてはつしときるをてうと合、二打三打うけなかし太刀をひらめて打ふせ、むないたをかいつかみじやく年なれ共けんしの侍はいくさはかやうになれたり、おのれくわん年いたせやとはるかのたににぞすてにける、てつきのせんじ是をみてつかまつたりわか物と、はしりかゝつてむんずとくむためむねもとより、ゑたるみちなれはうけみになりて敵をとめ、かけつはついつかたきにせいをつくさせ、りき身のあしをはたとければ、あふきをたをすごとくにて、まつさかさまにどうどふすを、やかてうへにの

りかゝりくびふつつかき切そば成こほくのえだにかけ、はるはときにおうするむめさくら今はふゆもなかなればちしほにそまるほつしのくび、是はなそと御らん候へと四天王にしきだす、ごちんにつづく竹ちさらはやすもと一太刀つかまつらん、そのきたまへと入かはる、かたゝの源八きつとみて長刀取のべうつてかゝるひらりととひ、こむてなくてひらくて、ひきよくをつくしつかへ共やすもと物のかす共せず、うけつひらいつかけこくり、すきをうかかひゆんでへぬけもつてひらいで打ければ、かたさきほろ付よだれかね一つになつてたをれける、跡にひかへしくわいしゆん、あつはれきやつもくせ物やと、よつひきひやうとはなつを、さしつたりとつと入てひつさけ、みかたのちんへ取てなけ、おきんとするをくひちうに打おとし、にやわぬそうのうてたてやとむくろにこしをかけ、太刀おしぬくひひかへけるつゝくくんせいみるよりもかれらがふるまひもにんげんとはおもはれず、まして四天王かくるならば一人もたすかる物はあるまじき、もつたひなしくとわれさきにとにげゆくをおうちに二冊きなぎふ

せ、いくさはもはやこれ迄と、てに手をくんでひつかへす人／＼いそぎはしりより、さてもかけたりわかも共、たちのだしやうくみうちのやう、なぎなたのうけひらき、やちがへすかさぬてとりのしな、ほとんとおどろき入たり、たとひ我／＼したり共めんめんかくてあるならば、御家はつゝくべしともかくにもげんしの御代、まつだいまでめだかるべきしるしにや、兩人ごときのまれものかまたいでありゆみやのみやうがあんをんなれと、あをぎたて／＼いさみよろこふ四天わうがていたらく、このものゝいくさのていあつはれけんしのみたからやと、さてほめぬものこそなかりけれ

## 第三

### よりよしみだい御さん井大ゆきの事

さてもそのゝち頼義こうは、さしもあひまちたりしたいしゆ共を御所存のまゝにかけちらし、いづれもいくさのつかれをはらさるゝ所へ、くわんばくくげ大じんのはからひととして、おいてのせい七千よきあとをもとめておつかけ 三重時のころをぞあけにけ

る、きん平此由みるよりも是はほくめんのともがらなまくけばらか家のことおぼへたり、さてもしとなきぢんのそなへかな、一やもいさせ候まじ何れも是にてけんぶつあれと、あたりをきつとみ渡せはあをめ成大せきあり、ゑいといふてひつさげ、なにとはしらすてきのかたへゆう／＼とあゆみより、おいてのせい是をみてすはれいの公平よ、ひとへにきじんのふるまひなりとせんぢんこぢん 三重一どにくずれてにげにけるあさましかりける有様なり、竹つなみなまぬるき公平や、なにとて打とめたまはぬとおつかけんとするをおしとめ、あるびやうもなし竹つなうでにもたらぬやつばらをさりとてはせんなし、うちとめんとおもはゝ太刀もかたなも入べからず、た今の石にて一どに五十も百も打ふせんやすけれ共、只一てうのいかりにおほくのものをうしなひ、さいしに物をおもはせんかふびんさに、わざとひかへ候かまへてあらぎを出さるゝなとぞ申ける、さてもさてもよにはすむべき物にて有、公平の物のあはれをくわんねんし、竹つなをあらきなりとせいごんをうくる事こそきたいなれ、ともかくもかんげんには

もるましき、かまひてそのしんていをわすれたまふ  
なと打わらひてひかへける、時にさだかげすへむね  
二人かそばに立より、扱も只今のおいてのもの共が  
ていたらくはなにといへること共ぞや、あれほどて  
きかこはくばはる／＼と都より是まではきたりけ  
ん、あはれそつとてこはきかたきもがなかゝるひろ  
みにおつちらし、おもひのまゝにきりみたしたびの  
つかれをはらさん物をと、すきし目のいくさ物かた  
りしいたし、さもくわん／＼たるそのありさま、よ  
の中のおちうとはことかはりてぞみへにける、扱  
都より御こしかきしものもきのふのいくさに打れつ  
つ、御こしかくべきものもなければ 三重おの／＼し  
ゆごしてたちにつける、さきをきん平かきければ跡は  
すへむねかきにけり、よりよしつく／＼御らんじて  
さしも天下にかくれなく、まつだいまでもきろくに  
とまらん四天王か、かやうのわざに身をやつす、ち  
うていのほとのかうことばにのべられず、たゝと  
にもかくにもくはほうつたなき、頼義か身のうへこ  
そはむねんなれと、ふかくなげかせたまひける、お  
にをあざむく人／＼もしばしなみだにむせひけり、

げにやうきよと聞時はうきにはもれぬあみのての、  
せんせのがうの身にもりきず、なにひかるゝおぐ  
るまのめくるしくれをいといつゝ、みのにかゝればか  
さのはの露、かゝりたるをいと打はらひうら／＼さ  
と／＼のしづのわざ、くはいろかへるまつかせのお  
とはあらしのよそにのみ聞やいせをのあま共か、み  
るめもしをのたぐひ迄、取あつめたる思ひ草たのし  
みつきてかなしみのゑいくはのともゝおはり成、い  
とだのはらにぞ付給ふ、いたはしやな北の御方はた  
だならざる御身ながら、都を出させたまひしに日數  
つもりてうきかなや、ごさんの御心ち付にけり人々  
おどろき御こしをかきすへ、ひと村松の本にやとし  
奉りわか君をはさだかげいだき参らせ、さんみのつ  
ほねはみだい所をかいしやく申さるゝ、頼義御そば  
近くよりたまひ心は何とましますぞ、一年あのおま  
んをたんじやう有し其時は、七ゑ八ゑのきちやうを  
ひき、天下のふしははせあつまりしよししよさんの  
ほうへい、きせんしゆそくをかへせしに、けふはい  
つしか引かへてあらしをふせくたよりもなく、のば  
らのさん所のあさましさよ、かねてよりかく有へき

としりながら、心よはくもとゝめかね都をはなれ思ふ所へは行つかず、ちううのたびにうきしづむ、うき身の程こそはかなけれ、今思ひ出せはれいぎの道にはそむく共、うらみのやを一やいていとの内にてしやうがいなきはめん物扱もむねんの身の行へといかれる面に涙をうかめ、こしかたをかきくどかせたまひければ六人のともがらも御しんていを相はかり、何れも袖をぞしぼりけり、かくて其日もくれ行は御心もよはくと次第によはらせたまへは、君を初め何れも是はくときをけす、やゝあつてかすか成御聲にて、水をと仰出さるれば竹つな畏候と水かめをおつ取出、いづくか水のなかれぞとみきはの方にさしかゝり、やう／＼さはに尋付かめに水たんぶとくみもつて有し所に歸り是水奉らんと申せば、頼義聞召こなたへと御口へ水そゝかんとしたまへは、なむ三ほうもはやこときればてたまへは頼義夢共わきまへず、是は／＼となげかるゝ竹つな是をみて、あつはれよはき御有様かな人／＼は何とて御力をばそへざるぞ、そのきたまへとそ御そばに参り、みだいの御まくらを上げ、それ花は春さき秋みのる

人間の生死の道もかくのごとし、御心かいなきゆへ御たんしやう有へき御子をむなくさんつにかへしたまはんはかなさよこせん様と大聲上てよははれはほのかに御いき出にけり、竹つな力をそへそれ御かほに水そゝげよ、佛神を頼はかやうの時をそれめんきせんを懸られ何も心へたりと思ひ／＼にしゆく願す、中にも坂田の公平は大のこはねを指上と<sup>本ノマ</sup>うしあつたの大明神は、れいけんあらた成と聞て有しん力をそへたまへござんへいあんならぬ物ならは、弓や神もせうらんあれしやとうの内へみたれ入明神にしきにたいめんせしめ其うつふんをはさんすべし、かみ／＼たらは神力をそへられ候へなむ明神明神と、太刀のつかをおしにぎりはかみをなしていのりける誠にしんりよのちかいにや、四天王に餘に聲をそへられよはき御心を取なをし次第に御力付にけり竹つなすはや、りうんをすゑたるはいのれ／＼と身をもみて、しきりに御力付けはござん有こそめでたけれ、みはのつほねはいたき上きぬにおしまき奉る、御せいじんの後□□次郎よしむねとなのらせたまひしは此君の御事なり、頼義一のいきをほつ

とつきたまひ扱もくはほうつたなき此若や、世がよ  
の時で有ならばらく中の上下門前に市をなし、いに  
うかつかうせん物をまつおりかくる此さん所、のへ  
の草木の音ならてことといかはす物もなし、空のけ  
しきをみ渡すに、てうゆきか雨かふりおちん哀諸  
神のちかいにて、せめてしのゝめあけ行迄、ゆき雨  
とめてたまはれと、らくるい袖にうるをして御させ  
いあるこそ哀なれ、すてにはや、あかつき方に成ぬれ  
は次第によかんはけしくて、ゆきふりくるさうらめ  
しきせんほうつきて人々みたい所と二人の若君を  
御こしの内に入、頼義公と三はのつぼねをは、松の  
こかげにすへ申、六人の人々はきたるいしやうを  
ぬぎ、こしの四方にかけまはし風吹方のかきとなし、  
いたはり申ぞたへももなき、情なや次第にゆきの  
つよくして打はらう手も力もよりはりはて、たけき心  
もくれくとゑゝさすが天下に名をへたる物共が、  
思もよらぬ雪にぬひふいきにしなん口をしさよ、あ  
け方も今少にて御さ候御心をみたしたまふな我君  
様、心みたすなみださしとたがい力を合つゝ、明  
行夜半を待いたり此人々の心の内、哀共中々申

斗はなかりけれ

#### 第四

かうせんていとを責めふかと都を落給ふ事

さてもそのうち、しのゝめやう々あけ行は、人々  
御こしをしゆごし、あつたの宮に付給ふ則さたかけ  
を御つかひにて、大きくしたちへ事の次第を仰つか  
はされるれば、みつはる大きに驚き取物もとり敢ず、  
おもてに出こなたへ々とれんちうにしやうじ、よ  
きにもてなし奉る、みたい所には御くすりなどを奉  
り、あたゝめ申にしたかひて、御身のかんきとけに  
けり何れもあるしかなさけゆへ、此程のりよはくの  
うさを打わすれ三重かくて日數をおくらるゝ、是は  
扱置爰に又、にんわう廿六せふれつわうのばつそん、  
ひろたの入道がうせんといふもの有、其さうきやう  
はん人にかはり、せいあくまでたかくして、雙のま  
なこは百れんのかゝみに、ちをそゝぎたる如くにて、  
しんいにましやうしんのさしはさみ、ちうやたゝあ  
くぎやくを事とする、さればすきぬるきうし三年、  
とよのあかりのせつゑのよ、其頃のぞくみやうは、ひ

ろたのちうなごんしげなりといつし時、櫻町の大納言を禁裏において暗討にし、其外、北面のともから冊四にんきりふせ、すせんのかこみをやぶつてぬけせけんをしのぶ身なれば、そのまゝさまをかへらうどう五人あひともなひ、いつみの國ときいの國のさかひ成おにの中山に引こもる、さるによつて都にてさいしけんそくことく召取、六條川原にてはく中にせつかひ有、入道此由つたへ聞我身のひきをはいわずして、さすが中納言たるへき物のさいしを、はくちうにてくびを打事や有、せひにおいて此いこんさんせん物をと、時をまちていたりしが頼義東國へぼつらくを聞よりも、五人のらうどうを近付、すは日頃のいきどおりはるべき、天のじせつ今に有げんけのともがらてうかをうらみ引こもるうへは、天下に心にくき物はなしいさやぎへいを上、年頃のうつぶんをさんせんいかにくと申せは、にたるをもつてあつまる、もういぶとうのらうとう共尤にて御ざ候、たとひ頼義都に有とても我くむかつてごかくのいくさいたさん物四天王はしめけんじのさぶらいにはおそらくはおぼへず、とくより打て出させたまへ

とたひくすめ申せしに、今迄の御ゑんいんむねんのいたり是なりはやくくといさむれば、がうせんなのめによりこびいそひでよい仕れ、畏て候とて何れもおまへを立にけり、ことかはりたるしやうぞくなり、まづ大將ひろだの入道はいとひおとしのだう丸、あらいかわのよみひ五れうかさねてざつくととき、四尺八寸の大刀一尺五寸のひるまきしたるだいのけん、あをちのにしきのはつほうづきんのうへに、しらあやた、んではちまきし、きんのぐんばひうちわをもつたりけりつゝ五人のらうどうには、ゑまの源内むねひろ、あきがわ藤太みつより、まつしま平藏さだよし、いきりのちうだたねうち、なかざり源六國かど、何れもかみなかばよりするどにきり、一やうにくろかねたうの腹巻、心くぐそく、かなさいぼうをてんで、に持、あひもおとらぬ其有さま、りつき六下たう、しゆつせうするかとすさましし、にんとく元年十一月廿一日に、おにの中山を打立ちろしにてたておう物共をは、ちうわうむげにほつちらし三重すくに都へせめのほる、此事ていとにかくれなく、やましろのむしや所、とがはのせうじちかひ

で六千よきの大將たまはり、ふせきとめんとすみよし天わうしにちんを取にけり、時もうつさすかうせんも天王寺に付けるが、てきちんをみわたせは、きつかうみつかしはまつのこかけにひるがへる、扱は山城のくわんへいたるべしあなあさましのてきのぶんさいや、そつとおひきてみんと打を上げてまねきける、さきてのせいはみるよりもすはかたきよとせんちん七百よきまつしぐろにかゝるを、まん中へわつていり立さまよこさま八方ざり三重くわゑんのまひてぞきりみたすさきがけのわか物、四五百きかけたをす、つゝくわんぐんきもをけし、たゝ人間にてはなきそとておめきさけんでにげ行、らうどう共是をみてあまさしとおつかくるを、かうせんおしとめやあてきをもらすにくんほう有、此物共うをうさをうににげのぼり、たゝ今のいくさのていをかたるなら、くわんらいこなたのてなみはおぼへたり、ひとへにおにゝむかふ心ちして我さきにとにけさるべし、むやうのいくさせんよりも、心しづかに都入せんこなたへと、天王寺にちんを取三重しばし時をそうつしけりあんのこゝく打手の大將、とがはのせうじ

ちかひで、大わらはにてにげのぼり、すぐにきんにあがり、ちかひで此年まですどのたゝかひに相なれ候か、あれ程はげしきてきはかつて覺へ候はず、いかつちなどのおちかゝるやうにこそござ候へ、ふせぎのくわんぐん皆打れ候、もはやていとちかく迄せめよせ申べし、いつくへもりんかう御いそぎ有べしと、申すてゝぞ立にけり、是を聞てくけ大じん、しゆこのふしこはいかにとあはてふためきおちて行、もつたいたくもみかどの御かいしやく申物もあらされば、ふじゑの中將たゝ一人、りうの御馬にのせ奉り、ひかしをさしてりんかう成三重うきよのはてぞかなしけれあひもすかさす、かうせんはていとに打入てに立物のあらされば、いそぎ大りにあかりけり、され共人一人もあらさればこんたいのくわとうひのきよけん、其外のみたからきうてんにさんらんす、かうせんみてあゝよくもあわてたりと、あなたこなたと打まはり、百くわんれいぎをのべし、しゝひでんのゆかのうへにむんずとぞし、取おとされたる御かむりをそばに置、くわんゝゝたる有さまは、ひとへに天子のふるまひなり、さるほにさしもげんけの人ゝは、い

と脱スルカ

きとをりふかゝりし、川瀬藏人つの國ながらにるざいせられいたりしが、はいしよのしゆこと打つれ一ばんにまいりかうさんす、其外のしよ大名、れいをたゞしてあがり、ゑぼしをたれてとんしゆす、がうせんみてしんひやうくもはや日本は此入道か國なり、もしさまたげと成べきは、とうごくにろうきよする、源の頼義なりかれをもやかて打取、天下いつとうせしめん、めてたしく上下しゆゑんにおよびける、すへのゑいぐわはしらねとも、がうせんがおごりのほどあつはれぶたうのあく人やと、扱にくまぬものこそなかりけり

## 第五

頼義上洛井むねちかろしにて行合打るゝ事

扱もそのうちみかどはおはりの國あつたの宮に付たまふ、是こそおもふ所なればづかしながら頼義をこそたのまんと、ふぢゑの中將をもつて、大ぐしがたちへことの次第をせんじ有ければ、よりよし承りこはそもゆめかとはしりいでさせたまひ、ぎよくたいの御有さまをおがみ奉り、こぼるゝ泪はたまをつらぬ

くごとくなり、やゝあつてまづこなたへと内に御とも被成ける、みかどごさにうつらせたまひ、いかに頼義なんちに二たびみゆる事、ぎよくたひちゝむばかりなれ共、くひても歸らぬむかしのゆめなれば、こししよしゝてごこくめつし、はんれいかへんしうにさをさして、ゑつわうたちまちほろひしも、今ちんが身にしられたり、なにとちよくぢやう有べきやうもなし、ともかくもたまばんせいゝのせいとくはしんかむねに有べしと、此たびのけきらんの次第こまやかにせんじ有、きよいをしぼらせたまひけり、頼義つつしんで承り申てもく以前の御うらみはつくしかたく候へ共、もつたひなくも十せん天子はるゝ是迄らんかう有、さばかりせんし有をとかうのちよくとう、天のせうらんおそれおほく存候、過にし事はよし、おつ付くわらくへくわんかうなし奉らんと、よきにかしづき奉る、其後かしん共をぞ召れける、人々御まへに畏、たゝ今りんげんのおもむき物ごしにて承はり、我くもらくるい仕て候、此うへはばんしをふりすてぎやくとたいじの御けいりやく尤に候と、皆一とうに申上る、君聞召扱はかたゝかしんて

いも、頼義がほつする所にいつちせり、ぎやくとさつそくたいぢせしめん間、いそぎくわいぶんまはし、東國せいをもよふせられよ、竹つな承り御ぢやう御尤にて候へ共、ぐんせいをおして上落ましまさば、てきもうぢせたのはしを引、いとみたゝかひ申べし然はたみのなけき、こくどのわづらひもつての外に候はん、おそれながらそれがしがぐあんには、たゝ此まゝしのびて御のぼりましゝて、事のていをうかかわせたまひせひぐん兵御用ならは、ていにて御はたをあげさせたまふべし、五きないのぐんせいは皆御みかたへぞさん上つかまつらん、はるゝゝくわんとうせいを召ぐせられんな、ろしのなんぎはんみんのつかれよしなき所にこぎ候、たゝし人ゝゝいかにとぎしきをきつとみわたせば、坂田のきん平すゝみ出おうゝ申さるゝごとく、なにのぐんせいか入候はん又みへたる事もなきさきに、君の御上落ちよしなし、まづそれがし一人罷上り事のらくいを承り、其うへのこせんぎ然べうぞんし候と一すぢに申あくれば、頼義聞召あひのぶるだんは尤いちり是有然共ごぶん一人のほせんは千里ののべに、とらをは

なつとやらんにて、かたきはおほしせいする物はなし、いか成くせ事かしいたさん、其うへ思ふしさい有聞皆いつしよにのほらんと、其後大ぐしをめされみかどをよくゝしゆごつかまつれと、くはしく仰おかれしうゝ七人あつたの宮を跡にみて物うかりけるいとたのはら、つらきはふりしゆきかなと、過にしふいきをおもひいて今も身にしむはかりなり、かくてうらゝさとゝ打過あふみの國にも入たまふ、然所にうんつきゆみの、かわせのくらんどむねちか、一ばんにかう人に出ておんしやうに、いふきばんばしかのさとかれは一萬ちやう、かうせんがあんとのくだし文いたゝき、入ぶのためと心ざしさゝめきわたりて奉りける、頼義御らんじとかく物にはじせつ有、あれみよかたゝかはがみをなせしかはせめが、きちゆゝしげ成ふせいかな、いつまでのゑいぐわならんかまひてあはてゝことをしそんすな、とつくとしづまれとのたまふこゑの下よりも、公平いらつてつつとぬけ、馬のうへより引をとせば、つきたる物はわつといひてにげにける、やかて有し所にさげ來り、君の御めにかくる、大將御らんしあらめつら

しやかわけどの、ごへんゆへに我／＼はかやうのす  
かたとなりはてたり、ふきのゑいくわはうかめるく  
もとつたへたまひしせいじんのごいづくにかたがは  
ん、それ／＼とのたまへば四天王四方よりもひつは  
り、さしも天下に五人のまれ物と五つのゆびのこと  
くあひならひたる其内をどくしてよくもころして  
有、おのれを今までこんしやうに置事、くさのかけ成  
一人むしや我々をさこそゆひかいなしとおもふべ  
し、只今たむくるぞひとりむしやよつくうけ取たま  
へと、いひもあへず一刀つゝと思へ共六人にできる  
ほとに、身はずた／＼になりにけり、され共たかきも  
いやしきも、なすまじきはよこしま、つくれるあくは  
ついにのがる、所なし、はやくもむくへる天めいや  
とにくまぬ物こそなかりけれ、よを日についでいそ  
がせたまへはほどもなく、はやらくやうにつきたま  
ふ、しのびやかにものかんぬしさだひさがたちに入  
たまへば、さたひさしばしあきれて、こはおもひよ  
らざる御有さまかな、さてもていとへは大あく人か  
入かはりこらいよりもてなかりし、じりやうしやり  
やうをめしあげ、たみはくせいのおいほうをむさば

り取、とがなき物も我身の心にあはざれば、せひも  
をいわせずびうち、四方のくち／＼にくびかけや  
むひまもなく、萬民たい君の御事をのみちうや申出  
し、ひとへにせきしのち／＼は、を、しとうことくな  
げきかなしみ候なり、だいじ大ひの御じひは此たひ  
に候と泪をながし、ふた時ばかりぞくどきける、より  
よし聞召おう／＼かのかうせんは、き、およびたる  
あく人なり、しよ人のなげきさぞならん、さてかれが  
ぶゆうのほどはせけんのかたいか、あるぞ、さたひ  
さうけたまはり、大將がうせんがゆうりきは、いにし  
へのたんばの國のしゆてんどうじがいきをひも、是  
ほどこそありつらめとばんみんこそつて恐れ候、な  
らびに五人のらうどう共は、いばらき、いしくま、い  
わどうじ、あらわう、どうわう、ふたたびしゆつしや  
ういたしたるやうに申候、其うへ此度都人のていた  
らく、すまんぎをたゝ六人、てうちちらし、そくぎに  
しゆごにそなはる事、なか／＼ぼん人のわざにあら  
ずと、せけんにもさたつかまつり、其身もくどには  
べちに人もなきやうに、かうまंनीたすよし承りお  
よひ候と、ことこまやかにぞかたりける、きん平、き

きもあへずしやつめらが、うてにもたらぬこくはしやばらをしてごめにし、ちしんにかうまゐいたす共それはあひてによりての事ならん、さやうの事きくに付ても口口しし、かつやまくるやいでちからをためさんと、ずんとたつていつるを竹つな取ておさへ、すわまたきん平の例のあらきのおこりたり、すぎにしころそれがしをあらぎなりとかんげんありしは、はやくもわすれたまふな、竹つなもごぶんのいさめをはうけたまはりぬ、いま又それがしか申事をもちかでそむきたまわん、しばしと申せばしゝふんじんのごとく、いきをひかゝりしきん平も、しごくのたうりにことばなくもとのざしきになをりけり、ときに竹つなひざたてなほしかんぬしの物かたりのだん、あざむくにことやすし、かたきさやうにけつきにいさむこそさいわいなれ、このうへはゑらみうちにつかまつらん、そのてだてといつは我々六人、きじんのかたちに出たち、らくちうのもの共を五十も百もつかみひしかば、くたんのものとおのれがふゆうをかうまんしせひ共へんげをうちとめんと、やいんにならばかならずみやこをめぐるべし、とき

につちゝにまちうけ、ひつくみゝうたんことなにのしさいか候べきと、そのりになひてあひのへければ、なみいたる人ゝ竹つなをみあけみおろしうちながめわたのはにんげんとはおもはれず、八まん大はさつこぶんがしんていにのりうつりたまひ、かゝるきみやうをしんたくあるとおほへたり、扱もたくみしちりやくやと、したをまひてぞかんしける、頼義御ゑつき限りなくいまにはじめぬ竹つなのけいりやく、かんするにことばなし扱そのしやうそくはいかに、かんぬしうけたまはりそれこそとうしやにいか程もござ候と、みくらをひらきそのしなゝを取いだすきん平みてくろかねのたいのはこのありけるを、是こそゑ物とおつとりさらばそれがしまつそれのさきがけいたさんと、とんで出るを竹つな又おしとめ、こはそもなにこそぞそのていにて、らくちうにかけいでば、けしやうのものとはいわて、さかたのきん平とこそいふべけれ、しからはやけいのきじのかしらをかくし、おをいだすにひとしし、さしもそれがしかむねをくたきしちばうもいたつらことゝなりなん、すこしはひかへたまへやあ日もくれ行に、何

れもしやうそくいそかれよとふゆうをうちにおしかくし、さもあふやう成其ありさま、さゝなみやほのまさこはつくる共竹つながくんりよの程はよもつきし、日本ぶさうのあんじややと、皆かんせぬ者こそなかりけれ、

## 第 六

がうせんらうどう四天王に打るゝ井みかと

くわんかう

さる程にかくてその日もくれければ、六人の人ゝ何れもききよに出たち、てつしやうらんはをひつさげ、めうじんのはいでんにひがしにむかつてあひなのおに共いつべし、時に竹つな申やう、とかく六人一所にありてはせんあらじ、二人三人つゝてぐみをしてほうくゝにちり、らくちうをさはがせん、かまひてめんくゝとかもなき民共の命を取事有べからず、たゝゆきあふ物をはそつとつかみ、此はいでんにこめおき、ことらつきよせは一どにはなちやらん、皆其心へあるべし、きん平聞てさやうにことやわからか

ならんな、おにとはいわで、人とこそいふべけれ、らくちうのたみ共てきにしたかふやつはならねばもつてはおなしかたきなり、よじんなしらす此きん平にゆきあふ物こそふうんよと、につことわらつていたりけり、竹つな聞てごへん一人はなちやるならば、いか成くせことをかしたさん。さらはてわけをいたさん、まづきん平には竹つなともなひ申さん、きん平聞て一とならず二どならず、竹つなのかんけんにそれがしもほうどもてあつかうたり、たまゝおにゝなりたるおもひでに、心のまゝにふるまはでこぶんと打つれんなたからの山に入ながら、てを空しくするにひとし、あらもつたひなの事共やと、こくうにこそかけ出る竹つなみてやあきん平くゝと、よべ共くゝかなわす、いざさらば我くゝもむかはんたれにても、公平にゆきあひなばかまひてはなれず付そひたまへ、申まではなけれ共てきをあな取、おもはぬふかくを取たまふな、いとま申てめんくゝと四方にわかれ、行あふ物をさいわいと、あなたこなたにてばひ取三重みやうじんのやしろにこそはこめにける、おやをとらるゝ物も有、一人もちたる子にわかれ上下

なげきさけびける、あまりやるかたなきまゝに、らうにやくなん女かうせんがやかたに相つめ、そせうのよしを申せは、がうせん聞もあへず家のこらうどう引ぐし、きろく所に出にけり、時にとしよりたる物共すゝみ出、まつらくちうのへんげの次第、をくはしくあひのべ先年も、うちのはしひめと申へんげ、わうじやうにきよらいいたし、ばんみんのなやませしを、らいくわうのみうち成、わたなべのつな一でうもどりはしにて打とめたまひ、それよりらくちうのろうせきひしととまり申候、今もつておなし御事にて候へは、何れにてもみうちの上に仰付られ、へんげ御たいじあつてたまはれと、皆一とうに打たへける、かうせん聞ておう／＼なげくたんふびんなり、らいくわがうわたなべ程の物をは、それかしは五人も十人も是有、たとひまけいしゆらわうがへんげ來る共なにかはもつてあますべき、こよひの内に必まへんたいししてゑさせん、あんど仕つて罷たてとく／＼と申せは、きせん一どに有がたしとよろこびいさんでかへりける、其後しんか共を近付、とかく事のひてはふゆう、うすきにたりなにとぞしてこよひの内

にへんげたいぢせしめん、すいぶんはげめかた／＼我も共に打いでんと、五人のらうどうならひに、くにわう、はちわう、竹わうとて大ぢからのわらは三人しう／＼九人思ひ／＼にしやうぞくし、二人三人つあひ別れ 三重かなたこなたとうかゝひける、されはにや三人のわらは、一やうにくろかはおどしよろひをき、おもひ／＼の太刀をはき五でうのはしを心ざし、ゆらり／＼とあゆみ行、此所にはみうら竹ちひかへしか此よしをみるよりも、すはてきこそきたりたれと、たいまつばつとふりたつれば、こたいくはゑんにかゝやき、ひとへにきゝよのことくなり、三人の物きつとみて、くだんのくせ物爰に有と、てんでに太刀をぬき持打てかゝれば、二人もつてじやう取なをし 三重ひじゆつを盡してきりみだす、しばしはしやうれつみへざりしに、國わうあまりにいらつてつつと入るを、みうらひつはつし打ければかうべみぢんにくたけける、はちわう是をみて走りかゝつて打を、ぬきうちにはらひければ、こしのつがひを打はなされ二つになつてうせにけりあとにつゝく竹わう、太刀をまつかうにあてむ二む三にかけ入るを、

二人共に、ひらりとばづしさうのてを取、りやうはうへひくほとに、さゆうのうてわきつぽよりもひつはづし、さうへぐわつとのけは、たちすくんでぞしにたりけり、二人な打取所のくびこしにはさみ、まつことはしめよしとなをしもかたきをまちいたり、爰にまたがうせんがいつきとうせんとたのみたる、まつしま平藏さだとしいきりのちうたたねうち、兩人共に物のぐこぐそくさしかため、しらえのなきなたひきつえにし、とうじのらしやうもんを心さし、あはれへんげにあわせてたべと、しんちうにきせいしゆんでめてにまなこをくばつてあゆみゆく、爰にさかたのきん平たゝ一人有けるが、是をみていしだんにあがりてつじやうをつえにつき、ふんぢかつてたつたりけり、二人の物共みるよりも、我等がねがひ是なりと、まつしまなぎなた取のべうつてかゝるを、きん平てつぢやうふり上げおがみ打にうちければ、らつくわのごとくちりにけり、あとにつゝいきり、きこうるめいじんにてかひくゝつてうしろへぬけ、よはごしをひきつめさそくにかけてはねたをし、こしのかたなをぬかんとするを、きん平兩のうでをてう

どとめ、めてのあしをさしこみゑいといふてはねかへす、いきりもかうのものを又はねかへさんと、ゆんでへさしこみめてへはね、ちからをつくしてもむ所へ、なかがり源六、是もらしやうもへんと來りしか、二人はけむこゑを聞はしりよつてたそとへは、いざりへんげにくみしかれけり、折合たすけよ心へたりと、きん平がかしらをつかんてくびをかゝんとする所へ、めてのうでをむずと取、まへゝかつはとひきたをし、二人がうへゑどうどのり、おにもおにゝよるべし、我こそしらずや、みなもとの、よりよしの御内成、さかたのきん平といふおになり、じたいげんじのならひにて、おのれらがやう成あく人をは、かやうのてだてをめぐらすなり、さいごのねんぶつ仕れとくひ一々にうちおとし、もはや此口へはてき來るましさらば所をかへてみると、かみきやうさしてぞはせにけり、さるほどに大將ひろたのにうだう一二のしんかと聞へける、ゑまの源内むねひろ、あき川藤太みつより、しうく三人二でう口のかうじくを、あなたこなたとめぐり一でうもとりばしへといでにけり、此はしにはうすいのさだかねいたりしか、あはや

とおもひたいまつふりあげればさきにすゝむは、何とはしらずにわうをつくりそんなるやう成物はつほうつきんをひきかうであとにつゝくは七尺ゆたかなむしやなり、扱はきやつこそ大將よ、こよひのしあわせは我におゐるといめたりと、ほうひつそばめつつと出れば三人共に心へたりとうち物ぬひてわたりあひ、爰をせんと、たゝかひける。すさまじかりけるあらそひなり、何かばんみんにすくるゝくせ物を、三人てきにうけぬれば、さし物のさたかねもひたいにあせをながしける、しかる所へ竹つなすへむねそのへんのまはりしか、太刀のをとに聞はしりよつてみればさだかねなり、二人ははつといふて一所になり、二人のらうどうゆんでめてへ打ふする、そのひまにさたかね入道と引くみいぬいにかつはとおしふせ、たかてこてにいましめける、かくてしのゝめあけ行ば、のこる三人もはせあつまりたがひのはたらきをあひかたり、本望をはたつしたりと、がうせんをひつたて君の御め<sup>さ</sup>にかけける、よりよし御免つきかぎりなく、それいとまとらせよ承り候と、くび水もたまらず打おとし扱取あつめたるらうにやくをは、皆々

ゆるし、みかとは都へくはんかうなり、天下たいへいにおさまりけるすへはんじやうめでたし共中く申はかりはなかりけれ

寛文五乙巳年二月吉日

八文字屋 八左衛門板

## やはき合戦

### 初 段

#### 四天王國々の探題に居る

さてそのうち人かいのしきさうたのしみつきてかなしみありつらきとみるもゆめのゆめたゝさため  
なきはうき世なりこゝにげんけの人々ほくろくだう  
のらんげきを事ゆへなくうちしづめきうち二年七月  
十八日にていとへかいぢんあり則二人のいけ取かく  
ひをはねわうぢをわたり世の中せいひつにおさまり  
たみのとぎしもしつかなりある時大將の御まへに人  
人をめされいかにかた／＼つく／＼とばんもつをく  
はんするにさんぬるめうゑいのころよりも此かたら  
んげきこくどにたへやらすばんみんやすきにきやす  
る事なし是只よりよし一人かちしよくなりせんする  
所あらかしめにとうぎいなんほくにたんたいをすへ  
せいたうかたく取おこなはゝ國々ゆたか成へし何も  
此ぎいかゝと上いありければきん平はゝかりなくす  
すみ出こは御でう共おほへすやすとのらんげきを一

とも御あやまちなくふみしづめさせたまふが御ちし  
よくとはいかにそやには鳥は八こゑをつけいぬはを  
のれかもんのまもる是それ／＼のやくめたりまつそ  
のこゝく侍はいくさをするがやくめにて御さ候はす  
やいくたひも／＼せんでうにのそまんこそぶしのほ  
んいなるへけれこくどにいくさたへなはうきよのな  
くさみなにか候はんいとよしなきかねての御けいり  
やくよろしからざる御せんきとさしきつて申上る時  
に竹つなすゝみ出尤公平の一げん一りなきにはあら  
ね共それらんしけゝれはたみのつかれくるしむたみ  
のくるしみはふ將の御ちしよくまつたいまでのきろ  
くのおもてはつかしく只御てうのこゝくたんだいを  
仰付らせ然べうそんし候としてごん上申上れば公  
平御いにそむく事なれはいろをちかへしてうつむい  
ていたりけりよりよし聞召兩人のけんぎよいつれを  
わきていひかたしさうほう共に尤其りそなはれり併  
此度は思立ぬる事なれはすゆるぎでうせしむへし先  
九州のだんだいには竹ち源太安元北國へは三浦わだ  
さへもんだためむね四國へは平井の清氏なんかいだう  
へはうすいのさたはる東國へはうらへのすへ宗とあ

いきはまりをの／＼御前を罷立 三重よういをこそは  
かまへける是はさて置其比源のよりちかきやうと申  
はけんしのちやくそんらいくわうの御しそくなりさ  
れは其生れつき人にすくれせいあくまでたかく大力  
のはやわざひとへにはんくわい長良もおもてをそは  
めはちぬへしされはようちのむかしよりあくきやく  
に身をゆたねしんきれいちしむの五つのみちにはつ  
れ萬みんのそんぼうし天下のわつらいとなりしかは  
らいくはう深くかんとう有ひたちの國かしまのうら  
にはいる有ついに御ふけう許されずらいくわう程な  
く御たかひのきさみ天下をは御しやていよりのふ公  
ゆつらせたまひそれより今よりよし公迄二代あいつ  
つきねんすすでに卅よ年か間よを秋風の下にみな  
しいにしへのあくきやくを引かへ一すぢにむせうし  
んに心を入れんのふこじとほうめうしかのもろこし  
のをんほつしかろさんにひきこもりしよりなをふ  
かくおこないすましておはせしにくはんらいうまれ  
つきたかくせはおこるにやすきならいにや有時てい  
せんのおみなめしかせにしたかいちるをみてはさき  
てそ花ちるものをわれは一じの春もなくかくむもれ

木と成ぬる事思ひまはせばむねんなりさすか家のち  
やくなんとしてそらにけんいをうはれ年月とおく  
りし事我身なからもさりとてはしよその外の事共  
哉よし何事もちせつとうらい我今年な五十一はしめ  
て天下をしるべき年のまはり今ならめへんしもきう  
に思ひたゝんとたちまちしんいのいかりたちをばに  
有ける大木をちうよりふつつとねちきり是よりちか  
が天下をとるへき打物也とふりかたげ佛前みちに  
打くだき 三重それよりつくばをさしてそいそかるゝ  
されはにや其の比みたの源太ひろつなと申はわたな  
べのつなか弟ふんふ二道のゆうしなりしかせん年ら  
い光御たかひの時あとの時あとのろんに付あに  
わたなへはよりのぶ公へ付ひろつなはよりちかとい  
身の心一すちにうきよをよそにみなしひたちの國つ  
くばのふともに引こもりいたりしか有時三人の子共  
をちか付らい光大江山のしゆてんとうしたいちの  
はなしに付わたのらもしることくなくゝよりちか  
卿に御むほんのすゝむるといへ共さらに御せういん  
ましまさすされはとていたつらに花なきさとのうも  
れきとくちはてんもくちをしいさやなんちら一すち

に思ひ立一めいをど中にして末代迄かうめいをと、  
めんいかに／＼といくせんきとり／＼なり然所に  
よりちかつくばになれはいづくかひろつないへな  
らんとかなたこなたとかいう所にしはおひむすふ  
くさのいほによにもたかきこゑにてはなす扱はと思  
ひゑしやくもなくすんととおひ上さにむすとさした  
まへはひろつなとおろきこは存よらさる御出や此間  
はとかくまぎれ御みまい申事も候はず何とやらん御  
けしきつねとはかはりてみへさせたまひ候か扱いか  
なる御所存や出来申候れんのふ聞たまひされはこそ  
とよ内々御ふんかすゝめしか共みかとのちよつかん  
父のふけうをかふむる事一かたならぬいんくはなり  
何かうきよにかゝはらんとふつうに思ひ切年月せう  
いんせさりしが未あくゑんつきさるにや俄にかうく  
はさかんにてくれたんのあらまし思ひ立て来りたりば  
んし御へんにまかするなりひろつな聞てよにうれし  
げ打うなつきま事に某すねんすゝめ候へ共ついに御  
せういんもなくきみもはやなかばすすきさせたまふ又  
それかしもかくらう人と罷成候事ひとつのざんねん  
是にすぎずされはらい光御たかいの刻某かあにて

候わたなへのつなに君の御事をさま／＼に申しか共  
ほうせう公時さた光すへ竹四人のものにとうしんい  
たし御ゆいこんはそむかれすといによりふをふ  
將にそなへし事今においてさんねんはるゝひまもな  
くひろつな一門ほうはいとふはになりかくかんきよ  
のすまい仕るもしかしなから君の御ゆへしかるをも  
つて其御心入もなく打過させたまふ事さりとては御  
なさけなし年のよるに付ても子共とをいたつらに  
其なも人にしらせすくちはてせん事あまりむねん  
にそんしせめてわたくしのきやくしん成共おこしこ  
くとを心のまゝに切みたしおや子四人せんせうにま  
くらをならべんとそんじかふだる所に思召たゝせた  
まふ事いまたひろつながぶうんなつきす候承れば某  
かおいにて候みたの竹つなをとうたいふそうのくん  
しやとかしつき公時か一子さかたの公平と申小くは  
しやを大力のゆうしと諸人きじんのことくに申なら  
はし候さつするにしやつはらかぶんさい父共かわか  
さかりにいかてかおよひ申べき年よりたる共某かざ  
いおつ取子共ともをはなち合てはたらかせんにたれ  
かてにたつものの御さるへき其上君のふゆうにかた

をならへんものおそらくは日本にはそんなせす五十日か百日の内には天下いつとうに切したかへゑいくはのまゆをひらかせたまはん事なんのしさいか候らんそれ〱御かはらけと君にもいわうて三ごんすゝめ奉我身も三はいさらりとうけなかしはんとうかいとうのふれ状態をしたゝめさせいかにかた〱此度こそりやうかうじりやうのあらそひ天下わけめのいくさ成へしといさみにいさむひろつなかしんてい上下はんみをしなへんみなかんせぬ物こそなかりけり

## 二段目

おだはらかつせん

其後かくて國々へくわいふんしきりにまわりければうつれはかはるよのならい此年月よりよし公のかうをんにてさいしをはこくみ身をたてしともからもよりちかの時のふゆうにやおそれけん又ふかきよしみをやりたいけんひたちしもおさあはかつさいつかみそうしてはんとうのはちへいしむさしの七とうをはしめとして我も〱とはせあつまりむねとの大名三百よ人したかふくんせい十萬よききらはしのこと

くくんのなしてしかうする大將よりちかはあかちのしきのひたゝれにむらさきいとよろひしらあやたゝんではちまきしこかねつくりのたちあしをなかにむすんでさげざいおつ取しつ〱とあゆみ出くんせいにしきたいあればみたの源太ひろつなはくんはいうちはてにもちゆんでの方にひかへけるま事にききとう〱たる有様よりよしの天下をうはゝんものは此人成へしと諸人いよ〱あふきける時にひろつなひさたてなをし承ればすへ竹かちやくしうらへすへむねとう國のおさへとして此程するかの國へげちやくするとふうぶん仕候まついくさかみのかと出にきやつめをふみつぶさせたまひ然るへう存候とくとくとすゝむればよりちか聞たまひ尤其きよろしかるへしぢこくうつさすうつたてと大てからめて手わけをなし諸くんせいをいんそつし三重するかをさしてそいそきける是は扱置うらへのすへ宗はとうかい道のたんだいとしてすんしうふちうに下向いたせしか此事を聞よりもいへの子郎等を近付我ゝにのおさへとしてくたる身かけつくきやくしんに城へ取かけられてはまつたい迄のかうなんさきんするときは人

をせいするにり有といふくんほう此時にあひかなへりさかよせにをしよすへしいそいでよいいたせやとつかう其せい二萬よきすんしうをうつ立ひたちの國へとおしよするたかいによする其せいそうしうおた原にてゆきあいすはや是よと兩方そなへを立なをし三重時こへをそ上にける時のこゑもしつまれはみたのひろつなこましく／＼のり出しあふみふんはりつつ立上りそも／＼是にひかへさせたまふは事もおろかやせいわ天王の五代のかういんせつつの守らい光の御ちやくし山城守源のよりちか公にて御ざ有<sup>本ノマ</sup>末其けめうしつめうはしらね共方々もさためて一けの御けにんなるべしれいきを思ははゆつるをはつしかうさんせよかくいふはわたなへとうのはつそんみたの源太ひろつななり某はちしゆんちよくにあいまもり惣領を惣領にあふぎ奉らんためわが身をすてす年いなかゑひすとなりはて今は春くさともへ出るしんきもしらぬやつはらあにほこさきにおよはんいそきたいさん仕れいかにいかにとよばゝりけるすへ宗此由聞よりも何みたのひろつな殿とやげに承れば事なる御いちげんみゝにとゝまり候なり尤も申さるゝ

ことくよりちか公は源氏のちやくそん我らがしゆくんよりよし公はぢなんのなかれたれしらぬものあらんたゝし惣領にて有ながらちなんに天下のふ將とられたまふ事はよろしからざる事共なのりて我といちをゑるあつはれむやうのかうげんかなまつたらい光の御ゆいこんにまかせいへにつたはるしんかみなよりのふ公へつく所に御ふん一人けんじん立なるふせいにてうきよをよそにみなす事けんにはあらでくにんなり忝くもわが君はちよくめいをかふむりせいの大將ぐんそかしあしくしてはちあたかなと<sup>本ノマ</sup>かく物ないわせそけちらせとさいしきつてふりたつればかたきもそなへをたてなをし兩ちん共に入みたれおつつまくつつ火花をちらしてたゝかいけるたつのこの初よりひつしのこのおはり迄十一度のかけ合に人馬共につかれはつさうほうよりものみのむしや馬のりまはしたかいゝくさは明日とやくそくしあひ引にさつと引よりちかはいつしきてそはにちんをとれはすへむねはいたはしゆもとにそなへをたてたかに今日のいくさ物かたりし何もつかれを<sup>き</sup>あいのふるこゝにみたのひろつなかちやくなん平太兵へひろ

のりは力人にすぐれ打物取てのめいしんその身ぶゆ  
うにかうまんし打こみのいくさ一ゑんにこのますひ  
めもすのたゝかいをよそみていたりしかてきみ方引  
をみてさいわいと悦そつとぬけ出ひつかへしすせん  
の中へ只一人ゆらりくゝとあゆみゆきま事に一きと  
うせんのゆうしたくびまれにそみへにけりてきいん  
に成しかは高所につつ立上り是はわたなへのつなか  
弟みたの源太ひろつなちやくし平太兵へひろのり  
なり元來生れ付たるくせとしてみかたにつくせ  
いの有かきらいにて今日もすかどのかけ合をよそに  
みて候ひしかあまり人のいくさするかうらやましさに  
御つかれをもそんせすさんかういたし候心あら  
ん共からはけせういくさにかけてひろのりかた  
ちさきちつと心みたまへとかうせうによはゝりける  
いのちそなへにはあふみけうし山本かしはさ二千よ  
きはや川口のきみはにさうてひかへしか此由を聞よ  
りもあつはれたる<sup>本ノマ</sup>かうげんかなあますなと云まゝに  
一どにはつとかゝるをすへむねさいふりあけておし  
とめかたきけせういくさとこのむにひろのりのふるま  
ひせんなししんせうに仕れ承り候とひつ中の守國ひ

てもよきにをいのはらまきにいか物つくりまつこう  
にさしかさし物かすならぬ備中の守是に有あまり心  
ことはのすゝしきにけんざんとうつてかゝるをひろ  
のりつと入よこて切に弱腰を二つにとうとなきすへ  
けるちやくしかつ王此よしをみるよりもわかれの泪  
そでにみち小太刀かいこみかけよるをすへ宗それせ  
いせよととゝめさせ心さは尤なれ共おことはふん  
さいにいかておよはんしはしゝとけちすればかつ  
王聞てこはなさけなの事共や人のしめいはきはまり  
有まさしくおやのかたきをよそにのみみてややみな  
んかつらきの神もせうらんましゝせこゝをばなせ  
とひかへしものを切はらひ一もんにかゝるをめてへ  
ひらきあへなくもくひ水もたまらず打をとしむさん  
成かな此わかかは七歳よりひゑい山にてあひそたち三  
千ほう第一のちご今年な十六歳さかりの春をいたつ  
らにはうしやくふしんのひろのりがてにかゝり一し  
のらつくはとちりにけり大將をはしめとして何もひ  
たんのなみたせきあへずめのと子のみかけのせん  
し是をみて二人の主のかたきたとい今生にてはしそ  
んする共一ねんのあつきともなり二世の間にはもう

ねんのさんせんむ八まん大ほさつとはかみをなし  
てとうど打を二打三打うちなかしもつてひらひて打  
ければかたさきそはらのけす二つになきすへられ  
本ノマ、  
ゆんでめてへさばけるすへ宗みておゝくま川しま  
はなきをくれたりくとははれは畏て候とおふく  
ま七郎もりとし河嶋十郎忠光系物くをひつさけひ  
つさけ立出るきりやう骨柄是そうらへの家のかうけ  
んほまれをあらはすむしやならんとならのぬさきに  
さつしける二人きつとみてつつと入てひつくみをし  
ふせんとするにひろのりさらに事共せすおのれはら  
かうでさきに何かはもつておよはんさいこのくはん  
ねんいたせやとさうのわきにかいはさみ力にまかせ  
しめければ五たいちしをにそまりあけになつてうせ  
にけるすへ宗今はこらへかね一もんしにとひをりし  
を有あふ物共すかり付大將の御身として有べき事に  
も候はす只たせいを以て打たまへすへ宗聞もあへす  
某是に有なからかれをたせいにてうつならは四天  
王と云なはながくすたるへしそこたちのけとしつ  
しつと近付いかにひろのり是そうらへのすへ宗なり  
おひたしきはたらきかんし入て候とてももの事に一

たちひけん仕らんひろのり聞て我一人ぬけかけいた  
せしも御へんにかうがんせしめんためまづのそみは  
たつし候たがいのせうぶは時のうんにそ候はんすは  
まいり候とたちを天にひびかせ三重こゝをせんどゝ  
たゝかひけるたかひになをゑしゆうし共しはしせう  
れつなかりし所にひろのり少上てに成只一うちとな  
ぐりつくるをすへ宗めてへとひよこて切にはらはれ  
のつけにかへす所をすかさすくひをうちおとしたち  
のきつさきにつらぬきあつはれなんち一人にておゝ  
くのものをつたせぬるそむねんなれされ共はんいは  
とけたりとみ方のちんへひつかへすすへ宗かはたら  
き大かうふそうのゆうしやとみなかんせぬものこそ  
なかりけり

### 三段目

うらへのすへむねさいご

其後兩ちんあいさるそのあいむげにちかければひろ  
のりか打死よせてのちんにかくれなく父ひろつなは  
やくも聞付しうるいはとんとかぎりなくちなんみた  
のちくはんもりひろ三なん竹た丸を近付か様くの

次第なり扱てもせひなき事ならずやとなみたをはつら／＼となかせは兄弟もこはそもいかにとしはしかきくれいたりしかおつるなみたをおしとめそれおなし兄弟と云なからわれ／＼三人はよになしものゝくせとしてちやうほ一所にあいそたちへんもはなれずもふとうへたつる心なかりしにいかなる所存にや只一人ぬけふかくの打死あたなからもうらめしやよしそれは共かくももくせんあにのかたきを一じもあん<sup>と</sup>とするは二人のものかおくれなり只今すへ宗かくひひつぎ参けんさんにいれんとはしり出るをひろつなとつておさへ何をはやるそわかもの共是や此なんぢらは五十ほにはしるものか百ほにはしるものをわらふといふにひとし只今兄ひろのりかしにさまをふかく成とそしりしくちの下よりもあいもかはらずをなし様に物にくるふ事やあるされはこのくさは未まことのかすにてかすならす都に大事のかたき是有其せんとにたゝすしていぬ死するは人ならず然るにひろのりめ某かつね／＼をしへしくんりよにそむき家のなまてくたす事くさのかけにてもきけ七代かけてかんだうそわとのらも父かけちにそむくにおいて

はおやとな思ひそ子と思はじいか様にもまかせよと大ひけをなてあけ／＼大いきついでいかりける兄弟のもの共いさむ心の身まかすけにあやまつて候共かくとも仰にはいかてそむき申さんとおつしんで畏れはひろつないろしをなをし扱はふしのちきりつきさ<sup>本ノマ、</sup>りきいこも其むねほつすべしと申所へ大將よりちかてほこつて立出ひろのりか打死只今聞ておとろきたりあつたらしきわかものをあへなくもうたせし事のはかなさよさぞかた／＼むねんにそ思はんひろつな承そんねんのたん御すいりやうにたがはすいかにもしてかたきをうたんはかりことをくふう仕候なりよりちか聞もあへずくふうとは何事ぞひろのりをうたする上はあすをまつへきいくさにあらずこよひの内に山も川も一めんむせうみちんにかけこみ其すへ宗かくひ引ぬかずはさんねんはれましきいで／＼よりちかさきせんとすんとたつを引とめ今に日本の大將とならせたまはん御人のよにかろかるしき御所存かな何事も只それかしに御まかせ候へつら／＼明日のかつせんのてたてといつはせん日のかけあいのことくまつそうほうたいじんせしめ一

かせんどつと合よは／＼と引ならはにくるはおふに  
しかざるくんほうとかつにのつておつかくべし時に  
かねてよりみ方のせいをさきにまはしいつくにても  
みちせはき山の上にたいせきこほくをならへおきか  
たきを思ふずへ引よせかまへおきたるいわかんせ  
きをつるべおとしに切てなけたゝよう所をおつ取ま  
はしせめふせ／＼うたんにやわか事の御さ候らん此  
ぐん法はこわうのしんかこしよかゑつものぐんせいを  
くわいけい山へたばかり入一じにもみしはかり事  
されは某かあににて候へしわたなへのつなせん年  
やまとうちのかうりのいちらんに此うつしを以てす  
まんのかたきをそくぎにくたき大りをゑたるけいり  
やく今以とうじたり是をねをつよふしてきをもら  
さぬはかり事いかに／＼とさもいさきよくあいのふ  
ればよりちか大に打うなつきげにこふんかさつする  
たん時におうしておもしろし某はなん所にまはりし  
たくをかまへあいまたんかまいてかたきをたばかれ  
やとひろつな兄弟の子共をさきとして五萬よきを  
引ぐしうはてをさしてまいらるゝひろつなは其よの  
明るをまちとつくとあいづをきはめよくじつのみの

こくに 三重できちんさしてそおしよするされはにや  
すへ宗はびめいよりそなへをたてゝあいまつ所へと  
きのこへをそ上にけるたにみねひゝきておびたゝし  
すへ宗かたよりはかけあはせんとしきりにすゝみけ  
れ共ひろつなよりちかのしたくのたんも未をはつか  
なしとあなたこなたとしこくうつしちふんよしと  
ざいふりあければ 三重一とにとつとそかけ合たゝ  
かふていにてとつてかへし引ければうへより大せ  
きこほくをひつかけ／＼こんりんさいへとおとしけ  
るたゝりんほうのかいこをおすに事ならすせんちん  
ごちん共にあへなくしをそとけにけりすへ宗みて  
力なし／＼此上はあとそなへを以て一せんのはけま  
んとしたてにひかへしこぢんのせいをさしまねくに  
たちまちてきにいのをのまれ天かける鳥のわしのつ  
はさにかゝりちをはしるけどものしゝのはがみに  
あふことくちりちりになりてはいほくすあさまし  
かりし次第なりすへ宗しきりにはかみをなしゑゝいゝ  
かいなきやつはらか有様かなすへ宗が一世のきは  
まりこゝなりくはんらいをたゝせはおなし一けのし  
ゆくんなれ共今は君のかたきなり大將よりちかゝみ

たの源たひろつなか二人か中に一人はあまさし物と  
たつなかいくりはせんとするに只今おちたるあをめ  
の石道をよこ切<sup>き</sup>けて有すへ宗はやる心のはけしけ  
れは是をさらに物共せすらんな天に有なむ日天とこ  
ゑをかけてとはせけるにちうにてけしとみまつさか  
様にたをれ主は馬にしかれるかものくしやと馬  
の兩あしむんと取てきの中へなければ一どには  
つと引にけるすへ宗なをもかけいらんとよろひゆり  
なをし身つくろいする所にみた兄弟大せきを上の上  
よりなけかけけりさしものすへ宗いぬいにとうど打  
たをれすてにかうよとみへしか又ゑいやつとをきな  
をり上の方をきつとみてそはなる石をおつ取とう  
の石を打かへさんと心はたけくはやれ其馬よりおち  
し時こほくてむねをつよくつきたいせきにてそはほ  
らよはこしうちひしかれなにかはさのみたまるへき  
もつたる石をかしこへすてありし所にとうどたを  
れあらくちをしやさんねん今は是迄ひとりむしやや  
さたかねかさいこをよにいひかひなく思ひしにわ  
か身のはてはなをそれよりはおとりたりさてもく  
此度は天下わけめのいくさならんにやみくとかい

本ノマ、  
んせんどの御ようにたゝさる事のむねんさよよしよ  
しかはねはくつる共たましゐはれいくとして君の  
御馬のさきをはなれし物かたきをうたすしなん事思  
へはく口をしやとたゝんくとしけれ共しだいに  
せいきみたるれはみゝれんなりいつまてとさしそへ  
するりとぬきゆんでのかたさきよりめてのそははら  
までかきをとし刀を土にゆりたて卅八を一世として  
秋のもみちとちりはてけるすへ宗かさいこのていき  
せん上下をしなへおしまぬものこそなかりけり

#### 四段目

##### 公平竹なこうろん

そののちよりちかはて合のかつせんことゆへなく大  
將すへむねかくひをまて取ぬれば門出よしとよろこ  
びはやおこる心いやましにたみ百せいの家々におし  
こみちん取させあをたをからせまくさとしとうしや  
ふつかく打やふりちうほうちう物は取かいにまか  
せてふるまへはそうそくなん女此人天下をとりたま  
はゝわがてうに人あらしとなけゝ共よりちかさらに  
聞入すかくいふものをはめしとつてくびをはねあく

きやく日々にいやましとかくへんしもはやくていと  
に上りよりよしめがくひをはねばんししよぞんにま  
かせんとしよぐんせいにおつつけ上らくとあいふれ  
三重上下よういといそぎけるこゝに又すへ宗がいへ  
の子よしたの二郎たかみつといふものありくわんら  
いぎをまもる侍なりしがせひなくたせいにへだてら  
れしうのさいごにあはすしていきうをさへかたし  
され共心さしつよきゆへすへむねかくひこくもんに  
かゝりしを一めいにかけぬすみとりひたゝれにをし  
つゝみふるさとするがをさしてぞ上りけるくにも  
なればすぐにやかたにまいりかやうゝと申上れは  
北の方さながらゆめの心ちにするゝとはしり出  
一めみるよりたをれふし是はゝと斗なりおつるな  
みたのひまよりもくときたまふそあはれなりそれ弓  
とりはうつもうつるゝもゆめのたわむれなげくまし  
とは思へ共かはらせたまふ御すかたみれは思ひの  
みたれかみよにゆゝしかりし御よそをいわつかの間  
に引かへ御めふさかりいろへんしさながらそれ共思  
はれすあらなさけなのうきよやとくひにひしといた  
きつき又さめゝとそなけかるゝむさんなる哉わす

れかたみのくに王丸今年な九つ物のわかちもしるべ  
きまてにはおはせね共さすかすへ宗か子とてさかし  
くなう父上はうたれさせたまふなかつたきは何と申そ  
國はいつくてさふらふぞとてまもり刀のひほをとき  
こくうにはしりいつるを母上たもとにとりつきやさ  
しのものゝ心かなさてもやさしのふるまいやけによ  
のなかにもつべきものは子にてありおやならす子な  
らすはたれかかくはあるへきそ只今の其有様父すへ  
むねのみたまはゝいかばかりよろこひたまはんは今  
は此よになき人の残るはかいなき母斗いつしかみな  
し子と成ぬる事のふびんさやかたきをはや郎等共  
か打たるそこなたへこよやくに王とて又くひにすか  
りつき身もたへなんとそなけかるゝ義みつ此よしみ  
まいらせ御なけきことはりなれ共かへらせたまはぬ  
してのたひ只御けうやうにしくはなしそれかしはへ  
んしもはやく此事をていとへうつたへ奉らんみれん  
なりまつこなたへとかいゝしくもみたいわか君を  
はかたはらにうつしまいらせ其身ははや馬に打のり  
三重都をさしてそ上りけるされはにやくはらくには  
くはんとうらんげきの次第はやさきたつてきこへを

の〱御所にあつまりないきひやうでう有所へ高みつ都にはせつきすくは御所にあかりいくさの次第すへむねのさいこのてい一々したいにうつたへければ大將をはしめいつれもすへむねは打死と申かとみなみななみたはせきあへす中にも行つなは心ほそげなるふせいにてげに弓取の身の上ほとさためなかりし事あらしむさんやなすへむね此度都をいてし時それかしと公平とたゝ三人一しよによりあはれげにわか君ほと御くわほうよろしき御事よもあらしあめかしたに其名をゑたる五人の物をあいならへもたせたまひ其内二人かけぬれば又二人のよつきしゆつたいする竹つなの一子もおつつけ上らくいたすべし只きん平に子のなき事こそしやうしなれそれかしか子も今年九つ此度の上らくにはかならずつれて上り申さん何もぶけいのわさ取かいてたまはれと申せしものはいつしか昔かたりとはや成てのこれるは事のは斗りなりそれかしと〱せしめなはそのくはいけいざんのはかりことなとをはむけ〱とうけし物思へは〱くちをしやとこふしをにぎりきばをかみとうざいくれてそなきにけりきん平なみたおしとめま

事にそのことばいつしかかたみとなりにけりすへむねとあいなしみことかりそめとは思へ共はや廿四年のちなみなり二代のほうばいのちぎりもいつの花ざかりはやちり〱になりにけり是もかたきのゆへそかしすてに公平かゆふりきはいつのためのようそやかまいて〱竹つな只今御前にて申なり此度のかつせんをはそれかしかぎにまかする間かんげんたてはしたまふなまつ我一人さきに罷下り一あてあてゝみ候はん何もはあとよりおつ付たまへおいとま申候とすんとたつを竹つな引とめいやとよ此度はよのつねのいくさにあらずそのぎいかにと云にみたのひろつなはそれかしかおやわたなへと兄弟弓やのどうかくにて大かたのくんしよつまひらかなり並に其子共ともいつれもふゆうのたつすと聞及候其上大將よりちかきやうぐんにするゝ大力はやつてけがはしせらるな某とつくとあいばかりきんげつふいなるやうにさうばついたし申さん先くわいふんをもつて御き内のせいを御もよをし然るへう存候とこん上有きん平聞もあへすから〱と打笑いそのひろつながくんほうも又よりちかか大力も時により人によるべし此き

ん平にあふてはちつとでかね申さんとかく二人のもののひつさけきたらねはいふ所くわんこんにたりしはしまたれ候へとさへきつてかけ出れ共竹つなさらに  
はなさす此度はわとの物にくるう共ゆめくもつて  
はなつまし御へんがあらきも人によるべし此竹つな  
にはむやく口たてふさかつてせいすれは公平あまり  
はらにすへかねおほへたりくてきの大將よりちかは  
せんぞのしうひろつなはおちなりさるによつてし  
んなかたきと一所になりわざとのひくのせんきし  
その内にくわんどうせいをみやこへひきいれんとの  
斗事とおほへたり此公平かみるめはちつ共ちかふま  
しいかにわか君様こんとのいくさに竹つなが申事を  
御せういんましまさはかならず御あやまり候へしい  
かに竹つな御ふんな都にのこつて御るすしたまへ某  
は君の御共仕りきうにはつかういたすなりとあらゝ  
かに申ける竹つな大きにりつふくし事もことによる  
そ某ほと侍を二心とみるはあつはれ兩がんつぶ  
れたりそれ人のうたがひをうくる程よの中のちしよ  
くはなしけにもひろつなおちをい御へんかさつすも  
ことほり也かのゑんの國のてんくわうかけいかう

たがひをうけすもゝの木にてかしらをくたきせし  
事たいこくなれともきたいのけんをつたへたり小國  
なり共竹つな日本の正ろのみちたゝさんせうはくの  
あをきいろはしもの後にあらはれんといひもあへす  
ていせんにとんでをり大石を引うこかしこうべをく  
たかんとするを人々あはてゝおしとゝむるされ共公  
平はきかぬかをにもてなしそらうそふいてそいたり  
ける大將御らんし天なるかなやゝこくどのまれも  
のとなにしあふたる五人の内三人あいはてのこる二  
人なさやうにわたくしのしゆくいをもつて大事の  
せんでうをみすつる事はかたゝかあやまりにあら  
すひとへに諸佛神我をはつしたまふ所なりながらへ  
はちをさらさんよりよりよしめんゝかさきにた  
つぞしうゝのちきり是迄と御はかせにてをかけた  
まへは公平も竹つなもこはいかにと取付御ことほり  
にて御さ候我々かあやまりとかう申上んやうも候は  
す世に御もつたいなき御事とこととはをつくしとゝめ  
奉れはよりよし聞召我かたゝのかんげんにもよる  
べきにあらずちかいとゝまらん間兩人へちぎなきよ  
しせいこんいたされよ畏て候すは八まんも御せうら

んましませまつたくへつき候はすよしなきしんいの  
 いかりゆへごきけんをそんじ奉る事天のせうらんも  
 はかりかたなく御さ候と御前共はゝからすこゑを上  
 てそなきいたり大將御けしきをなをさせたまひ近比  
 しうちやくせしめたり某かしんていをよくあんして  
 みたまへ五人の内三人あいはて今はかた／＼斗りな  
 れはたかき山ふかきうみ共たのむに二人か中ふはな  
 らはよりよしうきよに有てもせんなしと一すぢに思  
 ひさためししてのみち二度此よにかへる事いまたう  
 ち神八まんすてさせたまはぬしるしなりかたきたい  
 しせん事うたがひなしはやうつたてとゑいち二ねん  
 間十月廿八日にわつか一万七千よきいんそつしはな  
 の都をうつたちとうこくさして下らるゝよりよしの  
 御所存竹つな公平かしんていゆゝしし其中／＼申斗  
 はなかりけり

# 五段目

やはぎかつせん

其後よりちかはさんぬるおだ原かつせんに打かちて  
 のちはなひかぬくさ木もなく只一めんによを日につ

いて上る程にせんぢんはみかはの國をさき今むらに  
 つけばこちんは末やはきおかさきにみち／＼たりす  
 てに都せいおほりのくにかきてらまてげちやくすと  
 きくさらはこゝにてあいまでといつれもやくしよを  
 かまへける時にみたのひろつな大將のまへにひさま  
 つき此度もてきをざんしにくたき申さん其てたてと  
 いつはまつはちへいぢのともからはかち立にあいな  
 れたれは是なるしたていかにもひそかにひかへあい  
 ずのちこくを待れよ扱某はあれなるたかみにそなへ  
 をたて候へしされはよりよしの御内のもの共は何も  
 けつきにいさむものおほきと承れは是へとりかけ某  
 かはたをみるならは我さきにとうつてかゝるへしそ  
 の時此兩方のかやのに火をかけさきをはやくうちに  
 いたしごぢんをはしたてのよこやのせいにてつきく  
 づしあとさき引つゝみたゝ一時にもみつぶし申へし  
 是ぞかふうのしんかせいなんのたせいをほろほせし  
 くはふくりうしやのぐんほうさためて聞召およひた  
 まふへし此度御らん候へとそのりはつめいにあいの  
 ふれはよりちかほとんどうちうなつきげにおもしろ  
 きちりやくかなとかくくんにやは御へんにまかすな

りいか様にもあいはいからへ畏て候とくだんのことく  
そなへを立よせくるかたきを 三重今や／＼とまちい  
たりけにもはけしきけいりやくより吉の御うんこゝ  
にやまさにきはまらんあやうかりける次第なりあんの  
ことくていとよりの打てのせい二てにわかりてお  
し來るせんぢんはことにはやりきつたる公平あふぎ  
ながしのはたをみてすはあれこそみたのひろつなが  
しるしなりすへむねかけうやういまぞほうせんとう  
んせいにけちをなしかけいらんとするをたけつなは  
しりきてをしとめ某都にて御ふんともんとうせしは  
こゝそかしあのたかみにはた一なかれおし立さゆう  
にかやのゝみちをかまゆる事かんのしんかせいなん  
のくんせいをうけたりしくはふくりうしやのくん  
はう是なりしたての方にはよこやのふせゝい有へし  
いかにきん平御ふんのゆふ力はいつのためそいわく  
わんせきをくつしかけしよそんにまかせうちふせた  
まへといゝもあへすそはに有ける大石をひつかけひ  
つかけうちければらつくはみちんになしにけるちり  
やくのほとこそゆゝしけれ過しときの小田原かつせ  
んのおくれをはこゝにてまさしにしかちけるとかち時

とつとあけ 三重しはらくぢんをそとりにけるかたき  
はうたれて音もせずひろつなおほきにはらをたて扱  
は竹つなめ此くんほうをさうでんせしをしらすして  
もりかへされしくちをしさよ此上はおのれはら一人  
もあんのんにてはかへすましとくんせいにけちをな  
し川よりむかいへ引こしやはきのかはのはたにわさ  
とこせいにてしとろにそなへを立殘せいを四方のく  
ほみにかくしける其時竹つなあいちかくかけよりそ  
なへのやうをみわたしあふきを上て公平をまねき此  
川の水つねよりもでぬるくなかれにはかにかたきの  
せいこせいにみゆるはいかに公平きいてしらすとこ  
とふ竹つな是は川のなかみをしからみにてせきとめ  
こなたのせいなかばわたしたる時くだんのしからみ  
を切てすてどつとつきながしむかいへこしたるくん  
ひやうをはかくしせいにて取こめうたんとてたて  
なりあのくもひのとりのすくるようをみたまへふせ  
せいの有上はわきへきれてとひ候兵のにふせばき  
がんつらをみたとぐんしよにつたへしはあれなり  
いこのためよく／＼みおきたまへの山にてもさにと  
ても鳥のよこ切その下には必かくしせい有しるしな

りといひもあへすたかき所につつ立あかりみたの源太ひろつな殿へちと申たき事有と大をん上てよはれは源太聞てひろつな是に有何事成とうちはひつさけ出にけり竹つなみて是はわたなへの竹つなにて御ぎ候そもくよりちか卿は年頃思ひ入られたるとうしん只今なにとしてにはかにさめたちまちににくしひの衣をぬきしやけんほういつの物のくをちやくしたまふ事こそあさましけれ又御ふんはもはやよはひかたふきあすをもしらぬ身のせんなきあくきやくをつくらるゝ事何様天まはしゆんのすゝめとこそはそんすれいかにくとははれはひろつな大きにいかりをなし何かく云は竹つなとやなんちおちにむかつて左様のぞうごんしんぎの程は思はすや忝もよりちか卿は源氏一けのちやくそんそかしれいぎをそんせはかぶとをぬきかうさんせよ只今までのあやまりをは某ゆるしてゐさんせとく御はた下にくはれとかうせうにのしりけり竹つなきゝもあへすま事に申さるゝことくおいはなをしの子のことしおちはおやにひとしことはをかへすもつまたいなけれ共身は君の御ゆいこんをそむき一もんほうはいとふは

になりりにそむくしんなれはおちにはあらでけとうなり尤よりちか卿はげんけのちやくそんなれは御はた下にまいりたく候へ共みかとのちよつかんの上父のかんとうかふむりたるてんかぶさうのあく人なを聞たにもわれはたゝなげかしきは御ふんよしなきむほんにくみし一もんのなまでくたさん事こそあさましさよとよはれればひろつな今はことはなくいやとかくのろんなむやく川をわたいて打てかゝれたかいのうつふんをはきつさきにあらわさん口にはにぬきたなしひくとははりけりたけつなきいて申さるるまでもなしもくせんのかたきなれは一おうのもんとうにもおよはすそくさにふみつふすへけれ共少ゑんににいたす事の有川上のしからみを切てなかしたまへそれへさん上いたすへしかくしおきたるふせいをもひらにいたされかへ此そなへは某かおやつなの太郎つの國かつら川にていたせしけいりやくよくはわすれすに思ひ出したまひたりさりなから竹つなこなたにあるうへははかり事にはのせられし心つくしにかさねては御むやうなりと一どにとつとわらひ三重みかたのちんへそかへりけるひろつな大き

にはらをたて扱もさてもきやつめに大事のちりやくを二と迄むになされし事をいのちよく是なり子供はなきか一かせん仕れといひもあへす川うちわたりたかき所にひかへければ兄弟の物共は一樣にくろかはおとしのよろひをき二人共にてつほうをひつさけたくひまれにすゝみたる兵をいかなるものと思ふらんけんしちやくりうのかしんみたの源太かぢなんみたのちくはんもりひろ同三なん竹た丸ひころをとには聞つらん今はちかし慥にみよいかなるふうんのとともからめ此ほうにあたりさいしに物を思はせんふびんさよとたせいの中へわつて入れちかいもみちかい 三重はらりくとなきにけりちこくうつさすくつきやうのわか物を二三百きての下にうちふすればさのみはいかてころうへきむらゝはつとちりにけり二人な少もてをおはすありし所にひつかへすたとへいこくのはんくわいか生れかはりて來る共たやすくはかなふましと右よにんこゝつてをそれける父ひろつなよにうれしけなるけしきにてあかけたりや兄弟なんちらかはたらきにて父か二度のおくれのちしよくはまさにすゝきたりいつせのかうゝ是にしか

しとて物事によりよしと竹つな公平か首取てわれにみせよ兄弟きひてより吉の内にてたつ物は候はすさかたの公平をおにかみのことくはんみん申ならはし候は鳥なきさとのこうもり我らにあいこは一てもいかて申さん御望のことく只今くひとつて御めにかけそれにてけんふつ候へとさもあふやうにかうけんはきてそひかへける然所へあいさばの源太兵へくにしけとてかんせきおとしのばせうのめいしん四尺あまりの大たち馬のひらくひにひきそはかたつなにてしつゝとのりいたす竹た丸きつとみていか様きやつか馬ののりやうはよのつねならぬていたらくひつさけ參申さんといゝもあへすつと入ひらりとりのくにしけかうでそばはらちきれよとかいつかみ馬のよはこしむすとはさみゑいやゝとおすほとにたいのめいばほねもにくもくだけつゝろくちにどうとふしければ主をはちうにひつさけあさわらつてたつたりけり時に六尺ゆたかな大のおのこいろきはめてあかくまなこみすみにきれたるかはつほうづきんひつこみ兩はのほこひつさけさかたの公平是に有みた兄弟の人々にけんさんとなのりけるもりひろ此由

聞よりも是そねかふかたきなれとはしりよつて二うちみうちてう／＼と合はうをすて、ひつくみけるもとよりもひろ大力さうのあしをひつからみゆんでの方へかはとなげくひみつもたまらず打おとしたちのきつさきにつらぬき此比きしんのことく聞へたるさかたの公平をはみたのちくはんもひろ打とつたりとたからかによはゝりけるおりふしきりのふりければ物のあやもみへされ共公平をうちとつたりと云こゑを竹つな聞つけこはなむ三ほうときもたましいも身にそはす泪をはら／＼となかにいかにみかたのぐん兵共公平すでに打死せりいつをこすべきいさそや竹つなもけふをかきなり其よし君へ申せとかけいらんとする所へ公平はせ來りやあ公平か打死には何事を竹つな大きにどうてんしか様／＼とかたれば公平聞ておろかなり竹つな某ほとん兵が左様にむけなる死をいたさんやそれはたうしうの住人市原九郎みつもとにて候はんかた／＼もそんしのことくのみつもと君の御かんとうをへすでにしさいにきはまりしを某申ゆるしほんりやうまであんとさするによつて其をんせうばくたいなりしせんの時

我公平となのりなあるふしとひつくみ一めいをきろにかけをんのほうせんとつね／＼申せしとき／＼つるか扱はうたれて候かはつかしの物のしんていやと泪をはら／＼となかし今は是迄と大たちかいこみてきぢんへつつと入むかしは公平一人今は源氏はんせうにつき公平こそは二人有いつれにてもかたきはきらいなしとかけ出るもひろきいてはつといゝてわたりあいうつつひらいつくはゑんのましへてせめたかいしかやゝ共すれはもりひろたゝき立られうけたちになりにつけり竹た丸こらへかねわきをつとふてうしろへぬけ公平かよはこしむんすとき引たをさんとするを心へたりといぬいにとうとすはりまへよりかゝるもりひろをこしのつかいを二つになししたにしきたる竹田丸を引よせくびふつとねぢ切ま事の公平がはたらきをみよとよばゝりみかたのぢんへ引かへす公平かふるまい只やくじんもかくやらんとみなおちぬ物こそなかりけり

## 六段目

よりちかひろつなさいご

さる程にみた兄弟の物共うたれければ父ひろつなお  
いの泪たへかたく大將の御ちんに畏てあらましをく  
わしくあいのへ今日は一すちに打死と存定め候こん  
生の御なこり是迄にて候とよろひの袖をひたしけれ  
はよりちか聞兄弟かうちしにのだんほいなしといふ  
もあまり有此上は某かかうへをはくぢんにさらすよ  
り外はなし必しでの山にてあいまつそはやうつたて  
と申所にきやくそう三人こつせんとげんし我々は  
是はくしうたいせんの方より來りたり定ておほへ有  
へし御へん十一の春より十八のくれ迄我々かほうを  
たつとみにはやのきせいおこたらすさるによつてゆ  
ふ力天下にしらせんと相まもる所に天りにそむく事  
あつてふりよに父のかんとうかふむりすねんはいし  
よのすまい有事我においてしんさらにはれやらす此  
度のきやくしんも我々かすゝめたり然はけふのかけ  
あい必くにのわけめたらん間かせいのためにあら  
はれたり心やすく思はれよ此きやくそう共か兩ちん  
のあいにはせむかいたといなん万きにて取かくる共  
てきと云物を一人もらくやうにはかへさしいちく  
に引きき木々の枝にさらさんと云かと思へはすかた

も忍へすなりにけりよりちかうれしき限りなく扱は  
我とし比ねんせしほう力のしるしは正にかうむりけ  
る此上はしんりんのいくさせんなし日本ないなから  
てに入へしめてたし／＼と大つゝたいへいかきすへ  
悦のしゆゑんはしめ 三重よにうちとけてそいたりけ  
りさる程によりよしの御かたにはすとのいくさに打  
かちしよ人いさみのいろをなし其日のせんちんはさ  
かたの公平てい兵三千よきいんそつしもみにまふで  
うつ所にをさきのかうと今村との間にて俄につちか  
せはつとふき來りさしもの大木共くんせいの中へ  
三重一とにこそはふきたをすすさましかりける次第  
なりたちまちそくさに打ひしかれはんしはん生のや  
からも有されともきん平はつたへをきしひしよのふ  
ち馬をゆんでへとはせあんかんとしてひかへしかさ  
もあれきたいの事共なり何様しさい有へしとこまの  
たつなを引むけんとするにまへひさおつてどうどふ  
しうてどもひけ共はたらかすこは天めいつきはてた  
りといそき馬よりとひおりむかふをきつとみはたせ  
は山ふし三人おのまさかりをひつさけうへと下と二  
ぎやうにみちをあいはさみあたりをにらんだあり様

は身の毛もよだつ斗りなりちよの物はをみばたちま  
ちきへもうすへきに大かうふそうの公平少もさばく  
けしきなく扱は只今の天ぐたをしはきやつはらがわ  
さにて有けるよと大をんあけなにものなれをのれら  
はかくわうらいをはさしふさぐぞしさいをのこさす  
はや申せとたちのつかにてをかくるきやくそうみて  
むやうなりむやうなり何とはたらく共かなふまし是  
ははくしうの住人なりなのるにおよばすよりちかへ  
のかせいとしていとよりのうつてのせいをふせか  
んため只三きにて此所をかためたりいくまんきにて  
とりかくる共一人もこゝをはとうすまじてなみの程  
をは只今よつくみつらんいつけのめつほ此度ならん  
とよばゝりける公平きゝあへす何はくしうの住人と  
や扱はほうきのだいせんにすむしやまんがまんの天  
く共にてあるらん人も人によるそこれこそはげんし  
二代のしんかさんかをめくる山うはに三代のぼつそ  
んさかたみ川の守きん時か一なん右京の大ふ公平と  
はわが事なりつう力しさいも我にあふてはよもいで  
しとゝめてみよとはしりかゝつてきらんとすれはこ  
うにこそはうせにけるこはしそんしぬるとはがみ

をなしてたつたる所にうしろよりたふさをとつてひ  
きあげんとするをさしつたりとはらひければ何とは  
しらすとひのはなとのことく成ばかいなかば切おと  
したり二人のきやくそう是をみて兩方にとひちかい  
うつてかゝるをむ二むさんにゆんでめてを切はらへ  
はかたうではがいうちをとされはんし半生にてにけ  
ゆくをあまさしとおつかけけれとも其ゆき方もしれ  
されば力及ばず切をとしたるはがいうてを取持き  
たなしかへせゝとのゝしりこくうをにらんでひか  
へけり公平か有様大系山にて石くまとうしを一みと  
めなを一天にあけたりし父きん時かふるまいにみぎ  
はまさりのはたらきやとほめぬ人こそなかりけりあ  
いもすかさす竹つな大將をしゆこしす萬きにてを  
し來る公平やかて立向くだんのていをかたれば君を  
はしめ何<sup>な</sup>きいの思をなしにけりさらはすかさす取  
かけよとよりちかゝ本ちんへ我さきにとをしよせ時  
のこゑをそ上にけり山かもひらく斗りなり時のこ  
へもしつまれは公平打おとしたるくたんのうてと  
はがいとなぎなたのさきにつらぬきたかくさし上ご  
ふんたちの一きとうせんと頼つるませう共をはさか

たのきん平切とめたりましてしんりんのふんとして  
某かほこさきにかくて及はんすみやかにたいさんい  
たされよとかうせうによばゝりける諸ぐんせい是を  
みてま事にしんりうほうへんの大天くたにかなはず  
いわんや我々たいしせん事とらう車をさへきるに  
にたるべし只はちをすてゝ命をつけと一とにとつと  
くづれる竹つなみて思ひまふけしさいごこゝなり  
と四尺三寸の大たちをひつさけしつゝといてわた  
なへとうのかういんみたのひろつなけふをかきりの  
いくさなり心あらんす弓取はかけよつてくびをうて  
と大をん上てよはゝれはかはちの國の住人さき原源  
六みつ重あつはれ望かたきやと打物まつこうにさし  
かさしうつてかゝるひろつなみてやさしのやつはら  
やとみけん二つに打はりけるなんばの八郎是をみて  
あゝきつたりとかげよるを竹つなしきつてせいし年  
よりたり共さすかなをゑしゆうしそかし御へんたち  
かたちさきにはかなふましとするゝと立出ひろつ  
な殿にてましますか是そわたなへの竹つななりかう  
げん所存にあいかなへりと云もあへすつと入てひ  
つくむされ共竹つな心きいて大力らうたいのひろつ

なを物のかすともせずかしこへとうごくみふせくひ  
をかゝんとしたりしかさすかへたてぬおちおいの中  
かなしみのなんたまなこにみち打たちもよはりはて  
いかにひろつな殿所存今は是迄をいさとをりへんし  
かうさんあれ某か一めいにかけても此度のあやまり  
をは申ゆるし奉らんひろつなきいて此ていになりこ  
うさんなちか比以てはつかしけれ共た人にくみし  
かれたる身にもあらずしてより後はあくいをひるか  
へし一すしに誠の道に入打死したるこ共かごせはた  
いとふらいゑさせん間ばんしわとのを頼なり竹つ  
な悦其ぎならはこなたへと取てひつたてよろいに付  
たるちり打はらいそはなるくろにこしをかけしはら  
くいきをつき竹つなさらばみかたへ同道いたさんと  
めてのかたへむくひまにひろつなたふさを取て引  
たをす上にのりかゝりくひをかゝんとするをさしつ  
たりとさうのをてをうどとめあしをからんてはねか  
へしげにもごふんなどよくふ道の侍かな其心てい  
にてこそは兄弟とふはになりすしなきむほんおこ  
したりおちをいのきうりも今は是迄をげんさいのお  
いのてにかゝるいんぐはのちのよ迄もなむ三方とく

びふつつかきおとしきつさきにつらぬきみ方のち  
んへ引かへす竹つな心ていげになさけ有侍やとて  
きもみかたもかんしけるよりちかみて今は何をかこ  
すべきとたせいの中にわつて入はらり／＼となきに  
けり時もうつさすべう／＼たるの原にし人の山をつ  
きにけり此せいにをそれちかつく物はなし公平みて  
こと／＼しの有様やとはしりよるを竹つな取ておさ  
へよりちかのゆう力はかねて聞たることくなりそこ  
つによつてけかするな先しはらくとかんけんす公平  
きいて左様の人をくみとめてこそ公平とはいわれめ  
よもしそんしはいたさしかまはておちあひたまふな  
とはしりかゝつてむすとか互になにおふ大力をし  
かへれはおしもとしはぬれはひらくすまふのてとう  
くはのせちゑには鳥のはをあはするにことならずか  
くれははつし兩方の力あしは只ちしんなどのことく  
なりされとも公平まさる力のしるしにはよりちかの  
上てになりてうくあしをゑいといゝて引とめまつさ  
かさまにけたをしちつ共さらにはたらかせす是はい  
かゝ仕らんと申せは大将をはしめあゝせられたりせ  
られたり其まゝ都へ引申さんとうこしに打のせて

いとへかいちんなされ天下とうにおさまりけりと  
にもかくにもよりよしの御くわほうすへはんせうめ  
てたや／＼とてみなかんせぬものこそなかりけり

# 勇金平

## 第一葉一枚缺く

しゆんのまひに何なり共一きよくつゝと御しまう  
有わたなべじするにことばなくあふぎおつとりたち  
上りげに君か代の春なれや松のみとりも色そへて世  
かいゆたかに民やすくめてたきはるとかなでつゝ有  
しせきに立かへりいざきん平と有ければれつぎのめ  
んめん一同にはやとく／＼とさへそく有きん平もと  
よりむげいにてほうど是にとうわくして此坂田めが  
此しやばへからだをとんで出てより、きじんやへん  
げがう敵は何百萬ぎかたまつて天地にみちてきたる  
共かたはしつかみひしかんにはふわ／＼しこむたま  
ごよりまだいとやすく思へ共是はあたごそこまつた  
りしかしめんでもおなぐさみ大こくまひをかなでん  
と鬼もおびへるつらかまちめをはそめつゝ立あがり  
此大こくといふ人は色ががひにあかうてひげつつら  
めがのうには一にてきをふみころし二にはにぎりこ  
ぶしでかたはしづかうをぶつくだき三に酒をはかる

は水ため桶をさかすき、四つよこ紙やぶりで敵をひ  
しぐがゑて物五ついつもてつのほうならく迄とぶつ  
こめはこんりんざいのやす小屋では地しんかしん  
どうかまんざいらくとさはかせ六つむいはいにかゝつ  
て首ねち切るもお上す七つ名だいを公平ときけは鬼  
がおびへて三年此かたをちかねた鬼神のおこりも  
をちる也八つにやく神屋しやらせつ此きん平にこな  
させては鹽からなんどの如く也九つこくうをはねあ  
るくへんげけしやうのいちや／＼をにらみをとすは  
いちもつ十でとつておつふせ大六天のましようも  
ん共すん共いはせはこそきん平まひは是迄ともとの  
せきに座しければまんざの人々けうに入よし家御が  
んのあまりにそれ／＼さかたに新盃と有ければ八斗  
入のなんきんはち坂田がまへにさし出すきん平につ  
こと打わらひ大こくまひの大あたりと五はいかさね  
てさらりとほしおの／＼いとまを給わりわがや／＼  
にかへりけるおさまる御代のめてたさと上下萬みん  
おしなへてかんせぬものこそなかりけれ

## 二たんめ

其後さかた兵庫頭きん平は座をかさねたる御酒ゑんに少めもともちらつけはわがやにかへりまくらしてかゝるきげんの折からにあわれいくさが有ならばきのやうじやうにもなるへきにさてもさびしきよの中やねうでになつて此ころは力こぶもかさびくになりはせぬかとつぶやきせんごもしらすふしにけりかかる所に山／＼の天句共きん平がちかきころゆう力武勇ならびなくちとかうまん見すかして正たいなきをさいわると大せい爰へとびきたりたゝみと共に引上て目なさませそとうなづきてくもいに上りそれよりもこくうをかいとび行しがあまりおもさにもなへおもはず山に取おとし大あせかいてとびちりけりきん平やうやくめをさましそ／＼おきてねこてうすあくびなからにうでをのべあたりをきつと見てあれは太木しげりしん／＼とおもひの外成所なり扱心得ぬ事哉ともくねんとしていたりしにいづく共なくふふたいこつゝみのおとの聞へけりいよ／＼きいの思ひをなしかゝるみ山のおくにして松ばやしこそふしきなれとよく／＼きけはかたわらの三かゝ

ひ程な太杉のこすへにおとの聞へけりさかた心に思ふやうさては此山のてんぐ共と覺へたりわれを爰までいざなひしきやつばらにうたかひなしにくきやつらがしわざやと彼太杉をひつかかへいかりにまかせてゆりおとすさしもの太木なりけれ共きん平が心にははいはらひふるこちして尾花のそよぐにことならず何かはもつてたまるへきよりあつまりし天句共ふいにゆられし事なればつばさをのばすまもなくて秋の山ちのこがらしにしるやこのはのちることくばらばらとをちにけりこのは天句と申事此みよりも申也がんせき岩をにおちければあるひははなづきはしを折、羽をかく天句もおほかりけりされ共しゆ領のまかい坊ときんのゆがみおしなをしきん平につかみつく坂田むし共思はゝこそとつておつふせひぎの下にひつしき一疋斗はめんどろぞや、みんながかゝれはな共と大手をひろげ待かけたり此いきほひにおそれをなし大小のぐひん共各かうべを地に付てまつひら御めん候へしあたごのかんどうかうむるほう此以後あだに存まじ和國のせがいとあがめんとはねをすほめて平ふくすかのきん平か有さま人間のわざな

らずとかんせぬ者こそなかりけれ

### 三たんめ

そののち天句共山かいのちんみに國土の美酒をさゝ  
げつゝきん平をもてなせは坂田是になくさみてかく  
て數日をいたりける有時きん平天く共に向て汝らは  
國々所々を飛行してめつらしき事やみるかたれき  
かんといひければまじゆつがまんのくみがしらとび  
のすのぞんくわい坊すゝみ出て申やう世上ひろしと  
申せ共さしてけうなる事もなしけつくまちかき此お  
く山おにがほらといふいわやにきくわいのものゝす  
み候鬼神の大將をばがんくつげとうとがうしけんそ  
くにらんまけとうてつくわつけとうなんととてあま  
たのあつきかすしらず人もかよはぬ谷かけを鬼神の  
だいらとなを付て近國へはいくわいし民のさいしを  
かどはかし是をふだんのしよくとしていくとせふる  
共しれぬなりやゝもすれきやつばらがわれゝをも  
かすめつゝ此山をおひ出さんとたくむゆへよほどむ  
つかしくもてあつかひ候とかたりければ公平くわん

じと打ゑみてそれこそさかたがかうぶつなれよくこ  
そかたり出したれあまりの事のうれしさに物も、の  
どへ入らぬそやゆづけを出せから口をはやくかんせ  
よ天しうと、かた地にはつたひの本笠まだ笠をだに  
付ざればべくさかつきとなを付てつゝけて七はい引  
かたふけそいろ立てよろこべはまか大天句のじやま  
ん坊御前にかしこまりくすみ切て申やうくだんの鬼  
神と申は神べんのくせものにて爰はと思ふ其時はて  
き一ばいの力を出しこんがうりきに候へばよのつ  
ねのおにならす其上つきぞうあつき共つうれいの邪  
みにてなし此御かぶとをめさるべしそも此かふとと  
申は大六天のまわうを明王たいちまします時めされ  
たる甲にてこんがうほつしやうと申めいきにてきつ  
さいもよく候とてつゝしんでさし上るきん平きいて  
からゝと打わらひ心さはしうちやくせりしかし  
鬼神か年をへてたながへをせぬすなり共大かた山の  
しれた事たゝきあつめて大かたは五十萬か七十萬つ  
かみつぶしてすてんにはそくいをおすよりいとやす  
しかぶともずきんもいらばこそきづかひなしに道筋  
のあんなひせよと有ければ天句共申様かの岩やと申

は至てしんこく成ゆへにがんせきいわほそびへつゝ  
神代此かた人倫のつうろとては候はずししさるさへ  
もかよひゑずそれゆへれうし木こりだにゆく事さら  
に候はず是に召れ候へとて玉のこしをさしよせきん  
平をうちのせてす千の天句こしをかき雲をふんでと  
んで行山また山のみねをこへとべば程なくをそろし  
や鬼神のだいりにつきにけりこしをかしこにかきお  
ろせは兵庫頭いふ様はそへかたおほしと云ながら四  
時のはやうちもおひてにまほのはや舟も汝らに及ふ  
ましもとよりわれは鬼すきにて手つだいもいらぬ也  
こすゑにひかへ汝らは、くもぢのつかれをはらしつ  
つ坂田がしよさをけんふつせよとこしよりおりて小  
をどりしうでをさすつてひかへしはあつはれふてき  
のふるまひやとかんせぬぐひんはなかりけり

#### 四たんめ

其後さかたのきん平は鬼が城につきけるか雲間をは  
やくかゝれたるのり物心か何とやらめまひ心ちの有  
ければまづくしばしやすまんと門のちふくを枕と

してゆたかにこそはふしにけれ番の鬼共是をみて扱  
もふしぎなま物哉いかさま是は大それた極悪人ゆへ  
人がいよりとうけんせめの心にて鬼のゑじきに至る  
らんとしよくにたんきな鬼共か引きさくわんとさは  
ぎよりきん平少めをさましねかへりさまにこそを上  
うんとあしをふみのぶれは鬼共おびへてとびあがり  
三間あとへとびしりぞき色ちかひしてためいきつき  
いや／＼きやつは此まゝにそこつにはくらはれしか  
しらを切てすしつけかてつぼうそろへやわらかにた  
たきひしくにしくはなし此ぎ尤しかるべしとてんで  
にてつほうひつさけ我おとらしとかけよる時公ひら  
むかとおき上りまだしにもせぬ此からだまうあつま  
るか青はい共はい打是に有やとて兩のこぶしをさし  
のへてかたはしよりもはりたおせばそくじに死ぬが  
十五人せつじをする鬼七八人残りはめをこそまはし  
けれ此物おとを聞よりも有あふ鬼共いかりをなしう  
んかのことくとび出れば是でやうやくめがさむると  
鬼共のなげすてたるてつほうを取あつめ五六本づゝ  
ねじかためもとをは取てより合せ兩手にもつてうつ  
程につのやら、かたやらどうせなかとらのかわこし

四つのゑたあたる所をさいわいにくわらり／＼とな  
ぎたをすはつまかさねたるかきらをかけやでくだく  
ことく也さすが鬼神もきもをけし命有ての鬼しよざ  
いいきたしやうきは是ならんとわだ／＼ふるへてに  
けこめは坂田はいよ／＼いさみたち一二の門や三の  
木戸岩をうがつて立たりし石の戸ひらをふみくつ  
しげんくわの内へみたれ入ほら中のきちん共今日が  
せつたいせつめいぞや脉はきれぬか出あへと大おん  
上てよは／＼れはらんまてつくわつ兩げどうきんひ  
らかゆんでめてより組つくを心へたりといふまゝに  
てつくわつをけたをしこうべみちんにふみくたきら  
んまげどうをひつつかみこふりふつてなけれはあ  
はらぼね打おられ其まゝいきはたへにけり大將がん  
くつはらを立手をおろさではかなはしとたけつてわ  
めく其聲は大地にひゝきしんとうしゆるき出たる其  
けしきたけは二丈斗にていかるまなこはしゆのこ  
とくひけもまゆけもかみの毛もみなそら様にはへ上  
り公平をにらんで抑わかれは何者そ是こそ大將がん  
くつなれたゝ今じやくめついたさせんといかり立た  
る有さまは身のけもよだつ斗也きん平是を見るより

もから／＼と打わらひぬかつむ舟にもせんどうかな  
汝が爰の大將か扱もきよしやうながきめやれあまり  
の事のおかしさにわきつ腹がいたひはと大聲上てわ  
らはれてがんくつ大きにせき上りたた一もみとくみ  
つけはきん平は下てにくみゑいや／＼とせりあへ共  
げどうもとよりこんがう力大ばんじやくのことくに  
てちつともさらにうごかねばきん平が力にもよ程手  
ごたへしたりしに残る鬼共かけよりてきん平か兩あ  
しに大せい手をかけ引程に日本一の公平も今はかう  
よとみへければなむ八まん大蓓と心の内にくわん念  
しめてのあしにてけはらへはげに神力のおうごにや  
けんぞく共けちらかされがんくつはひざをつきあふ  
のきにたおれけり公平わきへとびちがび太刀ひんぬ  
いてがんくつが首ちうに打おとせは残るけんぞくお  
ちおそれ今より以後我々大將とあかめんとみなか  
うさんをしたりけり其時に天句共木々のこすゑをと  
んでおりさてもゆゝしき御手からと羽うちわにてあ  
ふき立、すみかのま所へ供奉しけるかのきん平か手  
なみの程ぼん人ならぬ有さまやとかんせぬ鬼こそな  
かりけれ

ろほさんと心がけしに時至り今度の首尾こそ幸なれ  
いさうつたてや者として近國をもよほし都合其せい五  
萬よき都をさしておしよするよりよし此由聞召四天  
王を始めとしてむねとの兵引くし急ぎ都を打立てば  
ん州さして下向有兩ちん道にて行むかひ時の聲をぞ  
上にけり時の聲もしつまれはよせてのちんより波  
原兵藤となのつて大せいにわつて入はらり／＼とな  
きたをせは源氏の先陣かけちらされしとろになつて  
みへければさたかね見てとんで出兵藤にわたりあひ  
たゝかふとみへけるがさしもいさみし兵藤か首は前  
にそ落にける竹つな是をみるよりも今にはしめぬて  
きわ哉と大たちぬいて切て出四天王のすい二竹つな  
かてなみを手本にせよやとて四方八面切まくれば何  
かは以たまるへきいろめき立てよせてのせいむら  
むらはつとにすれは大將大くまこらへかねあさま  
しの者共やしてつほうひつさけ打て出くもて十文字  
になきふすれはさしもいさみし都せい味方のちん  
へ引かへす公平是をみるよりもあれていの小くわし  
やめにこわげはなきをみたのせい打物やめて見物せ  
よととびかゝつてくみけるか大くまも大力爰をさい

ごとせりあはひしにせかいぶさうのきん平が物の數  
共思はゝこそかしこへかつはとなけたをし九のいの  
下をふまへつゝうんと云てふみ付れは手足のゆびも  
はだかりてのめりをかへす所を首ふつとねち切か  
ち時を行ひ君の御供仕都をさしてかいちん有源氏は  
んしやうめてたし共中／＼申斗はなかりけり

右此本者大夫直之正本を以うつし令板行者也

正徳六年申正月吉日

駒込あさか町 西村傳兵衛新板

## 渡邊三田合戦

### 第一

よりよし公かまくらせめ子四天王關破り

それひやうしよにいはいく、しやうのまさにはかりこ  
とものゝときんば、たゝかいにりなし、外内をうか  
ふときんば、わざわいせいせずと、こゝをもつてとを  
き<sup>本ノマ</sup>を、おもんはかりなきものは、ちかきうれへにあふ  
とうんく、こゝにかわちのかみ源のよりのぶ公、天  
下のふしやうたりし時、むさしの國のぢう人、わたな  
べの源五つなとて、ここんぶさうのゆうしなり、せん  
ぞをくわしくたつぬるに、とをるのおとゝより五代  
のそん、みたの左衛門もとなが一子なり、やうしや  
うにてちゝにおくれ、はゝかたのおばにやういくせ  
られ、つの國わたなべにありしが、ふりやくさいのふ  
よにたかく、まんぢうの御代に、十一さいにてはじ  
めてめされ、ちやくしらいくわうへめしつかわされ、  
すどのかうみやうひるいなく、其けんじやうに、本國  
なれば、むさしの國にて、すか所のりやうちをたまは

り、ゑいぐわに 三重さかへおはします、御子二人もち  
たまふ、ちやくしみたの源次郎竹つな、かれはちゝ  
のたいくはんとしてざい京す、次はせいしのまへと  
て、代にたぐいなきびぢよなり、扱又家のしつけん  
に、くまざは兵ごかねみつとて、一きとうせんつわ  
物なり、同ちやくしはく王丸、父におとらぬかうのも  
の、其外杉山藤内ありくに、しのざき兵衛まさ時と  
て、何れもおとらぬゆうしなり、日々にしゆつしはひ  
まもなく、みたのしょうにいちう有、いせいの程こそ  
三重ゆゝしけれ、是は扱置爰に又、かいするが兩國の  
くわんれいに、高はし左京の大ぶきよしげとて、よご  
將軍十代のゆいしんたり、然にきよしげめいけのな  
がれおくみなながら、あくぎやくぶたうにてうくわ  
して天めいしらぬおのこなり、同ちやくししゆりの  
大ぶきよあき、次男さこんのせうやすきよ、三男しげ  
王丸とて何れもけつきのゆうしやたり、あひしたが  
ふらうどうには、竹川たん正さだとも、あらきほんま  
たかひさ、せき口次郎もりとし、あいはらくらんど  
うぢはる、あしがら源太もりながとて、い國のしぼうほ  
うゑつをも、さみする程のゆう力たり、有時かれらを

召集め、日頃方く／＼にふちをしぶゆふを、たしな事、<sup>本ノマ</sup>一系に天下をうば／＼ん望たり、さいわいわたなべのつなはむさしにさいこくす、まづかれをいくさかみのちまつりに打とらんと、おもふはいかゝあらんとないたんす、中にも竹川たんしやうすゝみ出、御ちやう尤くつきやうのおりから、ひた／＼／＼とおほし召たゝるへし、かれたに御ついばつあらは、ばんとう八か國はたうもかうも皆御みかたにさんすべし、それせんけんの事わさにもおよそさがみ一國のせいをもつて東八か國にたいし、八か國をもつて日本のせいにたいすと申せば、其いきをいにて都をせめらるべし、然らば天下は君のたな心におつへしとさもいさぎよくそいさめける、爰におかだの十郎ひてつぐ、ばつぎより進み出、これはゆゝしきいさめにて候去ながらかの渡邊はおにをあざむくふりやくめいよの物なれば、弓やをもつて打とらんはゆゝしきさうとうたるべし、一まつちりやくをもつておんひんにうたるべしとぞ申ける、大將尤とたうじ、然らば渡邊を是へよひよせたばかつてうつへきか、いかゝあらんと仰ける、ひでつぐかさねて、爰によきて立の候、し

げ王殿の御けんふくにことよせ、いわいのいとなみにどくまんぢうをしたゝめあたへ候は、たちまちじめついたさん事たな心の内に候と、手に取やうにぞ申ける、きよしげかんゑつかぎりなくさあらば此きにあいきわめん、則なんぢむさしに行よろしくたばかり歸るべし、畏候とてとも人四五人引ぐし、むさしをさしてぞ三重いそぎける、程なくたち付しかはあんないかふて渡邊にたいめんし、只今まいり候だんへちぎに候はず、きよしげ申され候は、來十八日にしげ王丸にげんぶくいたさせ申に付、かつうはおまへのみやうがにあやかり申やうにとの事にて則かのちへ申入たき由と、おそれながらそれがしを遣はし候と、いんぎんにぞ申ける、渡邊ふしきに思へ共、何となきていにて日頃のよしみて、よくこそ御ししやにあづかり申たんへつしてしうちやく致せしなり、其さみさんにうもつていさい御れい申さんと、つかいの物をかへし扱くまざはを近付、きよしげが方よりかやうに申來しが、きやつとはつね／＼ふあいくち成にしみ／＼とのつかい、何とやらんやう有げに覺るなり去ながら、侍の頼といふにいなといふ

も道にあらず、一はしかれたちに行事の次第をう  
かゝふべし、よいいせよとのたまふ所へ、きよしげが  
侍、みたの平次とて本はわたなべにつかへし物成が、  
大いきつてはせ來り、きよしげかくは立一々次第  
を語りける、渡邊大きに打うなつき、扱はそれがしか  
思ふにちがわずよくこそしらせて有物かな、扱／＼  
なんぢはいにしへのよしみをたがへぬ事こそしんび  
やうなれ、それ／＼とてしやきん百兩たまはり、まづ  
なんぢはいかにもをんみつに歸るべし、平次ほうひ  
をちやうだいし、おいとま申歸りけり、かくて渡邊は  
かねみつに打むかい、いかにや此わたなべ程の物が、  
かれらていがばかりことにおそれ行ぬはむげにいゝ  
かいなし、それがしもはかり事をめぐらし、きやつを  
是へよびよせて打べきなり、まづ此度はかれが望  
にまかせ立こへんと、扱やういのまんぢうをくわい  
中し、とも人あまた引ぐしてするがをさしてぞ三重  
いそぎける、去程にきよしげは、さたまる目にもなり  
しかはしゆ／＼のほうらいかざらせ、しうぎのいと  
なみあいかまへ、くだんのどくまんぢうをよういし  
て今やおくり／＼と待いたり、然所に渡邊あんない

こはせ入たまふ、きよしげ立出よくこそ御出候、まづ  
こなたへとをくへしやうじたかいにしきたいおはり  
其後しげ王時のしやうそく引つくろいさしきに出  
る、渡邊ゑほし取上ちやくせさせ少立のき、則御なを  
しゆめのせうしげつなとなのらるへし、誠に我等て  
いをゑぼしおやに仰らるゝだん、へつして代のめん  
ぼくと存なり、御くはほうは御しんふ、きよしげ殿に  
御あやかりたまへ、扱ゆうりきの程物のかずにはあ  
らね共、此渡邊にあやかりたまへと、れいぎたいしく  
ことおはれば、其時ちんせんにつくしさま／＼もて  
なしやう／＼ほんごに及、かねてよういのくはしを  
持出る、渡邊すはれいの物とおもひ、何となく取てく  
わい中す、本よりれつぎの人／＼かねてあいすの事  
なれば、一／＼取てしよくしける、其時渡邊をしなを  
つて、かねてしたゝめくわい中せしに取かへ、大へし  
にへし付むまさうにした打をしてむじ／＼／＼とく  
ひにける、きよしげかく共しらすしてなをもひかう  
を取かへ、しゆをさま／＼にそすゝめける、其時渡邊  
れいならぬていにもてなし、今はおいと申さんと、  
さしきをずんと立、きよしげしすましたりとゑみを

ふくみ、誠にゑんろはるゝとの御出よろこひ入て候と、れいぎをのべてそかへりける、たがいなたばかりたばかりぬと、おもふ心ぞおかしけれかゝる所にさいせんしやにきたりしかたおの十郎はせ來り、渡邊のこしのまへに畏、何とやらん御心くるしげにみへさせ給ふ故、きよしげ心もとなくおもわれ、それかしをさしつかい候何とか御入候と、誠にやかに申ける、渡邊こしより立出よくこそ御念入たる御つかいやと、いふやいなや取てふせ扱御へんなしんていといきたる人かな、日本ぶそうの此渡邊を、まのうちうのきれにてたばからんとや、おつこやきおのこかしないたり、なんじが申ごとく中々五たいのふらんしてたまられない、びやうちうの間は頼み申ぞこいさ、こなたへとたかてこてにいましめ、かねみつにひつたてさせ、むさしをさして歸りける、かの渡邊かちりやくの程、あつはれめいよのゆうしやとてみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第二

きよしげさいこ井渡邊ぐんほう物語

むさしのかみ渡邊のつなは本國に歸り、ひてつぐを引出しいかにひでつく、なんちがしうのきよしげは、いか成いしゆにそれがしを打んとはたゝむそや、有のまゝにかたるべしやうすによつてなんちをば忠の物となすべし、それゝとてまづなわをゆるさるゝ、ひてつくさあらぬていにて、いやそれかしは何のしやへつも存せず候所に、かやうにあらき御ふるまいかつてしんいにつうせずとべんせつかしこくちんしける、渡邊聞もあへず、やあさやうのひやうりはちよの物に申せ、此渡邊はもちいぬぞ、ひつちやう今度のはかり事、なんぢしらぬか誠ならば是をしよう致へしと、くだんのくはしを取出しひでつぐに與へける、ひでつぐよくみればてつから造りしちんどくなればさしうつむいてせきめんす、其時かねみつこかいな取ていかにやわとの此頃の御しんらうぶんに、本ノマ、ちんぶつとたまはる所に何とてしんしやくせらるゝぞ、いやてもおふてもあたへんと、こしのさしぞへひんぬいてそくびにおしあてせめくる、せんかたなく其儀にて候仰にしたがい申さんとふるいゝを申ける、さあらばとてひつ立る、ひでつぐ心に思ふやうよ

し／＼てつからつくり事なれば、たれをうらみんか  
たなしと、思ひなからもおつ／＼取てしよくすれば、  
何かはもつてたまるべき、五ぞう六ふにしみわたり、  
たちまちをはきむなしく成、渡邊みたまひ扱も扱  
もきよしけめはからだにやわぬきものふといおと  
こめかなとから／＼と打わらい、いかにかねみつな  
んちはかれかたちへ行、それかしいれのやうに申  
なし、たばかり是へつれ來れ、かしこまり候と三重す  
るがをさしてぞいそぎける、いそぐに程なく付しか  
ばきよしげにたいめんし、扱も渡邊國にかへりしよ  
りいれいもつての外に候、かやうにしたしく成うへ  
は、なきあとまでもべつして頼み申さんため、おそれ  
ながらあれへ御こしあつてたまはるべきとのことに  
付、それがし参り候とさも有さうにぞのべにける、き  
よしげしすましたりとおもへ共、おどろきたるふせ  
いにて供人少／＼ひきくして、渡邊やかたへいそぎ  
けるやかたになれば、かねみつ心へおくへつツとし  
やうしける、其時つないぎをいはせすとつてふせ、ひ  
さしう候きよしげ殿、扱も御ふんは我をうたんはか  
りことに、わかれて二たびあいがたきくひをうしな

いたまふこと、近頃しやうしせんばんにこそぞんす  
れ去ながら、此渡邊がてにかゝる事ごせの打たへに  
せよと、まつかう二つに切わつたり扱ながひつにを  
し入れ、せうをおろしかねみつおもてに出、きよしげ  
が侍共を近付、いかに方／＼きよしげ公は、渡邊のい  
れいに付、是に五三日もたうりうあらんとの御こと  
なり、是は則渡邊よりきよしげとのへおくらるゝ御  
ゆいもつなり、則御しそくたちへのしよ狀も有まつ  
方／＼はかへられよとあれば、畏候と侍下べに至ま  
で本國さしてそ歸りける、國にもなれば人／＼の御  
めにかくる、兄弟の人々それこなたへとふたをあけ  
てみてあれは、ち／＼をかいして入おきたり、はつとお  
とろきやおのれらは、しうをかやうにせさせおめ  
おめとかへる事のほら立やと、一／＼くひをそうつ  
たりける、此上はじこくうつしてかなはしと、兩國に  
ふれをなしつかう其せい三萬よき三重むさしの國へ  
ぞおしよする、なをも此事かくれなく、みたの城には  
敵おそしと待いたり、渡邊申されけるやうは敵を待  
も程久し、いで／＼ぐんほうの次第をかたつて聞せ  
ん、まつかやうのひらばのかけあいには、つくりせい

をまへにたてすきまにせい兵をかくし置、かたきに馬を立させしと、こまのひつめをうつて取へしやだねつきばぬきつれて切て入、敵かひかばなかをひせな、其引しほに大じ是有、引共かく共一どにひつかけひつかけ いろまばらがけして打るゝな、むかふて敵にあふ時はあいのむちをてうと打ておつさまに切ておとせ、ゆんでへめぐる其敵をば、しのびのたつなをかい取て、かくのひやしをばつくりどん、かつしゝしつとゝあをつてめてへこさせ、大將のみばひつくだくひをとれ必々敵か上手で有ならば、かたきいらんとさへぎるべし、其時やりを取のべ中だんにかまへてみせ二のいきをほつともつて、はつしとはつて其まゝ入てくみあふべし、きよりんくわくよくしんしよの次第うむのたんち、かたきちうつもりごくぐくりんゝ、七よう八よう九ようのほしのさたまでも、其てゝにふんのわけ一時あまりにのべたる渡邊かこうせき、日本一のべんせつやとかんせぬ物こそなかりけり、あいもすかさずよせてのせい、南方より打かこみ時をどつとぞ上にける、城の内より我もゝと切て出、ひ花をちらしてたいかいける、も

とよりよせては大せいにてあら手を入かへせなければ城のぐん兵残りすくなく打れけり、くまざは兵ごかねみつ、しやいつまでとたせいか中へむ二む三に切て入、残らうどう杉山藤内、しのざき兵衛、思ひ思ひに切て出る敵の方より、竹川だん正、あしがら源太をしならべてむんすとかむ所へ、敵大せい折かさなり、二人共にいけ取本ぢんさしてひつかへす、はく王丸是をみてのがさしと打てかゝる、竹川取てかへしてむんすとかむ、本ノマ、兩方さ物でうすにて、しばしせうぶはつかざりけり、はく王ゆんてのあしをつよくふみすきまを取てひとともにつよくもみかくれば、竹川かさにおしかゝりなげんゝとする所を、はく王大いかなれば、まつにからめるふちのごとくくるりゝとついてまわり、下てになつてゆんでのあしをはたとけて、めてへどうとなけふせおこしも立すくびを取、竹川たん正さたともを、はく王丸か打取たりと引所を、あしから源太取てかへしおしならへてむんすとかむ、はく王こと共せず取ておさへ首をかゝんとする所を、あらしきほんまかけ來り、はく王がゆんでのかいなを打おとす、心はたけくいさめ共たした

しとする所を、おさへてくびをかきおとし心よげに引所を、渡邊はしりかゝつて本まかうはおひかいつかみ、そばに有ける大石へ力にまかせて打つくる、源太すかさずむすくとくむ事共せず取てふせ、首ねち切てすててんけり、跡につゝきしやつはら東西へおつちらす所へ、かねみつむかふきずをおひなから、打とめたるくひきつさきにつらぬき来る、つなみてなんぢはつまやこ共をしゆごし、三うらのたちまでおち行べし、かねみつとこふに及すら道よりおちてけり、其時渡邊つねにこのむ、一丈五尺のかなさいぼうをひつさげ出る、てきの方よりかいの國のちう人川村源藏、かん原藤太、たて石新五かけ長とておとに聞へし大力我々三人かゆう力を心みたまへ渡邊と、こゑ／＼によばわつたり、つな聞てす萬の中よりたた三きぬきんで、此渡邊に出合てくびをうしない、後に我等をうらむるな去ながら望にて候はゞ、さらば一力ねぢあい申そうと、さきにすゝみし源藏が、こがいな取て四五けんくはらりとなげた、新五藤太、さゆうよりむす<sup>ち</sup>とだくさあしつたりと三人共に一所になけ付、こしひざいたみうちめく所をさらば是からは

ちつとてつぼうをいたゝかせんと、さん／＼に打程にみぢんになつてぞうせにけり大將御らんじいさ渡邊を八方より打とらん、それあますなとほう／＼のよせて共うんかのごとくをしかくるむかふをみれば、大將きよあき八百よきにてひかへたり、うしろをみれば二なんやすきよ五百よきにておつ取まく、ゆんでをみれば三なんしげつな七百斗で打かこむ、めてはかいするがのせいうんかのごとく取まいたり、今ははや渡邊ももれて出べきやうぞなき、上はうてうの天、下はならくのそこまでも、其名をへたる身がやみ／＼と打れんことはよその聞へもはづかし、南無八まんとくはん念し、大將なれば清秋をめにかけ、む二む三に打てかゝれば、さうぢん共にくもの子をちらすごとくに八方へにげさつたり、せんかたなくも渡邊ひとりしするにあらされは、誠にひをかけむりにまぎれておち行けり、かの渡邊がいきをいた天下ふさうのゆうしやとて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

### 第三

わたなべのみだい落給ふかねみつさいご

しゆりの大ぶきよあきは、みたのしやうをせめおとし、かまくらに座をすへ、ばんどう八か國のせいをもよふほすに、従はざるはなかりけり、きよあき、きゑつの眉を開き、しよぐんせいに打むかい、さだめて都より打て下らんはひつちやうなり、かねあらいざわまでくん兵をさしむけ、あとさきよりもひつつゝみ一きものこさず打取、すぐにいてに上るべし、其だんよくゝ心へたまへとしよぐんせいのてわけをして、扱其身は大くらのやつにたてこもり、ほうゝの口ゝにくん兵さまゝせいくばり、ていとよりの打手をば今やゝと三重待いたり、是は扱置爰にあはれをとゝめしは、渡邊のみだい所やひめ君にて、しよじのあはれをとゝめたり、かねみつ一人御供にて三うらのたちを心がげたどりゝとまよはるゝ、一めもしらぬいわまをつたいびやうゝたる山ぢにさしかゝり、ひめきみの手を取ておもひそめぬ三うらがた、つまにはわかれあとに心のひかされて泪のかはくひまもなく、かせにもまれてこのはのおとがさゝんざとふくかせだにも、もしもつまかとうたか

はれ心ぼそさはかぎりなし、立歸りこきやうをは今一度みたの庄、あはれうちしんのちかいにも我ゝが行へをは、あんをんにまもらせたまへとふしおがみ、まよひ行こそ物うけれ、あなむざんやなかねみつは、あまたふかてをおいければ、次第にしやうねはみだれつゝ、其まゝそこになうどふす、みだいひめ君おどろきたまひ、やれかねみつよ心は何にとくるしきか、いかにゝとのたまへ共とかうの事をも申さずし、いきもはやきゝゝにまなこもくらむばかりなり人々あまりのかなしきに、やれくまさは何とて心をつくるゝそ、今にも敵來らんにあらうらめしの有さまやと、こゑをあげてなきたまふ、今をかきりのかねみつ人ゝのなけきに心を付、くるしげ成いきをつき、みだいひめ君御かいしやくせられ、やうゝにをきなをり、あな口おしやかやうにいたておい候へは、あいはてんはひつちやうなり、此度の御せんとをみとどけず、あまつさへ山中にてうきめうきめをみせたてまつらん事よみちのさはり、みやうがの程のおそろしやと、さしもにかう成かねみつもそゝろに泪はせきあへず、みだい泪ともろともにげにだうり

なりことはりや、すまんの敵を引うけて、いくさにはつかれかくまでふかでおいければ、心くるしきことはりかな、せめてあれ成こかげにて少やすらい行べきは、いざこなたへのたまひてみだいひめ君、<sup>本ノマ</sup>さゆふの手を取やうく引たて二あしみあしあゆみしが、あうなむ三ぼうもはやおいとま申とて、其まかしこにどうとふしなむあみだ佛ともろ共に、ついにむなしくなりにつり、人くさゆふに取ついてやれくまざはよかねみつと、よべどさけべといきたへて其かいさらになかりけり、是はく斗にてしきしきへ入たまひける、みたいあまりの物うさにむなししがいをおしうごかし、扱もくなんちは一めもしらぬ山中に我くはかりすて置て、かくあさましくはみゆるぞや、おここにはなれ我くはたれをたよりにいづくへかゆくべきぞ、同じよみしにつれ行や、やれかねみつとのたまひてすがりついてはなきたまふ、しよじのあはれと聞へける、かゝるあはれのおりふし此山にすまいする、かりうと三人仕合あしく歸りしが、此由をみるよりもするく立より、是はふしきの次第かな、いづくの物ぞ、みれば

あたりにしにんも有、ふしきさよとふた、みだい聞召されさん候我々は三うらのかたまでまいり候が是成物を頼みにて、是までまいり候所にかくなりはて候はあはれ御じひに此物のかげをかくしたまらば、せうくせ、の御をんならめと泪をなかしのためは、かりうど聞いて扱もふびんの次第とて、しかいをこかげにかくし置、かたはらに立よりさだめて是は渡邊方のおちうと成へしいさめし取、たかはし殿へつれ行ほうびにあづからんといふ、尤く然べし去ながらことのやうすをそなたつねんと、あたりへ立より方くのていたならず、必里はいつくの人にて候ぞ有のまゝにかたませたまへ、おぼしめさるる方へおくりとつけてまいらせんと、誠しやかに申ける、みだいなめにおほしめされ、かくとはゆめにもしろしめさず、はづかしなから我くは渡邊がつまや子にて候かこんとらくじやうに付三うらがたまておち行候、あはれ御なさけにおくりとつけてたまはれと、泪と共にのたまへは、かりうど聞もあへず、扱こそねがふ所とよろこび、我くは高はし殿の物にて有、渡邊かたのおちうとをとめんだめの物共

なりこなたへ來れとひつたつる、みだい所もひめ君もゆめうつゝ共わきまへず、是は／＼とばかりにてたおれふしてぞなきたまふ、みたい心におほしめしはたとへは女成共、さすか渡邊かさいしたる身かやみ／＼と敵の手にわたされんも口をしや、しよせんきやつはらなり共さしころし共本ノマならばやとおほしめし、いかに方／＼今はなげきてかなわぬ事なれば、とてもたすけん物ゆへにはや／＼かたきの方へ引わたせと涙と共にのたまへは、おゝよい思ひ切哉じこくうつるにはや來れと、すでになわをかけんとす、みだいまもり刀をするりとぬきいなやに及ずきものたばねをさしとをし、やああのればらさすが渡邊がつまや子をやみ／＼といけとらんとや、中／＼おもひもよらずと、くひふつつかき切たまふ、のこる二人が是をみて、扱も／＼やさしき女のふるまひやと、とひかゝり太刀をうばい取、命もうせよとさん／＼に打ふする、ひめ君あまりのかなしさにのふなさけなや母の命が有へきかや、わらはを打母をたすけてたまはれとすがり付てはなきたまふかり人大きにかつてなにおのれもつえが望かとして、なさけなくも打

ふする、いたわしやおや子の人さすが女しやうのこのなれば、大のおのこに打ふせられさけはんとすれ共こゑ出ず、やう／＼ひめ君母のまくら本に立より、のふいかには、上さませいしのまへにて候御心は何とわたらせたまふぞや、今がさいごにて候は御念佛をわすれさせたまふなよ、あらな無あみだ佛みだ佛とすかりついてはなきたまふ、いたはしや母上はくるしげ成こゑを上、やあ御身はいまた命もうせざる本ノマかおとうたるゝ其時は、たゝんとすれ共めもくれてふびんながらも立ゑさる、母か心もおもひやれこはそも何のむくひそや、あゝさて世の中におつしん三ほうはましまさぬか、あらうらめしの次第やと、きへ入やうにぞなきたまふ、かり人おゝきにいかりおなし、なにおのればらか罪とかをたれかしるべきやれこんじやうぼねのふてきゆへおもわぬせめにあふ事よやあ源六しよせん口をあかせんより、はや／＼からめひつたてよと、いたはしやおや子の人たかてこてにいましめてころのぼうをおつ取のべ、あゆめあゆめと跡よりしもつとあてけるは、一系にごくそつのかしやくの責もかくやらんとをつ立／＼それより

も敵のやかたへ三重いそぎけるかゝる所に、渡邊のつなはみたの庄を切ぬけ、三うらをさして來りしか、ふしぎや山中に女わらべのなきさげぶふしんさよとみねにあかつてみたまへはみたいひめ君なり、はつとおどろきはしりかゝつて二人共にひつつかみ、おのれ何物なればかくらうせきをなす事ぞ、おゝみればよひわかいおしうだ、扱はおのればらは此邊にすまいをし、ゆきゝの物をせつとうするさんぞくめらな、むぎいがきめを手にかけてころさんなむげにふかくたるべし、出望のたにへおとさんと二人共にひつくゝり、かうまのちからを出しゑいやつとなげければ、みぢんとなつてうせてんけり、扱人ゝをさきに立あやうき仕合かな、まつゝこなたへゝと人々を引たて、みうらをさしていそかれける、かの人よろこび、渡邊かゆう力ここんふそうのまれ物やとて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

#### 第四

ため宗都へ注進并子四天王いくさ立の事  
渡邊父子の人ゝは、ここのなんをしのぎみうら

のたちに付たまふ、ためむね立出まづこなたへとをくへしやうじ、今度それかし君のごだへくはんとしてあつたへさんけい仕、ろしにてうわさを承り、おどろきやせん是へ罷付、はや打たゝんとせし所に、ろうじやくの由を聞、何とかなされ候と心もとなくぞんせしに、つゝかなくわたらせたまひまつ以めでたく候と、ゑつきはなはたかぎりなし、渡邊承りさればこそとよ此渡邊程の物が、かれていのやつばらにうしろをみする事、人のひはんもめんぼくなく方々におもてをむくる事、近頃はづかしく候と泪をながし申さゝる、ためむねかさねてあゝおろか候渡邊殿、いくさは時のうん心のまゝにはなりがたし、きはうなればこそたせいのかこみを切ぬけ、あんをんにはおはしませことにきよあき、御へんを打たんくはたて是わたくしにあらず、天下をうばゝんためなればきでん一人の敵にてはなし、かへつて天下のさはぎたり、此上は都へひきやくをもつてかせいをうけいくさのてだて然べしとぞ申ける、渡邊聞もあへすいやゝ其だんは然べからず、はうばいのあざけりめんぼくなし、すでにそれがし三田の庄にて打じにと

おもひさためて候へ共、敵ちかづかねば力なし、只それかしはかたきの城へみたれ入た、打しにと申きつてぞいたりけり、ためむねしごくにあまり尤かな去ながら一つは君のためなれば、此たん都へしらせ申さんと、一つうの状をした、め、もり本太郎に申付いそぎ都へのほせける、扱もしも此城へよする事もやと渡邊をはしめ、家のらうどう五百よき、ほりふかふかとほらせ所くにかくらを上けよせくる敵を三重待いたり、去程に都にはとう國のらんげきかくれなく、四天王をはしめざい京の諸大名を召れ、此事いかあらんとないけひやうちやう取く有所に、もり本太郎はや馬にてはせ來りいそぎ状をさし上る、みれはさかたの公時殿へと有、則きん時にわたすやがてひらいてよみ上る、其狀にいはいく態しさとともつて申上るいしゆは、今度するがの國の住人高はし左京の大ふきよしけ、きやくしんをくは立はかり事をかまへ、渡邊をうたんとはげむ渡邊ふりやくをもつて、かへつてきよしげをちうばつせしむるがゆへにきよあきやすきよ兩國のせいをもつて、渡邊たちにおしよする、みかためいをがうもうになけうつて

ふせぎた、かふと申せ共たせいにふせいかなはず、きよ月廿七日よみたのじやうぼつらくせしめ、則それしがしがたちに罷こされ候はわたくしのしゆくいに候はず、天下をみだすげきしんたり、是らのおもむきよろしく上ぶんにたつせられ、いそぎかせいをたまはらば、きやくとちうりやくくびすをめぐらすべからず、よつてしつたつくだんのごとし、急いぐはん二年極月二日、さかたのみんな公時殿へみうらのわだ左衛ためむねと、たからかによみ上る頼信聞し召れ、扱はくはんとうのさうとうじつせつたり、へんしもきうに打てを下さん、則よりよしを大將にて公時ふし、其外子四天王共、五きないのせいをもよふしいそぎむかへとの御ぢやうなり、かゝる所に渡邊源次郎竹つないれいによつて、しゆつしもせずいたりしか此事聞と一しくいそぎ御所に上り、おそれながらそれがしには御いとま申うけ、へんしも早く罷こしたく候と、つゝしんで申上る、君聞し召れ其だんはことほりなれ共、いまだいれいも本ふくせざるに、はけみのいくさおほつかなし、きん日打てをさしむくるは、なんぢはとゞまりかん病せよとの御ぢやうな

り、竹つな承りこは忝御ちやうかな去ながら、父か事  
心へなく候へば此だんはごめんなされ候へと、すく  
に御前を罷立、門外よりも馬に打のり、さがみをさし  
てぞ三重いそぎける去程に君は御らんじ、以上はじせ  
つをかへずはや打立との御ちやうなり、畏候といそ  
ぎ御せんを罷立、おの／＼よういを三重したりけり  
すでにくくげんきはまれば、先一ばんは源氏の御吉  
れいの御はたまつさきにおし立る、二ばんにほうせ  
うの一子あさぎのはたに平井のほうめいひとりむし  
やとはたのおもてにかきあらはし、うの花おとしの  
よろひきてつきげ成こまに白ふくりんのくらをか  
せ、ひやゝのかはのあをりをかけ家十代のいわ切と  
いふ長刀持せ出にけり、三ばんにさだみつちやく  
しもへぎのはたにうすいのくはんじやさたかけとし  
るし、ふしなはめのよろひきてひばりけのこまにな  
しぢまゑのくらをかsekまの川本ノマのあをりをかけ、打  
物とうくにはひねりのぼうと、まさかりを打かづか  
せて出にけり、四ばんにすへ竹のちやくし、あかはた  
のそのべのくらんとすへはると、はたのおもてにか  
き付、こんいとおどしのよろひきてれんせんあしげ

のこまにかいくらおかせ、打のり、五人ばりの大弓持  
せ出にけり、五番に公時のちやくしこんのはたに坂  
田あく平田公平と、きんしをもつてかきあらわしく  
ろかねとうの大よろひ一兩かさねてざつくととき、七  
尺三寸の太刀十文じにはくま、にくろき馬にいかけ  
ちのくらおかせ、とらのかはのあをりにあをかいす  
つたるあぶみをかけ、八尺あまりのてつぼうじしん  
ゆんでに引さげ、馬ざゝめかいて出たるは山のくす  
るゝごとくなり、扱次には御大將頼義公一きはすく  
れて花やかに御きせなが打物馬くらに至まであたり  
をはらひてりわたる、あつはれ大將軍やとほめぬ物  
こそなかりけり、扱しつはらいは、こらうの大將とし  
て坂田のみんな公時、くろかはおとしの物のぐちや  
くしぢんかさまぶかにひつかうてくろき馬のふとく  
たくましきにせいしつのくらをいて、家につたはる  
兩ばのほこ下人に持せ、こちんをしゆこしいてらる  
る、扱五きないのせいをそろへつかふ三萬六千よき  
ていとを打立それよりも、さがみの國へぞ三重いそ  
かれける、是は扱置三うら方には敵左近のせうやす  
きよ、二千よきにためむねやかたを二ゑ三ゑにお

つ取まはして時のころをぞ 三重上にける、城の内に  
は渡邊ため宗をさきとして我もくくと切て出ひ花を  
ちらして 三重たゝかいける本よりよせては大せいな  
ればかつにのつていろめく所へ源次郎竹つなしうし  
う五きにて敵の中をかけやぶりはせ來り、大おん上  
にて都よりかせいのさきがけ三田の源二郎是に有  
と、大せいのぐん兵をむらくはつとおつちらし扱  
城中へきつと入やすきよ是をみて、取まかれてはか  
なふまし、まつく此ちん引やとてかまくらさして  
ぞ 三重引にける、扱竹つなは父わたなべためむねに  
たいめんし悦事はかきりなし、竹つな申けるは都せ  
いおつ付はつかう仕候、此城にては敵にへだてられ  
思ふやうにはいくさなりかたし、道まで出むかい一  
所にかまくらへむかはせたまひ候はい然べしとぞ申  
ける、人く尤とてはや打立たまふ所に都せいよを  
日について打程に、ふしさはのしゆくはづれにて兩  
方行合、御前に畏る頼義御ゑつきあさからすいかに  
渡邊、をもはさるげきしんにさへられ、さぞむねん  
におもふらん、渡邊承り誠にそれがしふせうの身を  
持、東國のたんだいをかうむるかいもなく、かやうに

て下よりむほんのおこし候たんきみの御まへは申に  
及ばず、ほうばい達におもてを合るも近頃めんぼく  
なく候、公時間もあへすいやさ渡邊、我かふくちうよ  
りしゆつしやうしたる子にても、たいがかはれは心  
の内はしれかたしいはんやた人のしやうがいに、十  
人よれば十にかはる人心、たれか是を存べき御へん  
なればこそ敵をたばかりあまつさへ、清重をて取に  
し打たまふ事こそしんひやうく、まづくちんば  
にいきをつかせ明日たつの一天に取かけん、何も  
此ぎ然べしとておのくちんをぞ 三重取にけり、是  
は扱置敵しゆりの大ぶきよあきは、諸ぐんせいを近  
付聞は都より頼義を大將にて子四天王ともむかいふ  
しさはにちん取て有と聞、何十萬ぎにてよせたり共、  
此かまくらへは思ひもよらず、こしこゑまで出むか  
い、少あいしらいちぶんのうかひ切て出、只一もみ  
に打つぶさんはたな心の内なりと、しやてい左近の  
せうやすきよに、一萬よきをあひそへあねあらいさ  
はに、やぐらを上るびらやながいおつ取そろへて、よ  
せくる敵を 三重待いたりかゝる所に、坂田の公平敵  
こしこゑまでむかふたる由を聞よりも、何様こよひ

ぬけがけをしせき所をふみやぶりかうみやうにせんと、人をもつれず只一人しづくと行所に竹つなも敵のぢんのはりやうをみんだめ、一人ぢんやをしのび出こしこゑにおもむく道にてはたとあふた、竹つなみて是は公平いづくへか、公平聞て御へんの行所へ參、是く公平それかしはもしみかたのわか物共かぬけかけせん事もあらんと、せひせんために出て有、公平聞て其事に候、我もし若物共がぬけがけ致ば同心の心がけなり、御へんの心とさのみちかいはなきは、あゝきやうたくしや竹つなとふり切てゆかんとす、竹つなしばしと引とめ、ぬけがけもさきがけも事によるひらにとまりたまへ、又此金平かことにおいてはおかまい御むやうく、いやさひらにくとたがいにあらず所へ、ほうめいさだかげすへはるこよひぬけかけをしほまれを取らんと三人打つれしづくと行所に、竹つな公平に行あい是はくしてく方くもぬけがけ成か、公平おどろきはつ扱もく我一人のはまれをとらんと思ひしに、竹つなにあひつれがおほくなりたると、一どにとつとぞわらいける、よしこのたとへにつれあ

れは三里まわると、げれつのことばに申なりいさもろ共にぬけがけせん去ながら、つれあまたにてはぬけがけにはあらず、つれがけにてこそあれよし何がけにもせよ、我く五人かゆう力にて只一もみに打やぶらんと、五人打つれそれよりもこしこゑさしてぞ三重いそぎける、程なく城にも付しかば、竹つなせき所に立より内のていをみてあれば、いまたよぶかなりければ、す萬のぐん兵かふとのしころこてすねあてをまくらし、せんごもしらすふして有時に公平先此門をおしやぶらん尤とて、五人一どにこゑをそろへもんのとびらにてをかけ、ゑいやつとおしければ、何かはもつてたまるべき山のくづる、斗なり、おしに打れしする物其數をしらず、ねおびれたるぐん兵共、あはてふためく所をはむらくはつとをつちらす大將やすきよ肝をけし、それあますなとげしすれば、我もくと切て出る其時渡邊大おん上にて、四天王かぬけがけよつくてなみをしらせんと、あく所なん所へおつつめく切ふせ残りしやつばら四方へばつとおつちらすやすきよかなはしと思ひけんかまくらさして引所を、渡邊をつかけむんずとくむ、ら

うとう其おちかさなり、竹つなをてこめにせんとせし所を、公平はせ來りかたはしよりもこくびやくみちんに取てなけ、扱やすきよをひつしはり、さきにおしたて五人手に手をひつくみ、みかたのちんへ引て入たる此物共か有様、むるい、きたい、めうふしぎのだけ物かなとて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

## 第五

竹綱公平ぬけがけ井きよあきさいこの事

かくて五人の物共、やすきよをからめ取大將の御めにかくる、頼義御ゑつきかきりなく、それ／＼とてかたはらにてくびをはね、さあらば敵おくびやうかみのさめぬ内にはや打立との御ぢやうなり、畏候とて我も／＼とかまくらにおしよせ、二系三系におつ取まはし時のころをぞ上にける、城の内にもかねてよいいの事なれば我おとらしと、きと口におりあいて敵を入じとふせぎける、中にも大將きよあきこしごへにてかいなくみへし、み方のはちをす、かんと、うでをさすつて引へたりける所に内よりせき次郎もりとし、あいばらくらんどちはる、多物／＼をひつさ

げいで方／＼をもうけのため、城をよい致たり、是へ御入候へと大せいの中へわつて入、はらり／＼と三重ないたりけり手本にす、むつわ物を、其數あまた切ふせゑ、物ぐさき軍やと、あたりをにらんで立たるはすさましかりける次第なり、爰によせての中よりもみの、國の住人おやまの源太、らうどうに長井の新八とて大力の物を引ぐしいかに新八それがしさき成くせ物とくまん、なんちは跡成さまたげ物とくむべし、と二人共にはしりかゝりいなやに及すむずとくむ、さあしつたりともみあいしがさすか敵は大力にて、二人共に取てふせくびふつ／＼とねち切、何と都せいにたてかたきはおはせぬか、なまくげばらをなぶつたるとはばつくんちがい申さんと、かふげんはいて引かへす、金平みて是／＼なにとことばにもあはぬ人／＼かな、爰になまくけの事存たるかのこつたり、ついでにくび取たまへ、次郎もりとし立歸りしれたる若物かい、事や、扱なんぢはいか成物ぞ、金平聞もあへずおゝそれは力くらべの後なのつてきかせんと、はしりかゝつてむずとくみ、こし車にひつかけ取てなぐる、あいばらすかさす金平か

たぶさを取引のけんとせし所を、めてにてこがいな  
取て引ふせ、うはおひ取て二人共にひつくゝり、何と  
なまくげのはたらきもちつとてごはき物なり、それ  
がしがなをめいとまでもわするな、くげの中にもさ  
かたの金平くげといふ物をと、ふりかたけてそかへ  
りけり、大將きよあきこらへかね、大だちひつさげか  
け出、我こそよこ將軍に十代のかうゐんたかはしさ  
京の大ぶきよしげがちやくし、しゆりの大ぶきよあ  
きなり、我と思はん物共はかけよてなみをみせんと  
て大おんにてひかへたり、爰に川内の國の住人石  
川きやうぶきよ正となつて、おもてもふらず打て  
かゝるを、まつかう二つに切わつたり、二ばんに山城  
の判官つねきよ出げんさんとかけよるをほそ首ちう  
に打をとす、三ばんにおはりの國の住人きぬがさ左  
衛門もりとしあますましきと切てかゝる、車切と云  
物にずんと切ておとしける、四ばんにさがみの國の  
住人かねこの八郎そこをずなとかけよるを、から竹  
わりと云物にぎつふと切ておとしける、五ばんにい  
かの國の住人はや島太郎となつてすきまもなくか  
けよるを、もろひざずんとなぎすへのつけにかへす

所をほそくびちうに打をとす所へ竹つなはせ來り扱  
もいさぎよきはたらきないかにきよあき我こそは渡  
邊のつながちやくしみたの源次郎竹つなと云物な  
り、いさせうふをけつせん清秋につこと打笑ひ、おゝ  
千ぎ萬ぎの敵より汝おや子を待うけたり、いざゝ  
くまん尤とて押ならべてむんすとかむ、竹つなかう  
の物なれ共、清秋事共せず内がらみにひつしめ四五  
間ぐはらりとなくなるひらりとかへり中にずんと立た  
るは、ひてうなんとの如くなり、あしふみなをす其ひ  
まにほうめいすかさすむすとかんだ、是をも事とも  
せずかたをこさせ大もたしになげたをす、渡邊とび  
本ノマ、とりゆんでのかいなをむすと取、ほうめいめてより  
しとゞだく、清秋二人共にゆんでめてにひつはさみ、  
城中に入らんとす所へ、公平はせ來りきよ秋かたぶ  
さを取てうしろへゑやつと引ふせ、たかてこてにい  
ましむる、定景すへはる二人の物がらめてよりもは  
せ來り、しけつなをいけ取いそぎ大將の御めにかく  
る、大將御ゑつきかぎりなし扱一々に首打をとし、今  
は本望とけたりとて都をさしてかいちん有、せんし  
うばんせいめでたしともなかゝ申はかりはなかり

けれ

寛文三癸卯年九月吉日

# 菅原親王

きんひらみやくろんの事

## 第一

すがはらのしんわう

さてもそのうち、それおもんみるに、君かみにあつて、まつりごとすなをなれば、國とみたみやすし、きみしものれいたしからざるときんば、かならずこつかみだるゝなり、爰に源のよりよしこう、あさひ將軍もらずみがざんげんゆへ、天子のちよつかん身のうへに、むじつのつみをおはり成、あつたのみやに、す月をくらせたまふといへども、くもらぬかげのいさぎよく、ついにさんにんもらずみを、御心のまゝについはつあり、こたひ花さくみよのはる、つきせぬ御うんぞめでたけれ、いくさしづまつてよくしつ、みかたのうちじにてきのくひかずさがけぶん取其しなじな、御ざんみ有ちやうめんに、かきしるさせつまびらかに御らん有、まことにこゝんのめいしやうやと三重かんせぬものこそ、三重なかりけれ、しかる所へはなそのゝさいしやうゆきふさ、都よりちよくしと

して、卯十一月二十五日に、あつたに下ちやく有、大くじがたちに入せたまひ、よりよし公にたいめん有、げきしんちうばつ天下そうくゝのたん、今にはじめぬちうきんとはいひながら、ことにゑいかんあさからず、いそぎしやうらく有べきとの、りんけんなりとちよくせんのだん、いとしづかにのへさせたまふ、頼義りんげんつゝしんで承はり、かしこまつて候去ながら、ゆきふどの事をしづめて聞たまへ、それ君はかみにあつて、しんのめぐみしんな下にあつて、ちうをはげむ是天ちつがふふうう、時にしたかうだうりなり、然に君ふ將のねいじんをちか付させたまひ、天下のためにかめいをなげうち、さんやがうがをすみかとし、ちうやにせきをやすんせず、ろうをつくし頼義を、ひぶんの御ちよつかん有、ぶんにもあらず、ぶにもなく、ほういふたうのもりすみを、あさひ將軍ににんせられ、天下のまつり事をゆるさせたまふゆへ、しよ人のなげき國のついで、申もなかゝおそれ有、すべからく頼義なましに、國のふ將のやくとして、ばんみんをすくはんと存ゆへ、にんじかたき力をはげ

み、どくしんすでにめいほうたり、只かんきよしてし  
よくとぼしからんと、ふつつと思ひ切て候へ共、かさ  
ねてりんげんのおもむき、とかうのぢさんもつたい  
なし、時をうつさず罷上り申さんと、ちよくとうあれ  
ばすへみつくわんゑつかぎりなく、ていとに歸らせ  
たまひけり、かのもろこしのしゆばいじんな、たいふ  
のせんじをかうむり、にしきのひたゝれを、ふるさとの  
ゑいもんにかゝやかし、我かてうの頼義公はため  
しまれ成ちよくをうけ、すみなれたまひし花の都に、  
二たび歸らせたまふ御いくわうのめでたき三重うら  
やまさるはなかりけり、くはらくになれは、御しや  
うぞくはなやかに、きんりをさしてぞ上らるゝ、しよ  
きやう大じん御上洛めでたう候と、何れもしやうく  
わんはなはだしく、おくよりいでの中なごん國長  
をもつて、此たび上洛のだん、きみもあさからすおほ  
し召ざんねん少もあいのこさず、いよくてうかの  
まもりたるべき物なり、いつもながらのちうきんと  
かうりんげんにつくされがたしと、右大將にんせ  
られ、あさひ丸といふめいけんのくださるゝ、しかの  
みならずよいへをばむつのかみにふせさせたま

ふ、頼義たぐいなきちよくじやうのだん、かんるいき  
もにめいじ、とかうのちよくとうにもおよはれず、あ  
りかたし／＼と三重ごせんのだゝ、せたまひける、其  
頃またあはさぬき兩國のしゆご、むら川ぎやうぶの  
太夫あきすへとてしよくぶたうのあく人有、されば  
さんぬる頃、あさひしやうぐんもりすみぎやくしん  
をくわてし時、天下いつたうせしめは、四國中國  
のたんだいにふすべきとのやくだくの下しふみをう  
け取、一門家のこいんぞつし都へ上る所に、もりすみ  
ははやさきだつてびしうあつたへうつてくだり、そ  
くさしやうぶにかけまけもんやうのこりなく打とら  
れぬるときく、こはいかにせんとあんしわつろう所  
に、ほどなくけんしいつたうしやうらくありければ、  
今ははやひくもひかれずいるもいられず、つるなき  
ゆみはぬけとりのごとくにて、たちい心にまかせず、  
とやせんかくやあらましとあんしわづろう所にげん  
し方より使はせきたり、あんないかうてたいめんし、  
是はふしやうよりよし公のかうけんさかた兵ごのか  
み公平よりのつかいにて候、あきすへどのはとくよ  
りのさい京たりと聞へ候か、御所の御禮をばなにと

ておそなはりたまひ候ぞきつとさん上有べきとの仰  
にて候と、あららかに申せばたごとはつと驚き、其だ  
ん秋すへに申聞せ候はん、是に御まじ候へといそき  
奥に入、よしをかくと申せば、あきすへすはやとどう  
てんし、扱いかゝせんとひしめく時に、家のおとなみ  
なせの兵衛進み出とかゝ御ひやうきもつてのほか  
成ゆへ、ゑんにん是有よし、それがしつかいと打つ  
れ、御所にまいりふるなしこのべんせつ、すいふん  
ちんほういたし申べし、しかしなからかさねてつか  
い來らんもぞんせず、其内に成ほど御身を取りだし、  
おもき御ひやうきのやうに御みせ候へといたる所を  
罷立、おもてをさしてかけ出つかいのものにしきた  
いし、扱もしうにて候あきすへはあくびやうにせら  
れせんごをみだし候ゆへ、御れいちさんいたされ候、  
此おもむきりよくはいなからそれかしさん上せしめ  
申上候はん、いざ御とも申さんと使と打つれ、みなせ  
は御所へぞいそぎける、其後に秋すへは、家の子ら  
うとうを近付、病中のていにさをかへよと其身はお  
くに入ければ、家の子侍其是ぞ誠に一大事とたゝみ  
を二でうかさねしき上さも有そうに取つくろへは秋

すへは大わたほうしにてかしらをつゝみ、いかにも  
取亂したるふせいにてよう／＼と立出、たゝみの上  
にむずとぎし、うたがいもなき病人によくにたるべ  
し、さるにてもみなせ何とかしたるらん、おぼつか  
しと相待所へ、大いきつてはせかへり、まづわにの  
口をはのかれ參候、御病きのよしを、さま／＼ちんし  
申候へは、頼義をはしめ殘輩はそれはさもあらん  
こつにくあればやまふ有人かいの、四百四病はいつ  
さし出べき其しれぬは、人の身の上と、取／＼さる其  
中に、れいのさかたの公平さらにうけつけず、もろこ  
しひしよのちりやく物かたりを引出し、せひそらわ  
つらいたるべし、むかいに打こせと既にあらきに及  
しを、色々へんせつをつくし、まつぎをは申ぬけて  
かへり候が、かさねてのせんぎにはなにとかあらん  
も存せず、誠に公平は物いふゑたに人にかはりて  
すさまししぐんぢんにておもてを合物なきはことは  
りなりと大あせ流しことつぶさにあいのぶれは、  
あきすへ聞て、あつはれ御へんなくもたはかり仰  
て歸られたり、重ねてのせんぎを相またばこそ、けふ  
の日たにくれ行ば、五十き三十きつゝせいをくり出

し、こよひ都の内を引はらい、ない／＼いひ合し九國中國のせいと、一しよになり、天下のとうらんつちをかへしくもをたて、すきし頃あつたにて、うたれし輩が、かばねのはちをきよめ、身の本くわいをもたつすべし、とくして日のくれよかしと申もあへぬに、兵ごのかみあんないなしにつつと来る、秋すへは身のうせはてと、にわかになくらを引よすれば一門家の子は色をへんして爰をせんと、かひんやうす、公平ふへいえしやくもなく御めんなれ方々と、ねめ付／＼とをり大びざくんでうとなをり、いかに秋すへ殿、いれいのよし君聞召され、御みまいの爲に公平をつかはされ候、げにも以外とみへたりいてさらはそつとみやくをうかい申さんと、よにもあらくてをむずと取ゆんでめてや、しはらくかんがへ、くはん／＼と打うなづき、おゝ取て候村川殿、それみやくの次第といつは、三ふきうかう、こぎうそくしや四きのみやく、なん女はんみやく七びやう八りくどうやしのみやくなどゝてさま／＼は有とはいへ共、我は只物のふの斗爭、人のしんていの誠いつはりのみやくをよつく取おほへたりそも／＼御ぶんが煩はもりすみといひ

合かせの爲都へのほりぬれ共、もりすみうたれぬ、我我はていとへ入、なましいひくもひかれず、まついれいとかうし時をのべげんし方へゆたんをさせじせいをうかい國に歸り、一せんをはげまんと、てきをたばがるそらわつらいと取たるか、ちがいたるか、ぎばへんじやくにもまさりたるみやく取の大めいじん、さかたの公平と云くすしがけんし方に有内は、にせ煩はむやう、かやうの病には御所にめいよのくすり有、一ふくのみてみたまへとこかいな取てひつたつる有あふもの者共是をみて、こはろうせきなり去とてはかんしよくのおとろへ様にて誠いつはりはみへ候べし、さすが兩國の大將をいかに、てうしなれはとて余り成事共なりと、一どにはらりと取つく、公平につことわらい、それがしがてにぎつたる物は、天かさかさまに打かへる共、はなれましそれ人のかんしよくは、一日しよくせす一やまとろます只ひたすらに酒をのみけつきを上引あくれば、こたいのちづに上りまなこすじはり、かんしよくおとろへる物なり、日本ぶそうの公平が、一たび取たるみやくはたがうまじ、びろうなりおのれらと、四はうへばつ

と取てなげ、むら川をさきにおしたて、御所をさして  
そかへりける、公平かふるまい、きせん上下おしなへ  
みなかんせぬ人こそなかりけれ

## 第二

よりすみゆうれい井あきすへさくびやう

其後兵ごのかみは、あきすへをひつたて御所に歸り  
まつ其身一人御前に畏、それかしは村川かたちへ打  
こへ、斗事のさく病ひつちやうみなし候間、ひつたて  
參候ちこくうつさず御前にてくびねち切てすて申さ  
んとすんと立を、君しばしとおさへさせたまひ、そら  
わづらいはともかくもかの村川はもりすみ一身の者  
なればとかくちうばつすべきなりさながら、かれ  
をそくさにせつがいせは、中國西國にいまだのこり  
しもりすみ一身の輩、扱は我もくとかくのがれぬ  
とがなりと、みな城くはくに取こもりなば、國のさは  
きとなりぬべし、せんずる所かれがとがをかくし、  
一たんたすけおくならばきうしうのぞくと共、村川  
すでにゆるさるゝ上は我くもべちぎはあらじと、  
みなく都へ上るべし、時に、一どにめし取のこさす

うんきをはね、諸人のみこりにさらさん事、ばんみん  
のさはぎせいたう是にしかし、いかにく御ぢや  
うあれば、公平承あつはれ道にあたりたる御けいり  
やくにて御ぢ候、か程の御ぢりよにてこそは天下の  
ぶ將共そなはらせたまふと、ふかくかんし御前を罷  
立、かたはらにおしこめ置たる村川を打つれ、御前に  
ひざまづく、ぶ將御らんし、いかに村川、頼義天子の  
げきりんかうむり、てうてきとなりぬる事なれば、め  
んくもりすみに心をつうし申さるゝ事、うらみ  
共存せず、其上御ふんのせんぞは代々打つきたう  
けゑちうしんの家なればせんかうのよしみを以、し  
やめんせしむるなり、いこそはたしなみ申されよ、か  
つうはじよのおきても有百日が間は、しゆつしをや  
め、かたくへいもんいたされよ、とくく有けれ  
は、あきすへ二のいきはつとつきさん候それがしも  
りすみに一身とは皆人の申なしにて候、御悦びの御  
禮におそなはり候事、ぎやへいもつての外にてせん  
ごふかく候ひし間存ながらぶれいに罷立候とかく有  
かたきは御かうをんと御前を罷立、ひとへにゆめの  
さめたる心ちにて三重やかたをさしてそ歸りける、

宿所になれば、家の子らうどうこは存の外成御きたくかなと上下さゝめきわたりける、秋すへ聞てさればこそおもひの外成仕合にて、かやう／＼の次第なり此うへはおきてをふかくあいまれと、四方の門をかため、かまいてみたりにしゆつにういたすなと人をも入らず出もせず、引こもつてぞいたりけるつねにもとう物とてはそらはう／＼とふく風まど打よの雨ならでとおとづれかはす物もなくあまりにわびしき折からなれば、らうどう共を近付、かくむもれ木と成事は身より出せるざいとはい、ながら、思へばあまりにむねんなりと、又あくしんの引おこし、そば成びはを取上是こそもりすみのかたみなり、されはしていのゑんなおやよりもふかきとかや、かの天ぢくのしゆば大じんなししやうのために八つざきにせられ、もろこしのどんらんな、しのめいにかはり、とちのゑぢきとなりためし有、我も十四年が聞ひわのひきよくをならいたるもりすみのしおんをば、かばねはやぐはいにさらす共、一たひはほうせん物なむゆうれいとんしやうばたいと、ゑかふしりうせんたくはくやうしんそこの三きよくを、かんにたへてひき

ならず、誠につたへしばちのおと三重心もことばも及ばれず、さもしん／＼とすみわたりたるにおもより、よにあやしけ成物、すご／＼とあらわれあらなつかしのひきよくやな、我そすぎにし頃あつたにてほつせしあさひ將軍もりすみかばうこんなり、いちねんのまよいにて、しゆらのちまたにちんりんする身くるしみ思ひやられてたまはれ、よくもしていのよしみをわすれずたむけたまふびはのきよく、しんいをやすめ候なり扱も此度頼義が御へんをたすけおく事しんじつと思ひたまふ、あさましさよそれかしに一身せし、四國中國の輩をすかしのほし皆一とに都の内にてのこらすちうばつせんとのかれいやくにて、しはしかくてさしおくか、ついにはのかれぬしめいぞ、されば明日はげんし一とうやはたのやしろへさんけいせしむるなり、其間ていとをおち身のがいをのかれたまへあらなごりおしやとひたんのこゑはれい／＼としてすがたはみへずなりにけり、あきすへすぎにしむかしのいまさらに只まう／＼として立たりしがぼうぐたり我心らうどう共を近付、只今のを聞たるか、扱はかたきふかき斗事にて我をはか

くさしおきたり、とてもしせんず命明日やはたさん  
けいの其るすに、頼義のたちにおしよせ、みだいを人  
しちにばい取九州へはせ下りきう國のせいと一所に  
なり、今一ど天下をとらんせしめん何もよい仕  
れと、つがふ其せい二千よきひしと出立すでに  
其よもあければ、あやのかうじへふたてになりて  
取かけ 三重時のこゑおそ上にける、さればにや御所  
には頼義ふし四人むねとのかうけんのこりなく御供  
にてやはたのやしろへ御さんけい有、御るすの事な  
れは上を下へとかへしけるされ共みたい所の御めの  
と、くり原の庄司弓ひつさげ立出、何物なれば御門外  
へこまのひづめをけかけほうにそむけるろうせき、  
けみやうしつ名あきらかに、なのれくとよばはり  
ける其時あしけの馬にのつたるむしや、こまたじ  
たじとあゆませ、そも、只今はつかうの大將は村  
川きやうふの太夫秋すへなり、しいしゆのたんなた  
かいのしんでいにあきらかなれば、事あたらしくの  
ぶるにあたはず、只すみやかに此でんをあけてのけ  
とぞのしりける、くり原此由聞よりもからくと  
打笑い忝も天下のぶ將の御やかたをあけてのけとは

いか成事ぞ、聞もなれさることば哉、いかにあきすへ  
御ぶんなぢうざいのとがをしやめん成し其御かうを  
んをぞんしわにすれ物まふでの御るすを心がけ、又  
あくきやくをくはたつるだん我とひに入なつのむ  
し、天めいいづくにまぬかれん、かく云何がしはみ  
だい所の御めのと、くり原の庄司といふ物なり、なん  
ぢかやう成あく人は天よりはつはるとくのやうけて  
みよといふまゝに、三人ばりに十三ぞく取てから  
本<sup>ノ</sup>と打つかいもとはつうらはつ一つになれと、きりき  
りと引しおりひやうとはなつ、其やまつさきにす  
みたるさかいの九郎がくひのほねをふつつといき  
り、あきすへが馬の三つにはつしと立、是をいくさの  
はじめとしてさし取引つめいたりけり、其ひまに庄  
司かちやくし傳内兵衛かつみつは、物のぐかためは  
しり出父の庄司をしわけ、一もんじにわつて入ぎよ  
りんくはくよくに 三重ひ花をちらした、かいける、  
いくさ中ばの事成によせてのぢんよりも、七尺ゆた  
かの大男、あらいかはのよろひをきぐんばい打はひ  
つさけゆらりとあゆみけるかみ方のせいはたと  
にらみ、よになまぬるきいくさかな、しごくうつさ

はやたさんけいのげんけのぐんせいかけ付すこふ  
る大したるべし出／＼それがしたゝひとともにふみ  
つぶし、みだいをそくぎにばい取西國下向をいそか  
ん日頃ことばをはなせし國山がはたらきみよとい  
ひもあへず、もつたるうちをはかしこへなげ、下人  
にかづかせたる長刀おつ取むかうてきをさいはいに三  
重はらり／＼となきにける時もうつさずはやりおの  
わか物共三十六きまくらをならべうたれければ、今  
ははやおもてを合物もなしすでに御所中色めきたつ  
たりけり、くり原せうし是をみて、あゝしなしたりと  
太刀ひつさはしりかゝりかけつはづいつ時をうつ  
してたゝかいしが、國山なにとかしたりけん長刀の  
えをまん中より切おられあわやとみゆる所につつと  
くゝりむづとだき、ゆんでへ、どうと打たをしくび水  
もたまらずかき切り、ちやくし傳内兵衛父かさい  
こをみるよりもはつといふて、一もんじにかけいつ  
てむづとくみ、おのれおやのかたき成物をほねはみ  
じんにくだくる共、くんたる手をはなさしなむうち  
のしんゑいや／＼とせいきをもんではげめ共、力ま  
さりの國山にて物のかず、めてへひつかけまつさか

さまにけたをしくびねち切てかはとなげと有所へさ  
つと引もはや人はなきぞかけ入／＼とげぢをなす、  
いまはげんしの御うんこれまでとみる所に六十斗の  
にかうつげのぼうひつさげ、すいさんなりおのれら  
さかたの公平が母が、是に有はしらざるか、出てな  
みの程をみせんとつげのぼうを水車にまはしむかう  
物のまつかうにくる物のおしつけほろつけくさずり  
のはづれあたるをさいはいに三重はらり／＼となき  
にける、いまた時をうつさぬまに、くつきやうの兵共  
かすあまた打ければむら／＼はつと引にける、國山  
みてすいさんなりとおがみ打に打をちやうとうけゆ  
んでへくゝりたぶさを取てくびふつつとねち切け  
る、せらだ兄弟あつはれ己は女の身としてしれ物や  
ととんでかゝるを、心へたりと一しよに引よせ力に  
まかせしめころし女も女によるへし我と思ふ物あら  
はかゝれ／＼とよばゝれとおちてそうなくちかつか  
ず、只一人にてみだいのごなんをすくいける、にか  
うの力げにも日本ぶさうの公平が母かなと、てきも  
み方もおしなへて皆かんせぬ人こそなかりけれ

第二

あきすへむほん井しんわうをすゝむる事

其後あきすへは御所をそくぎに打やふり、みたいをうばい申さんとたくみしちりやくそういして公平が母にさん／＼におつ立られ、まばらになりてひかへしが、かくてぢこくうつらば、やはたさんけいのげんしの輩はせ歸りなば身の大事に及へし、とてもかなはぬ物ゆへにいくさはもはや是までなり、かさねてくわいけいのはぢをきよめんと馬引よせ打のり、残くんせい引ぐし三重九しうさしてそおちて行、是は扱置つくし大名べつきちくごの守みつあき、これとふひごの善次まさのりは、村川しやめんのよしを聞、扱は我／＼もしさいはあらじとはやく上落せしめとがをしやしてかうさんせんとよを日についてのはる所にびつちうの吉村にてはたとあい、たかいは是はと一しよにより、まづあきすへ都のしだいをつぶさにかたれば、いづれもよこてをてうとうち、こは聞しにたがいたる事共かな、ごぶんもりすみ一みせしとかをゆるされほんちあんどのよし聞へしからばわれ／＼もべちぎあらじとないだんしいち

づに是までのぼり候、あきすへ聞て、もつ共さやうにきかれたるこそことほりなり、それはめん／＼を都へすかしのぼせ、いつしよにはろぼさんとのはかりことにて、それがしをはずししか問わざとゆうめんいたしたり、とにもかくにももりすみ一身のともがらをは、ねをたつてはをからさんとのせんぎなりと、大いきついでかたれば、二人の者扱はのかれまし本ノマ身にはまつて候な、此上は天下をくつかへさん斗事、たかいはねをくだくべし去ながら我／＼斗にてはしこくのせいつくまじきあはれねかはくば然へき大將もがなとしんいをくだきせんぎす、あきすへすゝみ出爰にくつきやうの事こそ候へ、せんていのわうじすかわらのしん王御力はん人にすぐれさせたまふにより、うんしやうのもてあそびをばよそになし、ひたすらきうばの道を御けいこ有し御とがによりはうきの國なほのみなとにる人ならせおはします、いざ此君を御大將とあふぎ奉らん人々いかにと申せば、何れも誠に御位と申御きりやうといひ是にましたる事あらず然共かやうのぎにくみなさるべきや御しんていの程計がたし、あきすへ聞て其たんを

ば村川にまかせられよ、いざやへんじもきうにおのおの打つれ 三重はくしうさしてぞいそぎける、なはのみなとなりしかば御ざい所はいづくやらんとあなたこなたとたつぬる所に、爰に有はまかげにまつ一村しげりあいたる其中にしばをりむすびよにもあやしき竹のかきくさばう／＼とすす内よりもことのねかすかに聞へける、村川はつと思ひ立より聞ばうたがいもなきしんわうのつまおとなりよはさまさまにへんくはすれ共かはらぬ色はひきよくかなとし本ノマばしのとぼそのあれまより、さしのぞきみればいにしへみ奉りし御すがたとはばつくんにかはり、御かみそらさまにはへ上り、ひげまう／＼たるふせいでこと引ならしおはします、其時あきすへこしよりよこぶえ取出しことに合て 三重せいはいはをこそふきにけれだい 第二のけんのこゑさく／＼としてうなばらまでもきよやかにしんわう本ノマぬいかなかぎりなく、かくすぎぬればあみどをさりともし開きあきすへを御らんし、こはゆめかうつゝか扱たいいまはなにのためぞ思ひよらざるふえのおとつれ、あらむかしこいしやいかに／＼とのたまへは、あきすへつ

つしんでひざまづきさん候何事も皆むかしと成はて候、すべてよのさだめなき御事今にはしめぬ事ながら、御すかたをおがみ奉にうつゝとのみ存候、扱只今さん上仕だんべちぎにて候はず、もりすみがいごより此間の都のてい、一々次第にあいのべ、君はばんじやうの御あるし十せんのでいゐにもそなはらせたまふべき御身の、さしておかせる御とがなくかゝるゑんりにうつされさせたまひ、よにもつたなきしまのゑひすとなりはてたまふだんむねんとは思召れすや、それげんざいのくわをもつてみらいの引となればか、かくむもれぎとくちはてさせたまはん事、のちのよまでもつたいたく存候、いそいでぎへいを上させたまひ候へ、是にまかり有候ともがらは、きくちちくこの守是とうひごの善次まさのりといづれもすだいきうせんの家としてぶゆふのほまれ其なをあらわし候、兩人さん上仕候うへは中國兩國はみな御はたしたにて候、すべからく天のしゅんくはんた、今なりはや／＼思召立せ給ひ候へと。じんづうほうへんのべんせつより、なをあきらかにことはをつくしすゝめける、しん王つく／＼と聞召はかなやもりず

みはそれがしときんししゆの<sup>もと</sup>としてす年のよし  
みなりけるに、うたれぬこそふびんなれ、我此四五  
年が間は、佛道に心ざししやばのまうしうをばむち  
うのたはむれと心のあかを一すぢにうちみがきむ  
じやうばだいとくわんねんする所によしなきいまの  
物がたりにてまたあくしんむねのけふりとたちのほ  
る、つらくういをあんするにほんのふそくぼだい  
しん、あくといふもせん、おにあればこそ佛もあれ、  
三がいむあんゆによくわたくのちのよのかしやくの  
つみはともかくも、一つはもりすみがきやうやう  
といひ、又は御へん是まではる／＼とおとつれ来る  
心ざし、いかでむなしかるべきや、にんにくじひのし  
んていを、じやけんほういつのしゆらのちまたに引  
かへし、けんしの者共がゑいくわのまゆを打やぶら  
ん、我思ひ立上は、頼義がいせいも公平がゆふりき  
<sup>ホノマ</sup>も風のまへともし火ならんそれ日本なしんこく、何  
事もしんれいにたつせずといふ事なし、然ればしん  
わうとううらにうつされて候此聞せんあくにつき此  
國はつさきごんけんを深くあふぎ申なり、かのしん  
せんにてはたを上ぐわんしよをおさむべしと、御も

んのはたをしたゝめさせ 三重はつさきさしてぞいそ  
ぎたまふ、はつさきになりしかはごもんのはたをお  
したて、へつたうをうを御まへに召れ、しんりよにか  
なふやうにすいぶんいのり申されよまつよろこびの  
はしめに、しやきんひとふだたまはれば、べつたうゑ  
つきかぎりなく、しんじつの御きねんなどかはのふ  
じうなからん、こなたへ／＼としん王の御とも申三重  
しんせんさしてそまいりける、おのづからにやにこ  
りゑのしゆらのちまたをいのるにぞ、おりにふれた  
るかふとぐさ、みなみの山はやはぎがたけ心ならず  
も物のふの、引やひかずやしらいとの、みなぎりおつ  
るたきつせは、いはにくだけてちるみつのなられの  
すへはかめかいけ、西はよろひかみねつゝきこす  
へ誠に物すごく、ましやうのすみか大せんも程ちか  
し、北はなかぬまそこふかくこてさしばらやゑびら  
がいけ、みこしにみゆるまつさきこすへにさきのと  
びかうはげんしのはたかと、うたがはるゝひがしはぼ  
だいじたてがたにした行みづもこほりとぢ、そらふ  
く風もすさまじし、身にしみ／＼とかみ心、かすのら  
いはい奉る、ヲキシん王あふぎ取なをし、そも／＼此

御神のらんしやうはいかに シテへつたう承日本かい  
ひやくじんむ天わうだい三のわうじとくらのないし  
ワキさて此所へのくわんしやうはいかに シテちうあ  
い天わうのきようみづのへたつ三月十七日 ヲキげに  
ありがたしいか成人のこんりうぞ シテたち花のうだ  
いしんみつあきの御こんりう弓やかみのじゆごじん  
たり ヲキあふあおくべし／＼さらばくはんしよをさ  
さけん <sup>二人</sup>爰にしきりの年より此方けんしの一とう  
四かいを我まゝにおうりやうし、ばんみんをくるし  
めもろこしにも、我てうにもさらになきせんた  
いみもんのあく人なり、さるによつてしん王國の  
ため人のため此大事を思ひ立、しんめいわくはうの  
御まなこせんりばんりにかゝやかしかつ事をいやく  
の内にみせしめたまへ、然においてはとうしや日本  
だいらやうごんげんとみやいをあらため申べし、ま  
づ此とうざいの山／＼たに／＼引たいらげ、二百よ  
ぢやうにちをひかせ天ちくのもんしゆ、せんたいと  
うのわしのみやまをうつしつ、七だうからんたまの  
くうでんしつほうのまきばしら、しやつかうのゆき  
けたるりとひら、あさやかにほりのかうらんやつ

わたし、玉のたるき五しきのてん上さんがうのけた  
うつばりあやのみちやう、にしきのれんだいこがね  
のとうろう、三百六十二六じちうにたへまなくあや  
のはたほこ、百ながれじやうらくがせやうのかせに  
まかせてひるがへしあんやうせかいをまなぶしめ  
のうのとおり、しろがねのし、こまいぬ、いがきはか  
うやうらんけいし、しゆろうくわいろう四のもん、し  
やうごんしつほうちりばめて、みきはのいけにはほ  
うらいさん、四せつのしきをまなびつ、さんここ  
はくのはしをかけ、ごくらくじやうとはまのまへに  
むねのはちすくうにひらき、五百よ人のねぎかんぬ  
し、八十四人のみこをそへ、さつ／＼のすいのおと  
かぐらおのこのふくふ忍に、こすい三ねつたちまち  
に、むみやうのゆめをさますべし、あふきねかはく  
はかたきをはんにきりはらい國土安おんぶうんち  
やうきう、さいはい／＼うやまつて申す、すがはら  
のしんわうなむきみやうちやうらいと、くる／＼と  
まきおさめないじんにこめにけり、しん王のひつせ  
いすへのゑいくわはしらね共、時に取てのふんしや  
うやと皆かんせぬものこそなかりけれ

#### 第四

ちかとし心がはり井女房じがいの事

そのうちすが原のしん王はぎやくとう共がすゝめに  
より、むほんを思ひ立たまふ、因のそとうもつ  
ての外成よしすでに都にかくれなく、頼義聞召れむ  
ねとの御かうけん御まへに召れ、かうべをはぬべき、  
村川めをてのひにし國のらんとすことよしなかり  
けるけいりやくと、めんく頼義がしんていをさつ  
したまはん口をしさよ、さればかのしん王のぶゆう  
はもろこしのこふうにもおとるましきやうに聞及た  
り、其うへ天子のわか宮なれば、御位と申しよのぎや  
くしんとはかはるべし、おのくつくとないだん  
いたされよいかにくとちやうい有、時に公平すゝ  
み出こは御ぢやう共存せずや、尤しん王はせんてい  
第二の宮とは申せ共、あくきやくてうくはたるによ  
り、をん國にながされたまふ上は、只ひとへにいな  
かゑびすにあいおなし、又ゆうりきの事は天ちくの  
いた天わうもろこしのしゝめい、日本のあら神將ぐん  
一どにしゆつしやういたし、とうざいなんぼくより

せめ來り候共、此公平を持せたまひ候うへは、さのみ  
御どうてん有べき事に候はず、たゞふひんに候  
は又此たびのいらんにも、いくらの物がそれがしが  
てにかゝりひがうのしにお仕らん、むざんさよ是皆  
いんぐわれきせんのどうりてんなるかなやしん王の  
くびも今五十日か三十日か内にむくろと成たまはれ  
んせうさよにくしと思召さるゝ村川め、て取に仕て  
御めにかへ申さんはやくくといさめ奉る、大將  
御ゑつきかきりなくげにたのもし、さらはよい  
たされよ、都の御るすにはちやくなんよしへ公に、  
三うらのわだ左衛門、かまくらの權五郎を相そへの  
こしおかせたまひ、御ともに公平國つなをはしめ、  
つかう二まん五千よき、其日のむまのこくにくはら  
くおん立あり三重せんようだうへ急がるゝ、是は扱置  
其頃又、みまさかの國のちう人、おくのゝこんの太夫  
ちかとしとて、るいたいげんけへちうをつくせし侍  
有、然にしん王よりふかくたのまれ、事らつきよせ  
ばいづも、ほうきみまさか、三か國さうい有ましきと  
のあんどの下しふみをうけ取たちまち心へんじ、家  
のかうけん吉田の源内ひろつぐを人なき所へまねき

よせ、めでたき事もあれ、是くはいけんいたせとく  
だんの下しふみを取出し、つらくよの中をかなか  
みるにげんしのいせいもはやきへ方のともしびとお  
ほへたり、それ弓取<sup>は</sup>ともかくにも身のりつし  
んこそまつたいまでもほまれなり、さればげんけの  
人々いつもの吉れいとしてそれがしがたち<sup>に</sup>打より  
しゆつちんの御門出あらんなひつちやうかさねてよ  
りどくしゆをしたゝめ置頼義公公平國つなをはじめ  
むねとの輩のこりなく、とくの酒にてもりころしい  
つもほうきみまさか三が國をしん王よりたまはり、  
ゑいくわをながくしそんにつたへんと、おもふはい  
かゝあらんとかたりける、ひろつく承何共御返事も  
申さずさしつふいていたりしが、ややあつて扱も扱  
も御しんていには天まはじゆんが入かはりて候か、  
よくあんしても御らんせよ、せん年らいくはうはく  
しうふなの上にあらきの入道がこもりしを、御たい  
ぢ有しより此かた、吉れいとして二代三代今におい  
て相かはらせんやうたうつくしへの御しゆつち  
んには必是へよらせたまひ、御門出いはせたまふ  
こと、しよ人のうらやむ所なり、それ弓取のりつしん

と申はさきかけぶん取のちうをつくし、國こほりを  
ゑたるこそせんぞへのかうくゝなからんよまてのほ  
まれとは申せ、すねんのよしみふかき君をどくしゆ  
にてせめころし、其ほうひに三か國をくわんりやう  
有、ゑいくわにはこりたまはらんとは、おそれながら  
弓やのみやうがつきはてさせたまひたり、されはか  
うしのきんげんにもふぎにしてとめる物はうかめる  
くものことしとかや、よく御しあんましませと、  
はいかりなくかんけんする、され共<sup>本ノマ</sup>ろくにやく口に  
にがしとかや、あくにんのくせとしてせんをはさら  
さら聞入ず、あつはれわたのは物しりがほ成ことば  
かな、そうじて侍のぐんほうにかうしろうししやか  
などのかきずて、更に入べき事なし、なんぢすいさん  
がましきしゆ行を引人のうへをはいさむれ共、身の  
めいをそむくはきつくわいなり、少もいきに及なら、  
まつたくきよ所をさらせしと、刀のこいぐち二三寸  
ぬきくつろげ、いかにくゝとつのかくる、源内すこし  
もさはがず、御ちやうにては候へ共、ぐんほうと申も  
もつてはひとしきせいじんの、御しんきれちしん、五  
つの道にたかうては、何事ちはか行べきとはぞんせ

す、そうじてしうのひをなすとき、したがはざるはし  
んかの道、さればひかないさめにむねをさきごし  
しよはみづからつるきにふす、たとへ身は八つぎき  
に成とてもかやう成悪きやくよしとはいかてか申候  
はん、御先祖へのかうくすへくまでの、はいへ  
のちじよくを思召たまは、まつひらとまらせたま  
へ、かく申だん、にくしとおぼしめされなば首を召  
れ候へと、たち刀をなげすて西に向てがつしやうし、  
命をおしますまいさめける、ちかとしみておのれが望  
までもなしそむくにおいてはいかてかたすけん、あ  
つはれぐにんなつのむしやと、くび水もたまらず打  
おとすはなさけなかりし次第なり、爰にちかとしが  
さい女は、しやうじをへたて、はしめよりの次第を  
つくくしと聞、こはなさけなの思ひそやとむね打さ  
わぎおはせしが、らうどうかうたれしにおとろきあ  
いのせうしをさつとあけ、これはいか成事ぞちかと  
し殿、只今ひろつぐが申せし事皆御ためにて候に、か  
へつてあしく聞召ちうたいのおとなをせつかい有  
は、御うんのすへとおほへ候、此つる若か行すへまて  
の事を思召たまは、思ひとまりたまへとなみだ

をなかくとかる、ちかとし聞てはらをたて、誠に  
女はぐち成物かな、其つる若か事を思へばこそか、  
る大事をくわたつる、やがて三か國のぬしとなり、御  
身もゑいぐはのまゆをひらかせん、家のはんじやう  
何か是にしかしと、そゝろにいさみをなしにけり、  
女房此由聞よりも三か國のあるじとならせたまはん  
事誠の道にて候は、いかはかりうれしかるへきにち  
うたいのおしうを打、よこしま成ゑいくわ此よはわ  
つかゆめまほろし、後のよのかしやくのせめのおそ  
ろしさよ、むかしよりしうとおやをほろぼし其身の  
立たる事は候はず、此ことにおいてはひらにとまら  
せたまへやと、たもとにすがりなげかる、ちかと  
しいよくはらを立、女さかしうしてうしをあきの  
ふ事かたしとは、是げれつものいへることはなり、た  
てに行か道やらん、よこに行か道やらん、何としてか  
しるへきむやうのすいさんいたし、我ばしうらむる  
なとはつたとにらみおくに入、どくしゆのよういを  
かまへける、女ばうつまのうしろすがたをつくく、  
打ながめ、扱もしやけんのこととはやな、我つまながら  
かたきとは今こそ思ひしられたり、此上は、何とせい

する共かなふまじ、そもわらはかせんぞは多田のま  
んぢうより、けんし代々の御下人なり、其上みつから  
は九つより頼義のみだいにさまにかしつき、年月の御  
おんそうかいよりもなをふかしいかにとしてか、ぢ  
やけんのおつと、いつしよになり、君の御命をとる  
べきやとは云ながら又此事をちうしんせば二せとか  
ねたるつまのそ人となりぬべし、とにもかくにもは  
かなかりけるうき身やと、ひとりくどいてなくばか  
りおつる泪のひまよりも、よくく物をあんずるに  
しやばはかりのやどなり、たれかちとせをたもつべ  
き、むかしの人もなのみ残て今はなし、かくつらきよ  
の中に、いつまでくさのいつまでか、ながらへ物を思  
ふべき、じでのたびちに赴かんしする命はつゆちり  
程もおしからず、いまだちぶさもはなれぬ此わかを  
ふりすてゆかんむざんさよ、が程にうすきゑんなら  
ばなどたいたいにてゆ共永其成ならば、が程に物は  
おもはじ物、すでにみそしに及まで、子のなき事のか  
なしさにとかもあらじのよそにふく、かみや佛をう  
らみはび、さま／＼のくはんをたてまうけし時のう  
れしさ、あゝいま／＼よしなき此若やと、おもふも

本ノマ、

つまのあくぎやくゆへ、君をうしないよにあらんと  
思ふ共、のかれぬてんのはちを請、我身もほろびたま  
はんはかなさよ、おこともながらへ有ならばおさな  
しとは申共、ちしよくのやいばにかゝらんこと、かゝ  
みにかけておぼへたり、たにんのでにかゝりかばね  
のはちをさらさんより、母がてにかゝりきよくよみ  
ちにおもむけよ、たま／＼人がいにしやうをうけ、い  
まだ三歳にもたらずしてむなしくさんつに歸らんふ  
びんさよげに何事もさだまるがう、みつからばしう  
らむるなと、ふところよりまもり刀を取出しするり  
とぬきがいせんとすれば、あいすると心へにつこと  
わらう時にこそ、めくれ心もきへはて、ひし／＼と抱  
き付せんごふかくになげかるゝ、はるかに有てつる  
わかゝ、かほつく／＼と打ながめおさなき物とては  
かなやな、只今がさいご成によみちをしらぬあはれ  
さよ、とてものかれぬ道しはの、日かげにきゆるつゆ  
の命、母ばしうらむなつるわかと取て引よせ心もと  
を二刀つゝけさまにさしとをし、あけに成しかいに  
打かゝりきへ入やうにぞなげきける、せきくる泪を  
おしとめたゝ何事も／＼うつればかはるよのなら

い、をさな車のゆめの内、あすまでたのむ身にてなし、うきよのまうしうはらさんと、もつたる刀を取なをし、口にふくんでかつはとふせば、きつさきはびんのかみをわけつばは口にとまり、三十を一せとしあしたのしもときへにけり、かの女房かしんていまつせのけん女是なりと、みなおしまぬものこそなかりけれ

## 第五

### 頼義九州下向并ちかとしさいごの事

其後ごんの太夫はどくしゆのよういかまへ、ありし所に立歸りみれば女ぼう同つるわかあけにそまりてふして有さすがぶとうのちかとしもこはそもいかにとたいばうせんとたつたりしが、みよりいだせるぎいなれはたれをかこたんやうもなく、おのれと物にくるいとんでひに入いんぐは人、今に三が國のみだいとあをがれん物かなり行ていのあさましさと、しかいをひそかにかくし、さしてうれいのけしきなく、さしきのていをかざりたて、頼義の御下向を今や今やと待いたるを三重にくまぬ物こそなかりけれ、

去程に頼義公、ちうやのさかいもなくいそかせたまへは程もなく、みまさかの國おくのしやうにつかせたまふ、ごんの太夫は兼てよいの事なれば御向に罷出、やかたにしやうじ奉り、まつ以せんれいあいかはらす御立よりなされ候だん、かもんのめんぼくとかう言上仕にげんぎよつくしがたく候となかへてうしかはらけ出し、さき／＼にもてなしける、ふ將御さかづき取上させたまひ、次第／＼にまはりける、あるじすはやじぶん今成と、いたる所を罷立、ないせうに立入御吉れいのだいにした、めおきたるどくしゆを取そへ、ふ將の御前に畏、頼義御らんしちんでうなりとくだんのだいを三どいた、かせたまひ、かはらけ取上たまへば、れいのどくしゆをたつふとつぐ、御命のあやうさ、風のまへのともしひ、すはやとみる所に、國つなあ、御もつたいなししばらくとおしとめ、ふしぎやな此酒は、其色きはめておうしきにして、ちやうしよりつきし時、むらさきのいとこのこくとく成かけ、御さかつきにうつりたり、さればおやにて候竹つなそれがしにかたり申せしは、しう國のろば將軍が、ゑいの國のりきし、三十六人を一じにもり

ころせし、おうしきしゆといふどくの酒は其色きにしてむらさきのすち有とつたへたり、よつてせん年ひとりむしやがつくし合戦にせん人のちりやくにて、もりころされしどくの酒に心を付てみたりしに、つたへ聞しおうしき酒にあいたがはず、若き者はかやうの事よつくみにあいたもてと、つね／＼しめし候はぬちかとしは代々御かうおんのいへなれば、左様の事は有まじきなれ共、きめいへ奉るものなれば、そつと心みしん上いたさんと、ざしきを立ていたるくもを取てかへり、くだんの酒に入ければ、くるり／＼とまいめぐり、次第／＼にくろくなり、づたづたにちぎれる、ちかとしあらわれぬるとこしの刀をぬかんとするを、公平ちうにかいつかみ、やあ何をするぞこくわしやめ、か程なみいたるざしきにてなんちか太刀かたな物のやうに立べきやと、たぶさを取て引上、それ／＼國つなと申せば心へたりどくだんのどくしゆを、残なくつぎこみ取てひつ立、のんだりやていしゆ、公平も酒のまんそれにてしやく仕れ、めづらしき酒よういのだん、しんびやう／＼と打わらいてぞいたりける、ちかとしとかうのことばなく

たゝんとしたりしが、はやあしもすぐみてはたらかすみる内に色へんし、あらたへがたやくるしやとはんし斗身をもんであかきじに、ぞふしにける、公平みてきみやう成や國つなと云もあへず、ないせうさしてつツと人けらいのものを二三人かいつかみおのれら此くはたてまつすくにはくじやういたせとせめければ、有のまゝに申ける、公平聞もあへず、扱はしん王よりたのまれて有けるな、身にもおゝせぬ三が國のよくしんかへつておのが身をはみにけり、ひとりこへ行しでの山さこそろしのとせんたるへきになんちらおつつき供せよと、くび一々にねち切あつはれ國つななかりせは、さし物めい將おにをあざむく物共がむさ／＼とあいはて末代までのそしりにあはんあやうさよ誠にわたなへとうのかたみのち系は残たり、かまいて／＼むさしのかみ年わかきとてゑんりよなくばんたんぐんほうつくされよ、たのもしたのもしとみ上みおろし喜ぶ事はかぎりなし、君聞召げに／＼竹つなうたれし後は、一はうのつばさおちたるやうに思ひしに、あいもおとらぬ國つなちほうのだん、是ばんせいのもといかたきたんめつうた

かいなしと、御えきなか／＼あさからさる所へ、いつもの國のちう人高田の十郎をねひろはや馬にてはせ來、すぐに御前に罷出、とつくさん上仕ことのたんちうしん申たく候へし、かたきに道をさへ切れ、ちさん仕候、扱もきやくしんしん王は、ふなの上によいかいきひしくろう城いたし候。したがう所のくん兵はつくし侍、十七くみせんやうたうさんやうたうの大名城七くみ、其外たいいせんの一ゆと國／＼のあふれ物共かすをつくしてこもり候、すへて其せい十五まんよき、いきをい天のひ／＼かし候とつまひらかに言上す、其時國つなす、み出誠にかのふなの上は、日本ふそうのなん所北は大せんにあいつ／＼き南はさるをとしかたに、西と東はちさかりにしてちう／＼のさる、しかたにもかよいかたきあく所に十五まんよきのくんせいけつせんとあいこもらばはなはだなんぎに候はん、よく／＼くんきの御せんき尤に存候と申上る、公平聞て何か程の事を大事とはあつはれおくしたる事ばかな、かたきは五百まん三百萬もあらはあれ、べちにことの有へきや、なましいにぐん法ちりやくだてにて時をうつしせんし軍は、只一い

きにもみつぶすこそ心ちよけれ、其うへ御ふんないまだ、みもせぬふなの上をあく所のせんきはさらさらもつて心へがたし、國つな聞てれいのあらぎ又、さしおこつて候な、されは年よりたる竹つなが申せし事をたによこかみをやぶるやうに申されし間、まして我／＼などが申事をはさだめて左様にあくこん有へきと存、今迄はすいぶんあいひかへ候へ共さき程申されしことはといふ、かつうは君の御大事と存所存のだんをあいのかへ候、尤ふなの上はそれがしみたる事は候ねどよく存たる道の候、其しさいといつはおやにて候竹つな日本六十四しうの山々なん所／＼てきの城に成べき程の所をはゑつにいたし、それかしをひそかに近付爰にはいくまがりの坂有、こなたは沼、かなたは谷からほりがんせきとせめやうのくん法こまかにしめし候ゆへ所／＼のあんない大方存候、さればせん年らいくわうくだんのふなの上をせめさせたまひし時にこそ、御身のしんふ公時は、ひぎの口をいさせそれかしかおふちつなは右のかいなに、流矢をうけとめ其軍殊の外なんぎにてわだんの事をめくらし、ようやくかたきを御たいじ有しな

ん所なりと、たび／＼かたり候ひし竹つなかせんけ  
ん今此時にあいあり候、本ノマ、同はてきをひらちへたばか  
り出し、事やすく打ほろぼすべきちりやくこそあら  
まほしく候とへんせつ其りにあたつてあいのぶる、  
公平くわん／＼と打うなつき、扱も竹つなはなから  
ん跡までをあんし、左様に心をくたきし事、誠に人間  
にてはなかりけり、なに、仕てもむかしの事が思ひ  
出されなつかしや、是よりいごは御へんを竹つなと  
思ふべし、只今のはそれがしかあやまつたり、かまへ  
て心にかけるゝな扱かたきを引出すべきけいりや  
くはいかに、國つなひざ立なをしさん候ちりやくと  
いつはみ方のせいを五百も三百もかたきの方へかう  
さんさせ、大將をはしめむねとの輩ちかとしにとく  
の酒にもりふせられはんしはんしやうにてぎやうぶ  
さらになはす、都へ引てや歸る、又やうかいに取こ  
もらんかいにか、せんとはかゆかざるせんざとり／＼  
なりとたばからば大將しん王をはしめ付そう物かし  
らけつきかちにしてしりよなき、たんちの輩なれば、  
扱はちかとしたばかりすましたり、都へひつかへさ  
ぬさきに、よはみにのつてほつつめ、うてと我さき

にと此所へ本ノマ、しろになり取かけ申べし時にみ方にはそ  
なへをとつくとさだめ、あとをよこ切一人も残さず  
打とめん事たな心をさすかごとし此度いかにと申せ  
は兵ごの守つく／＼と聞、はつめい成ちほうのだん、  
近頃おどろき入たり、げにも是へたばかりよせて、手  
まかせにぼつつめ／＼打ふせんな、うきよのなくさ  
み是成べしそれ／＼ようい仕れと、ぬまたはね川を  
はしめくつきやうの侍七百人、御前にめしなんぢら  
はかたきの方へかやう／＼にたばかり、よきじぶん  
のみてこなたへそう申せと事つふさにあいしめし、  
いかに國つな御へんのけいりやく父竹つなにあいも  
おとらぬあんじやかな、ちりやくは御ふん又かた  
きあいてのあらきわさは此公平がうけ取なり、是天  
ちわかうてき何とおこる共ひとへにこ鳥共かわしく  
またかにむかはんとするににたるべし、さんしの内  
に取ひしき國とゆたかにすべし、ばんせいらく／＼  
おとりあかつていきみをなす、公平がゆうりき國つ  
ながけいりやく、御家のたからは是なりと皆かんせ  
ぬ者こそなかりけれ

## 第六

あきすへさいご井公平國つなしん王をいけ  
取奉る

去程にすてに其よも明ければぬまだの與一國かとは  
ねかは源太みつとし公平國つなか下ぢにしたがへ、  
はたおしまき、七百よきのくん兵を引ぐし、ほうきの  
國へといそぎける、ふなの上にも成しかばあいをへ  
だて、けんし方よりかう人のよしたからかによは、  
れる、城の者共聞付大將の前に參よしをかくと申、  
しん王聞もあへずけんけの物共がかうさんとは心へ  
かたしとかくまつ大將ぶんの物斗こなたへめせ、畏  
て候と、とがにはしり出、二人の大將を共ない内に  
入、時に兩人つゝしんで畏、我ゝはみの、國のちう  
人ぬまたの與一國かと、はねかは源太みつとしと申  
物にて御さ候さればみかたのよはみをみすてかうさ  
ん仕候たん、ちか頃めんほくなくは候へ共、侍はわた  
り物、たが身の上にも有事にて候然はけんしの一と  
うせん年よりの吉れいとして、みまさかの國おくの  
のしやうに下ちやく有所に、こんの太夫心かはりを  
いたしどくの酒をすゝめ頼義をはしめむねとの輩何

れも皆、ぎやうふもかなはぬていになられ候、され共  
ちかとしをは一門けらい殘なく打とめ候によつて、  
此ていにてはかなふまし都へひつかへすか、さなく  
はなん所をもとめ、あいこもらんかと更にはかゆか  
ざるせんぎげんけのうんめいすへになりたるとみへ  
候間、はちをすてかうさん仕候と、さも有そうにあい  
のふれば、大將しん王をはしめ何れも皆扱はおくの  
が斗事其身はむなしくなりけれ共、かたきをはしふ  
せぬるちんてうさよ、左様のよはみの所をすかさす  
うつこそぐん方の第一なり、今ははや此ようかいも  
いらばこそ、はやうつたてめんゝと、木戸さかもき  
を引やぶり、上を下へとひしめきける、其時また、は  
ねかはすゝみ出、此度のちうしんと申、一つあんない  
しやのためと申、せんちんをは我ゝにたまはれか  
しと望ける、しん王聞たまひ、所望のだんしごくせ  
り、さらは一ちん仕れ、畏て候とまつさきに進めは、  
我おとらじとあいつゝき三重もみにまふでぞ三重い  
そぎけるされはにや、ぬまたはね川は、てせい引ぐし  
其せいはるかにかけぬけ源氏のごちにまいり、な  
んなくたばかりすまし候、しん王をはしめ城の内の

物共のこらず、只今取かけ候、ごよういあれと申せは、公平聞てしんべう／＼いかにむさしの守、きみやう成けいりやくかんし入て候かくてまづもとせん成に、それかしは道まで出そつとみて歸らんとはしり出るを、國つな取ておさへ、是程にあいかないたるちりやくを、ざんじにやぶりたまはんなおとなげなし、今少の内成にとつくと引よせ、所存のまゝにはたきたまへ、しはし／＼とせいすれは、公平聞て誠にあやまつたり、てきちかつくと聞、そゝろに心うきたち、只一時の間をちとせもまつごとくにおもはるゝ、はやりすぎてかたきをしろへ引かへさせ、わたのかしんいを下さし斗事をむにせん事のほいなさよ、さらはとつくと近付、思ひのまゝにひしぎつけん、みなこなたへ／＼と三重なりをしつめていたりける、あんの如くしん王すまんきをいんそつしこまをはやめてかけ來、とうざいなんぼくへてはけをなし 三重時のこゑをそ上にける、され其内にはおともせず、やゝあつて、公平かみおしみだき、よろいの上にめゆいのこそで打はをり、たち／＼とよろほい出、いかにもこゑをふるはかしあゝむねくるしやいかにかたきの物

共、さすが天下をのぞむ輩からやをもつてはあらそはて、日本一のきん平を、どくの酒にてせめころすたるはひとへに女のしはざなりみらいで思ひしらせんと、さもよは／＼ときぬ引かつきどうどふす、村川此由みるよりも、天のあたへぞあれをみよ、いできやつがくび打をとし、もろずみのけうやうにほうせんとたちぬきかざし、公平に打てかゝる、公平まくらをそつと上そでのすきまよりきつとみてよき時分とかつはとおきてむすとかみ、おのれめをてのびにし思ひもよらぬせんやうだうへはる／＼と下りたり、なんぢらがたくみたりしどくの酒、今少殘て有、そら煩のくすりぞ御前にて一つたまはれまづ望をはたつしたりとちうにひつさげやかたをさしてつツと入、つゞくぐん兵おとろき、あのていにては公平よりはりたるはおもはれず、そこつに近付けがすなと、はるかにこそはひかへける、又公平よろほひ出、ゑゝ口をしやおのれらを一人もあまざしとは思へ共、じやけんのどくの酒、つぎめ／＼をはなれてのけとせむる上せいも力もさへ／＼と、日本ぶさうの公平がうきよのかぎり是までぞ、何事もせんせのゑん我くび取

たるものはござとむらいてゑさよなむ日天／＼と長  
刀のゑろくちにつきたて、たちすくんでいたりけり、  
つくしせい是をみて、かうの者の立じには、いにしへ  
よりも有ならひなにしあふたる公平を我くび取らん  
とあらそいよる、公平敵をおもひのまゝに引よせ、ま  
なこをくわつとみひらき、方／＼あまりにさはがし  
きゆへ、しでの山より歸りたり、なごりにいいくさし  
て、ついでもあらばかさねてしに申さんと、打わらい  
長刀取なをし、はらり／＼となぎたをせば、一どにど  
つとくするゝを、いつくへかあまさんと三重跡をも  
とめておいかくる、さればにやしん王は、敵にたばか  
られ、むねんたぐいはなかりけり、たのみ切たるらう  
どうにまさきの源藏あね山せんじを引ぐし、かたは  
らにかくれいたりしが、公平がこくうにかけ出たる  
をみて、すは天のあたへ頼義をあますなと、二人のら  
うどうをさきにたてもんの内へ切て人、むさしの守  
國つなはおもん斗をふくみめ、御そば<sup>本ノマ</sup>なれずひかへ  
しが、それがしさつせしたんこ、なりとたち引そば  
めつツと出、二人の敵にわたし合、おつつまくつたゝ  
かいしが、まさきいかゞしたりけん、よはこしを打す

へられ二つに成てたおれける、あね山はがみをなし、  
む二む三にうつ太刀に國つなくさずりのはつれたか  
も、かけてきり付られ、うしろへたおれんとしたり  
しが、あしふみなをしあね山が、二の太刀をちやうと  
請、付入につツと入、つゝけさまに三刀さしくびかき  
おとす、其ひまにしん王是にはめもかけず、たゝ頼義  
とくまんと一もんしにかけ入を、國つなうしろより  
むんずとだけは、こは物／＼しやとまへゝ引よせん  
とする、國つなてをはおいぬれ共、つよくみしめは  
なさず、爰をせんとゝもみにける、然共しん王國つ  
なをつひたて、上へ／＼へとかけこむ所を、公平はせ  
來、それはなすなとまへよりむずとだき、めてへかつ  
はと打たをし、くひねち切らんとするを、國つな  
さへ、まつ君の御げんざんに入たまへ、けに尤と中に  
ひつさけ、大將の御めにかくれば、頼義御きげんかぎ  
りなく、わたくしにはからひがたし、其まゝ都へ引  
と、惣ていけ取八十よ人くびかず八百もくろくにし  
るしくはらくにかいぢんなされ、天下おだやかに納  
たまふすへはんしやうめでたさよ共中／＼申斗はな  
かりけれ

寛文三癸卯年正月吉日

## 公平つるきのりつくわ

### 初 段

さても其後爰にせいわ天王五だいのかういん源のいよの守よりよしこうすどのげきらんの御たいじ有天下おたやかにおさめ給ふ御きんたちには八まん太郎よしいへとかうし御とし六歳にならせ給ふ御心御かたちぼん人にあらずとて上下ばんみんにいたるまでおもくもてなし奉る家のかうけんにはいつもかはらぬわたなべむさしの守竹つなさかた兵庫のかみきんひらするがのかみうらべのすへむねとう／＼みの守うすいのさたかけさてほうしやうが一手ひらいのきとう丸とて三國ぶさうのかうの者はを四天王ひとりむしやとてじんぎもつはらにして君にかしつき奉ればいよ／＼こくどゆたかにて此御大將の御世長久なむ天わう七代のかうゐん平の兵衛てるもととてそのなをゑたるあぶれ者ありさて郎等にはあく二郎より

方あら川入道らいけん此らいけんと申は出羽のくにのちう人あら川がにくわうが子にて有是ぼん人の子にてなければまなこすちかいにきれ口のひろき事きじんのことく也かれがすがたみる人きく人おぢぬものこそなかりけれ有時てるもと二人の者をちかつけ今日はなにとやらんものさびしく有いざしゆゑんしてあそばんとてさま／＼のちんくわをもようししゆきやうにちやうしてあそびけるかゝりける所へ山人牛を引てやかたのまへをとりしかてるもと是をみて扱もよくこへたるうしかなあつはれよきさかな成べしといへばらいけん聞てそれこそやすき御事とていそきおもてへはしり出うしのもゝたぶらをひつつかんでずんどそげはうしはしきりにはね上る山人是をみてこれはろうせきかなとうしをひいてぞにけるらいけんやかて立かへりてるものとまへにおけは方／＼もくゑやとてひつ取／＼くつてはののみみてはくいさま／＼のおごりをなしている所へひの大なごん殿より御使立て申けるはきのふよりみかと御なふおもく以ての外にわたらせ給ふ間いそきさんだい有へしとありければ畏て候とて取物もととりあへ

すやがてさんだい申さるゝよりよし公をはしめとし  
てざいきやうの諸大みやう残らずきんにつめらる  
るかくて大なごん人々にむかつての給ひけるは天子  
やせんより御きしよくもつての外にわたらせ給ひつ  
るがさき程よりことの外御なふきなをらせ給ふ間み  
なぐゝよろこひ給へさてそれに付おくよりのせんし  
には御なふきはらしにめつらしき事あらば御しやめ  
ん成ぞてうしをたかく申上候へと有しかば何もあつ  
とよろこひける其時中なこん高なをきやうしやく取  
なをし申されけるは爰に一つめつらしき事の候則是  
なる頼義の郎等に坂田の公平とて上にもしろしめさ  
るゝことく日本一のあらものゝ候かの公平某が所へ  
つねゝゝ出入仕候がやせん参てりつくわを一へん仕  
たるよし申候あの様成あら物のりつくわめつらしく  
候とそうもんおれは君よりのせんじにはなんちが申  
ことくよじんのはなのあそひはつねの事公平が花の  
あそびめつらしき事は是成へしいかにより吉其りつ  
くわ公平に持てまいれゑいらんあるへきとのせんし  
也承候とて公平がもとへりんげんのおもむき申つ  
かはされければ畏て候とてきん平はかのりつくわを

もたせやかてさんだい仕り御てんのばつきに畏るよ  
りよし御らんじていかに金平なんぢりつくわ仕たる  
由上に聞召およはせ給ひ御らん有へきとの御事なる  
ぞいそき御まへゑさゝけよとありしかば畏て候とて  
おめすおくせすはいからず御前にりつくわをさゝけ  
もとのさしきになをりける天子をはしめぢちうの人  
人きやうざめて御らんするにまづしんに十もんし小  
しんにやりなかしには大弓しらはのや一手あひしろ  
ふてぞさしにけるさて又をしうけにはしらへの長刀  
まへをきにはくわつとひらいたることじのゑなしみ  
こしにはさすまたつくぼう扱したくさにとりてはこ  
かたなこうがいこわきざしなとをさしにけるやゝし  
ばしをくにも御らん有て金平が花ならばかくあらめ  
とこそ思ひしに心にまかせてはいしくも仕たるもの  
かなと御かんはなはたかきりなし人々一どにどつと  
ぞほめにけるかゝりける所にはかき空かきくもり  
くろくち一村御しらすにまいさかる人々あやしとみ  
る所にくろくちの中より三面のきつねししいてんの  
ひろへんにとび上りみよりひかりを出し御てんをて  
らす事日月のことく也人々きもをけす所により吉御

らんじてくわひんにさしたる弓取給ふ其ひまにてる  
もとそばちかくあり合たちひんぬいてとびかゝりあ  
つはれおのれのかさじとおぎはをてうとうつておと  
すへんけ是を事共せすしらすのひさしにとび上りく  
ものうちへ入らんとする所を頼義よつきひやうとい  
たまへばへんげのみつげんにはつしとたつへんけこ  
らへすおつる所をきん平はしりかゝつてかいつかみ  
三かたなにさしころし御前にやかてさゝけるおく  
よりのせんじにはきんひらがりつくわのはたらき頼  
義かゆみのたつしや何れとやいわんと君をはしめ御  
まへなる人々も一度にとつとぞほめにけるその時て  
るもとせき心になり御前に向て申けるは只今のへん  
げのものそれかしのしとめて候之れをいかにと申に  
まつせんたちをうつて候故へんげつうりきうしなふ  
所により吉のやあたりたれはとて高名とはいはれ候  
ましまつたく某がしとめて候と申上ればその時きん  
平ばつぎにありしが罷出てるもとをはつたとにらん  
でして只今のへんげを御ぶんがしとめたと申か玉  
かたまならぬゆへにあはててをぎはをうちながら少  
はつりぞんし某がしとめたりなんと、申はしつかい

とうぞくには事ならずやなんちか様成ちまよい者い  
けてをきて何かせんくびねぢ切てすてんととんでか  
かる所を御せんなるはとて人々兩方おしとゝむる其  
時より吉はいかにきん平何を申ぞあれていのけだも  
のをしとめたとしとめんのせんぎは何事ぞてるもとの  
しとめられたるとならばしとめられたるにせよ御せ  
んをもはゝからすすいさんなりといかり給へばさし  
もにたけき公平もあつとこたへてしつまりしれいき  
の程こそしゆしやうなれてるもとめんぼく失ないき  
ばをかみてぞいたりけるその時大なごん卿の給ひけ  
るは只今のへんけ物兩人して打とめたる所君御らん  
じとめられたり其うへへんけのものしとめたる故に  
や御なふすぎと御ほんふく成ぞ此上はよろこひの  
折なれば何事も兩人共いしゆなかれと御さかつきを  
給はればいよくさしきはしつまりける其後より吉  
はおくへ御いとま申きん平を引つれ御やかたにそか  
へらるゝより吉のいくわうの程きん平かあらきのて  
いすさまじ共なかゝ申斗はなかりけり

## 二たんめ

▲去程にてもとはわかやにかへり二人の郎等を近付て御てんにてのしたいきん平がぞうごんのだん事こまかにかたりければらいけんきいて某御供申たらばそのより吉金平めかくびねちきつてすて申さんものをとてきばをならしのしりけるかけかた聞て御へん御ともし給いたらばさためて事しいだし給ふへきに御供し給はさりしはわが君の御うんつよきゆへとそれかしはよろこび入てこそ候へとひころのおこりを引かへておとなしやかにそ申けるてもときいてなんちか申所ことばりなれ共それかしは御てんにて打はたさん思ひしか人々取付ば力およはず是迄はかへりけるぞやとかく只今をしよせ此そんぐわいをはらすへしいそきやういをせよとあるらいけんきいて御いきとをりしこくせりはやうつたへせ給へやと申ければかげかた聞てはやりすきたりらいけんかな左様なるふるまいはいのしむしやと云者なりそれぶしのもてあつかうぐんほうにもかたきをほろほし身をたすかるをほんとこそ仕候へまつ御心をしづめじせつを御まち候へと申てるもと聞ていやとよ

かけかた物をきけたうじは源氏日々にさかんにして平けはしたいにおとろふそれによつてしよくの大みやうもげんしに心をかよはするによりしたいによりよしはいくわひすしからばなにとてか時きたるへきそやたゞてきの思ひかけなき間におしよせてあはてふためく所へみたれ入てよりよし四天王の者共に腹を切せんはやすかるべしはやうつたてや者共とてより吉の御やかたへおしよせてときのこゑをそ上にける時のこゑもしつまれば五人の人々はしり出なにもものなるぞなのれきかんと申ける其時よせての方よりもこまかしとあゆませ出只今はよせたるをたれなるらんと思ふらんくわんむ天皇より七代のかういん平の兵衛てるもとなりいしゆはさためて覺へあるべししう共にはらをきれとおおんにのしりける人々きいてさては御てんにてへんけの者をうちそんしたるがむねんなるとててるもとかよせ來るとやだうり也まつわれから腹きり申さんかいしやく給へてるもとて五人の人々一ように立ならびはらりと切にけるもと是をみていかにみかたのぐん兵共一引ひきて四天王をつりよせ大

せいかなかに取こめうちろせとげぢすれはぐん兵  
下ちにしたかいさつとひいた五人の人々はざんじに  
てきのひきやうをみてやかて心へいや／＼それ迄は  
参しましそのほうにはかによせられ候ゆへよろひを  
ちやくせず候へばまづしばらくそれにひかへられよ  
ものゝくをかためつゝ又こそさんくわいいたさんと  
みかたのちんへしんつ／＼とひいて入それより兩ち  
んいりみたれ火花をちらしてたゝかいけるがしばし  
せうぶはなかりけれとぎにあら川らいけんはてるも  
との御前に畏申やうわが君の思召たるにははらりと  
ちかい申候此上はそれかしきんひらとひつくんでく  
び取つて君の御はらいさせ申さんときん平を待所に  
金平やうじをくわへのさ／＼いで申けるは聞ばこ  
んどよせられたる中にでわのらいじゆんかまごらい  
げんが有ときくひごろそれかしと力ためしありたき  
よしきいて有よきついてなればちと力をためされぬ  
かとよはわつたりらいけんきいてはしりいで金平殿  
かめつらしやなひ／＼より少力をもくらへみ申たき  
所にかやうの事いてき候こそさいわひ也いささらく  
み申さん金平きいてなんぢはてはの國あら川けんく

わうか子なればじやのまこよそれかし事も聞およば  
ん山うはのまこにて有きしんとじやとのまごどしの  
くみ打はためしすくなき御事也人々み給へと云まゝ  
におしならへてむんすとかんたたかいに一しめしつ  
とゝしめたしめ様にきん平らいけんがさしたるたち  
をうはおひ共におし切てかしこへからりとなげすて  
力はしれたといふまゝにもろてをはなつてにわう立  
にすんと立て打わらいでぞいたりけるらいけんむね  
んに思ひうしろへくるりとまはりてさしあけんとす  
る所をさうのてをのべらいけんかほうかいをしつか  
とつかみてあしのかうをしつとふまへてゑいやつと  
ひきければどうはうしろにのこりくひはまへゝを來  
りけるよせての兵是をみて公平あますな打とれとて  
大せいおめいてかゝればけんしのくん兵是を見て公  
平うたすなもの共とて爰をさいことたゝかいけるか  
かりける所に大なこんとしひろきやう中なこんたか  
のり三百よきにて兩ちんか中へわつて入ちよでうな  
るそしつまれ／＼と大おん上てよはわらせ給へはさ  
しもあらきくん兵共ちよくちやうと云こへにしつま  
りしわういの程こそありかたけれ其時ちよくしの給

ひけるはか程たいへいの御代にかやうのふるまひらうせきなり兩方しつめよとのちよくによつて兩人是まで向て有そとててるもと方をは大なこんおしとゝめさせ給へは力およはすさつと引よりよし方をは中なこんおしとゝめさせ給へはきん平いかつていかにやちよくてうなればとてかやうのときつにあひながら大將のくひねちきらはひいたるれいなしかたかたは引給へそれかしはかたきのちんへかけ入ててるもとかくひ取てみせ申さんとてかけてんとゝしるを人々取つきちよくをそむけばもつたいなしひらにゝゝにとゝむれば力およばす金平もやかたをさしてそ引にけるかのてるもとかふるまひを上下はんみんをしなべてわらはぬ人こそなかりけり

### 三たんめ

▲去程に大なこんとしひろ中なこん高のり二人だいにりにかへらせ給ひいくさのたを殘らず申上られければ君は大きにけきりん有てそのてるもとめせとありしかは畏て候とちよくしをこそはたてらるゝてる

もとちよくをかうむりやかてさんだい有ければおくりのせんしにはいかにてるもときのふの軍のいこんへんけをしとめたる時のことばのろんといふかたし又申ふんあらばよりよしを召兩方たいけつの上にてせんきあらんとのちよくちやう也てるもと承りさん候へんけの者をしとめ候ろんにより公平あまりなるそうごん申候に付むねんに存いくさにおよひ候とそうもん申せはさておくよりのせんじには其時兩いろたつたるによりわよのさかつき迄仰付られたるをわすれたるかたとへいこんはある共まつ此度はたかひにひたしくなるへき所にかみをかろしめ申つゝかゝるらうせきいたす上はきつとおんるにふせらるべけれ共源平は兩わのことし一方かゝすればときの王のめんほく也重て源平わやうに申付へしそれ迄は大なこんとしひろにあつておく也とのせんしなりてるもとむねんに存すれとちよくちやうなれば力なくとしひろ殿とだうしんしやかたをさしてかへりける是はさて置御てんにて頼義しとめさせ給ふきつねの一るいおのがひか事もちなからより吉へあだをなすこそうたてけれ有日の事なるにかの一るいのきつね

とも四天王の者共にばけ一なる所にこそりよりまことの四天王の人々のたにかうするていにもてなしでちりやくの程こそおそろしけれかゝりける所により吉公の御こしもとさらすのたけ王丸なにとやらんかんきんして人おとあやししく思ひしやうじをへたて立よりきく所にきとう丸きつね申するはいつれもなにとおもはれ候ぞ君此比さもなきものおほく近つけわれゝをばそゑんに思召さるゝとみへたりと申ければ四天王きつね共是をきゝわれゝも左様に存候へと申ければたけつなきつねこれをきゝ左様にも思はれ候はゝなきためしにはあらずそれゐんのちう王はあくによつてしんかのふわうにうたるゝ是みなたみのあはれみなりいざわれゝもよりよしを打奉りよをおさめんと申けるを竹わうきいて大ききおとろきいそき君の御前にまいりかやうゝと申上ればより吉聞しめしふしきなる事を申ものかなと立よりきかせ給ふ所にきんひらきつね申けるはひやうでうきはまりてより吉をうちたてたてまつらは某がうちたてまつるへきぞやけふはまつゝたいさんしてかさねてのそうだんにきはむへしと申ければ此然べしと

てわがやゝゝにかへるていにもてなしかきけす様にうせにけり去間より吉是をまことの四天王とぞ思召おどろかせ給ひ只はうゝとして立せ給ふを竹王御てをひき御ぎにうつし奉れはいたはしやなより吉つくゝゝものをあんしさせ給ひあゝさてよの中はうつれはかはるならひとてあの四天王の者共にはいかなるてんまか入かはりなにをうらみてそれがしにぎやくしんのいできけるぞやよしゝゝ是もさきのよのゐんぐわの程のあらはれて今しうゝと生れあいかくはなりぬる物そよと思へはうらむる事なかれたとへ四天王の者共かわれにこそぎやくしんあり共忝もせいわのいゑをなにとしてかはたやすべしそれかしはみやこをたちのかば四天王の者共があとにて若を取たてゝげんじのいへはつがすべしわかみ一つをすてぬればししそんゝのかうぎやうたりそれ人間的一生をかんすればきんくわ一じつのゑいくわ也ちとせもかくのこことく萬年にも切ありふしやうふめつにくにゝいたらぬ事をねがふべしと只一すちに思ひさだめてもと取切て西になけ身をすみそめにひきかへてなみだにぬるゝたびのそでいざ出たゝん竹わうと

てたひのしやうぞくなされける身はすみぞめにわけ  
さをかけ人めしのふのたひなればあみかさふかくひ  
つかうですゝみ出させ給ひける竹わうが出たちには  
あさきのきぬをきてしろきやつふをこしにまきあ  
みかさふかく是もきて御供申て出にけるさすがわか  
れの事なればみたい所や若君のねすかたなり其今一  
めみてゆかんとやおほしけん立かへらんとし給ふが  
いやましてしばしわが心つまや子供かみつつけつゝした  
いかなしみなけきなばわかれの程をいかせん心よ  
はくてかなはしとなみだ共に御やかたをまだよをこ  
めてしのびいてあふみやとをりにさしかゝり四でう  
五てうを行過てこゝははやとうじのまへいかにたけ  
王それかしが十歳のとしつながら此らしやうもんへぐ  
して來ておにとくんだりし時のあり様をしかたにし  
てみせけるをいまのやうに覺るはとなみだと共にか  
たりつつはや四つつかをさし過てさそや都にのこし  
おくつまやたつねん子がなはてさいしはいつのよに  
たへてくさほうくとはへしけりつゆしんくゝとむ  
しなきてものあはれなる寺の跡かやうの事をみるか  
らに有人もたのみなしるんぐわはうしのおくる

まのめくりきにけりとばのさとたれを思ひのこひつ  
かやあきの山かせふきおちてなみやたつらんかつら  
川よといもあらひをゆんでみてゆく山さきやたか  
ら寺こいぢにつらきせきとのいん八まんの山をふし  
おかみなむや八まん大ほさつわれはか様になり行共  
のこし置たるつまや子のみはなさせ給ふなとふかく  
きせいをかけ給ひいもせのあはれとゝめたるおとめ  
つかにきてみればさかり過たるおみなへしかせには  
もろくちり行と又くる秋にあふべきかたゝむれ木  
のわが身をとうらやみつゝもゆく程にこうないかち  
おれ打過てけいゝほろゝのきじのおとに立かへり  
みるさんやのさとうどのゝはらになくひばりくりか  
へしなけいとたのはらくぼつのわうし是とかやおは  
れさかを過行天王寺にさしかゝりしやうとく太子に  
参りつゝごしやうせん所とふしおがみ是からあれへ  
はあべの原是成はそとは小町のきうせき也かの小町  
が歌にごくらくの内ならばこそあしからめとよみて  
こしかけたるそとははくちてうせぬれとなのみは今  
に有明の月すみよしをなかくこしそれよりも大急の  
きしにさかりつゝなにわのうらより舟にのりつく

しをさしてくだらるゝより吉の御心ざしあはれなり  
共なかゝ申斗はなかりけり

#### 四たんめ

▲去程にみだひ所や若君はより吉かくなり給ふとは  
ゆめにもしろし給はすしておくのさしきに出させ給  
ひ床にふみ有ければなにとなく取あげさつとひらい  
て見給へばつまのかたみにのこさせ給ふ御ふみ也な  
ふいかに女ばうたち此ふみをいかなるふみとおもひ  
しに四天王の者共がぎやくしんのおこしたるにより  
とんせいしゆぎやうに出ゆくとの御ふみなるはとの  
給ひてわつとさけはせ給ひつゝしばしきへ入給ひけ  
るやゝあつてみたい所はすこし心を取なをしくとき  
事こそあはれなれきのふひるの比よりも君のすかた  
何とやらん物あんぢけにみへ給ひしをおほそらに思  
ひしかさてはかやうなる事を御心に思召入させ給ふ  
ゆへにこそかくはみへさせ給ふをは夢にも更にしら  
ずしてたつね申ささりし事のかなしやと又ひれふし  
てなき給ふ御なみたのひまよりもまつ四天王の者共

めせとある承り候とてやがて使を立にけるなに事や  
らんと四天王五人の者共御前に畏るみたい所は御ら  
んしてさてもゝかたゝにはいかなる心の入かは  
り君をいづくへ出したてまつるぞうらめしのなんぢ  
らやとのをかゑせもの共とてりうていこがれ給ひけ  
る五人の者共是をみてこはそもいかなる御事やらん  
ときやうさめてそいたりける御そばの上郎たちかの  
御かきおきを四天王のまへにおきにけり竹つな何な  
るらんと取あげひらいてみればより吉のしゆせき也  
あやしやとよみてみればかきおく狀の事今度それか  
し都をひらく事べちきにあらす爰に四天王の者共わ  
れをほろぼさんときやくしんのくわたつるにより然  
りといへ共わが身に少くもりなし是みないんくわ  
のあらはれ也かゝるうきよの物うさに身をすみそめ  
に引かへてごせたすからんがそのために都をはいづ  
る也あひかまへて此上は四天王の者共もぎやくしん  
のひるかへし残しをくつまや子共をもり立てげんじ  
の家をつかせとかきとゝめさせ給ひつゝいつかたへ  
との御あてもなくかたゝへとこそ書おかせ給ふな  
り五人の人々是をみてあきればてゝぞいたりけるた

けつな申ける様はいかなるものぞんげん申たるを  
まことゝこそ思召入られてか様の身とはならせ給ふ  
物かなとおにのやうなる人々もしばし袖をそしほり  
けるその時若君五人の者共をはつたとにらんでなん  
ちらか有様は母上やそれかしをうたんだめのちりや  
くにぞそらなきするとみへてあり左様にはたはから  
れしと御はかせをするりとぬきとびかゝらんとし給  
ふ所を御そばの女ほうたちははゝととびつけば力  
およはずわか君は大いきつてはざりをかんでぞ立  
給ふそれよりも女ほうたちみだい所や若君の御手を  
ひきまつゝこなたへいらせ給へとておくの一まへ  
うつし給ふひやうごの守は是をみてあつはれたのも  
しき若君かなせんだんは二ばよりかんばし五つや六  
つの御心にてかゝる御きしよくをおがむ事よ是に付  
ても我君はなにとかならせ給ふそととうざいくれて  
そなきにける其時たけつな泪をおさへかくてはかな  
ひ候まじいざや君の御行へを命かきりにたつね申さ  
ん此き尤然べしとうざいなんほくへてはけしてわれ  
もわれもとたつねける是は扱置あく二郎かけ高はよ  
り吉みへさせ給はぬよしを聞つけて君の御まへにま

いりより吉てんまにさそはれいつく共なくゆきかた  
しらすなり給ふ爰こそうかごふおりなればはやゝ  
せいをもよふし給へてるときいてそのきならばま  
つまつはたをあけよ平家に心あらんかたははせ來る  
べし畏て候とてやかてはたをそ上にける是はさてお  
きより吉かたのくん兵共あつまつて申やう今度より  
吉うせ給ふ事はたゝ事にあらずげんしめつほうとぞ  
んするなりより吉の御なさけふかきゆへにこそげん  
しにつかへ候へより吉うせ給ふ上はたれをしうと  
たのむべきや若君の御ざあればとていまたおさなき  
御事なれば是又水の上のあはなり四天王あればとて  
大將ありての四天王其うへあのきんひらがやや共す  
れはねめきめらるゝもむねん也此度平けへつかへん  
とて一度にひやうぢやうあいさだめてるものとのはた  
もとへ我もゝとはせあつまてるものと大によるこ  
びさらはうつたて者共とて上を下へとかへしける是  
はさておき四天王五人の人々はよりよしの御行へを  
こゝやかしことたつぬる所にてるものとせいをあつむ  
る由聞つけ方ゝよりもはせかへるまづ一ばんにた  
けつなかへつて御やかたにかけ入てみればげんくわ

に人一人もなしひろまをみれとも人もなしたけつな  
おとろきおくへかけ入てみてあればみたひ所や若君  
を女ほうたち二三人残かいしやくしてありし所へ竹  
つなかへり候と申ければみたひおくよりはしり出な  
んちは今迄いづくにありけるぞや君にはたつねあは  
さりしかもはやかたきは是へ來と云みづからや八ま  
んをはやさしころせたけつなとふししつみてぞなき  
給ふわたなへ是をみてたとへ千ぎまんきよせきたれ  
ばとてそれかしかくてあるうへは一方をうちやふり  
それかし御とも申のけたてまつらんと心はたけく申  
せ共たゝ一人の事なればとやせんかくやせんとおも  
ふ所に四人のもの共はせかへればたけつな是をみて  
よろこびなにしておそかりけるそやかたきはもは  
やよすると云われゝばかりにてあるならばたとへ  
百萬ぎにてよせたり共たやすくやかたをわたすま  
しけれともしせんわれゝうちじにして有ならばたれ  
あつてわか君をよにたて申べきいざまつ此たびはは  
りまの國これゆきどの迄みたい若君の御供申おち行  
てせいをもようしせめのぼつててもとをほろぼし  
はんもうをとぐへしと思ふはいかにとありければ三

人の人々は尤此ぎしかるべしとくゝと申ければき  
んひら聞ておのゝははりまへなり共さつまへなり  
とおちゆき給へそれかしはおちゆくすべをぞんせ  
ねはいまさらおちならふべきにもあらずとてゆみな  
ぎなたとひしめけばわたなへきいてそれゝかたか  
たれいのぢひやうがおこりけるはおのゝはきんひ  
らをひらをひつたておち給へそれかしはみだひ若き  
みのけ奉らんとてのりものにのせたてまつりうらも  
んよりつつと出ければ三人の人々はきん平がさうの  
かいなに取つきひらにゝとうしろよりおしたつれ  
ばいやそれかしは一すんもおちじといへ共ひらにひ  
らにとひらをしにおしたてゝおちゆけばきん平も  
力およはすおちゆきけるむねなくひはなかりけり  
是はさておきてるもとはよ効吉の御やかたを二系三  
へにおつとりまわして時のこゑをぞ上にける御やか  
たにはみなゝおちゆき給ひければ人をとさらにな  
かりけりよせてふしんに思ひみたれ入てみてあれば  
人一人もなかりけりよせてのぐん兵是をみてしすま  
したりとよろこんで時をあけてそかへりけるかのて  
るもとか所存のていあくぎやくふたうのさむらいや

とみなにくまぬものこそなかりけり

### 五たんめ

去程に四天王の者共はやう／＼きん平をなぐさめとうしのへんにてわたなへにおつ付てすへはるきとう丸はたけつなさたかげにかはり御のりものをまはしつゝたとり／＼といそきけるはや山さきおもてをすきゆく所にしゆんれい三人つれにてとをりしが竹つなにむかいのふものたつね申さん何事を都のらんはしつまりて候かといければたけつな聞ておふ都ははやしつまつて候ぞけんぶつならば都へ御ざれ候へとかたりすてゝそとをりしが竹つな思ひけるはかれらはしよこくをまはるものなればもし君の御ゆくゑをしりたる事もやと思ひ立かへり是／＼じゆんれいたち只今たつねられし都のうんにつきより吉おちゆかせ給ふが若御ゆくゑばししり給はぬかとなにとなくとひければじゆんれいきいてあふさればそのより吉とのはつくしかたへくたられしがつのくに兵ごのうらにふなかゝりしてい給ひしを所のちう人ひやご

の介とやらんがより吉を見付生取ろうごしにしうじう共にのせ奉り都へひきわたす只今はへまいり候ぞとかたりすてゝぞとをりける五人の者共是を聞さては君の御命いまだあんおんにまします也すなはちこは八まんのまへなれはうぢ子ふびんと思召正八まんの御引合なるべしといつれも八わたの山をふしおかみそれよりかたはらに立よりきやつはらをいちににいけ取て御のりものかゝせはりま迄ゆかんものをと思ひ人々はやつな共をこしらへいまや／＼とまつ所にさきはしりの者共人をはらいのけより吉竹わうしう／＼らうごしにのせ奉りくつきやうのけいご十人はかり取まかせ兵このすけはむまにのりろうごしのあとにひつそうてきたる所を五人の人々はをみてまづはしりをやりすこしらうこしを取まきたるけいごの侍一人ものこさしと五人の者共ちかつく所に兵ごの介四天わうをよくみしりかなはしとにくる所をきんひらひらつと出おつかけ馬のおづづをつかんで引すゆれば馬は大ききにきめられまへあしおつていじりになるやかてそのまゝ兵ごの介をたかてこてにいましめたり人々はけいごのものをこと／＼

くひつしばりあたりのこぼく共にからめ付たそのひ  
まによりよしだけわうろうこしをひきやぶり出させ  
給へばする／＼とはしりより御たもとにすかりつき  
是は／＼と斗にてよろこびなみだはせきあへずさて  
五人の人々は御まへにひざまつきいかなる物かざん  
けん申われ／＼に御やしんをふくませ給ひつゝか様  
にはならせ給ひ候そと申上るより吉聞召みきのした  
いをかたらせ給へは五人の人々かけをうつてさては  
きつねめがしやうけをなしくんしんのなかをさまた  
け申にうたがいなしさて／＼くちをしきしたいかな  
此うへはへんしもはやくはりまへくたりせいをもよ  
をしててるもとをほろほしほんまうをとげ申さんと  
扱みだひ所やわか君を御のり物にうつし奉れば公平  
やがてめしうとのそばにゆきいかなんちら命をし  
くばたすくべしと申ければ兵ごの介是を聞ておろか  
なる仰かな此かいへしやうをうけ命のおしからぬも  
のゝ候へきか御たすけ候はありかたかるへし公平  
殿と申ければやあ御ゐんきん成すけ殿のおあひさつ  
にめいわくいたし候とうちわらつて申ければ時にさ  
たかけすへしけきとう丸つゝとよりそれ／＼きんひ

らひつはり給へと雨ほうのてあしを四人して四ほう  
へゑいと引ければあしてはきれてぞのきにけるのこ  
りしめしうと是をみてあらをそろしの御事やわれわ  
れはやとわれものゝ事なればなに事も存せず候へば  
たゝ御ゆるし候べとこゑを上てそさけびけるきん平  
きいてそれかしがげぢにしたかはば命をたすけんと  
申ければめしうと共是を聞御たすけのうへはいか様  
共御はからいいかてかそむき申べきといへば其義な  
らばたすけんとていち／＼なわを切ほときこなたへ  
まはれと引ならべなんぢ二人御のりものをまはすべ  
し又なんぢ二人は御馬のくちを取べし残の者共はや  
くなければたゝつれてくたらんもせんなしみればな  
んぢらも五人ありわれ／＼も五人なればさいわひ人  
しゆもあふて有われ／＼もくたひれたればおり／＼  
はおいてはりま迄下れとてのりもの御馬さきにたて  
あとにひつ付おの／＼おはれてくたりしは心ちよく  
こそみへにけれいそくに程なくはりまにもなりしが  
ばまつ／＼これゆきとのへすへしけをもつて御つか  
い有ければ是ゆきなために思召やかて御むかいに出  
させ給へば御たいめんありてみたひ所や若君をばま

つゝおくへしやうじ奉りしゆゝの御ちそうかりなしより吉みぎのあらまし御物かたりありければ是ゆき大きにおとろき給ひさては左様の御事にて御下向有けるかやさらばせいをもようしてゐるもとをせめほろぼし御うんひらかせ申さんと郎等のとしみつをめされそれゝこくちうのせいをもようし仕れ畏て候とていちゝしだいにふれにけりこくちうのぶし共は申におよはすその外りんこくの大みやうせうみやう此由をきゝつけしん上の物をこしらへせいをもようしわれもゝとばせまいる一ばんにひせんのかにのちう人さたけの八郎成すみ五百よきにてはせまいる扱又しん土物にはらくにさだがうちたりしやりのほ八寸つゝありけるをほぎはをきんゝにてひたりまきにまかせたるけやり五十すぢぞさゝげける二はんにはさぬきの國のぢう人たかばやし源六兵衛まさとし四千よきにてはせまいるさてしん上にはしげとゝの弓廿ちやうにわしのはにてはいたる中くろの矢をそへてたてまつる三ばんにはいよのくにの住人にましほのこない太郎ひろさだ五千よきにてはせまいるしん上ものにはきんぶくりんのくらをき

馬十疋のりをきはめてたてまつるさて又天王五人の人々にはためしぐそく五れういろゝのいとをもつてとゝうせいようにおどさせべつして是をしん上す四ばんにはきいのくにのぢう人しんぐの太郎正かつ二千よきにてはせまいるしん上にはなみのひらがうつたる長刀をしやくどうつくりこしらへ十ふりそへてたてまつるさて又五ばんにはあはぢのくにのぢう人さかわた藤内ひろつな三千よきにてはせ來るしん土物にはめいさくのうちものをこそそろへたりさてうち物に取てはよしみつむねちかさだみつ此たちをはしめとして十こしそろへひときはあらせてこしらへたりまつめぬきにはのほりうをきんにて一ようそろへほらせうちにけるつばには色ゝの生類やくさばなをしやくこうにてすかさせてぞかけにけるさてかの外の大みやう小みやうわれもゝとばせあつまりいろゝのたから物をそへてさゝくれれば是ぞたからの山なるへしさてはせあつまりしぐん兵共つがうそのせい三萬八千よきにちやくとゝうつけ御大將の御めにかくれば御悦はかぎりなし此せいをもつてとをきうつしてなにかせんはやうつたてやもの共とて

おして都にのほられけるより吉公のいかうの程ゆゝ  
しかり共なか／＼申斗はなかりけり

## 六たんめ

去程によりよしうつてのぼらせ給ふ事都にかくれあ  
らさればてるもと大きにおとろきかけかたをちかつ  
けてより吉たせいにてうつて上るときいてありたせ  
いを引うけみやこにていくさせばりをゑん事はかた  
かるへしたゝにしのおかに出むかいやまさきおもて  
にてせうぶをけつすへしとてそれよりもにしのおか  
にからほりほらせようがいきびしくこしらへてかけ  
方はこたかき所にかかけあかりてるもとをまねきよせ  
それよきちりやくを一つ思ひ出して候あれにみへた  
るもりのまはりをおとしあなにはらせもりのなかに  
くん兵二三百人かくしおきてきよせばやりすごしよ  
こやにうつていでより吉をうち取へし若又てきがか  
くしせいをみ出したらばさだめて大せいかけやすべ  
しその時ゝたんのおとしあなのふたつくりたるつな  
をきりおとしぐん兵おゝくころさん事あんの内にて

候とてに取やうにぞ申ければてるもと是を聞あつは  
れたくみしちりやくかなと扱おとしあなをほらせも  
りの内にはくんせいをかくしおきよするかたきをい  
まや／＼とまちにける是はさておき頼義はいそかせ  
給へば程もなくやまさきおもてにつかせ給へばふし  
きやな八まん山のかたよりもしらはとつかひとびき  
たつて御はたの上にとまりければ御大將をはしめす  
まんのくん兵共にいたる迄いか様是は八まんぐうの  
御らいげんぞとみへたりとていよ／＼いさんでよせ  
んとすれば此はとしきりにはたをあとへ／＼とけも  
としければ御大將こまをとめさせ給へばとは八は  
たのかたへとひさりぬたけつなふしんに思ひのびあ  
がりてあたりをきつとみわたして是にみへたるもり  
の中にてき有とみへたりそれをいかにと申にいつも  
あのもりにはしよてうおほくありけるに一つもなき  
はふしん也あれに向てみよやとてこまのかしらをな  
らへもりをめあてによせにけるあんの如くふせゝい  
有其時竹つなぐん兵共に向て申けるはふしきやかた  
きわつかのせいにて此大せいを引うけのかぬはいか  
様森のまはりにおとしあなをほりぐん兵共をちかつ

けよせころさんための斗事とみへたりかまへてかまへてぐん兵共一人もちかつくなたいとをやにいたてて城の内へおひ入一所にうちとらんぞと下ぢすれば畏て候とてほこさきをならべやさきをそろへさしつめ引つめいたつれはもりのなかのくん兵共こはかなわしと一どにざつとじやうのうちへにけ入てきどをうつてぞこもりけるさてそれよりもきんひらはまつさきかけてにしのおかにはせむかひてみれば木戸いまだひらかざれば公平是をみて此もんをそのまゝにおくならばたひ／＼にあげよ／＼と云もむつかしか様のためのぐんだうぐそれ／＼もんくづしもちてまかれと申ければ畏て候とてかないかりのつめ八つあるをもんくつしとなつて大つなつてたるを十人斗にてもち來るるきん平やかてちうにひつさけゑいやつといふてもんのうちへなけ入とびらにひつかけゑいやつと引ければもんはしら迄戸びらにつれてひきたをすじやうの内のぐん兵共かなふまじきと思ひつゝみなちり／＼にぞおちにけるかけ方はみてきたなしくん兵ども命はうんにありたち打においてはわれにまさらぬもの日本にはおぼへすとてなきなた水く

るまにまはしてかゝりけるを公平てつぼうひつさげまつ所へかけ方きんひらをのせんととんでかかるをとびちがへ長刀のはいきもとより打おればかけかなはじとはしりかゝつてくみけるをゑゝもの／＼しやといふまゝにこかいな取て引もとしかしこへどうなけくびねぢ切てすてにけり公平てつぼうひつさげ身方のちんへそ引にけるかゝりける所にすへしけきどう丸二人つれてかけ出いかにしやうのうちのぐん兵共いつ迄命したふぞや五十も百も一どに出合くまんとよばわつたり残し兵の是をきいてかやうの時のためにこそやうなきとらをばかいおきたれと大てのもののわきなるとらがらうのくちをあげあれ引さけとてはなしける其たけ八しやく斗成とら一文字にかけ出とびかゝる所をすへしけひらりととりければきどう丸たちよつて兩のまへあしむんずと取てをしつくるすへ重うへよりてくびをおさへたかいに力を付あいゑいやつといふてすねをおればさしもにたけきとらとはいへ共大力共におし付られ大ぢへどうどたおれしをこしのかたなひんぬいてこぶしもとおれとさしころすきどうはとらがくひをかいつかみひ

らりとかたけければ時にすへ重城のかたきに向て申けるは何よりもつてうほうのとらを給はりくわぶんにこそ候へやりをこしらへさやに仕らんといふすてみかたのぢんへ引にけるは人間のわさにてなかりけり扱又竹つな定かけ二人打つれかけ出いかにてるもともはやかなはぬいくさなるに何とて命をしまるるぞみれんにみゆる大將かな出あへくまんとよばわりけりてるもと今は是までと一もんじにとびかゝりわたなべとむんすとかくむされ共竹つなかうのものはこしをひつかゝへかしこへとうとなげければこはくちおししとおき上る所をさたかけ立よりそくびを取てめてへけたをしおこしも立すくひちうにうちをとし君の御めにかかけ申せはよりよし御ゑつきましましてみだひ若君引くして御所にかへらせ給ひけるなをくげんじの御はんじやうせんしうばんせいめてたし共なかゝ申斗はなかりけれ

うろこかたや新板

## 公平武者執行

## 初 段

さても其後つらく世の中をかんが見るにへんくわ時にさかへきよきもかならず、あくにはかすむ、ういてんへん定めなきこそ浮世也、その比みかとをば御れんせんゐんとぞ申奉る又天下のお將をは源ちんじゆふの將ぐんいよの守よりよし公と申ける、御家のかうけんわたなべむさしの守竹つな坂田兵ごの守金平うすいの形部定かげ、うらべのすへ宗ひらいきどうむしや清氏とてかれら五人は天ふ此かたのゆうしやにてらくわうの御時よりより吉公迄三代四天王と申つゝ君をしゆごし奉るかのより吉の御いせひ靡かぬ草木もなかりけり、有時の事成しによりよしの御前に四天王くわいがう有酒ゑん茶のくわい事おはり、よもはなしに成にけるよりよし仰ける様は世おだやかに國か正にゆたか也かゝる折からにより吉もやすき心の思ひでにかはりたる事あらば語給へめ

んくくと御枕まいらせよと御しやうぞくをぬぎかへられ打くつろぎはなしと成、四天王おのくもしやうぞく御しやめん有ければすわう大もんぬき給ひ長はかまにてあいつめける其中に公平はしやうぞくもたかへずひたゝれの袖引そろへ相つめたるよりよし御らんしいかに坂田御へんも打とけよも山の物がたり然るべしはやとくくくと上意有竹つなみていかにきん平上い也しやうぞく御しやめん殊にやけふの日もくれ行御なぐさみの御はなしひたゝれ取給ひ打くつろぎて然るべしと申ける金平はへんしもなさてわざと大もんのゑもんつくろひいため付てぞひかへけるよりよし御らんしいつれ坂たはすねもの也人せいする時にははくたいなるしやうぞくしてきんり共はばからずゆるすと有時はゑぼうしひたゝれしやうぞくしていんぎんなるていたらく何れ心すねがましくなきならばぶんふ兩道の兵ならん武はばくたいにつよけれ共文はつゆもなし竹つなと上い有わたなへ承り上いのことくいか様にもよこぢ人にて候と打わらい申ける公平は何に腹の立つやらんくすみ切ていたりしがやあ竹つなわとの御前のよきまゝに君はき

み共思はれずさすか將ぐんの御ざ有へき御てんに  
て天下のじつけんたるべき身がひやくゑいにて打く  
つろぎいかゝ心へがたき御かろう御しあん此比國か  
太平にしてうき世のていなだらかなれはゑしれぬ御  
前のていたらくそうしてしういとら大かめまむしに  
よつくにたる物にて心やすくみゆれとも一たひはて  
をしたゝかにくはればうまひする事もくせん也かた  
かたは君としての御中よき事なれば長はかまもいら  
ぬ物君の御ひざ枕然べし坂田は存しのむね有てしや  
うぞくあらため罷有と更にくつろく事はなし竹つな  
打わらひいつにはじめぬ公平の御いんぎんほとんど  
いたみ入て候とさらぬていにてよも山の物がたり大  
名あまた打よりて御前に咄初まりけりひせんの國の  
住人さいの判官申様さても此比都にてきたいのさた  
もつはらにて御ざ候、そのさたはたんばの國どうし  
が岩やに又きじんすみ近國の者共を大きになやまし  
候よしかくれなく候人々もきかれても候やらんと申  
上るよりよし聞召れそれはおぼつかなき取さたかな  
いか様にもさ有事も有ぬへしそうしてあの大ゑ山ど  
うじが岩やにはらいくわうの御時うちもらされし子

鬼ども今はせいちやうして人をなやまさん事もや候  
らんと上い有爰にはりまのひめぢの大將せきはら將  
げんたゝもと罷出て申やうそうして世の中にかげな  
き事は申候はずひめしの城主なくあれて候にばけも  
のあまた候と人の申にたがはずきたいのへんげ候也  
男山とて候によなゝひかりものかのあき城にとび  
うつると見申よりかならずひめぢに一丈斗の女さま  
ざまへんげ申由もくせんに僞りなく候とりくぎはつ  
めいに申上る竹つな聞てひめぢのばけものかくれな  
く聞及ひて候也誠に三がいひろくして日本のそのう  
ちには様々の事あらんと人々きいの思ひをなす其次  
にあふ州の住人大野のはんくわん是高申されけるは  
されは國はひろくちはひさしくころうのへんげきつ  
ねたぬきのばけものはいくらといへるかぎりなし  
はれるきたいふしぎのはれざるはつくも川のひかし  
にあたり何共たいはみもわかす百千萬のいかづちの  
なるにひとしきこへ有てきたれたいめんしてももの云  
はんあら腹立やとつぶやくこゑ天ちにひゃき候也か  
かるじせつにたれ有て行べきと云者なくうちすてお  
けは今とてもふしぎはたへす候とはゝかりなく申上

かたにのくわいさんすゝみ出て申様さても此近年いくさたへ都のていゆたんおびたゝしく候所にさつそくはたを上させ給ひ然べく候承れば諸國のきんみとてあんないけんみのそのためにうすいの定かけ坂たの公平國〱をめぐるとの承り候也きやつを待ふせ打取ていくさ神に奉り其後君つくしだぎにたてこもらせ給ふへし我々都にあいささへ花といろめく都をはらつくわの春と打ちらし申べし此ぎいかにと申ける秋かせ聞てゑみをふくみあふいさきよし〱先其あんないの公平定かけを打取べしたれか打つてにさしこさんと云所に大とら龍こさへもんすゝみ出二人をそれかし一人にて仰付られ候へとすゝみ出て申ける龍馬さへもん罷出いや某仰かうむらんと申もはてさるに明王四郎つゝと出それかし上いをかうふらん我も〱とあらそひける大ばの惡一すゝみ出あれていのはむしやに二人三人あらそひて打とらんおとなげなしそれかし一人に仰付られ候へと四人望をかけにける秋かせ聞てそのぎならばうらみこいなく四人打こへ公平定かけ打取かへれとげちをなす四人の者共ふせう〱に申様あれていのやつばら二人に

四人のうつて口をしく候へ共上いのうへは力なし打取てかへるべしそれに待給へと思ひ〱の出立にてうすい坂たを今やおそしと待にける是をばしらできんひらは重代のたちをはきてつぼうをつるにつきすげの小がさでかはかくし定かけ二人うちつれてひそかに都を立出る心の内こそうれしけれ公平定かけに申様是よりあつまのかたにやくたるべき又つの國大もつのうらより舟にのりてつくし九か國めぐらんやいかかはせんと申けるうすい聞て先あづまにくたり其後つくしに打こへ然べしとあつまじさしてくだりける心の内こそゆゝしけれ大つなはてを打過てくさつの宿に入ぬればむかふよりせいたかきおのこ二人さゆふに立わかつてあやしげに待にける公平みてこはふしき也きやつをつら玉しいたゝものとは見へず此比軍たへ人をきらねば心むつましく太刀のはかねもわすれたりかやう成くせものをきつてこそほねためしとはなりぬべし御へんなさぬていにてとをられよ我はきやつを門出にちをあはしどうろく神にたむけんと立といまればうすい聞てこはふかくなるきんひら日本をめぐつて國のしをきをなすへき身がとが

なきわうらいのもの共つち切せんとはふかく也あれ  
がそなたにきてきたいせば尤共いわるべき御へんがき  
にいらざる人のつらはうき世にくらといへるかぎ  
りあらじそれをむたいにころさはん天下のじつけん  
坂た兵ごの守公平は近比にあい不申たしなみ給へさ  
りとは大盛威むふんべつ／＼とてを取てあふみぢ  
にさしかゝれば公平つぶやき／＼坂たにはとかく一  
人づゝふんべつくさきかんげんしや付そうこそきの  
どく也ゑゝ我一人ならば心のまゝのたびならんに御  
身は大成金平がにやまい也と打わらいの中にこそ  
出にけるかゝる所にさいせんの二人のおのこ四人と  
也又むこうより來りける定かげはつと思ひゑゝきや  
つはしにがうまねくざい人さいせんだにせひきらん  
と云きん平殊にあしばたいらかなる原中の事なれば  
むたいにけんくわ出きなんせひに及ばず坂田人をあ  
やむるものならば定かけ二人うけ取べしと太刀おし  
くつろけとをりける四人の者共めくばせして二人を  
まん中に跡よさきよと取こむる公平みてすは申さぬ  
か定かけきやつはらはしさい有やつばらとかねて坂  
たが見うへに打てすてんと申たり是は正しく君の御

前にていつはり事を申たる大名共かのふしきのなき  
時はおのがきよごんのはつかしきに道にてわとのと  
きん平をよみ人しらずにしまはんとのはかり事すは  
八まんも御ちけんあれ坂たにおいてはゆるすましと  
つか／＼とそはへよれば四人一度に太刀ひんぬきい  
かに金平定かけ御へんにむしん是有てくびをかゝん  
其ため大つの宿よりねらいたりくびをわたせと申け  
る公平から／＼と打わらい誠にふつていなる借用か  
な尤坂たがくびかすべけれとをくひにつくる也御  
へんたちかくびりそくに先わたすべし其後きん平が  
くびを入用があればかしぬべしそのけ名あらはし給  
へむしや執行のかど出にぢんじやうにせうぶをけつ  
し候はんとてつぼう引さけ待かけたり四人の者共是  
を聞事もおろかやかく申は天ちの間にむ二むさん大  
とう龍こさへもん兼平たて岩龍馬ざへもんすゑかつ  
大山明王四郎正のり大ばの惡一忠宗と云者也二人は  
かねて聞及まいりそふと龍馬太刀ひんぬき切てかゝ  
るを公平ゑたりやあふと持てひらいてどうとうてば  
何のでもなく龍馬かかうべどうの中へみぢんと共に  
打こんたりきん平わらつてあゝいたはしや大とうど

のも龍馬もてつぼうにあいてたまり給はぬせうしや又ふり上打てかゝるたいさんの明王四郎あゝしたりや坂田あますましとはつしときる公平みて心へたりとてつぼうにてはねぬればたちをこくうにはねとばせさしぞへぬかんとする所をとひかゝつてかいつかみぬちくひつゝぬきかのそめくゝとふりまはすそのひまに定かけは龍馬と惡一にわたり合さんくゝにたたかい龍馬がくび打おとせば大ばの惡一かなはしと後をも見ずしてにげて行さだかげあますましとおつかくれはきん平みてなかおいはむやうくゝと明王四郎を高てこてにしめいか様しさい有げのくせもの竹つなよつくぎんみいたされよと一逆のふみしたゝめ近江のさと人共をめしあつめきやつを都に引へしと申付てきんひらうすいは二人打つれあつまをさしてくたりけるかの公平がはたらき日本一の兵とおそれぬものこそなかりけり

### 三たんめ

其後大ばの惡一たゞ宗は思ひの外にうちそんじほう

ほう命たすかりてひのくま大臣秋かせにかやうくゝと申ける秋かせ大にりつふつくしせんなきおのれ原かしはざかな此うへはうつたてやもの共とつかふそのせい三千よきとちやくたう付しのひくゝにいくさのやういと聞へける是は扱置あふみの國の土民共たいさん明王四郎になわをかけ天下のめしうとさきのけと五百人にておつ取かこみ二條の御所にまいりかやうくゝと竹つなに一通をあいわたせはわたなべうらべ平井立出うけ取ていか様しさい有へしそれくゝかうもん仕れとぞうしき下人あつまりてむさんやな明王四郎を十二のはしごにからめ付申せくゝとせめにけりむさんやな明王四郎あまりにつよくせめられ我々むほん一身の者也と斗はくせうしてつゐにむなしく成にける竹つなのおくゝさてもゆいがいなきとが人かなぎやくゐのものゝ事なれはいそぎくゝもんにかくべしと龍馬龍左衛門くび明王四郎以上三つ四條かはらごくもんにぞかけにける札のおもてにいわくこの者きやく心の者成うへ近江の國にて召取如此と書しるしきせんぐうじゆにみせにけるひのくま聞ていかりをなし此上はとてもあらはれたる物故にて

いとをせめやふつてつくしなんかの城にたてこもらんはやうつたて者共とつかうそのせい三千よき二月中旬にくれないのあかはたをかゝやかし二條の御所におしよせて大てからめておつ取まき時のこゑをそ上にけるされ共わたなべもんの矢くらにかけ上り弓とやつがいよせての大將は何と申人やらんむほん人のけみやう承らんとよばわつたよせてのちんよりうのはなおどしの大よろひみの時とかゝやかしくろなるこまにきんふくりんのくらおかせしつゝとのり出し事もおろかやふちはらのあつそんひのくまの大臣秋かせ也我世の中のていかんが見るにてい王始みなみちにたがへる國かの仕置諸天のかごいかでまぬかれん我十せんに立かはりせかいあんおんならしめんためあくいのともから事くくせめほろほさんため只今馬を出す也より吉がくびきつてかふとをぬぎてかうさんせよとよばはつた竹綱からくくと打わらい何秋かせとやなひゝこなたにも御へんぎやく心とはさつしたり御身てうてきと見るからは天ちの内にあんおんにおくべきやと五人はりに十五そくきりきりと引しほりさし取引つめいたりけるいまた時も

うつさぬにくつけうの兵卅八名枕をならべていふせたりよせては是にはいぐんする所を城の内の兵共もんをひらき切て出いくさはなをそちらしける兩ちんたかいに入みだれうたるゝものをのりこへゝ爰をさいごたとかいけるいくさ中ばの事なるによせてのちんより八尺ゆたかの大ほうし二人一人はうちのはたて物一人は水車のたてものかしこにおしたて大おん上てななる様いかに四天王はおはせぬかひのくまのかうげん大力の惡僧有とはかねてしろしめさるべしかく申は岩やがさきのれんまん坊同てつき入道八かん也四天王にげんざんせんとよばはつたり城の内よりせらた兄弟七郎八郎太刀引さげ一もんぢにかけ出るおびたゝしのけめうかなまいりそうと打てかゝる二人の惡そう物もいわず一もんしにわたり合てつぼうにゑしやくもなく引かけみぎのはとりにざんぶとなげ入かやう成へろゝむしやにてをおろすもむつかしや四天王はなにとてはやく出ざるぞあお待ひさしやとよばはりけるこゝにはつせきたてわき、かどぬま九郎は大力のもの也しか櫻の花の立ものかとぬま一本の竹をさし二人けめうをかへうらへ

のすへはる平井のひとりむしやとなのつて一もんじ  
にかけ出るれんまん坊悦びそれこそ望也いかにてつ  
へき坊先我々は平井殿のさくらのはなのさきかけて  
今をさかりのたてものは此れんまん入道か大うちは  
のさしものにて御山おろしの大あらしあをぎちらし  
てすてぬべし又大竹のさゝのはのすへ竹かしそく竹  
のうらべのすへはるとのよゝをいわひてみへ給ふ共  
此水くるまのくるくゝとめぐるうちのせうぶなるべ  
し殊にや以て此てつへき入道がらつくわみちんと打  
くだかんいさまいりそうとわたりあいさんくゝにた  
たかいけるれんまん入道いふ様はいかにてつへき入  
道兩人と申合ていざくまん尤と四人たかいにちちが  
へむすくとくみ上をしたへとかへしけるされとも悪僧  
二人は聞ゆる大力はつせきかどぬま兩人はかしこに  
取ておしふせ、くびつばと引ぬきゑゝ聞及程はなき  
四天王しやうし成有様とおおん上城かたの四天王う  
らへひとりむしやをはれんまん坊てつへき入道打取  
たり竹つなにけんざんとかうけんはいて立たつたり  
けるかゝる所にうらへのすへはるひとりむしやはき  
んに君をしゆこしたいを守り有けるが御使をか

うふり二條の御所にひしや香車といへる立ものして  
來りしがれんまん坊てつへき入道がうらへひらいを  
うつたるかうけんはくを聞よりゑゝ城内よりわれわ  
れと名のつて出うたれたると覺へたりこゝは我なを  
すゝかん尤と二人一もんじにかけ出何をうろたへ御  
坊はしれぬねごとをの給ふぞうらへひとりむしやと  
は我事也本よりきやうしやひしやのさし物は敵と見  
るよりてきぢんさしてとび入る也とむ二む三にとび  
かくればれんまんてつへき扱は我名ちかいて候な尤  
と引くんでおしふせんとするにさいせんとは大きに  
かはり聞しにまさる四天王あしく取ぞんしてかなは  
しとひたいにあせをなかしつゝゑいやゝゝとねじあ  
いけるうらへみていてくゝいとままいらせんとゆん  
でひねりめてかへしにはたとけたをしすかさすくび  
かきおとせばひとりむしやはてつへき入道をかしこ  
に取ておつふせくびふつゝとねち切二人たちのさき  
につらぬき四天王ひらいうらへのてなみにてつへ  
き坊れんまん二人を打取たりと城の内へひいて入を  
ほめぬなかりけり秋かせいかつてきたなしやみかた  
のせいかれゝとさいをふる大ばのあく一すぎし

ちしよくをすゝかんと大たちまつかうにさしかざしむらかる中にわつて入くつきやうの兵十三き切ふせ四天王はおはせぬか忠宗せうくなれ共くび十三ぶん取して引取也我と思はん人あらば出てとめ給はぬかとうげんなす所にくる皮のよろひきたるむしや大長刀をちまして出惡一に打てかゝる大ばみてくつきやうのむしやけめうをなのつてせうぶせよと云もあへす太刀八そうにおつ取ちらし出たる長刀はつしとうつて入らんとするかのむしやさそくをふんどひらりととびしさりひつ取太刀付入て大ばのあく一がゆんでのもゝをかけおとす惡一心はかうはたらけ共いぬゐにどうとたをれけるやがてくびを打おとし長刀につらぬきてきぢんへなげ入るひのくまみてきやつは正しく四天王にて有けるそ二人かゝつて打とれとざいふれはくらまか谷のくわいさん杉のもりかんりやう坊岩がみしくわいし三人の惡そうおもてもふらすかけ合まんなかにおつ取こめみぢんになさんと切かくる此むしや事共せず二人を左右に相つけ一人をまへにうけ三方ちらし八つからみくもてかくなは十もんし水車と云者にひらりとくるりとうけな

がしまへにたつたるしくわいしがくびはいつしかころびおちのつけにかへしたをるれば左右にたつたる杉のもりくらまが谷のくわいさんつゝと入て二人兩方よりむづとくむ此むしやわらつてものゝしやゆんでにかゝるがなりやうがくびのほねちぎれてのけとかいつかみかしこへなげ跡にのこるくわいさんをひだりのわきにねぢこんでちうにはしりおき上らんとするかんりやう坊がまつかうらつくわみちんとふみくだくひたりにいたるくわいさんはかみをなしてしめぬればむさんやくわいさんはうんと斗をさいこにて兩かんたちまちぬけ出ちをはきてむなしく成をかつはとすてかぶとはづし扇をひらきあせを入るゝをみてあれは男にてはあらずして公平がいもふとこんがふひめ生年としは十七歳父きん時がひそう娘きん平が名代に罷出たりおのれはらそのぢんひいておち行や今しはらくやすみ大將にげんざんせんとのゝしつてそは成石にこしをかけしはらくいきをつきけるかのこんがうひめ平井うらへかはたらき誠に四天王なりけりとほめぬ者こそなかりけり

## 四たんめ

其後きん平定かけは都のいくさは夢にもしらすの道  
山道打過てたんばちにかゝりけるおりふしさと人た  
き木をこりてとをりける定かけ近付大江山へは此道  
をつたい上り候かおしゑてたへと申けるさと人聞て  
かた／＼はたびの人にて候かそんしなくは此山には  
いらぬものどうしが岩やにきじんがすみたび人のふ  
みまよひ行くれたりしその人の一人もいきてかへる  
事候はずとく／＼さとおり給へとかたりすてゝそ  
とをりけるきん平聞てゑみをふくみかゝるとせんの  
折からによきなぐさみぞうれしけれこよひは日もは  
やくれければいづくにか一夜をあかさんと見る所に  
向のたにゝともし火かすかにみへにける定かけ悦び  
たとへ鬼の岩や也共あれにて一やをあかさん公平こ  
なたへともないてしばのとをほと／＼と打たゝけば  
内よりたそとこたへける定かけ申様我々は山道にふ  
みまよふ者也こよひ一の宿をかし給へと申ける内  
よりかのしやれかうべか申様なにかいたはしさよ  
我も昔はさ有なんぎにあいたる事も有はや／＼是へ

としば戸をおしひらく定かけ公平に申様必はやつて  
事をしそんじ給ふな萬事は我にまかせ給へとおくの  
でいに入ぬればていしゆはおくにかくれる公平一  
人のおのこをよび御てい衆に御めにかゝらんはや  
やと申けるかの男きん平かきしよくをみてあるしは  
少かたはにて候へは人々の御めにかゝる事成かたし  
御用の趣候へはそれかし仰かうむらんと申ける定か  
け聞ていやとよこよひ一夜もふかきたせうのゑんか  
たはゝ人によりてつゝみ給へこよいは殊にさびしく  
して我々持合たるさゝへをひらき候へば御てい衆に  
まいらせんはや／＼出給へとたつて申せはあるしは  
かしらはしやれたるこうべにてはつかしなからたび  
人のめさるゝに出ざらんぶれいと存罷出て候定か  
げ公平げうをさましさてもかはれる御てい衆やいま  
だおわしますその人にも是へ／＼と申けるあるし聞  
て一人は某がそく女にて候又ばんしかざりと見ゑし  
はさい女にて候と申けるきん平ふしきはれやらすこ  
ぶしをにぎりいたりける定かげさゝへ取出しいかに  
ていしゆゑんろ持合たる此さかつき一つくんでさゝ  
んと云あるし聞て禮ぎをなし誠さんりんに取こもり

ひさかたにて酒を給はる也我らい光の御代の時より  
のふにかしつき奉り都に有し其時は日や公時などに  
さんくわいして度／＼大酒仕それよりたへてこの方  
はさんりんなればくたさるゝ事をゑすあらなつかし  
の昔やとしやれたるかうべが物をいふ公平いよ／＼  
ふしぎを立きやつへんけのものなれば我々がせんぞ  
をさととりさへつる者と心へいかにてい衆先その酒ほ  
し給へとさかつきをあいわたせばしんきたゝしおし  
いたゝき一つくんでそれ成たび人ゑくわんたい申さ  
んと金平にさしにける坂たうけて少のんでひかゆれ  
ば何かな御さかな申べし山中なれば心の斗御さかな  
むかしわすれぬ一ふし一つうたひ候はんとおん上た  
かくうたひける君か代はさかゆれ共我は山ぢのむも  
れきや花さくはるはいつか見ん花さくはるはこよひ  
也所は山ぢのきくの酒なにかはくるしかるべきぞと  
今一つとぞすゝめける公平うすい是を聞あつはれき  
よきうたひかな扱ていしゆふしぎの一つ候あれ成な  
べのうちに人のかしら候也是はさかなに然るましや  
と申けるてい衆聞て誠に御ふしん尤也あれは人のか  
しらにて候はず年ふるさるのかしら也是成それかし

が娘いか成事にやした、もとをらず候へはろれつの  
くすりにさるのかしらめう也と承薬のためにもちい  
候しさいを聞給はすば人のくびと御らん有も斷也又  
それがしどうはにんげんにてかしらしやれたるほね  
成事もふしぎのたつ所あら／＼かたり申べし某わ  
かきむかし召仕の下女に心をかよはしよな／＼かよ  
ひ候へば是成女ばうしつとふかくくびさし出す所を  
あいの戸たてはさみそばににへゆの候をむたいに打  
かけ兩かんにくはやきうせてくちのうち成した斗相  
のこつてふしぎの命たすかり人せんかなはずかくさ  
んりんとちこもつて候へは見る人へんげばけもの  
よとおそる事こそうたてけれあはれみ給へたび人と  
かたりける公平よこてを打つてから／＼と打わらい  
誠にいわれをきけばしこくせり世の中にか程かはれ  
る事あらしとあるしもうすいきんひらも友にとつと  
ぞわらいける定かげていしゆに向先程申されたるら  
い光よりのふきん時などはいかゝしてしり給ふ御身  
のむかしは家名は何と申せし人やらんかたり給へと  
侍けるあるし聞てはつかししながら名のるべしかく申  
それかしはまん中公代々の御かしんまふぢめかたと

てすどの高名なをあらはせしめがたの十郎ひで光おとゝにめかたの萬八ひでかね也つな公時すへ竹定光ほうせう其子にみたの源二郎すくねのあく太郎うすいのあらどう丸平井のきどう丸とは竹馬の昔今見るやうに候と袂をかほにおしあてゝ心斗のなみだ也公平定かけ大におどろきこはそも御身はめかたのまん八なりけるか我こそ坂田の惡太郎うすいの一丸成けるはとたがいにてとてを取かはしすがたかはれば中中にみそんしたるも斷也かく名有兵のかゝるふせいとなりはてうづもれ給ふぞあさましけれしかしながらわれゝ都へかへるならよりよし公に申あげ都にきさんの花ひらかせむかしかたりの友とせんあらなつかしのめかたやとおさなきむかしそれは是はとかたるにしたがい公平も打とけてみなゝ悦ひはなしけるあるしは定かけに打向ひさてかたゝの此國への下ちやくは此おく山のきじんたいじにきたるべしゑゝむかしならば此めかたも共に打こへ高名して都へきさんのみやげとなすべきに思へば心斗也あすにもならば是なるわかきものはめかたの大藏國のぶとて我がちやくし成けるぞあんないに召つれ給へさ

びぬれ其此太刀はまん中公よりわが父定光ばんでんなをあらはし御ほうびに給はつたるちすいといへるめいけんものゝやくにはたゝね共むらさきすそごの御きせながそへて給はるとたはらに入てはりにつるし置たりとこもの内より取出す金平めかたは左様なるすがたとなれ共むかしわすれぬぶ道たのもしくこそ候へとよもすがらの昔かたりによはほのゝと明ぬれば宿のあるしにいとまをこいめかたの大藏あんないにて大江山にとわけ入けるふしぎのゑん共中中申斗はなかりけり

### 五たんめ

▲其後公平定かけはめかたの大藏あんないにてそばをつたいみねにのぼりはるかにたに見おろせは千でうのへきたんあゆにそみ見上ればくもがみね空たつきりの立かすみいつれを山共見もわかす谷にくだれはちりゝ水いわもるし水にのんどをうるほしたにをわたり丸きばし橋かとみれはいくとせふる共にしれざりける大ちや也あなたのはのし道わた

りてみればかしらをぬつとさし上くれなはのしたを  
まきつのふりたてゝおいかくるまなこはしやりんの  
ことく也公平みてにつくき大ぢやがていたらく日本  
一の我々にふまれて有もみやうか也おのれてきたい  
する物ならば此おに切にてほそくひはねて事かかせ  
んと待掛たり定かげみてそれはむり也公平きやつ  
がはしとかゝるうへあの谷より此たにへ心やすくは  
わたりたりおんにてほうする所をかへつてあたと成  
へきは道にたかへり公平とひたすらにとゝむれば公  
平聞てそれはうすいの余りなるかんけん也此あくじ  
やは人かいのあたと也人をくらうくせ物たすけ置て  
つみつくらせ諸人のなげきとなさんより只きん平が  
一太刀にゐんどうしてぶつくわをゑさせなんあみた  
佛くゝと云ながら大じやに向へば大じやはあたゝか  
成ほのをゝふきかけ坂田のをのまんととひかゝる公平  
いさんでなげくるくびをつんとはらへはむさんやな  
くびは大ちにどうとおちと有木のねにくらいつけば  
むくろはたにゝおちてのたをかへして草木をまきた  
をすすさましかりける次第也公平たちをおしぬぐひ  
むやくの事ともさしおこしきんひらをのまんとした

るたくみゆへふへのくさりのきれおちてくびととう  
との中たがいせうし千萬くゝと三人とつと打わらい  
大江山に聞へたるおにか岩やに着にけるみれば人の  
申にたかはず人をさいなむと見へてこゝのこぼく岩  
のはさまにかけちらしつなまぐさき風ふきてみるも  
うるさきていたらくさしもにかう成定かげ大藏も身  
ふるいしてこそ立たりける公平はいつとてもいさぎ  
よく都を出て此かたはすきの道におもむきいつもき  
げんはよかりける定かげに向ひ御さきにまいる也後  
よりつゝき給へ誠にらい光の御時に父きん時御へん  
が父の定光は此岩やのうちへこそ來り給はんいか様  
しるしのなき事はあらしとかしこの岩をみればあん  
の如くつな公時はうせう定光すへ竹てんくゝのじひ  
つにてはん形をほりらい光の御手跡にて御はん有々  
と岩にほりぬく文字の有何くゝ源のらい光せんし  
をうけて此山に五人の郎等つれて酒天どうしをうつ  
じひつ残てのちのかたみ又有時はせうこのためかく  
のことく書印者也と残はむかしのふての後めぐりあ  
いたる心ちぞと金平定かけ三度らいはいしておくを  
さしていらんとすれば何とはしらすあなの内よりす

さまじきつらを出しのぞく所を公平とびかゝつてつ  
のをとらへ引出さんとなしぬれば何共物もいわずか  
ふりをふつて後しさをなしぬれば公平みて坂たが  
てににぎる此つのはうてはきるゝとはなすまいか  
に定かけ余りあなのくらくして其のしよみへかたし  
先おにをは一疋とらへて有けるぞ二人なから外へ出  
られ候へとうんといひてこんがう力を出しぬればい  
かでばんじやくもたまるべきのろりゝと引出しあ  
かるへき所にてみてあれば鬼にてはあらずしてたじ  
まうしのしたゝかなるをつかみ出す公平みてゑゝお  
にかと思ひせんなきほねをおつたりおのれはよくも  
あなにゐて此山のそま共がたづぬへきにおのれがや  
う成ぬす人くさきうしをほうし其への見せしめにく  
びをはねんと太刀をぬかんとするを定かけおしとめ  
先つもりても見給へうしのくび切ものは日本には有  
ましはなちたまへととむれば公平聞てむしや執行し  
て國かの仕置なすものはうし馬にかぎらすあやしき  
物をたゝすこそ國めつけかいわるべきせひくびをき  
らんと云定かけ聞ていや坂たねかふにさいわい此う  
しこそくつきやうのたくみ有第一あなのくらくして

道みへす此うしのつのにたいまつをくゝり付後より  
むたいにたゝきたてゝあなの内に入ぬへしはやゝゝ  
たいまつくゝるべしと大藏やがてたいまつ二本左右  
のつのにくゝりつくれば公平大きに悦びあつはれ定  
かけのちりやく大に見上申たり此うしのおいてに此  
公平成へしとそばにかしの木一尺まはり有けるをね  
ち切てむ二む三にたゝきたつる此うしたいまつのも  
ゆるにおどろきたけつてこくうむりやうにかけ入た  
り爰にうち成くせ物共すはや事のいてきたりとみれ  
は人も有人かとみれはおにめんをかふり夕部のよう  
ちにくたびれせんごもしらずふしたる所にれいのう  
しとび入てこくうむりやうにつきちらせはあまたの  
鬼共あはてふためきあるいははだかはおび斗に  
てかけ出るやかからも有又はうろたへどうはおにのし  
やうぞくにてめんをうしないなべをかぶりとび出る  
おにも有きん平はおきつころんすむねをさすりか程  
おかしき事公平一代に覺へなし扱もかはれる鬼共か  
な爰にはおのれ原が様なるにせおにをからの取はく  
た王の公平定かけひかへたり口口くちのせうしさは  
ぬけあなくてはいもふせらるゝしやうしさと三

人太刀ひんぬき仁王たちにつゝたつてはがねを引て待かくれはうしはたいまつやけきれてつのに火のつくくるしさにいよゝたけつてとびくるいあまたの山ぞくふみころされちをはきしするもおゝかりけるかゝる所にぬす人の大將あまつはやくもきらるゝ事をかなしみうしのしたはらにいたき付一さんにかのうしをあなのうちよりのり出す公平太刀ふり上ちやうどきれはうしはこくうにかけ出すはやくもはうしの下腹にしがみ付て出にける公平うすいとび來りおのれいかなるものぞとたつぬれはそれかしはぬす人の大將あまつ空のはやくもと申山ぞくにて御座候きじんのすかたにさまをかへさとゝに罷出人のざいほうたからをうばい世をわたり候也命をたすけ給はれと涙をなかし申ける公平聞ていかに大藏是をみやけに都にいそき引給へ我々ははりまの國つくしにうちこへやかでかへらん尤と狀したゝめめかたにわたしそれより二人はつくしをさしておしわたるかの公平うすいが武者しゆ行おもしろき共中ゝ申斗はなかりけり

## 六たんめ

其後きん平定かげはたんばの大江山を立出て大もつのうらよりつくし舟に打のりはりまの國に行てかはれるへんげにたいめんせんといそく所にとうせんの順禮申けるはさても都にはぎやくしん有てむほんのくわたつるといへ共朝てきうんのひらきかたくひのくまの大臣あきかせ都のいくさに打まけつくしださいふおんかの城に立こもり近國の大名小名をかたらいつくし九か國は大かたむほんの一身と成きけば四天王はていとをうつたちきのふ大もつのうらにてせいそろへけさあけぼのにふねをうかめ今はむろ高砂にや上り給はんぶしの上程おそろしき事あらしと二人はなしていたりける公平うすいはつと思ひかたかたは四天王か立たるをかく見給ふかやじゆんれい聞ておろか也たび人てうてきたいちのいくさ立に我斗ぞんじたるに候はす此とうせん人たちもしられて候たび人とねんごろにかたりける公平はやいくさと聞てそゝろに心打うきいかに定かげわれゝつくしをもあるくべきやくにて此てにあはぬものならは後

日に口はきかるまし此舟こよひよますから公平ろかいをはやむへししからば我々は竹つなよりさきたつて先ぢん成へしうすいいかにと申ける本より忠かう第一の定かけ尤然へしと申ける公平聞てそのぎならは我舟をこくへしとせんとろかいうばい取て力まかせにおす程にいるやよりはやくなんなくだざいしどちのうらにこぎつくる公平うすいはやがてくがにとびあがりだざいをさして行所にむしや三ぎぐそくはこをもたせいそかはしげにうつてとをる公平うすい袖をひかへ是はいづくになに事のおこり候へて何れもいそがはしける御ふせいおほつかなしと申けるむしや聞てかた／＼はいづく人そつくしにはだざいに秋かせ公らう城有我々は御しうにたてこもり候かた／＼もるろうの身にて候はい今度ぶれいをさいわいにおんかの城にたてこもり高名をきはめ所領のぬしと成給へとかたりすてゝとをらんとする所を公平二人をかいつかみ敵ならばゆるすましおのれいかなる物といへば某はまつらとうのけらい松田川くらと申者にて候ゆるさせ給へと申けるうすいやがて跡にひかへしくそく箱をかつきたる下べがくびうちお

とせはきんひら二人かくびふつつとねぢ切ま事にぢゆうなる浮世の中けつかう成くそく三兩もとめたり殊にきやつはらがだひやう成こそ御へんと我が仕合也いざ／＼ちやくしかたきの城にたてこもらん尤と二人よろひをちやくしおんかの城にいそき大おんあげ是はまつらとうが郎等松田川くらにて御ぎ候御もんのひらき給はれとよばはればうちよりぎんみのぶし立出二人をみていかにもよろひのあいしるしさういなし御とをり候へかた／＼は仕合かな今一時おそかりせばらう城なか／＼かなふまじ明日は都せいせめよせうのこくより矢合せ有と木戸をひらき入にける公平うすいすましたりと二のきどに行てさいせんのこく名のるもの内より松らとうの御こやは本城の内也こよひはとてもかなふましそれにひかへてあけなば高名をきはめ本城に入給へと中／＼きびしくまもりけるきん平定かけそのぎにて候はい御ぢん所をかり申候若よじんよまはりとかめ候はい御ぞんしの由御申ひらき給はれと事はれば何かくるしかるへし城の内の身かた也とがむる人は有においては大たちはんくわん存しのものとなのり給へまつらと

うと大たちは一家にて候御ねんの入たる斷やとさし  
てとがむるものはなしすでにひかしのよこくも引  
はなれくもまもらむ比なればらう城の兵大かせの  
ふくにひとしくどよめく事しきり也又竹つなうらへ  
よするやらんよせての方にはよせだいことう／＼と  
ひゝきなりかいをたてかねをならしせめよするきん  
ひら定かげにそゝやき我々かくとちこもり有とはわ  
たなべゆめにもしらすさぞぐんりよをくだくべしこ  
よひいちやの此城を大事とこそせめぬへしすいぶん  
心をつくし大將ひのくまをめしとらん尤とやくだく  
してあくるよはをまつ所にはや都せいせんちん一つ  
木戸にさしよせて大てからめてもみ合ときの聲をぞ  
上にける城の内にもかねて待へし事なればおなしく  
時を三度合大てのもんをおしひらき一もんにきつ  
て出兩ちんたがいに入みだれいくさはなをぞちら  
しけるよせてのちんよりうらべのひとりむしやみつ  
らたけち四人一どうにかけ合つゝぬきねちくび人つ  
ふてめをおどろかしたゝかいける大ての大將はらだ  
さへもんざいふりあげ身かたはなきかあれうちとれ  
とよばはれば秋かせが郎等たてぬき天まの介しげも

とくろくもたつゑもん光よいなつま村雨の介大か  
せこなみかつだ岩にしそがいなめおもてもふらすき  
つて出四天王みうらたけちにわたりあいいざくまん  
尤とおしならべ引くんで兩ばがあいにとどうとおつる  
いくさになるゝうらべ平井みうらたけちゆんでにお  
いつけてへひねりかしこにおしふせくびいち／＼  
にかきおとし太刀のさきにつらぬき城のうちへなげ  
入引取せいにつけ入する大將ひのくま大きにいかり  
きんのばれんの馬じるしまつさきにおしたて一の木  
戸をやぶられしと大將馬をいたす所をきんひらうす  
いは是にありとうしろよりとびかゝつて馬よりした  
にひきをとしきんひらたかてこてにいましむればう  
すい大おんあげ大將ひのくまをば坂たのきんひらう  
すいの定かけ打とつたりとよばはれば竹つな聞てす  
はきんひら城に有さかたうたすな都せいとげちなせ  
は五まんよきのつわもの公平といふにちからをえわ  
れも／＼とみだれ入さん／＼に打ちらせはなんなく  
うすい坂たはひのくまをいけどつて城より外へたち  
いでたりたけつな馬よりとんでおりいたされたりや  
きんひらつかまつられたりさたかげとあふぎたてゝ

ぞよろこびけるされはにやしろがたのぐんせい大し  
やういけどられて有ければみな／＼おちゆき残るぐ  
んびやうはかぶとをぬぎゆつるをはづしかうさんす  
るたけつなはいくさは身かたのりうんとかちどきど  
つとつくりあげきんひらうすいをうちつれてみやこ  
をさしてかいちん有かのきんひらうすい四天わうの  
はたらききせん上下をしなべてみなかんせぬものこ  
そなかりけり

右此本者太夫直傳之正本を以一字一點不殘書うつ  
し令板行者也

貞享二歲丑の正月吉辰

大傳馬三町目 うろこかたや新板

## 公平入道山めぐり

### 初 段

さても其後それ人間はとんよくぐちにまよひ馬ごう  
はおのれがちにまよふ、やこゑにはたされ命をうし  
なふことかや、たいつゝしむべきは人間の四よく也、  
されはいせんゐんの御宇とかや、源いよの守より  
よし公は天下のぶ將取おこなはせ給ひ二條の御所に  
御ざいる有、然るに四天王す一わたなべむさし守竹  
つなかれはちぼうすくれていこくのはいこう口長良  
にばつくんこへたるぐんしや也二ばんは阪田兵ごの  
守きん平かれはきん時が一子山うばのまごとして大  
力成事いこくのはんくわいあんろく山にもこへぬべ  
しそのうへ心みじかき兵にて四天王のあら人とみな  
みなおそれうやまひける次はうすいの形部定かげう  
らべの兵衛すへはる、平井はりまの守清氏みうらの  
わだ左衛門ため家竹ちの源太やすもとてだい／＼  
ふだいのちうきん又つきはめがたの大藏くにのぶか

れは代々まん中公よりふだいそうでんの兵ふちはら  
めがたとて三人のもの也しが打じにしてその祖たへ  
し所に公平むしやしゆ行の折ふしたんばのくににて  
めぐり合大江山より山ぞくの大將はやくもをめし取  
御め見へ申此比きさんの兵也ことに金平が高名その  
はまればくたいにてひのくま大臣あきかせめし取御  
前に引出す、よりよしたいめん所に出御有いかにひ  
のくまとんよくにおぼれおのれが身の程をかへり見  
ず、つくし四か國をふそくにして朝てきと成天ばつ、  
なほめのはちに及びて都入のはづかしくはあらざる  
かいかにくゝとの給へばひのくまいたけだかにのび  
あがりそれ人間の高口口のぞむはしゆつせ也我ふぢ  
はらのあつそんかまたりがばつようふさゝきよりつ  
本ノマ、  
り有そもとは王ぞんたり我こそ天下のぶ將と也なん  
じをこそ此ひのくまさいわいのてしたにつけんにな  
んぞやわれはつくしにかすめられゆへなきげんじに  
國かのさいはい給はる事はみなみかどのよこしまな  
る御おこないきつくわいさに天子をかすめ我十せん  
にそなはりれいせんゐんにかはつて道すぐにせい道  
を取おこなはんと思ひてうてきとは成たる也わがう

んの程こそ口をしけれ我天めいつきずなんじがこう  
べをはねくはらくのちまたにかけ置四天王いろ／＼  
にめし取やつぎきとなすべしと思ひかけたる一念の  
程こそあさましけれとことばをはらつて申ける竹つ  
な聞もあへずやおのれすいさんもおこがましや汝  
がふんとして世をくつがへし十せんの御くらいをの  
そむ事誠にゑんかうが月にてさしとうらうがおのを  
ふりあげりうしやに向がごとく也さのごとく天のせ  
め立所にかうぶりとびすをめぐらす終に五たいに  
かゝるはふどう明王のばくのつな年をこへすめしと  
らるゝ事天めいきする所もおのれしに□るいにちま  
よいあくごんはむやくちと心とはそういならんす  
いさん也とはつたとにらんで申ける秋かせ打わらい  
それうんな天に有かばねは本よりちやうもんのつち  
のしたほねははつこつと成て石かはらにすたる共人  
げんの望はつねにしゆみせんこへべし又なんじら  
こそいつもよりよしがひくわんとしてかにはこうら  
ににせてあなをほりたま／＼人かいに生れかうくわ  
んにのぞまはひとへに地のそこにすめるめみずにお  
なじくいつもつちをくらつてあかるき所をしらず

此秋かせはぎやく心をくはだつるより此かた一めい  
をきんくわのつゆにひとしく野ぐわいにからだをな  
げうち日本をうばはんとすされ其天のきす所を多  
かくめしとられかうるのくらゐをあだにすておのれ  
原が様なる下官ひくわんの輩にかへことばをかはし  
ろんする事みなうんめいのなす所我つた／＼になる  
とてもこんばくは土にとゞまり必十せんを始よりよ  
しおのれ原がくびのはねにくらい付かならず思ひし  
らせんぞはやくびうてと思ひ切てぞ申ける公平もく  
ねんと打聞いたりしがいたる所をすんと立誠に人は  
よくにまよひ馬はちにまよふと聞ぬるに申にたがは  
すおのれ十せんのくらしいに望をかけことに天道のど  
うりにかなはざる事斷也人間のかたちに生るゝ牛馬  
也しさいはさいごにおよびちにまよいむやうのあく  
ごんおのれ今生にてだにかなはず此公平におのかか  
まへる城の内にて四つ五たいをしばられいきながら  
ていとにひかれむやうのべんせつ人がましやおのれ  
が様なるあく人をば四條がはらにしてうしぎきとな  
しぬべしそれ／＼はからへとげちなせはぞうしき下  
人畏て候と御前を引たつるむざんやなあきかせは公

平に一ごんのどうりにつめられせきめんしてすぐ  
ごと引たてられらく中さして引わたさる又大急山の  
さんぞくあまつ空のはやくもうすい定かげか召取て  
めがたしゆごし都に引わたし候とつつしんで申上る  
よりよし聞召れせんだいみもんの物がたり其者は先  
ろうしやせしむべしと頓而ごくやにおしこめける扱  
金ひら定かげには御馬一疋づゝ御太刀一ふりあいそ  
へられいづもとは云ひながら此度のはたらき御ゑつ  
きはなはだ也と竹つな承て二人ものに相わたせば公  
平さだかげ悦て御前を罷たつ去程にあきかせをば四  
條がはらに引出し牛馬二疋さゆうのあしにくゝりつ  
け二疋が中にてくわゑんをくわつとやきたつれば牛  
馬はさうへとびわがつてさしもの秋かせ二つにさつ  
とさかれける天ばつのどうりとにくまぬものこそな  
かりけり

## 二たんめ

▲其後坂田の兵ご金平はすぎしむしやしゆ行のその  
時めぐりのこせしはりまのひめじ又はあづまのおに

ぢやいけつくも川のふしぎさら／＼もつてはれやら  
ずそれ一天せかいをめぐりさま／＼うき世のていい  
さゝかまなこにさへぎるふしぎもなし我つく／＼あ  
んするにみな大江山のきじんのごとく山ぞくをおに  
といひきつねむじなのことばけたるをみておくびや  
う第一のやつばらがみないひはやす取さた也われひ  
そかにあづまにくだりひめしに行正たいを見あらは  
しそのついでに國／＼のていぎやくゐ有を仕置して  
そせうのものにかたうどしせんをたゞし御代あんせ  
んとなしぬべしかくて此由御いとまと申上る又竹綱  
あしてまといに定たけ同道と仰付是有べししうせん  
一通の書おきして浮世をめぐらばやと思ひすまし此  
ていにてはいかい也さまをかへてくだらんとかみお  
し切ぢうだいのおに切丸にあいそへ其身はわざとす  
みそめのあさ衣をちやくしつゝ二尺九寸のどうし切  
たけのつゑにつくりこめすみなれたりしあやのかう  
しをはとんせいしゆ行のていとなしくもいの空と心  
ざしけふ九重を立出てやへたつくものそなた成うき  
道のくと心ざししよ國しゆ行ぞしゆしやうなれ心に  
そめぬすみぞめを人は誠とみよしのゝ山のかすみは

はれゆきてよしの山の花さかり雪かとぞ見るいろな  
れやうきめはすへに大つのうらつゆの宿かるくさつ  
のしゆく名所くはあふみの國しがからさきの一つ  
本ノマ、松いそにたぐいなきみにてしほにはくちぬちくぶ島  
べんざい天女をふしおがみかしこを見ればかいみ山  
わがおもかけをうつしみんかしこはおとにきこへし  
むかで山たはら藤太ひでさとがなをばんでんにあげ  
たるやまいか様にも此さんかのむかで一るい残いて  
のちは人のなげきと成ぬべし一見のついでにくさふ  
みつけてむかで山にのぼりけるこそふてきなれそも  
むかで山と申は十町四方にくさもなく木もなければ  
みなはげ山と申つてうくには人のかよひたへぬ  
ればしよ鳥はましてとまらずけだものたにくすまい  
たりきんひらみて誠にきしにまさるむかで山とと  
有かれ木にこしをかけよもをながめて有所にふしぎ  
や此かれき坂たをのせてあゆみ行公平系きやつを  
かれ木と思へばむかで也よし何にもせよ公平二尺九  
寸のどうじきりすはと引ぬきどうなかにつきたつれ  
ばしきりにあゆみ行事みつばのそやいるごとし坂田  
みてだう中ふたつとなしすつべしとづんときつてお

とせば二疋と也跡さきにあゆみ行公平いかつてゑゝ  
しやうのつよきあくちうかなこんかうみちにねぢ  
つぶしすてんとはしるむかをかいつかみゑいとい  
ふて引上れば何とはしらす向の山よりまなこは日月  
にひとしくひかりわたつてかしらをみればわにぐち  
にひとしきむかでくびをこくうへさしのべ坂田をめ  
がけたにをこす公平とらへたるをゝ見ればきやつが  
どう扱はくわうだいなるくせものくびうちおとしす  
つべしと二尺九寸のどうし切はかねをひいて待所に  
はや坂たがまへにかしらをふりたてとび來り公平て  
うどきれば太刀はねかへつてはもたゝす事共せずと  
びかゝる公平みて太刀に及ばぬものならば力まかせ  
のうでのほねときやつがみゝをむんずと取こうべに  
さゆうのてをかけ上よりかさにかゝつてゑいと云て  
おしぬればさしものむかで兩がん忽ちおし出されか  
うべはかにのかうらをひしぐごとくひしやくとお  
しつぶす坂たみてなにむかでいにしへのひでさととは  
ばつくんにかはらんまづ此山のあくちうはたいぢし  
たり此きんびらにはうへこすものはよも有ましと、  
こうまんきざしいたる所に十二三なるわらんべかご

にかまもちたきいをとりにとほりける公平みてやあらんべ此あたりに人さと有や是よりさに出る道はなきか山かにすむとてなんじがつらはむさきものかなさるか人かとわらいけるわらべ聞て山家大かい野谷たくりん森川とてゐるいのものはかすおゝきになんじが様なるほうすは三がいにまれ成先衣をちやくしききほどのせつしやうことにはほうしににあはさるつるぎをよこたへこうまんのきざし我ひとりと思ふせばき心ぞわがつらのむさきよりほうしがしよぞんこそおかしけれなんし我ひとりたへなりと思ふ心の上からは人にとはずとあしのつまさきのむきたるかたに行べしとあいそうなく申すてしづくととをりける公平大きに腹を立にくきせがれがりくつつめあたまはりのめしすつべしとはしりかゝつてしたたかにはりぬれはわらんべこびんおしさすりそつと力は有けるよないでへんほうかへさんとかごをしたに置かまをおつ取むかいける公平そつとおどさばやと思ひ太刀ひんぬき打かくればひらりととび中／＼つるきに及はず坂田いかつてきやつこそ此山の天句ならん切てすてんとちをはらはは天ゑとびたゝいな

づまのごとくなりさしもの公平あきればてゝ立ぬればかのわらんべが申様地あれば中天有中天に上こす天有小あれば大有きん平に上こすわれ有とかまのさきに引かけくるり／＼とふりまはしはるかのたにかつばとなげ行方しらす成にける公平大きにいかりみぢんになしてすつべしとくはやくかけ上り四方をみれども行へなし公平つく／＼しあんしてさるにてもたゞ今のくせものは何成べしとかくうき世にはさま／＼ふしぎはれやらす此山の道をたつねて見んと思ひなをおく山にぞ入にける公平が心の内むねん成共中／＼申斗はなかりけれ

### 三たんめ

其後坂た兵ご金平は思ひの外におくれを取しゝのはがみをなし我一生のおくれかゝるきたいのくせものさら／＼ふしぎはれやらすいか様にもきやつにたづねあはずと云事有べからすとあそこの山こゝのみねたにゝくだりさわをつたへ行く程にみかみ山の東のしん山にぞ出にけるかしこをみれば其たけ一丈斗の

大入道たにより水をにない山にあがる金平みて扱こ  
そくせものの柴のいほりに付たり何にもせよさきの  
へんほうなすべしとそつと山上につたい上りまづお  
どろかさばやと思ひ五百人斗にてたやすくうごかし  
がたき大石みちになれとおとしければなにかはも  
つてたまるべきかのしばのいほりらつくわみぢん  
にくすれけるうちよりすはやれいのくせもの來りと  
出るを見ればせいは八尺九尺にあまる大人まさかり  
ないがまひつさげちいさきいほりの内より二三百人  
山のごとくのくせものども我もくといでにける公  
平みて誠にひやうたんよりこまの出るとはか様成事  
なるべしわづかちいさきいほりよりきやつばらいか  
がして有けるぞ是もふしぎのはれやらず一まづかけ  
をかくし事のやうをみぬべしと大木のほらのうちに  
かくれ入事の様を見る所にみなく山の上にかかけ上  
りてはけなし四方にわかりたづねける公平みて日本  
一の坂たがきやつばらにかくれあらんな中々くちを  
しかるべし出くしててなみをみすべしと二尺九寸の  
大だちづばと引拔こゝに坂たの入道金平ひかへ有け  
る也かけよてなみを見すべしと一もんじにうつてか

かれはかずの大ひと山のごとくおつ取まきなほあみ  
をはりまはしひとへに公平をきつねむしなをなすご  
とくうしろへまはつておへをいなばあみにかゝるべ  
しと小てふなどのごとく申ける公平いよく腹を立  
につくきやつばらがふるまひかなと一もんじには  
しりかゝつて一ばんすすんだるくせものをてうとき  
ればまさかりにてはつしとうけ公平がまつかう二つ  
と打付るをひらりととべば三十人程おりかさ也ゆん  
でよめてよとせめたりけるさしもにがう成きん平も  
もてあつかいすでにかうよと見ゆる所にくろくも一  
村まいさがりみればそのたけ一丈ばかりのはくはつ  
たる山うばてつぼう引さけとんで出大せいのやつば  
らさんくゝに打つぶしのこるもの共四方へはつとお  
つちらしいかにあく太良是へくゝと打招ききん平あ  
まりのうれしさにさてにかうはいかなる人にて候ぞ  
ひとへに三ぼう諸天とらいしける山うば聞てあふな  
んしがしらぬこそことはり汝がためには大うば也父  
公時か母なるぞ我はこれ三がいむあんによせくわた  
く人界をはなれてませうのうちにすみかをなし三十  
三天が内をめぐるとみれば有時は山又山をめぐりつ

つ山ぢにかへりさとおりにくもを平ぢとはしるじん  
つう第一のまほうをゑて三千せかいをめぐり山まは  
り山くつゝくものはたでのあまつ空いつてんこ  
くうにとびめぐる鬼女と云もの也然るになんじ一世  
の大事今にきはまりいのちとられんかなしきにくも  
わけつゝ遙々爰にあらわれたりさて只今のくせめは  
山かにすめる山びこ山を小山の神として大ゆう力のこ  
う力つよくひとりと見ゆれと神力の汝か力うへをこ  
さんあまたかけよりく力をそへておのれにあまる  
人をさいなみ爰のこぼくかしこのほらにかけさらし  
人がいのめを驚ろかしきれどもたいなくきへて有か  
と見ればかげろうの此山うばのごとく也然るになん  
じ父公時に生れましほんぶのはたらきばつくんにこ  
へたり去ながらあく太良我斗と思ふまじこうまん  
にまどうつゝしむにあくじおそれて千里が外にさる  
十ぶんたるはかならずかくるならい天道のみせしめ  
さとるべし心へよくもいをてらす月りんもいとより  
ほそき二か月のしだいに半月と也て三五にゑんげつ  
と丸し是十ぶんにあつばかくる月いぎよいには又し  
だいぐにかげきへてもとのやみぢにかへる也人間

にも生死の初としかさ也ておいの身の若きむかしを  
こい衣ひとへに佛神をいのつてつゝしみを第一とせ  
よ汝人かいにしやうしにくしんのうけたるとくによ  
つて心になはぬ浮世にすむめにはみへねどあさか  
かみかげをはなれすうしろにつつたち汝大力をあ  
らはす時には此うばがしゝのいかりをはげみ力をそ  
へ守りの神と立ぞかし汝がわざと思ふまじさればな  
んじが父の金時其はばんでんにふれ山おとこと成べ  
きを此姥が思へばむざんの次第としなのゝ國にてら  
いくわうをたのみ奉て人がいにまじゑてくらしいにつ  
くるそのこなればわどのも第一つゝしむべしわがま  
まはかならずほうかくやぶつてげきしんににたりあ  
らむざんのまごやと打あをぎててうあいなすさしも  
にたけき公平も大きにこまり只さしうつふきちりを  
ひねりていけんのきく山うばはうれしげになんじは  
天せいをうけず日本には子はなしたゝかうかうには  
ゑんをもとめてなんじのたねをつぐべし一代いつせ  
はせんしやうならす是のみ心にかゝる也いつまでく  
さのいつまでも付そい有度身なれ共まどうにすける  
あさましきは又山にめぐりかへる也汝は是より山め

ぐりしてあづまにいそぎかへりにつくしに行てとくとく都にかへれかならずもさらばかへるといふかと思へばたちまち鬼女と成てこくうにひかりをはなつてうせにけり公平御跡三どらいし是もふしぎのゑんにひかれてあやうきかこみをのがれたりさらばあづまにくだらんと山ちを出て道のくにいそぎけるかのきんひらが有様ゆゝしき共なかゝ申斗はなかりけり

#### 四たんめ

▲其後坂田の兵ご金平はあやうきかこみをのがれつつみかみ山に立出めぐる山つたへ山まだ山を打こへていそぐに今ははやうきたびするがの國あし高山に着にけり公平山をめぐりて山げをさしておりにける所にわらんへ共あつまりてすまふ取てあそびける公平と有岩やにこしをかけあつはれよく取子共哉とれやほうびをとらせんとあなたこなたにげじをなしとうざいわすれて見物なすかゝる所にせい高き鬼とひとしきおのこ共左右に立わかりけんぶつしてゐたり

しがいつとなく子共のすまふはことばりかのおのこ共立出てしだいに大せいなりかさ也やかてすもふを始けり西のかたよりせい高きおのこ四人四天王となつて出ひがしの方の大すまふさんゝになげたをすきん平うれしげにゑみを含みよねんなく見物なす所に又ひがしよりそのたけ一丈斗の大山ぶし四人しつゝとあらはれ出より吉の御内の竹つな公平うすいうらべをなゆる御すまふ出てひねり給へとちからあしをどうゝとふんでまちかけたりにしの方より我は竹つな我はきんひらうすいうらべと立出て同力あしをふみそろへうすいとなのるすまふあく道坊とやつとて合なしとつたりける公平心の内におかしく爰に誠の四天王公平有をしらすおんこくとて我々をまなび名のるこそおかしけれ此にせ四天王が取なすすもふ見物おもしろけれとさらぬていにてみたりけるあく道はおなしと定かげと取くみ二人よつがいに入くんどうすいはあくどうがむないたにおのか首をとつくとおし付四つてながしにひねらんとなしぬれはあく道はかさにかゝつておしつぶさんと二人ゑいやゝとねぢあいしがついには定かげなけれ

けるそれよりうらべとなのつて又とつてなげらるゝ竹つとなのつて出是も取てなげらるゝ今は公平となるすまふ只一人ありける坂たは是をみてわがなをなのるすまふおぼつかなさよとかたずをのんでけんぶつする所に公平となるすまふれいの山ぶし二人つゝけさまになげ出す坂田ゑみをふくんでうれしげに誠にわが名のる程有けるよと心のうちにたのもしくさらぬていにて見る所になむ三ばうにせ公平一人の山ぶしに其まゝにもなけらればこそ二三間けとびをくいよろり／＼とれんとびしてまつさか様にふみたをさるゝけんぶつの子共を初みな／＼聲をあげ公平はめをまはされたりさん／＼ふしゆびの公平何公平もやくにはたゝぬものかなとこへ／＼にわらいける坂たは大きにせきゑゝにくきやつはらかなわがなにおくれをつくる腹たちさよ此うへは我いづへしと衣も太刀もぬぎすてゝ大せいか中に出けるかの山ぶし此由を見るよりもゑゝ是なる執行者はさきより見物して有けるがすきの道とていらぬ御ほうがうでたてかなめのまはる程なげ出さん四天王はなげられたり今出る御ほうは一人むしやとも申なんと

いへば坂田聞いていや／＼我は百千のいかつちぼうと合給へと云山ぶし聞てかみなりのなげられ給はゝ今の公平よりおかしからんさそいかつちぼうを物見せんとやつとてあはしてむす／＼とむかの山ぶし事共せず公平すでにあやうくみゆる所にさかたこんごう力を出しゑいやつとこゑをかけれいの山伏まつさか様になげたをしふみつぶさんとする所に殘三人とびかかりて取あしとりくみあいける公平さいせんの力をゑきををはからつておしたをせは二人いつ所におのれが力にのまれひやうぶをかへすに事ならすまあをのけにたをれける公平大きに悦いかにあくそうにせ公平とはばつくんにかはらん我こそ誠の坂田成と大きにかうげんはいてたつたりける四人の山ぶしきもをけしそのぎならはしん山きた谷のさる丸大太夫をよびてきたれ此さるだ王にはかなふましとさる王をよひつかはすきんひら聞てたとへは仁王成共よひぬべし手なみのほとを見すべしとうでをさすつて待かけたりかゝるまにさるだ王と打見へつらはさるのごとくせいは九尺ゆたかにして大小十もんじによこたへふぢのねを持てはちまきして坂たがまへにぞ出

にける公平みてきやつはいか様さるのとしをかさねしくせ物ならんつかみひしぎてすつべしとんでかゝれはさるだ王む二む三にたぐり付ゑいや／＼とねちあいけるきんひらはゑしやくもなく引つかみかさにかゝつておしづくれはさるだ王はちつともうごかずよこ様になげんとさしもの公平を二三どふりまはしすであやうくみへにけるされ共公平はすどの軍になれしくみ打の上ずにてかしこにひねりよこさま十方うちからみにゑいと云ておつふせけるさるだ王はがみをなし下より金平がみゝをとらへむしりつく坂田みてこはかはれるすまふかなさらばてなみを見すべしとくびのほねちぎれてのけとおしづくれはまなこをみだし口をあきせつぢし今をさいちうなるれいの山ふし共是をみて今のはわれなり取なをせとむたいに取て引わくればさるだ王かふりをふつてすまふはもはやいやと云きん平きゝもあへずそのぎならは太刀わざのしあい然べしと申せはうちうなつきさるだ王は五尺斗の大たち引ぬきかくばしらをふることく坂田まつかうくだしにきりかくるきんひらはよう／＼二尺九寸の打刀どうしきりをひらめかしし

しこらん本ノマ、ほしやとう御てんにつらなるほしやとう小太刀めぐるゑんりうのゑんひに取てゑんくわいちやうたんのいちみとふみこんでづんとはらへばなにかはもつてたまるべきさるだ王が大たちうけたる物打の中ふつつと切おりまつこうから竹はりとなしぬれは有あふもの共きもをけし此ほうしはたゝものにて有ましと一度にくづれにげちりける公平いまは只ひとり今迄とうざいをわすれたびを共覺へず有ける只一人と成て誠にとまり定めぬうかれからすのふせいにて日は山のはにかゝりやうこくをてらし道もしだいに本ノマ、ため／＼しくいづくはしらすさしもあれにしふるてらこそみへにける是にてこよひをあかさんとあしにまかせていそきけるかの公平か心の内うれしき共中／＼申斗はなかりけり

### 五たんめ

▲其後ひやうご入道きんひらは都を出て此かたはそのたよりとてあらざればよりよしの御前には竹つなをはしめおの／＼四天王あいつめてせんぎひやうで

うとり／＼也よりよし上い有けるは此度きん平がと  
んせいかゝおもはれ候ぞ誠よりきざすほつしんな  
るましめん／＼思ひあたる事あらばつゝます申給へ  
又かれがたねん我にふそくをふくむ事人々ぞんしな  
きしさいゆめ／＼あるべからずらい光の御時より三  
代家につたはりし四天王よりよしがよにあたり一人  
かくるその時はよものひはんもいかゝ也かた／＼い  
かにと上い有竹つな承上いのこときんひらほつし  
んの心にて候はずそれかしさま／＼あんのめぐらし  
候にすぎしむしや執行のその時めぐりのこせしはり  
まのくにひめしの男山あづまぢにくだり候はん一人  
ほつしんと心ざし出たるは又定かけを相そへられて  
候はいろじのわがまゝ心にまかせぬそのうべにとん  
せいに事よせむしや執行におもむき候也此うへはお  
のおの御いとま給はつてあづまぢとはりまにてわけ  
をなしたづねて候ものならば必めぐりきたり候べし  
とぞ申けるよりよしげにもと思召はりまの國へは清  
氏あづまぢ中せんどうはうらべとうかい道へはう  
すいとせんぎ一づにきはまりてみな／＼すげの小が  
さにて行へもしらぬ公平をたつねめぐるそうたてけ

れ去程にきん平あしたか山を立出てそこともしらぬ  
ふじのすそのに出にけるげにふるてらのものん柱は  
たちながらとびらたをれてほりのはしのきかはらも  
こぼれおちむぐらはかべをあらそいてにはのうち  
なる一もとのすゝきがうへを吹風も物さびしくそつ  
と身にしむ斗也くわう／＼たるふるてらにすむ人な  
ければおのづからころうやかんのすみかにてたけは  
たゝみをはへぬきてやぶにひとしく見へにけるうち  
に入てみてあればあるじなき寺にはびしゆかつまの  
つくりたるざぞう佛たゝ一たいひかりくちぬははく  
ぶつ也あれすぐれしまばらやの月もるかげにかゝや  
きていとゝしゆしやうに見へにける公平入道誠にこ  
よひのあるじはみだ如來我も衣をちやくし佛たいを  
ゑたる佛ぞ平のきん平なればこよひのあるじみだに  
念佛申て奉らんとそば成しもくおつ取かね打ならし  
たか／＼となむあみだ佛／＼としゆしやうげにゑか  
うしていたりけるかゝる所にうすいの定かけ公平を  
たつねとうかい道をくだりしか日もはやくれてする  
がなるふじのすそのに聞へたるせいけんしにぞ付に  
ける定かけかねのねを聞よりこよひは爰に一夜の宿

をかりぬへしと門前に立より大おんあげ是は都よりあづまへとをるたび人也此寺のちうじのなきけにこよひ一夜のやどかし給へとたからかによばはりけり公平聞てげに我もたびのやどりのぶつていねぐらにまよふふくらすゝめの竹の一よをあかしかねやどをこうこそふびんなれしかしながらわれさきにきたれは此寺のあるしもおんにかけてとまらせはやと思ひいかなる人にて候ぞ御らんことくひんそうのことなれはまはらがきなる此寺に今宵一夜もいかでかはあかし給はんいづれへも然べからんそのかたへ御やどをめさるべしともたせかはにぞあいさつなす定かげ聞てりよしゆくの事に候へばあれたる宿との御ひげしはとんどいたみ入て候たゝ願くはゑんの上になり共こよひ一夜はせひにおいてかし給へと奥をさして入にける入道聞てゑゝ我まゝなる旅人かなそつとおどさばやと思ひそばに立たる切石かいつかんでわざとはるかこなたにあたらざる様になげ出す定かげみてこはなきけなきあるじ哉とても給はらん石ならばまつとこなたになげ給はでひかへ給ふは心みがましく候旅のつかれに候へ共かやう成小石の十や廿

はものゝかすにてかすならずとおいかさ成にはしりかゝつて中にて取それに返上申ぞとゑんのうへなる入道になけつくれば公平は定かげと見つけ物もいわすおくをさしてにげ入うすいはほうし我におそれにくると心へいづく迄御ぼうせひ御めにかゝらんとくうでんらうがくはしかゝり佛前のほうじやうきらいなくあなたこなたをほつかけたり物もいはすきんひら道なき所にはつつめられ取てかへし定かげをゑんよりしたになげ出し又おもてをさしてにげ行は定かげあつはれつよきおてらかなせひにおいてげんざんとひらりとおきゆんでのうてをとらへかほみんとさしのぞけば入道は衣の袖をさしかざし見られじとあらそひける定かげやかてさし心へさては大かたすいし申たり公平入道にておはすべしうすいの定かげ君の上いをかうぶり御へんを尋て廻るなりとむたいに衣の袖を取ぬればあんにたがはず公平也是は／＼と二人一度に打わらいせんなきほねをおつたりと火うちつけ竹取出しあたりの木のはかきあつめぬしなきいろりに火をたきてたゝ二人しん／＼と都あたり物のたりそれは是はいふ所にさもいつくしきち

ごこつせんとあらはれ出あらめつらしのこよひのき  
やく我も昔は都なる四でうあたりの物なれば都かた  
りしてむかしを今になすよしもがなと入道うすいか  
いたるまんなかにおめづおくせすなをりけり公平定  
かげきつとみて扱もしれたるくせものや此大寺のた  
いてんしてふるてらと成事みな是おのれがわざなら  
んしかしながら日本一の我々にこよひむかしかたら  
んとや尤聞とゞけ有ぬればはやくかたれきかんとて  
公平ほうつえついでぞひかへけるかのちご兩人に申  
機某は都四でう通しめやのせうしがひとり子にきく  
千代丸と申せしを此寺のちうし都に來りわが父にか  
くもんのそのためと此せいけんじにくだりきてがく  
もんをとぐる所にあまたのほうし心をかけ文たまづ  
さのつもる事あたかも山のごとく也あなたこなたの  
玉づさをかへさぬうらみのつもり／＼て今ははや心  
のおにとりなんとこの寺にはんにやのめんの候を  
取てかむりかよひくるやつばらを一夜二よとおいち  
らし有時おもてをとらんとすればかなしや此めんか  
ほはなれずせひなくかゝるすがたと罷成とさしあ  
をのくとみてあれは今までうつくしかりしめんそう

たちまちべんしよくかはつてすきましくくち耳のき  
はまできれさばけちごかとみれは女也公平定かげか  
ら／＼と打わらいそれに心をとられつゝあまたもの  
の命をうしない有ぬべし此坂たうすいは腹の内より  
おにを食して出生して鬼めづらしくもあらぬ身にせ  
んなきおもてのうへ事よと金平にきりこぶしてい  
か  
れるき女がおもてをくたけてのけとはりぬれはその  
おとくわしとなりて大ちにひゝきかげなくきへてう  
せにけるげにあきのよのかりまくらよはほの／＼と  
明ぬれは公平定かげ悦てさるにてもゆふべのへんげ  
はつらはみちんと成てしにぬらんたつねて見んとか  
しこを見ればはんにやのめん二つにわれてちしほに  
そみていたりけるさかたうすいせんだいのふしぎ是  
ならんこれまさしくのおもて也先めでたしとそれよ  
り此はんにやのめん二つにわれて今か世迄もせいけ  
んしに有とかやかの公平うすいか心の内うれしき共  
中々申斗はなかりけり

## 六たんめ

其後うすい坂田兩人は夜もほの／＼と明ぬれはせいけんしに立出る公平申ける様は我是よりむさしの國にくだるべし御へんはかへれと申ける定かけ聞いていとよ公平われ是迄きたる事べつのしさいにあらずわとのを尋てくだる也然るに御へんをあづまぢにおもむけわれ壹人都へはいかいひてかへるへしこゝをあんしひら更都にかへり君に御いとま申つゝ其後あつまに下着あれ思ひもよらずとせいしける公平打うなつき其うへは力なしさあらばはりまに打こへひめしのへんげにたいめんしてふしきを見とゞかけかへるべし殊には清氏ははりまへさきだつてまつときくいざ／＼いそがんと申けり定かけ聞てそれはいなとは申しし御へんが心にまかせよと二人うちつれはりまのくにいそぎけるむかいをみればうらべのすへはるなんかい道にて坂田うすいにめぐりあいよろこぶ事はかぎりなし公平みていつもの事といゝながらめん／＼に此度なんぎをかけし事めんほくなくあらす一つはじつふをたゞし世のかたりつたへになしぬべしはりまの國ひめしよしや寺にいそぐなるたいぎながらすへ宗も同道あれとぞ申けるうらへ聞て尤

也のぞみてもまいるべき所也いさ／＼いそがん尤とはりまの國へといそぎけるいそくに程なくはりまになれば三人の者共ひめちの男山にぞ上りける心のうちこそふてきなれすでにその日もくれはてゝふゆのはしめの事なるに秋かせさへも身にしてみてぞつとずるかと思ゆれば山かげより十丈斗の女のくびかねまつくろにつけたりしがつらをぬいとさしいだししとわらいて見へにける公平扇をひらき出られたりやばけものどの<sup>本ノマ</sup>はへ／＼とうちまねく二ばんにつらのながき三間斗の大入道おなしくあらはれ出てまねきして待かけたけ定かけ見てよにくに<sup>本ノマ</sup>にいるひいぎやうのかたちかないまだかはれるおもての有ならば所望／＼とよばはれば山のあなたにおつとこたゆるこへ有てたいみみもなくはなもなく眼二つくちみみぎはまでさけたりしくせものその外ほうしちこ大入道山ぶしのくび十丈斗有けるがかずあまた入かへ／＼出にける、公平みて是へといふにきたらすはいざやそれへまいらんと三人打つれ行所にひらいの清氏かた／＼はいつくへいそぎ候ふしぎなりとたづぬれは定かけ聞てあの山かけにへんげあまた有うへ

に生たいをみんなために扱こそいと申ける清氏尤也我もかた／＼がごとくあれにてみたる時にはいるいのへんげみへしうへさてこそ山にめぐり生たいをたゝすにいさゝか以てかたちなし爰にふしぎの有はなんかい共なきしたいふかき岩あな有若此内にやすみぬらんとちかづきよればかげきへて其たいなきこそかげろうと云ばけ物よと一度にとつとぞわらひける公平聞てさすが四天王ひとりむしやといはるゝ身がそのあなの内を見ずして都にかへりては何とかはなしとなしぬへし我がごに入てさがるべし人々は上よりおろし給へかならずもとあなの内にさかりしはあやうかりける次第也公平はあなのうちにおりたちあなのていをさしのぞけは岩のとびらひやうぶのことく立ふさぎさきへ行べき道はなしさてはいかなさん去ながら此岩力にまかせおしてみんとゑいといふておしぬれば何とはしらずいかつちのことくなりわたつてさゆうへはつとひらきけるさてはしすましたりとみれば二八斗の女良のうつくしかりける硯に向ふでをそめてならいしていたりけるきん平つつとよつてやあ汝は□□□すまひかな公平むかい

に來りいざいけと申ける女せう聞ておゝよくこそ來れ誠になんじきめうの者ぶゆうばつくんにすくれ大かう成事ひとへにいこくのはんくわいにまさるわれはませうにもあらず人をなやます事をせず其いへを守て世をあんおんとねがふ也はや／＼かへれと申ける公平聞て尤也併なにぞせうことをとらずしてかへるへきにあらすいかにいかにと申けり女性わらつてせうことや是／＼これをなんしにとらする也と一つの手ばこをさして出す金平何ぞとおしあけみればめんかうふはいの玉にひとしき火ようの玉と云もんし有さては此へんげと云はいなり五しやの大明神と心に思ひ火ようと有はに本ノマよりほうじゆの玉成か女せうわらつてやみちをてらす玉ならはくわやうとこそゆふべけれのべにやかんのたつる火は此火ようをてに取てもあつからず火ちうしてもやくる事なし去によつて火用ほうしゆの玉也はや／＼かへれげんじはんしやうに守べしいかに／＼と有ければ公平おしいたゝきかはる御しんたいを見んと云尤も見すべしと忽すがたかはるを見てあればめんていは女人にてしろきやこにのり給ひこんしきのひかりをはなつてみへ給

へはきん平かんるいきもにめいしひとへによいりん  
くわんおんぼさつと三度らいし立出やくそくのつな  
をうこかせはみなくよろこび引あげ事のしたいを  
聞てせんだいみものふしぎ是なりくと都をさし  
てかへりける今が代までもはりまのひめし此女性と  
きときあらはれ給ふとや有がたし共中くきせん上  
下おしなべてかんせぬものこそなかりける

右者太夫直之正本也

大傳馬三丁目 うろこかたや新板

いかつち論

第一

さてそのうちよそれかんかほんでうのこれきをか  
かんがみるにふはこうをたてゐをあらそふことこ  
うのごとしつゐにかんその心をふくむこゝにせい  
わ天わうのかういんたゝのしんぼちまんちうの御す  
へちんじゆふのしやうぐん八まん太郎よし家と申  
たてまつるは天下のぶしやうにてわたらせたまふ  
しかるによし家こゝのわかぎみ御たんじやうおろ  
しましめて<sup>下</sup>御よろこびはあさからず地さて御まへ  
には御しやていかもの二郎よしつなおなじくしん  
ら三郎よしみつ御はゝかたの御おぢにほうでう  
の三郎これかた扱又大みやうにはみたちのこん  
太郎きよひらかまくらのごん五郎かげまさ  
おなじくしそくあく平太かげひさこのかけ  
ひさと申はかげまさのあにかげみちの子なり  
しかかげまさやうしとしてかまくらのか  
げひさとなのらせたまふ心あくまでこうに  
してふゆ

う人にすぐれわきて御すがたもいつくしければ  
きみてうあいあさからず御とこをゆるさ  
せたまふこれかちほらとうのくはんそ  
たり扱其つぎにぎしけるはかまたの  
小四郎まさうちかねこの次郎家も  
り其外のしよ大名さゆふにわかつて  
れつぎあるきみ仰出さるゝはいかに  
かたゝゝわれいとけなき時いわし  
みづにてげんぶくし八まん太幡と  
なりしよりうちかみとあがめ奉る  
されば此わかをもわかれいにま  
かせやはたの御うちことなす  
べきなりいかにかげまさわか  
をぐしてさんけいせよさいわい  
けふは吉日なりとくゝと仰ければ  
承はり候とれうちやう申ごせ  
んを立ろしのけいゑいはなや  
かに三重やかたをさしてぞ上  
参られけるさる程に地ころは  
しもつき廿日あまりのこと  
なりしにゆきかきくれてふり  
ければかげまさかささしかけ  
さて御とものみちすがらかな  
たこなたをみたまふによもの  
けしきもふゆがれてそのなば  
かりはさくらぎのこずへに  
つもるしらゆきはつはなよ  
りもめつらしやかげまさ心  
におもはるゝには時もこそ  
あれわか君の御みやまいり  
のかどいでにきぐさもなびく  
ゆきはたゝしらはたなりと思  
ふにぞまことに

げんし一とうのみよと成べきすいさうかないさぎよし／＼このわか君の御ゆくすへばんせいらくと打はいおくいさみにいさみてゆりしやさん有みやゐにも成ぬればかすのほうへいことおはつてすでに御下かうのおりふしにはかにしんどうらいてんし百千のいかづちは三重とうざいさしてぞ上とびわたるその時かげまさはことそらのけしきをきつとみあげてあらふしきやときならずふゆかみなりとなりたることいまたきひたることはなしいかにかんぬしこの山にはかゝることいつも候かいや承りおよばず候ましてみにとりてもおぼへずと申せばこん五郎打うなつき扱は日本のふ將となりたまふべきわか君はしめて御さんけいあるによつてゆくすへめでたくゑいぐわのはなのひらくべきすいさう天よりつぐるとおぼへてありそれらいのころにはなさくこといこくにおゐてためしありたう刀げんそうくわうていははなおそくさく時はかつこをうつてはなをもよふす是いかつちのまなびなりおゝめでたし／＼さりながらかみなりめよおのれ天ていのつかひなるにわか君のおはします人／＼のあたまのうへをおのがきまゝになりわたる

はれいぎもしらぬくはんたいものやあおさないきみのおびへたまふにとつくなりやめおのれながなりせばかみなりとはいはせまじかげまさがゆんせいにてたゝなかをいぬくへしといひもはてぬにいかづちたちまちにおちけるがそばなるまつのき二つにさつとひきさひてくもいはるかにあがりけり爰にふしぎのことこそあれさけたるきにもじすはれりかげまさ立よりみたまふに天ていしゆごしみなものとよつぎ丸とかきてありかげまさきひの思ひをなしやがて此木をきらせつゝ三重みやこをさしてぞ上かへられける御所にもなればはこと御まへにひざまづきみぎのあらましをごん上あるよし家大きに御ゑつきあつて是天のさづくる名なりとてそれより御なをよつぎ凡と付たまふせいじんのこにいたつて六でうのはうくわんためよしと申はこのわかぎみの御こと也かくて御みや参りのことふきとてしよこくの大みやう小みやう御まもりかたなにて家／＼のぢうほうを御うぶぎぬに取そへ思ひ／＼にあげらるゝは三重めでたかりけるしたいなり扱そのうちにぶ將御出まし／＼ていかにめん／＼かた／＼のぢうだいをよつぎ丸にたまは

ることよろこびいつて候なりなかんづくゑちごの五郎左衛門たゝひろがゑさせしいかづち丸といふ太刀ときにあたりてさうおうの名なりわかゝいゆくすへを思ふて一しほよし家てうほうせりさだめてゆらひあるべきかたれきかんと仰ければたゝひろすゝみ出てさん候それがしがせんぞほくめんのやくをつとめはんべるにさがのゐんの御時せいりやうでんのひろびさしにいかづちおちて候をすかさずおつふせみかたなして候さるによつていかづち丸とな付てたいたいにつたへ候があつきをとめし太刀なれば御まもりかたなにあげ參らせたるにて候といかめしがほにぞ申けるかけまさきゝもあへすいやくゝそのたちは御まもりかたなにならじとをゝもつてかへられよそのしさいはまづ大との八まんにて御げんふくあり御しやていよしつなはかもの宮にて御げんふくありしんらどのも又しかなりされはかもの明神はほんちなるいかづちのしんげんしにふかくたつとむなりそのかみのけんぞくをつきとめたるはふきちなりまたこのたび御みや參りのらいしん御名をつくる是わかぎみのゆゑんありかゝるしいしゆをしりながらそ

のたちあぐるはけんじの御家をのらうとみへたりいやゝゝごへんがぶんにてはそれほどのことばよちゑせしたゝきみのぎよかんにいらんとあとさきしらすのくはんせなしつくりなをしていでけるかゝいやれあしきいけんは申さぬぞ其たちのなをかへよときやうになしてぞわらはるゝ時にゑちのひざたてなをしなんでうきみのおんまへにてすぢなきことを申さんやちうだいのけいづに是をかきとゝむる家につたへし太刀なれば御たづねにまかせて申なりそのかものみやうじんのしさいはいさしらずと申ければなに御ぶんか家のけいづにあるとかやゝ下いさては御ぶんはたいゝのうそつきよなして其つきとめたはみづかみなりかひがみなりかみづがみなりならばつく共きるともしやうたいあらじ又ひがみなりならばかたななまつてようたゝし地たいうちおりてわか君のつりばりにすりたまへとふしゑつぽにいつてぞわらはるることたいひろきしよくかはつて思ひつめてみへけれどもごせんなればしのびて太刀に手をかけはがみをなしていたりしを君御らんしていかにかたゝゝかげまさがいふ所はことほりなりさりながらそれいか

づちにしな／＼ありあめをふらし五こくをみのらす  
るは是じひしんらいといふ又大まわうのけんぞく共  
はたけございにすんで人をつんぎさだうとうをやぶ  
るは是くわらいといふさればた／＼ひろかせんぞきん  
ていをおとろかし奉るをつきとむるといへば是まを  
しづむるたちぞかしなんじが家のちう代またよし家  
かぢうほうわか／＼まもりかたなにとらせんと御きし  
よくよげに仰ければた／＼ひろ此御ことばに色をなを  
したうざのいしゆはなかりけりよし家ここの御こと  
ばあつはれたぐいなきふ將やと偕かんせぬ者こそな  
かりけれ

## 第二

偕その／＼ち地すでにとし月すぎのまどわか君も今は  
はや三歳にならせたまふ御かいしやくの人／＼あま  
た付そひ参らせもてなしかしつき奉るある時わか君  
御なぐさみの其ためにていしやうにはとりをあつ  
め是をあはせてみせ参らするは時ならねともはるめ  
きてふしけにきやうありてぞみへにけるはこゝに

又いつくより來りけんふりたるむしなあまた子共を  
引つれてつきやまのかげにむれいしをよしいへの御  
そばさらずのかうのものにさかわだの三郎むれまさ  
是をみ付なふあれ御らんせよ人／＼おりあらばかけ  
よせ此には鳥をくらはんとたぬきのおほく出てあり  
にくさにもくしいころしてみせ申さんとそば成ゆみ  
をおつ取てかけ出ればむしなは四はうへにげちりけ  
るされ共三郎四五ひきはいとめしが爰に一ひきいは  
かげのとあるほらにかくれしをむれまさおつめや  
あおのれいかにしのお共いかて命をたすけんとゆみ  
のはづおつ取のべてかのおなをさがせはたぬきはあ  
なにこらへかねとんでいづる所をさかわださそくき  
きたればはしりか／＼つてひつつかみ二つにさつとひ  
きたきける御かいしやくの人／＼此よしをみるより  
も一どにとつとうちわらふてお／＼きやうありやむれ  
まさとのわか君のよき御なぐさみとたはふれて三重  
みな／＼内にぞ上入たまふさる程に地すでに其よの  
こと成に比は七月七日のよ都にはけんぎうしよくし  
よしせいをまつるよいなりとてかみはおほうちしも  
はみんなに至るまで五しきのいとをかけならべ思

ひのことをいのらるゝに三とせがうちにかなはずといふことなしさればよいへの御かたにも是をまつらせたまひけるし下ふ取わけ月もさやかなればぎよしんでんの御かちやうを打あげさせたまへはかげひさ一人御そひぶしにぞおはしけるよし家公本ノマよりうつなき御そでをかげ久のそでに打かけましゝて下ふしたゝもろ共によもすがらふしにはのけしきをみたまふにくれ行そらのよそほひもげにや誠に折ふしのふしうつるに付ておもしろや下ふ心なきゝさうもくなくといひながら下るし四きをわすれぬやさしさよふしはるさくはなのゑたゝはあをばとしげり今は又ふいきばかりのはつもみぢはぎがかきねにかずちるはふしくすのうらがれならんかし下をつたあさがほにはへまじるまさきのかづらなかゝとひきはゆるけふこよひしもふしかくるねがひのいとすゝき下しゝわれかねがひはなんぢと引下さてちよもと思ふ心さへほにいでそめていつのおはなとなにやたちなましたゝこいゆへにたつなこそ人のうへだにいかばかりふしつゝましさととのたまへばかげ久そでをふりきりて御ことのはをきく時はかずならぬ

みづからゆへにもしも又あだに御なの立ことをけにせんなくやおぼすらんとうらみかほにぞたちけるよし家たもとをひかへたまひおゝあやまつたりさりとては下ゆるしてくれよたはふれのあまりてかこつことのはをつゝましやはなにはゑのあしくも心へたるよとてすかりたまへばもとよりもよそにあらざる御心またとてともに御しとねのうへなきなかの御契りは下なふしあさからすところ思はるれゆりかかへだてもなき中になにをくねるとをみなへし色をもかほもしる人ぞしらんの花はさかりにてかよふかほりもよしやよしあしのはのふへによりしかなぐさとよやれあれをみよまつのけふりかゆふざりか上おんおほろゝと立のほりみへみへすみくもまゆくかたはれ月のかたはれはぎんおちてもみづにあるものあるかとみへてなきものはづみはさはべにのこるほたるびはいなづまのかげおさゝのつゆをきふししけきおきのはのそよともかせのおとせねばのこるあつさをしのぎかねくれをおそしとまつむしや本ふまたすゝむしにくつはむしかうろぎはたをりきりゝすつねになかぬはたからむしおのがさまざ

ますたくにぞふしものゝあはれは秋こそといにしへ  
 人のつたへしもげにさることとおもほへてなをもみ  
 わたすかさゝぎの橋なかれもはてしなきふしあまの  
 かはらをみるに付<sup>うたい</sup>思ひぞいづるもろこしのり  
 さんきうのさゝめこと天にあらばひよくの鳥ちに又  
 あらばれんりのえだとちかひのすへもたのもしくや  
 れそのかねこともこよひとかやそれは過にしむかし  
 のことよとしこそかはれ我も又ふしたれにしらせん  
 そでまくら<sup>もつ</sup>なにはをばづるそ打よれとかみかき  
 なでさせたまひつゝ御心のそこもかたりむつばせま  
 しませばかげ久かほを打かたふけにつことわらひた  
 まひつゝおもはゆげ成そのすがた何にたとへぬいと  
 はぎの露をふくめるふせひよりなをあたなればさし  
 もけに御心をよせられしはふしことはりすぎてそお  
 ほへけるそらすみわたる月もはやにし山にかげほの  
 めけばふくるをつぐるかねのねによし家おとろかせ  
 たまひつゝかげ久に御手をひかれ<sup>り</sup>かちやうの内  
 へぞゆり入たまふ<sup>はこと</sup>其折ふし其よはさかわだの三  
 郎御とのいにあかりしが御つぎのまにせんごもしら  
 すふしにけるうしみつはかりのこと成に夢うつゝ其

なく其さますさまじき女一人むれまさか枕もとに打  
 そひてうらめしげ成ふせひにていかにむれまさか  
 けふのていせんにてわが子共けんぞくかあそひしに  
 しゆ君の仰にもあらざるにあのれがちから持だてに  
 とがなきものをいころしひきさきしはなにことぞそ  
 のうらみをはらさんため是まできたるぞ時はすこさ  
 し只今思ひしらせんといふこそゑにおどろきむれまさ  
 かつはとおきにつくきちくしやうめがいひごとやと  
 太刀ひんぬいて打て出る此女さはくけしきもなく御  
 まへのかたへゆきけるがまちやうのうちにてみうし  
 なひ御かや取てうちあげおつかけていらんとすか  
 げひさこはらうせきものとむれまさをとつてふせみ  
 かたなさしてくびをかくそのひまけしやうは天じ  
 やうへとびあがりふしわらふこへしてうせにけり  
 にはよいいへも御いでありなにものやらんと御らん  
 すれば御さんじゆのさかわだ也やあきやつはさけに  
 煮いてのすいきやうかたゝしはきばしちがふたかむ  
 ざんのものゝありさまや偕かけ久はよくもつかまつ  
 たりさすがごん五郎が子なるぞかししたりやかかげ久  
 うつたりやあく平太としばしかんじておはしましや

がて御さしそへをくださるゝかたじけなしとてうだいしよろこぶことはかぎりなしのかげひさか手がらのほどあつはれかう成わかむしやと偕ほめぬものこそなかりけれ

### 第三

さるほとに地すでにそのよもあければ此ことらくちうにかくれなしはこゝにゑちの五郎左衛門たゝひろは一とせきみの御まへにてこん五郎とのこうろんこつすゝいとをつていこんいまにさんせすいかにもしてほんまふをたつせんとなひくしりよをめぐらしこの三かねんをおくる所に此よしをきゝ付よひかなやゝ是くつきやうのざんのたねごん五郎が子なればかげひさをなき身となさばおやのかげまさなどかそのつみをのかれんや是ねをほつてはをからすもとひなりと地あんしすましてたいひろはおく御所をさしてぞゆうあからるゝ御まへになればはこゝよし家御らんじていかにゑちの偕もやせんことをきかざるかかやうくゝの事ありしをかげ久しんびやうなるふ

るまひならずやと仰いださるればゑちのさあくつきやう一のひまと思ひたゝひろかしこまつてそれに付かねゝ承りたること候へ共御てうあひのかげ久なれば御きしよくをはかり申あげす候又申あげねばきみの御ためふうせんのともしひよりなをあやうく候也せひにあたり候とつゝしんでぞいたりけるよし家聞召いさゝかもつてくるしからずいか成ことぞと仰けるたいひろ御そばかく参りこゝへになつて申あぐるそもくやせんさかわだをかげひさがうつたることもつともきみのちうかうにはいたれともまことはおのがみのなんをのかれんためにて候へし之れをいかにと申に忝もかげひさ御とこをゆるされながら御てうあひのほとをわすれむれまさとみつう仕り候よし承りおよび候されはぐあんをめぐらし候に此みちには上下のへだてなきものにて候ゆへなひにむれまさきみを打奉らんとぞんずる所にたち所に天めいつき君ぎよしんならざるそのうちに参りうちそんしたてまつてはこにちにいかゝとぞんじせひなくかげひさがうつたるにてあるべく候まづ御しあんあつて御らん候へむれまさと申ものはちから

よにこへばんとう一のあらものをなんぞやかげ久としにもたらぬこくわじやにやみく／＼と打れ申べきか此うへは御しあんあつて御はからひ候へと申上る君つく／＼と聞召れぐはんらいあのたいひろはかげまさととうぎのこうろんもあればかゝることをや申らんされ共かやうのことをきゝながらまずそばかりつかふべきにあらずしばらくせけんをきかばやと思召ふしみの大ぶきよ介をめされ思ふしさいあればかげ久をあづくるぞきひしくけいご仕れ偕又たいひろにはあく平たがやかたにむかひかけ久か郎等共まばらにちらすな是又なんぢけいこせよとごさをたゝせたまひみれば兩人承りかしこまつてたいひろはふしわかやをさしてそかへらるゝ偕其後にきよ介はかけ久やかたへやがてつかいを立らるゝかくてかけ久はかゝることゝはしりたまはず御所にあがりたまひしをじやういなるとおしとゞめ三重ふしみのさとへぞ上いそさける是は偕置たゝひろはつく／＼思ひめぐらすにたゝやかたをけいごせよらうどうちらすなと承るはのびく／＼なる御さた也しせんらうとう共しのびいでちきのそせう申上はみのなんとなるべし

とかくしやういをかろしむるとひろうしてうちころすにしかしとしあんしけるがいや／＼かけ久かかうけんには山長兵衛のせう竹さといふものはこゝんふそうのゆうし也かれとかせんもしやうふはなかなかにかなふましよせんたばかりよせ是にて手ごめにせばやと思ひやがてじやうをしたゝめてさぶらい共に申付<sup>り</sup>お<sup>く</sup>たけさとかたへぞゆりおくりけるその折ふしたけさとはなにとやらんれいならずむなさばざしけるはしゆくんかけ久なにごとかおはすらんと御所をさしてあからんともんぐわいに立いづる所につかいのものはゆきあひてたいひろよりのふみなりとさゝげければなにごとやらんとひらいてみるにしゆくんかけ久きみの御かんきをかうふりでんちうにてせつふくいたさるゝとのじやうにてありもとよりは山四さうをさとするおのこにてやがて心へなふ御つかいひころかげ久とゑちのどのとはいしゆふかき中成に御念比の御心付とかふ申におよはれすいでいでもづごへんへひきでものを奉らんと太刀ひんぬいて水もたまらずくび打おとし此うへはとかふ申におよまじもはやてきはよせ來らんやういせよやか

た／＼と三重うへをしたへと上かへしける此ことを  
をもかくれなくゑちのはあんにさういしてこのうへ  
はゆやすべきにあらずとて三百よきをひきぐしてか  
げ久やかたを取まはし時のこゑをぞ上にけるやかた  
のうちにとかねてごしたることなれば兩ちんたがい  
にのみだれ三重ひはなをちらして上た、かいけりさ  
れ共せうぶはみへざりけり<sup>こと</sup>かゝりける所によせ  
てのちんよりもかたの、四郎となつて出竹さと、  
むすこくむ長兵衛のせうはゝゑみてやあこゝなやつ  
は何をするぞすもふばしのぞみか此は山はとしよつ  
ておくれずまふのことなれ共てはひととおぼへたり  
ならひたくはおしゑんとゆんでのかいなをさしの  
べよろひのあげまきをいかみちうにひつさげみ  
かたのちんへひかんとすあにのたかはるおとゝをて  
きにどらせしと太刀打ふつてかけ出るは山うちわら  
いやあごへんはすまふのきやうしせんためか取くみ  
たるすまふにぎやうじはいらぬ也是か御所まふなら  
ば參らんとさし出せばたかはる太刀なげすてゝふと  
もゝをおしにぎりゑいや／＼とひきければは山ちつ  
共さはがず是はめつらしやくび引といふことこそあ

れ是はもゝひき候なさあひきたまへ／＼とあふきを  
ひらき打あふきふしさらぬていにいたりけり<sup>こと</sup>  
かゝりける所にとやまのやけんしかけいでいかにと  
のばら入ひとりとらまへどちへもらうかもらはるゝ  
かとかくそれがしわけて參らせんとよはこし二つに  
切はなせばさうへもつてぞのきにけるなをもとやま  
すかさずかけ出るを竹さと取ておさへあゝふかく也  
やげんしわか君の御はゝやかまくらへしらせ申さす  
してながいくさはせんしこなたへ／＼と引つれて  
かしこにひを付のこりしやつはら四方へばつとおつ  
ちらしけぶりにまぎれうせにけり此もの共が有さま  
あつはれゆゝしき侍やとみなかんせぬものこそなか  
りけれ

#### 第四

かくてそのゝち地は山長兵衛のせう竹さととやまの  
やけんしみちざねは一つ所におちのびて<sup>ふしはら</sup>  
くいきをぞつぎにける竹さととやまにむかふて今は  
はやせんかたなし我は是よりかまくらへ下るべしご



よもすからしふふしみのさにとぞ付たまふそれより  
も母うへはきよ介がもんぐわいに立よりてばんの侍  
を近付てかやうくのものなるがかげ久にたいめん  
いたしたく候おくへこのよし申てたひたまへはこ侍  
共聞よりもいやおくへ申までもなしかなふましとつ  
きいだしもんをたてゝぞ内に入地母うへもんをたて  
られてふしせんかたなげにみへたまふがもんのと  
びらに立そひてなふなさけなしはんの人御かんきか  
うむるかげ久かゆかりのものゝことなればとがめた  
まふもさることなれどもその子がとがにあふならば  
一所と思ふみづからをあはれみ合せたまはれやあゝ  
なさけなの人くとかど打たゝきくなきたをれふ  
してぞなきたまふばこときよ介此よし立きゝしてやれ  
御有様のいとおしさ又は女しやうのことなればひそ  
かに合參らせんそれこなたへと申ければ地承り候と  
やがていざない奉りりなく有し所にゆりせうしけるや  
や有てきよ介はかげ久ともなひ出ければ母うへひめ  
君御らんしてやれなつかしのかげ久といだきつか  
んとしたまふをきよ介おさへちかふのたいめんかな  
はしとおしへだつれば母うへあまりにたへかねてな

ふきゝたまへしゆこのとの今までつゝみ候へ共この  
うへはなにをかつゝみ申へき爰なるひめもみづから  
もつねのゆかりのものならすあの子がおばとはいひ  
ながら誠はたいなひをわけし母ぞかしあのかげ久五  
つのとし父かげみちよをはやくさりたまひぬおちか  
げまさ子のなきゆへひたすらもらひたまふにより  
やうしに參らせ候也せいじんするにしたがいきりや  
うも人にこへ君の御おぼへもよろしくてときめきぬ  
ると聞時はわらはが心はうれしくてみのおいゆくを  
も打わすれとし月をおくりしにとがはなにともしら  
ね共おもはずかゝるなんにあひめしこめらるゝとき  
きしよりあるもあられずかなしくて是なるひめをと  
もなひてたづねきたるは兄弟や又ちをわけし母なれ  
ばいかであやまりいたすべきゆるしてそばへやりた  
まへとふしすかり付てぞなきたまふひめ君涙をおさ  
へたまふ是御らんせよあにうへさまこゝなるとのこ  
そたにんにてそばへよせしとのたまへ共母うへ是ま  
で來らせたまふになにとてそばへはよりたまはぬぞ  
せめてはものをのたまはでいるあゝうらめしのあに  
うへやとふしこゑを上てぞなきたまふはこときよ介み

參らせおんあひのあはれさは思ひやられて候ぞさりながら君よりの御せいとうきびしく候へはかほどまでの御たいめんもはかりおほくぞんすればそれかしも子をあまた持て候へば身つまされていたはしさにかくは合せ參らするぞをき御ことはをもひ切たまへいかにかけ久殿都の聞へも候へはとく御いとまごひおはしませ地景久はきゝたまひせきくる涙ともろ共に手を合たまひつゝあゝもつたいなや母うへさまかちやはだしのふせいにて是まで御入候こととおそれおほくそんする也身にあやまりはおぼへねと君の御かんきかうふれはこよひの命もはかられずかゝるなげきの御有様み參らすれはなかくにさいごのさはりとなりやせんいつまでも御なごりは同し事にて候ぞや<sup>なき</sup>ふしはやゝかへらせたまふべし又花よのひめもことの心をよくゝきけ我母うへにさきだち參らすれば御なげきふかゝるべしおことは女のみ也ともかひゝしく心をもちてな母うへなぐさめ參らせよ此はだのまもりをはおことにかたみに參らするぞ我こそ此よのゑんつきてらいせをたのむくはんせをんおことおかまんおりゝは兄がかたみと

思ひつゝ<sup>下</sup>ふおねぶつ申てゑさせよ引ゑゝ此くろかみは母うへさまおほそれながら奉る又こなたへもははうへの御うはぎぬをたまはるへしさいごにちやくし申さんとのたまふこゑのしたよりも<sup>なき</sup>ふしなみたにくれさせたまひけるふししよしの<sup>上</sup>くりあはれと聞へけるしゆごの侍立よりかたみを取つぎ參らすれば母うへ涙にかきくれてなんぢにわかれ露のまもながらへあらんみならねとわれもめいどのみやげにしはしはあづかりおくぞかし又母もかたみを取かへんと御うはぎぬをたびたまふかげ久御こそでを手にかけたまひかのもろこしのはんくわいが母のころもをきかへしをほろとな付しいにしへもいま身のうへにしられたりそれはいくさのかど出也是は又くわうせんのだびにおもむくかど出のわかれは同じことなれどなげきはかはるかたみやと<sup>なき</sup>ふしせきくる涙はひまもなし<sup>こと</sup>じこくうつればきよ介もはや御入候へと景久ともない立ければ地母うへは御らんして今しはしきよ介殿おやといふも子といふも是が此よのみはて也またせたまへとのたまひて母うへひめ君一どうにさらばかげ久あにうへとたがひにすがたをみあけみ

おろしめとめをきつとみ合せて ふしわつとさけばせ  
たまひける はこしゆごのもの共立よりなふ歸らせた  
まへとひつ立れば地ひめ君もろ共母うへはなふあの  
かげ久にわかれつゝいきはていかでかへるべきさし  
ころせよやしゆこのものやれさしころせ人／＼と  
ふしこゑをはかりになきたまふ儲あるべきにあらさ  
ればなく／＼わかれてかへらるゝとにもかくにも此  
人／＼の御有様是ぞ誠によのなかの物のあはれはこ  
れなりたふこれなるはとみなかんせぬものこそなか  
りけり

## 第五

さる間地かまくらにおはしますごん五郎かげまさは  
この事夢にもしりたまはずなに心もなくおはす所へ  
ことは山長兵衛せう竹さとやう／＼としてかまくら  
に下りいそぎ君の御まへに参りつゝわか君の御有様  
かつせんの次第一々に申あぐるかげまさ聞もあへず  
やあおのれはおいにはれたるよなかつせんしたとは  
何事を申ぞ其うつてのやつばら千や二千きつたれば

とてもし景久にけかあらはなにのゑきかあらんその  
あづかつてめしこめをくきよすけがかたへゆきかけ  
久をひんぼうてなどめしぐしてはくたらぬぞ手のび  
也儲も／＼はかゆしいや／＼かくいふうちにもかげ  
久が打れなとしてそのゝちはくゆとも／＼かひある  
ましやれそこなるものゝぐおこせ我ゆきてぢきにつ  
れてこんかげまさをかげまさとおもはんものはした  
くしてともせよとて三重みやこをさしてそ上のほら  
るゝ是は儲置おはりの國のちう人たんのとうないし  
げゆき此よしをきくよりもかげまさをすぐにとをす  
は都へのおそれ有と手せい二百よきをもよふしかさ  
でらにぢん取てみちをさへざり待いたりかゝりける  
所に景正もみにまふでのほらるゝしげゆきむかふ  
て此所は藤内がかためてそうへこそはとをすましき  
といふ景正きゝもあへず是ほどいそぐ京のほりのみ  
ちのじやまするやつめをあれ馬よりひきおろせさめ  
がはまし承り二人つつとはしりより其まゝ取てた  
をさんとす藤内二人をかひつかみ八たんばかりなげ  
すてゝあれていのものをたのみにして京のぼりはあ  
ぶな物只是より歸られよとあさむけばかげまさ馬よ

りとんでおりしげゆきをひつとらあへたりにたてたるかねつきだうへつれゆきつりかねにてをかけゑいといふて引たまへはりうづのくさりふつときれかねはひいてちにおちける儲藤内をかねのうちに申し入のこるやつばらとうざいへおつちらし口口かへつてみたまへばしげゆきも大ぢから内よりかねをはねかへしかけ出んとする所を又其まゝに取てふせ<sup>こ</sup>はむじやうのかねに入たればじやくめつせんと思ひしにはねのけて出るはまがさいたるかしけゆきとそばにありける大そとばをめてにてゑいとひきぬき藤内かだうばねとならくへとをれつきとをしいるおゝ只今まではしげゆきとなれのられしがはやくもしにゆきになられしないらざる所へさしいでひごうのしにをしつるよとからくゝと打笑ひ 三重おして都へ上のほらるゝだいぶかたちにも也ぬれは門共いはずおしやぶりひらおしに亂れ入折ふしきよ介は御所にあがりやどに有あはせずのこりし郎等共立出こはらうせきとかけいづる所を一々に取てなげすて偕かけまさは奥をさして入たまひかけ久のおはします一ま所へつつと入やあいかにかけ久是ほとこのいゑ一つ

などけやぶりて下らさることこそふかいなけれそれにてはかけまさか子とは中くもつていはれましそれかし是までむかひに來るぞはやく出よとのたまへは地かけ久涙と共にのたまふやうあらもつたなき父うへのふるまひや物か付てふしくるはせたまふかなしやな君の御かんきかうむりて御ゆるしもあらざるにいかてかおして下るべきとくゝかへらせたまふへしふし父うへいかにと申さるゝは<sup>こ</sup>かけまさ聞もあへずやれ御ゆるされなきとはたかことぞとかのじつふもきゝさだめずしておしこめたまふ八まん殿をしゆくんとはまだ思ふかや偕も汝は御てうあひもたにこと也誠に此かけまさか一子なればせうせうのと有共一どや二どは御ゆるしなからで有べきにかゝるむたいの御せいとうさらくもつて心へずいらざることをいはんよりひらに下れと申さるゝ地景久たもとにすかり付父にむかひてかく申はおほそれおほく候へ共まつ御心をしづめられよくゝきかせたまへとよそれくんしんのならひにてたとへは君々たらず共しんはしんたる道ぞかしましていはんやそれかしは御てうあひもよにすぐれいとおしみた

まふ身をかくおしこめたまふこと身にはおぼへぬことながらふかきとがこそ候らめ其御心もはゞからでせひみにおゐてとがなしと申わけんはしもとしてかみをはむかるににたるべし是天たうにも又そむく也そのうへ御てうあひ有とてもそれをたのみにぞんずるははかなきことにて候也それいこくにもためしありむかしゑいのれいこうと申込みどひしかといふちごをてうあひしたまひしか有時もゝどのにみゆき有御ゆふゑん有し時かのひしかにもゝをたまはりくいけるが其あちはひすぐれたりとて其くいさしたるをもをれいかうへ奉るみかどしよくしたまひてひしかかふかき心さし誠に是にあらはれたりわがしよくしたき物をのこしてあたへけるよとぎよかんはなゝめならずそのゝち御ゑんやつきたりけんかのちご御てうあひおとろへはておひうしなはれ參らするにかのもゝを奉りしことかみをかろしめ申とてとがのうちの第一にきはまれりかれをみ是をきく時はそれかしも其ごとく御てうあひの折からにおほへぬあやまりもやしてかゝる御かんきかうふらんとにもかうべをはねられんみか今まで命をながらへ父の御めにかゝ

るも御ゆふめんのゆへなれば是又君の御おん也たゝおんをしらざるはちくしやうにことならずたとへかうべをはねらるゝと我はしゆくんにうらみなしなにと仰候共かまくらへは下らしとりをつくしみちをたてきふ涙にくれてぞ申さるゝはことやあごへんはいつのまにそれ程しよをばよみたるぞ去ながらいはれぬこうしふうをださんよりちゝにまかせてたゞくだれよそれしそのなきをもつて第一のふかうとす汝やうしとはいへ共我が一せき成にすでにかく也ぬればかげまさ家がたへはてんはひつでう也しからははおやへのふかうの第一也所せんわれと打つれかまくらへ下られよ君の御心もなをつて召出されば其とをり又うつてたまはる物ならばなん十萬ぎ有とても一方を打やぶつて日本國におらばこそやくたいもなきよし家をふしやうよしよとあがめもせめ其かひかうらいけいたん國にも打こへ國一つのわうと也わかしそんをばたやすましとくゝちゝかいさめに付汝はくんしんのぎはまもれ共ふしのれいにそむけりたゝししうへはみちをつくせおやにはふかうをせよといふしよばしあるかとせめかけゝのたまへは

りとんでおりしげゆきをひつとらあへたりにたてたるかねつきだうへつれゆきつりかねにてをかけゑいといふて引たまへはりうづのくさりふつときれかねはひいてちにおちける儲藤内をかねのうちに申し入のこるやつばらとうざいへおつちらし□□かへつてみたまへばしげゆきも大ぢから内よりかねをはねかへしかけ出んとする所を又其まゝに取てふせ<sup>こ</sup>はむじやうのかねに入たればじやくめつせんと思ひしにはねのけて出るはまがさいたるかしけゆきとそばにありける大そとばをめてにてゑいとひきぬき藤内かだうばねとならくへとをれつきとをしいるおゝ只今まではしげゆきとなれのられしがはやくもしにゆきになられしないらざる所へさしいでひごうのしにをしつるよとからくゝと打笑ひ 三重おして都へ上のほらるゝだいぶかたちにも也ぬれは門共いはすおしやぶりひらおしに亂れ入折ふしきよ介は御所にあがりやどに有あはせずのこりし郎等共立出こはらうせきとかけいづる所を一々に取てなげすて儲かけまさは奥をさして入たまひかけ久のおはします一ま所へつつと入やあいかにかけ久是ほとこのいゑ一つ

なだけやぶりて下らさることこそふかいなけれそれにてはかけまさか子とは中くもつていはれましそれかし是までむかひに來るぞはやく出よとのたまへは地かけ久涙と共にのたまふやうあらもつたなき父うへのふるまひや物か付てふしくるはせたまふかなしやな君の御かんきかうむりて御ゆるしもあらざるにいかてかおして下るべきとくゝかへらせたまふへし ふし父うへいかにと申さるゝは<sup>こ</sup>かけまさ聞もあへずやれ御ゆるされなきとはたかことぞとかのじつふもきゝさだめずしておしこめたまふ八まん殿をしゆくんとはまだ思ふかや儲も汝は御てうあひもたにこと也誠に此かけまさか一子なればせうせうのとか有共一どや二どは御ゆるしなからで有べきにかゝるむたいの御せいとうさらくもつて心へずいらざることをいはんよりひらに下れと申さるゝ地景久たもとにすかり付父にむかひてかく申はおほそれおほく候へ共まつ御心をしづめられよくゝきかせたまへとよそれくんしんのならひにてたとへは君々たらず共しんはしんたる道ぞかしましていはんやそれかしは御てうあひもよにすぐれいとおしみた

まふ身をかくおしこめたまふこと身にはおぼへぬことながらふかきとがこそ候らめ其御心もはゞからでせひみにおゐてとがなしと申わけんはしもとしてかみをはむかるににたるべし是天たうにも又そむく也そのうへ御てうあひ有とてもそれをたのみにぞんずるははかなきことにて候也それいこくにもためしありむかしゑいのれいこうと申込みどひしかといふちごをてうあひしたまひしか有時もゝどのにみゆき有御ゆふゑん有し時かのひしかにもゝをたまはりくいけるが其あちはひすぐれたりとて其くいさしたるをもをれいかうへ奉るみかどしよくしたまひてひしかかふかき心さし誠に是にあらはれたりわがしよくしたき物をのこしてあたへけるよとぎよかんはなゝめならずそのゝち御ゑんやつきたりけんかのちご御てうあひおとろへはておひうしなはれ參らするにかのもゝを奉りしことかみをかろしめ申とてとがのうち第一にきはまれりかれをみ是をきく時はそれかしも其ごとく御てうあひの折からにおほへぬあやまりもやしてかゝる御かんきかうふらんとにもかうべをはねられんみか今まで命をながらへ父の御めにかゝ

るも御ゆふめんのゆへなれば是又君の御おん也たゝおんをしらざるはちくしやうにことならずたとへかうべをはねらるゝと我はしゆくんにうらみなしなにと仰候其かまくらへは下らしとりをつくしみちをたているなきふし涙にくれてぞ申さるゝはことやあごへんはいつのまにそれ程しよをばよみたるぞ去ながらいはれぬこうしふうをださんよりちゝにまかせてたゞくだれよそれしそのなきをもつて第一のふかうとす汝やうしとはいへ共我が一せき成にすでにかく也ぬればかげまさか家はたへはてんはひつでう也しからははおやへのふかうの第一也所せんわれと打つれかまくらへ下られよ君の御心もなをつて召出されば其とをり又うつてたまはる物ならばなん十萬ぎ有とても一方を打やぶつて日本國におらばこそやくたいもなきよし家をふしやうよしよとあがめもせめ其かひかうらいけいたん國にも打こへ國一つのわうと也わかしそんをばたやすましとくゝちゝかいさめに付汝はくんしんのぎはまもれ共ふしのれいにそむけりたゝししうへはみちをつくせおやにはふかうをせよといふしよばしあるかとせめかけゝのたまへは

景久今はいさめかねいや只それかし命有ゆへにくんしんの道ふしのれい二つに付てなげき有よし／＼じがい仕らんとこし打さぐつてはあなむ三ぼうかたなはなし其御はかせかしたまへととびかゝり取たまへはさしもの景正どうてんしてやれ心はやき物かな父が是まできたるのもおことが命たすけんゆへおひくるひをもするものを地さほかに思ひきるならば此うへはちからなしなんちが心にまかすへしち／＼はこきやうへかへる也さらば／＼とのたまひてさしもにたけきかけまさもた／＼しほ／＼としてふしなみだと共にかへらるゝあらむざんやかかけ久は父うへのうしろすがたをつく／＼みてなふもはや歸らせたまふかやをよはかりのわかれ也おや子は一世と申せ共かならず／＼後のよはめくりあひ參らせんとたがひにみをくり立歸りふしさらば／＼とふり上のなみたのわかれぞふしあはれなる九つり上三重わかれ／＼に上なりにけり是は偕置ことはこゝに又ほうでうみたちかまたかねこはかげまさの都入らうせきあらばしづめんとさよ介がやかたをうちかこみいられしがよそながらおやこのわかれをつく／＼聞て思ひのほかのちうし

んどとみな／＼涙にむせばるゝことなかにもほうでうのたまふはかげ久かしんてい一かうきみにやしんなしおやのみなればかげまさものにくるふもことはり也此うへはみたちとそれかしは御所にあがりかげ久ふた心なきよし申あぐべしとかくかげまさをつしなきやうにかまだかねこはなかよければいそぎゆきてとめたまへ此ぎもつ共しかるべしとおの／＼ひやうぢやうあひきはめとうざいへわかれたまふ此人々のしんていたのもしかりともなか／＼申斗はなかりけれ

## 第六

偕そのゝち地かまぐらの權五郎かげまさはちからおよばず立わかれつち山のしゆくに付たまふことかまたかねこはやゐんにはせ付みたまふに誠にようじんきびしくみへにけり兩人かやう／＼と申いれらるれば承り候と侍共かくと申あくるかげまさ心へたりとなぎなたおつ取てもんぐわいにつつと出やあ打てにきたるかかた／＼と長刀をふりあぐればかまたとび

しさつてそつしはししたまふなこへんがために來りたり只兩人に打まかせ都へのぼりて御しそくのとなきよしをせうあれひらに／＼と申さるゝなにそれかしかためをおほし召て御いで候とやおゝそのてもやがてすいてありたはかつてうたんとなはうこをひきたれはいひわけすべきしうもなしへだげにほうばいをたのみにしてけがまくりたまふなといふその時かねこすゝみ出なふたばかりと申さるゝは御へんにはにあはぬことば也侍かなにいつはりをいふものぞ只かまだ次第にしたまへといふかげまさ聞てまづかた／＼も思ふてみよわれじやくねんのむかしよりすとのちうこうかすをしらずさだとうせめの其時は君の御ちゝよりよし公のやをもてに立とりのうみに此まなこをいづぶされあやうき命を助けまいらせし此かげまさが子などをかくむたいなる御せいとうあにうれしからんやかねこきいていやさあしうのいのちにかはりちうをつくすことはさふらいのわざなりきそのちうしやうゆへ御おんしやうをたまはつてゑやうにはほこれといふゐるおゝしよりやうをもらふてよろこぶは御へんていのはさぶらいの

ことよ此かげまさにおゐてはおんよりもなさけのしうこそほしけれとふしそらうそふひてぞいたりけるはこかねこ大きにきしよくかはつてやあはさふらいとはきつくわいとたちのつかに手を掛るかまだおしとめこはいかにけうぐんにはきたらすしけんくわをしにきたらるゝかふかくなりとせいしいかに景正ほうばいの其中にかげまさかねこかまだはなかよきと人もいふことに三人はいづれによらず何事もあらば命をくれんといひかはせしをわすれすはたとひ我々かたばかるにもせよ御へんがくひを兩人にくるゝとだにおもへはなにのきづかひあるべきぞいかにいかにと申かげまさから／＼と打わらひゐるおゝさあそのことはをばおぼへてありかた／＼に所望せられ此くび一つおしまんやなによりもつてやときこと也いそひでとれやかた／＼とくびさしのべて待たまふかまだしすましたりと悦びまづ以て大事の御くびさつそくにたまはることまんぞくいたして有いざかねこ此上は都へともなひゆかんとひつ立ればかげまさきつとみて是はなに事ぞ都へはゆかしといふ是は儲さいふはとのはなに人ぞ一たんもらひしくびなれば命

ははやなきものを都へのほらしといふ人はおぼへず  
たゝし又そのくびはや取かへすかと申さるればかげ  
まさこのりにふくしつゝ、偕もゝごへん立はよきこ  
とばじちを取たまふとたがひにどつと打たわふれて  
三重みやこをさしてぞ上のぼらるゝ偕其後にかくてた  
たひろはこのことはやくもきゝ付やがて君の御まへ  
に参りやせんかげまさふしみにてのらうせき其うへ  
かまたかねこがともなひ下ること一みのむほんにて  
候へしとうゝうつてを下さるべしとあらぬさまに  
ぞ申ける君聞召いかゝはせんとおほしめす所へほう  
でうみたち参らるれば君御らんしていかにかたゝゝ  
かまたかねこか一みのこときゝたるかとぞ仰けるほ  
うてう承りさん候かまだかねこか下り候はかげまさ  
ふしみまでくだるよしうけ都にいらんとするならば  
けちらさんが其たの四人が手せい一千よき大ふがや  
かたを取かこみて候にかげ久かしんていかやうゝ  
の次第ゆへさんしやのためごかんきかうふり候かと  
ふひんさにまづかげまさそつしのじがいなきやうに  
と兩人はわれゝゝかさしくだし候偕みたちとそれか  
しはこの事申あけんため罷出て候とつつしんで申さ

るゝ其時系ちのすゝみいで偕兩人はこへんたちがは  
からひならばさも有なんかけひさがことはさかわだ  
とみつうせしにうたかひなしなにと申なをさるゝ  
とかなはぬことゝぞ申けるほうてうきゝたまひ偕は  
だいじの御さた也去ながら人にしらせぬ道なれば此  
ことはさかわだもかたるましましてかげ久もいふま  
し又うきよにもさたあらは我々きかぬことゝもあら  
しして又こへんにはたれかはきかせぬるぞおぼつか  
なしと申さるゝあゝおろか也ほうてうとの天しるち  
しるわれしるあくし千里をはしるといふことをしり  
たまはすやそのうへわれじきにみたることもありす  
てにさかわだよふけ人しつまりて後君の御しん所へ  
ぬきたちにて参りしことは是程たゝしきせうこよには  
なしたゝしべちのしきひばし候かほうでう殿とあざ  
わらつてぞ申けるさしもの北條も一くのたうりにつ  
められへいこうしてぞおはしける其時みたちまゆを  
ひそめふしん也たゝひろきみ御てうあひのかげ久を  
こふんていのとさまものかみる事はよもあらしかげ  
久をしらすしてさやうのことみたるとはおぼつか  
なしと申さるゝゑちのいたけたかになつてわとのはい

われさるひいきだてかなつかいしことばある物をとちつともおくれぬふせひ也ほうでう聞てそれはたしか成ことよ此上はごせんにてかげ久とぢきのせうれつ有へし景久かあやまりあらば御前にてきつてすてんそれく景久よびたまへ清平やがて心へ景久にあひまかふちこそを出さるゝたゝひろもとよりみしらねば景久と思ひいかにあく平太いつぞや北山にてさかわたとしのびあふ其時つかいしことばわすれたるかいかにくと云ければ此ちごかねてあひづのことなればわざと打しほれてそいたりけるなにとくかたく是にても申ぶん候かといきをひかゝつて申ければ御まへの人々そでをひきつゝわらはるゝ君もしばらく御しあんあり偕はたいひろかげ久をみしらぬうへはさんけんとうたがひなしとおほしめさるゝ所へかまだかねこかげまさならびに郎等の竹さと御まへにつつと出まづ竹さとはたゝひろをはつたとにらんでひさしく候たいひろどのいつそやは御しやうにあづかり候へ共御へんしをいまゝでゑんるんいたせしことりよぐわいながら御めんなされ候へ是くしゆくんかげ久はぎやくしんか忠しんか御らん候へ

と北條の御まへにさしいだす北條取上よみたまふ偕偕かげ久君の御かんきをかうむらせたまひ只今でんちうにてせつふくをとげらるゝそれに付御へんことぶかうのほまれよにこへかねて上ぶんにたつし此たび御しやめんなされことに景久のゆいせき一心にごぶんに下さるゝ其しいしゆ某に仰付られ候てうはやく是へ參入致るへき物也山長兵衛の尉殿へゑちの五郎左衛門たゝひろはんとかいて有義家聞召偕はしつぶきはまつたいたいくはくたいの忠かうをなせし景正をいひかないき物の申せしことを用ひつゝ景久をかんだうせしこと義家か一世の不覺是に過す此たびのていたらくゆるしてくれよ景正と忝も御手を合させたまひければ景正かんるいきもにめいし偕々めうがなき御上いかな只今の上いのだん承り候うへはとかふ申はおそれ有と泪をなかし悦ひしふし禮きの程こそしゆせうなれ其後の御誕にはたゝひろを景正にとらするぞ心のまゝにそれはからへ畏てたゝひろを取てひつたてうはあご下あごおし切此口ゆへにおほくの人をなやますとほうばね懸てゑいとひけばかうべはめてにぞとまりける頓而首を打おとす其後景

久を召出されいよ／＼てうあひあさからずなを／＼  
けんしの御はんじやうめでたかり共なか／＼申斗は  
なかりけれ

鶴や喜右衛門板

殿上 閤討 女袖鑑

第一

扱も其後序それ三がいはいくるしみつきず、さいしは身のできひんよくは心のあた、まことなりけるきんげんかな、こゝに本朝七拾三代ほり川のゐんのじてんにあたつて、天下の武將八満太郎おる義家として下ふるいたい源氏のとうりやうたり地御子一人をわします、つしまのかみ源のよりちかとして、きりやうよにこへきうばにたつしたまふにぞ、義家としおいたまふゆへ、なにごともしちかのはからひにて、けんひいしのべつたうにふせられ、ぶいを天下にあらはしたまふ、さればうゐてんべんのよの習ひ、すきし年の春のころ、きたの御かたにおくれさせたまひふしひたんの泪といまらず、されどもふうふの御中にかつ若殿と申て、十二歳になりたまふ、若君一人おわします、これすなわちほうけんるとき、六條のはんぐわんため義と申せしは、此若君の御事なり、扱又家のこう

けんにははだのきやうぶとしかづ、ちやくし五ろうとしひでとて、大ちからのがうのもの也、其外天下の諸さらふい、よしいゑこの御よつぎとて、いつきかしづき奉れば、御いせいひにいやまして、三重あかしくらさせたまへけり、是は扱置こと其比又山しなのうたいしやうたゝしけとてくきやう一人おはします、外にはじんぎまさしくもてなし、うちにはをぐりをふくみ、いろをおもくすぶとうしんなりしが、其比中宮の御方に、すはうのなishとていとあでやかなる女くはんの有しを、かいまみてより人しれぬこひと成、おりくしよまふすれどもかなわず、さればとて玉づさ一通のたよりもあらずいかにもしてぬすみ出さんとさまぐあんをめぐらしける地頃はやよいのはしめつかた、いと心も浮立て、思ひくらすも物うきに、心ゆかしにさんだいせん、もしもことばのよすがもやと、三重きんりをさしてぞ上あがるゝ、去程に地扱もたいりには、げつけいうんがくことごとくめされ、ぶがくのぎよゆふときこへけりことかりけるところにゐんの御所の勅使として、さちうべん参内あり、扱も御ていせんのさくら花、色かます

くれ候へは、中宮をはじめ、による女くはんを御供にて、みゆきあるべき旨をんちよくのよしそうもんす、みかどゑいかんあさからず、誠によろしきゆふけうや、さ有らば、よい仕れと、つしまのかみよしちかを召れ地汝はしら川殿に参り、花ぞのけいご仕れとのりんげん也、よしちかちよくめいかうふりて、れうでう申御前を立 ふし花ぞの山にぞつめらるゝ、扱こくげんになりしかば、しゆしやう中宮諸共に、をなじ車にめしたまへば、其外の女女官、おのゝくるまにせうじたまひ白川御所へのみゆきのてゐ 三重心もことばも上およばれす ふし御所にもなれば、上皇をはじめ奉り、しゆじやう中宮諸共に、花園にしつぎよあれば、御ともの女官たち、十二ひとへのつまを取、袖をつらねて木のもとを、色めき給ふありさまはふし何れを花そとあやまたる、すでに御ゆふもなかばすぎ、しゆしやう中宮はつき山のおくり御てんに入せたまひけり、爰にすはうの内侍は、櫻の枝をたをりつつ、げにやたかきもいやしきも人の心は花ぞめの、うつろいやすきよの中の、人の盛りはいつまてと、思へばしたふ我すかた がいたうくこよひは爰にかりまく

らふしいろ さそふ花ともろともに いろちるや心なるらな かはりと、たはふれゑめる其すがた ふしたとへていはんかたもなし、其折ふし右大將はすはうのなしいしを心がけ、花園に出られしが、此有さまをみるよりも、いよゝまさる思ひのたね、ことばをかけんもおもはゆく ふしあきればてゝぞゐられける はかゝりける所に、ざとう一人びはをもち、わたくしは西國にかくれなき、びはのじやうづにて候、此程都にのほり、かゝるぎよやゆふにすいさんして、一曲を仕り、ゑいぶん ふんにそなへんとぞんし、是迄参りて候、若殿上人にたましまさば、御ひろう有てたまわれとぞ申ける、ただしげ大に喜び、是こそくつきやうのたよりなれ、御まへちかう召つれ、けやうをもようし其ひまに、ないしをうばい取べきと、ざとうを召つれやがて御まへに罷出、有ししたいをそうもん有地帝ゑいぶんましまして、さあらは一きよく仕れ、畏て候と ふしやがてきよくまゆをたんじけり引第一たいこのげんはさつさつとしてまつをはらてそいんをつ、第三第四のげんはれいゝとしてよるのつるの おん子を思ふふしをもしろや引此四つのをは、ふどうのもてるばくの

なわ、ぢすい火風をいましめられしを、しらぬぼんぶ  
のおろかやと、をし返し、ひやうしにあへる一き  
よくはふし心ことばもをよばれず、しゆしやうほう  
わう一ざのくぎやう、此をんぎよくのおもしろさに、  
せひをうしないふしかにたへさせたまへけりこと  
然る所によしちかは、さいせんより此ざとうをあや  
しみ、物ごしに立かくれぬられしが、びはのしやうが  
におどろき、するく罷出、をゝそれなから只今の  
一曲心へがたく存候、そも此曲と申は、しんの平公ほ  
くすいのなかるゝこへをかく人に仰て、ことのきよ  
くにうつしたもふ其曲さつせいにして、聞人涙をも  
よほし、かんにたへたる曲なるゆへ、へいこうをはじ  
め、代々のみかどほろびずといふ事なし、我てうのが  
く人か、もんのかみ定とし、もろこしに渡り此曲をな  
らゐつれ共、ふきつの曲なればとて、一手をりやくし  
候に、なんぞや今日の御遊に、ほんてを彈するいぶか  
しさよ、そおしてかやうにすじなき物を、御前ちかく  
召出したもふは、そもたれさまの御さしつにて候ぞ、  
いや是なふそれかし召つれたり大しやうたるべきも  
のにくわごんがましきいひ事やとあれば、やあ心へ

ぬ仰かな、身ふせうなれ共今日のけいごを仰付られ  
たり、おゝそれわともかくもまづ、此ざとうめは、  
へんげのしよゐと存る也、おのれ本性をあらはせ、さ  
なくは此よしちかくあらはすべしと怒りたまへは、  
まうじんすはあらわれたりと、其丈け一丈斗りのふ  
るにうだうとあらはれみちんになさんとなんてかゝ  
るを、義ちか御覽じているゑ、推參也、かゝるきよ  
ゆふの折から、妨けをなす曲者やと、走り懸つてゆ  
んでのかいなを打落す、され共ひるますはだのをつ  
かんでこくうにあからんとするを、心もとをすん  
ずんに刺通せば、よしちかさつしたりと、首ちうに  
打落せば、首はこくうにあがりけり、其時よしち  
か大音上、やあ大しやう殿はいづくにぞ、かやうな  
るくせものを召つれ給ふは何事ぞ地是々見よとよば  
はつて、四方をにらんでおはせしをふしほめぬ者こそ  
なかりけれ、帝ゑいかん限りなく、切々ゆゝしきはた  
らき、せん代みもんのちうこう也、先此たひのけん  
しやうとて、いつもの國を賜り、其上汝はさい女にお  
くれたるよし、さそ頼りなく思ふらん、則すはうの内  
侍しをゑさする也、それゝとのせんじにて、關白も

ろみちは、ないしの袖を取、三のきざはしだんすの石のあまおちにて、すはうのないしをわたさるゝ、有がたし／＼と、ないしの手おとり、御まへを退出せられけり、よしちかのいせいの程上下萬民おしなへさて、うらやまさるこそなかりけれ

## 第二

扱其後地右大將たゞしけは、むねんなからもじたくに歸り、扱もすはうのないしを、うばいとらんとおもひしに、あんのほかなるよしちに、たまわる事こそきつくわいなれ<sup>は</sup>こ<sup>と</sup>此うへはよしちにいしゆ有<sup>こ</sup>と、家のらうどうたはらの藤内はるちかを近づけ、はしめおわりお語りつゝ、むげにくちおしく思ふなり、とかく義ちかおほろほし地此いきどうりをはらしゑさすべし<sup>は</sup>ふ<sup>し</sup>やあ藤内かにと申さるゝ<sup>は</sup>こ<sup>と</sup>はるちかつく／＼としあんし、御いきとをり御もつとも候さりながら、此おこりと申は、よしちかにいしゆは候はす、君ないしをこひかねたもふゆへなれば、それがしくつきやうのてだてを存よつて候、此はど

中宮さま御いたわりにつき、ないしおり／＼とのゐ申さゝるよし、さいはひ中宮の御かたの、あわのつほねと申は、それがしがをばにて候、内々いひふくめ候へは、つほねを召れ御頼み候は、何とぞたより有べきと存よつて候と申上れば、たゞしげ大系つかざりなく、あつはれなんじは、しあん深き物かな地さあらばつほねを頼まんと<sup>り</sup>おくひそかにつかいゆりをたてにけり、つほねもとよりはるちかゝみゝをうちたる事なれば、つかいと打つれきたりたり<sup>は</sup>こ<sup>と</sup>大しやうよろこひまつ／＼こなたへとしやうし、小こゑになつて申やう、扱すはふのないしをせひわがつまにこひうけんと思ひつめたる所に、よしちかにとられ候事、それかしが心のうち思やりたまふべし、きけば中宮の御いたわりとて、内侍よな／＼御とのゐ申よし、何とぞ御身のはからいにて地ないしがねやへそれがしをしのはせてたひたまへひとへに御身を頼ぞと、さま／＼のひきで物をゑさせつゝ、ふしよにしみしみとぞ語らるゝ<sup>は</sup>こ<sup>と</sup>つほねじすへきやうもなく、さりとてはかなわぬこひに御心をつくさせたまふいとをしや、みづから心をあわするうへは、しのばせ申

は安けれ共、中々なびき申まし、此うへはみかどの御すがたにまなひ、御しのひあれ此ぎはいかと申けり、たゞしけ何のしりよもなく、誠にこれはよろしきてだてかな、さりながらみかどのぎよいかんふりをいかせん、なふそれこそわらはに御まかせ候へと地やがてきよいを取よせ、さあらは是に召れ候へ、心得たりとてもつたないくも<sup>お</sup>くへんしか間にゆりそくたいては<sup>こと</sup>やあはるちか何とみかどによくにたかつぼねいかにと立さはぎ、すは此こひはしやうじゆぞとよろこひあふ事かぎりなし、つはね是を見て上あわたしや何事ぞや、人にしられてせんはなし地さあらばこなたへくとのり物にのせ申て、きさきの御殿にしひける三重心の内こそよふくなれ、さる程に地かくてたいりには中宮の御いたはりとして、御まへちかき女ばうたち、中にもすはうのないしは、御いとをしみふかきゆへ、つまのよしちかはからいにて、御とのゐにあがるゝ、中宮御きげんはなはだしく、夜ふくるまで御物語あそばされ、ないしは是にてとのゐあれとよるのまのまふけ迄、念頃に仰付られふし御まへちかふぞやとらるゝ<sup>こと</sup>、すでに其夜

もうしみつ斗の事成に、あわのつぼねは忠重を、帝のことくに立せ、ないしのまくらもとにみちひきて、立よりひそかにともし火打しめし、みかどゝしらせん其爲に地中宮さまの御いたはりゆへ、ないし是に御とのゐ申され候、君御心をつくさせたまふうへは、とかくゑいりよにしたがへ申さるべし、わらはは御いとまたまわるとて<sup>下</sup>ふかたわらにぞ入にける地<sup>こと</sup>ないしいまだめもあはで、此よしを聞たまへ、こはみかどぞとむね打さわきかつはとおき地あらなさけなやつほねさま、もはやぬし有みづからに、御道引はなに事そとあればいろあゝおとたかし心なや、たれあつてまろが心にしたがわさらんや、思ひくらすも物うさに、局に心をあはせつゝ、是迄來りてありけるぞ、ないしいかにとありければ、こはもつたないなきせんじかな、よこそまつせに及ふ共、日月はちにおちたまわす、御いらへ申あけんもおそれ也、十せんの御くらゐをたもたせたまう御身にて、かくはしたなき御ありさまわなに事をや、はやくゝくわんぎよなりたまへ、それゝ人音のきこへ候<sup>ふる</sup>なふ歸らせたまへとありければ<sup>こと</sup>、おゝことわりやさりな

らたとへ事にはあらねとも地むかしやふめいてん王  
は、玉代の姫をこひかねて、いつしかていゝをふりす  
て、心つくしに身おやつし、さんろがくさかりぶゑと  
て、よのことわざになりたまふは、こひゆへにてわあ  
らざるやしへ思ひいりゑのこかれふね、ささのを  
さゝの一よはさて、此こひかせになひけおふなの花  
心ふしひらに／＼とのたまへばないし承り、ゑいり  
よをそむき申さん事、おゝそれおゝ候へ共、君の仰  
は皆いつわりにて候そや、誠さやふに思召は、年月御  
みやづかへ申せし時、かことばかりの御なさけも有  
べきに、其時はさもあらで、今よしちかに給りて、も  
のゝふのつまとなりしみづからを、かゝる仰は何事  
そや、せいけんの君として、かゝるふ義は有べから  
ず、あゝもつたいなや、上にかゝるふぎあれば、下の  
みだれさぞあらんとふし大にはぢしめたまへける  
ことたうりにつめられことばなく、げきりんのていに  
みせ、此上はまろがふぎをふるまいて、天うんまさに  
つきはて、國はやみともならはなれ地あまのいわと  
のあけくれに、思ひにたへなばいかにせん、我十せん  
の身と成りて、こまもろこしの人をこひなばせしも

なし、我ちやうのうちにして、わういにまかせぬ事や  
ある、あまりつれなきふせいやな、いざこなたへと、  
ないしのそでを引たつる、ないし今はせんかたなく、  
まもり刀をひんぬいてたゝ一刀ととひかゝる、たい  
しげ大きにどふてんし、ゆるしたまへ申さじとふし  
あとをもみづしてにけにけり、内侍なおもあまさじ  
とおつかけしが、其行方をみうしない、おゝさも候は  
ん、よのつねの女と思へたふなよ、いかにみかどのせ  
んじ也とて、ひとたびぶしの妻となり兩ふにはまみ  
ゆまじ、よし此上はとてもゆるしたもふまじいゝおんかん  
あゝうらみありやさりとては、まづ我つまにないだ  
んし、とにもいかにもなるべきと、ひそかにしゆく所  
に歸られけり、あつはれ女人のかゝみやと、きく人ご  
とにをしなへさて、かんせぬものこそなかりけれ

### 第三

去程に地かくてすはふの内しは、すこゝとやかた  
にかへり、つまのよしちかにたいめんしきん中にて  
のみかどの御不義、一々に語りたまひ、いかゞはせん

あさましやとふしなみたをうかへたまへけりこは義  
近大にをとろき、扱もくたうぎんは、けん王とこそ  
思ひしに、かやうのふぎはなに事ぞ、たゝそれがし  
おいいかひなく思召さるゝゆへなりいろゑ、口をし  
やてきたいせんやうもなし、只はらかき切て思出に  
せんと仰ければ地なふふかくなり義ちか殿、わらわ  
もたうぎにきん中にて、こにもかくにもならばやと  
思ひ定め候へども、たいりにてむなしくならば、とや  
かくとさたとげ、もつたひなくも我々ゆへ、みかど  
の御ふきをあらわさんは、みやうがもいかゝ恐ろし  
く、罷歸りて候也、何と御しあん有へきぞやふし  
ちか殿とぞ申さるゝは、義近たふりをしごくして、  
あつはれ御身は女とはいひながら、りにかないたる  
やさしさよ、のたまうごとく都にてしがいせは君の  
御不義かくれなく、ぶどう不義のみかどと、いやしき  
しづのみんなんの、口すさみになし奉んは、かへつて  
ちうなし、此うへは何とぞみかとの御ふぎをつゝむ  
事こそちうせつなれ地うやゝしくもみかとの御た  
めに、たとへば此みをきめはとて、おしむへき道なら  
ず、なまなか都にありては、けきりんの本ノマ上、いかなる

なんだいをか仰付られん、ひそかにりやうないへま  
かり下り、せけんのさたおうかゝふべしと、扱かつわ  
かをはしめ、はだの親子けらいせうゝひきぐして、  
しのびやかに都を出三重いつもの國へぞよくだるる  
る、是は扱をき地あくじせんりをはしるならい、たれ  
そうするとはなけれ共こは、よしちかの都出、きん中  
にかくれなく、八まん太郎よし家を召れ扱も義ちか御  
いとまもこわで、りやうないへ下ること、きやくしん  
にうたがいなし、しんしの間知ぬ事はよもあらし、ぎ  
やくしんのいしゆきつとそうもんあれとのせんじ  
也、義家元より思ひよりなき事なればさん候義ち  
か國へ下り候事、かつて存せぬ御事にて候御いとま  
を仰たまはらでかいにまかせて候上は、けきしんに  
うたがひなし、ちよくじやうにて候は、かうべをは  
ねてぞきりんを安んじたてまつらんと、つゝしんで  
そうもん有、おふゝ扱はじつふきはまつたり、いそ  
ぎうつてを下さん、よし家はしんしの事なれば、先此  
らつきよ迄へいもんおいださすべし、扱うつてには  
平家の大将いなばのかみに仰付らるゝ地正もあちよ  
くいをかうむり、くわんぐんを引くして三重うんしう

さしてぞ上くだらるゝ、扱其後に地むざんなるかな  
義ちかは、うつてむかふよしをきこしめし、もとより  
ねがふ所也、きやくしんにとりなし、それがしがい  
をとくべき也、しかるうへは世上のとなへべきな  
し、御身は命をまつとうして、あのかつわかをやう  
ぬくし、じせつをまつてうんをひらき、我が名せきを  
つがせてたべと<sup>きふし</sup>なみだながらにのたまへば、き  
たの御方聞召仰はさにて候へども、是皆わらわがゆ  
へなれはみつから一人むなしくならば、わけてしさ  
いも候まじ、御身さまをさきたてゝいかでわらはが  
長らへん、うらめしの御事やと<sup>ふし</sup>くときなげかせ給  
ひけり<sup>は</sup>、時にかつわかおとなしくも、なふ心へがた  
き仰やな、こなたにをかけるつみなきに、いかにせん  
しのうつてなりとも、命をかぎりになゝかいて、かな  
わぬ時のじがい也地おちさせたまふな母上さまとふ  
ししきりにちからをそへたまふ<sup>は</sup>とよしちかりつふ  
くかぎりなく、やあこさかしやかつ若、汝いまたをさ  
なくして、物のだうりもわきまへず、父がこゝばをい  
はいするでういはれなし、又御身もよつく心得たま  
へ、それがし都を立のきしは、君のふぎをつゝまんだ

め也地我とだうりをあらはしなば、みかどの御ふぎ  
かくれなく、ひだうの君とよはれたまひ、まつだい天  
下のあざけり、かつうはこなたのちじよく也、其身を  
すてゝおゝそれながらみかどのふぎをつゝむ也、か  
くあきらけきだうりをもしらて時をうつすは何事ぞ  
といふ大にいかつてのたまへば地みだい力およばず  
してけにあやまつてさふらふ、誠にけいしの中とい  
ひ、かれ是のかれぬ御事也、其うへ御身さま命をすて  
てみかとの御ふぎをつゝみたまふ、此上は心安く思  
召せ若もろともにおちゆき申さん<sup>ふし</sup>さらばと  
の給へば<sup>は</sup>と<sup>おふ</sup>ぐたのもしや、さらばとふゝ出  
給へと扱はだのおやこをめされ、わとのとしもおひ  
ぬれば、某がさいごをみるといけよ、五郎わいまだとし  
わかく、すへたのもしきものなれば、ともなひておち  
ゆくべし、天たうまことを照したまはゝ、よもやすて  
はてたまふまじふしはやとくゝとそ仰ける、おやこ  
ともにしごくして、いぎに及ばんやうもなく、おうけ  
を申立ければ、よしちかなゝめならずして、さあらば  
ともなひ立出よ、何とぞうんをひらきつゝ、こせをと  
もらへかつわかよ、ちきりくちずは後のよは<sup>ふし</sup>かな

らずむまれあふべきぞ、みだいはとうにくれたまひ、こはそも何のゐんぐわにてかゝるうき身となる事ぞ、又かつ若にとりついて<sup>ふし</sup>たをれふしてそなきたもふ、はだのおやこも、さながら涙をとゝめかね御ことはりやさりながら、時刻、うつしてゑきなしと、さまゝいさめ奉れば、せひなきあかぬわかれのてい三重あはれとはぬ上人ぞなき、かくて其後いなかみ正もりは、ぐんせいを引くしてうんしうにおしよせ<sup>は</sup>ときをとつとぞあげにける、され共じやうちうにはしつまりかへつてゐたりけり、正もりふしきに思ひ、一ぢんにかけだし、そもゝ爰元へ押よせたる大將は、かつらわらのこうゐん、平の正もり也、せんしをかうふり、まかりむかつて候、じんしやうにしかいあれとかうしやふによばゝつたり其時よしちか、いつゝよりもはなやかに出立て、はだの一人御供にてもんをひらかせ出たまへはよせてはあきれてゐたりけり、よしちかとうちにかしこまり、先以て是迄の御はつかう、ちよくちやうとはいひながら、御くらうせんばんに存候したがつて某此たびのろうじやうは君をうらみ奉にもあらずいさゝかくあん

かなわぬ事有てわざときやくしんに取なし、うつてを相待候なり、天たうあやまりなくんは、思ひ合せたもうべし我身におかせるつみなければ、いくさをせんやうもなし、たゞゝ是にてせつふくいたし申さんとあれば、正もりおとろきたまひ、是はあんのほか成御事や、御身にあやまりなきならば、先々しかいをとゝまりたまふべし、きよいかたしけなく存候さりながら某、うんめいつきはてゝ、しなでかなわぬ<sup>本ノマ</sup>ちにて候、侍はなこそおしけれ、是皆君へのちうせつなれば、あゝおしからぬわが命やといひもあへずはら十もんじにかき切て、はだのいかにとのたまへは、やがてくひを打おとし、其まゝ御くびを正もり公へ相渡しおのゝたのみ候とおなしくはらをぞ切にける地此人々のさいごのていふし口おしかりけるしいなり、正もりちからおよはず先此むねをそうもんせんと、諸ぐんせいを引くして三重都をさしてそ上のほらるゝ是は扱置、地こゝにあわれをとゝめしは、北の御方かつ若殿にて<sup>下</sup>ふしよじの哀れをとゝめたり、夢共わすうつゝ共、わかすをさらにわきまへず、ひせんのこまにしる人有てふし暫く月日を<sup>わ</sup>り<sup>る</sup>か おくら

るゝ、ある時かつ若仰けるはいかに母上さまたとへ父ごのゆいごんなればとて、思へばく口をしや、此上はしのびて都へ上りつゝ、まさしきおやのかたきなる、みかとを一たちうらみ申、ともかくにも成べきと、思ひさだめ候そやふしおいとまたべとを申さるる、母は此よし聞召、尤なりさりながら、父よしちか君のふぎをかくさんため、命をすてさせたまひしを、みかとをあやめ奉らばけつくこなたのひぎならんこといやく此比人の語りしは、むかしいんのちう王とやらんはあく王成しをほろほしよをおさめたる物語りを聞て候地わが身ぶわうにあらねとも、おやのかたきのあく王を、うつてすて、今のむねんをはらすべしとのたまへは、おゝいさきよしかつ若よ、一てんの君をかたきにもつうへは本よりとげん事かたし、わらはがためにはつまのかたき、いざや都に上りつゝ、共にうかいひ申さんと、おやこすゝませたまふにぞ、としひともせんかたなく、とゞめ申さんやうもなく、さあらば御供申べし、とてもくちにしこの身なれば、都にてはなぐしく、思ひのまゝにうち玄にし、なを後のよに残し申さんとたがひにいさめいさ

められ<sup>くり上</sup>三重たびの玄やうぞく上なされける<sup>道行上い</sup>あらいたはしやみたい所や若君は下としひで一人御供にてやうくわひてすみなれし、こしまを出てはるく都のそらにおもむきたもふ<sup>りおこ</sup>ろのふし内<sup>こ</sup>を<sup>さつま</sup>あわれなるよの、それよのつねのならひには、おやのかたきをうちおふせ、ほんまうとぐるとも、かくはふし二たひ<sup>おん</sup>よにも出るとや<sup>もろひ</sup>われらはいか成因果にやし<sup>下</sup>身にも及ばぬ<sup>りお</sup>くものうへ十せているを心がけのかるべきやうあらされば<sup>い</sup>といとと思ひや増るらん、かく立いる出るも夫のためひとへにむじようのたび衣下いつきてこゝをうしまどゝ、聞に付てもうらめしく下一玄ゆはかふぞ聞へけるふしなみまより<sup>引下</sup>ふしみゆる<sup>中</sup>くこしまのふし島かくれふしゆくそらもなし君にわかれてと申ゑいしすてつゝゆく程にふしやたのうらにもつきしかは是ぞぐせひのふなよばひ下いつかうきよの望とげ、こがねのきしに至らんと下思ふ心ははるく<sup>と</sup>ふしみれば<sup>上</sup>ふ四國の下山つゝ<sup>きふ</sup>きりにまじわりあから島、にかふでそめてうつしたりけんゑしまをも下心ほそくもうちながめ下こゝやじつさうむろのみな

と上り出<sup>り</sup>出るふしふねゆりのかす／＼に、いそぐたびぢ  
の道すがら<sup>ふし</sup>ますまゝ玄や寺をふしおかみ、ひめぢ  
をゆけばいなみのや<sup>中</sup>う人丸づかをあとにみて、思ひ  
ぞ出るくものうへ<sup>ひる</sup>其まじわりの引有し時はたつ  
ねもとめしきうせきも地今はくるしき心の月の<sup>下</sup>ふ  
かきくもりふしみもわかすあかしと聞ば夢さめて<sup>引取</sup>  
すまのうへ<sup>の</sup>になふしくつるの<sup>上</sup>か子を思ふ下道に<sup>三重</sup>  
まよふなる、我はまさりてふしこがれこがる、<sup>わり</sup>身  
のゆくゑ、たれにとはれんいそのかみ下ふりにしや  
とを尋れば<sup>上</sup>ふこれそけんしのふしわりなく<sup>引上下も</sup>  
おほろ月よになを立て、みとせさすらふなみまくら  
<sup>ふし</sup>よをうら風にさそはれて下我はよすからねを立  
てふしなくからさき<sup>かん</sup>引上やはやしぎき<sup>い</sup>るすこしは  
つみもかるも川下ついにはめいど黄泉の、みつせ  
川ぞと打渡り、ひやうごのうらやあくた川、いくたこ  
やのにすだく蟲ふし是もうきよを<sup>い</sup>るうらみてやなく  
かのふ<sup>下</sup>ふなかむればあのぬのびきのたきのしら  
とくり返しふしたぎりておつる<sup>引</sup>玉水は袖にあまれ  
る<sup>い</sup>る涙の露<sup>下</sup>かんあゝほさじやつまの<sup>い</sup>るかかたみ  
なり、<sup>ふし</sup>には入ゑのよしあしも下むかし語りになりは

て、へがたくみゆるよの中に<sup>な</sup>き美やましくもすみ  
のゑのあけの<sup>い</sup>る玉かきあさやかに、いかにかつ若あ  
れを見よ、四しやのおまへのかみ松の<sup>ひ</sup>らくゑたもさ  
かゆるわかみとりふしいくはるあきを<sup>は</sup>し<sup>い</sup>るかかさぬ  
らん<sup>下</sup>ふゑぐちかんざき打過て、袖に浪よるなきさの  
ゐん下又あふ事はかたの、原、けふを限りと思ふに  
ぞ<sup>な</sup>きなみだはさらにと<sup>い</sup>まらず、山ざきせんけんせ  
きとのゐん扱いわしみつのかたをふしおかみこる我  
等が心すみ<sup>い</sup>るにこるにこらぬか<sup>引取</sup>三重神ぞしるらん  
上<sup>ふ</sup>おとこ山<sup>ふ</sup>ししよ神しよふつもあはれみて、かつ  
若かゆくするを、よきにまもらせたまはれと、ふかく  
ねんじてゆく程に<sup>ひ</sup>かはやこゝの下へにそふしつきた  
まふふしともかくにも此人々の御ありさま、是ぞ誠  
によの中の、ものゝあわれは是なり、たゝ是なるはと  
みな、かんせぬ<sup>かん</sup>もの<sup>い</sup>るものにそなかりけれ

#### 第四

かくて其後地きん中にはくけ大臣を召れ聞は此頃ら  
く中に、めつらしきけいしや有て院の御所へも召れ

たる由、ちんも所望に思ふ間、こと／＼く召よせよ、  
 もろみちちよくちようかうふりて、六の臣に仰付  
 られ 三重一々次第に上ふれにけり、是は扱置きしう  
 しろ三人の人々は、五でうあたりにやどを取事のや  
 うすをうかいひたまふが、此御ふれを聞召は、いか  
 にとしひで今の御ふれこそ、本望とぐべきすいさう  
 なれ、何とぞちりやくをめぐらして、御もんの内へ  
 いらん事を、あんの内と思ふなり、きよくてんにみた  
 れ入、おゝそれながらぎよくたいを一たちうらみ、  
 此しうしんをはらすべし、としひていかにと仰ける、  
 こはいさきよき仰かな、其ぎにて候はい、いそぎ御出  
 候へ、みだいさまはによきの御事なれば、御供申て  
 あしかりなん地しのびて出させたまへやと、しう  
 じうひそかにないたんして 三重だいををさしてぞ上  
 あがりける ふしきんりになれば、番のさふらいに  
 近付、我々はかるわざひじゆつのめい人、おふれによ  
 つて参り候、ときのふぎやうくらんどのかみ是をみ  
 て、さあらはたち刀を是にをきてとほり候へ、心へた  
 りとあひわたし、御もんのうちにぞいられる、爰に  
 又らう人一人罷出、某はせんじつのめい人しんへん

きどくをあらはし候、くらんと聞て、それこそときの  
 御なぐさみとてやがて、御まへに出しつゝ、有ししだ  
 いをそうもんす、其時らうじん、てい上にかしこま  
 り、折節ていせんにかれたるこほくのありけるを、  
 ゐんをむすんでかければ、たちまち花こそ咲にけれ  
 地みかとをはしめくげ大臣、是はきたいのためしや  
 とふし一どにかんじたまひけりは、其後らうじんか  
 さねてそうもん申やう、只今のせんじつを、ふしきに  
 思召さるゝかや、是よりふしぎの御さ候は、召よせら  
 れしげいしやの中に、みかどにやしんのもの有て、ぎ  
 よくたいをねらひ候、よつく心へたまへやと地たち  
 まちしんたいをあらはし、われは是わうじやうのし  
 ゆごじんわけいかづちの神なり、とて ふしこくうに  
 あがらせたまひけり、くげ大臣大きにおどろき、みか  
 とをしゆごしにけ入たまふは、かつ若としひでこは  
 あらわれたりと、御まへしここの侍を取ておさへや  
 がてたちをうばひ取、くひ一々に打おとし、たゝ今み  
 かとをあやまつぞおりあへやつとよばはつて玉でん  
 さして切て入地きん中にはかにしんどうして 三重う  
 へをしたへと上返しける、され共爰にことしゆごの

大しやう、いなばのかみ正もり、此よしをみて、やあらうせき者は二人なり、しかもじやくはいなるやつばらなり、てがらしだいにうち取べし、承り候と、さきをあらそひ打て出る、其中にほんまの三郎諸人にすぐれはせ出て、やあらうせき者はいつくに有そ、いでいでしやうぶを決せんと、大ごへ上て切て出る、としひで是をみて、人多き其中に一人なのつて出るこそ、あつはれゆゝしきさふらいかな、しさいあればなをばつゝむぞ、参りそふとついぢのかげよりつつと出、すきまもなく切てかゝる、ことばにはさういして、御めんあれといふまゝに、取て返しにげけるをおつふせ首を打をとされ、あしたのつゆとぞきへにける、此いきほひにおそれをなしふし一どにさつとぞ引にける、せめされ共爰にあたちのさへもんとししけとなのつて、いてそも一てんの君にゆみひくくせものに、けんざんと打て出る、かつ若つつかかけ出て、くせ者こそは是にあれ、てなみの程をみせんとて、とひちがへはたとさる、ゆんでのかいなを打おとされ、御もんの内へぞ入にける、二番にはおふしうむしや、すとうげんないありしげは、としひでにわたりあひ、こしの

つがひをうちはなされふしさうへさつとぞたをれける、下ひ三番にはたくまの兵衛、いさぎよしひくなかへせと打てかゝる、やあかゝり有はたらきやと、ゆんでにあいつけ、かいくぐつて、おかみ打にてうど切、まつかう二つに打わられ、かしこへどうどたをれけり、四番にはたき口ひごのせんじ、かつ若にわたりあひ、やあこざかしきわかものやと、ほうおつ取のへてぞなひてかゝる、かみをうては下へぬけすををはらへはとひあがり、つつと入てはたと切、ゆんでの肩先より、めてのちの下まで下はらりづんと切ておとす、五番にはむらゐの太郎となのつて、大だちをさしかさしふしつちも木も上ふ皆大君の國なれば、天ばつかでのがるべき、あますましと打てかゝるとしひで是をみておふ御へんはよつくだうりをわかつおとなしさよ、かくみだれたるよの中に、御身かやう成たう人は引ふなかゝ人かきらふなり、いとまをとらせん是みよと、大だちをまくりたていきをもつがせずほつ立る、むらゐたちをはらひかね、うけだちに成てしりぞくを、たゝみかけゝ大ぢへどうと打ふせて、たち

六番のたひにはたいの九郎となつていかにかたがたすでに目もはやくれがたの、ものゝわかちもみへわかぬに、ばんしよゝゝのてうちんあげよとよばはつたり、心へたりとて我もゝと出しけり、只日中のことくなり、かつわか御覽じてゑゝにつくいきやつめがいひ事やと、そつとかけより、うしろよりほそくびちうに打おとせば、やあみかたにもてき有ぞ、ゆだんするなといふまゝに、どじ討してこそはてにけれ七番には川のの四郎となつて、としひでにわたりあひ、ゆんでのたかも、打おとされ、たかばひしてこそにけにけれ、八番にはあんまの六郎たゞすみ、かつ若に切てかゝるを、うけながしうけはらひゝみたれ入て取てをさへ、くびかききつてぞすてにける九番のたびには正もりのこうけんおがたの三郎これよしとて、大かうのつはもの、打ものとなつてのはやわざなりしが、此ていをみるよりもゑゝなまぬかつたるはたらきや、たとひかたきはんくわい成共、某一人にはよもこへじと、くわうげんはいて切て出る、とし秀是をみてあらざやうゝしやこれよし汝がはたらきもかねては聞て有けるぞ、又某かはたら

きみよと、たがひにことばをかけかはし、さんをみだしてたゝかひけり、され共おがたはあらてなり、としひではつかれむしや、ひかけにたちのいろをみそんじ、とひかへつてうつたちを、うけはつしまつかうに討こまれ、たちまちまなこ暗んでみへわかす、なむ三ばう口をしやと、心はたけくいさめ共、次第にしやうねみたるれば、せんかたなくもたをれふし、おきあがらんとせしところを、やがてくびを打おとす地つもととしは十八歳ふしおしまぬものこそなかりければ、こゝにいたはしやかつ若は、はむしや三ぎにへだてられ此由を聞召、今はや是迄と、玉殿さして切て入、いづくが玉ぎて有るやらんと、むこふをきつとみればみすの内にとうみやうほのかにうつりけり、やあこれこそ玉ぎにうたがひなし、みかどの御うんも是迄ぞと、みすのうちへ入らんとすれば、はくはつたる老人一にんあらわれ、かたじけなくも玉でんなるぞ、是より歸れと有ければやあすいさん成いひ事や其玉でんこそ望なれ、うろたへけがしてこなたをうらみたまふなと、つきのけきつて入らんとす、むかうさまにはたとけたをし、すがたを引かへにらみ付たる有様は、

身のけもよだつ斗なり、かつ若こは口おしやと思ふにひとしく、五たいすくんではたらかず、おふさぞ有らん、我はこれけふの御番、とがくしの明神なり、らうせき者をくみとめたり、おりあへやつとのたまひてふしけすがごとくにうせたまふ、若君力およはず、扱々せひなき仕合かな神りきにからめられたりと、ぼうせんたる所へ、大せいやがておりかさなり、てどりあしどりなわをかけ、くわんはく殿へぞいたりける、神りきのふかしぎ、きたいせんはん／＼に扱かんせぬものこそなかりけれ

## 第五

扱其後地思ひの外成さうとう有てきん中大いにささきしが、神力のおうこにて、やす／＼とからめ取、ていしやうに引すゆるば、くわんはく御らんして、いまだじやくはいの身として、いかなるゆへに君をうらみ奉り、かくらうせきをふるまひけるぞ、きつとそうもん申上よ、さん候某は、つしまの守よしちかゝ一子かつ若丸と申者にて御ざ候、おやにて候よしちか、

其身におかせるつみなきを、むたいにきやくしんとごうし、うつてを下され候ゆへせひなくじがい仕候、よしちかいやしくも、けんひいしべつとうにふせられ、天下の事を大せつに存る身が、何の望有てぎやくしんをおこし申さん、おゝそれながら玉たいに御覺へ御ざ有へく候、ふたうふぎの御君そと萬みんさみし申なは、彌口おしかるへし、せひをかんせず都を立のき、しせつしだいにくらさんと、しのひていつもへ下り候、まつたく是きやくしんにあらず、みかとのふきをつゝまんため、御ちうせつに都をひらき候所に、御なさけなくもきやくしんに取なし、御せいばつは何事ぞや地しかればみかどはげんぎいのおやのかたきなり、おゝそれながら一たちうらみ奉りうき世の望をはらさんと存つめて候へ共、君の御うんつよきにや、神力にからめられ、あへなくいけとられ候神力のおうごなくんば、玉たいを一たちうらみはらかき切てしなん身の、なんほう口おしく存候とふし涙をながし申さるゝば、ことみかとゑいふんましまして、ちんかふきをなしけるとは、さら／＼もつて覺なし、いしゆをつふさにさうすべしとあれば、かつ若聞てそ

れりんげんはあせのごとしの御ことはに、にあはせ  
たまはぬそらことや、母にて候すはうのないし、五て  
ういせやと申りよくに罷有候召よせられ御たづね  
候へ、しからはじつふあきらかに候べし、くわんはく  
聞召、それく急て召よせよ、地かしこまつてやどに  
ゆき<sup>おく</sup>やがておまへに引出す<sup>こと</sup>くわんはく御ら  
んじていかにないし、かつ若玉たいをあやめ奉らん  
ど、らうせきをふるまひしに、召取て事をとふに、み  
かどの御ふぎまします由、たつてさうもん申せ共、玉  
牀に御覺なし、いか成事ぞすみやかにきつとさうも  
ん申されよ、其時内侍涙をはらくとながし地あゝ  
御なさけなせんしやな、一とせ中宮さま御いたは  
り有し時、みづから御とのゐに参りしに、あわのつほ  
ねのみちびきにて、わらわがねやにしのはせたまひ  
さまぐかこたせたまひしを、おわすれさせたまふ  
かや、みづからぶしのつまと成、とても兩ふにまみへ  
じと御いらへも申さゝりしに、むたいのゑいりよち  
からなく、さしちがへんと存せしに、あはてゝ立のき  
たまふとて、御まもりをおとさせ給ひしを、後日のし  
やうこと存、ひろい置て候なり、是々ゑいらんにそな

へたまへ、かやうのふぎをなしたまひ、とがなきもの  
をうしないたもふ、かゝるうらみのかずくにおや  
のかたきとあのわかゝ、ねらひ申はことはりやとふし  
うらみ有げに申さるゝ<sup>こと</sup>みかとふしきに思召それ  
こなたへと召よせたまひ、はあもつたいなや、此くわ  
んおんはせんていよりつたはり、れいげんあらた成  
本尊なりしを山しなのう大將、しきりにしよもうい  
たせしゆへ、たゞしげにゑさせしか、内侍か手にわた  
せし事いかさましさい有べし、それくたいしけを  
召出せ、畏てやかて御まへに出るゝ、いかにたゞしげ  
此せんしゆくわんおんは、せんていよりつたはりて  
うほうのみほとけなりしを汝ふかく所望ゆへゑさせ  
しか、内侍が手にわたりしふしぎさよ、有のまゝにそ  
うすべし、たいしげはつと思ひしかさはがぬていに  
もてなじ、されば此御はそんは、あわのつぼねしきり  
にしよもういたされ候ゆへ、あすけ置て候くわんは  
く聞召いやくたいしげ殿大事の御ほぞんをあつけ  
たまふは何事ぞ、其上中宮のつほねの方へさやうの  
つうろいわれなし、それつぼねを召出せんぎあれと  
ぞ仰けり、つぼねかくとはしらずして御まへに出ら

るゝ、もろみち仰けるは、此守り御はぞんすはうの内侍の手にわたる事、みかどふしきに思召れ、御せんぎの上にて、御身たゞしけ殿より所望いたされ候よし其つうろさへ憚りあるに、あまつさへ内侍の手に渡り、みかど御不ぎのしやうこなりとて、たつてそんな申ゆへ、ゑいりよ何共もだしがたし、其ゆへあらばきつとそうもんいたされよ、つほねは思ひよらさらにおいてふつうに存せぬ御事なり、いつみつからにあつたまふぞ、いづくで所望いたしけるぞなふ大將殿とぞ申ける、扱々こさかしきいひ事や、あづけたるにまがひなし、今さらいへんはかなふまじ、其時内侍申されしはいやとにかくに御ふぎのしやうこは、あのおつほねにて候、なふつゝますそうもんしたまふへ御身みかとの御供申、わらはがしんじよに來りたまふを、きよくもなやとことはをかはせしを、何と忘れたまふか、なうこは何事ぞおそろしや、たゞし夢にばしめ給ひたるか、わらははささようの覺なし、くわんぱく聞召、いやゝせんぎはむよう、兩人の内にひと方ならぬとが人有、先みかとの御ふぎ、まつたく

玉たいに御覺なし、いかさまわかきくぎやうの内に、内侍に心をかけ、玉たいに其身をまなび、しのびたるにうたがひなし、このしやうこ有うへは、たぶんは大將殿成べし、扱みちびきはあわのつほねにきはまつたり、こひにうき身をやつす事、いきとしいけるならひとはいひながら、一天の君をひだうのさたになし奉る事、せんたいみもんあくぎやく、てうてきてんまのわざならずや、某がさつする所はちがうまじ、さあまつすぐにはくでうあれと、めんがくすしをいらゝげ、はがみをなしておはします、こは仰とも覺ぬものかな、某におゐては存もよらぬ御事なり、又此御ほぞんはめいさくにてましますば、もしとばせたまふもいさしらず、もつたいなやとぞ申さるゝいやゝちんじたまふもかひあらじ、かやうにりひあきらかなれ共、あらそふうへは力なし、先きはまつたるとが人はつほねなり、それゝてい上に引出しがうもんせよ、畏て引立る、其時つほねせん方なく、いや此うへはがうもんにおよばず、くわしく申上べきなり、誠は是成たゞしげ殿、ないしをこひかねたまひ、わらはをたのみたまひ、みかどのていにもてなし、しのびたま

ひて候地其しやうこはみつからなり、女のぎにて候へは、とがをゆるしたまわれとふかしふるひはなゝき申さるゝ、みかとをはじめくわんぱくこうはしんつうじざいの御ちゑやと、一とにあつとぞかんじける、みかとけきりんかざりなく、夢にも知らぬ事共を、ちんがふぎに取なし、さしもちうこうのよしちかを、うしなひし事、せんだいみもんのくせものなり、さりながらかうるといひ、又は女の事なれば、しざいをなため、きかいがしまへながすべし、承り候と、やがて御せんを引立て、天ばつこそおそろしけれ、其後八まん太郎を召れ、よしちかゝしやうがいくゆるにかひなし、ちやくそんなれば汝か家をつかせよとて、六條の判官ためよしとめされ、天下のおしやうにふせられける、ためよしの御いせい、なをけんじの御はんじやう、せんしうばん、せい、めてたしとも中／＼申斗はなかりけり

延寶五年十一月吉日

以正本新板行也

よりまさ

## 第一

### 治承宇治橋合戦頼政最後

さてそのうちこゝにはんてう八十せたくらのゐ  
んのきようかとよらくやうこのゑかわらにひやうご  
のかみよりまさとてゆみとり一人おはしますせんぞ  
をくはしくたつぬるにせいわてい第六のわうじさだ  
ずみしんわうに二代のべうゑいたいのまんぢうかち  
やくなんせつつのかみよりみつに三代のこういんみ  
かわ守よりつながまごひやうごのかみなかまさか子  
なり七十五にて三ゐをゆるされしゆつけして源三位  
入道とてことし七十七也ゆみやうち物かだうのたつ  
しやそのなのほまれよにたかししそく二人もちたま  
ふちやくしいづのかみなかつな次男源太夫のはんく  
わんかねつなとてきりやうこつがら人にこゑかたを  
ならぶるものもなしさてその頃ちやくしいづのか  
みが下人とう國に有けるか八ヶ國たい一の馬とてか  
けなるむまのふとくたくましきかきよくしんたいに

していつもつ成をいづのかみにまいらせたるが所々  
にはし有ければほしかげといひけりなかつな是をひ  
さうしてぶしたるものゝたからにはよきむまにすぎ  
たる物何かはもつて有べきとてあだにも引出る事な  
ければ木の下といふなを付てしにひしたてかひける  
程に其頃又平家の大將さきのう大將むねもりきやう  
は馬の事を聞およばれ使をもつてこはれけれ共いづ  
の守ふかくおしみて出さうけりおしむもことはり  
なりぶしのたからにはめいばにすぎたる事あらじと  
およぶもおよばざるも皆のぞみをかけぬはなかりけ  
り扱も其頃う大將むねもりきやうと申は平のあそん  
あきのかみきよもり入道の二なんなりちやくしに  
てわたらせたまひしこまつとのせいきよならせたま  
ひて後むねもりのそうりやうとなつて天下のせいむ  
をつかさ取にきあるとき御前にはざい京のしよ大名  
其外家の子らうどう共をめしよせられいかに方々  
扱も此頃いづのかみなかつなかもとには東國よりの  
はりたる一もつめいばの有よしを聞つかひをもつて  
こいけれ共いなかへ下してなきよしを返事しけるか  
何とめんく其馬は見たまはざるにや方々いかに

と仰出されたりとうざ有あふ人くふしきや其むま  
はおとついてもゆあらひいたしきのふにはのりしけ  
るが又つぼの内に引出して候ひつるなどくちくち  
申さればう大將是を聞大きにいかつて扱はつよくお  
しむとおぼへたりにくしさらばこいとれとて日の内  
に二と三ど五と七どすきまもなくしきりにこそはこ  
はれたれ然ればいづのかみ我だにもなをみあかざる  
にふとくしんなりと思へはあしくおしみてついに  
出さつ一しゆかくこそよみおくりけれ▲こひしくはき  
てもみよかし身にそふるかげをはいかいはなちやる  
べきとかやうによみてそおくりけるきの下かけの馬  
なり我か身のかけにそいけるにやいとやさしく聞へ  
けれ共一門ほろひてのちにそはなつましきかけをは  
なちてかくほろびにけりうたによみまけたりと皆  
人ことにぞ申ける去間父の入道なかつなをよびて何  
とて其むまをはつかはさるぞあの人のこいかけた  
らんには金銀をまろめたる馬なり共参らせてはいか  
が有べきたとひこいたまはずとても世にしたかふな  
らひはついいしやうにも参らすへき事なりましてさや  
うにこいたまはんをおしむべきやうや有其上馬とい

ふはのらんがため成にかやうにかばいにかくし置て  
は何かせんの有べきにとくく其馬を参らすべしと  
きやうくんしけるはなかつなも力及ず父入道のめい  
にしたかひ木の下を大將の方へぞおくりける去程に  
むねもりきやうかの馬をみたまひあつはれ馬やよき  
馬哉され共あまりになかつながおしみつる心ねのに  
くければしよせんぬしめがじつみやうをよべとい  
づの守なかつなと云かなやきをさせ馬やにたてかひ  
それなかつなをこはくはうてそれ中つなかお引入て  
したゝかにつなきをけなとさまゝあくごんせられ  
けるはおとなげなくぞ聞へける此こと猶もかくれな  
くいづのかみかくと聞より大きにおとろきりつふく  
して父入道のもとにゆきなみだをなかつて申けるは  
口をしやなつなか脱スルカこそ京都のわらひぐさに罷成て候き  
の下をはおしみとけんとぞんせしを御めいにそむき  
がたくして馬をはつかはし候ぬたとひむねもり心の  
そこにはおもはず共一たんれいきの有べき所にてさ  
はなくしてあまつさへとうけたけのしゆゑんのせき  
にてなかつなにくつわかけよなかつなこはくはうて  
のはれなとゝあの宗盛の申けん事こんじやうのちじ

よく弓取の遺恨何事か是にすぎ候べき今は世に立廻りてもいひかいなししよせん宗盛かしゆく所にゆきむかつてかばねをさらすかさらずはもと取切てさんりんにかくれこもるか此外はたしあらしとてはらはらとなきいたりしはけにことわりとぞ聞へける三ゐ入道是を聞ことの外きしよくをそんして何條ことの有べき平家の物共かさやうのしれごとしける事こそやすからね命いきても何にかはせんびんぎをうかかふこそあらめと大きにいきとをりけれ共私には思ひもたゝすよしやすべきやうこそあれかまひて色にいだすなとてそれよりもしのびゝにむほんのけいりやくをこそめくらされけれ爰に又一ゐん第二の御子以仁の王と申は御母はとうぐう太夫公實のそくなんかゝの大納言李をのきやうの御むすめとかや三條たかくらにましゝければたかくらのみやとぞ申けるさんぬるゑいまんぐはん年に御年十五と申しにこのゑかはら大みやの御所にてひそかに御げんぶく有けるしゆせきもうつくしくして御くもゆうにおはしますされば太子にも立御位にも付せたまふべかりしか共こけんしゆんもんゐんの御そねみによつてお

しこめられさせたまひつゝはるははなの下にてかたむく日かけをなげきくらしあきは月のまへにてあけゆくそらをうらみあかししいかくわんげんに御心をなくさめなをゝきりに年月をすごさせたまひける程にすではやちせう四年には御年卅にぞならせたまひける同卯月九日夜ふけ人しづまつてのゝち源三位入道頼政ひそかに此宮の御所に參てよしも山の物語を二ツ三ツ出しさて申されけること共こそおそろしけれどとへばきみは天せう太神四十八世の御へうゑい太上法わう第二のみにてわたらせたまへば太子にも立てゐるにも付せたまふべきにさはなくしてしんわうのせんしをたにも御ゆるしなくすてに御年卅まで宮にてわたらせたまふ御事御心うしとはおほしめされ候はすや平家はゑいぐは身にあまりあくきやうとしひさしく成てうんめい身にのそめりしるんさうそくしててうにつかへんことかたくみへ侍り當時いか成御はからひもなくはいつをかこせさせたまふべきつゝしみすこさせたまふ共つひにはあんをんにはてさせたまはん事も有かたかるべしはやゝ御むほんをおほし召たゝせたまひ候へさみりうしをは

なし下したまひなばよろこひをなしてはせさんすへ  
 き源氏共こそ國々におほく候へとてゆびをおつて  
 ぞかそへける先京都には出羽のはんぐはんみつのお  
 が子共にいづのかみみつもとではのくらんどみつし  
 けではのくわんじやみつよしくまのには六條のはん  
 くわん入道ためよしか子にしんぐうの十郎よしもり  
 是は平治のらんよりくまのにかくれいたりしが折ふ  
 し上らくして此頃京都にまかり候扱せつつの國には  
 たゞのくらんとゆきつな同次郎ともぎね同三郎たか  
 よりやまとの國にはうのゝ七郎ちかはるが子にうの  
 の太郎ありはる同次郎きよはる同よしはる同四郎平  
 はるあふみの國には山本のくはんじやよしきよかし  
 はぎのはん官代よしやすにしこりの判官よしひでみ  
 のおはりには山田の次郎しげひろあべの太郎しげな  
 ふ同三郎しげふさいづの太郎しげみつうらのゝ四郎  
 しげとをあしきの次郎しげより其子太郎しげ介同三  
 郎しげたかきたの三郎しげなかせきたの判官代しげ  
 國八しまのせんしやうたゝ介同二郎時きよかいの國  
 にはへんみのくわんじやよしきよ同太郎きよみつた  
 け田の太郎のふよし同弟にかゝみの太郎とをみつや

すだの三郎よしきだ一條の二郎たゞより同弟に板が  
 きの三郎かねのおたけ田兵衛有よし同弟にいさわの  
 五郎のふみつおかさはら小次郎なが清しなのゝ國に  
 はおかたの官者ちかよし同太郎しげよし平かのくわ  
 んじやなりよし同太郎よしのぶたてわきせんじやう  
 よしかたが子きそのくわんじやよしなかいづの國に  
 はさまのかみよしともか三男右兵衛のごんのすけ頼  
 朝ひたちの國にはためよしか子よしともがやうしに  
 した太の三郎せんじやうよしのりきたけの官じやま  
 さよししそく太郎たゞよし次郎よし宗同四郎よし  
 か五郎よしすへむつの國にはよしともばつしに九郎  
 くはんじやよしつねとて是らは皆六そん王のべうゑ  
 いたゞのまんちうがこういん頼義よし家かしそんな  
 り家の子らうどうかりぐせは日本國にはたれかはあ  
 ひしたがはて候べきそれにむかしは大衆をもふせき  
 けうとをもしりぞけをんしやうにあつかりしやくま  
 うとけしことは源平何もせうれつなかりき然に當時  
 はうんていのましわりをへだてしうゝのれいより  
 も猶ことなりわづかにかひなき命ばかりいきたれ共  
 國々ゝのたみ百しやうと成て所にかくれいて侍るか

國にはもくだいにしたかい庄にはあづかりしよにつかへてくじさうやくにかりたてられよともいゝるもやすき事なし何かは心うく存候はんに君おほしめし立てりうやうしをたに下させたまは、かつうは奉公の忠を存かつうはしやくまうをとけんかためによるこひをなしよを日についてむらかり上ておごる平家をほろほさん事時日をめくらし候はしさる程ならは入道七十ゆうよ八しゆんに及年たけては侍れ共子共家人あまた持て候へは一方の御かためたのもしくおほしめされ候へしなげかしくも清皇のいつとなくとば殿におしこめられてきみも又御位に付せたまふべし是ひとへに御孝行の御いたりにてこそ候はんそれいせ太神宮も正八まん宮もしん、めぐみをたれさせたまふべし天神ちぎもいかでかおほし召すつべきとしなをあらしあいをなしことばにはなをさかせて申上られたりけり心の内こそおそろしけれされ共宮此事いかゝあらんすらんと思召わつらはせたまひてしはしは御せういんもなかりしが其昔あこ九大納言むね道きやうのまこびんごのせんしすへみちか子に少な言これなかとてすぐれたる相人の上手にて時の人

相少納言と申けるか其人此宮をみ參らせ御位に付せたまふへき御相のましますと申たる事の有<sup>を</sup>それを今おほしめし出させたまひおりふし三位入道もかやうにすゝめ申されければされば然べき天せう太神の御つけやらんと御心ならずもひし、と思召立せたまひけり御めのと子の六條のすけの太夫宗のふ御まへに有しかそも、りやうしの御つかひたれかあひつとむべきと申されければ入道おつ取てほかの人ははかり有べししんぐうの十郎よしも折ふし在京に侍ればかれを召れてしせつを仰ふくめらるべきかと申然へしとてやかてよしもりを召れことの次第をくはしく下知せられければよしもり畏て平治年中よりしんぐうにかくれこもつてよるひるやすき心<sup>本ノマ</sup>いかにもしてそくわいをとけ二たひ家門のはぢをきよめんと存る所に今けんめいをかうむるでうしかしなから身のさいわいに侍り一門たれかしさいを存申べきすみやかに東國に罷下て同姓の源氏年頃の家人共をもよふしのぼり候べしとつつしんで申上る時又入道りうじの御使つとめ候はんものかむくはんにては其おそれ有べしと申されければげにもとて當座にくらんど

になされてよしもりをかいまやうし十郎くらんとゆき家となゆるゆき家のめんぼくとよろこび則はやおいとま申てたちければ三位入道よりまさも一まづしたくに立歸りてしきりにむほんのけいりやくをぞめぐらされける誠によりまさ源家に取てはちやくちやくなれば氏といひけいづといひたれかさみすべきなれ共よしなかりける御むほんを宮へすゝみ參らせけるしよぞんのほどのなげかしきともなかゝゝさて申はかりはなかりけれ

## 第二

## 三井寺へおちたまふ並のぶつらふせぐ事

其後かうし門を出すあくじせんりをゆくとかやくまのゝべつとうたんそうひきやくを以て平家の事をつげ申やう扱も今度たかくらの宮の御むほんによつて源氏とうをさいそくして平家をほろほし奉らんとてしんぐうの十郎義盛みやのりやうしをたまはつて東國に下り候なちしんぐうよしもりにどういのよし承大急のほうげん御方としてしんぐうの渚におしよせ一日一やせめたゝかひ候へ共御方りなくしてすでに

いくさやふれて候御ようじん有べく候とことのよしをつげたりけり清もり入道う大將大きにさはきいかつて其ぎならば時日をうつさすたかくらの宮をからめ取てとさのはたへうつすべしとて上けいには三條の大なごんさねふさしきしにはとうのへんみつまさとぞ聞へしふしには又源太夫の判官かねつなでわの判官みつなかなり此源太夫判官は三位入道の二なん成しを此人かすに入られし事は此たひ宮の御むほんを三位入道のすゝめられしといふ事を平家いまだしらさるによつてなりかくてはや兩判官仰をかふむりよもすがらうつてのよういを三重したりけりされ共宮はかく有へきとはしろしめされすつき十五やくもまの月をなかめさせたまひて何のゆくへも思召よらさる所に三位入道のししやとてふみ持ていそかはしげに來りける御めのと子の介の太夫狀を請取御前に參りひらいてみるに君の御むほんすてにあらはれさせたまひてとさのはたへうつし參らすへしとて官人共かべつとうせんを承て御むかいに參り候いそぎ御所を出させたまひて一先三井寺へ入らせおはしまし候へ入道もやがて參り候はんとぞかゝれける宮

は此事いかゝはせんと思召わづらはせたまひて御心  
ならずたゝあきれまよはせたまひける爰に宮の侍に  
長兵衛のせうはせべののおつらといふもの有折ふし  
御前ちかく候ひけるがすゝみ出て申やういたくな御  
さはぎ候ひそべちの事候まし只女ばうのかたちに出  
立たたまひておちさせたまひ候へはやくとす  
すめ申せばさらばとて御くしをみたりかさねたるき  
よいにいちめがさをぞめされける介の太夫宗のおは  
からかさを持て御供に參るつる丸といふわらわにう  
はさしたるふくろを持せてたとへはあを侍か女を  
むかへてゆき様に立立せ是よりによいごへに三井寺  
へおちしのばせたまひ候へひころはそれかしもいつ  
くのうらまても御供と存候ひしか共只今官人共か參  
りむかひ候はんに物一ごん申ものも候はざらんはむ  
げに口をしく存候其うへ此御所にのぶつらが候と申  
事は上下皆よく存たる事にて候にそれも其よは有あ  
はさるかをくひやうしてにけたる物よなといわれ  
んはべつして口をしかるべく候弓や取みはかりそめ  
にもなこそおしう候へ官人共のよせ候はんにしばら  
く是にてあいしらい一方打破つて跡より參り候べし

はや御いそぎ候へとかひ／＼しくぞ申けり宮聞しめ  
されて誠に申所はさる事なれ共なんぢにはなれては  
いたくたよりなかるへしのゝすへ山のをく迄も來ら  
ん事こそほんいなれと仰下されたりけれ共のぶつら  
いつくにてても今は君に參らせ侍るべしなからん跡ま  
でも君の御ため我ためよきなこそこのし度候へとし  
いて申たりければ宮も今は力及ばせたまはず我とて  
もいつまでもおほしめせば二たひ御覽せられん事も  
有がたし來世にてこそゆきあふべけれと仰もあへず  
御泪にむせばせたまふぞ有がたきのぶつらもたゝき  
へ入斗におほゆれ共かく心よはくてはかなふましと  
思ひ切何事かさまで有べく候ととかくいさめ奉りと  
くとくとて四五町か程おくりまいらせそれよりもお  
いとま給はり立歸りけりかりそめなからくんしんの  
ながきわかれとなりにけり心の内こそむさんなれ去  
程にのぶつらは御所に歸てはしりまはりみくるしき  
物共を取したゝめ扱しやうぞくをぞしたりけるうす  
あをのかりきぬの下にもへぎにほひのはらまきをき  
ゑふの太刀のみをは心へてつくらせたるをはいてく  
らき事もなき大かうの物なれば只一人中門の内に引

かへてあつはれ官人共か何百きよせ來共おそらくて  
にはためまし物をも思へは心もすしくして三條お  
もての惣門をもたかくらおもてのこもんをも供にひ  
らひてよせくるかたきを今や／＼と三重まちうけた  
りあんのごとく源太夫の判官かねつなでわの判官み  
つなか只今御むかいにまいりて候とう／＼御出有べ  
しとはわつて引かへたりのぶつら大床に立て當時  
はしのびの御所に入らせたまひて此御所は御るすな  
り何事そのしさいを申おかれよとそいひたりける  
みつなか聞て何けに此御所ならでいつくへか渡らせ  
たまふべき其儀ならば下へ共さかし奉れとぞ申ける  
のぶつらは是を聞てきくわい成いなかけひいし共か申  
やうかな我君今こそかくおしこめられておはしませ  
忝も一いん第二の王子にて渡らせたまふを馬にのり  
ながら門の内へ入をたにふしきの事とみる所にあま  
つさへ下へ共にさかせなど下知する事こそらうせき  
なれ長兵衛のせうはせべののぶつらか候そあしう參  
てあやまちすなとぞ申けるみつなか聞もあへずやあ  
あのおとこに物ないはせそたゝさかせと下知しけれ  
ば承とて大せいのぶつらにめをかけ大ゆかにとびの

ほるのぶつらやがてかりきぬのおひひは共に切てす  
つるまゝにゑふの太刀ぬき合やおのれらは聞及び  
たるかうたう共にて有へしにくいやつはらすいさん  
なり引なといひてたせいか中へわつて入ゑしやくも  
なくくもてわちかひ十文しに火をちらしてぞ三重た  
たかひける時のまにくつきやうの兵を甘よ人切ふせ  
門くわいはるかにおい出しはしりかへつて大にわに  
つつ立あがつて引かへたりかゝりける所にぬしはし  
らすや一つきたつてのぶつらか左のもゝをしたゝか  
にいさせたのぶつらやかて其やをぬいてすてたれば  
のはかりぬけてやしりは猶とゝまりけり物／＼しや  
とて打かゝめはしらにあてねぢぬきかくてはもはや  
かのふましいぬじにせんよりは只てきにくんてしな  
んと思ひ太刀も刀もなけすてやあいかに官人共のふ  
つらかせんにしつかれ今は一かう力なし打とつてか  
うみやうにせよとかうしやうによはゝり小門のわき  
へおとり出た爰にかなたけといふかうの物長刀にて  
とめんとしけるをのぶつらゑたりととんでかゝりし  
か長刀にのりはつして又みきのもゝをさゝれつゝ爰  
にてついにいけとられにけりかくてそれより官人

共御所の内へと三重みたれ入我も／＼とさがしけり  
天井をやぶ板敷をはなしてさかしけれ共宮も御渡  
りなし人一人もなかりければ此うへは力なしとて官  
人共のぶつらはかりをいましめ扱六はらへとてぞ  
三重参りける去程にう大將宗盛のきやうは大ゆかに  
さしてのふつらを大にはに引すへさせむほんの次第  
宮の御さ所ならびにらうせきのやうかうもくにか  
てめしむかふべしと仰ければのふつらもとよりすく  
れたる大かうの物なればちつ共をくせすいなをりあ  
さわらふて申やうあまり御まへのそう／＼成にさう  
人共をのけられ候へがうもんにあつからず共御尋に  
付て所存のとをりをは申べしいかにすいもんにあづ  
かりはねみをみちにくだかるゝといふ共をんせさ  
らん事は申し但こんやのらうせきの事身において  
あやまりなしまことの御使と存せはいかでか忝もせ  
んしをこしよし奉るべき宮は此間しのひたる御出と  
て三條殿をは出させたまひぬ御るすのまにて侍るを  
よる／＼がうたう共かうかゝふ由を承りし間さつき  
やみにては有のぶつらまいやようしんしてふかくを  
せしと御所中をみまわり候所にいまたあかつきかけ

て物のぐしたる物共か敷をしらす御所中へみたれ入  
候程にらうせきなり何ものそとがめ申て候へは是  
はせんしの御使ぞとつくりこゑしてなめる程に宮は  
御出にて當時此御所御るすなりと申ししか共さな  
いわけせそ只打入候とてみだれ入し間只今何事に此御所  
へせんしの御使とてかゝるすかたにては参るべき一  
ちやう是はがうだうめらがことはをへてたばかり入  
るにこそと存所にたゝ入りに打入し間扱こそと存か  
たのこゝとく切ふせきをい出して候いしか今こそ誠の  
御使共承候ひつれ大方はせんしの御使に参たるけん  
びいしとうしりよなかりけりか程の御事に侍うへは  
せんしの御使たれかしとなのつてこさいをのべ候は  
んにいかでからうせき仕べき其うへ只一人有のぶ  
つらにおいてたてられて度／＼にけ出／＼しけるも又  
いひかないしさふらひけかしといひ御をんふさげ成  
に一人成共こじつの物をこそ召つかはれめとはい  
かりがたなく所存のとをりをあざやかにそ申ける大將  
聞たまひて此うへはとかくのちんたうにも及ずとく  
とく川原に引出しくびをはねよとそなたまひけるの  
ぶつら又かはふり上げいだだけたかに成て申やう是は

それかしめいをおしみとかを申しらかんとにはあらずたとへは此御所へせんしの御使にてもあれ又はよ打がうたうにてもあれ思ひかけなき夜中に物のぐしたる物共か是はせんしの御使ぞといふてみたれ入候はんをせんしといふことばにおそれておめ／＼とをし入たまはんや若又侍共がふせぎたゝかひおい出してがらなど仕らんをはふかくなりとてくびをも切御かんたうも有べきや只有のまゝの事侍と申ければ大將殿もことはなくおとし兼てぞみへたまふ爰に平家の侍共の中にかづさのあく七兵へかけ清かすゝみ出てげにも是はたうりなり誠にわかぬしのもとへ物のぐしてあやしき物共がやいんに大せい打入たらんをはたとひせんし共いへいんせん共いへ後はしらすゆみや取のならひなれば一たんはふせきたゝかはんするそかしそれを又みながらにけうせたらんをはほむるぬしはよもあらじ我等も左様にこそはふるまはんずれと申ければなみいたる侍共皆げにもとぞ申けるかげきよかさねてじたいあののぶつらは心きはつかしき男にてしかも大かうの物にて有度／＼はかねをあらはして一度もふかくせすところ聞中にも本所に有し時はつさの衆ことをし出してらうせきな

のめならさるゆへ一郎二郎もせいしかねさを立さはける程にのぶつら一たんしづめけれ共猶さん／＼の事なりければつさのしう／＼二人をのぶつらさゆふのわきにはさみ一しめしめて罷出其ぎのらうせきをたちまちしつめたりければ時に取てかうみやう第一といわれき又おほいのみかと京極成ときは殿の御所へ山とへんのかうたう共か打入て家内のしさいをぬすみ取あまつさへおほくの人を切ころして出ける程に家ぬしこゑを立てよはわりさけひけれ共出あふもの一人もなし大はん衆もおはざりけるにあののぶつらさうのこてにはらまさきて太刀をぬきたゝ一人出合京極大ちにておつめさん／＼にたゝかひがうたう四人手の下にて切とめ一人をはくんでからめんとせし程につらをつきつらぬかれけるかつかれなからついにそれをもからめとめたり今あのおもてに有きずは其時のつかれたる刀の跡なりひるいなきてがらなりとて其時なされたる左兵衛のせうそかしされは度／＼なをあらわしたる大剛の物のたちまちにきられんする事のむざんさよのぶつらていの物をこそ御所中にも召つかはれ度物にてあれあはれおしき侍やと涙をながして申けれ

ば尤なりとておの／＼皆おしまさるはなかりけりされはにや大將殿もけにもとやおほしけんさらばとてしさいをなためてしばらくかげきよにあつけおかるかげきよ時のめんぼくとよろこひのぶつらをおつかり一先たいしゆつしたりけるのぶつらあまりにかうなればゆみや神におうごせられたる侍かなとみな取／＼に申けるかくて平家めつぼうの／＼ちはうきの國にしのかたををかくて殿付たまひかうの物のたねつかせんとてゆりの小藤太かごげに合て召つかはれのとの國すゝのせうをそたまはりけるぢせうのむかしは平家に命をたすけられふんちの頃は又源氏にをんをかうむれりふようのめいはう有がたしためしまれ成かうの者あつはれよき侍のかゝみかなとて上下はんみんおしなへみなかんせぬものこそなかりけれ

### 第三

大しゆ軍ひやうちやう井きおふ手からの事

其後よく日十六日の夜に入て源三入道頼正ちやくしいづのかみなかつな次男源太夫の判官かねつなひ

たかぶと三百余騎にてたちひをかけやき立三井寺へとてそ三重參られける此こと猶もかくれなく宗盛大きにおどろきたまひ扱いやはせんとて内義ひようぢやう有ける所に侍共きおふのたき口は供せざるとみへてさりげもなく宿所に罷候といへば大將聞召ふしぎや其物は入道の内には一二の物共成にとゞまりけるこそふしんなれいそぎつて參れとてめさる扱もきおふたき口といふは渡邊ことにみのたの源氏つながはつようのほるのたき口が子なり弓や取ておそるゝ物なく心もかうにてはかりこともいみしくしかも王城一のひなんなりかくてきおふ使と供にそ參りける大將きおふにのたまうやういかにしうの入道は三井寺へと聞に汝は何とて供せさるぞと仰ければきおふかく共つけたまはねばいかでか存べきことたふさもあらずとよ入道の内には汝らこそ身にもかはり命をもすつべき一二の者とさたするにつげざる事は大きにおほつかなしとのたまふきおふ承てそれもやうこそ侍らめ但此間はうらみ申子細の候に付て心をおかるゝ事も侍りたとい入道殿こそつげたまはず共したしき物共おほく候にかく共しらせ申さぬは

よく主人のかんたうのふかければこそなれか様の御大事には人一人も大切にこそ侍るへきにさすかきおふなどを打すてたまふ事はおほろけの所存にはあらしかく有うへはなまなかしたふにも及ず當時は扱こそ候はめと誠にやかにぞ申ける大將打うなつひてよしさらはきやうかう宗盛をたのめよかし三位入道のおん程の事はなとかなかるへきとぞ仰けるきおふ心にはあらはかなのたまひ事やたとい命はうしなふ共宮ずかへはすまじき物をさりながら只今いなといふへきおりにあらずと思へはきおふ身におゐてさせるあやまり有共存せず身にも命にもかわり奉らんとすいふん存候へ共入道殿此間心をおきたまふ程にそれかしも又心がおかれて奉公をも仕らずないくは申入候ばやと存候ひつれ共主に中たがひていつしかと人の申さん所もはつかしくそんししせんの次而をと存る所に今此仰こそ身のさいわいにて候へそれに付てはそれかしさるむまを持て候ひしを此頃したしきやつめにぬすみとられて候あはれ御馬一ひき下したまはり候へかしいづかたにても一方を承てかけやぶり手いたくはたらき入道殿に思ひしらせ候はばや

とことばすしく申ければ大將なのめならずうれしげにて誠に年來はし／＼と思もひしに然へき折ふしなりよき侍まうけて有王城一のひなんなり心もかうにて弓や取もよし渡邊とうのさいちうなりごも有けると悦びそれ／＼けんさんのはしめなればとてすいふんひさうしたまひたるなんれうといふめいばにかいくら置くろいとおどしのよろひをそへてぞたまはりけるきおふ是をたまはつてあつはれ御馬や此馬に打のつて一ばんにかけやぶり思ふまゝにはたらかんあんの内にて候とをいろにゑつきし一先おいとま申それよりもわがやをさして立歸りきおふ心に思ふやう是程の大事を思ひ立たまひなからつげたまはざる事はしんじつにいこんなり大將のかく打たへかたらひたまふもいなきがたし時の花をかさしの花にせよといふ事の有扱も有べきかと思ふが又あんしけるはつげたまはぬもやう有らん六はらちかき家なればぶこつなり中／＼に共おもわれすらん忠臣二君につかへすてい女二夫にかせすといふ本もん有我いかてかさうでんのしうをすて奉て今さら平家にうでくびをにぎらんやまつ代までもなこそおしけれとおも

へは夜に入るまゝにきおふまつしやうそくをぞ三重  
したりけれ家につたはるよろひをきぢう代の太刀を  
はきう大將よりたまはつたるなんれうに打のつて家  
の子らうどう四五人引ぐし三井寺へとて打立けるが  
先大將の惣門のまへをとをるとてたづなはいくりあ  
ふみふんばりつつ立あがり門の内をさしのそきかう  
しやうに申やうきおふこそ只今御まへを罷とをり侍  
れきのふの御馬物のぐよろこひ存候へは尤宮づかひ  
申度は候へ共年頃のしうくん入道殿をこひしく思ひ  
奉れば三井寺へこそ罷こし候ひつれいとまこいのた  
め是迄立より申て有にくしとおもはいとめても見よ  
おそらくてにはためましそといひすてゝそれよりは  
やむちにあぶみをもみそへゝ三井寺へとてぞ三重  
いそぎける六はらには侍共があつまつてきくわいな  
りきおふめをおつかけ打とめんとひしめく大將しば  
らくとおさへてやあ方ゝにくきしかたなれ共とい  
むる事はいかゝ有べきなんれうははやばしりなり一  
町共のひなはおつ付がたし其うへきおふは弓やの上  
手てもきいたればなましにおつかけんとてあやま  
ちすなざるしれものにはゆきあはぬにしかしおとな

せそとせいしたまへは共かくも御はからひとてとい  
まりけり將も兵もろ共におくひやうの程あらわれ  
て云かいなくそ三重聞へける去程に三井寺には三位  
入道一門其外寺法師共集まりていくさひやうぢやう  
有ける所へきおふ参りたるよしを申されはこそとて  
ちかふめしいかにきおふは何とおそかりけるぞと  
仰ければきおふしたしき物共にむかい口をしくも殿  
原は是程の御大事かく共つけたまはずしてよくすて  
てはおはしけるぞとうらみ申たりければされはこそ  
我ゝつげんと申けるをきおふか宿所は大將のむか  
いなれはつけては中ゝぶこつなりいつれの所にも  
おちつきぬと聞なばつげす其時をさして参へき物そ  
と仰られする程に扱こそと申ければきおふ打うなつ  
ひて扱はうれしや何事に御へたてあらんと心元なく  
候ひつるにつげす其聞なば参へき物をとたのまれま  
いらせけるこそうれしけれせんせしにたかはすとて  
泪をながしかんしける扱六はらへよびよせられて大  
將ともんとうしことたばかつて馬物のぐをこひう  
けたる次第大將の門前をなのつてとをつたる事共  
一ゝかたりてわらひければいつの守は又かのなん

れうをこいうけ木下丸がへんほうせんとてやかておがみを切むかしはなんれう今は平の宗盛といふかなやきして先一あたり當たりとて一どにとつとわらひ扱夜中に京へそ三重おいやりける扱其後に大しゆ残らずあつまりかさねてせんぎしけるやうそもく山門はふちやうの返事なればたのまれずなんととは又どういたりといへ共いまたまいらすいかはせんとせんぎなり三位入道申さるゝはとかく此ことのびくにてはあしかりなん又こせいにてよのつねの如くに合戦せん事もゆゝしき大事たるべししよせん今夜打立て六はらへおしよせ夜打にせんと申さるれば皆此ぎ然へしと同ず入道かさねてさらはらうきやく二手にわけて先らうそう共はにいかみねよりからめてへむかふべしあしがる共をさきに立て白川のざいけにひをかけやき上げはさい京人六はらの武士共あはやとてはせむかはんすらん其時いわさかさくら本のへんにしばしさへてふせきたゝかはんまに大手は又まつ坂よりいづの守を大將としてわか大しゆ惡そう共六はらにおしよせ風上にひをかけてやき上げ一搦もふで攻んになとか太政入道う大將も皆や

き出してうたさるへき方ゝいかにと申さるれば皆尤とぞどうじけるこゝに平家のいのりしける一にやぼうのあしやりしんかいは弟子同宿す十人引ぐしせんぎのにわに出来るがいかにもしてさまたげよをふかしことをのばさばやとおもへはずみ出て申やうそもく佛法王法はきみをたすけ法をまもり文官武官は又國をおさめ亂をしつむ其中に源平兩氏の將軍はてうかせんごのしゆごととして國土をおさめくわうをまもり奉りたがいにくかくたりき然につらくきんらいのていをみるに源家はうんおとろへ諸國にれいらくし平家は又いさかんにして一天をくはんりやうせり是によつて五き七道其めいにそむかず百官ばんそ其いにしたかふしゆりうのうみに入るごとく萬木の風になひくににたり一寺のしゆとの力を以て一ぞく大勢の兵をかたふけん事たやすからし但たうらう車をかへすといふ事の侍れはそれにはよるましく上しん王の御入寺は寺門のはんじやうとのめんばくなり此時にあたつてたれかなをざりを存いさむ心なからん然れはそつしのようちをとめよくはかりことをめぐらしせいを東西にもよふしていくせんはよろしかるべきかく申せばとてまつたく平家

の方人にはあらずいかにも寺門のあんどしゆとのかうみやうこそまつ代迄も存事なれとことばと心と引かへて時をうつしよをあかさんとしつゝ長々とぞせんぎしたりけるこゝに又せうゑんぼうのあじやりきやうしうはころもの下にもへきにほひのはらまきちやうけんけさにてかしらをつゝみ打刀まへにさしすゝみ出て申けるはいくさにかつ事せいにはよらすしやうこを外に引べからず我が寺のほんぐわん天武天王いまだとうくうにて渡らせたまふ御時大友わうしにおそはれさせたまひてよしのゝおくを出大和のうだをすきさせたまふには其せいわつかに十七きされ共いかいせに打こし又のおはりのくん兵を以てついに大友のわうしをほろほし御位につかせたまへりむかしを以今を思ふにふせいにはよるべからず十七き猶いくさにかついはんや三いんのしゆとをやいはんや源氏のよりきをやなかんづくきうてうふところに入る時じんりん是をあはれむといふ本文有いはんや宮の御入寺をやいけいをめぐらさんといいたづらに時日をうつすならはてきに上手をうたれてこうくわいゑきなからんなりじよはしらすきやうしうが弟

子共はいそぎせんちん仕てたしかに太政入道父子かくひ取てしん王の御代になしまいらせよとそひしめきけるゑんまんいんの太夫源學是をうけてしゆとのせんぎはしおゝし只よのふくるに急けやすゝめと下知しければ是尤ゝとて先からめてにむかふらうそう其の大將くんには源三位入道頼正せうゑんばうのあしやりきやうしうりつしやうばうのあじやりにちいんそつの法師せんちが弟子にきほうせんそう其外同宿わらんへかりぐして一千よ入てゝにたいまつ持てによいかみねへそむかいける扱又大手の大將いくさにはいづの守なかつな源太夫の判官かねつな大しゆにはゑんまんいんの太夫源學りつじやう坊のいがの公法りんいんのおにさどじやうきいんのあらとさびやうとういんのいなばのりつしやすみの六郎はう島のあしやりつゝ井法師きやうのあしやりあく少納言あら太夫北のいんにはこんくはういんの六天ぐ太ゆうしきぶのとかがさとひんごとうなりほつしばらには一らいほつしをさきとしてたうしゆにはつゝいのしやうめうめいしゆんおくらのそんけつそんゑいじけいらくしうかなこふしのげんゑう是らは皆ち

からのつよきゆみや打物取てはいか成おにも神にもあはんといふ一人とうせんの兵なり扱又ぶしには渡邊のはふくはりまの次郎さつくさつまの兵へ長七となふきおふたき口あたう右馬のせうつゝくの源太きよしすゝむをさきとして一千五百余人はや三井寺をぞ打立ける寺には宮御入寺の後ようじんのためにとて大せきこせきほり切かいだてさかもきかまへたれはそれらをも取はらひほりにはしわたしなどする程にさつきのみしかよをしうつりすではやせきちのにわ鳥こゑくなきあへりいづのかみのたまひけるは爰にて鳥のなくを聞ては六はらへよせばはくちうにや成なんよ打にこそさり共と思ひつれ晝いくさにはいかにしてもかなふましゑゝ口をしやはいなき事やせひにおよばぬ事それゝよひかへせとて大手は山しなより取てかへせばからめては又によいがみねより引かへしむなしく夜をぞあかしけるわが大しゆあくそう共是はひとへに一によばうがながせんぎにこそ夜はあけたれくちをしやきやつめにおめゝゝとはかられさまたげられぬるむねんさよいざかれがばうへおしよせしんがいかくび切ていくさがみにま

つらんといきどをればけつきさかんのわか大しゆ共げにもといふこそおそかりけれ我もゝとおしよせ一によばうへと三重みたれ入おしやぶりせつはうにこそ及けれされ共しんがいさき立てちくてんしはうにはかつて人もなければあくそう共ちからおよばすそれよりまつたちかへつてもとのことくさかも本引きかいだてかいてみやをしゆこしたてまつりなをいくさひやうぢやうひまなかりけり寺法師のしんていたのもしき共やさしき共中々扱申斗はなかりけれ

#### 第四

一らいじやうみやうかうみやう井宮なんと

#### おちの事

そのうち六はらのなんれうは三井寺よりおいはなされみちしばのとをわけあさつゆにしほれつゝもとの主の家なればう大しやうのもんくわいにかへりたかいなくして立にけりあやしみおもひ立出みればなんれうなりこはいかにとて引まはしゝよくみればむかしはなんれういまは平のむね盛とかなやきしてぞありけるやかて此よし申上れば大將大きにりつふ

くし給ひにくひしはざかなきおふめを切てすつべかりつる物をさて手のひにしてたばかりかゝるはちをみけることこそやすからね是木下がへんほうとはいひながらひとへにきおふめがなせる所なりこんど三井寺へよせたらんする物共いかにもしてきおふめをいけ取にせよのこざりにてくひを切んずるぞとおどりあがりくはがみをなし身をもんで時こくうつさすおしかけふみつふせよといかつてせいをもよふしちやくたう付いくさひやうちやう取くにてうへを下へと三重かへしけるみやはしばらく三井寺に渡らせたまふが京よりはよする聞ゆ國くの源氏共はいまだまいらす山門は又まいるべきよし申ながらたちまちにへんかいしぬ寺ばかりにてはかなはしとて廿五日におんじやうじを出させたまひなんとをたのんでおちさせたまふ御うんの程こそかなしければをかざりとおほしけるにや先こんだうに御にうだう有せみをれといふ御ひさうの御ふえをもつてばんしうらくのひきよくをあそばし御ゑかうありなむ大じ大ひとうらいだうしみろくじそんかいせんをよくんつたなくしてこんしやうこそむなく共りうてきのけちゑんを以てごしやうをたすけたまへとてな

くく佛前にさしおかせたまひけるこそあはれなれけいこの大しゆも御供の人くも皆心ぼそくも打しほれけるすではや御出寺のよし申ければちご大しゆぎやうぶかなわらうそうまでも此程の御なごりをおしみたてまつてすみそめのそでをしほるばかりなりみやも此山御らん有てかりそめのなしみ成にかやうに思ふやさしさよとおほし召やらせたまへは御泪をいろにこそはすみけれかくて時こくもうつりければ宮御しやうゑにて御馬にぞめさせ三重たまひけるさて御供には三位入道の一るいならびにわたなべたうし法師二百余騎にはすぎざりけりすではや寺を出おはしましんらのやしらの御まへにては御心斗にさいはいしたまひ大せきとをりに御出有ひかしをのぞめばこすいばうくとしてなみきよくにしをかへりみれば又れいせううつくとしてかせすさましせき寺せき山うちつゝきゆくもかへるもあふさかや一むらすきのいとよりかけひのしみづたへくなりくゝひざか神なしのもりたごちにかゝつてこはたのさとをつたいつゝうちへぞ入らせたまひけるうちと寺との間かうてはわづか

三里ばかり成にその間にて宮六どまで御らくはありけり御むまにがう□せさせたまはざるにや又此程うちどけ御しんならぬゆへにや是もしかるべき御うんのきわとは申ながらか程の御大事の中にねふりおちさせたまふもいひかいなしかくてはかなふましければしばらくやすめ入まいらせて御しんならしめ奉りその間にうちはし三げんひきてしゆ共ふしももろ共にみやをしゆごし奉る扱六はらには此よしを聞すはやみやこそなんとへおちさせたまふとなれおつかけ打奉れとて大將くんには左兵へのかみとも盛とうの中將しげひらさつまのかみたゝのり侍大將には上總のかみたゝきよその子太夫のはんぐわんたゝつなひだのかみかけ家その子太郎判官かけたかたかはしの判官なかつなかわちのはんくはんひで國むさしの三郎左衛門有國ゑつちうの次郎兵へかづさの五郎兵へをさきとしてつがう二百はち十きょうちよりなんとをさしてをつかけしがびやうどうゐんにてきありとみければ平家のぐんびやううんかのごとくはせちかつきはしの東のつめによするとひとしくいまたよもあけさるに時のこゑ三どつくつてはし

のうへをおめきさけんで三重すゝみけるわれおとらしといやがうへにこみ入る程にいまたあかつきの事なればうへはかわきり立てくらさはくらしせんぢんにすゝみしもの共はしをひきたるぞとくちゝによりしか共さしとめて中なりしかばたゝわれさきにゝゝとはせこみゝしける程にせんぢん二百よきを川へぞおしをとしけるけんきゆへなりふかくなりそのうへのはぢなりとて是又わらはぬ物こそなかりけれすではや夜もほのゝとあければ寺法師につゝ井のしやうめうめいしゆんといふものありどもんたもんにゆるされたるあくそう成かはしのでにぞむかいけるめいしゆんがしやうぞくは事をこのんでしたるとみへたりまつしかまのかちんのよろひひたゝれにこんのづきんにくろいとおどしの大あらめのよろひの一まいませ成をくさずりなかにゆりくたしおなしけの五枚かぶとをきてくるぬりの太刀のさんじやく五すんあるにねりつは入てはいたりけるさてくるぬりのゑびらにぬりのにくろつはをもつてはいたるやの廿四さしたるをかしらだかにおいなし七もちり成まゆみのしめぬりにぬつたるにぬり

つるかけてまん中取三尺五寸の長刀をわらはに持せてくそくしはしのうへにすゝみ出て大をんあげとをからん物はおとも聞かゝらん人はめにもみたまへをんじやうしにはかくれなしつゝ井のしやうめうめいしゆんとて一人當千のつわ物ぞかし我とおもはんひとくはよりあへやけんざんせんとて廿四さいたるやをもつてさしつめひきつめさんくゝにいたりければやにわにてき十二人いころし十一人に手をおふせや一つ残してゑひらも弓もからとすてつらぬきぬいではたしになりはしのゆきげたをさらくゝとはしりけるはたゝ一でう二條の大ぢをはしるにことならず是をみて平家の大勢あますないとれ打とれとて我もくゝとすゝみける源氏方にも此よしをみてしやうめうたすなつゝけやとて我もくゝとおつすがふためうしゆん是にちからをへてすはまいりそうといふまゝにおもてもふらすわつて入くゝいのちをかきりに三重たゝかひけるはしめより人にまきれすはたらきしはじやうめうばうにてとめたりあまりにつよくうち合ければ長刀もをり太刀もおれてたのむ所はたゝこしかたなばかりなり猶こしかたなぬき持て

平家爰をよせよやよせよとあざむひてこそ立たりけれかゝりける所にせうゑんばうのあじやりきやうしうがめしつかいける小ぼうしにいちらひとてしやう年十七せいきはめてちいさけれ共大力のかうの物きもたましいのふときこと萬人にすぐれたるがみやうしゆんかうしろにつとよりいかにしやうめうばう爰をば我にあづけられしはらくいきつぎたまへとてゆきげたはせばしそばとをるべきやうはなしあしう候しやうめうばう御めんなれとてみやうしゆんがかぶとのしころにてをかけうさぎばねといふ物にかたをつんどおどりこへたてきも身方も是をみてあゝはねたりやはねたりこへたりくゝよくこへたりとしばしはなりもしつまらず一らいいよくゝきにのつてあら手なりまいりそうとて大せいか中へわつて入おもてもふらす命を限りに馬人のきらいもなくあたる物をさいはいにはらりくゝと三重切まわる時の間に一らいじやうめう二人の法師かてにかけて百よ人うち取てきをはるかにおいしりそけさらは一まづひけやとて又ゆきげたをさらくゝとはしりかへつて猶はしつめに引かへた此兩法師かふるまひ誠に一人當千の兵

とは是らが事をやいふらんと上下萬みんなおしなへて皆かんせぬものこそなかりけれ

## 第五

## 宮御さいご井よりまさ父子じがいの事

其後じやうめう一らい雨法師か渡つたるを手本として三井寺の大しゆ入道の一るいわたなべたう我さきにと皆はしりつゝきゝはしのゆきけたをこそわたしけれあるひはふん取してかへるも有あるひはいたでおふて河へとび入しぬるもありはしのうへのたゝかみはひ出る程にそみへにける爰に平家の侍大將かつさの守たゞきよ大將ぐんの御まへにまいりて申やうあれ御らん候へはしのうへのたゝかいは手いたくみへ申べく候今は川をわたすへきにて候が折ふしきつき雨の頃みづまさつて候へはわたさば馬人おほくほろび候なんよど一口へやむかふべき又かはちゝへやまはり候へきいかゝ有べく候といふ爰に又しもつけの國のちう人あしかゝの又太郎たゝつなしやう年十七さいにて有しがすゝみ出て申やう何とよと一口かわちゝへは天ちくしんだんの武士をめしてむかは

され候はんするかそれもとためて我らこそ承てむかい候はんすれめにかけてたるてきを打ずして宮をなんとへ入參らせなはよしのとつかはのせい共はせあつまつていよゝ御大事にてこそ候はんすらめむさしかかうつけのさかいにとね川と申大がかそふあしかか中たかふてつねに合戦仕にわたさてはりをはかたし爰をわたさずはながき弓やのきす成べししかるにおぼれてしなばしねとて馬いかたをつくつてわたせばこそわたしけめくわんとうむしやのならひてきをめにかけ川をへだてたるいくさにふちせをきらふやうや有いわんや此川はなみはやしといへ共そこふかからすいわたかしといへ共わたりせおほし川を渡しきしをおとす事はあふみのふみやうたつなのあやつりに有馬のあしをかぞへてなみまをわけよしさいはあらじそれがしさがけせんする間つゞけやとの原とてまつさきにこそ打入たれつゞく兵には大こ大むろふかす山かみなはの太郎さぬきのひろつな小野寺のせんし太郎をさきとして三百よきそつゞきけるたつな大をんじやうを上げて下知しけるはよはき馬をは下てにたてつよき馬を上てになして水ふせかせ

よ馬のあしのおよばん程はたつなをくれてあゆませ  
よはづまはかいくつておよがせよさからふ者をは弓  
のはずに取付せよてに手を取くみかたをならべて渡  
すべし馬のかしらしづむとみば引あけよいたく引て  
引かづくなくらつばによく乗さためてさうのあぶみ  
をつよくふめ承しとまは三すの上にのりかゝれ川中  
にて弓引なてきはいある共あひ引すなつねにしころを  
かたふけよいたふかたぶけててへんいさすな馬には  
よはく水にはつよくあたるべしかねに渡しておしな  
がさるゝな水にしなふてわたせやわたせと只一人の  
下知によつてさ斗の大かなれ共二百よきか一きもな  
がれずむかいのきしへさつと打上あくるとひとしく  
あふみふんはり大おん上げむかししゆじやくいんの  
ぎようせうへい年中にてうてき正門をほろぼしてけ  
んしやうかうむりなを上げしたわら藤太秀さとに十  
代のかういんしもつけの國のちう人あしかゝの太郎  
としつなが子に又太郎たゝつなしやう年十七さいけ  
ふうち川のせんちんそとなのつてひやうとういんの  
門の内までせめ入たり大將ぐん左兵へのかみとも盛  
是を見たまひて殿原渡せやわたせと下知したまへは

承とて二萬八千よき皆打入てわたしければさしもに  
はやきうち川も馬人にせかれて水は上にそたゝへけ  
るさう人ばらは馬の下にて取付くゝわたる程にひさ  
より上をぬらさぬ物もおほかりけりよきそわたせや  
渡せとてたがいに力を合つゝ川一文じに三重わたし  
ける今ははや宮方にもてきの大せいになんかをこさ  
れてふせくべきやうなかりけりされ共せめて宮をお  
とし奉らんとてなんとの方へおとし參らせ其間に命  
をすてゝふせく程に爰にて入道の一門渡邊とうもお  
ほく打じにしたりけりなかにも入道の二なん源太夫  
判官は父入道にじかいをすゝめ只一きふみとゝまつ  
てふせぎけるをかつさの判官がいけるやに源太夫判  
官内かぶとをいさせてひるむ所をかつさのかみかわ  
らは次郎丸といふ大力のかうの物はせちかつひてか  
ねつなにおしならべてむすつくんだ源太夫判官はす  
ぐれたる大力なれば次郎丸お取ておさへてくびをか  
き立あからんとせし所に平家方の兵物共十四五きお  
ちかきなつてついいかねつなを打てけり又いつのか  
みなかつなもさんゝにたゝかいいたであまたおふ  
たればよのなか今は是までなりとてやかてびやうど

ういんのつり殿に入はりまの二郎はふくを近付入道殿へとくくしがいをすゝめ申せとてはらかき切てふしたりければふく其くびを取て大ゆかの下へなげさて入道殿へまゐりていづのかみ殿もかねつな殿も皆く打じにしたまひて候いそき御しがい有べしといへは三位入道打うなづいて渡邊のき七となう法師をめしてやあ我すてに八しゆんにおよんでおいをとろへたるくびをとられ是こそ三位入道かくびよとててきの中にて取わたされん事心うく思ひつれば心しつかにじがいせんとおもひ是へたちのき申てありかならずわかくびてきにばしとらするなとていけの水にててあらひ口すゝぎなどして西にむかひ念佛廿へん斗申さてさいごのことはそあはれ成むもれ木の花さく事もなかりしに身の成はてぞかなしかりけると是をさいごのことはにて刀をはらにつき立たまへはとなふなくくくびを打なくく石にくゝり付うち川のふかき所にしつめさてはふくとなふ二人はいづ是迄なり御供せんとてさしちがへてしんだりけりむごんなりける次第なり爰に平家の侍ひたのかみかげ家は古兵にて有ければ此まきれにみやはさだめて

なんとへやおちうせたまふらんと思へばひたかぶと五百よきにてむちあふみを合ておつかけ奉るあのごとく宮は卅き斗にておちさせ給ふと宮はくはうみやうさんの鳥いの前にておつ付雨のふるかことくい奉りければいづれかやとはしらね共や一つ來て宮の左の御そばはらに立ければ則馬よりまつさか様におちさせたまふを平家の大せいおりかさなりやかて御くびを取てけりあさましかりける次第なり扱もきおふのたき口は人くのさいこのやうをみるとけ今は我身のさいこと思へはてきにむかつて大おんあけ渡邊とうにきおふのたき口是にあり打取て高名せよとよはゝつてひかへたり平家の大せいはを聞すわやねがふ所のさいわいななり我打とらんとすゝみけるをも盛のきやうせいし給ひてやあきおふめが事は大將殿もやすからすおもはれければ別て仰わたされて有はいかにもしてきすつけすいけ取て參らせよと下知を加へられければ口兵共其いをへて弓を引ず太刀をもぬかずほとりにめぐりてうかゝひけるきおふはやかて是を心へ思ふまゝにいめぐり切めぐりける間又は打れておいけれ共きおふかみはつゝかなし平侍共

是をみて今は只打とれよかれ一人いけとれとておほくの兵をうしなふべきにあらずとて中に取こめ打んとすきおふも又太刀をぬきおもしろし平家のともがら参りそふといふまゝに大せいか中へおもてもふらずわつて入く命をかざりと切まはるおつちらし猶もてきを招きよせやあ方くのふるまいをみるにかにもしてそれかしをいけ取大將殿へ引参らせたきとの所存とみへたり尤心ざしはせつなれ共此きおふかいけくひとらん事はとてもかのふまし程にせめてはしにくびを成共取て京都へのみやげにせよさらばおしけれ共とらするそよつてとれといひもあへずはら一もんしにかき切其刀を取なをしのどぶへにさしあてつきつらぬかれてしんだりけり心もかうにててもきゝ力もつよく殊には又王城一のびなんなれはすくれし中にもすくれたり尤おしき侍やないきてのめんぼくしゝてのかうみやうほめぬ物こそなかりけれかくて平家のぐんせいくひ共を取て太刀につらぬきさし上げくいかめしけに上らくしけるためしすくなき物語きせん上下おしなへかんせぬものこそなかりけれ

寛文五年乙巳五月吉日

鶴屋喜右衛門板

賴朝三嶋詣

第一

中<sup>下ア</sup>さても、<sup>下チ</sup>そのヘン、<sup>中</sup>ち中<sup>は</sup>ことそれこつかのち  
らんをみるに道のみちたるものはおのづから家をさ  
まり、理にくらきものは一たんさいわひありといへ  
どもふうせんのもしびついにきゆる、ほんまつた  
だしきものをじんせい<sup>の</sup>ほうといふ也、爰に人王八  
十一代、たかくらのゐんのぎょうにあたつて、へい  
しやうこくいるきよもあり、中<sup>こ</sup>う持とて、おろしかうけ  
へ下<sup>下</sup>一人、こいおはしますさん地ぬる、へいちのみだれ  
に<sup>こ</sup>このぶよりよしともをほろぼし、天下をたな心の  
内におさめ、くらゐあくまでへのぼり、<sup>いろ</sup>こわか身  
のゑいぐわをきはむるのみならず、しそんのはんじ  
やう、めて<sup>て</sup>つたふし<sup>り</sup>おくきん引だち、下あまた、引お  
はします<sup>は</sup>ことまづちやくし内大臣のさ大しやうしげ  
もあり、ぢなん中なごんのうだいしやうむねもあり、三  
なんさんゐの中將ともゝり、ちやくそん少將これも

りすべて一もん三十よにん、いづれも御前にしかう  
ある、さて國をまもるしつけんには、あく七兵衛かけ  
きよゑつ中の次郎兵衛もりつぎ、其外とぎまのしよ  
さふらい、地にちやのしゆつしひまもなく、地うき  
みをうやまひ、うく奉る<sup>引大下</sup>三<sup>重</sup>いせい<sup>引上</sup>の、かんほと  
こ、こ、上ゆ、しけれ、ゆり<sup>地</sup>然る所に、こよしとも  
の三なんよりともこうは、平家の方にいけどられ、御  
命あやうくみへし所に、いけのせんにのなさけゆへ  
たすかりたまふぞめでたけれ、かくてせんにはより  
ともをとまなひて、きよもりのやかたにこそは出ら  
る、御所にもなればせんに仰けるは、此度よりとも  
をたすけますことなによりもつてうれしけれ、  
ことに我子馬の介によくもにたる子なるゆべ、いと  
どふびんに思ふなり、なごりおしくは候へ共いづの  
國へ下るならば、おさなき人のことなれば道すがら  
よくくいたはり<sup>ふ</sup>い<sup>ふ</sup>るましませと<sup>うれ</sup>い<sup>い</sup>なみだにくれ  
てぞ、仰ける<sup>持</sup>こはきよもありこう聞召、よきにはからひ  
申へし、御心やすくおぼしめせせんにはよしを聞召  
うれしう候いる人々と<sup>は</sup>お<sup>と</sup>し<sup>お</sup>御てんの、さしてぞ入た  
まふ、こ<sup>は</sup>扱其後彌平兵衛をめされ、なんぢはよりと

もをくそくしいそぎいづに下るへし、それ／＼と有ければ、むねきよかしこまつて候と、地よりも公をうくともなひて<sup>り</sup>おくやがて引下御前を引立<sup>ニ</sup>にけり、<sup>ニ</sup>はことかゝりける所<sup>ニ</sup>にゑつちうの次郎兵衛もりつぎは、御前のみ合申上る此比らく中にもんがくと申しやもんほしいまゝにがいをふるまいきんりせんとうをもおそれずほういつむぎんのあぶれもの、其まゝさしをき候は、國どのさはぎと成べし、いそぎ御ざいくわ然るべしとぞ申上る、きよもりこ<sup>ニ</sup>う聞召、それはゑんどうむしやもりとをが入道してもんがくといひしなり、さやうの物とはしらざるにはうにそむきしかくそうかな、いそぎめせとの上いなり、地うけたまはり候と、うくやかて<sup>り</sup>下つかいを引立<sup>ニ</sup>らるゝ、<sup>ニ</sup>はこともんがく何ことやらんと、つかいと打つれ出らるゝ、きよ盛こ<sup>ニ</sup>う御らんしていかにもんがくなんぢは出家の身としてらく中らくくわいの人をなやまし、あまつさへいんの御所にてのらうせきいさゝかもつてかくれなし、いかに／＼と上い有、もんがく承はり是は思ひもよらぬ御じやうかな、それがしらく中の人をなやまさんやうもなし、其うへいんへ参りしことさらさ

らもつておぼへなし、たれ人の御さたぞとさしうづむいてぞ、おはします、其時より次すゝみ出、いかに御ぼう、人もなけにのたまふな、御へんほうぢう寺どのにてのらうせき、天下にかくれなきことなり、くわんじん帳をぢさんしさま／＼のあつかう、其外のひがことひとかたならぬこと共なり、ちんしたまふな御ぼうとてはつたとにらむて申ける、もんがく大きにいかつて、いかにもり次、一々しやうこもなきことをなんち一人すゝみ出、法師にちじよくをあたゆること、いきては何のせんあらぬ、いで／＼おのれめに物みせんと一もんしにとんてかゝる、御せんの人々取とゞめこはらうせきとせいしける、もり次きつとみてゑゝゑせたるほうしのふるまひやと<sup>き</sup>ふし、<sup>ニ</sup>かんら／＼といろぞわらひけるもんがくいよく／＼たまりかね、につくいおのこのことばぞと、かけ出／＼したまへ共、人々にへだてられ、せんかたなくもひかへけり、きよもり公御らんして、扱もおこの法師かな、それがしがめのまへにてかゝるしわざをするうへは、らく中のらうせきおしはかられたる事共なり、いそぎるざいにしよすべしとて、國ずみをめされ、なんぢ

はもんがくをめしつれいづの國へ下るべし、それそ  
れと有ければ、リ、承はり候ともんがくを うくひつ立  
はるおはるおいづの、國へぞ下りける、地扱それよりもきよ  
もり公、地御ぎを立たたまひければ、おの／＼おいと  
ま、うくたまはりて三重やかた／＼へ引上歸らる、引ふ引ふ  
し是は扱置、地國すみは、もんがくをともしなひて、わ  
たなべよりもふねにのり、ともづな切ておし出し、き  
びしくけいごをかためける、四方のうくうらさと打す  
ぎて、やう／＼こがれ行程に、こ遠江のなだをすぐ  
る折ふしに、あくふうしきりにふきたて、リ、なみに  
ふなばたた／＼こゑ、きもたましるも身にそまず  
すいしゆかんどりこゑをあげいか、はせんとさけべ  
共、こもんがくはさはがすして、ふなばたをまくら  
としはるを、たかいびき、してぞおはしける、こかん取  
あまり腹をたて、いかに御ばう、かなはぬまでもかや  
うの時はぎやうりきいだしつゝ、我々をたすくるや  
うにしたまへと口／＼にぞ申ける、もんがくやゝあ  
つておきあかり、何を申そなんぢら、たゞおほように  
やすめ／＼といひすて、リ、又ふなばたにぞふした  
まふ、日のくるゝにしたがつて、風はいよ／＼ふきし

きり、よせくるなみはふなばたを打こへて、只今かい  
ていにしづむとみへて、はるなはるないくる、心ちはなかりけ  
リ、ふねはすこしもゆきやらす、おなし所にゆら  
れつゝ、引なみにまかれめぐること、しやりんのこ  
とくにみへにけり、せんちうの人々はみな一どに手  
を合せたすけたまへやなむあみだ、おたすけあれや  
うく御ばうとて、はるおおめき、さけんでいたりけり、  
リ、もんがくはおとろきたまふけしきもなく、いゝあ  
らおもしろいのいろかいしやうとはつみしばしはやして  
おはします、こせん中の物共是を聞扱／＼にくきは  
うしのいひことや、せんゑの身にて有なればじゆず  
おしもんできやうをよみ、いのりたまふべき人のさ  
はなくて、おもしろとはやしたまふは何ごとぞ、あの  
心にてこそながされたまふはことはりやと、皆一ど  
うに申けり、其時もんがくおきあがり、いかになんぢ  
ら、あまりにたへかねかなしむに、いで／＼風をやめ  
てゑさせんと、ふねのへさきに立あがり、リ、びせめ じゆ  
ずさら／＼とおしもふで、引にうをだいがいけしこ  
くふう、すいごせんほうひようだらせつ、きこくごち  
うにやくうないし、一人しやうくわんせおんと、たつ

からかによみあげ、こいかにりう神たしかにきけ、  
このせんちうにだいくわんおこすもんがくかのり  
たるをしらざるかわれようせうの比よりも毎日せん  
じゆきやうをどくじゆし、くわんおんのひぐわんを  
たのむなり、さればもんがくをしゆぐすべき所に、あ  
まづさへなみ風を立、人をくるしむきつくわいなり、  
もしくきかぬ物ならはそれがしが行きにて、か  
いていの其内をひしほになさんとたまひて、かい  
しやうをにらみ付大きにかつて申さるゝ、りかいもん  
かくの一しん、引天道にやつうじけん、なみ風たちま  
ちしづまれば、こくわう明かくやくたる日りんのふ  
ねのへさきにけんしたまへば、たゞはく中のことく  
なり、其ひかりをみ奉ればどうし一人ましゝたり、  
もんがく是を御らんしていか成人ぞといたまふ、  
有がたやたへなるみこゑのきこへつゝなんぢ大ぐわ  
んをおこし人をすくわん心ざしこそしゆせうなれ、  
一たんの事によりるにんとは成つれ共、やがてきこ  
くうたがひなし、なをく行すへまもらんと、りかい  
たちまちくはんせおんとあらはれ、はくうんに打のり  
てくもいはるかにとびさりたまふは有がた、かりけ  
る次第なり、りかいせんちうの人々は、此よしをみるよ

りも、扱々もんがくはたゞ人ならぬ御そうと、いつれ  
もきいの思ひをなし皆くくはいはいいたしつゝ、す  
いしゆかん取よろこびてかんおもかぢ、とがしとりかぢこぎ  
行は、ふねはいつにそ付にけるかの、もんがくのきや  
うりりふしきなりける次第やと、上下ばんみんおし  
なへみなかんせぬ、いろものこそなかりけれ

## 第二

さる程にこ兵衛の介よりともはいづの國のるにん  
となり、いとうの入道介ちかにあつけれ、ふいろかい  
なき月日をうくおくらるゝ心の、としはるゝ内こそむねん  
なれ、こかくていとうの入道すけちかは平家につか  
へ奉り、いせい國中にふるいかたをならぶるものも  
なし、され共げんし代々の家人ゆへ、むかしを思ひ出  
しつゝ、よりともをよきにいたはり奉る、然る所にす  
けちかはこんど都の大ばんにあたりつゝ、たひのよ  
ういをしたまいて、よりともにくれいきをのべ都  
を、さしてそ引三上らるゝ、是は扱置、こは爰にすけち  
かのそく女にわかのみへと申せしは、なさけ有ける

ひめなるが、詞父ざいはんの其内によりともになれ  
 そめて、地ひよくのちぎりあさからす、地二世のゑん  
 とぞなりたまふ、はさる程によりともはわかのまへ  
 もろ共に、地ひろゑんに出たまひ、にはのうけしき  
 をみたまふに、きくのこずへもうくはるめきて持いり  
 花かにしきか持くれなゐか、うたひぬつてうめむの花  
 がさに、てる日をいとふ、つきこざくらの地いとあい  
 らしき花のかほ、みるに心もうくわかくさの下いろつ  
 まもこもれり、下地われも又、ふかきちぎりをうくすみ  
 れぐさ君下といもせはかはらじと、ふしちかひを立て、  
 下筆つばな、いろもほひもくちんてうげ、のきは  
 をひつさそふ、上はる風にゆりゑた先うごく、地あおや  
 ぎは、いろなふみ事やといはつゝし、につことわらひ  
 うくわかのまへはつしはしななめておはし、ます、より  
 とも御らんしていかにわかのまへ我ひなのすまいと  
 いひながら御身にうきをなぐさめられうれしくは思  
 へ共、はけにやうき世のならひにはあだなる年の  
 うつりきて、地きのふの花は、けふの夢つなはかなき  
 うきみなからへて、地さとらざるこそおろかなれ、  
 ことわかのまへは聞召君の仰はさる事なれ共、わらは

かくて有うへは、御みやづかへ申さんと、地さまたの  
 もしくのたまひて、よりともをうくともなひててん中  
 さしてぞ三重入たまふ、ゆりかゝる所には、いとうの入道  
 すけちかは大ばんやくをつとめつゝ、本國にかへり  
 すぐにやかたに立入、みだい所にたいめんし聞はよ  
 りともわかのまへふうふのゑんのむすびしこと、道  
 にてほのかに聞て有、誠にて有けるかいかにくゝと  
 申ける、北のかたは聞召さすがけいぼのことなれば  
 よき折からと思ひつゝ、されはそのことわかき人の  
 ことなればたれしる人も御ざなくて、いつその比よ  
 りなれそめて今はしたしき中となり、はや一年もうろ  
 すぎ過とみいと念比にそかたりけれ、は介ちか聞  
 て今の代におほき其中にけんしのるにんをむこに  
 取、平家のかたへ聞へなはかうくわいす共かいあら  
 し、とかくより朝をしのびやかに打てすてもしも都  
 へ聞へなは、びやうしとひろういるいたさんとことも  
 ふしなげにそたくみける、はきたのかた聞召尤仰は  
 さにて候へ共、かやうにふかき其中をむけにうたせ  
 たまふことさりとほなさけなき事共なり、ひらにと  
 まらせたまへかし介ちか聞てなに命をたすけとや、

中／＼思ひよらぬことそのきたまへとさを立て家の子せう／＼よび出しかやう／＼の次第なり、かまいてあまし申なと、<sup>か</sup>念比にいひ付て其日のくるゝをうく待けるは<sup>き</sup>なはかな三重かりける<sup>上</sup>ゆりしだいなりさるふし程に<sup>は</sup>わかのまへ此由をつたへ聞<sup>といは</sup>こより朝にしらせんと立出たまふぞあはれ成ひめ君入心にいる思召すは、<sup>かん</sup>此こと君にしらせなは父にむかふてふかうの<sup>はる</sup>又しらせすば、はるちぎりをきつる下かねことのばる皆いつはりとなりやせんかんあゝうらめしのわが身やとゆりしはし、中なけかせしたまひ引ける、<sup>本より</sup>けにまことおや子は一世のちぎりなり、ふうふは二世と聞なれば、<sup>はる</sup>君にわかれ參らせてかんあとにながらへ何かせん、<sup>はる</sup>せう有物はしのもとひ、あひへつりくのことわりをおとろくべきにあらざれば、地きみのめいにかはりつゝ父うくのしんゐもはらさせんと、思ひさだめてひめきみはなみだながらにそれよりもよりともこのうくおはします、<sup>かは</sup>御まへを、下さしてそ引出らるゝ、<sup>は</sup>ことよりとも御らんしてこはうつゝなき御ふせいにかに／＼と仰ける、わか<sup>い</sup>のまへはかほふり上、<sup>かん</sup>あゝ扱々はつかし

き申ことにて候へ共、<sup>かん</sup>いはるわが父介もかはいか成天まの入かはり、<sup>かん</sup>君をこよひ打奉らんくわたての候へは、色つゝむにあまる我思ひ<sup>かん</sup>ふい何と成なんかなしやと<sup>ふし</sup>涙と共にのたまへは、<sup>は</sup>ことより朝大きにおどろかせたまひ、よくこそしらせたまふぞや、介ちかにみはなされかゝるごにおよぶこと、思へは思へはうらみなし御身共に打しにしがきちぎりをむすぶべしと色涙をはら／＼／＼／＼とぞながさるゝ地ひめ君は聞召<sup>かん</sup>あゝ、おろかの君の仰やな、<sup>はる</sup>いかにも命をまつとふして、<sup>地は</sup>ひそかにおちさせたまふべし、<sup>はる</sup>君は天下のぬしと、なるべき御身にて、打じにせんとおほしめす、<sup>はる</sup>御心こそ<sup>下い</sup>おろかなれ、<sup>はる</sup>わらはふだひのものをなれば、<sup>は</sup>ことより君のせんとに立事はねがふ所のさいわひなり、<sup>は</sup>ことよりひらさ<sup>は</sup>らおちさせたまふべしさりながらわらわがしやうぞく召れつゝ、女のすがたにさまをかへ、おちさせたまへと申さるゝ、より朝は聞召いやとよ御身をのこしをき、さらにおつべきやうもなしと、打じにと仰ける、ひめ君は聞召<sup>かん</sup>のふいかにわか君さま、<sup>はる</sup>いひかいなき御心、<sup>はる</sup>みづからふびん下に思召、<sup>は</sup>ことより打

しにと有事は忝は候へ共、我身のためとおぼすなら、  
へんしもはやくいとおちさせたまへとほるなことばを  
つくして申さるゝ、はもりなかも大きにあきれてい  
たりしが、扱もくひめきみの御心中申も中くお  
ろかなり、いかに我君御なげきは尤なれ共、ひめ君の  
仰にまかせ一まづ御しのびしかるべしと申上る、頼  
朝今はせんかたなく、さ程にすゝめたまひなば、さあ  
らばしのびおちゆかん、かんあゝさりとはうらめし  
や、はるこよひわかれて又いつか、かんあひみんことも  
かたいとの、はるよるべなぎさのすてをぶね、かんとま  
りさだめぬ、うき世やとふしし、しばし、なけかせたま  
ひ持ける、扱地有べきにあらざれば、袖とそでとの露  
なみだ、おちさせたまふ、うく心の内いろなあはれと、  
下引いはんかたもなし、地それよりもわかたまへ、はこと  
頼朝公を思ひのまゝにおとしをき、今は心やすしと  
て、か、御すかたにさまをかへ、よせくるてきをうく待  
たまふ心の内こそきない三重上ゆゝしけれ、ゆり是をはしら  
で、地介ちかははこ、らうどう共を召ぐして、よりとも  
のおはします、やかたへこそはよせにけり、かりまひかも  
とよりひめ君、かねてこしたることなればより朝に

さまをかへ、なきなたをかいこふて、ひるゑんに立い  
で、よせくるてきを、んきまちいるつむりたまふ、介ち  
か是をみるよりも頼朝と心へて、あれあますなと下  
ちすれば承はりて候と我もくくと切てかゝる、ひめ  
君なきなたふりまはし、八方をかけやぶり、とうな  
か、ひやほそくびさうのこて、あたる所をうくさいわい  
にはらりくと三重きりふしゆり引たまふためしまれな  
る、地次第なり、りか、され共てきは太せいにて、入かへ  
入かへせめければ、かなふへきやううくあらすして  
はるなついに、打しにしたまひける、はこと介ちか是をみ  
るよりも、しすましたりとよろこひ、たいまつふつて  
みてあれば、頼朝にてはあらずしてひめきみがくび  
にて有ければ、介ちか大きにおとろき、より朝をたす  
けんため身かはりに立けるかな、にくき女の所ぞん  
かな、げんざい父をそむきつる天はつ爰にあつた  
り、扱くせひなきこと共かないかになんぢら、頼朝  
いまだとをくはおつまじき、はやくおつけ打と  
めよと、せめい、らうとう共に申付、あとをしたふてお  
つかくるかの、介ちか心の内、ふとうなり共中く  
申斗はなかりけり

### 第三

かくて其後<sup>は</sup>よりとも公はわかのまへのちりやくにて、あやうき所をしのひ出、よはにまきれておちたまひもんがくのおはしますひるがこしまに立こゑ、すぐに内に入れたまへは、もんがくやがてたいめん有、只今のらいいんふしきさよとぞ申さるゝ、賴朝は聞召誠に是までまいる事べちのしさいで候はず、きはうはほうでうの四郎とき正とこんしのよしを承はる、しからばそれがしをときまさ合せてたべ、ばんしはたのむとのたまひて、介ちかゝむほんの事、わか<sup>ふし</sup>のまへの有さまを、はしめおほりをうくかたりつゝ、<sup>ふし</sup>涙にくれさせたまひける、<sup>持</sup>もんがくもくねんと聞たまひ、扱もく介ちかは道をしらぬくにんなり、又わか<sup>ふし</sup>のまへは女しやうとはいひながら、しゆ君のゆくゑを思ひつゝ、すてがたきめいをすて、御身かはりに立ことは扱くやさしき心かな、<sup>ふし</sup>おやにまさるうくしんていと<sup>み</sup>共になみだをながさるゝ、ことよりはともは聞召き方のたまふこと

く、介ちかは代々けんしの家人なりおつとの心をもつならはそれかしを打はたし平家へちうしんいたさんとの其くわだては有ましき物をわか<sup>ふし</sup>のまへは女と申せ共、一やのなさけを思ひつゝ、我身にかはり申こと介ちかにはるかまさりし心ばへ、思へばくふひんなり、我も一所に打じにと申せしをせひにとめ申つゝ、命かはり申事露ちり程もおしからし、ふだひしゆ君にかはる事扱くわほうの我身やと、ひとりいさみし心さし<sup>ふし</sup>いつの世にかはわす<sup>う</sup>れんと<sup>ふし</sup>いしはし、なげかせ、たまひける、<sup>は</sup>もんかくはみたまひて御なけきことほりなり去ながら、もはやせんなきことなれば此うへはそれがしに御まかせ候へし、ほうでうへ立こへ何とぞ頼申へし、地いざこなたへと申つゝ、賴朝公をうくともな<sup>は</sup>て<sup>く</sup>ほう條、下へやかたへいそがるゝやかたになれば、<sup>は</sup>あんないこふて入たまひ、時まさ<sup>は</sup>たいめん有、其時もんがくいかにときまさ殿かやうくの次第なり、き方を御たのみなさるゝなりとはしめおわりを申つゝ、ばんしはたのむと申さるゝ、ときまさかうべをちに付扱もくみやうがなやかゝる折からならずして御ら

いりんは候はし、三代さうおんのしゆくんと申、それ  
 かしごときの者をたのむとの御ことは、何しにそり  
 やくに存へし、御心やすくおぼしめせとさまたのもの  
 しく申さるゝ、其時頼朝扱々たのもしきしんていか  
 な、われようせうの時よりもおやのかたきを扱おふ  
 せ、ほんもうとげたく思へ共時いたらねはちからな  
 しさいわいとしまさにたいめん申此うへは、すいぶ  
 んちりやくをめぐらし、平家をほろほす手たてをは  
 よきにはからひたまへ、ひたすらたのむと仰ける、と  
 きまさ承り、誠に上いのごとおごる平家をほろほ  
 し、よしとも公御きやうやうにほうせんと思召さる  
 る御しんてい、尤こふこそ有べけれ、くわん八しうの  
 其内は皆々せんぞの御家人なり、君思召立せたまは  
 はたれかいひ申へし、さあらはもんがくは京都の  
 あんないよく存のことなれば、是よりひそかに都へ  
 のぼり、折をうかゝひゐんせんを申うけ、いそき下ち  
 やくましませいかにくと申さるゝ、もんがくは聞  
 たまひ是はよろしき御はからひ、いかにも都にのほ  
 りつゝゐんせんをちやうだいし、やかて下り申さん  
 と、いろ頼朝公に御いとま申上、ときまさにくしきだ

いして都を、さしてぞ引三重上らるゝ、ゆり別地しつ是は扱置、  
 こと爰にときまさの御そく女さくららのまへと申せし  
 は、こと地げにやうきひの花のかほ、りつきうのふんたい  
 も、かんしよくなきがごとくにて、地うくせいしの二女  
 とく申共はつ是にはいかでまさるべき、はことある夕  
 ぐれの事成に、上ろうたちを召あつめ、御ひさうの手  
 がひのとらをめしよせ、地こひによるべのいとふか  
 く地心をそむるくれなひの、つなをうく持せたまひ  
 つゝ、しばしたはふれたまひける引、いととりあいはせ  
 にすむとり木にとまる人はなさけのこんぎやらゝゝ  
 あつきやらこんぎやら、ここんぎやらゝゝあつきや  
 らこんぎやらこ、下にすむふしなみにゆられてあ  
 なたへアツざらり、こなたへうくざらりとはつとらをめでさ  
 せたまひける、はこといかに女房たち、此からねこと申  
 は戀ぢのたねとなる物ぞ、地かのかしはぎのゑもん  
 のかみ、女三人の宮をみそめつゝ、うたこひちにまよ  
 ふうたかたの、ふるき思ひを引つなのながきちぎ  
 りをむすひしも、此からねこのゆへぞかし、いろあゝ  
 かはゆらしやとうくのたまひてはつしはしたわむれたま  
 ひける、はことかゝりける所に頼朝は北條のなさけゆ

へ、しのびてやかたにましますが御さびしくやおぼしけん、こゆみにこやをうく打つがひまとをいてこそ<sup>三重</sup>おわしけれ、<sup>引</sup>り<sup>かい</sup>ひめ君まがきのそともより此有様を御らんして、<sup>は</sup>こ<sup>め</sup>のとのむめがえ召れつゝ、いかにむめがえ、只今あのやかたにてやうきうあそばす少人はいか成方ぞと仰けるめのと承はりいまだしろしめされずや、あれこそけんじの大將よしとの三なん、兵衛のすけ頼朝公にてましますが、此所のるにんとなり、父上様を御たのみ候と有のまゝにぞ申ける、ひめ君は聞召、扱はさやうで有けるかと、地其まゝ思ひをかけたまひ、かくいつくしき若君の、かゝるひなの御すまひ、さぞ物うく思召さん、さよのねぎめのひとりねに、たれなぐさむるうく物もなく<sup>は</sup>つ<sup>さ</sup>こそさびしくましまさんいとおしのうく御事やとふししばしなかめて、おはし<sup>持</sup>ます、<sup>は</sup>こ<sup>め</sup>ひめ君あまりにたへかねていかにめのとせめての御なぐさみに地この花をうくまいらせよと<sup>を</sup>く<sup>さ</sup>くら<sup>の</sup>、下ゑだを引たおらせて、ひそかに御ふみあそばして、<sup>こ</sup>は<sup>な</sup>のきとめをおしつゝみ都のきみさままいるちらぬまにとかきたまひ、めのとにこそはわたさる

るむめがゑはなをうけ取て、地より<sup>う</sup>く<sup>お</sup>はします<sup>り</sup>なくやかたを引、<sup>下</sup>さして引そいきける、<sup>地</sup>御そはに成ぬれば、<sup>は</sup>こ<sup>め</sup>いかに申さん都の殿、かゝるはいしよの御すまひ御つれゝに、ましまさんとひめ君の御かたよりはなを一本こされたり、是ゝ御らん候へとやかて御前にさし出す頼朝は御らんして何時まのそく女より御いんしんと候か扱々あづまのはてまでもかく心有上らうの御しんていこそやさしけれ、それこなたへと取ておそしとみたまへば、花に御ふみそへて有、頼朝はつとおぼしめし、御ふみをみたまへばさもじんじやうなるふてだてにて、おもひのかずをかきたまふ、<sup>こ</sup>は<sup>な</sup>い<sup>ろ</sup>たまさかに一め見しよりこひぐさの、露もおもひもみだれがみ<sup>い</sup>ろ<sup>こ</sup>いひかいもなきしづのめにせめてなさけはありそうみ、こかるゝおもひをといたまへみやこののとのかきとどめ、ちらぬまにとすゑに有、よりともは御らんしてさてもゝいつくしきしゆせきやな、ちらぬまにとあそばせしはとくおれといふことか、やさしのひめの心かな、かへしをせんとおぼしめすが、いやゝかやうのくやみにこそ、おもはぬなんぎにあふぞと

て心で心を取なをし、いかにめのとかへりて申さり  
 やうは、御かへしいたしたくは候へども心にふかき  
 のぞみあり、其うへはいしよのことなればよそのみ  
 るめもつゝましや、かさねてきたりたまふとも中々  
 たいめんかなうまじとさもあらゝかにのたまへば  
 むめかへめんばくうしないて、地すごゝとゝうそ  
 れよりもはる<sup>を</sup>やかたに、こそはかへりける、<sup>こと</sup>ひ  
 めきみはましかねさせたまひつゝ、はしちかく御出  
 有、いかにめのと御かへしはと有ければ、むめかえな  
 にとともにはなく、中々ならぬこひゆへに心つくさ  
 せたまふなとはしめおほりを申あくる、ひめきみは  
 聞召さてゝかゝるわか君の、こひちをしらせたま  
 はぬかや、よしゝさやうにのたまふ共、またこそふ  
 みして參らせんと地よにうらめしくゝうちながめ  
 ば<sup>を</sup>はるやかで、内にそ入たまふ、<sup>こと</sup>はさる程によりとも  
 はひめきみの御ふみをととり出し、さてもゝはつかし  
 やかゝることのあるよしをときまさきこへなばい  
 かなるやしんかいできなんとしばしあんじておはし  
 ます、かゝりける所にめのと藤九郎もりながおも  
 はずしらずきたりしが、よりとも御ありさまを見

まいらせ、君は何とやらん御物おもひのいろみへさ  
 せたまふ、ふしきさよとを申ける、よりともきこしめ  
 しつゝむにあまるわが思ひ、何かかくし申べき、かや  
 うゝの次第にてときまさの息女よりふみをいつつ  
 うこして有、さいせんすけちかに中たがひ又此そく  
 ぢよのなさけゆへときまさになうとみられてあるなら  
 ば、<sup>は</sup>なにとなるべき、<sup>は</sup>ふしわが身ぞとふししばしあぐま  
 せたまひける、<sup>は</sup>こともりなが聞てこはめでたき御こ  
 とかないかにもしのばせたまひつゝひめ君と一所に  
 ならせたまへかし、またすけちかと時まさのしんで  
 いは中ゝもつてさういなり、君ひめきみとふうふ  
 にならせたまひなはときまさきゑつうたがひなし、  
 其うへそれがしはこよひふしぎのれいむをかうふり  
 さふらふ、きみはやぐらがだけに御こしをかけられ  
 なりつなはこがねの御さかつきをすへ、もりながは  
 しろかねのてうしをもち、御酒をすゝめ申せしに、き  
 み三度きこしめされてのち、三しまへ御さんけいあ  
 り、ひだりの御あしにては、そとはまをふみ、右の  
 御あしにてはきいかしまをふみたまふ、さて左右  
 の御たもとは月日をやどし奉り、こまつ三本かし

らにいたゞき、南へあゆませたまふと見奉る、ふしき  
なりとぞ申ける、よりともはきこしめしそれかしも  
ふしぎの夢のつげ有し、たとへはこくうより山ばと  
三ばとび來り、よりともがかしらにすをくひ子をう  
むとみつるなり、いかにく<sup>く</sup>と有ければ、もりなかつ承  
はり、さてく<sup>く</sup>めでたき御れいむ、まづそれがしかゆ  
めにそとのほまよりきかいがしままでふませたまふ  
御こと、是六十よしうをたな心におさめさせたまふ  
御すいさう、又山はとの子をうむ事は御しそんはん  
しやううたがいなし、かゝるおりからに御ゑんをむ  
すばせたまふこと、かへすく<sup>く</sup>もうれしけれ、ひらに  
う<sup>う</sup>く御しのび候へと<sup>はるを</sup>とし<sup>は</sup>ことばをつくし申ける、こと  
よりともゝさすがいわきにあらされば、地もりな  
かにいさめられひめ君のおはします<sup>いるお</sup>くり下やかたへ、し  
のばせたまひけるやかたになれば、<sup>は</sup>ことめのとのむ  
めがえよび出し<sup>い</sup>かにめのとさいせんひめきみより  
御ふみたまはりしを其まゝさしをき申ことおもへば  
思へば後くわいなり、それゆへしのび参りたり、よき  
やうにはからひ、ひめ君に合せてたべ<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>のといか  
にと仰ける、<sup>は</sup>ことむめがえ承はりさいせん御かへり

事なかりし事、ひめ君うらみさせたまひしなり、さり  
ながらかやうにたのませたまふうへは、ずいぶんよ  
きやうに申つゝ、やがてあはせ申べし<sup>はるを</sup>地こなたへ御  
入候へと、よりともをうしともなひて<sup>はるを</sup>つほね  
をさしてそ入にける、地おりふしひめ君は、地物さひ  
しくおほし召いとによる物ならなくに、<sup>く</sup>地うわかれ  
しの心ぼそくもことのねの、地おつとを思ひこふと  
よむさうふれんといふきよくを<sup>はつ</sup>しはし引てそ<sup>へ</sup>お  
はし、ける、<sup>は</sup>ことむめがえよき折からとおもひつゝ、  
なふいかにひめ君さま、たゞ今みやこのとの様より  
さいせんの御かへりこと参りたり、是々御らん候へ  
とまことしやかに申ける、さくら<sup>の</sup>まへふり歸りみ  
たまへば、よりともこそはきたらせたまふ、ひめきみ  
色はつとおぼし召<sup>はつ</sup>さしうつむいてそおはしける、  
<sup>は</sup>ことよりともは御らんして御うらみもつ共なり、とく  
に御かへりこと申たく候へ共、われはるにんのこと  
なれば人めをつゝむばかりにて、御かへしもせざり  
しが、おもへばきみの御心身にあまりてのうれしさ  
に、むめがえをたのみつゝ、是まで参りさむらふに、地  
せめてなさはあかしがた、しほひにみへぬおきの

石、かわく、うくまもなきわか袖の、地ほす日をいつとしらなみの、地よるべのうきをうくとい<sup>下</sup>つみたまへなふ上らうと仰ける、<sup>は</sup>ことさくらのまへはきこし召おろかのきみの仰かな、地ほそたに川の丸木ばし、地ふみかへされてうさつらさ、たれにかたらんもしほぐさ、かきあつめたる身のはちをいつの世にかはほし月よ、あけなば人のとがめん<sup>は</sup>に<sup>み</sup>おかへりあれとぞ申さる、<sup>は</sup>ことよりともめんほくなくもおほし召、御かこちことはりなり去ながら、身にあやまりのあればこそかやうに心つくしこと、地ねもせでよはを只ひとりやみはあやなし<sup>つき</sup>ゆりむめかえを、地ひたすらたのみ申つ、<sup>は</sup>是まで参り候ぞ、何と仰有とても、こよひ一やは御そばを、はなれ申事あらじと<sup>み</sup>つただしほく<sup>は</sup>とそぬれかくる、<sup>は</sup>ことひめきみはきこし召おかしの殿のことばやなこよひばかりとのたまふはあけなばはちをあたゑんと、おぼしめさる、御心おもへばく<sup>は</sup>はらたちや、はやく<sup>は</sup>歸らせたまふべし、地さだめなきよのむらしぐれ、よそのこすゑのならいして、つれなくうらみたまふなよ、又と御めにかからじと<sup>み</sup>つそらめをしてこそおはしけれ、<sup>は</sup>ことよ

りとも今はことばなくいかにむめかえ何といひよるべきたよりもなし、ばんじはたのむと仰ける、其時むめかえなふいかにひめきみさま、みやこの殿のしのびぢもうはのそらにてさらになし、地ふたばのまつ<sup>は</sup>の千代かけて、かはらぬ殿の御心、あさくはおぼしめさるなよ<sup>み</sup>つひめきみさまとぞ申ける、<sup>は</sup>ことむめかえの中立にてさくらのまへも、御心打とけは<sup>は</sup>に、<sup>地</sup>いほやりとわらひたまひける、<sup>は</sup>ことよとも是を御らんじて、地世にうれしくぞみへにける、<sup>は</sup>こと其時むめかえはぢぶんはよきと思ひつ、御そばを立ければ、姫君そでをひかへつ、何とてかへり申ぞや、ひらにこよひはよもすがらなぐさみたまへと仰ける、むめかえ聞ておろかのきみのおもはくや、まだよひならば中立の是に相つめ申べし、もはや君と殿様はみづもらさじの御中に、わらはざしきになが<sup>い</sup>してさまたげなさんやうもなし、地あすこそ御めにかゝらんと、さもおかしげにうく申つ、<sup>み</sup>つめのとは内にそ入にける、<sup>は</sup>こと其時頼朝はひめ君の袖をひかへ、扱々つよき御心、かくなり申此うへは只何事もく打とけたまへとのたまへはひめ君は聞召我らこととき

の身のうへにかゝる御ぎよいの有うへは、何しにそむき申へしいさいなたへとのたまひて、やがて手に手を取りみて、めふしみ内をさして入たまふ、是ぞ誠の世の中の、戀のそめきぬ是成はと皆かんせぬ者こそなかりけれ

#### 第四

かくて其後、こと都もひなもこひにはなる、世のならひ、兵衛のすけよりともはさくらのまへになれそめて、あさからざりし中となり、今はうきことうちわすれ、もりながもろともに平家をうたんはかりこと、さま／＼かたりおはします、かゝりける所にもんがくはことゆへなく都にのほりゐんせんを申うけ、よを日についではせくだり、よりとものおはしますすぐにかたに参りつゝ、みやこの次第を申上るんせんをさし出し、よろこびたまへと申さるゝ、よりとも是を御らんじて、こはありかたき次第とて、てうすうかいで身をきよめ、いくわんたゝしくひきつくろひ、ゐんせんをうけ取三どちやうたいなされつゝ、おひら

きみたまへば、きよもり一るいをついたうし、しんきんをやすめ奉り、げんしの御代となすへしといさいこまかにかきおさめ、兵衛のすけへと有ければ、よりとも是をはいじゆして、こは忝き御こと家のめんばく世のきこへ、もんかくの御ほうし是にすぎたるうく事あらじとはるなよろこび、たまふはかぎりなし、こと其時よりなか申やう、誠にめでたき御事かな、このたびもんがくのはたらきとかふ申におよばれず、ゐんせんちやうだい有うへはくわん八しうの諸大名、みな／＼きみにつきしたがひ、御代ばんせいのはんじやうはたいいまのこと共なり、さりながら我君にいまださだまる北のかた御さなくて、おぼつかなく思ふなりすいさんなからそれかしぞんする次第をもんかくへ申へし、北條殿の御そく女さくらの前と申せしは、なさけ有けるひめと聞、しからはきはうのはからいにて北條殿にのたまひて、君と御ゑんの有なはいよくぐんせいつきしたが、い、ほんもうをとげたまはん、此こといかゝ有べきとひそかにこそはかたりけれ、もんがくは聞たまひ尤きはうのしんていじう／＼の御よしもおもひたまふはたうりなり、ぐ

そうもない／＼其むね存候へとも、いまだゐんせん  
 なき内は四方の聞へをはかりおもひながらもゑん  
 にんす、もはやゐんせんいたゞきし此うへは、たれに  
 はかり申べし、いかにもこのたんしかるべし、さり  
 なから我はほつしのことなれば、何とやらんにあは  
 ぬやうに思ふなり、御へんはめのとの事なれば此む  
 ねだんじたまふべし、其時それかしもよきにはから  
 ひ申べし、定めてときまさも一たんいはひのことも  
 有べきがたつてしいなばしゆびよく同心いたさるへ  
 しいそぎめしよせたまふべし、もりなが大にゑつき  
 して、さあらは北條殿を是へ呼よせ申さんうくいるまかりとやかて、  
 下つかいを持立にけり、こゝ時まさ何事やらんとつか  
 ひと打つれしゆつし有、御前にかしこまりもんがく  
 にたいめん有、さう／＼の御下ちやく都の次第いか  
 にかにと申さるゝ、よりとも御らんしていかにと  
 きまさ、君よりゐんせんをちやうだい申たり、是／＼  
 おがみたまへやと世にうれしくも仰ける、時まさや  
 がてはいしつゝ、こは有かたき次第かな、かゝるせん  
 じの有うへはへんしも早く都へのぼり、おごる平家  
 を打はたしけんしの御代となすべし、さて／＼もん

がくの御ちうせつあげてかぞへむやうなしと、よろ  
 こびたまふはかきりなし、もりなかもんがくよき  
 折からとおもひつゝ、北條にうちむかい、今我きみの  
 御いせいは出る日のごとくなり、されどいまだきた  
 の御方御座なくて是のみ心にかゝり候、はかりな  
 がらわれ／＼のそんし候は、さいわいときまさとの  
 の御そくぢよさくらのみへとわがきみと、御ゑんの  
 むすばせたまひなば、君もよろこびおほし召我々ま  
 でもたいゑつ是にすぎたることあらじと、さも念比  
 にぞ申ける、ときまさは聞召、仰もつともしごくせり  
 しかりとは申せとも、われらごときのむすめをはき  
 みへさしあげ申こと、あまりみやうがなきことゝも  
 なり、此ことにおひてはゆるさせたまへと申さるゝ  
 もりなか聞てきはうの御じたいもつともにては候へ  
 ども、君かやうにならせたまひひとへにきでんを御  
 たのみなさるゝうへはせひにおゐてわかきみをむこ  
 きみになしたまへ、ひらに／＼と申ける、北條もない  
 しんにはとび立程によろこべとも、一たん御じたい  
 申せしが、とかくはきみの御ためと、はんたん其方た  
 のむなり、君の御前をよきやうに御はからい候へと

さもゆゝしくもれいき有、もりながのめによりこ  
びて、君にもつぶさに申上る、頼朝もさくらのまへと  
はないくになれそめさせたまひければ、一しほき  
ゑつかぎりなし、かりもりなかがて内に入、ひめ君を  
うくともなひてはるを其まゝ、おもてに出にけり、地さ  
くらのまへも頼朝に、二世とかけての中なれば、わる  
びれたるけしきもなく、心にゑみをうくふくみつゝ  
はるをやがて、なをらせたまひける、其時に女房立地  
てうしかはらけ取出し、地千代萬代のかめの酒、地う  
くむ共つきぬ御中と、のふづうたふつさいつさゝれ  
つ、しうげんのうくぎしきをはなくやがて下とゝのへ、  
引たまひける、はこよりともは北條に打むかひ、かく  
一所になる上は御へんひとへにたのむぞと、御かは  
らけを下されば、時まさつしんでちやうだいし、こ  
は有がたき上いかなと、三ごんほして其後に、かくそ  
れかしの有うへおつ付君を御代に立、ほさのしんと  
なり申さんと、かりおどりあがりとひあがりよろ  
とはるをこび、たまふぞだうりなる、こよりともかさね  
て仰けるはいかにときまさ、平家ついたうの其ため  
ににんしじゆをあつめ申べし、東國のものともは何

れもさいそくにしたがはんや、いかゝあらんと仰け  
る時まさ承はつてこはおろかの御ぢやうかな、とう  
國はとうもかうけも君の御家人ならぬはなし、され  
ども平家を取てよりしはらく命をつかんため、一た  
んしたがふとは申せ共、君おぼし召立たたまは、東  
八か國の其内にいぎにおよぶ者あらじ、先々くわい  
ぶんを御まはししかるべしとそ申上る、よりとも聞  
召、其だんしうちやく申たり、かゝるじせつにあふこ  
ともひとへにしんりよのめくみといひ、其上おもふ  
しさいの有間、さくらのまへもろ共に、しのひて三し  
まの明神ゑさんけいせんと思ふなり、それくゝと有  
ければ、時まさ承りはつてともかくもとのたまへば、  
さあらはさんけい申へし、去なから人あまたにてあ  
しかりなん、かちゝにまふで申いるさんと、地さくらの  
まへをうくともなひてやかて引中三しやうぞく上りな  
されける、地しつさて其後に、地よりともは、地うひめ君  
行に打むかひ、めていかにさくらのまへ、かりそめな  
がら御身とはちよもかはらぬ中となり、世にうれし  
くも思ふぞや、大ひめ君は聞召といはわらはゝあづ  
まそだちにて、といはこひぢのわけもしらぬ身に、か

くなさけ有御ことば、何しにへだて候べき、其うへわ  
 らは御道しるべ仕り、御心をなくさめんと地世にう  
 れしけにたはむれて、地つれ立出させうくたまひける、  
いふし心の内こそ、たのもしき、地神にあゆみをはこぶ  
 身の、地かくもらぬ目かげ持のどかにて、地心にかゝる  
 入くも、なく、はやも代には、いつの山、下ふもとの  
 花のさきそろひ、はるつれなくみねの持松かえは、みつ  
 ひとり春をやおくるらん、地ふるいの持もりにうぐひ  
 すの、折しり持かほにこそ立て、うくあさいもならぬた  
 びまくら、ならべしすへは、つぎ長坂や、地こまのあし  
 なみしどろにて、しるもしらぬもたび人の、袖持打  
 はへてあまさかる、ひなにもこひのうくあればこそ  
はつはつねが原ときくから、に、地心うき立うすがす  
 み、地うはるのなごりにうくちる花の、七つかれ木坂をも  
 打過て、めふしむかふをはるかに、上ながむゆりれば、  
 はしめて、ハルみほの松ばら、本ゆの、きうつみどりのい  
 る色もせいたいに、地くものおびかと残るゆき、つもる  
 めい所のうくかすくは、下はつみげにおもしろきふな、よ  
 ばひ、地たごの入うみうくら、かにつなしほ木のさ  
 くら折持て、地たれにかみせんしおり山、いろをもか

をもたまつばき、八千世むすばん、うく我々がみつゑ  
 んなおかしき物もふて、地神にねがひもきみのため、  
 つねにするがの山道に、まてこそ持問んかりかねの  
うく引はる歸るも入おしき夕まぐれ、地月のひかりは清  
 くるふし、見がた、心をすましかく斗、本ふきよみりかた中なみ  
 の、せきもりとめず共、下月をみすて、地かたれかす  
 ぐへきと、口すさみ持つ、それよりも、四方の山く  
 うちながめ、つまもの共入に爰ははやみ、に今ぞ三し  
 まに付たまふ、地太夫かゝり扱神前にさんけい有、数のほう  
 へいさ、げつ、心しつかにふしおかみいるねかわく  
 は、いしんりきにおぐる平家をほろほし、げんしの  
 中、御代となしたまへ、それ神は人のうやまふによつ  
 てゐをまし、人はしんのとくによつてうんのそふ、  
 ひとへにじんぎくわう大のじひをあをぎ奉る、いる南  
 無引きみやうちやうらいと、きん一心にきやいをかけ  
 さてんしんせんを、うく下かう有、とめふしやかたをさ  
 して歸らるゝ引頼朝の御有様、たのもし共中々申、い  
 る斗はなかりけり

## 第五

かくて其後、<sup>は</sup>ことよりともは三しまより御下かうなされつゝやかたに入れたまひければ時まさ夫婦御むかひに罷出さうゝの御下向めでたきよし申さるる、頼朝一しほけうにいらせたまひばんしはふうふたのむとてゆたかにくらさせおはします、かゝりける所にうさみの三郎すけもち、はや馬にてはせ來りつゝしんで申上るは、たう國のちう人いとうの二郎助近は、せんぞの御おん打わすれ大ぼの三郎かげ近を一身になり、君を打奉らんとほうゝせいをもよふし候、其まゝすておかせたまひなばすこぶる大事に候と大いきついで申上る、頼朝は聞召、扱々にくき介近がふるまひかな、さいせんそれがしをうたんはかりこと、それさへ道をしらざりし、ぐにんなりと思へ其時いたらねはさしおきぬ、此たび大ばにくみすることぶだうといふもあまり有、かれらがおしよせ申共何程のことかあらんとたゞ大やうにぞ仰ける、時まさ承はつて、尤いくさのならひせいのたせうによらず、ひとつは將のはかりことゝは申せ共、大てきをみてあざむきすこしきにはおそれよと申ほんもん

候へは、先んせんにみげうしよをあひそへ御まはし候は、國々の御家人共そゝしにさんにう仕らん、此ぎいかにと申上る、頼朝公聞召、尤此ぎ然るへし、さあらはせいをあつめんと、御くわいぶんのあそばしゐんせんの相そへ、もりなかを召れつゝ、右の次第を仰付られはやとくゝと有ければ、<sup>か</sup>承はり候とて、やがてみげうしよをうけ取うく御前を立みうらをさしてぞ三重いそぎける、<sup>ゆり</sup>扱それよりも大助は、御ふれを聞よりも、一もんの召つれて、頼朝のやかたをさしてぞいそぎける、<sup>は</sup>御前になれはめしにおふじて參るよしつぶさにこそは申けれ頼朝きゑつかざりなく、よしあきらはらうたいのこと成に時をつさす來らるゝこと、悦び入と、のたまひて、御かわらけを下さるれば、大助やがてちやうだいし、御そんがんをはいしつゝ扱もゝ御父よしとも公によくもにさせたまふ物かな、いかに一もんの人々よ、おごる平家をはろほして源氏一とうの御代となしぶ將にあおぎ奉れ、あつはれゆゝしの御大將と大きに悦び申ける、かゝりける所にとう國のげんし共御くわいぶんをみるよりも、我おとらしとそれよりも、<sup>か</sup>皆ゝ

御前に下相つむる、まひつめ下先一番にいづの國の住人、くどうもちみつがちやくなん、かの五郎うさみの平太、同じく平六とをかけ、につたの四郎たゝつね堀の藤次ちか家、七郎むしやのぶ近、そがの太郎助のぶ、うつの宮の彌三郎ともつな、さがみの國のちう人、といの次郎さね平同じくしそくとを平おかさきの四郎よしざね、さなだの與一よしさだ、つちやの三郎むねとを、同次郎よし清、つゝるの二郎しんがいのあら四郎、やすだの三郎はる近をはしめとして名有大名卅き、其外の諸侍、何れも御前にうくしこうしてはつつれいぎをつとむぞゆゝしけれ、こ其時頼朝人々にたいめん有いかにかたゝ、せんぞのよしみを思ひつゝ、此度のさんちやくしんびやうの至りぞと御きけんよろしくのたまへば、何れもかうべをちに付て、か君をうやまひうく奉るはつじんぎの程こそたのもしき、こ頼朝かさねて仰けるは、かたゝをあつむること別のしさいに候はず、平家の一い打はたしたねんの本望たつせんと思ふなり、きけば大ばの三郎かげちか、いとうの二郎助ちか頼朝をうたんだため、是へよすると聞て有、平家をほろほす共はしめいく

さかみのちまつりにかれらをうたんと仰ける御前に有し諸侍、この由を承はり、本ノマかげ近や助近かゝ何事かしいださん、去ながらかれら二人のふみつぶし、門出いわひ申さんと、か何れも御前のうく罷立さかみを、さしてぞ三重よせにける、ゆり是は扱置、こさかみの國のちう人大ばの三郎かげちか、いとうの二郎介近は東國の大名共、日々に頼朝へはせあつまる由つたへ聞、らうてうのことくにて一身のさはぎとなり、いかゞはせんとぎやうてんす、助近申けるやうは、かやうにせいの付うへはのびゝにては成がたし、こなたよりもおしかけいまたせいのよせぬまにいくさいたすべし、いかゝはあらんと申ける、かげちか聞て何のさうだんまでもなし、このぎ尤然るへしさあらはせめかけ申さんと、か下ゝまでに申付、思ひゝの出立にて、あかはた風になびかし大手は助近か二千よき、からめてはかけ近一千よき、つがう其せいく三千よきいづの國へぞよせにける扱頼朝の御かたにはみうら北條ちはかづさといの二郎をさきとして家々のはたさし物其せいうんかのごとくにてさかみをさしてそよせたまふいづさかみのさか

い川に雨ちんたがひにゆきあひ時のころをぞあけにけるは、時にといの二郎さね平一ちんにすゝみ出只今よせ來る物共はかけちか助近とみ申たり、なんぢらけんしの家人にて君にゆみを引ことはせんたいみもんのくせ物なりいのちつがんと思ひなばかぶとをぬいてかうさんせよ日比のよしみには御前よろしく申べしいかに／＼と申ける、兩人こまかけ出しつゝ、立あがり、扱々にくきざうごんかなむかしは昔今は今、平家ちうをんのあきみちて頼朝打て參れとの仰をかうむりむかふたり、一人もあまさしとさもくわんたいにぞ申けるさね平聞ておのれ上をおそれぬぐにんなり、しゆくんのまへもは／＼からずでしやうでむかふきつくわい者あれおつちらせと下ぢすれば、<sup>かり引か</sup>り、はやりおのくわんとうせい、われおとらしとくくみだれ入いくさは花をそ三重ちらしける、いくさな**か**ばのこと成に、<sup>は</sup>平家方より只一きひをどしのよろいに梅の花をうしろにさし、一ぢんにすゝみ出是は大ばの景近がらうどうに、いなげの二郎ともきよといふ者也、げんし方の侍に我と思はぬ物あらばげんざんやつとよばはつたり、又みかたの中よりもくろ

いとおどしのよろひをき、大長刀をかいこふでまつさきにすゝみ出、人おほき其中になんぢ一人罷出、かうみやうがほになのりけるはおゝゆかしくも思ふなり、其うへ御へんがさしものに梅花を一もとさしけるは、花やかなるといわせんためか、とも清聞て、さればむめは花のあにとはいひ、又はてきにあふとひとしくさがけいたすしるしなり、扱きでんはいか成物ぞ與一聞てなんぢいまだしらずや、おかさきの四郎よしざねがちやくし、さなだの與一よしさだとしつもつて十八歳、其方がばいくわをはあらしとなつてちらすべし、いざしやうぶをけつせんともんしに打てかゝる、<sup>り</sup>いなげも聞ふるつは物にて引、ゐんにかゝればやうにうけおふつまくつつしはししやうぶはなかりけり<sup>は</sup>、いざくまん尤とてうへになり、下になり、いまたしやうれつみへざるか與市もとより大力わざとしたてに成ければ、ともきよしすましたりと悦びちからあしをふむ所をゑいといふてはねかへし、やがて上に打のりかゝりいかに友清あらしは花のとかぞとてくびふつゝとうちをとし太刀のさきにつらぬき是みよみやかた／＼日比かうけ

んはきつるいなげの二郎ともきよをさなだの與市  
 がうつたると、<sup>か</sup>大おんじやうによははりみかた  
 のぢんへぞ引にける、<sup>は</sup>こ<sup>と</sup>かゝりける所にふしきや  
 てきぢんの方より其せい五百きばかりにて御ぢんの  
 中へ入にけり、人々いかにとみる所に大將一人す、  
 み出、是はたけ山のしやうしげたゞ御みかたに  
 參り候とつく本ぢん、<sup>そり</sup>さしてぞ入にける、<sup>は</sup>こ<sup>と</sup>大ばが  
 ぐん兵是をみて、いかにかたゝか程せいの付うへ  
 は、いかでかなひ申すまいざゝはやくのがれん  
 と我もゝとおちにけり、かげちか今はちからなく、  
 扱々おくひやうしごくのやつばらとはかみをしてぞ  
 いたりける、さなたの與市是をみて一もんしにきつ  
 てかゝる、かげちか心へたりと、しばしかほどはたゝ  
 かいしがてきのせいにきをのまれさかをくだりにに  
 けゆくを、與市いかでかのかさんとうしろさまにて  
 うどきる、のつけにかへす所をやがてくびうちおと  
 し、けふのかうみやうわれなりと、しんづゝとぞ引  
 にける、いとうの二郎もかげちか打じにときくより  
 も今はのがれんやうなしと、おもひさだめてうつて  
 出るとをひらはにありやとてはしりかゝつてむすと

くむ、みかたの大せい是をみて一どに、とつとおりか  
 さなり、<sup>地</sup>手取あしとりなわをかけ、<sup>はるを</sup>君の御前  
 に引すゆる、よりともこれを御らんじて、扱々にくき  
 くせものかな、それゝとのたまひてさなたの與市  
 にあづけらるまことにいくさのかどんてよしとよろ  
 こひいさみかいぢんましゝてさかみになをらせたま  
 ひけるよりとも御いせいせんしうばんせいめで  
 たしともなかゝ申はかりはなかりけり

延寶六年午正月吉日

太夫直之正本屋 山本九兵衛板

# こばん忠信

## 第一

さてもそのうちあふしうのぢうにんにさとうしやう  
じかじなん四郎びやうへたゝのふはよしの山にてし  
ゆとたちの心がはりのありしとききみのふせぎやつ  
かまつりすなはちそこにてそらばらきりみやこをさ  
してぞのほらるゝみやこにもつきしかば是よりいつ  
かたへなりともおちゆかばやなとゝおもはれしがこ  
こにまたあはたぐちにりきじゆのひめと申てそれか  
しがすねんちぎりしゆうちよのありけるがかれをた  
のみてひとまづをちばやなとゝおもひつゝかのりき  
しゆかやかたへたちよりもんほとゝとおとづるゝ  
うちよりたそとこたふるいやくるしうも候はずたゝ  
のぶなりとぞこたへけるりきじゆ此よしきくよりも  
なのめならずによるこひていそきもんをひらきてた  
たのぶをおくのざしきへしやうじさんかいのちんぶ  
つにこくとのかはしをとゝのへてしゆをさまゝ

にもてなしけるたゝのふ心におもふようげにま事わ  
すれたりをりゝきみの御ぢやうには七人のこはな  
すとも女に心ゆるすなとあるものをとおもひつゝけ  
にのむまじきとおもひてのむてひにてはさつとすて  
のむてひばかりにてさけをはさらにのまさりけりり  
きじゆ此よしみるよりもひとま所へたちしのびはや  
あくをぞたくみけるげにま事わすれたりいまのよは  
はうぐはんとのかよとてはさらになしときまさの御  
よなりそのうへまたときまさのおほせにもはうくは  
んかたのものあらばうつてからめても六はらどの  
へまいらするものならばかすのたからをのぞみにま  
かせてゑさすべしとのおほせなりみづからもよにな  
きたゝのぶをつまとたのみてなにかせんたゝ六はら  
とのにまいりつゝ此よしを申あげたゝのぶをかたき  
のかたへわたしつゝかすのたからをたまはりてうき  
よをらくゝとをくらばやなどゝおもひさだめてま  
たたゝのぶのまへにちかづきてなふいかにたゝのぶ  
どのなにとてさけをまいらぬぞや四こくさいこくの  
ごかつせんにも人あまたうたれたるときく時はさ  
うどのにてましますかたゝのぶどのにてやまします

かとあんじすまひて候におもひのほかにはひきがへて  
めてたくしやうらくましゝて二たび御めにかゝる  
事なによりもつてうれしうさふらふわれ人をおもへ  
とも人さらにわれをおもはざりけるなみたゝぬまに  
いそにつくあわびのかいのかたおもひと申たとへの  
候にはづかしながらもをしやくにまいりてまいらせ  
んとひすいのかんざしあをやぎのそよとゆりかさし  
ひとつのふてはたゞのふに三ごんまでこそしいたり  
けりさしもにかうなるたゞのぶもくちのすぎたるり  
きじゆめにやみゝとたばかられ五ど三どさしう  
けゝのむほどにみしんつもりてやまとなりいさご  
ちやうじていわとなりさかづきのかすだにもかさな  
ればゆんでのざしきかめてへまはりめてのさしぎが  
ゆんでへまはりてんじやうもおほゆかもひらりくる  
りとまひければざしきにもたまりかねはんじをたの  
むりきじゆとてごばんをひきよせまゝくとしてせん  
ごもしらてそやとられけるりきじゆなのめによろこ  
びてたちもかたなもとりかくし申さんとおもひしが  
げにまことにわすれたり大かうのつわものはをらね  
むりし人のこゝろをみるときくひとまづをこひてみ

んとてしやうじのひきてにかつはとあたりのふいか  
にたゞのぶどのなにとてさやうにしいふしたまふぞ  
やをきさせたまへたゝのふとの二三ど四五どをこ  
しけれどもせんごもしらでやとられけるりきじゆな  
のめによろこふてあらうれしやないまははやときま  
さへまいらんとてたゝのふのたちもかたなもとりか  
くしてそれよりもときまさしてそいそきけるととき  
まさの御まへにまいりつゝいかに申さんときまささ  
まそれおうしうのたゞのふこそみつからかしゆくし  
よへゆふべきたりて候なりいそぎうつてをたひたま  
へはやとくゝとぞ申けるときまさ此よしきこし  
めされよくこそ申てきたりたりしりきじゆかなん  
ちはちうのものなればよきにはうげたまはり候と申てし  
づゝそれへとなたまへはうけたまはり候と申てし  
やきん十りやうにまきゝぬ百ひきりきじゆにこそは  
くたしたびにけるりきじゆなのめによろこふていそ  
きをんまへをまかりたちたゝのぶうたせぬさきにさ  
へかやうなるものをたまはるにましてたゞのぶをう  
たせてのそのゝちはさだめてくにかこく二か國  
のぬしにもならぬうれしやとよろこぶ事こそはかな

けれ

## 第二

さてそのうちときまさのおほせにはぢこくうつし  
てかなふまじはや／＼うつたちたまへや人／＼いか  
にとおほせけるうけたまはると申てゑまの小四郎な  
がの三郎かねこの十郎つちやの三郎もりたかこの  
人／＼に三百よきをさしそへてはた一ながれさ／＼せ  
つゝりきじゆかたちへといそぎけるこゝにまたもの  
のあはれをといめしはさいこく八しまのかつせんに  
うたれさせたまひたるあにのつきのふはたゝのぶの  
まくらがみにたちよりていかにたゝのぶたしかにき  
けなんじがたのみしりきしゆこそかたきのかたへそ  
せうをしたゝいもうつてのむかふそやおちんとおも  
はいはやをちよまたうちじにせんと思ふならばかく  
ごをさためよとつたまひてかきけすやうにぞうせた  
まふたゝのぶゆめさめかつはとをきあたりをみれど  
もかたもなしこはくちをしきしだひかなさてはりき  
じゆめにやす／＼とたばかられたちかたなまでを

とりかくされたゝのぶほとゆみとりかやみ／＼と  
していけどられてきやうしら川をひきわたさるゝも  
のならばさとうがいゑにきすをつけんむねんさよと  
てこゝかしこをはしりめぐりてみれとそのかひさら  
になかりけりむねをさすりたゝ一すちにおもひきり  
てぞいたりけるそのうちよせての人／＼はりきじゆ  
かやかたへをしよせて二ゑみへにをつとりまはして  
ときをとつとぞあけにけるそのうちよせての人／＼  
はこゑ／＼によばはりけるいかにや申さんたゝのぶ  
どのときまさよりのおほせにてこれまでうつてにま  
いりたりとく／＼はらをきりたまへとたからかにぞ  
よはゝりけるたゝのぶこのよしきくよりもいかにや  
申さんかたゝよゆふべこのところへおちきたりて  
ありけるがなさけもしらぬりきじゆめにやみ／＼と  
たはかられたちもかたなも候はずたのみしものはこ  
ぶし也われとおもはんものあらばいそきをしよせた  
まふべし人々いかにと申されけるそのときよせての  
かたよりもぬしはたれともしらねとも六しやくあま  
りのだいのをのこくろいとをとしのよろひをきすん  
ののびたる大たちをまつかうにさしかざしたゝの

ふか事ならはそれがし一人にまかせられ候へとてを  
めきさけんでかゝりけるたゝのぶこのよしみるより  
もこはなにとかせんとおもひつゝあたりをきつとみ  
てあればまくらにしたるごばんありあつはれこれ  
こそたゝのぶがさいごのたちよとよろこびてごば  
んおつとりさしかざしよせくるかたきをまちかくる  
これをはしらでかのをところがかうみやうがほにてか  
かりしをたゝのぶきつとみてこゝろへたりといふま  
まにもつてひらいてうとうつてはかうべみちんに  
うちくたきたゝのふなのめによるこびてやがてかた  
なをひんばうて大せいにわつて入きつてのへうこそ  
おもしろけれやなきさくらまつかいで四本がゝり  
のにはのうちひらりくるとをひまはしよきつはも  
のを十七八ききりふせてのこりしものともを四はう  
へばつとをひちらしいそぎ内に立かへりびやうぶし  
やうじに火をかけてんががすみとやきたてうへなる  
かもゐに手をかけとびあがりはふせきいたをけやぶ  
りいゑのむねにとびあかりてうとんぼうのごとくに  
ひらりくるととびこへてそのよにあはたぐちをに  
げのびて四でうのあんじゆかたちへとしのばれける

みる人さく人をしなへてほめぬものこそなかりけ  
れ

### 第三

さてもそののちたゝのぶは四でうかはらのあんじゆ  
かたちにつき門のほとりにちかつきてあんじゆこそ  
ことはりましてしばしわかこゝろあんじゆをたのむべ  
きかりきじゆと申によばうはすねん契りをこめたれ  
ともかたきのかたへせせうするましてやあんじゆは  
此ほどたづねよりたる事もなしかれが心もたのまれ  
すとやせんかくやあらんとあんじゆかもんのほとり  
にあんじゆくらしそたちけるかもものつげかやふ  
しぎやなまさしくあんじゆがこゑとしてによばうた  
ちをちかづけていかにや申さんによばうたちかたら  
ばものをきゝたまへーとせみつからはあうしうのた  
だのおとちぎりをこめてさふらひしがいつそやよし  
つね十二人のによばうたちをめしつれさせたまひあ  
やしのうらよりおふねにめし四こくをさしておちさ  
せたまふかそれがしも十二人のによばうたちをかへ

本ノマ、

させたまひてしづかばかりをたゝ一人御ともにてよしのをさしておちさせたまふかうきよはさだめなきならひにてなにとかならせたまふらんたゝのぶどの御事をおもひいだしてあらものさひしきこよひやとてことひきいざやなぐさまんとがくはさまゝおほけれと中にとつてもこかうのつぼねのつまこひかねてひかせたまふそうふうれんといふがくをおしかへしてはをしもどし二三どまでこそひきたまふたゝのぶなのめによりこふでもんほとゝとぞをとづれるうちよりたそとこたへけるいやくるしうも候はずたゝのぶなりとぞこたへけるあんじゆなのめによりこびもんをひらきたゝのぶをおくのざしきにしやうじつゝさんかひのちんぶつにくくどのくはしをととのへてしゆをさまゝにぞもてなしけるたゝのぶはあんじゆかこゝろのほどはおほへたりさしうけひきうけのまむとするあんじゆこのよしみるよりものふいかにたゝのぶどのあまりさけをまいりたまふなよ御身はゆんでもめてもみなゝかたきの事なれはさけをひかへたまへとてさけもしいすしていたりしかかのあんじゆのひめかこゝろのうちのたのもし

きとも中々申はかりはなかりけれかくてときまさにはたゝのぶを打もらしてうへをししたへとかへしけるされどもりきじゆ申けるはいかに人ゝなにをさはがせたまふぞやたゝのぶをちゆき申ともてんをかけてもよもゆかじこゝにまた四でうへんにあんじゆのひめと申てさふらひしがさだめてかれがかたへをちゆくべしとおもふなりしからばいよゝはらたちやいそぎをしよせたまふべし人ゝいかにと申ける人へげにもとおもひつゝりきじゆをさきにをしたてゝやかて四でうがはらのあんじゆがたちへとをしよせて二ゑ三へにおつとりまはしてときこのゑをぞあげにけるたゝのぶこのよしきくよりもすはおもひつる事よとてまくらなるかたなをするりとぬき既にいであんとしけるかあんじゆ此よしみまいらせふかくなりとよたゝのぶどのなをゑたるゆみとりのものゝめさではふかくのいたりなるべししばらくまたせたまへとてひとま所へつつと入もへぎにほひのはらまきをたゝのぶにまひらせて此よろひく申はいつぞや御身のあづけたまひしよろひなりめしたまへと申されけるかけとまるそのひまにうはをびとつてまいら

第四

するうはをひしむるそのひまになぎなた二えだとり  
いたし中にもすんののびたるなぎなたのさやはづし  
たいのぶにまいらせて此なぎなたと申はそもいつぞ  
や御みのあづけたまひしなきなたなりかねほどはし  
らねどもいま此ときのためそかしたたいのぶにこそ  
まいらせけるたいのぶ此よし御らんじてかほとやさ  
しきあんじゆにこれかわかれかくちをしやなさりな  
がらふうふは二世のちぎりとなれば此よのゑんこそ  
うすくともかならずらいせはめぐりあふべしいとま  
申てさらばとてひろゑんさしてそいでらるゝあんじ  
ゆ此よしみまいらせ二世のちぎりとのたまへばみつ  
からも御とも申て二世のちぎりとなるべししばらく  
それにまちたまへとてひとまところにたちよりてお  
なじくもへぎにほひのはらまきをくさずりながにき  
るまゝになしうちゑほしをつかふでしらあやたゝん  
ではちまきにしたけなるかみをはつとみだして長刀  
をつとりひろゑんさしておりひろゑんさしてぞおど  
りいでよするかたきをいまやゝとまちいたりあん  
じゆのひめのしんちうをみる人きくものをしなへて  
ほめぬ人こそなかりけれ

さてもそのゝちよせてのものどもはこゑ／＼によば  
はるやうたいのおどのはみるときくにはちがふぞや  
こゝかしこへにげのびていくほどのちをなからへ  
んこのうへはてんをかけてあがらんとも大ちをわり  
ていらんともなどうかうたではをくべきぞはや／＼い  
で／＼うちじにせよたいのぶいかにと申けるたいのぶ  
此よしきくよりも大をんあげて申されけるはみなみ  
なもさためてしろしめさるべしあはだぐちにてよひ  
よりちようとさかもりしゑひふしいたりしところを  
ばなさけもしらぬりきじゆめにやみ／＼とたばかり  
れたちもかた<sup>な脱(カ)</sup>をもとりかくされはこぶしをちから  
にめん／＼にまいりあふそのときぬしはたれともし  
らねども六尺ゆたかの大のおのこのくろいとおどし  
のよろひをきて四尺あまりの大だちをまつかうにさ  
しかざしそれがしをめにかけてすゝみにすゝんでか  
かりしをかの大たちをちうにてうばひととりめん／＼  
にまいりあふそのときにてたつかたきもあらされは

ひとりはしなれぬいのちにてこれまでまいりて候なりいまはやてなみをおぼへし大だちまたなきなとも候へばたいのぶかなきなにてきりのこされし人はごせをとふてたびたまへとて大なぎなたをみづぐるまにまはしつゝそれなきなたのきつてにはこむてゐるてひらくてしゝのほら入とんばうぎりよせてかへすはさ々なみぎりやなぎさくらまつかいで四ほんかゝりのにはのうちをひらりくるりとをいめぐりあんじゆのひめもたゝのぶをうたせしとゆんでめてにつきそひてかたきよすればきりはらふふうふの人びとかさなりゝゝときりめぐるあんじゆのひめが手にかけてよきつはものを七八き手のしたにきりふするそのゝちたゝのぶはかたきのつはものを三ちやうばかりおひめぐるかあんじゆのひめはたゝのぶをみうしなひこゝかしことたづねけれどもさらにあたりにみへざればいそぎやかたへたちかへりまたたゝのぶゝとよばはれどもをとするものもなかりけりあんなじゆこの由みるよりも今はやうたれさせたまふかなしやなしなば一しよとおもひしにさきだちたまふかうらめしやおもふつまをさきにたてあとにの

こりてせんもなしみづからもにゆかんとおもひてちぶつだうへさしかゝりひころたのみし御ほぞんなればらいせをたのみたてまつるなむあみだふつみだぶつと是をさいこのことばにてそのとしつもつて十八さいと申にはかたなをくちにくわへつゝうつふしにさしつらぬきあしたのつゆとぞきへられしがあんなじゆのひめのさいごのていあはれなりともなかなかににゝたとへぬかたもなし

## 第五

さてもそのゝちたゝのぶはかたきを四はうへをつちらしいそぎやかたへたちかへりあんじゆのひめとよびけれとをとするものはなかりけりふしぎさよとおもひつゝちぶつだうをみてあれば人一人きぬひきかづきふしてありたちよりてきぬひきのけてみたまへはあんなじゆのひめにてありこはあさましきしだひかなわれがゆくへをかなしみてかく成けるかやいたはしやいまははや手にたつかたきもあらされはあふしうへ下らんもわがまゝなりとはおもへどもたゝのぶ

このまゝおちゆかはくさのかげにてあんじゆのひめ  
がおもはん事のはつかしやさりながらはうぐはん  
どのゝ御ゆくへをみるとゞげざるこそくちをしけれ  
しそれとてもちからなしこゝそしぬべきところなり  
いまぞさいごのかうげんとまたひろゑんにはしり  
いで大をんあげてぞまゝはゝりけるいかによせての人々  
たちくもをわけてゆかんとも大ぢをわりていらん  
ともまたよせきたる人々を一人ものこさずきつて  
すてんもそれがしがまゝにてありさりながらかたら  
ばものをきゝたまへうらみのしにはあらねどもなさ  
けのしにはあるぞかしそれをいかにと申にりきじゆ  
と申せしによばうはすねんちぎりをこめけれどもか  
たきのかたへそせうしかやうになるこそくちをしけ  
れまたおなじ女といひながらあんじゆのひめと申は  
そもこのほとんすきぢりにて候へどもわれがゆ  
くへをかなしみてじがいをするこそあはれなれかれ  
かこゝろのほとのはづかしさにたいのぶこれにては  
らをきるかうなるものゝじがいのやうをみならひて  
手ほんにせよ人々ゝゑいといふまゝにこしのかたな  
をするりとぬきはら十もんにかけやぶりぎうをつ

かんでくりいだしねんふつを申せどもこうなるもの  
のくせとしてしぬるふせいはなかりけりそのときた  
だのふ申されしはいかによせての人々ゝよちかふよ  
つてくびをとりてさてほうこうのそのちうにはごせ  
をたのみたてまつる人々ゝいかにと申けるそのとき  
人々はしりよりてくびをとりときまさへそあげにけ  
るときまさもひろゑんまでいでさせたまひてきたう  
がくびを御らんじてこれみたまへや人々ゝたちつぎ  
のおたいのぶとてかれらきやうだいのもの共はもろ  
こしまでもなをあげしそのものどもがいまかくなる  
こそはかなけれさふらいとある人はかれらきやうだ  
いを手ほんよとのたまひて何事もきみにちうこうを  
はげみたまへとて御そでをしほらせたまへば御まへ  
なりし人々ゝもことはりなりとぞんじつゝともにな  
みだをながしけるかゝるあはれのをりふしにりきじ  
ゆと申せしによばういづくよりかはきたりけんと  
きまさの御まへにまいりて申けるやうはいかに申さん  
ときまさまたのぶはうちとり申て候へばかゝる  
めでたき御きげんもたれゆへとかおほしめすひとへ  
にみづからかゆへぞかしわすれたまはんそのさきに

御やくそくのしよりやうをたべとぞ申けるときまさ  
このよしきこしめしよくこそきたれるりきじゆかな

さりながらいまこれにありける人／＼のたゞのふが  
くびをみてゆくへもしらぬ人々まであはれをもちよ  
すはかりなりいはんやなんぢはふうふのみにてしよ  
りやうといふはこゝろへねかたちは女とうまれきて  
こゝろのうちはおにぞかしやくそくのしよりやうに  
はしゆくたうはひろきところときひてありこれをな  
んぢにとらするぞそのかどいではいそぎうぐる  
まにうちのせみやこのうちをひきわたしてそのゝち  
は六でうかはらにてたけのこぎりにてくびをひきを  
とすべしとの御ちやうなりうけたまはり候とてやが  
てひつてぎうぐるまにとつてのせわたすところはど  
こ／＼ぞかみは一でうやなぎはら二でうほりかわ三  
でうあぶらのかうじ四でうしめや五でうのはしをう  
ちすぎて六でうかはらへひきいだしこしよりしもを  
ほりうづみたけのこぎりをくびにあていまぞさいご  
よなむあみだぶつといふまゝにそり／＼とひきに  
けるさてそのゝちにはゑいや／＼とひきければあら  
むざんやなりきじゆくびはまへにそをちにけりみる

ものきく人上下はんみんなをしなへてかのりきじゆか  
こゝろの中をにくまぬ人こそなかりけれ

延寶四丙辰年卯月吉旦

八文字屋 八左衛門板

## 義經地獄破

## 第一

それおもんみれば、ゑしやぢやりならひ、しやうじやひつめつのことはり、さかりなるひとはいちどはおとらうると、ふるきほんもんにあり、こゝに此ごろの事かとは、ぢごくはめつして、むびらくじやうこくとなる、そのいわれをくはしくたづぬれば、せいわたんわう二十だいのかうゐん、みなものよしつねのはかりことによりて、あるときはうぐわんむさしをめされ、いかにべんけいうけたまはれ、しやばにての、しんいのほむら身をこがすによつて、今しゆらどうにをち、まんくかうのくをうくることやむ事なし、いかにもしてこのくげんをまぬかれ、あんらくの身とならんや、べんけいうけたまはつて御でうもつともにて候、いそきあんひを廻らし、此事をはかるに、しよせんむほんをとげて、ゑんまのじやうをうちやぶり、一まん三せん六ぢごくをよしつねのため、心の

うちにおさめたまはん、御たくみこそしかるべくぞんし候へとも、はやかるところもなく申上げる、はうくわんしはらく御もひあんしあつて、是はわれらが一大事なり、そつじにしてはかなふまじ、承われればへいけのちやくそん、こまつの三みは、さいかくぶそうのにとときく、しやばにてこそげん平れうかとて、そのくらゐをあらそうといへども、いま此どにては、たがいにくげんをまぬかれんこそめてたけれ、此人とわだんして、かつせんのいけんをもとははやつて、いせの三郎を使ひにて申つかはれるは、われふりにこの一大事を思ひたつ事、まことにてんのめいずるところかとぞんし候おなじくはぢたのこゝろをひとつにして、たかにしゆらのくげんをも、のかれたまへと申つかはれる、こまつどのきこしめし、なひなひへいけにも此ぎとくる所に、ねがふところのさいわいなりとて、やかてさいのかはらにて、へいけとけんじくわひしゆして、かつせんのひやうでうまちまちなり、はうくわんあふせけるは、むほんくわたつるといへとも、ぶぐなくしてそのせん有べからず、いかにもして是をもとめんはかり事をあふせられけれ

ばこ松どのきこしめし、けんげきをもとめんこといとやすかるべき、まつかちどもをめしあつめ、そのやうをこのみうたせんに、なにのしさいの候へき、いそぎめせと仰ければ、べんけい承はつてめしふみをふれて、そうそくまいるべきよしをぞふれられる、べんけいかはやわざほめぬものこそなかりけれ

## 第 二

刀かち井ぬす人かまのふたをぬすむ

さるあひた、まいりあふかちともはたれくぞ、さんでうのこかちむねちか、まさむねさたむねなみのひら、よしみつながみつとうまのせう、しんさんなれどもまさつねにうだう、そのほかひしうのぢう、なをゑたるかちとも、かすをつくしてみな大ゆかにぞかしこまる、ほうがん御覽じて、なんぢらを是へよふ事よのぎにあらず、しゆらのくげんをのがれんため、むほんをくわだつるといへども、どうぐなければちからなし、いそぎやりなぎなたをうちていだせ、いかにいかにと仰ければ、かちどもうけたまはつて、御詮かしこまつて候へ共さりながら、くろがねなくしてな

にをもつてけんげきをつくり候べきと申あげければ、はうぐわんきこしめしくろかねこそあれ、ち獄にをゝきかまふたを、ぬすみとつてうちいだすべし、さりながら是をぬすまんはかり事、いかせんもありければ、よしもり承てそのぎいとやすかるべし、きみの御かんどつかうむりて、むげんぢごくにすまいする、くまさかのちやうはんはんに、仰せつけられ候は、とりゑんことはなにのしさいの有べしと申上る、是はよしもりやけじたの小六と申し時、たびくの手がらみたるゆへに、今あんじいだしたると申候よしもりむげんにはしりゆき、ちやうはんをかたらひいだし、御まへにこそまいりけるそうかしらぬす人には、かいつかみのわし四郎、まどをのぞくはにらめく郎、ともを迷わすきつね三郎、てんひいなづまはたたがみ、せめくちの六郎わかたちなれども、石川五ゑもんまめいた、そのほかのこぬすひと、數をしらず皆御まへにかしこまる、はうぐわんあうせけるはぢごくにおゝき、かまのふたをぬすみとりて、かちの手まへゝわたせよ、もし此ぢんにうちかちて、ぢごくをおさむる物ならば、いまよりいごわがまゝに、ぬすみを

せよとはうぐわん、じひつの御はんを下されける、ぬす人承はつて、此うへはならひしところのひじゆつをめぐらし、とりてあげんというまゝに、わが手したを三十人すくり引ぐして、ちごくをさしてしのび入、おもふまゝにぬすみとり、かちどもにこそあたへけれ、かちはくろがねうけ取て、やりなきなたわきざしを、うちていたすもとよりかちは、上ずなりくろがねはまたちごくにて、としひさしくたいたるくろがねなれば、かのもろこしになをゑたる、はんくわひちやうりやうがもちたるつきにもおとるまじ、はうぐわん御らんあつてひやうくはしゆつたいしたり、かたときもいそぎ、ぐんひやうをとゝのへべしとの御でうなり、あべのなかまるをめして、吉日をゑらひぐんばいをくらせて、すでにうつたちたまひける、いせひほどこそゆゝしけれ

## 第三

ゑんまわうへよしよする事

さてそのゝちに、まづ大ての大しやうぐんには、九郎太夫はうぐわん、あく源太よしひら、うすひの御ぞう

しきそよしなか、しんたよしさだきやうだい、さふうひ大しやうには、くすのきまさしげ、わだのよしもりひらやまのむしやところ、あかまつ本ノマ、とのそのせい以上十まんよき、つるきのやまのふもとをめぐり、ゑんまのじやうのひしがのもりにぞ、よりたりける、さてまたからめての大しやうぐんには、こまつ本ノマ、のさんみしげもり、のとかみのりつね、さつまのかみたゝのり、むくわんの太夫あつ盛、ひらのたかときさうまのまさかと、へいまのすけおたののぶなか、これらをしうていの大しやうとして、そのほかめん本ノマ、のともから、いゑ本ノマ、のはたおもひ本ノマ、のかさめん本ノマ、を、四でのやまおろしにふかせたるは、たゞりうしやのひるがへすかごとし、ゑんまのじやうのひがしにしへおしよせ、ときこのゑをぞあげにける、大山もくづれてうみに入かとをびたゝし、このゑをきくよりも、一まん三千六ちごくに、あるとあらゆるおにども、ゑんまのじやうへはしりあつまるは、たゞうんかのことし、ゑんまわうのたまひけるは、ゆだんしてかなふまじとて、四ほう本ノマ、のもんをとち、かのよしつねはこざか

しきものぞ、うつけてかこみやぶらるゝなと、いかりける所にかくてよせての大せい、弓てつほうをいてせむるといへども、百人千人のてつへきなれば、中々くにもせざりけり、はぐうわん御らんじて、さうしうのあさいなはなきか、此門やぶれと有ければ、たをるべきとはみへざりけり、おに共此よしみるよりも、あさいなは門をやぶるが上手なり、よつてかゝへよ物共とて、手にてを合ておさへけり、よせてのせいは是をみて、おりあふ物はたれゝぞ、あく七兵衛かけきよ、むさしばう辨慶、あねはのへいじみつかけ、扱御所がたの五郎丸、うきしま太夫御ないきみをのや、しのふかわづとのをさきとして、をとに聞ゆる大力、ここをせんとおす程に、さしもにつよき門なれ共、ひやうぶをたをたすごとくに、天地にひゞきてたをれける、内にておさへしおに共はたゝしやばにてのすしのことくになりける、ふびん成共中ゝ申はかりはなかりけれ

## 第四

しゆ天どうじらいくわうとくむ事

さるほどにのこりしおにども、ちからおよばすしもつてつでうかなひばし、ひつさげゝわたしあふ、よせてのぐんびやうも、けんけきをそろへ、こゝをせんとゝたゝかう、兩ちゃんにつくる時のこゑは、もゝてのいかづちのおつるかとあやしまる、かふうかふそのたゝかい、はうげんへいじのだいのみだれは、たいきうぎうがもうなり、しのぎをけづりつばをわり、きつさきよりもくわゑんをいだしこゝをせんとゝたゝかいける、かゝりける所に、そのたけいちぢやうばかりなる鬼、あくがうしんゐのよろひをきて、十のりけんをひつさけ、まつさきにすゝんでなのりける、そもそも是は大原山にすんだりし、しゆてんどうじとはわか事なり、さだめてをとにもきゝつらん、てなみのほどをみせんとて、まつさきかけてみへにけり、つくおにどもたれゝぞ、てんちてんわうの御ときに、ふちはれのちかたの御内にてなをゑたる、金おにかせおとおにをさきとして、もんぐわいさしてうつていづる、よせてのつわものども、此おにともにきりたてられ、ひきいろめになりけり、こゝに身かたのなかよりも、むしや一きすゝみいでゝ大をんじやうに

てなのりけり、そもく此ぢんにすゝみてなをあげし、たむらのしやぐんとはわかことなり、てなみのほとをみせんとて、さきがけてこそかゝりける、つづくつわもの誰々ぞ、みなもとのらいくわうさだみつすへたけ、つなきんときひとりむしやをさきとして、くつばみをそろへかけにけり、かゝりける所にどうじと、らいくわうわたしあふ、どうじ此よしみるよりもかたきは是ぞといふまゝに、らいくわうをひつさげたり、もとよりらいくわう、心のきいたるものなれば、うへさまに三かたなさす、ひつくみてどうどをつ、されどもどうじうへになり、おにいくちにくはんとす、つなきんときをわいて、そのまゝどうじをうちたりけり、これをいくさのはじめとして、おにゝてなれしつわ物ども、おつつめくうつほどに、いかなるきじんもたまらずして、かせにこのはのちるごとく、みかたの陣へそ引にける、かゝりける所に、平三みのちうじやうしげひらさへもんともたか、みんぶしげきよ、かたきの陣やにひをかけ、三せんよきが、一しよになつておめきさけんでかけたりけり、をりしもかせはむかふかせ、ふせぐにかいのあらされば、

すまんぎのおにども、一せんになつて、いつほうをうちやぶり、さんづの大川をうちこして、はしを引てぞいたりける、よせてのぐんびやう川ぎしにうちのみ、本ノミわたらんとすれども水は深し、はしはひいたりふねはなし、向ふの岸には、ごづめづあほうらせつ、ゑんまだいわうしゆらかるら、おにこぶしをふつてぞひかへたり、かゝりけるところに、かぢはらげんだかけすへ、駒をなみさチにのり入て、大をんじやうにてなのりける、むかししやばにて、うち川のせんぢんのあらそひし、かぢはらげん太かげすへなり、しやはにてさゝ木にたばかられ、まうねん今にはれかたし、今此川のせんぢんするそといふまゝに、さいめかいてぞわたしける、つづくつわものたれくそさゝ木の三郎もりつな、おなじく四郎たかつな、田原の又太郎たいつなをさきとして百まんぎ馬いたをくみて、たかいにゆはづをそろへ、あふそのゝはなにて浪をわけ、さゝめかいてぞわたしける、さしもにひろき三づの大がなれども、人馬にせかれて、したはかはらになりにけり、おにども是をみるよりも、川ぎしにうちかさねて、こゝをせんとゝふせぎけり、さすがになを

ゑしつわ物なれば、うてどもつけどものりこゑく  
かゝりけり、すでにおにども、ひきいろになりたる  
所に、てづかの太郎みつもり、おかべの六彌太たゝす  
み、くまがへの二郎なをざね、さいとうべつとうさね  
もりおつつめくくむほどに、いかなるきじんもた  
まらずして、川ぎしにそひわれさきにとにけにける、  
此人くのとがらのほどかんせぬものこそなかりけ  
れ

## 第五

ちごくはめつ井ゑんま王とんせいの事

かゝりけるところにまたせつしうのぢう人、すいた  
の太郎さへもん、ゑたりやかしこしとせつのくに、か  
はちのひと人をひきぐして、つまりくをりをあい  
ておつ詰く剥だりける、はぎとるとる物はなにな  
にぞ、がうのはかりにくろがねのぼう、しもつてつち  
やうかなひばし、よほんのかゝみ、こしにまいたる  
とらのかわのひつしき、まてあまさすはいたりけり、  
そのときせつきやうのよ七郎、太郎ざへもんかわ  
ばしらに、一しゆのうたをぞかきにけりうた▲しや

ばにてもそのなをゑたる太郎左衛門、すいたみちと  
ていまもはきけり、こゝにまた物のあわれをとどめ  
しは、せうづかわにすみたまふ、うばごせにてとめ  
たりぢごくはめつして、ものゝふひがしによりおし  
よせて、しやうづかわのすまひもたまらせたまわす  
して、たけつえにすがり、いづちともなくまよひい  
たまひける、かゝりけるところに太郎ざへもんいで  
あい、すではがんとしたりけり、うば此よしをみた  
まひて、われらうたいの身なれば、ゆるさせたまへと  
て、てをあわせたまへども、かつてみくにもきく入ず、  
のこらずはいでとりたりけり、うばこゝろにおもわ  
れけるは、かくあさましきすがたとなり、つれなき  
のちながらへ、うきよにすまんもくちをしとて、ひだ  
りのゆびをくひきり、あたりのいしに一首のうたを  
ぞかゝれける▲いにしへははなのふきにしうは玉  
のかくなりはつる身こそつられれと、あそばして三  
づの大がへ身をなけて、そこのみくづとなりけり、  
是をみる人きく物、そでをしぼらぬものはなし、その  
ときゑんまわうはもといをきり、しゆつけしてかう  
さんなされていられける、よしつね御らんじて心に

しまぬだうしんかな、おそれながらそれがし、ゑぼし  
おやにならんとて、ふ正ぼうとぞ付られける、あまり  
にとしひさしき、ゑいぐわにあそびいたりける、ゑん

本ノマ、

まわうなれども、しやうじやうやこくそくのことは  
りをば、のかれたまはぬにや、すみのころもに身をそ  
めて、あさましかりけるしたひかな、ゑんまわうのひ

本ノマ、

んほく、よしつねのゑいくわ、よしあしこゝにきはま  
れり、此ありさまをみるよりも、いにしへ一まん三千  
六ちごくのありしとき、そのくらひしかいにきこへ  
し、身のかくあさましきすがたとなり、いきてはなに  
のせんなしとて、ゆひさしわろう人おゝかりければ、  
ゑんまわうのうたに、しやくそんも、あみたもわれも  
おなじこと、いにしへはわういまは入道と、よめりけ  
るとかやことに、ゑんまわうのくちすさみには、にあ  
いたるといふ人もおゝかりけり、かくてはうぐわん  
うちとりしくびともを、じつけんあつて三づのかは  
らにかけさせ、しでのやまにあかり、ゆうくんあまた  
めしあつめ、まふつうだふつきかもりし、まことにゑ  
いぐわとなつて、あさゆふらくなきばかりなり、その  
ときしでのやまのなをかへ、それよりもしけりやま

本ノマ、

と申とかや、ちやうせいでの内には、しゆんしうを  
といめふろうもんのまへには、日月おそしと申も、い  
ま此ときをや申べき、めてたかりけるみよとかや、此  
ものがたりいかにして、しやばにながれをする、た  
つぬればくらまのをくにすみたまふ、大てんぐおほ  
しめすは、このあひだはうぐわんどのへ、ぶさたし  
てついにみまひを申さぬとて、さんせうの木のかは  
をはきあ、つめこのは天ぐにかつがせ、しゆらちごく  
をさしてそ行たまひ、はうぐわんどのゝすみたまふ、  
門ぐわいにやすらひ、くらまより御見まひに参りた  
りと有ければ、ときは御せん聞召よしつねたゝ今は  
るすにて候へ共、こなたへ入らせたまへとて、女ぼう  
たちを出したまひ、なかのていへしやうしつゝ、めの  
とのぢじうにしやくとらせ、さけをさまゝにすゝ  
めたまふ、ときはのたまひけるは、しやばにてよしつ  
ねを、くらまのてらにおく所に、なにかつけて、御ぼ  
うのしなん有しゆへにより、おごるへいけをほろぼ  
し、なをかうたいにのこす、みずからしやばにありし  
とき、御れいをも申さんを、御まへとくみのゝ國、や  
まなかじゆくにてことにあいまいうせしにより、の

本ノマ、

こりおゝくおもひし所に、是迄の御見まひ、ま事にま  
事にくわぶんなり、しやばばかりにてもあらず、こゝ  
にても又大將と罷成、ゑんまのじやうを打やぶり、む  
びらくと成ことも、是みな御ぼうの御をんなりとて、  
御ちそうなのめならざりけり、いとま申てさらばと  
て大てんぐはくらまにかへりたまひけり、ある人く  
らまへさんけいし、大てんぐにたいめんし、かくのこ  
ときの物がたり、承はると思へばゆめはそのまゝさ  
めにけり

寛文元年巳九月吉日

山本九兵衛板

あさいなしまわたり

## 第一

こつかのせいすいを、くわんするに、そのしやうちよく成ときんば、まねかざるに、らいふくし、きよ成ときは、もとむれども、たいさんす、さるによつて、めんばんたる、くわうてうも、きうぐに止まるといへり、こゝに人わう、八十三代、つちみかとのぎやうに、あたつて、其ち天下の、ふしやうは、かまくらう大將、よりともきやうの、ちやくなん左衛門のかみ、より家こうとそ申ける、しかるに御ちゝよりともこう、げんりやく年ちうに、をこりしへいけを、ほろぼしたまひ、みかとのゑいかんあつうして、六十六か國のそうついとうに、ふせられ、あまつさへ、せいしやうぐんの、ふ將にそなわしたまひしより、天下一かうに、おさまり御子より家こう、あひついで、四かいたな心に、おさめたまへば、あめかしたのしよ侍、かまくらにらいふくして、きみをしゆごし奉る、有時大將、しよ大み

やうことくく召れ、きん年はこつか、たいへいにおさまり、ときつ風もふかさは、ひとへにめんくのゆふりき、つよく天下をたいせつに、おもわるゝゆへにて有、一は大はさつの御かごたり、つるがをか八まんぐうにさんけいたし申べし、やういあれとの御でうなり、みなくでうい承り君の御とも仕り、上下さいめきわたりて、わか宮さしてぞ三重參らるゝ、御まへになれば、くくどあんをんちやうきうに、まもらせたまへと、さまく御きせいましゝて、御ぎになをらせたまへば、わだちゝふさゆふにして、其外の、大名小名花をおり、もみちをかさねし、しやうぞくにて、二ぎやうにひつしと、なみいたり、かくてかんぬしまさうちは、へいはくを大ゆかにさゝげ、かぐらをの子はとびやうし合、をとめのたもと、ひるがへし、すでにみかぐら三重はじまりける、あら有がたや、しんれいおとめにのりうつり、こゑを上てしんたく有誠に、ふ將の身として、あゆみをはこびたまふ事、しんりよもなとかのふじうなからんや、こゝに一つのなんぎ有、是よりいづのをき八でうのしまよりす百里みなみにあたつて、大山一やが内に出來す、かのし

まはせいなんきまん國よりつゝきたり、きわうがけ  
んぞくあまたきよぢうし、あしわら國をせめとらん  
と、ひやうでうす、少もゆたん有ならば、ちかき内の  
さいなんたるべしと、あらたにしんたくましゝて  
神はあからせたまひける君をはしめ奉り其ぎに有あ  
ふ人ゝはこはそもいか成ことやらんとあんしわつ  
らう折ふしにわかにはそらかきくもり時ならぬ大ゆき  
ふりはん木せんそうしろたへにふゆのけしきと三重  
なりにけりかゝる所に其たけ一丈あまりの大ゆきひ  
びきわたつてどうどおつるわだちゝぶ君をしゆごし  
申されしがいかに若侍其ゆきわつてみたまへそれ  
それと有ければいつの國の住人お山のはん官きよた  
か心へたりと太刀ひんぬいてかゝりしがふしぎや此  
ゆきしきりにうぐくとみてさきへはすゝますしりま  
いして立にけるあさいな一もんしにかけ出たとへ此  
内に十丈百丈のあつすみてあればとて侍ががんせん  
にてじこくうつすはをとなげなしそこのきたまへき  
よたかと太刀ひんぬいてをどりかゝつてちやうと切  
ゆきの内よりもはくはつたるきぢよあらわれあさい  
なにとんでかゝるゑたりやあふととびちかへむんず

とくんだをりあふ物共それあますなと立よるをあさ  
いなが手にかけてつたるをみすましあますなうてと  
は近頃おこかましきふるまいかなとて物の事にしや  
うぶの付までけんぶつあつてたまはれと四かく八め  
んにいかりをなしゑいやゝとねぢあいしがすきを  
うかゝいたゝ中をつゝけさまにとをしひるむ所をは  
ねかへしのどぶへ三刀さし只今のくせ物あさいなの  
三郎打取申て候とたからかによばわつたり君をはし  
め諸侍あつはれかう成よしひでやと一どにとつとぞ  
ほめられける扱其後人ゝ我もゝと立よりみれば  
せいたかく色しろく雨がんは日月のことくかゝやき  
さもすすまじきけしやうなりつたへ聞ゆき女とはか  
やうの物にて有べしとしたをまいてぞおわします大  
將ぎよかんあさからすせん代みもんの高名かなそれ  
それとのたまへば承り候と源氏重代すいげつといふ  
御はかせを下されける其時しげたゝ申されしは誠に  
ふうはたいらかにしてかんくわをふくろにおさむる  
所にかゝるふしぎ出來する事は只ことにて候まし然  
共我てうは神國としてしよじんちをしめしたまふな  
かんづく大ぼさつは忝も其すいしやく三所にちうあ

いしんくうおうふじん三くわうのぎよく體たり三系のをもとをあらはしたまひ百くわうでんこのちかいをおこして一天せいひつのめぐみましますかるがゆへに本てうのそうひやうたりけんせあんをんのはうべんはくわんをんせいしじんりきをうけたまふごせうせん所のりやくはむりやうしゆ佛のちかいをほどこしたまふあふぎてもしんすへきは此御神にて候取わけげんしをまもりたまかばなどかのふじうなからんいそきしんちよくにまかせけとうついで成さるべしとつゝしんで申されける君聞召然べきうやにはからいたまへとのたまへば其時判官きよたかすみ出申上其ぎにて候はゝむかしもためしの候い國のむくり此國をとらんとはせ渡り候時にゆり若大臣ちよくせんのかうむりたまひすまんぞうのびやうせんをさしむけどうと日本のしほざかいちくらが沖にてたたかいついにはいくさに打かち給ふかゝるれいきも候へばすまんぞうの舟をもよほしつわ物ともをさしつかはしそくしについで成さるべしとはいかりなつくこそ申けるあさいなもくねんとして聞いたるがつつといて申けるは尤判官の申されでう然べうは候へ

共其物語はそれがしも少承り及候其時いこくのゑびすまわうのほうをおこないこくうにどろをふらしじうやの闇となせし時大臣日本の方に打むいいせ大神ぐうをはしめ奉り六十よしうの大しやうのじんぎにきせいをかけしんりきをもつてついで成され候とこそ承れいわんやかか鳴はせいなんぐくにつゝきたると候へば日本國のせいをそろへす千萬ぎにてよせたり共ばんぶの及へきともおもはれず候なかんづく程もしれざるふうはゝげしきかい上にあまたのぐんさしむけられ候事もつての外の御だいじ只一人なりとも神力をひたいにあてうんを天にまかせ力をねむにおさめ一しんをほぞの下におとし付はせむかつて候はいすまんのげどういかりをなすとも何程のことの候べしとさもいさぎよくぞ申ける判官聞て扱も扱もかいゝしきしんでいかなして御へん一人はせむかいきわうをしたがへたまふべきかとあさけるやうにぞ申うけるあさいな聞も敢ずおゝこうでにおぼへか有御へんのやうにたにしか尻まいすることくおとりやうは存せず候あはれ此よしひでに仰下さるゝ物ならばかのしまへはせわたりをとに聞へしきまん

國のきわうと力の程をためしびんぎよくはいけどつてかまくらづとにいたすべしうんめいつきはてうたれ候とも少もうらむることらあしひに入水にてはつるもみな是さだまるごうにて有おそれおゝくは候へとも此たびの打てにはそれがしに仰下れ候へとさいさんしきりに申けり判官もことばをつかんとおもひしがなにしあふたる荒物なれば悪かりなと思ひきかぬかをにいたりけり一さの人々もあまりに大ぎやう成事なればめとめをみ合とかふ申人もなしやゝあづて大將の御諛にはさ程におもひ立ならばごにちのあんないしやのためしまのやうをみて參れとの御でうなり忝と御前を立君御らんじしらくゝかどん出いわふてゑさせんと御さかつきにあいそへこかねさねの御よろいを下されけるあさいな三どちやうだいしつあはれみやうがなき御事かな是みたまへ人きうばの家に生れ來りし方々は此あさいなにあやかりたまへかゝるくわほうのせんびやうなればかのしまにわたつてきじんをやすゝしたかへ二たび御めに掛るべしをいとま申て我君さまいとま申てはうばい達をのゝ御めん候へといそぎ御前を罷立我

やをさして歸りけるかのあさいながふるまいじんありぎありゆふありとてみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第二

### 判官むほん井あさいなてがらの事

あさいなの三郎よしひではちこくうつしてかなわしと君より下したまはつたるこかねさねのはらまき四尺八寸の大だちはきしげとうのまん中にぎり我にとらぬらうとうにかみばらこ藤太ため久とたの平六くもみの源藏いわさきひやうごみつしげとて一きとうせんのつわ物思ひゝのしやうぞくにて一めんになみいたり去間よしもりは一もん兄弟引ぐし中のでいに供給ひ人ゝにたいめん有いかにあさいなこんどの大將給はる事一ゑに家のめんぼくたりすいふんちうをぬきんでめでたくがいぢん致すべしと御さかづきを下されけるよしひで三どちやうだいしきよいのごとくそれがしかやうの打てにむかふ事正八まん大ぼさつの御かごと存候身にあまり忝候と三ごんく

んでさらりとほし扱なみいたるろうとうにも次第に  
さかづき給はりおいとま申てさらばとておや一もん  
にいとまをこひしう／＼すぐつて十三きけんじん二  
年五月三日にかまくらをうつたつていづの國へぞ三  
重いそぎける是は扱置お山の判官きよたかは本國に  
歸りしがららどうともを近付こんどそれかしかまく  
らにてあさいなにあざけられ口をしくは思へ共君  
の御まへをはかりむねをさすつてひかへたりかれ  
かこんどの打てを望はせむかふはひとへにぐにんな  
つのむしおのれとひに入かごとしいきて歸らんこと  
は萬が一つもよもあらし然共我てふは神國なればし  
んりきほうべんにてかの島にわたり千に一つもりを  
へて歸る物ならばいよ／＼君の御きしよくあつうし  
てなを一天にふるまわん其時はそれかし大名かうけ  
の付あいにもきやつめにせばめられんも口をしかる  
べししよせん此たび道に待うけじんしやうにや一ッ  
いかけはら切てしぬべきなりやういせよとぞくるい  
けるらうどうの其中にさは村傳次ともみつすゝみ出  
て申やう御上にては候へ共君のおぼへめでたうして  
罷むかふあさいなにやをいかけ給ひなばかれにいし

ゆ有とはしらすして一系に君に弓引給ふぞと人の申  
べし只此事においては思ひとまらせたまへやとりを  
つくしてこそせいしける判官おほきにいかつてやあ  
おくれたるともみつ命をしむ時にこそ君にもしうに  
もおそるべけれ一命をすつる上は天下におそろしき  
物はなし思のまゝにし仰しゝて跡にてむほん人とい  
われんは侍たるみのほんいなれなんぢらたのまれ申  
さずはそれかし一人待うけ本望をたつせんとかけい  
でんとしたりしをともしつたもとにすがり付しばら  
くといまりたまふべしさ程に思召さるゝ物ならば年  
頃御をんゑたるみが何とてそりやくに存べきとかう  
申も君のためぎよいにしたがい申べしひらに／＼と  
をしといめやう／＼になだめ申けるはさすがにあさ  
いなは天下になをゑし物なればちりやくをめぐらし  
打申さんさいわいかのしまはたう國しまだのうらよ  
りあんないしやをもつてわたるよし承る然らばかの  
うらのしやうじか本に一しゆくいたしあか月のあら  
しを待うけんと何心もなくあらん所へ時分のうかゝ  
いふためかん其時あし本より鳥の立ごとくはた／＼  
もとみ合かたはしより打取らんに何のしさいの候べ

きと手に取やうにぞたくみける判官聞てゑみをふく  
みやあをとたかしともみつ是に上こす事あらじいそ  
ぎやういをいたすべしとくつきやうのつわ物八十よ  
きひそかにせいをもよほして今や／＼と三重待いた  
り是は扱置あさいなの三郎よしひではしもだのうら  
に付しかばしやうじが本にぞ入にけるあさいな申け  
るやうはいかにしやうじ明日そうでんにしゆつせん  
いたし申べし其心へ有べし承り候といそぎやういを  
したりけりすでに其よもやはんばかりの事成にかた  
きのぐんびやうをしよせ二ゑ三ゑにおつ取まわして  
時のこゑをぞ三重上にける思ひよらざる事なればう  
へを下へぞかへしける五藤太おもてにかけ出何者な  
ればらうせきやなのれ聞んとよばわりけりよせての  
かたよりぬしはたれ共しらね共むしや一きかけ出こ  
とあたらしきといこやいしゆあればこそよせては  
あれなのるまで有べきかたう／＼はらを切べしと大  
をん上にてよばわつたりあさいな聞もあへず定めて  
是は判官めが御前のいしゆをはらさんためによせつ  
らんゑゝやさしきおのこかな先それがしあらごなし  
してゑさせんとてつのばうをつ取のべはのくらき所

よりてきのうしろへまわり門ざわへつめかけたるや  
つばらかたはしよりはた／＼とみちんのごとく打ふ  
する此いきをいにみかたのせい我も／＼と切て出で  
花をちらして三重たゝかいけるさしもよせて大せい  
とは申せともみかたのつわ物一きとうせんの物共な  
りことに天下むるいのあさいなに切たてられおもて  
を合物はなし爰に判官かろうどうさわ村傳次ともみ  
つしやていみつひろ兄弟いかにもしてあさいなを組  
とめんとかなたこなたとかけまわるあさいなも大將  
判官をいけとらんとおもひしのび／＼にたつねける  
兄弟みてすはあさいなとはしりかゝつてむんずとく  
んだよしひでみてこは何するやせかれのふんさいに  
てみたくもないやつばらかな八まんぢごくが望かと  
取ておさへひぎの下にひつしきそれ／＼たいまつ  
たいまつ今宵のきやくしんのおもての様をみしらん  
たいまつふりたてみてあれば判官がらうとうなりゑ  
ゑすしなうぬしが此あさいなをとろうやゑゝたいいき  
なやつたひとへにおのれはとらねつみがくび引す  
るよりもつとちがをいさこぶしを參らせんと二人共  
にくびふつつ／＼とねち切跡にのこりしやつばらた

うざいへばつとをつちらしきじんたいじのかどんで  
よしとよろこびてつわ物共を引くしせいなんごくへ  
そいそぎけるかのあさいなかな有様あつはれこゝちよ  
き有さまやとみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第三

あさいなまこくにわたりきじんを打事

よ打いつてみだるゝをことゝく打したがへきつき  
やうめでたき次第やとみなく舟に取のりて風にま  
かせていそぎける日かずやうゝかさなりてくだん  
のしまに付にけり舟より上りみわたせはせきがなが  
がとそひへさもすすましき有様なりみねにわけ入さ  
かりみてあれは白うん跡をうつんではゆきかふみち  
もさだかならずせいがんゆめをやふつては其をもか  
けもみへわかす誠に佛もとわせたまひしよあしゆ  
らたうこざい天かいへんとてしゆらの三あく四しゆ  
はふか山大かいのほとりに有とのへたまふがもしも  
我く其三あくたうにまよい來て有けるかとさしも  
かう成物のふもむね打さわぐばかりなりされ共我れ

我れにをいてたとへ十丈のあつきなり共などか取ひ  
しがて有べきかとなを山ふかくぞ入にけるかゝりけ  
る所にきわうがけんぞく其かずあまたいてむかつて  
あらふしぎや此間はなかれ物もなかりしにいてく  
さかなたくわへんと我もくくと取よつて手ごめにせ  
んと取ひしくよしひでしうくちつ共さわかすめと  
めをきつとみ合いできやつばらをたゝ一はねにはね  
ちらさんといれの大だち大長刀系物くをおつ取の  
へ三重こゝをせんとそないたりけるもとにすゝむ  
あつき共其かずあまたなけちらしと有所にさつと引  
さあらぬていにてひかへたりけんそく共あきればて  
いやく此物共は人間にてはよもあらじ上へ此よし  
申さんときわうの御まへに參此よしかくとぞ申ける  
きわう聞てそれはいか成物やらんこなたへめせかし  
こまつたりとてあさいなに近付此由かくと申よしひ  
で聞てあふたとへよばずとゆかふす物をとらうどう  
共を引ぐしきわうのまへにぞ出にけりきわう是をみ  
ていかに方く此しまは人間かいにあらずたやすく  
わたる物はなし只今けんぞく共が物せしは力におい  
てははしかりがたしとなおふ聞に付てもおそれ入て

候へ但はきわうが打てのためにわざと是まで來か有  
のまゝに申されよきじんにわうどうなればせい  
のむねをたゞしたまへなどこなたよりしやあくのし  
よいの有べきやとことばをたゞして申さるゝあさい  
な聞てあふよいすいゝそれがしはあしゆら國にか  
くれなきあさいなの三郎よしひでと申物なり我此所  
に來事よのぎにあらす此しまにげだうのきわうすま  
ひをなすよし聞しめされもの有さまみて參れとの上  
いをかうむり是までわたり申なり誠にあしわら國に  
うしろを合てゆみをひかんとの心ざしやましますか  
そなたより申されよさあらんにをいては一ゝちう  
ばつのじせつはくびすをめぐらすべからずとあらゝ  
かにぞ申けるきわうをはしめけんぞくどもしたをま  
いてぞおそれけるやゝあつてきわう扱ゝ御ぶんは  
けなげにみゆる物かな此きわうがまへに來つてすみ  
やかに物いわん物はおほへす今のことばのやさしき  
にそれゝひきいで物を參らせよ承り候といしのか  
ろうとけんそくあまたにてかき出るきわう申けるは  
いかにあさいな其かろうとの内にほうじゆとかうし  
我等が國にならひなきてうほうの玉有只今のかうけ

んにそれよつて取たまへあさいな聞てあふてうほう  
ならばたまはるへしそれ五藤たよつて取かしこまつ  
てため久つとより右のあしにてゑいやつとふみけれ  
ばみじんにくだけで其中にあたりもかゝやくほうし  
ゆ有やかで玉をぞ取たりけるきわうあきれていふけ  
るは又爰にとううんけんとしてりうのこまを持て候是  
たぐいなきめいばなり所望ならば參らせんよしひで  
きいてそれこそ望所なりそれ參らせよかしこまり候  
とけんぞくあまたにて引出す　きやうよのつねの  
馬にかはりきわめてふとくたくましくしゆみのかみ  
はあく迄ながくせなかはりやうのごとくにて四十二  
めひきけをまきりやうのみゝは竹をそぎしきに矢を  
さすがごとしさうのまなこはあさひのかゝやくにこ  
とならすたつなにはくさをゑつて付たりあさいな  
きつとみて我をきやつにはませんため成べし一ばん  
のつてみせんとたづな打かけひらりとつたあぶみ  
ふみしめまへゝすこしのりすかして馬のかしらをも  
たげさせみたる所は兩のみゝは九ほんのとおりいとく  
わんじひやうし馬の心としんにしつゝとのりい  
だしたづなひつかへしわのりをくるりゝと二三へ

んめぐりかさね／＼の御ゐんしんよろこび申候と有  
こかげにしつ／＼と立歸るきわうせんほうつきはて  
てけんぞく共を近付いかはせんと申ける一人のけ  
んぞくすゝみ出あしわら國の物共は女にふけり申事  
よのつねならずきわうのびぢよと身をへんしさを  
しいてやす／＼と取ころさせたまふべし尤此ぎ然べ  
しとそれよりもあさいなをおくのていにぞしやうじ  
ける其後びんづらゆふたる大女房しろかねのだいに  
こがねのさかづきすへるりのちやうしに酒を入あま  
たの女房にけまんやうらくさしかけさせあさいなの  
まへに出いかにとのばらきわうみづから立出御しや  
くをも申べきか御きうそくのためなればわざとみち  
かき女房をさしこされて候あはれ一つこきしめされ  
て御つれ／＼をはらされよあさいな聞てまさしく是  
ははかりことゝおもへ共をくしたりとおもわんとさ  
もうつゝなくもてなしてすでにしゆゑんぞはしまり  
けるかくてちこくもうつりければさすがにたけき物  
のふもむみやうの酒にゑい來りとろり／＼とねむり  
けるあやまたすまくら本に立よりあらうつゝなやと  
いふよりはやくあつきとなりあさいなにとんでかゝ

るさつしつたりとむんずとくみ太刀ひんぬいてきじ  
んのまんなかさしとをせばたふさを取てあからんと  
する所を四人のらうどうはしりかゝつてすだすだに  
切たりけりそれよりをくにみだれ入のこりしけんぞ  
く四ほうへばつとをつちらし國もとさしてをもむき  
けるかのあさいながてがらの程いこくはしらすほん  
ちやうにためしすくなきゆふしやとみなかんせぬも  
のこそなかりけれ

#### 第四

あさいな歸國致し舟中にてこくうゝする  
あさいなの三郎よし秀はま國ゆしゆつのげだうばら  
おもひのまゝに打したがへみな／＼をくり舟に打の  
りをいてにまかせほうを上ほん國さしてそわたりけ  
るこぎゆく舟のならいとて跡はかすみにへたゝりて  
入日をあらうこれやこのおきつしらなみしつかにて  
せんちうの人々みなばんせいをぞつらぬけるあさい  
な申されけるやうは我身ふ將なからこんどの打てに  
まかりむかいしそんずる物ならば我みのことは申に

及ずおや一もんにもちじよくをあたへながき家のき  
つな共成キナべきにしんのはたらきゆへおもひのまゝに  
し仰オホスあまつさへ我てうにるいなきちやうほうをゑた  
る事はみなぶりやくのたつせしゆへにて有かたゝ  
いかにと仰けるらうとう共承り仰のごとくたうじ天  
下に弓取あまた候共君にましたるゆふしや又一人も  
候ましい國ほんてうになをあらわしたる田村としひ  
とよこ將軍まさかどすみとものゆふりきもいかで君  
にはよもまさしと口をそろへ申けるあさいな聞てげ  
にゝゝたうけにをいてわれにうへこす弓取はよもあ  
らじとが慢の心ぞいでにけるあらふしきやにわかに  
そらかきくもりなみ風しきりにあらふして船をゆり  
上ゆりおろし船中の人々あはてひしめく折ふしくろ  
くも一むらまいさがりいづく共なく大の山ふし三人  
來ていかにあさいななんぢ此たびのはたらきひるい  
もなき所なりとて物ごとに我等がすみかに來つゝか  
ふりきをはけむべしといふよりはやくひつつかみく  
もにまぎれて三重あかりけるせんちうの人々は是は  
はとばかりにてあきればてゝぞいたりけるあゝさて  
しなしたりゝゝさしもたけきおにかみだにもしたが

へさせたまふみがいか成天まのあまくだりいつくへ  
か行けるぞ扱もゝ口をしやとさしもにかう成物共  
もたがひにめとめをみ合てこゑを上てぞなくばかり  
をつる泪のひまよりも君をうしない申つゝへんしも  
ながらへ何かせんいざ我々もはら切てしでの山の御  
ともせんと太刀のつかにてをかくる五藤太是をみて  
しばらくゝかたゝゝよ心をしづめてたしかに聞我  
我是にてあいはてなばたれあつて君の御事申上ん  
物もなくたゝいたつらにはてたりといわれん事もむ  
ねんなりまつ本國にかへりしゆくんのおまへに參嶋  
のていをも申上かたみなとを奉りはら切てしぬべき  
なり是にてはつるはいぬじになりひらにゝゝとりつ  
くしてこそせいしけるのこりしらどホテうさしあたるり  
に力なくむねんながらもじがいをやめられ惜からざ  
る命をなからへ本國さしてぞ三重かへりける國にも  
なれば一もんの人々めつらしや方ゝゝさてあさいな  
はとのたまへば四人物共とかうのへんとう申かね泪  
にくれていたりしが扱もゝめんぼくなき仕合にて  
候かやうゝの次第にて君は行方しらさうせたまふ  
我ゝもだうしよにあいはつべく候へ共此事申上げ

んため是まで參候ときじんのくびならびにりうばを  
さゝけ今はおいとま申とて四人一所にはら一もんし  
にかき切あしたのつゆとぞきへにける人くゆめの  
心ちにて是はくとばかりなりしばしきへ入なくば  
かりよしも泪のひまよりも扱もくあさましや此  
たびの打てにむかいいきて歸るはふ將なりとかねて  
は思ひさだめしがおもひのまゝにおにかみをも打し  
たがへおもわぬあくまにとられしことのあさましや  
扱もほいなき次第やとたをれふしてぞなげかるゝけ  
にことわりとぞ聞へけるおつる泪をおしとめあゝ  
扱みれんの我心ぶしたる物のかゝる所にて命をすつ  
るはならいなりことにきじんを打したがへかゝるめ  
いばをはんでうへわたすこと果たぐいなきかうみや  
うなりたとへぬしこそかへらす其家のたいけい是に  
すぎすまづく君へごん上せんそれこしらへよとの  
たまひてせきくるなみだをおさへつゝともあまた引  
ぐしてかまくらさし御所へぞ三重いそぎける爰にあ  
われをとめしはあさいなの母上にてしよじのあは  
れをとめしたり其折ふしは風のこゝちとのたまひ  
て折ふしなやませたまひしが此事聞と一しはにきも

たましいもきへはてゝふししづみてこそおはします  
やうく心を取なをしのふいかに女房立あさいなは  
此よをさりて有とのふ扱くふびんの事共や何れの  
かたにはあまた子を持たまひしがあさましやわらは  
はかれ一人を天共ち共頼しに今よりのちはあさいな  
共よしひで共たれをかさしていふなぐさまんあらう  
らめしのうきみやとこゑを上てぞなげかるゝよその  
たもともぬれぬべしあまりの事のかなしさに人めも  
つゝますこゑを上かれにはなれて今ははやつゆの命  
もをしからしなむ十方の三世佛ねがはくは今一どあ  
さいなにめくり合てたひたまへわらはが命を取たま  
ひおやこ一所にむかへとらせたまへとくどきなけか  
せたまひつゝふししづみてこそ三重おぼしますしよ  
しのあはれと聞へけるあらいたわしやなよしもりは  
御前にもなれば其日のたうばん高はしごん太兵衛を  
もつてきじんのくびならひにりうばをさゝけ事の次  
第をごんす君をはしめ奉り御まへしこのしよ侍は  
つとをとろき扱もかう成ゆうしかな扱もくならひ  
なき侍をうしないけるこそむざんなれとみなくそ  
でをしほらるゝ君御なみだのひまよりいかによし

もりあさいなは行へしらずなりさぞふびんにおもはれん去<sup>サマ</sup>ゑしやでうりのならひなればおもひ切たまへつきてはきじんたいじの其上天下にむるいのりうばさゝげしだん一しほしうちやくせりあさいな歸りて有ならばくわぶんのをんしやうゑさすべき何れかさねてさたすべしまづ／＼とうざのしるしなりといづの國にて五百よてう下されける忝と御せんを立人人にいとまをこいみうらをさしてかへられしかみちすがらくどきことこそあはれなれかく有がたき御なさけあさいなもろ共承る物ならば今のおもひはよもあらしあはれぶつ神三ぼうも是をふびんに思召あさいなうきよに有ならば今一度本國へ歸してたべ抑々なむいせ大しやう太神ぐうわか宮八まん大ぼさつことにはうぢ神はこねのごんげん日本六十よしうの大のじんきとふかくきせいをかけたまひなく／＼三うらへ歸られけるかのよしもりの心の内たゝよの中の物のあはれは是成はとみなかんせぬものこそなかりけれ

#### 第四

あさいなしまわたり

あさいな本國に歸り敵判官をうつ事

お山のはんがん清高はらうどう共を近付こんどあさいなあくまにとられ申せし事われ天たうにかのふゆへとおぼへたりかれがぶじにて歸りなばみの大事と成べきに思ひの外成仕合かなしかのみならずをしよせしことようちかけの事なればたれともぬしはしれざればこそ今にさたもなき上は君にちうをつくしをりをうかゝひざんげんし三うら一もんの物をなき物になし口頃のむねんをはらさんととも人あまた引ぐしてかまくらさしてぞ三重いそぎける御所にもなれば君の御まへにつゝしんで申上こんどあさいな行へしれすなり候に付よしもり君をうらみ申よし其かくれ候わす御ゆだん有ましく候とちうしんがをにて申上より家頼聞召誠によしもちはす代のちうしんたる物なればさやうの心は思ひよらぬ事なれ其去ながらかはりやすきは人の心まづしばらくはしゆつしをとめさせよとの御でうにて御ざを立たまひける判官しすましたりとよろこひて三重我やをさしてぞ歸りける是は扱置あさいな三郎よしひではこくうをかける心ちしてゆくへもしらずまよいけると有せきざん

にやすろうとおもひしときやくそう申けるはいかに  
あさいなよく聞こんだどうしたかへしなんし一人  
のふりやくにあらすそれ日本はしん國たるによつて  
忝もしよ神なんじかかげみにつきそいまもりたまひ  
しくりきによつてさし物のあつきやすくとほろび  
しをいかにや我一人と思ふ大がまんの心有其あくし  
んをしつめんため是までひつたて來たり今よりのち  
はかまん心を打すてきうばの道をみがくへし今はこ  
きやうへ歸るべしといふこそとも共にくうをさ  
してとびさりぬあさいなはゆめのさめたる心ちして  
たゝほうせんとあきれとほうにくれていたりけりし  
ばしあつて心を付こはいかになむ三ぼう此頃つねな  
らぬ物と付そいたりとおもへば扱は天ぐにとらわれ  
て有けるなよしと是とてもそれがしががまんの心  
をしつめんとこのほうべん成とや是八まんの御かごた  
り扱いづくてか有らんとかなたこなたとまよひしか  
ともしひかすかにみへしかば此ひをたよりにゆきみ  
れはひたちの國つくばさんにておはします扱は日本  
のちに付けるなあら有かたやとふしおかみとふかこ  
とくにそれよりほん國さしてそ歸りける是は扱置い

たわしやよしもりはねいしんのざんによりしゆつし  
も今はとをくなり一もん兄弟めしあつめいか成こと  
にか扱もく君の御きしよくそんじけるそや是ざん  
しやのゆへ成へし是に付てもあさいなうきよに有な  
らはか程まではよもあらじ何とか成て有やらんあゝ  
らこいしのよしひでやとなけきくらしたまいけるや  
はんばかりの事成に門ほとくとをとつる番のも  
の共たそとたふいやあさいなにて有けるは爰をあけ  
よと申けるばんの物共きもをけしこはいかにあさい  
などのけしやうにとられむなしくならせたまふみ  
が何とて御歸り有べきぞへんげの物にて有べしとふ  
るいわなゝきいたりけりあさいな大きにかつてや  
あをのればらよしひで歸りて有に何とてもんをひら  
かぬぞと大のこゑにていかりけるばんの物共いよい  
よおそれ物をもいわずあきれはてゝいたりけるあさ  
いなるはらにすへかねゑゝこはいか成ことやらんとそ  
うのとびらをゑいやつとをしやぶりやがて内につつ  
と入あさいな歸りて候とたかゝによばわりける一  
もんの人々ゆめうつゝ共わきまへずするゝとはし  
り出ゆんでめてに取付て<sup>ふし</sup>是はゝとばかりにて

よろこひ涙をなかざるゝよしもり涙のひまよりもを  
ことにはなれ物うきよ君の御まへもよからず此ごろ  
はへいもんして有けるはあさいな承り扱はさやうで  
候かこれざんじやのゆへにて候べし御所に上りざん  
じやうの口をためし申べしさいわい此たび寶珠を持  
さん仕りて候とくわい中より取出し人々にみせ奉り  
此めい玉を君にさゝげ御まへにてとがなきむねを申  
上ざんじやを申うけんと御まへを罷立取物も取あへ  
ず三重かまくらさしてぞいそぎける御所にもなれば  
くだんのほうしゆを持ちそぎ御せんにさんせうす君  
をはしめしよ侍是は／＼珍らしのあさいないつくよ  
りきたられしぞ扱もめでたきこと共やとをの／＼れ  
いきをのべらるゝよりいへおゝせけるやうはまこと  
にあさいなはなき物とおもひしに二たひ歸るうれし  
さよさてよしもりが喜ひ申さん中／＼のうきなんに  
あひ心くるしくおもふらんきうそくせよとの御てう  
なりあさいな承りおそれながらごんじやう申候おや  
一もんの物共を御まへにめされん由いか成御しんて  
いにて候君聞召御へんが歸らぬに付よしもり我にう  
らみをふくむときゝつるあひた此頃へいもんさせて

ありけるはあさいな承りさてざんじやのわざにて候  
なまつおほしめしわけ候へわれらの家と申はせんぞ  
三うらの平太夫よりあいつゝいてけんしにつかへ申  
候ことにせんくんよりともこうさうしういしばし山  
にてはたを上させたまひし時我等の親おうち忠をぬ  
きんで候ことはかくれ候わす然るを今わつかのざん  
けんを御しやういん有こそなさけなければ其ざん者は  
いつくに候たゝいま御せんにめされじつふを開召分  
られつみにふせられ候へとつゝしんて申上るをりふ  
しはんくわん御まへにありけるがすゝみいていかに  
あさいなとうけに忠をつくせし物は御へん一けにか  
きらすあまた候其中にことあたらしき申でうかなさ  
てよしもりのしんていもなきことは人も申し親の  
心子しらすといふこと有よつくせんぎあつてみたま  
へあさいな聞て扱かくのたまふはたれ人ぞやあお山  
のはん官成か御へんは今までなからへ御前に有よな  
近頃命みやうがなおのこかなと大のまゝこにかどを  
たてにらみ付てぞ申けるはんぐわんきいて我御せん  
に有がふしき成かあさいなきゝもあへず御へんもた  
れにむかつて申けるぞいつれも御聞わけあつてたま

はり候へそれがしでういをかうむり罷むかふ所にし  
もだのしゆくへよ打かけにをしよせそれかしをうた  
んとせしをそくしにかけちらし候へばよとうやまた  
ちのていにもてなしにげさつて有けるをはやくもわ  
すれて有けるか其むねんをはらさんとおもひそれが  
しが歸らぬをさいわいに思ひ親一もんの事をざんげ  
んして有ける扱もくよくよくみし物かなやあき  
よたか一ごんなり共へんとうあらは申てみよやれ判  
官とたゝみかけてぞ申ける判官もごんくにつめられ  
とかうのへんとうにも及ずたゝしほくとしていた  
りしか今はのかれぬ所とおもひ太刀ひんぬいてあさ  
いなにとんでかゝるをゑたりやあふとひつつかみひ  
ざのてに取てふする君御らんじてせんだいみもんの  
くせ物なり心のまゝにおこのふべしかしこまり候と  
てくびねぢきつてすててんけり扱此たびのくんかう  
にいつの國にて三千丁をくだされける忝と御せんを  
たち一るいついとうしてすへはんじやうとさかへけ  
るせんしうばんせいめでたきともなかく申はかり  
はなかりけれ

寛文二年壬寅六月吉日

太夫直正本

新群書類從第九終

明治四十年六月二十日印刷

明治四十年六月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

編輯者  
兼發行

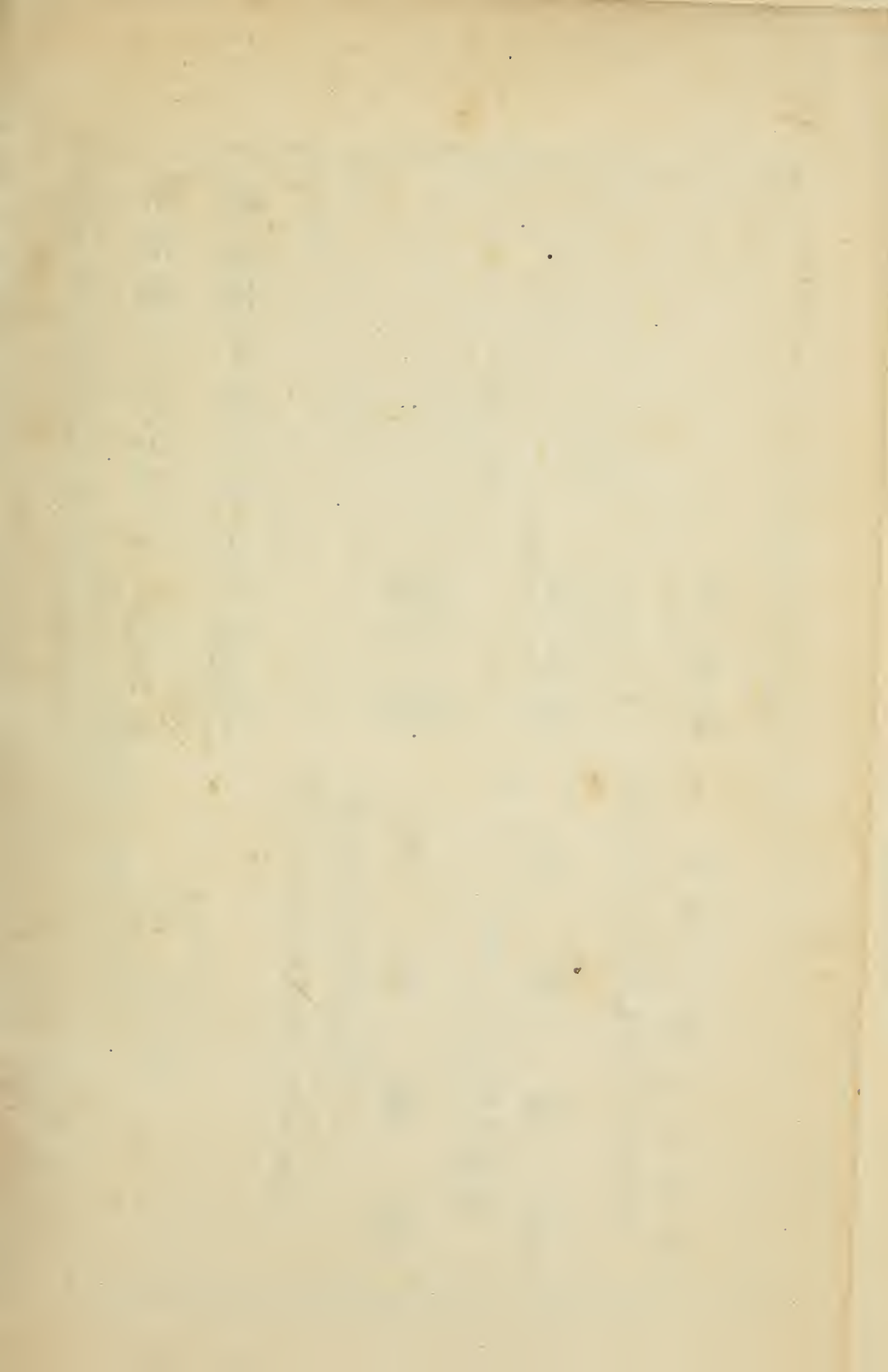
市島謙吉

東京市本所區番場町四番地

印刷者  
本間季男

東京市本所區番場町四番地

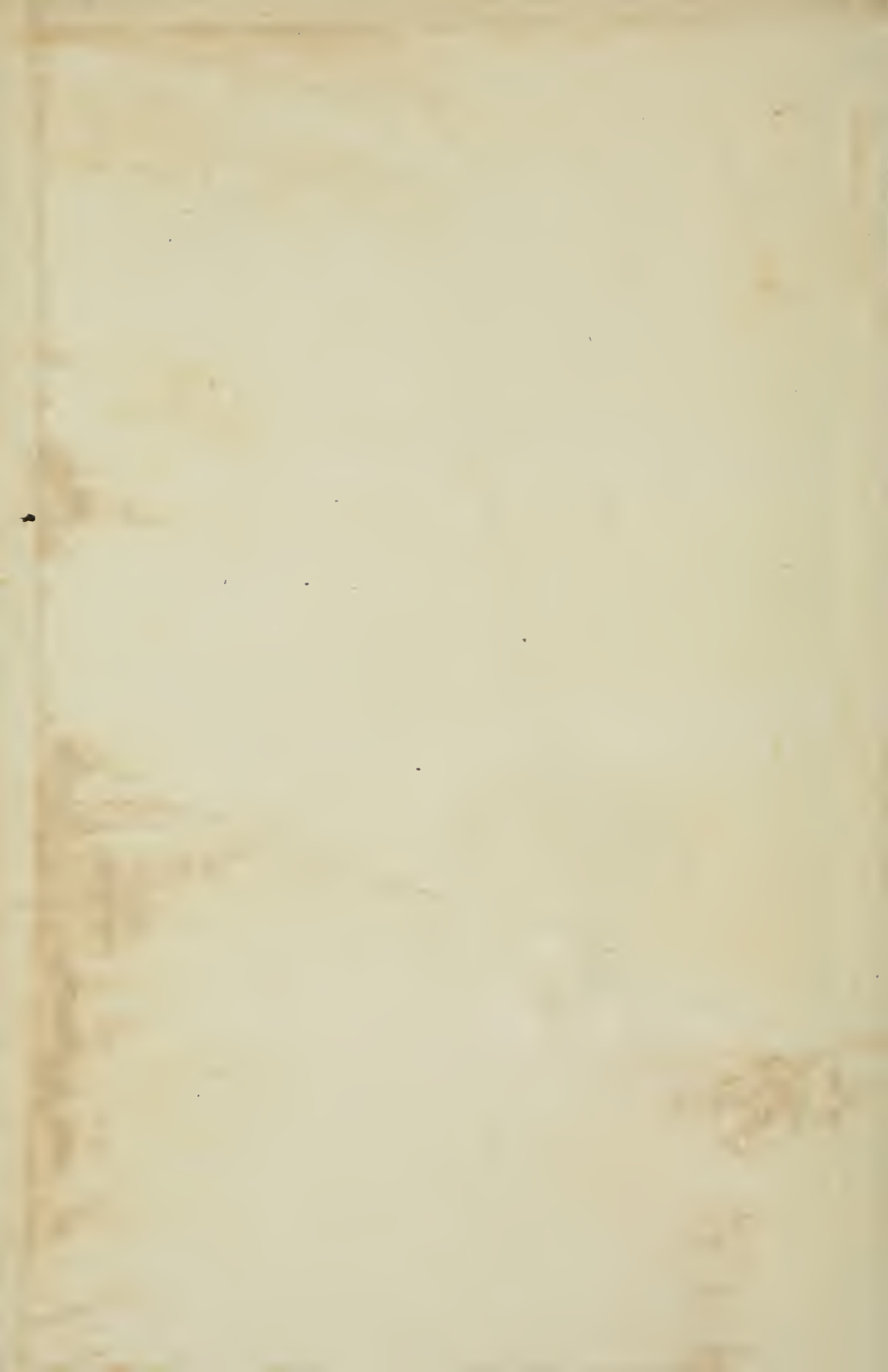
印刷所  
內外印刷株式會社





大. 十四. 二

音代字  
塘



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02977 5152